

昭和日本語方言の総合的研究

第二卷

方言敬語法の研究

続篇



広島方言研究所

藤原与一

春陽堂

## 緒 言

本書の内容の概略は、『方言敬語法の研究』正篇（昭和日本語方言の総合的研究 第一巻）の「後編」で汎説した。そこでは、そうすることによって、いわゆる方言敬語法での尊敬表現法の地位を明らかにしたいである。

ここにあらためて前著「後編」の二事項、方言謙讓表現法と方言丁寧表現法とをとりあげる。

第一部は謙讓表現法の記述であり、第二部は丁寧表現法の記述である。両方に、記述体系上、前著のからの、いくらかの進展がある。

ひとまずここに、この方面のしごと、——私が自己の基本的課業としてきたものを、公表しおえることができるのは、かえりみて、かたじけないきわみのことに思われる。牛歩ながらも、たえずこの道をおあるきつづけることができたのは、まず身の大幸であった。四恩に感謝したい。知友のかたがたの、「歴史的研究に対して地域的研究を」との、あたたかいご激励があったことも、じつに身にしみるありがたさである。感恩の念、あらたなものがある。

出版の業あつての本発表であることを思えば、今はまた、あらためて春陽堂和田社長に、深甚の謝意を表さないではいられない。もとより、業務にあたられたかたがたにも、厚くお礼を申しあげる。

近くにいられて、校正に援助のお手をさしのべてくださる佐々木峻氏・井野勝洋氏には、別して心からのお礼を申しのべる。

昭和52年(1977)7月13日

## 凡 例

- 1 この続篇の記述態度には、さきの正篇のそれからの、多少の更改がある。読みものとして、通りのよいものにすることを、より多く考えもした。
- 2 図版は、印刷事情を考慮し、あえて節減した。
- 3 本文中の引用(恩借)文献については、巻末の一覧を参照せられたい。本文上では、文献初出のさい、著者名・刊年(発表年月)・発行所(所載誌)などを詳記することにつとめている。
- 4 本文、方言実例の表記に、音声相の直写を重んじたことはもとよりであるが、南島方言や東北方言などのばあい、本文上に見られる程度の音声標記にとどまらざるを得なかった。
- 5 方言文例のイントネーション(文アクセント)の表記では、通例、「高」「低」の二段観をとっている。まゝ、
 

○………… アリ<sup>マ</sup>セン。

 のような傍線標記方式をとっているのは、「マ」よりも「セ」のほうがより高く発音されることをあらわそうとするものである。文の抑揚に関しては、諸方言全般を通覧してその正準なものをほぼ的確にとらえ通していこう(そして均質の記述を全うしていこう)とする見地からは、だいたい、以上の心がけによってことを処理するのが、穏当であろうと考えている。
- 6 本文中、実例の説明その他の文言に、“ ” 符号をつけてあるところは、土地人なり研究者なりの教示のままである。著書・論文の記事にしたがうばあいにも、それを“ ” で明らかにしている。

## 目 次

緒 言	.....	i
凡 例	.....	ii
第一部 謙讓表現法	.....	1
序 説	.....	3
第一章 他に対する願望をあらわす特定謙讓法動詞 （またはそれに助動詞のそわったもの）による 謙讓表現法	.....	5
第一節 クダサイ類	.....	5
一 はじめに 〈特定謙讓表現法〉	.....	5
二 クダサイ系	.....	8
1 クダサレほか	.....	8
2 クダサイ	.....	10
3 クダハレほか	.....	13
4 クダハイ	.....	16
5 クッタイ・クッサイ	.....	17
6 シャー	.....	18
7 クダレ	.....	19
8 クダイほか	.....	21
9 タイ・タン	.....	26
10 クダリヤシ	.....	28
11 クダンヤイ	.....	28

12	オ下シなさいませ	29
13	クダーシほか	29
14	クダサイマセほか	30
15	クダサマセ	31
16	クダサンセほか	31
17	クダイセほか	33
18	クダッセほか	34
19	クダンセほか	35
20	クダン	38
21	タンセほか	39
22	ダセ	41
三	クダシカレほか	42
四	まとめ	43
第二節	ツカーサイ類	44
一	はじめに	44
二	ツカーサイ系	44
①	ツカーサレ(ツカサレ)・ツカーサイ(ツカサイ)ほか	44
2	カーサイ	51
3	ツカハレ・ツカハイほか	51
4	カハレ	54
⑤	ツカイほか	54
6	カイ	58
7	ツカ	58
8	カ	60
9	ツカサイマセほか	61
10	ツカハイマセほか	62
11	ツカーマセ	63

12	ツカサンセほか	63
13	ツカサッセほか	64
14	ツカサイセ	64
15	ツカサーセ	64
16	ツカハンセほか	65
17	ツカンセ	66
18	ツカッセ	66
19	ツカーセ	67
第三節	ヤリナサイ類	67
一	はじめに	67
(二)	ヤリナサイ類の分布と生態	71
第四節	オクレ類	76
一	はじめに	76
(二)	オクレ類の分布と生態	77
第五節	ンデ	83
第六節	ンカ	83
第七節	テー	84
第八節	もらわれンマヘンカ	84
第九節	ゴセ	84
第十節	オーセ	85
第十一節	取ラセ	86
第十二節	タモレ	88
第十三節	仰セツケラレマセ	91
第二章	自己の謙退の動作をあらわす謙譲法動詞 または謙退の意の謙譲法助動詞による謙 譲表現法	93

第一節	イタダク類	93
一	はじめに	93
二	イタダク系	93
1	イタダク	93
2	イターカシ(ヒ)テ	96
3	イタ	97
4	ダーコ	99
三	頂戴	102
四	拝領	107
五	重畳	111
六	申シウケル・受ケル	111
第二節	イタス	112
第三節	ツカマツル	117
第四節	マイル　マイラス類	117
第五節	参ジル	125
第六節	ウカガウ	127
第七節	マカル・マカリデル	127
第八節	アガル	130
第九節	アゲル・サシアゲル	130
第十節	進ゼル	133
第十一節	ソナエル	137
第十二節	申ス・申シアゲル	137
第十三節	ウケタマワル	149
第十四節	カシコマル	150
第十五節	存ジル	150
第十六節	〜マセ	150
第十七節	候	151

第十八節	ゴザル	153
第十九節	その他	154
第三章	特定表現法による謙讓表現法	156
第一節	「～テ ……」類	156
第二節	「カリテ イク」など	158
第三節	動詞複合の特定のばあい	158
第四節	特殊の表現態	159
第五節	特定語の採択	160
第六節	謙讓表現法の人代名詞	161
第七節	接辞	161
第四章	その他の方法による謙讓表現法	162
第一節	文末詞による謙讓表現法	162
第二節	表現音声による謙讓表現法	162
第五章	謙讓法外形の「非謙讓ていねい表現法」	163
結 語		169
第二部	丁寧表現法	171
序 説		173
第一章	丁寧法動詞(またはそれに助動詞のそわつたもの)による丁寧表現法	177
第一節	ゴザル	177
第二節	ゴザリマス   ゴザリモス	186
第二'節	ゴザリヤンス以下の異形式類	196

一	ゴザリヤンスほか	196
一'	ゴザリヤスほか	199
二	ゴザリガンス ゴザリガス	203
三	ゴンサリマス	203
四	ゴアハンス ゴハンス	204
第三節	ゴザイマス ゴザイモス	204
第三'節	ゴザイヤンス以下の異形式類	218
一	ゴザイヤンスほか	218
一'	ゴザイヤスほか	219
二	ゴザイガス	221
第四節	ゴザリンス ゴザインス	222
第五節	ゴザリス ゴザイス	224
第六節	ゴザス系のもの	236
一	ゴザス	236
二	ゴアス ゴワス	246
三	ガース	258
第七節	ゴイス系のもの	260
一	ゴイス ゴエス ゲース	260
二	ゴンス	265
三	ゴッス	267
四	ゴース	268
五	ゴス	269
第八節	ゲス	272
第九節	ゴザンス系のもの	275
一	ゴザンス	275
二	ゴアンス ゴワンス など	290
三	ガンズ ガン	297

四	ガッス	308
五	ガイスなど	310
六	ガス	310
七	ス	320
第十節	ゴザリマス(モス)系 総収	322
	(第二節～第九節)	
第十一節	オジャル	326
第十二節	オマス	328
第十三節	オス	332
第十四節	オワス	337
第十五節	アリマス	339
第十六節	オリマス	342
第十七節	マイル	343
第十八節	その他の丁寧法動詞	344
第二章	丁寧法助動詞による丁寧表現法	348
第一節	マス モス	348
一	モス	348
二	南島の「ます」相当のもの	359
三	九州の「メス」	361
四	「マス」汎説	362
五	九州地方の「マス」	367
六	中国地方の「マス」	371
七	四国地方の「マス」	376
八	近畿地方の「マス」	379
九	中部地方の「マス」	388
十	関東地方の「マス」	401
十一	東北地方・北海道地方の「マス」	403

十二	むすび	415
第二節	デス	416
一	はじめに	416
二	南島方言の中のこと	418
三	九州地方の「デス」	420
四	中国地方の「デス」	422
五	四国地方の「デス」	424
六	近畿地方の「デス」	424
七	中部地方の「デス」	426
八	関東地方の「デス」	429
九	東北地方・北海道地方の「デス」	431
十	むすび	437
第三節	ドス	437
一	はじめに	437
二	近畿分布	438
三	近畿の外	441
第四節	ダス	443
一	はじめに	443
二	九州内の「ダス」	443
三	中国内の「ダス」	446
四	四国内の「ダス」	447
五	近畿の「ダス」	448
六	中部地方以東内の「ダス」	454
七	むすび	458
第五節	ヤンス, ヤス	458
一	はじめに	458
二	九州地方の「ヤンス, ヤス」	459

三	中国地方の「ヤンス, ヤス」	467
四	四国地方の「ヤンス, ヤス」	471
五	近畿地方の「ヤンス, ヤス」	472
六	中部地方の「ヤンス, ヤス」	475
七	関東地方の「ヤンス, ヤス」	479
八	東北地方・北海道地方の「ヤンス, ヤス」	484
九	むすび	493
第六節	イタス	494
第七節	ガンス ガス	495
第八節	オル	495
第三章	諸他の方法による丁寧表現法	497
第一節	文末詞による丁寧表現法	497
第二節	語えらびによる丁寧表現法	498
第三節	接辞による丁寧表現法	499
一	接尾辞によるもの	499
二	接頭辞によるもの	502
第四節	表現音声による丁寧表現法	508
結語		509
尊敬表現法・謙讓表現法・丁寧表現法	総括	511
あとがき		515
引用(恩借)文献一覧		517

索 引 .....	541
I 方言事象索引 .....	541
II 事項索引 .....	561

## 図 版 目 次

- 第 1 図 「イタダク」類分布概況図  
(本文 P.93)
- 第 2 図 「ゴザリス」「ゴザス」分布概況図  
(本文 P.224 P.236)
- 第 3 図 「ゴイス」「ゴンス」分布概況図  
(本文 P.260 P.265)
- 第 4 図 「ゴザンス」分布概況図  
(本文 P.275)
- 第 5 図 「ガンス」「ガス」分布概況図  
(本文 P.297 P.310)
- 第 6 図 「ドス」「ダス」分布概況図  
(本文 P.437 P.443)
- 第 7 図 「〜ヤンス, ヤス」丁寧表現法分布概況図  
(本文 P.458)

## 第一部 謙讓表現法

## 序 説

謙讓の言いかたは、狭義の尊敬の言いかたや、一般的な丁寧の言いかたと、相互に関連して発現する。敬して言うところには、謙讓の言いかたもともないやすく、謙遜して言えば、またそこに、丁寧の表現もともなる。

以下には、昭和日本語の方言状態について、上に言う総体的な事実を直視しつつ、中について、とくに、謙讓表現法を觀察考究していくことにしたい。

謙讓の表現法——全待遇表現法（いわゆる敬語法）の中の謙讓表現法——は、表現者が、表現者の位置を、敬卑層序の上下に移動させることによってひきおこす体の、対人関係把握の表現法である。謙讓表現法の基本的性格・基本構造、ないし体系を決定するものは、じつに、表現者の位置の可動性であると言うことができる。

「謙讓表現法」の観点でとりあげることのできる事項は、すくなくない。第一には、「他に対する願望をあらわす特定謙讓法動詞（またはそれに助動詞のそわったもの）による謙讓表現法」がとりあげられる。これに属する事実は、かず多く認められる。第二には、「自己の謙退の動作をあらわす謙讓法動詞または謙退の意の謙讓法助動詞による謙讓表現法」がとりあげられる。これに属する事実もまた、かず多くが認められる。第三には、「特定表現法による謙讓表現法」がとりあげられる。これに属する事実もまた、数種を認めることができる。第四には、なお「その他の方法による謙讓表現法」を指摘することができる。

以上の諸事項、諸事実を見、かつ考えるにつけても了解されるのは、謙讓表現法と尊敬表現法との相違である。尊敬表現法では、はたらきの大きい、かつ、国内での分布も大である表現法がいくらか見られた。これに対して、謙讓表現法では、はたらきの限られたもの、あるいは特定のものが、——したがって、

分布も限られたものが、かず多く見られる。だいたい、尊敬表現法での、ものの比較的少数なのに対して、謙讓表現法での、ものの多数なのが注目される。このことは、おのずから謙讓法記述の様式にかかわってくる。

(ちなみに、丁寧表現法では、そのとりあげるべき事項が、謙讓表現法のばあいほどに多種ではない。)

謙讓表現法・丁寧表現法・尊敬表現法——すなわちいわゆる敬語法——の全体をおおうてはたらく待遇心理が、「ていねい意識」であることは、もはや多く言うまでもなかるう。この待遇意識の発動によって、すべての表現は、(——もとより謙讓の表現も)、「ていねい表現」とされる。——どのような謙讓表現も、その現場にあっては、みなその言いかたをすることによって、相手または他者を、ていねいに待遇しようとしているのである。謙讓表現法もまた、もとより、「ていねい表現法」の一態とされる。

以下の謙讓表現法記述の実践にあたっては、当然のことながら、形の表現形式と、内実の「ていねい意識」との相関を把握することに、つねの目標をおいていきたい。

# 第一章 他に対する願望をあらわす特定謙讓法動詞（またはそれに助動詞のそわったもの）による謙讓表現法

## 第一節 クダサイ類

### 一 はじめに <特定謙讓表現法>

「クダサイ類」は、（——のちにとりあつかう「ツカーサイ」「ヤリナサイ」「オクレ」などもであるが）、諸方言上、命令形式をもって立って、謙讓表現上の特別の役わりを演じている。すなわち、たとえば「クダサイ」（——「クダサル」はもともと尊敬法動詞とされるものであるけれども）は、特定化した「クダサイ」という形式によって、謙讓の心意の表現に役だつものとなっているのである。「下さる」動詞による特定表現法が、ここに成りたっている。私は、「クダサイ類」以下のものについて、それらの謙讓表現法としうる方言習慣を認めて、これらの命令法形式を、謙讓表現法記述の中にとり入れる。のちにとりあつかう「イタダク」「イタス」など以下のものに対比すれば、今、問題としている「クダサイ」以下のものは、まさに他に対する願望をあらわす‘謙讓語’と見ることができ、これは、「イタダク」など以下の、自己の謙退の動作を言う‘謙讓語’と対応するものと見られる。このゆえに、「クダサイ類」以下のものを、謙讓表現法の中の特定表現法として（特定謙讓表現法ともよんで）とりたてることは、適切であると考えられる。

なおここに、以上の処置に関する若干の考察を披瀝しておきたい。

一つに、方言上では、動詞「タバル」が「いただく」の意のものになっても

いる。(八丈島方言でなど) 尊敬法動詞が謙譲法動詞に転化している。このような事実を見るにつけても「下さる」の命令形「下さい」が、慣用のうちに、「下さい」という特定の謙譲法動詞になっているのも、もっともと理解することができる。「オクレル」(下さる)の「オクレー」にしても、やはり、広く一般的に謙譲気分でつかわれるようになった「オクレー」を、特定の謙譲法動詞と見ることができる。自分のたちばをかえりみる意識がつよまるのと同時に、尊敬法の動詞も、謙譲表現用に転用されることになるのか。

つぎに、「相手本位の意識」というものと、「自分本位の意識」というものがある。尊敬法動詞「下さる」を「下さった」と言っているうちは、表現者の意識は相手本位である。「下さい」と言えば、これは、相手の下さる動作が自己におよぶことをたのむのであって、意識は自分本位のものとなり、したがって、「下さい」の気もちは、相手に対して自己を受容者として低く考える気もちになる。こうなると、謙譲表現の「下さい」が成立する。人々がこのような「下さい」を慣用すれば、「下さい」の言いかたは、ついに、特定の謙譲表現法となる。

等しく命令形でも、「しなさい」「せらレー」などは、相手本位の言いかたになっていて、いつまでたっても、謙譲表現用となることはない。しかし、「下さる」や「つかわさる」の類のばあいには、その語性にもよって、一方で、上述のように、特定謙譲表現法を分岐しやすかったのであろう。「つかわさる」「つかあさる」からは、「つかーさい」ができると、この「ツカーサイ」は「ツカイ」とも「ツカー」ともなった。(ほかのばあいにも、命令形での種々の略形がおこっている。)このような省略形の慣用形ができては、ものが、ますます明らかに謙譲表現用のものとして安定した。略形の慣用形にやどる意識は、もはやまったく謙譲法意識である。

ものが、(——もともと尊敬法動詞と言われるものであるが)、謙譲意識で利用されたからこそ、あるいは、利用されればされるほど、略形の慣用形は、生じやすかったであらう。

かえりみるのに、「クダサイ」や「ツカーサイ」などの慣用は、じっさいに、「チョーダイ」とか「イタダク」とかのことばづかいと、直接につながりあっている。ともに、謙讓表現用のことばづかいとして、慣熟し、慣用されている。

これらは、要するに、ものごとを受けるたちばで言うもの言いである。受けるたちばにある人の心を表現するものなので、いきおい、謙讓心理の表現になる。

要点は、動詞が、「行く」などではなくて、「下す」や「つかわす」や「やる」であるところにある。これらの動詞は、すべて、上から下への行動・動作を言うものである。これらの動詞が表現に用いられたばあい、そこには、関係せしめられる人物間の上位・下位の関係が明らかである。そのような「下す」に、尊敬法の助動詞の「る」のついたものが「下さる」であり、そこに「クダサイ」がある。「つかわす」に「る」のついたものが「つかわさる（ツカーサル）」であり、そこに「ツカーサイ」がある。「やる」に「なさる」のついたものが「やりなさる」であり、そこに「ヤリナサイ」がある。これらの命令形をつかうと、下したりつかわしたりする行動の、上位者から下位者におよぶことが、いよいよ明らかであり、「下さい」や「つかあさい」の言いかたの謙讓表現の性質が、はっきりとしてくる。

「行く」に、尊敬法助動詞「れる」がついた「行かれる」の、命令形「行かれい」や、「行く」に「なさる」のついた「行きなさる」の、命令形「行きなさい」は、下位者が上位者に言うにしても、その命令表現で言いあらわす行動そのものは、まさに、相手のなす行動であって、直接に自分にかかわるものがない。したがって、発言者の謙讓表現がここに生じることなどは、あり得ない。「下され」「つかわされ」「やりなされ」、また、「たもれ」などになると、これを言ったばあい、相手の行動は、直接、発言者その人にかかわってくる。おのずからここに、謙讓の表現が成立する。

「下す」などの動詞による「下さる」などの尊敬法助動詞が形成された時、その命令形は、必然的に、特定謙讓表現法のはたらきを持つことになった。

命令形は、動詞の活用形の諸形の中でも、特別なものと考えられる。命令形という、この対他関係を表示することのかくべつ顕著なものが、しばしば、特定の役わりを演じるのは、もっともなことである。「クダサイ」などの命令形は、よく、特定謙讓表現法形式として安定した。

「下さい」や「つかあさい」などの尊敬語命令形を、とくにとりたてて謙讓表現法の一項目にすることに、なんらかの問題があるとしても、方言敬語法研究の見地では、これらの命令形を、謙讓表現法上の重要項目としてとりあげることが、現に必要であると考えられる。方言文法の特徴をたずね、さらにその謙讓表現法のありさまを追求する時、尊敬法動詞（「下さる」など）の命令形の「謙讓表現法形式」化を、謙讓表現法記述上、一項目としてとりたてることには、独自の意味があると考えられる。

尊敬法動詞の命令形が、とくに以上のように見られる事態も、けっきょくは、「ていねい意識」の自在な活動を認めしめるものでもある。人は、「ていねい」の心意を持って相手に接し、ことに上位者に対しては、ていねいなもの言いつとめて、たとえば、相手の下さる動作を、自分に向けてしてもらうことを考えては、謙遜いっばいのていねいな気もちで、「クダサイ」と言う。ここには、謙讓の心理が熟しており、謙讓表現法形式「下さい」の定着がある。

## 二 クダサイ系

### 1 クダサレほか

「クダサレ」は「ツカサレ」に対応する。九州薩隅地方では、「タモンセ」などが、ほぼ、これらに対応している。日本語諸方言の相対的な状態の中では、通常、上述のような対応が見られ、人々は、——南九州のほかの地方のうちでは、対応する両者を、たがいに流通させがちでもある。

「クダサレ」の前身とも思われる「クダサレイ」が、方言に、存在しなくもない。どちらかといえば、これは関西域に見いだされがちか。東条操先生編『全国方言辞典 補遺篇』（東京堂 昭和29年12月）には、山口県のことば「それを一つクダサレイ」がある。

九州大分県地方では、「クダサリ」の形がおこなわれている。（ちなみに、「クダハリ」もある。）三ヶ尻浩氏『大分県方言の研究』（明文堂 昭和12年4月）には、「クダサリー。」「クダハリー。」が出ている。

中国地方山口県の平郡島では、

○フロが ヌルィーケー ヒトクベ ツクローテ クダシャレー。 （老男  
→中女）

風呂がぬるいから 少しいたしてくださいよ。

などと、「クダシャレ」の言いかたをしている。（国安功氏による。）

近畿地方内には、「…… クダサレ。」の言いかたが、今日なおかなりおこなわれているらしい。ついで中部地方に、また、「クダサレ」の、そうとうによくおこなわれているのが注目される。佐々木瀧氏の『白川北部（やまが）の方言』（大野郡白川村白川小学校椿原分校 昭和31年11月）には、

しんびようにあがつてください

ゆつくり十分にたべて下さい。

との実例があがっている。「奥信濃」には、「くらされ（下され）」があるという。（青木千代吉氏『信州方言読本 語法篇』信濃教育会 昭和23年10月）

関東地方については、「クダサレ」の言うべきことがない。

東北地方内に、いくらか「クダサレ」が見いだされる。能田多代子氏の『青森県五戸語彙』（自家版 昭和38年2月）には、

マイッテクダサレ 食物を召し上り下さい。「ママもシルもマイッテ下され」。マイッテタモレとも在方ではいう。

との例が出ている。東北地方では「クダサレ」が「クダサエ」にもなっている。

× × × × ×

北陸金沢地方には、「クタサレ」の形がある。長岡博男氏の「金沢市地方の方言『に』の一考察」(『方言』第三卷第一号 昭和8年1月)には、

ムサイトコヤキド、キテクタサレ

(穢い所だけれど来て下さい)

とある。中道朝子氏は、「金沢方言文法の研究」(『国語方言』第四号 昭和34年3月)で、

時に「下さい」は「クタサレ」と使われて(老人のみ)「下さい」よりも丁寧である。「レ」は尊敬の助動詞「れる」からきているのだろうか。よく歌われる「ゴキミアンナ」も金沢独特の丁寧語であろう。

と述べていられる。

金沢地方に、「フタサレ」というのもあるのか。尾山篤二郎氏の「金沢地方方言のこと」(『方言』第三卷第五号 昭和8年5月)には、

およろツしう云うてふたされイ

というのが見える。

## 2 クダサイ

「クタサレ」が「クダサエ」になれば、これから「クダサイ」への変化は、ほんの一步のことである。諸方言上では、「クダサエ」よりも「クダサイ」のほうが通有形になっている。これは当然のことであろう。「クダサイ」の形では、「サイ」[sai]での[ai]の両母音の対立がけざやかである。人々は、しぜんに、こういう、語形の音的構造の緊張明瞭なものにおもむいたであろう。

九州方言下では、今日、「クダサイ」の謙讓表現法は、おおよそ、いわゆる共通語の共通語法と認められる。方言固有の「クダサイ」の言いかたがあるとしても、今は、国定教科書以来流布をかさねてきた共通語法「クダサイ」表現法の勢力が、全般につよいありさまである。——以上のことは、中国・四国・近畿などについても言える。

九州天草では、「下さい」を「クラサイ」と言ったりしている。(‘幼児語’

だと説明する人もあった。)日本放送協会『全国方言資料』第6巻九州編(日本放送出版会 昭和41年11月)の「福岡市博多」の条にも、

*m*アノー モ ドーゾ コレデ ヒトツ ショーチ シテ クラサイ チ  
「もう どうぞ これで ひとつ 承諾 して ください」と  
ューテ モー サケト サカナトー  
言っ て もう 酒と 魚とを……。

とある。

中国地方では、一般に、まず、「クダサイ」がいわゆるよそいきのことばになっていよう。ただし、「ゴメンクダサイ。」など、あいさつことばでのばあいには、「クダサイ」が、あらたまった気もちで用いられながらも、かなり人々の身についたものともなっていようか。

四国では、愛媛南部、いわゆる南予の地方に「クダサイ」に該当する言いかた、「ヤンナハイ」(やりなさい)のしきりにおこなわれているのが注目される。

近畿地方の「クダサイ」に関しては、「チョーダイ」との共存が注意される。三重県下などには、「下さいませんか。」の言いかたに、「クダサイ カ。」「チョーダイ カ。」の言いかたが見られもする。近畿地方内にも、「下さい」の「クラサイ」があるらしい。

中部地方の佐渡は「クラサイ」のさかんなところである。「クラサエ」もある。「聞いてクランセ(くれなさい)。サロナマリ(佐渡なまり)。」などの言いぐさもできている。

中部地方も、北陸では、「クダサイ」が‘よそいき’のことばになっていようか。(あらたまったことばとされがちでもあろうか。)それが、東海道の静岡県下などともなると、「クダサイ」の言いかたが、まぎれなく土地ことばらしい定着ぶりを見せているかもしれない。

関東地方ともなれば、「クダサイ」のおこなわれぶりが、よく地方的な安定を見せているであろう。東京都中心に観察しうるあいさつことばなどでは、ことに「下さい」が謙譲表現としての生きのよさを見せている。埼玉県東部内では

私が聞きとった「クダサイ」は、つぎのようなものであった。

- クダ(ラ)サイ ナー。  
      $\overline{\text{チヨ}}\text{ーダイ}$  ナー。(店に買い物にはいつてのことば)  
 ○タマニャ  $\overline{\text{キチ}}$   $\overline{\text{クダサイ}}$  ヨ。

たまには来てくださいよ。

土地人は、それこそなれた手つきで「クダサイ」をもてあつかっている。「クダサイ」の、こなれた地ことばのさまが明白である。

東北地方については、「クダサイ」に関して述べるべきことが、今はほとんどない。「クダサイ」の形のままの謙譲の言いかたがおこなわれることは、土地ことばのしぜんの中では、まずまれであろう。(—あるいは、すくなからう。)  
 「クダセー」などの形のものは、別にいくらかおこなわれている。(p.13)

北海道にもまた、旧来からの土地ことばとしての「クダサイ」のおこなわれることは、ほとんどないか。

× × × × ×

「クダサイ」の「サイ」[sai]は、転訛して「クダシャー」「クダセー」などともなっている。

九州大分県に「くんだせ(下さい)」があるよし、堀江与一氏・原田兵太郎氏『大分県方言考』(大分県師範学校国漢学部会 昭和8年11月)に見える。

中国山陰、島根県下では、「クダセ(シエ)」

- チヨ  $\overline{\text{コシ}}$   $\overline{\text{ミチャテ}}$  クダシエ。

ちょっと見てください。

などと言っている。岡山県下では、「クダサエー」の言いかたのよくおこなわれているのが聞かれる。(広島県東南部地方でもまた、「クダシャー」などが聞かれる。)

近畿地方では、「クダシャー」「クダセー」などの転訛形は聞かれない。

中部地方の北陸では、福井県下で「クダセー」が聞かれ、富山県下でも、

- こっちへ  $\overline{\text{キテ}}$   $\overline{\text{オチャ}}$   $\overline{\text{アガッテ}}$  クダセー。

こっちへ来てお茶をあがってください。

などというのが聞かれる。越後ことばでは、「クダサエ」の言いかたがあるという。

中部地方の岐阜県下にも、「くだしゃい」がある。（瀬戸重次郎氏『岐阜県方言集成』 大衆書房 昭和9年6月）静岡県下でも、「クダサエ」「クラサエ」などと言っているらしい。（『静岡県安倍郡井川村田代』『全国方言資料』第7巻 へき地・離島編Ⅰ 昭和42年3月）

関東地方では、一つに、伊豆諸島での「クダセー」が注目される。たとえば新島では、

○コフ カキムノー ヨンディ クダセー。

この書きものを読んでください。（中年以上の男子のことば）などと言っている。関東一般に、「下さい」を存する所ならば、それを、「クダセー」と発音していがちであろう。

東北地方にも、岩手・青森その他で、「クダセ（シエ）」「クダセ（シエ）ー」などが見いだされる。（「クッダセー」もあれば、「クダセアー」もある。）東北のつづきで、新潟県下でも「クダセー」がよく聞かれる。

北海道のうちにも「クダサエー」などの言いかたがあるらしい。

### 3 クダハレほか

「クダハレ」は、独特の「下さい」ことばになっている。やはり、「サ」>「ハ」の変転は、人々の音感情を左右することが大きかったとみえる。「クダハレ」となって、品格のさがったものにはなっていない。このさい、「クダハレ」との、一種の澄んだ音感が、人々に、この言いかたを下品ではないものと思わせているのであろう。

「クダハル」ことばのさかんなのは九州である。九州地方では、「クダハレ」謙譲表現法が、一つの注目すべきものになっている。

まず、五島列島の実例を出してみよう。

○プログラムバ クダハレ。

プログラムをください。

「ユッ クダハレ。」(言ってください。)などと言っている。(ちなみに、「クダハレ」の下の位には「クレレ」<くれ>がある。)

○ワケッ クラハレ。

わけてください。

とも言っている。九州地方では、長崎県下・熊本県下・福岡県下などで「クダハレ」が顕著であろうか。熊本県下では、「クダハリ」の形もよくおこなわれている。

○ワッシャン クダハリ。

私にください。

は、阿蘇山南麓での例である。——ここでは、人が、「ハレ」ではなくて「ハリ」だ、と言っていた。なお、熊本県下について日向内でも、「クダハリ」がよくおこなわれていようか。「タバコ クダハリ。」などと言っている。

中国地方では、通常「クダハレ」が聞かれない。が、ひとり広島県安芸北部に「クダハレ」のいちじるしいものがあって、

○アケテ クダハレー。

あけてください。

などと言っている。思うのに、この地域は、出雲地方にかなり近くて、彼我ともに、「ナハル」ことばをさかんにつかってもいるので、しぜん、「クダサレ」も、ここで「クダハレ」にしているのであろう。

四国地方には、「クダハレ」の言うべきものが、さらにない。

近畿もまた、大約、四国同様の状況であると言えようか。中にあって、三重県伊賀の地方が「クダハレ」を見せている。伊賀に隣る奈良県下でも「クダハレ」を存するらしい。『田舎』第四号(昭和9年4月)には、「水神サン、めばちこ取つて下ハレ」とある。(宮武正道氏「奈良市附近の俗信」)

中部地方となると、北陸地方に「クダハレ」が、そうとうによく聞かれる。

○アミ<sup>ダ</sup>ニョ<sup>ライ</sup>サマ タスケテ ク<sup>ダ</sup>ハレ。

阿弥陀如来さま，助けてください。

は，加賀東南隅の一例である。ここでは，「クダハリ」も言っているらしい。「クダハレ」の用法には，「かんにんして クダハレカ（下さいね）」のような言いかたもあるという。（岩井隆盛氏「北陸道の巻<呉羽山の西と東>」柴田武氏編『方言の旅』筑摩書房 昭和35年9月）富山県下新川郡宇奈月町内山で聞いた「クダハレ」は，「レ」が [ɽɛ] であったので，「クダハリ」に近く聞こえた。

中部地方の，北陸のほかに関しては，今のところ私は，岐阜県下について「クダハレ」を見うるばかりである。

関東地方には「クダハレ」がない。

東北地方にも「クダハレ」はさほどには見いだされないのである。福島県東部や，山形県南部などには，「クダハレ」があるらしい。秋田県下では，「クダハレ」の言いかたを聞いた。

○コッチ[i]サ キ[kçɪ]テ ク[ü]ッダハレ。

こっちへ来てください。

秋田県学務課『秋田方言』（秋田県学務課 昭和4年11月）にも，「くんだはれ」が見えている。

× × × × ×

「下され」の「クダハレ」は，北陸の石川・富山の両県に見いだされる。富山市近郊での「クダハレ」例は，

○ナーモ イリマヘンケネ(ケデ)，カマントイテ ク<sup>ダ</sup>ハレ。

なんにもいりませんので，どうかかまわないでおいってください。  
などである。

富山市近郊ではまた，「クダサレ」の「フタハレ」も聞かれる。ここには「クダハレ」「クダハレ」「フタハレ」の三者がならんで存在している。ただし，土地の人は，「ク」と「フ」の別にはほとんど無自覚である。（人によって

は、「ク」「フ」の別に迷いを示したりしてもいる。)

このようなことにも関連するか。「して下さい」が、「して<sup>o</sup>ったはれ」ともなっている。(富山県教育会編『富山県方言』山田印刷所 大正8年3月)

#### 4 クダハイ

九州では、熊本県下・宮崎県下・長崎県下などに「……………クダハイ。」の言いかたがある。「クダハイ」は「クダハイ」とか「クダハー」とかにもなっている。

中国地方の日常生活では、「クダハイ」の言いかたは、さほどおこなわれていない。

四国地方についても、言うほどのことがない。

近畿地方下もまた同様である。(もっとも、方言生活上での、ややあらたまった言いかたの中で、しぜんに「クダハイ」をつかうことがなくはない。)

中部地方に関しても、私どもは、だいたい、日常生活での「クダハイ」の常用を見いだすことができない。(ただ、『全国方言資料』第3巻の東海・北陸編<昭和41年12月>では、「富山県氷見市飯久保」に、「クダヘー」「クダヘ」を見いだすことができる。)

関東地方にあってもまた同様である。(もっとも、たとえば千葉県下での「ゴメンクダハイ。」など、ときに「クダハイ」がおこなわれてもいる。)

東北地方にも、一般には、「クダハイ」の平常使用がない。もっとも、あらたまればこれをつかいてもすることは、山形県下のつぎのような例にも明らかである。県下の庄内地方では、

○コッチャ ゴザッテ クダハヤエー。

こちらへいらしてください。

などと言ってもいる。「クダヘ」の言いかたになることもある。

「クダハイ」命令形を見せる「クダハル」動詞には、他の活用形もあって、

いわば「クダハル」動詞は、いろいろなばあいになたって、そうとうに自由につかわれている。が、それらの中で、「クダハイ」命令形が、待遇表現上の独特の役わりを演じることは明らかである。今は、他活用形には拘泥することなく、この命令形の、特定謙譲表現法に立つ点を注視するのである。

## 5 クツタイ・クツサイ

「下さい」の「クツタイ」があるか。伊藤晃氏の『東葛方言漫録』（月刊評論社 昭和33年7月）には、

「下さい」を「くつたい」と云う。

とある。斎藤達夫氏の「東総地方方言集」（『方言誌』第三輯 昭和7年7月）にも、「クツタイ」（下さい）が見える。

児玉卯一郎氏の『福島県方言辞典』（西沢書店 昭和10年7月）に、「クツチャイ」（下さい）とあるのは、「クツタイ」と関係のあるものなのかどうか。なお、『全国方言集』（静岡県警察部刑事課 昭和10年1月）にも、「茨城」の「クツチャヨ」（下さい）が見える。「クツチャイ」関係の言いかたが、山形県下にもあるらしい。

福井県立福井師範学校『福井県方言集』（福井県立福井師範学校 昭和6年7月）には、

「クツサイ」は「ください」の転訛か

とある。徳山国三郎氏編『福井の方言』（貴信房書店 昭和7年10月）にも、「クツサイ」が見えている。

クツサイ ください（郡部）

とある。

かつて私は、石川県の大聖寺駅前の旅館で、

○デカイノバツカ クツセイ。

大きいのばかりください。

というのを聞いた。——これは「在のことば」とのことであつた。この「クッセイ」は、「ください」の「クッサイ」の「クッセイ」なのか。あるいは「くれナサイ」の「クッセイ」なのか。ことによると、「クッサイ」も「くれナサイ」からのものであるかもしれない。

「クダサイ」から「クダイ」もできれば「クサイ」もできるというのは、考えにくいことではない。「ナサル」から「ナル」もできれば「サル」もできるというように、語での音節省略はかなり自在である。こういう点では、「クダサイ」系の「クッサイ」を認めることも、困難ではなさそうである。

「クダサイ」も、転じて「クッタイ」ともなると、これの、特定謙讓表現法要素らしさは顕然としてくる。

(「クダサイ」が「クダレ」「クダイ」などと形を変えてくればくるほど、その諸転形の、特定謙讓表現法要素であることがはっきりとしてくる。)

## 6 シャー

「シャー」がもしも「クダサイ」の「サイ」であるとするならば、こういうはなはだしい転形のばあいもまた、これの、特定謙讓表現法要素になりきっていることが明らかであるとされる。

三重県下には、

してさあ　して下さい

などというのがある。(旧三重県女子師範学校生徒氏の記録による。)

山田修氏の「共通語教育のあり方 関東甲信越地方」(日本放送協会『方言と文化』 宝文館 昭和32年10月)には、

ぶちがってしゃあ、(たいらにして下さい　あぐらをかいて下さい)

湯にひゃあってしゃあ、(お風呂に入って下さい)

お茶をのんでしゃあ、(お茶をのんで下さい)

とある。

関東の群馬県下でも、「ブチカッテシャー」（楽におすわり下さい）の言いかがおこなわれている。（中沢政雄氏「群馬県」『NHK国語講座』昭和30年5月）

## 7 クダレ

宮崎県南部では、「クダレ」に相当する「クダリ」がおこなわれている。『全国方言資料』第6巻の「宮崎県日南市飫肥町」の条には、

mオリガ キタツチー ユチ クダリヨ

わたしが 来たと 言って くださいよ。

とある。——「クダリ」に関連しては「クダル」その他の活用形もおこなわれているけれども、今は、とくに、「クダリ」命令形が問題視されるわけである。「クダリ」のばあい、これの、謙譲表現法要素としてはたらく特定性が明らかである。

「クダレ」は中国地方内に見いだされる。原安雄氏『周防大島方言集』（中央公論社 昭和18年2月）には、

クダレ（老） 下さい。くだされの略。

とある。山田正紀氏「瀬戸内海島嶼方言資料」（『方言』第二巻第六号 昭和7年6月）にも、山口県浮島の「クダレー」が見える。

北岡四良氏の『三重県方言資料集 南勢篇 上』（自家版 昭和34年5月）には、

くられ（下さい）（地方）

が見える。「くられ」は「クダレ」に相当するものか。

北陸、福井県奥に「クダレー」（下さい）の注目すべきものがある。「クダリー ヨ」などの言いかたもあるらしい。天野俊也氏によれば、

「ソレ クレ」 「ソレ トッテクレ」よりも「オクレ」の方がよく 次に

「クダレー」がよい 「クダサレ」は更によいのであるが、あまり使はぬのだという。（「福井県大野郡北谷村谷（タニ）」『福井県大野郡北谷村に於ける

敬語』 自家版 昭和28年1月) 北谷村谷の「クダーレ」例はつぎのとおりである。

○ヤー, クダーレ ヤレー。

(やあ, これを, わけてください。)

佐藤茂氏は「補助動詞について(承前)」(『近畿方言双書』第四冊 方言論文集 [1] 昭和31年2月)で、「大野郡石徹白村石徹白」の「ややぞんざいな言い方」,

ドナタモ シズカニシテ クダーレー ヤカマシュー セントッテ クダ  
ーリョー

をあげていられる。

「富山県氷見市飯久保」のことばにも,

mヤー ンナラ イッテキテクダレカー

はい。それでは 行って来てください。

とある。(『全国方言資料』第3巻 東海・北陸編)

岐阜県下には「クダレ」の注目すべきものがある。土田吉左衛門氏の『飛驒のことば』(濃飛民俗の会 昭和34年8月)には,

くだれ(動) 下さい。(尊)=くられ

くられ(動) 下さい。(尊)=くだれ

とある。県下, 美濃には「クダレ」「クダーレ」がかなりおこなわれているらしい。

名古屋ことばには「クダレル」や「クダレタ」が見られるが, 「クダレ」の命令形は見いだしにくいようである。ただし, 県下には「クダレ」が見いだされる。

長野県下では, 福沢武一氏の『信州方言風物誌 第二』(柳沢書店 昭和32年7月)に,

奈川の言葉は, ヨッテクラレ。

入山は, ヨッテクダサレ。

が見える。

関東地方に関しては、私は、今のところ、大橋勝男氏の、群馬県下調査に関する教示をここに引用しうるばかりである。群馬県吾妻郡六合村入山「引沼」では、

○ヤカン モッテ キテ クダーレ。

（「ちょっとやかんを持ってきてください。」と妻が夫に言う場合。）老女教示

○コノ オドシテ クダーレ。

（「この子をしかってください。」妻が夫にたのむ言いかたとして。）老女教示

などと言うよしである。関東地方では「クダーレ」が、今日、めずらしいものになっているようである。

東北地方でも、「クダレ」あるいは「クダーレ」の見いだされることはごくすくない。ただひとり、福島県東部には、「クダレ」のややさかんなものがあって、この地域は、ひとふし注目される。

## 8 クダイほか

私はさきに、「クダサレ」と「クダサイ」とは別項目あつかいにした。「クダハレ」と「クダハイ」とも区別した。同様にして、「クダレ」と「クダイ」とも区別する。「レ」と「イ」とは、音のうえではさほど大きくへだたったものとも言えないが、「——レ」形のものなり「——イ」形のものなりが、謙譲の表現法に立ったばあいを考えると、その表現の現場では、両者に、表現効果の相違の大きいことが知られる。——「レ」のむすびと「イ」のむすびとは、慎重に区別する必要がある。

「クダイ」は「クダレ」から言えば、一つのくずれた形である。それだけに、「クダイ」の表現法は、「クダレ」のばあいよりも、やや気やすいものになり

がちである。

この気やすさに助長されてか、あるいは方言上の音訛の習慣によって、「クダイ」も「クダー」や「クダ」にもなっている。

九州では、まず宮崎県下（主として中部以南）に「クダイ」がいちじるしい。「クダイ」が「クデー」にもなっている。「クデー」が「クデ」とも発音されている。

「鹿児島県肝属郡高山町麓」（『全国方言資料』第6巻 九州編）に見える「クチャイ」は、「クダイ」に類するものかどうか。

fヤドンナイモ アン マレケンナ キヤイチュッ クチャイナー  
おくさんにも たまには おいでなさいと言って くださいね。

熊本県下にも「クダイ」がある。八代市方面には「クダイ」の「クドイ」もあるという。該地出身の白石寿文氏は、昭和38年3月の広島大学卒業論文で、

「クダサイ」→「クダイ」→「クドイ」とうつつてきたのであろうか。

と述べており、「クドイ」に、つぎの例をあげていられる。

○オモサン ハチッ クドイ。（老女→初老女）

おおいに話してください。

中国四国地方には「クダイ」の見るべきものがない。ただ、山口県の大津島には「クダー」があるという。（山田正紀氏「瀬戸内海島嶼方言資料」）

近畿地方のうちには、いくらか、問題の事象が見られる。兵庫県下姫路市方面のことばには、「クダイ」「クダー」があり、「クダ」がある。（今石元久氏の調査にもよる。）

和歌山県下にも「クダイ」「クダ」があるという。村内英一氏は、「語法調査票試案」（『和歌山方言』4 昭和30年1月）で、「人にたのむことば」について、「くらい」「くら」「くだ」を列挙していられる。さてこの「くら」であるが、和歌山県女子師範学校  
和歌山県立日方高等女学校『和歌山方言』（和歌山県女子師範学校  
和歌山県立日方高等女学校郷土研究室 昭和8年3月）には、

クラ（段訛） 下さい

とある。「クラ」が、もし「クダ」の転訛に成るものであったならば、これは当然ここにとりあげるべきことになる。「クラ」がもし動詞「くれる」に關係のあるものであったら、これは、「クダサイ」系のものをとりあつかおうとする今の作業段階からは除外すべきことになる。かつて一旧友は、和歌山市方言に関して、つぎのような説明をしるしてくれた。

「お菓子クラ。」は、「お菓子イタ。」（お菓子下さい。）よりぞんざいな言い方であり、女子及子供間にもみ使用される。

「クラ」をよりぞんざいな言いかたとするのに即応すれば、「クラ」に「くれる」動詞を想定することができそうでもある。それにしても、「クダ」を単純に「クラ」になまることも、おおいにありうることだろう。

滋賀県下にも「クダイ」がある。私は、湖東米原などでこれを聞いている。県下愛知郡には「クタイ」もあるという。（佐藤虎男氏による。）

中部地方の北陸には、「クダイ」「クダー」などがそうとうにいちじるしくおこなわれている。——「クダイ」に関して、全国中、もっとも注目されるのは、この北陸地方であろう。

福井県下にはこのさい、越前のみならず若狭にも、「クダイ」が見いだされる。若狭・越前に「クダエ」もある。

○コフ ミカン クダイ。

このみかんをください。

は、福井市での「クダイ」例である。『福井の方言』には、

クダイ くださいの意 「んだい」は其変訛「うたい」と響くことありとあり、「んだい」などの形も見える。

石川県下で、北陸でもとくに、「クダイ」「クダー」などのさかんなものを見せている。

○ユックリ ヤスンデ クダイ ノー。

ゆっくりやすんでくださいね。

は、加賀東南隅の一例である。加賀平地部では「クダエイ」「クデー」とも言

っている。県下に「クタイ」もまたならびおこなわれている。能登ではおもに「クダイ」がおこなわれているようか。

○コレ シテ クダイ マ。

これをしてくださいな。

は、能登半島西岸南部の一例である。能登に「クダー」もある。たとえば輪島で、「クダー イ。」などと言っている。ところで、ここに一つの問題がある。「クダー エー。」などと言われているものでは、「エー」の特定文末部のはたらき（語としては文末詞）が、まず認めやすかろう。したがって、この「クダー」に、単純な、「クダイ」相当の「クダー」を認めることができる。が、「クダー イ。」のほうは、この地方にいちじるしい「クダーシ」（これは「くだシャイ」からのもの）の転訛形かとも考えられなくはない。そうであったら、これには、単純には上来の「クダイ」「クダー」を認めかねることになる。

富山県下に「クダイ」があり、南の岐阜県飛騨に「クダイ」がある。つづいて岐阜県美濃にも「クダイ」が見いだされる。美濃北部で私の聞きとめた一例は、

○孫らが 父さんに アレー カッテ クダイ、コレー カッテ クダイと言って、…………。

である。

愛知県下に関しては、鈴木規夫氏『名古屋方言の語法』（土俗趣味社 昭和9年4月）に、つぎの記事が見える。

来テ クデァー

見テ クデァー

「クデァー」は前出の「ゴゼァー」とともに同輩又は目下に対して用いられるものであるが、男の老人が口にするくらゐあまり聞かない。

三河、渥美町立伊良湖岬中学校の「方言表」（『中学校において話す力をのばすにはどうすればよいか』 研究物 年月不詳）には、

くよ 下さい

くい 下さい

とある。この「くい」は「クダイ」に関係のあるものかどうなのか。

長野県下にも「クダー」や「クライ」がある。

○ソー シテ クダ ヤ。

そうしてくださいな。

は、「クダイ」の「クダ」を受けとらしめる。信州諏訪湖近辺で、「クダ ヤ」は年配の女の人が言うよしである。

つぎは関東地方での事例である。中沢政雄氏の「群馬県片品村言語調査報告」(『季刊 国語』昭和24年度 1)には、

クダイ (下さいの意) カネークダイ (お金を下さい) チットクダイ  
(少し下さい)

とある。

栃木県那須郡下でも「下さい」を「クダ」などと言っているという。

東北地方では、福島県東部に「クライ」がある。

山形県下には「クダイ」「クダエ」がある。内田慶三氏『米沢言音考』(目黒書店 明治35年10月)には、つぎの記事が見えている。

呉れニモ、な江ヲ付ケテ、呉れな江ト云ハズ。是レ、呉れ無江ト混ズルヨ  
リ、云ヒ分クル必要上、下江ト云フ。  
下江ノ、さを略シタルモノナリ。

秋田県北部に「クダイ」「クダエ」のあることは、秋田県学務課の『秋田方言』によっても知ることができる。内田武志氏『鹿角方言集』(刀江書院 昭和11年9月)には「クンダエ」の形が見えている。その一例文はつぎのとおりである。

オンデェァテクンダエ

お出で下さい。

昭和31年末に私が花輪町で聞いたものは、

○コツチャ キ[kʃi]テ ク[ü]ダエイ[i]。

である。

奥羽の太平洋がわでは、「クダイ」があまり聞かれない。私がここにしろしめるのは、次下の事例だけである。

○この辺の在は クンデァー を言う。

これは、青森県八戸市の近在でのことである。

○ン[i] ンブ[ü] ンサ イッコ モッテ キ[kçi] テ ク[ü] ンダイ ヨ。

新聞を一枚もってきてくださいよ。

これは岩手県北、軽米町のことばである。

## 9 タイ・タン

「クダサイ」系の「クダイ」の、「クタイ」からは「タイ」も出てきたはずである。

「タイ」は「タン」ともなまったようである。

北岡四良氏の『三重県方言資料集 志摩篇』（自家版 昭和32年2月）には、  
お金貸してタン

が見える。「タン」は「下さい」であるという。玉岡松一郎氏の「志摩崎島方言集」（『方言』第五卷第九号 昭和10年9月）には、

タン 下さい「オ金タン」「貸ンテタン」4（和具村）

とある。

滋賀県下には「下され」の「タイ」がある。（大田栄太郎氏『滋賀県方言集』刀江書院 昭和7年3月）私は、湖東米原で「タイ」（下さい）を聞いた。

「タイ」に関してもまた北陸地方が注目される。石川県下に「タイ」のいちじるしいものがある。早く木村尚氏『普通語  
対訳金沢方言集』（宇都宮書店 明治42年9月）に、

たい（下さいの略なり）おくんない

としるされている。加賀の方々に「タイ」があり、能登西南岸にも、

○して タイ マ。

などが見いだされる。金沢ことばの「タイ」は「タエイ」ともある。「オカシ  
タエイ。」（お菓子ください。）などと、子どもがよく言うという。

○コレ タエイ マン。

これくださいな。

とも言っているという。（ねだってつよく言う時に、「マン」が出るらしい。）  
岩井隆盛氏が国立国語研究所報告 16『日本方言の記述的研究』（明治書院 昭  
和34年11月）の中で、「石川県金沢市彦三一番丁」について書いていられる、

トッテタインカ・トッテンカ（取って下さいませんか）

は、やはり「タイ」ことばを見いださしめるものであろう。

富山県西部に（つまり加賀寄りに）「タイ」が見いだされる。佐伯安一氏の  
『砺波民俗方言集稿（7）』（自家版 昭和30年10月）には、

タイ（命令形のみ）（給えの意）下さい。ちょうだい。終助詞マを伴う  
こともある。（出町＝婦人，子供）

とある。

長野県下にも、

マッテタイ 待つてくれ

など、「タイ」の言いかたがあるらしい。（佐伯隆治氏「長野市及び上水内郡方  
言集」『方言』第四卷第十一号 昭和10年12月）

関東地方では、千葉県山武郡下に「タイ」（下さい）があるらしい。（東条操  
先生編『分類方言辞典』都竹通年雄氏「小詞」東京堂 昭和29年12月）都竹  
通年雄氏は、『国文学解釈と鑑賞』第十九卷第六号（昭和29年6月）の「方言文  
法」で、やはり千葉県などの「タイ」をあげていられる。

東北では、秋田県下に、「タイ」（「タイン」も）「タエ」の、かなりいちじる  
しくおこなわれているのが見られる。

○ヨグ[ü] オザッテ タイン。

“つづがなくお帰りください。”

これは、県下東南部内の「タイン」例である。

○ゴメ[e]ンシ[i]テ タイ シ。

ごめんなさいね。

これは、県下雄鹿半島の船川での「タイ」例である。ここでは、「あがって  
タイン。」の「アガッタイン。」も聞かれる。

秋田県下の、方言関係の文献には、「下さい」相当とされている「タイ」「タ  
イン」「タエ」が、かなり見いだされる。

東北地方では、他に宮城県下に、「～て タイン。」の「タイン」が見られ  
るか。他地域に関しては、今、私は、言うべきものを持たない。

「北海道松前郡福島町百符」(『全国方言資料』第1巻 東北・北海道編 昭  
和41年10月)には、

fアー エーエー モテタエン

ああ いいんだいいんだ 持っていきなさい。

が見える。

## 10 クダリヤシ

福島県東部には、「クダリヤーセ」がおこなわれているという。(新妻三男氏  
『相馬方言考音韻語法の部』自家版 昭和5年10月)

遊びさおんなって下りあーせ。

国学院大学民俗文学研究会編集委員『岩手県南昔話集』(『伝承文芸』第六号  
昭和43年4月)には、

今夜だけどうぞがまんしてくだありゃし

というのが見える。

## 11 クダンヤイ

「クダンヤイ」そのものはどこにも見いだされないのであるが、ただ、問題  
としうる「クランヤイ」が三重県下に存在している。紀州分の長島のことばで、

○デンア カケテ クランヤイ。

電話をかけてくださいな。

というのがある。この「クランヤイ」については、いちおう「クダンヤイ」をうたがってみることができる。ところでこの長島弁には、「ア<sup>ン</sup>タ<sup>ミ</sup>テ クランヤイ。」（あした見てくださいな。）との言いかたとともに、「ア<sup>ン</sup>タ<sup>ミ</sup>テ ク<sup>ラ</sup>ンヤイ。」との言いかたもある。「クランヤイ」を見ていると、「クランヤイ」もただの「クダンヤイ」ではないのかと思われてもくる。

## 12 オ下シなさいませ

九州佐賀県南部の旧須古村で聞き得たものに、‘やしきことば’の「オク<sup>ダ</sup>ン<sup>シ</sup>ンサイマッ<sup>シ</sup>ェ。」がある。

## 13 クダーシほか

石川県下も主として能登では、たとえば輪島で、

○<sup>サ</sup>ー アガリマシテ クダーシ。

さあ、お上がりになってください。

○<sup>サ</sup>ー アガリマシテ クダーシ イェー。

さあ、お上がりになってくださいね。

などと言っている。この「クダーシ」は、ときに、「コレ ドカ ヨンデ クダー<sup>シ</sup>ェー。」（これをどうか読んでください。）などとも言われている「クダー<sup>シ</sup>ェー」とも類同のもので、もともと「下<sup>サ</sup>ッ<sup>シ</sup>ヤイ」の言いかたに成るものではないか。能登では、「クダーシ」が「クダシ」ともなっている。奥能登南岸の宇出津の例だと、「クダ<sup>シ</sup>ェー。」（ください。）「ク<sup>ダ</sup>シ。」「ク<sup>ダ</sup>シー。」などが聞かれる。（文末詞「マ」のむすびのきた「ク<sup>ダ</sup>シ マ。」「ク<sup>ダ</sup>シ マー。」の言いかたは、能登の方々で聞かれる。）

『岐阜県方言集成』では、揖斐郡の条に、

くだしいや〔句〕 下さい。

が見える。この「くだしい」も「くだシヤイ」か。——「シャル」ことばのさ

かんな岐阜県下のことである。

所によっては、「…………… クダシャンセ(シェ)」などと言っているか。この「クダシャンセ(シェ)」は、「下さッシャンセ」からのものであることもあるか。「クダサンセ」相当のものにほかならないこともあろう。

#### 14 クダサイマセほか

九州熊本県南部では、「来て くだハリマッセ。」などの言いかたが聞かれる。大分県臼杵市などでは、「下さいましー」の言いかたが聞かれるらしい。(『昔話研究』第三、四号 昭和10年7月、8月)

中国地方では、まず、山口県下で「クダサイ(エ)マセ」がよく聞かれる。ついで、出雲南部山地のつぎの一例が注意される。

○ひとつ アガッテ ヤッテ クダサイマシ<sub>ョーニ</sub>。

ひとつ、こちらへおいでくださいましたらさいわいですが。(男青年の電話のことば)

四国でも、近畿でも、中国での広島県以東でと同様に、「クダサイマセ」を常用する方言生活はあまり見られない。ただ、共通語への心ばせをもって、ていねいなもの言いをするとなれば、人は、どの地方の人のばあいにも、「クダサイマセ」をつかいうることはもちろんであろう。つぎのは若狭小浜湾頭の一例である。

○ド<sub>ー</sub>ツ サガッテ キテ クダサイマシ<sub>ェ</sub>。

どうぞおりてきてくださいませ。(家の嫁さんが、二階の私どもに、食事においてこいとすすめてくれることばであった。)

佐渡西北岸の外海府では、「クダサイマシ」が、「ナサイマシ」や「マ<sub>ー</sub>アガリマシ。」などとともにつかわれているのを聞くことができた。かつての一経験である。

関東地方下に、「クダサイマセ」「クダサイマシ」のかなりよく聞かれること

は、多く言うまでもなかるう。

○ドーゾ オアテ クダサイマシ。

どうぞおあてくださいませ。

これは埼玉県東部の一例である。

東北地方の、通常の方言会話では、「クダサイマセ」などがほとんど聞かれない。ところで、ていねいことばの中にはしぜんに、この種のもが出てくるのであろう。岩手県北での事例はつぎのとおりである。

○モッテ オデアッテ ク[ü]ダサリ[i]マセ。

持っていらしてくださいませ。

「クダサリマセ」が「クナサリマセ」ともなっている。

「クダサリマセ」例は、能田多代子氏の『青森県五戸語彙』にも見える。

#### 15 クダサマセ

「クダサイマセ」が「クダサマセ」ともなれば、また、この転訛形がこれ相当の待遇効果を発揮する。

青森県東部の野辺地町では、

○マーマー アガラシテ クダサマへ。

まあまあ、お上がりになってくださいませ。

のような言いかたをしている。

佐渡弁では、「クダサマセ」が「クラサマシェ」になっている。（佐渡ではダ行音をラ行音に転訛させることがいちじるしい。）

#### 16 クダサンセほか

九州では、東がわの地域に問題の事象がある。宮崎県下では、中部域に「クダハンシ」などが見いだされるらしい。大分県下は「クダサンセ」を見せている。「大分県南海部郡上野村」（『全国方言資料』第6巻）には、「クダハンシェ」「クダハンシ」が見えている。

中国地方では、山陰に「クダサンシエ」が見いだされる。

○マー オチャー オアガンナサイシテ クダサンシエ。

まあ、お茶をおあがりになってくださいませ。

は、出雲の一例である。出雲に「クダサイセ」もおこなわれている。隠岐は、「クダサンセ(シエ)」のさかんな所のようなのである。

四国に関しては、今、私は、武田明氏の「三好郡昔話——阿波三繩村字山風呂——」(『昔話研究』第二十一号 昭和12年7月)に、

それではまあこなに貧乏なんじやけに一つ寝とつて下さんせと云ふわけで亭主はどう寝た相な。

を見いだしうるばかりである。

転じて近畿地方下にも、問題の事象は見いだしがたい。ただ、永田吉太郎氏の「助動詞の記載について」(『土の香』創刊五周年記念 土俗趣味社 昭和8年5月)には、

クダサン(セ) 和歌山県日高地方  
(上山景一氏)

というのが見えている。

北陸地方に、「クダサンセ」のやや注目すべきものがある。石川県加賀の東南隅には、

○シズカニ オアガリン ナッテ クダサンセ。

ゆっくりおあがりになってくださいませ。

のような言いかたがある。能登にも「クダサンシエ」がおこなわれている。

ついで富山県下には、「クダハンセ」がよくおこなわれている。

○オチャデモ アガッテ クダハンセ。

などと言っている。「クダハンセ」が「クタハンセ」などにもなっているらしい。『富山県方言』には、「ッタハンセ」も見える。

北陸より東で、「クダサンセ」ほかの注目されるのは、東北の岩手県方面である。岩手県中央域の東部山地内での、私の調査経験では、つぎのような事実

が知られた。

○ケロー。

○ケドガーン。

○オクリャンセ。

○オクリャッテ クタサンセー。

「くれる。」から「おくれあって くださいませ。」への、下位から上位への、上の四とおりの言いかたがある。

「岩手県宮古市高浜」（『全国方言資料』第1巻）には、

m………… オサメデ クダセーンセ  
納めて ください。

が見える。

#### 17 クダイセほか

中国地方の広島県（海岸部を除く）では、「下さんせ」の意の「クダイセ」がおこなわれている。「くださいます」の、「クダサンス」からの「クダイス」が、「クダイシタ」などともおこなわれていて、一方、「クダイセ」が、謙譲表現用のものとして定着せしめられている。

四国一般では、「クダイセ」を見いだすことができない。ただ、愛媛県下の内海島嶼の一部に、「クダイセ」が見いだされる。

三重大学方言研究会『三重方言資料』（昭和28年3月）には、

アガッテクダイショ 南牟婁郡 飛鳥村 訪問の応答  
が見える。

能登にも「クダイセ」がある。愛宕八郎康隆氏は、能登半島東北端に関して、「クダイセ」の頻用（中年以上）を指摘してられる。「クダイセ」は、「クダッシ」よりはわるいことばであるという。

転じて山梨県下に、「クダイショ」が見いだされる。深沢泉氏、春日正三氏、石川緑泥氏などのご研究がある。

## 18 クダッセほか

熊本県下，ことに天草に，「クダッセ」のさかんなものがある。天草下島南端の牛深町では，

○コッチャン キテ クダッシャイ。

こちらへ来てください。

などとも言っており，ここに，「シャル」ことばも認められるかのようであるが，それはそれとして，おなじく牛深でも，

○オスキクダッシェー。

お敷きください。(座ぶとんを)

など，明らかに「クダサイマセ」系の，「クダイセ」類似の「クダッセ」がおこなわれている。「～ません」も「マッセン」(「～でしょう」も「デッショー」と言っている)，「～なさいませ」も「ナッシェ」と言っている所がらだけに，「下さいませ」に関して「クダッシェ」のおこっているのも，むりからぬことに思われる。

○モー コア ハンブソ クダッシェー。

もうこの半分ください。

は，天草下島東北岸の一例である。

熊本県本土に関しては，阿蘇山南麓のつぎの例をあげることができる。

○イッペンドモ オッテ クダッシェ。

いっぺんでも居ってください。

九州では，大分県下にも「クダッセ」が見いだされる。

つぎに石川県に関して，一問題を指摘しなくてはならない。主として能登には「クダッ」が見いだされ，

○ソッチ デマシテ クダッ。

そちらへお出になってください。

などとあり，県下にこれの転訛形も見いだされるが，当地方の「クダッ」な

どは（「クダシ」も）、さきに13の項目で見た「クダージ」と類縁のものと思われる。すなわち、これらの「シ」はみな、「シャル」ことばの、「シャイ」命令形の転じた「シ」だと思われる。「ハヨー オロサシ マー。」（早くおろしなさいよ。）の「サシ」も、「サッシャイ」であると思われるが、この「サシ」同様に、「クダッシ」「クダシ」もできたものと思われる。要するに、北陸の「クダッシ」などは、上述の「クダッセ」などとは生成を異にするものと解される。

『岐阜県方言集成』に見える「くだし」は、能登のにおなじものかどうか。最後に記述すべきは、福島県下に関してである。なぜか、東北地方でもとくにこの地方が、「クダッショ」（下さい）を見せている。この「クダッショ」は「クダッセウ」からのものか。『福島県方言辞典』には、「クダッショ」とともに「クタッショ」も見えている。（私も、現地の人からの、「クタッショ」の報知を受けている。）

#### 19 クダンセほか

九州では、東部に「クダンセ」などが見える。宮崎県下の中部地方に「クダンセ」「クダンシ」があり、大分県下に「クダンセ(シエ)」がかなりさかんである。

○モッチェ キチェ クダンシエ。

持って来てください。

○ヒチェ クダンシエ。

してください。

などと言っている。

中国地方では、やはり山陰に「クダンセ(シエ)」があり、山陽の備後などにも「クダンセ」が見いだされる。

四国には、だいたい、「クダンセ」などがおこなわれていないようである。

近畿地方にもまた、問題の事象の見いだされることがまれである。ただ、『和歌山県方言』には「クダンシ」（下さい）が見え、森彦太郎氏『南紀土俗資

料』(土俗資料刊行会 大正13年3月)にも、「くだんせ(下さい)」が見える。なお、近畿内で一つ注目されるのは、播州赤穂方面の「クダンセ」ことばである。“男のことば”に「クダンセ」(“そうしてくれ”)があるという。

「クダンセ」ことばのおこなわれることのいちじるしいのは、北陸地方である。このさい、まず、福井県の若狭の「クダンセ」が指摘される。小浜湾岸の一例には、

○ド<sup>ー</sup>ゾ ハイ<sup>ッ</sup>テ クダン<sup>シ</sup>ェ。

どうぞは行ってください。

がある。(ここでは、「クダンス」などの活用形もおこなわれている。)若狭には、「クタンセ」の清音形も見いだされる。

福井県越前では、「クダンセ」「クタンセ」の見るべきものがないが、その北の石川県下となると、ここでは、「クダンセ」類の使用が別していちじるしいありさまである。——全国中、おそらく、この石川県下がもっともよく、「クダンセ」類を見せていよう。加賀に「クダンセ(シエ)」「クタンセ」があり、「クダンシ」もあり、能登にまた、「クダンセ(シエ)」「クダンシ」がさかんである。能登半島西岸の事例をあげれば、

○クダン<sup>シ</sup>ェー クダン<sup>シ</sup>ェー クダン<sup>シ</sup>ェー。

ちょうだい、ちょうだい、ちょうだい。(学童ら、絵をくれくれとねだる。)

○コレ ミテ クダン<sup>シ</sup>ェ。

これを見てください。

○ツ<sup>エ</sup>ーテテ クダン<sup>シ</sup>。

つれてってください。

などがある。このあたりの、敬語法のことばづかいを大観するのに、なかでも「クダンセ」ことばが一特徴をなしているように見うけられる。能登半島東端の事例を、愛宕八郎康隆氏の調査結果からお借りするなら、

○デ<sup>テ</sup> クダン<sup>セ</sup>ー。

出てください。

などがある。

岩井隆盛氏の「石川方言——その分布と区画——」（『国語学』第十一輯 昭和28年1月）には、「クダンセ」「クダンシ」「クタンセ」「クタンシ」「グデンセ」「クテンシ」「クトンシ」といった形があげられている。加賀の大聖寺駅前では、私も、小松のことばとされる「クト<sup>ー</sup>ン<sup>ニ</sup>シエ。」（ください。）を聞いた。

石川県に東隣する富山県下にも、「クダンセ」「クタンセ」がある。私は富山市西北部で、

○<sup>ソ</sup>ー<sup>メ</sup>ン<sup>デ</sup>モ <sup>ナ</sup>ン<sup>デ</sup>モ <sup>ア</sup>ガ<sup>ッ</sup>テ <sup>ク</sup>ダ<sup>ン</sup>セ。

そうめんでもなんでもたべてください。

○<sup>マ</sup>ダ <sup>チ</sup>ク <sup>コ</sup>ト <sup>ア</sup>ッ<sup>タ</sup>ラ <sup>キ</sup>ー<sup>テ</sup> <sup>ク</sup>ダ<sup>ン</sup>セ。<sup>ナ</sup>ー<sup>ン</sup> <sup>ツ</sup>カ<sup>エ</sup>マ<sup>セ</sup>ン  
チャ。

まだ聞くことがあったら、聞いてください。なにもさしつかえはありませんよ。

などを聞き得ている。

新潟県下の南陔、信州どなりの秋山郷にも、「クダンセ」が見いだされる。押見虎三二氏が、「秋山郷の言語構造論について——第一次報告——」（新潟大学『研究紀要』第二輯 昭和31年2月）の中で、

○(上略)サトユーノ<sup>ン</sup>デ<sup>チ</sup>ット<sup>ハ</sup>ナ<sup>シ</sup>テ<sup>ク</sup>ダ<sup>ン</sup>セ

(砂糖湯を飲んで、すこし話して下さい。)

との事例をにかけていられる。北陸を出はなれると、もはや一般には、「クダンセ」類を見いだすことが困難である。その中であって、ここには一つ、山梨県西南部内のつぎの言いかたをひくことができる。

○<sup>マ</sup>ダ <sup>キ</sup>テ <sup>ク</sup>ダ<sup>ン</sup>シ<sup>ョ</sup>。

また来てください。

「クダンシ<sup>ョ</sup>」の言いかたになっている。「クダンセう」か。

いま一つ、私が「クダンセ」「クタンセ」を見いだしうるのは、岩手県下に

おいてである。県中央域の東寄りでは、

○タ<sup>バ</sup>テ クダンセ。

たべてください。

○コ<sup>ノ</sup> テガミ<sup>[i]</sup> ヨンデ ク<sup>[ü]</sup>タンセー。

この手紙を読んでください。

などと言っている。県下北寄りでも、「コレ ミ<sup>[i]</sup>デ ク<sup>[ü]</sup>ダンセ。」などと言っている。小松代融一氏の『岩手方言の語彙』〈岩手方言研究第三集〉(岩手方言研究会 昭和34年11月)にも、

クタンセ 下さい

が見える。(「旧南部領」のことばであるという。)

## 20 クダン

大分県北海部郡には「クダン」があるよし、柳田国男先生の『毎日の言葉』(創元社 昭和21年6月)に見える。

「クダン」で注目されるのは、姫路市方面である。姫路市では、

○チョ<sup>ット</sup> マッ<sup>ッ</sup>テ ク<sup>ダン</sup>ネ。

ちょっとまっててくださいね。

○コレ シ<sup>テ</sup> ク<sup>ダー</sup>ン。

これしてちょうだい。

などと言っている。「姫路の『クダン』ことば」との言いならわしがあるらしい。総体に、婦人衆がこれをつかっているようであるが、むかしは男性も、したしみやわらいだ時、「何々してクダン。」と言っていたそうである。

こういう「クダン」は、おそらく、「クダンセ」の「セ」(または「クダンシ」の「シ」)略に成るものであろう。——「クダイ」が「クダン」になったと考えることは、「姫路の『クダン』ことば」などのばあい、むりなのではないか。

三重県下、紀州の長島町では、「ください。」の「ク<sup>ダー</sup>ン。」を聞いた。(老女からであった。)これも、「クダンセ」の系統をひくものではないだろうか。

「クダーン。」の長音や、アクセントの高音の調子などが、そのことを思わせてくれもする。

北岡四良氏編の『三重方言資料集 南勢篇 上』には、つぎの記事が見える。

くだん 下されといふを、ちゃちゃもって来てくだん、そこたてくだん  
などといふ。くだんせといふべきをせの字を言中こまうちにふくみていふゆゑくだ  
んといふがごとし。（漫録）

下さい（地方）

他の伊勢南部関係の方言書にも「クダン」が見える。

さきに私は、——9の項で、「タイ」にあわせて「タン」を見た。（三重県志摩のことば）この「タン」を、あらためて「クダン」からのものかと、うたがう必要があるかどうか。おそらくその必要はないのではないかと考えられる。

以上のほかの地では、私はまだ、「クダン」または「クダーン」を見いだし得ていない。

## 21 タンセほか

おもに、——あるいはほとんどと言ってもよいくらいに、秋田県下に見いだされる「タンセ」類がある。（——本書では、これをこの位置にとりあげてみる。一考である。『方言敬語法の研究』p. 178 参照）

ただ、他の一・二の土地にも関連事項があるので、それから見ていく。

岡山県東南隅の地域では、

○マツトッテ ダンセ ノ。

まあってください。

○トッテ ダーンセ。

とってください。

などと言っている。この「ダンセ」「ダーンセ」は、「クダンセ」に近いものではなかるうか。

ついで、「福井県遠敷郡名田庄村納田終」（『全国方言資料』第3巻）にも、

m ヨ ッ テ チ ャ ナ ト ノ ン デ ダ ン セ

寄って、お茶でも飲んでください。

など、「ダンセ(シェ)」が見える。

さて問題は東北地方である。高橋藤作氏の『西和賀方言之研究』（岩手県和賀郡川尻尋常高等小学校 昭和9年11月）には、

下サイはタンセ 来テタンセ

との記事が見えている。東北地方では、秋田県下にかぎらず他の地にも、「タンセ」類があり得るのであろうか。それにしても、今日は、秋田県下の外では、一般に、「タンセ」類がはなはだ見いだしがたいありさまである。

秋田県下の、「タンセ」類隆盛のありさまは、まず、『秋田方言』について見ることができる。同書には、「タンセ(シェ)」「タンヘ(ヒ)」「タンエ」の諸形がとりあげられており、そこに分布の説明と用例とを見ることができる。

△  
「たんえ」「たんしえ」「たもれ」「けれ」は動詞又は動詞の活用の助動詞

に、「て」「で」を接続したものにつづけるので、希望の意味をもっている。という。奥羽の「タンセ」類は、北陸にいちじるしい「クダンセ」類と関係の深いものか。等しく日本海斜面に、南北あい応じて同系のものが分布しているらしいのは、注目にあたいする。国の中心地からより遠くはなれた地域に、「クダンセ」に対する「タンセ」といったような省略形がおこなわれていても、もっともなことのように思われる。——より遠くはなれた地域では、こういうしげんの転訛がおこりやすかったであろう。

秋田県下の「タンセ」類の実例をあげる。県下東南部山地での一・二例には、

○ス[ü]デ タンシェ サー。

座ぶとんを敷いてくださいなあ。

○サー ク[ü]ッテ タンシェ。

さあ、たべてください。

などがある。県北部の一例は、

○ドーゾ オザッテ タンエ。

どうぞいらしてください。

である。

秋田県下も西南、本庄方面では、「タンエ」を言わぬという。これは、山形県下に「タンセ」類がないのと同連することであろうか。

「タンセ(シェ)」と、「タンへ(ヒ)」「タンエ」とでは、「タンセ(シェ)」の言いかたのほうが、よりあらたまった言いかたになっているのであろうか。かく言うとう「タンへ」が出るということがあるかのようである。

北条忠雄氏は、柴田武氏編『方言の旅』（筑摩書房 昭和35年9月）の「みちのくの巻（1）」で、

「オメシャッテタンエ」の「タンエ」は「タモレ」から来たもので、秋田県では原形がまだあちこちに残り、変化した形の「タンシェ」「タンエ」などは広く行なわれています。

と述べていられる。

一つの疑問例をここに付記しておく。東条操先生の『全国方言辞典 補遺篇』には、

こしてくったんえ〔句〕→こす

譲って下さい。千葉県印旛郡臼井。

というのがある。この、「下さい」とされている「くったんえ」は、どういう出来のものであろうか。「クダンセ」に近いものかどうか。

## 22 ダセ

栃木県下の田代黒龍氏『高林村郷土誌』（稿本 明治44年5月）には、

ダセ 下サイ

とある。この「ダセ」は、「クダセー」（下さい）の「ダセ」か。

石垣福雄氏は、「東京語 はひろがる」（『言語生活』第四十一号 昭和30年2月）で、

道南地方では（中略）「下さい」に当る丁寧な言葉に（中略）

コノ手紙ポストサ入レデダセ

コノ手紙ポストサ入レデクダサイ

としていられる。佐藤誠氏も、柴田武氏編『お国ことばのユーモア』（東京堂 昭和36年11月）の中で、北海道江差について、

「雨降って来たから干し物をイレテダセ。」（おかみさん→出稼ぎの漁夫）

（雨が降って来たから干し物を入れて下さい。）

とするしていられる。

### 三 クダシカレほか

「下す」に関連する、「下しおかれ」の「クダシカレ」がある。——これが、まったくの、謙讓表現用の特定語詞として、方言上、わずかに存在している。もとより今日、「クダシカル」や、「クダシカッタ」「クダシカラん」などは見いだされることなく、もっぱら「クダシカレ」命令形のみが存立している。

山口麻太郎氏の『沓岐島方言集』（刀江書院 昭和5年7月）には、「下さるの意にて丁寧なる語。」の「クダシヤカル」がある。

「クダシカレ」が今日、見いだされるのは、信州においてである。上田中学校国漢科『信州上田附近方言集』（大正堂書店 昭和7年10月）は、つとに、「クダシカレ」の語をかかげている。記事に言う。

上田オンクレ坂城はオクレ

なぜか松代クダシカレ

これ上田附近は、オンクレといひ、坂城以北は川中島なり、此の地方はオクレといふ。松代は一廓をなせる地なり。他と異にしてクダシカレといふ故に之を合せていへるなり。

同書にはまた、

クダシカレ(松代) くだされの転

又、クダシカイ」ともいふ。

ともある。

佐伯隆治氏の「信州北部方言語法(上)」(『国語研究』第十卷第七号 昭和17年8月)には、

「下さい」といふことを松代では「クダシカレ」と云ふ。

ソレヲクダシカレ。来テクダシカレ。

とある。

私が、今日までに知り得たところでは、信州をほかにすれば、他では九州肥前平戸島に、問題の事象を見だし得ているにすぎない。平戸家中弁では、「どうどうして下さい」の意で「クダシヨカリ」と言っている。「下しおかれ」が「クダシヨカレ」になったものであろう。

「クダシカレ」「クダシヨカリ」、ともに、謙譲表現法に役だつ特定要素であることは明白であらう。

#### 四 まとめ

動詞「下さる」の命令形が、他の活用形に比較してとりわけさかんに用いられているのは、だれしも、察知にかたくないことであらう。一方言に「下サル」諸活用形がよくおこなわれているばあいにも、命令形がなお、より活発により多くおこなわれるのはつねのことである。

このように見られる命令形の頻用とともに、使用上でのしぜんの出来としての転訛形発生も、またいちじるしいものがあつた。思うのに、ものが、特定の頻用せられるようであれば、言主の、そのものを使用する現場での使用意識の展開・転移によって、硬軟・簡復の転訛形が生じるのは、もっともしぜんのことであらう。

ものがとくに頻用され、かつまた、そこに諸種の特定転訛形が産出されるようであれば、その頻用せられるものないし諸転訛形は、いよいよ特定謙譲表現法要素として立つようになる。

「特定命令形の特定用法」ということが考えられる。

## 第二節 ツカーサイ類

### 一 はじめに

「下サル」は、「下す」の「下さ」に「る」のそわったものである。「遣わさる」は、「遣わす」の「遣わさ」に「る」のそわったものである。「クダサイ」類が、特定謙讓表現法にはたらいっていると同様に、「ツカーサイ」類もまた明らかに、特定謙讓表現法に、たちはたらいっている。ものが謙讓表現法に役だっていることの明らかなさは、「ツカーサイ」類のほうが大でもあろうか。——「クダサイ」などと言うのよりは、「ツカーサイ」などと言うほうが、よりつよく自己を低め、より深く謙遜の意をあらわすことになるというわけであろう。

「クダサイ」類と「ツカーサイ」類とでは、「ツカーサイ」類のほうがいちだんと古風であろうか。「クダサイ」類は、方言上のそれが、現代共通語上のそれと、ただちに連関しており、双方に境がない。(そのことにも関連しようが、「クダサイ」類には、たとえば「クダサった」「クダサラん」などのおこなわれることも、かなりいちじるしいものがある。)これにひきかえ、「ツカーサイ」類のほうは、現代共通語上になんら尾をひくものがなく、また諸方言上、命令形のほかの活用形のおこなわれることが、「クダサイ」類のばあいとは比較にならないほど微弱である。いわば「ツカーサイ」類は、命令形本位に存立していると見られるのである。「ツカーサイ」類は(「ツカーサル」動詞一般としてはもちろんのこと)、今日、遺存の特定物とのおもむきが深い。

### 二 ツカーサイ系

#### 1 ツカーサレ(ツカサレ)・ツカーサイ(ツカサイ) ほか

さきに、「クダサレ」ほかと「クダサイ」とは区別した。(また、「クダハレ」ほか

と「クダハイ」とも区別した。）今日、「〜イ」形のほうは、共通語としてもおこなわれているので、「〜レ」との差が感じられやすい。このため、とりあつかいにあたっても、項目をわけた。

しかし、「ツカーサレ（ツカサレ）」と「ツカーサイ（ツカサイ）」とのばあいには、今日、ともに、明らかな方言形なので、人はしげんに、両者の似寄りを感じやすい。それゆえ、今は、これらを一括して、同一項目のもとであつかう。

「ツカーサレ」などと「ツカハレ」などとは、別項目にしてとりあつかう。「ツカーサレ」には、「ツカサレ」の、長呼しない形もありはするものの、総じては、長呼の傾向がつよい。これにひきかえ、「ツカハレ」には、「ツカーハレ」などの長呼がまれである。「ツカーサレ」などと「ツカハレ」などとは、分布上でもまた区別することができる。このようなわけで、私は、「ツカーサレ」などと「ツカハレ」などを、区別してとりあつかう。

「ツカーサレ」ほかの分布には特色がある。九州は、主として福岡県下にこれが見いだされるにとどまり、中国・四国にこれの分布することがいちじるしい。関連しては近畿であるが、ここは「ツカーサイ」に関しては、さほど見るべきものがない。前田勇氏は、「關西方言の性格」(『NHK国語講座』昭和32年3月)で、

瀬戸内海兩岸で懇願・依頼を表わすのに「…てつかわさい」というのは、近世中期には京阪でも使っていたようです。

と述べていられるが、今日では、京阪地方も「ツカーサイ」を存しなくなっている。(ただし、次項に述べる「ツカハレ」は別問題である。)

以下順次、分布の明細を見ていこう。九州、福岡県下では、まず、福岡市の「ツカーサイ」が注目される。その西北方にあたる糸島半島での一例は、

○オバ<sup>バ</sup>サン イモ<sup>モ</sup> ヒトツ ツカーサイ。

おばさん、いもを一つください。

である。県下に、「ツカーサイ」を使用する所は多い。加来敬一氏は、「福岡県方言の語法」(『北九州国文』第五号 昭和30年3月)で、「ツカーサイ」にも言及していられる。岡野信子氏にもまた、北九州若松地区の「ツカサイ」に関

する報告がいくつかある。若松・八幡の方面で、短呼の「ツカサイ」が見られるのは注目される。岡野氏によれば、

○ヨメ モライマシタケ ヨロシユ ミシツチツカサイ。(老女→老女)

嫁をもらいましたからよろしくお見知りおき下さい。(嫁取後、近所廻りをする時の挨拶)

とある。(「島郷生活語における形容詞——その構成と表現——」 若松高等学校郷土研究会『研究紀要』第10集 昭和35年3月)

なお、ここに補記すべきは、福岡県下の「ツカワサイ」である。いくらかの地点には、この「ツカワサイ」形があるらしい。——「ツカワサイ」と「ツカーサイ」とを弁別することなしに、これらのいずれかをつかっていることも、あるかもしれない。

中国地方の山口県下には、「ツカーサレ」「ツカサレ」「ツカサイ」「ツカサー」「ツカサン」などがある。県下の周防にはなお、「ツカーサイ」も見いだされる。県下島嶼部などには、「ツカーサル」や「ツカーサレル」などの形もおこなわれているから、当地域は概して、この古態語法の生きが比較的良好とされるかもしれない。

広島県地方は、「ツカーサイ」をよく言う。

○ハヨ キツツカーサイ。

早く来てください。

など、「〜て ツカーサイ」の「て」をおし洗めたりもしている。

○ソコー アケテ ツカーサレ。

そこを開けてください。

は、安芸北部での「ツカーサレ」例である。県下に、島嶼部でなど、「ツカサイ」も聞かれる。

広島県備後となると、音訛を示して、「ツカーサイ」が「ツカーシャー」などとなったりしている。この状況が、岡山県下につづく。

岡山県下では、全般に、「ツカーシャー」の形、またはこれに近いものがお

こなわれることが多く、北部の美作方面では、「ツカーサイ」がおこなわれている。（「ツカーサレ」もある。）美作西部での「ツカーサイ」例をあげるならば、

○ドーゾ ドーゾ。ヤツツカーサイ。

どうぞどうぞ。やってください。

などがある。このあたりでつぎのようなことも聞いた。

「ツカーサイ」をよく言う。これは「オクレー」の敬語だ。

以上山陽地方は、「ツカーサレ」ほかのもののおこなわれることが、今日なおかなりいちじるしい。

山陰地方も、山陽地方について、「ツカーサレ」ほかの分布の見るべきものがあるが、山陽ほどのいちじるしい状況は見がたい。

島根県下石見には、ことにその西南部には、「ツカーサイ」がかなり認められる。ただし、これがよいことばであったり、そうでもなかったりしている。

出雲地方ならびに隠岐では、「ツカーサレ」などがおこなわれていない。生田弥範氏や広戸惇氏の研究にもそのことが見えている。生田氏は『山陰方言雑考』（立林書店 昭和31年5月）で、

竟り出雲はゴサツシエであり広島はツカワサイであって出雲地方のみが

「つかわす」系の中国方言から除外されて居るのである。

と述べていられる。

鳥取県下となると、おおよそ全域に「ツカーサイ」が用いられている。どちらかといえば、県西部に「ツカーサイ」がよりよくおこなわれていようか。県西南部の一例は、

○マー アガリマシテ ツカーサイ。

まあ、おあがりになってください。

である。

ともあれ、中国地方は、問題の事象の一大領域として注目される。

これについて注目されるのが、四国地方である。なかでも愛媛県下・高知県

下に、「ツカーサイ」がよくおこなわれているか。

愛媛県下では、ほぼ全域に「ツカーサイ」または「ツカサイ」が見えている。県下に属する内海島嶼部でも、「ツカーサイ」をよく存している。県本土北部には「ツカーサレ」もある。県南の「ツカーサイ」例をひくならば、

○ヨンデ ツカーサイ。

読んでください。

などがある。——上例を得た喜多郡下では、この言いかたを、「ヨンド オクレヤー。」(読んでおくれな。)の言いかたの上位のものとしている。

転じて高知県下を見るならば、「ツカーサイ」または「ツカサイ」が、やはり県下一般に見わたされる。もっとも、愛媛県下のばあいと同様、このことばは、もはや老年層本位のものになっている。(いわば退潮期のことばである。)県下に、「ツカーサレ」「ツカサレ」もあり、土井八枝氏の『土佐の方言』(春陽堂 昭和10年5月)にも、

「おさきにいってつかーされ。」

「それを取ってつかされ。」

などの例が見えている。

四国東部二県下では、西部二県下でよりはすくなく「ツカーサレ」などが見いだされる状況である。

徳島県下では、南部に「ツカサレ」が見いだされ、

○マー タベテツカサレ。

まあ、たべてください。

などと言っている。まれに「ツカーサレ」もおこなわれているらしいが、今日これらは、もはや老年層(中年層では婦人)のものになっているようである。金沢治氏は『阿波言葉の辞典』(徳島県教育会 昭和35年3月)で、「ツカーサレ」を、

(山分)ー(古)ー(敬)

としていられる。山分とは、県西北一帯の山地部を言う。井上一男氏は「徳島

県方言分布」(『方言』第七卷第十号 昭和12年12月)に、

ツカーサレ 36=海部郡上木頭村(海川, 和無田)

ツカサイ 68=美馬郡口山村80=美馬郡西祖谷村(一字, 西岡)

としるしていられる。県西北地方に「ツカーサイ」もある。

香川県下では、内海島嶼部の、主として東半域に、「ツカサイ」などが見いだされるようである。(脇田順一氏『讃岐方言之研究』香川県師範学校附属小学校 昭和13年11月)

中四国に関連する近畿地方では、まず淡路島に、「ツカーサレ」「ツカサレ」「ツカーサイ」が見いだされる。このさい淡路は、四国東部によく似た状況を示す。「ツカサレ」は「中淡部」にあると、禰宜田龍昇氏は「淡路方言雑感」(『兵庫方言』4 昭和31年10月)で言われる。淡路南辺で聞き得た「ツカーサレ」例は、

○チット キテ ツカーサレ。

ちっとあそびに来てください。

などである。土地の人は、“ツカーサレということばをよくつかう。若い人はつかわぬ。”と言っていた。淡路南辺にほど近い、属島の沼島では、

○ヨッテ ツカーサレ。

お寄りください。

などと言っている。「ツカーサイ」は、淡路北辺で聞き得ている。

○ミテ ツカーサイ ユーテ, ミテ モロタ。

見てくださいと言って、見てもらった。

などとあった。

兵庫県本土部に「ツカーサイ」があるかどうか、判然としない。播磨の揖保郡などに「ツカーサイ」があるのかもしれないが、定かでない。

以上のほかの近畿地方下で、今、私が、問題の事実を見得ているのは、ただに京都府丹後においてである。——井上正一氏の『丹後網野の方言』(近畿方言学会 昭和39年3月)に、

ツカワレ、又ツカワサレ。(老人の敬語)

例、見テツカワレ。来テツカワサレ。

との記事が見られるのである。(ここには、「ツカワサレ」の古形が見られるとともに、その「サ」略の「ツカワレ」というのも見られて、興味が深い。「ツカワレ」は、「ツカハレ」に近いものとも見ることができよう。)

ほかならぬ丹後北辺に、上者のような古形の伝存が見られて、他地域には、今、——京都府北部に関しても、言うべきものが見いだされない。

以上「ツカーサレ」ほかを見た。中四国にいちじるしい分布からすれば、九州のそれは、関西のもの伝播と解してよからうか。

このさい、ものが、中国四国の両方に分布するのは、注目にあたいる。四国はしばしば中国に反立するのに、「ツカーサイ」などでは、よく彼我の一連一致を示している。——やはり、関西分布というものの力づよさも、こうして認められるわけでもあろうか。

全国的に見て、「ツカーサレ」ほかのものは、まったく関西流の事象と判断される。(中部地方以東に関しては、なんら言うべきものがない。) 関西語法であって、しかも近畿地方での「ツカサレ」などの分布がほとんど見られないのは、どうしてであろうか。中四国にいちじるしいものがあるのから、ひるがえって考えれば、もともと近畿地方にも、かなりおこなわれていただろうことが考えられる。それがこうも見えなくなっているのは、近畿での他の言いかたとの勢力関係によることではないか。中四国は、近畿中心に栄えたものの余勢を保っているように見うけられる。

近畿中心に栄えたものが、東の中部地方へは、——北陸地方にも、さらにおよんでいないらしいのが、まことに注目にあたいる。いったいに近畿のものは、西方に、より伝播しやすかったように、私は種々のことがらで見うけているが、このさいもまた、そういう事態の一例を見うる思いがする。

## 2 カーサイ

「ツカーサイ」の、「ツ」略になる「カーサイ」がある。ただしこれは、ごくわずかの地点に、特殊的に見えるのにとどまっている。瀬戸内海の一島——岡山県本土東南隅日生町の沖あいの島——大多府島に、「カーサエイ」（下さい）があるという。鳥取県因幡の八頭郡では、私自身、「ツカーサイ」の意味の「カーサイ」を聞き得ている。子どもことばとのことである。因幡にはなお、他郡下にも「カーサイ」がおこなわれているらしい。

「ツカーサイ」を、子どもたちが、しぜんに「カーサイ」と発言したりすることは、「ツカーサイ」のある方言でなら、おこってもふしぎではないことに思われる。

## 3 ツカハレ・ツカハイほか

これらは、さきの「ツカーサレ・ツカーサイほか」のものに、直接に対応するものである。さきにもふれたように、「ツカハレ」などのほうでは、「ツカーハレ」などと長呼することの、あまりないのが注目される。

「ツカハレ・ツカハイ」ほかの分布は、「ツカーサレ・ツカーサイ」ほかの分布と見あわせるのに、以下で明らかにするような相違がある。（——「ツカハレ」などの分布のほうが、より特殊的であり、より劣勢である。）

九州福岡県下では、北九州市若松方面に「ツカハレ」がある。（「ツカサイ」と共存している。）

中国地方、山口県下では、周防大島に、「ツカハレ」が認められ、県下の他地域には、これが見られない。原安雄氏の『周防大島方言集』には、

ツカハレ　ツカエとツカンセの間、対等者に使ふ。

とある。山田正紀氏の「瀬戸内海島嶼方言資料」（『方言』第二巻第六号 昭和7年6月）には、周防大島の「ツカハン」も指摘されている。——「〜ハイ」の言いかたの「〜ハン」になったものも、あって当然に思われる。さて山口

県下には、別に、「ツカール」の形のもので、かなり広く分布しているらしい。(——山口県立山口高等女学校国語研究部『山口県方言調査』山口県立山口高等女学校校友会 昭和7年3月)「ツカハレ」→「ツカール」の変化は、もっともしぜんな成りゆきであろう。

中国地方の他県下では、つぎの三地に、私は今、問題の事象を見いだしているのにとどまる。広島県備後の鞆港では、老人がまれに「ツカールハイ」と言っているという。“とびぎり上等”のことばであるという。——このさい、「ツカール」と長呼の見えるのが注目される。岡山県北の作州内に、「ツカハイ」がある。作州東北隅では、「ツカハレ」のつづまった「ツカレ」が聞かれるという。

○マツツカレ ヨー。

まってくださいよ。

は、神部宏泰氏のとらえられた一例である。鳥取県、「米子言葉」には、「ツカールハイ」があるという。(生田弥範氏『因伯方言考』就将尋常小学校 昭和12年2月)

転じては四国に、問題事象の分布があり、これもまた、このさいは、以下のような分布の特色を見せている。

まず高知県下に、「ツカール」がある。県下にこれのおこなわれることは、さかんなようである。土井八枝氏の『土佐の方言』には、

私の話をちゅくと聞いてつかーれ。

のような例が見える。動詞「ツカール」があつて、諸活用形が見られる中に、特定謙讓表現法をかもす「ツカール」が見られるしだいである。土井氏は、「先にいちゅってつかーれ。」(行て居て下さい)を、「同等及目下に使ふ句」としていられる。氏はまた「ツカール」を、「つかーされの略」としていられる。土佐の「ツカール」に関しては、土居重俊氏その他のかたにも記述がある。

徳島県下に、なかんずく「ツカハレ」がさかんである。動詞「ツカハル」がよくおこなわれており、したがって「ツカハレ」命令形の使用もまた、いちじるしいしだいである。——人々は、「ツカハル」ことばの頻用の中にあつて、

しぜんのうちに、「ツカハル」は謙譲法ではないかなどと言っている。すなわち、用語者たちの心理は、すくなくとも「ツカハレ」などには、おのずから、特定謙譲表現法のはたらきを見ているのである。県下全域に「ツカハレ」がさかんであり、これとともに、略形の「ツカイ」その他も、かなりさかんに用いられている。（男性と女性とでは、女性がこの種のをよりよくつかっている。）県下諸地方の例をあげるなら、つぎのようなものがある。

○オヤスミナシテ ツカハレ。

おやすみなさってください。

は、小松島で聞きとめた一例である。

○ヨンデ ツカハレ。

読んでください。

○マタ オイデテ ツカハレ ナ。

またいらしてくださいね。

は、県南部の例である。

○この手紙を ヨンデ ツカハレ。

この手紙を読んでください。

は、鳴門市の一例である。

香川県本土部には、「ツカハレ」の見るべきものがない。県下島嶼部の東半域のうちには、なにほどかの「ツカハレ」があるらしい。

そのことに関連するか、淡路島にまた、「ツカハレ」が見いだされる。北部の一例は、

○タベテ ツカハレ。

たべてください。

である。島内に、「ツカーハレ」もおこなわれており、

○チット オイデテ ツカーハレ。

すこしいらしてください。

などとある。

近畿地方域では、今の「ツカハレ・ツカハイほか」のばあいも、淡路その他にわずかに分布を見せることが、ほぼ「ツカーサレ・ツカーサイ」のばあいと同様である。淡路については、播州西部内に「ツカハレ」が見いだされる。(佐伯隆治氏『播州赤穂方言集』自家版 昭和26年4月)

井上正一氏の『丹後網野の方言』には、

ツカハレは老人の敬語であって、座布団ヲアテテツカハレ・食ベテミテツカハレのように用いる。こんなことばを用いる老人も年々少なくなってゆく、もうあと十年も先では廃語になるだろう。

と見える。

以上の、「ツカハレ・ツカハイほか」の分布の全体をかえりみるのに、とくに「ツカハレ」系では、徳島県下が目される。本県下は、近畿系の方言状態を示すこともいちじるしい土地がらであるが、このさいは、ひとり「ツカハレ」のつよい勢力を見せて、近畿の傾向とはほとんど無関係である。ただ淡路は、いわゆる阿波路でもあるためか、徳島県下とともに、「ツカハレ」ないし「ツカーハレ」の、かなりつよいおこなわれかたを見せている。

こういう点では、「ツカハレ」などの言いかたは、中国的というよりも、むしろ四国近畿的とも言いうるものかに思えるが、さて近畿の全般に、今、「ツカハレ」などの見いだされることはごくまれであり、「ツカハレ」などの分布の意味するものの、けっして単純ではないことが思われる。

#### 4 カハレ

「ツカハレ」に対する「カハレ」がある。

これは、ひとり徳島県下に見いだされる。「トッテ ツカハレ」などの言いかたが、むぞうさにおこなわれる時は、しぜんに、「トッテ カハレ」などともなるのであろう。

#### 5 ツカイほか

「遣はされい」の古語法、それは、「遣はず」ことを尊敬して言うものであったが、これからできた「ツカーサレ」は、特定謙譲表現法に役だてられるとともに、しだいに、その語態を変化せしめていった。——それは謙譲表現用の言いかたとして、特定の用いられることに関連することの深い変化だったと思われる。

やがて、変形も「ツカイ」とまでなってくると、これにはもはや、他の活用形は見られず、もっぱら「ツカイ」が、謙譲表現用のことばとして存立することになった。「ツカイ」には、謙譲の意識しかないはずである。

（「ツカサイ」「ツカハイ」では、他の活用形も見られたのに、「ツカイ」では、ひとえに、この特定命令形とも言うべきものが存立するだけである。「サ」または「ハ」の一音節が落ちただけなのに、結果はこうである。このような「ツカイ」形に持っていったところに、もともとの「ツカーサレ」を謙譲意識でつかってきた心理の流れが明らかであろう。「ツカーサレ」は、「ツカイ」に行くべき運命を持っていたものとも言える。）

通俗の解釈を持ちだすならば、「ツカイ」は、「チョーダイ」に相当するものと言うことができよう。——「チョーダイ」もまた、この一態のみで存立するものである。「ツカイ」や「チョーダイ」は、いまや、慣用謙譲表現法をなすものとも言える。

「……………て ツカイ。」との言いかたが、「ツカイ」の、つねの言いかたである。ここには、二動詞連合の特定表現法があるとも言える。その連合の密度の濃さから言えば、「ツカイ」は、従属的地位にある第二動詞とも見られる。このようなことは、「ツカイ」の、謙譲表現法の役わりを、ますます明確・顕著なものにしてきたであろう。

「ツカイ」ほかのものは、主として中国四国に分布する。

中国、山口県下には、「ツカイ」「ツカエ」が見られる。防府市の待遇表現には、

○トコー ヒイテ ツカン。

寝床をひいておくれよ。(中男→中女)

の言いかたがあるという。この実例を教示された河野頼人氏は、

「下さい」といった心持であるが、ごく無雑作に発しられる。親しみがあ  
る。

と述べていられる。さて、この「ツカン」は、「ツカイ」の変じて成ったもの  
か、「ツカンセ」(「ツカーサイマセ」系のことば)などの言いかたの下略に成  
ったものか。

広島県下にも、「ツカイ」がよくおこなわれている。備後と安芸とでは、安  
芸に、「ツカイ」のよりさかんなものがあるか。安芸弁の「ツカイ」例は、

○イッ ツカイ。

行っておくれ(ください)。

○チョット マッテ ツカイ。

ちょっとまってください。(老女→藤原)

などである。備後弁では、なまって、

○エー モン ツキヤー。

いいもの(菓子)をちょうだい。

のような言いかたをする。安芸東南部にも、ここが備後に近いからか、「ツ  
ケー」(つかい)に近い言いかたが聞かれたりもする。広島県下では、「行きな  
さい」などの、「ナサイ」を簡略にした「ナイ」があり、「行きナイ」「来ナイ」  
などの言いかたがよくなされているが、「ツカイ」は、まさにその「ナイ」と  
用語気分を等しくしている。

岡山県下では、広島県下でほどには「ツカイ」が見いだされないようである。  
県下、内海、備中島嶼での一例は、

○タベテ ツカイ。

たべてください(ちょうだい)。

である。県下北部、作州には、「ツカイ」が比較的見いだされやすいようであ  
る。

岡山県下に隣って、北がわの鳥取県下に「ツカイ」がある。伯耆にも、因幡にも、「ツカイ」が見いだされる。（しかし、西の出雲にはこれが見えない。）鳥取市内の「ツカイ」例は、

○キテ ツカイ ナ。

来てくださいな。

などである。鳥取県下に、訛形の「ツケァー」などもあるらしい。

以上の中国分布に対応して、四国の、愛媛・徳島・香川三県下の分布がある——このさい、高知県下には分布が見られないのが注目される。

愛媛県下には、主として内海などに、「ツカイ」のいくらかが見られる。東隣の香川県下には、「ツカイ」のややいちじるしいものが見られる。脇田順一氏の『讃岐方言之研究』には、

読ンデツカイナ 綾の一部（仲多度に隣接の町村）丸・仲・三の一部。  
とある。

徳島県下になかはずく、「ツカイ」がよくおこなわれていようか。土地の昔話の語りの中にも「ツカイ」が出てくる。

四国を出はなれると、淡路には「ツカイ」が見られ、播州西部にも、「ちょっと貸してツカイ ヲ。」などの言いかたが聞かれるらしいが、より東の地域となると、もはや「ツカイ」を常用する生活がうかがわれぬ。ただ、東北の地方に、いくらかの「ツカイ」があるのか。宮城県下の人の書いてくれたものに、「ツカィン・ケラィン」というのが見える。

九州には、「ツカイ」は見られない。近畿以東にも、まずこれがない。（東北の問題はしばらく保留する。）謙譲表現用の特定語とも言うべきものになった「ツカイ」は、「ツカサイ」ほかなどのばあいとはことかわって、このように分布の特色を見せている。どうしてこのような残存状的な分布のさまになったのか。

いずれにしても、中国・四国が問題の地域であることは明らかである。

## 6 カイ

「ツカハレ」から「カハレ」ができたように、「ツカイ」からも「カイ」が  
できている。「……………て ツカハレ (ツカイ)」というように、「て」のもとに  
「ツ」がくるばあい、この「ツ」は落ちやすくもあったか。

とはいいながら、「カイ」の分布することは、ごくわずかである。岡山県下、  
作州には、

カイ (下さい)

があるという。つぎに、金沢治氏の『阿波言葉の辞典』にも、

カイ〔動〕下さい 「カ」に同じ 十円の飴カイ〔十円の飴を下さい〕  
との記事が見える。

## 7 ツカ

中国地方の山口県内や広島県内に、「ツカー」がある。安芸北部では、

○アケッ ツカー ヤー。

あけてちょうだいよ。

などと言っている。——備後では、「ツキヤー」が聞かれる。鳥取県伯耆西南  
部でも、私は、旅中、「ツカー」を聞いた。

これら、中国地方の「ツカー」「ツキヤー」は、「ツカイ」からのものであろ  
う。

ところで、四国にもまた、「ツカー」「ツカ」のかなりいちじるしいものがあ  
って、注目をひく。しかも、この四国がわのは、中国のとは別成因のものかも  
しれないと思われるのである。まず実情を見よう。

愛媛県下、東予地方では、「ツカー」のおこなわれることがさかんである。  
例は、

○アソビニ キテ ツカー。

あそびに来てちょうだい。

などである。東予につづいての香川県下にもまた、主としてその西半部に、「ツカー」のさかんなものが見られる。

○コレ ツカー。

などと言っている。丸亀市などには、「ツカ」の使用のさかんなものがあるらしい。丸亀出身の堀芳夫氏は、

“一銭ガン飴ツカ”私達は「下さい」の意は専ら「ツカ」一点張りであったが、坂出方面の子供が「イタ」を用いているのを耳にした。

と報じてくれた。

徳島県下の広くにも、「ツカ」がおこなわれている。鳴門の一例は、

○コレ ヨンデ ツカー。

これ読んでちょうだい。

であり、県南東岸での一例は、

○オバサン、コレ ツカ ヨー。

おばさん、これおくれ（ください）ね。

である。おばあさんが、子どもになど、「何々して ツカ。」と言えば、まさにぴったりの「ツカ」であるという。

四国三県下の「ツカ」は、経験してみると、まさに同系のもののように思われる。気を張らないで、——「どうどうして 下さい」とまでいいねいに言うのではなくて、ちょっとたのむ時、「ツカー」が気やすくつかわれる。それは、「ツカ」の形にもなること、上例中に見られるとおりでである。こういう四国の「ツカー」は、たとえば広島県下の「ツカー」などとは同一視することのできないもののように、私には思われる。中国のものは、「ツカイ」系のものとされるのであるが、四国の「ツカー」は、「ツカイ」そのものは思わせないもののように解されるのである。元来、また、四国地方は、[ai]連母音を同化させない所である。四国では、中国でのような「ツカイ」>「ツカー」の音変化は考えにくい。思うに、四国の「ツカー」は、「ツカハレ(イ)」などの、なんらかの省略形ではないか。(あるいは、こう考えられるのかもしれない。「ツカイ」)

の「イ」を単純に落として、人は「ツカ」と言うようになった、と。「ツカー」は、その「ツカ」の「ツカー」であろう。)——なににしても、中国と四国とでの「ツカー」の表現気質差は、大きいように思われる。

ここには、「ツカ」に関して、前項事象までは同色であった中国・四国の、たがいに分立する点が注目される。上来、問題の広域として一括されてきた中国・四国にも、やはり、双方の基質差があるのだと解釈される。

四国に同調することの、上来、つよかった淡路には、また全域に「ツカ」また「ツカー」が見いだされる。北部での「ツカ」例は、

○風呂へ ハイッテ ツカ ヨ。

風呂へはいってくださいな。

○サー アガッテ オクレ。サー アガッテ ツカ。マー タベテ…………。

さあ、たべてください。さあ、たべておくれな。まあ、たべて…………。などである。(“かるい時に「ツカー」と言う。”)

播州西南部にも、「ツカー」があるらしい。『播州赤穂方言集』その他に、そのことがうかがわれる。竜野市にも、「ツカー」があるという。

この「ツカ」のばあいもまた、これより東の地域となると、問題事象の見べきものがない。以上の、「ツカ」の生存の特殊状況は、人々の関心をひくいたらう。

## 8 カ

「ツカ」から、「ツ」の落ちた「カ」ができています。こうなると、これが、特定謙讓表現用の、まったくの特定詞であることは、じつに明らかなることとなる。(考えてみれば、「ツカイ」が、「カ」とまで変形せしめられたことは、異常とも言える変形のさせられかたである。が、そこに、特定謙讓表現法心理の、大きなはたらきがあるとしなくてはならない。その心理ゆえに、形はこのようにも変移せしめられているのである。ふりかえって考えればまた、「ツカイ」なども、まさに、「カ」のような、きょくたんな省略形を後裔に持つことを運

命づけられた特定表現形だったのである。）

「カ」は、伊予東部と阿波と播磨とに分布している。東予では、「何々してッカー。」などと、子どもたちがよく言っている。——今日のははや、子どもたちがよく言っていた、とするすほうが、適切かもしれない。ともかくここに、「てッカー」の言いかたが注目される。

阿波ことばでは、

「コレカ」「コレカー」〔これを下さい〕

のような言いかたがおこなわれているという。（金沢治氏『阿波言葉の辞典』）やはり、子どもたち本位のことばのようである。「カー」は、徳島県下に広く見いだされる。

兵庫県下では、淡路島に「カ」が見られず、赤穂市方面ないし播磨西南部域に、「何々してッカー（てッカ）」が見られる。（『播州赤穂方言集』 中谷竹藏氏『赤穂言葉の研究』＜赤穂高等女学校校友会 昭和7年4月＞など）四国がわと播磨がわとが、あい対して「てッカー」を見せているのは、興味ぶかいことである。

## 9 ツカサイマセほか

「ツカサイ」に「マセ」を加えた「ツカサイマセ」形は、いうまでもなく、もっともていねいな特定謙譲表現法を形成する。

上の、1から8までは、「つかわされい」の流れに棹さず諸形であったが、以下には、「+マセ」形式の「ツカサイマセ」など以下の一連のものが、順次、注目される。

まず「ツカサイマセ」では、福岡県筑前の「ツカーサイマッセ」がとりあげられる。

山口県下に、問題事象が多い。一つに、「ツカサリマセ」が見られる。長門北部の例は、

○アナタガ オハナシ シテ ツカサリマセ。

あなたがお話ししてくださいませ。

などである。周防には、「ツカーサリマセ」が見いだされる。県下にまた、「ツカサレマセ」「ツカーサレマセ」もある。いったいには、「ツカサリマセ」などよりも、「ツカサレマセ」などのほうが、鄭重味を多く有しているかもしれない。

広島県下では、広島市方面の、「ツカーサイマセ」が注意される。

岡山県北部作州に、「ツカーサリマセ」がある。

中国地方では、以上の分布が見られ、転じて四国の土佐に、問題事象の色濃いものが見られる。——中国・四国でのこの種の分布要素は、注目にあたいしよう。すぐには、こういう分布状況の理由を、説明することができないけれども、だいたいこれが、ものの、はなはだしい残存的な分布状況であることは、想察にかたくない。

土佐の「ツカサイマセ」は、女性が主としてつかう、などと言われてもいる。老年層に「ツカサイマセ」がことによく生きているらしい。室戸岬方面の一例は、

○ミテ ツカサイマセ。

見てくださいませ。

である。県下に、「ミテ ツカサイマセセンロカ。」など、「ツカサイマス」関係の命令形以外のものもおこなわれているが、今、私どもが、とくに命令形を問題にすることは言うまでもない。土佐西部の一例は、

○ヨンデ ツカサイマセ。

読んでくださいませ。

である。

## 10 ツカハイマセほか

鳥取県西南部、伯耆日野郡下で、私は、「ツカハイマセ」をかつて聞いた。

○マーチャン、アタッテ ツカハイマセ。

まあちゃん、おこたにあたってくださいませ。

などと言っている。この例は、年長の婦人が、中学三年女に言ったことばだけでも、表現は、このように鄭重をきわめている。

転じて、四国、徳島県下に、「ツカハリマセ」がある。（「ツカハリマシタ」などとも言っているけれども。）

## 11 ツカーマセ

○ユーニ シテ ツカーマセ。

ゆっくりしてくださいませ。

広島県西南辺で、こういうことばが聞かれる。

## 12 ツカサンセほか

山口県下に、「ツカサンセ」の言いかたがある。「ツカーサンセ」もある。県下に、「ツカサン」も見いだされる。これは、「ツカサンセ」の「セ」略に成るものか。山田正紀氏の「瀬戸内海島嶼方言資料」（『方言』第二巻第六号 昭和7年6月）には、向島の「ツカサン」が出ている。

周防および広島県下に、「ツカーサンへ」が見いだされる。広島市域では、「ツカーサンへー」とも言いならわしている。安芸西南部に、「ツカンサンセー」があるかもしれないが、定かではない。

島根県石見のうちには、「ツカサンセ」が見いだされる。

鳥取県下では、東西に、「ツカーサンセ」が聞かれる。県下西南部の一例は、

○センセー、マー コレ ツマンデ ツカーサンセ。

先生、まあこれをつまんでくださいませ。（菓子のもてなし）

である。岡山県下では、備中の真鍋島などに、「ツカサンセ」が聞かれる。

転じて、四国内には、「ツカサンセ」などが見いだされない。ただ、愛媛県南部には、「ツカーサンセ」があるかもしれないが、定かでない。

## 13 ツカサッセほか

福岡県下、「嘉穂、糸島には『ツカサッセー』がある。」という。(加来敬一氏「福岡県方言の語法」『北九州国文』第五号) 県下に、「ツカーサッセー」もあり、かつ「ツカザッセ(シエ)」「ツカーザッセ(シエ)」「ツカーザシタ」「ツカーザスナ」などの言いかたもしている。)もある。博多湾西の糸島半島内の例では、

○ツカーザッ<sup>シエ</sup>ー ヤー。

くださいませな。

などがある。

この種の言いかたは、他地方には認められない。(「サッセ」を「ザッセ」としていることは、「ナサイマス」系の「ナサス」を、「ナザス」としているのに等しい。こういう点での濁音化は、福岡県下の特徴事象である。)

## 14 ツカサイセ

島根県出雲の山村に、「ツカサイセ」の言いかたがある。

○マー マタ ヨッテ ツカサイシエ。

まあ、また寄ってくださいませ。

などと言っている。他地でもあるかもしれないが、今のところ、私は、出雲の事例を知るのみである。

## 15 ツカサーセー

土井八枝氏の『土佐の方言』に、

「ごめんつかさーせえ。」(御免下さいませ)

などの言いかたが見える。

宮地美彦氏の『土佐方言集』(富山房 昭和12年10月)にも、  
つかさーせえ つかされませノ訛。前出つかーされ=同ジ。

「御免つかさ<sup>○</sup>さ<sup>○</sup>せえ<sup>○</sup>」

などとある。

## 16 ツカハンセほか

まず、山口県下に「ツカハンセ」があり、「ツカハンへ」の形も見える。ともに、文表現では、「セー」「へー」と長呼されることが多い。いずれにしても、土地の人はこの言いかたを、かるい敬意がこもっているとも、わずかにかたくるしさもあるとも思ったりしているようである。山口県下の周防大島には、「ツカハン」もあるという。（山田正紀氏「瀬戸内海島嶼方言資料」）「ツカハン」はおそらく、「ツカハンセ」の「セ」略に成るものであろう。（「ツカン」が、「ツカンセ」の「セ」略に成るものと考えられるのにおなじである。）

広島県下安芸方面にも、いくらかの「ツカハンセ(へ)」がある。

山陰では、鳥取県下の伯耆に、「ツカハンセー」の形が見いだされる。

高知県西南部の、いわゆる幡多方言には、「ツカワンセー」が見いだされるという。（浜田数義氏「幡多方言における敬卑表現」『高知県立中村高等学校研究論集』第一号 昭和31年1月）「ツカワンセー」は、「ツカハンセー」に近いものではなからうか。——「ツカワンセー」が、「ツカンセー」とともにおこなわれていると言われている点からすれば、すくなくとも現実の用法のうえでは、「ツカワンセー」は「ツカハンセー」に該当するか、と考えられる。（あるいは、「ツカワサンセ」の言いかたがここにあって、それから「ツカワンセ」ができるようなことがあったか。）

「ツカハンセ」に類似・該当するものに、なおひとつ「ツカアンセ」がある。『全国方言資料』第5巻（中国・四国編 昭和42年1月）「山口県美弥郡秋芳町別府江原」に、

*m* マタ カシテ ツカアンセヤ

また 借して 下さいよ。

とある。また、浜田数義氏の『大方町方言集』（高知県立 中村高等学校 大方分校 昭和29年1月）にも、

つかんせ（句）→つかあんせー 下さい。

というのが見えている。（ここに「ツカアンセ」のあることからすれば、上の「ツカワンセ」も、「ツカアンセ」に近いものであろうかと思われる。）

## 17 ツカンセ

「ツカサンセ」など・「ツカハンセ」などからは、「ツカンセ」が出てきやすかったであろう。

山口県下で、やはり「ツカンセ」が見いだされる。山口県下につづいて、東の広島県安芸西部にも「ツカンセ」があり、「ツカンヘー」などとも言われている。（「ヨー キ（来て） ツカンシタ。」などと言っている。）

「ツカンセ」の、わけてもよくおこなわれているのは、鳥取県下である。どちらかといえば、県東、因幡にこれが、よりよくおこなわれていようか。鳥取市内での「ツカンセ」例は、

○マタ キテ ツカンセ。

また来てください。

○どうどうシテ ツカンセー。

どうどうしてください。

などである。因幡南部の山村での「ツカンセ」例は、

○オンデナサンシテ ツカンセ。

おいでなさってください。

などである。伯耆は、おもに東伯に、「ツカンセ(シェー)」が見られるらしい。

転じて四国の土佐に、「ツカンセー」の見いだされるのが注目される。「どうどうしてツカンセ。」とも言っている。

## 18 ツカッセ

この促音を持った独特の言いかたは、福岡県下に見いだされるものである。  
（——当地方は、このような特殊性を見せる所がらのようである。）

福岡県下とはいっても、「ツカッセ」は、おもに筑前東部内に見いだされる。  
旧若松市域では、

○ミテ ツカッセー。ヨゴレテ ヨゴレテ。

見てください。よごれてよごれて。

などと言っているという。（岡野信子氏の調査による。）「ツカッセ」を、「読んで ツカッセー。」などと長呼しているところもある。

### 19 ツカーセ

土佐ことばに、「ツカーセ」が見いだされる。土居重俊氏の『土佐言葉』（高知市立市民図書館 昭和33年9月）には、

オサキニ イテ ツカーセ（お先に行ってください）

とある。

岡山弁などの「ツカーセー」「ツカーシャー」は、「ツカーサイ」の音訛に成ったものにはかならない。区別すべきである。

## 第三節 ヤリナサイ類

### 一 はじめに

特定謙譲表現法の一つとすべきものに、「どうどうして ヤリナサイ。」類の表現法がある。

「ヤリナサイ」は、「ヤル+ナサイ」であるから、相手に対してこれを言えば、「ヤリナサル」の言いかたに明らかなおおりに、本来は尊敬表現法のはずである。ところが、「ヤリナサル」の「ヤリナサイ」を、相手に向かって言いはしても、相手の、当方への行動を言うものである時は、結果を受けるのが当方自

身なので、「ヤリナサイ」は、けっきょく当方の発意による謙譲表現法になる。当方・自分のことに、「ヤル」ということばをつかうのが、すでに謙譲表現法になっている。その「ヤル」へ、「ナサイ」あるいは「ンサイ」、あるいは「ナハイ」あるいは「ナイ」などをつけて、相手の、当方に「ヤル」動作を尊敬するとなれば、結果は、ますます当方の謙遜の姿勢と心情とを表現することになるはずである。今日、たとえば伊予南部で、「どうどうして ヤンナハイ（やりなさい）」と、人々がしきりに言っているのを聞くにつけても、この「ヤリナサイ」式の言いかたの、確乎とした謙譲表現法であることが、ただちに理解される。「ヤンナハイ」を言う人たちの、その表現行動は、じつに謙遜そのものである。伊予南部にはかぎらない。「ヤリナサイ」式の言いかたの慣用されている地方では、人々だれしも、この表現法に「謙譲」を意識していよう。「ヤリナサイ」式の言いかたが、「ヤンナイ（やりナイ）」ともなれば、この「ナイ」は、方言上、「ナイ」命令形一形のみで存立する助動詞ともなっているのので、「ヤンナイ」の、謙譲表現法にはたらく特定さが、ことに明瞭である。「どうどうして ヤンナイ。」は、「どうどうして チョウダイ。」に相当したりすることが多かろう。

私は上に、「ヤル」動詞について述べるところがあった。これには、若干のことわりをつけそえなくてはならない。「ヤル」は本来、上位者から下位者にものをわたすことを言うのにかぎってつかわれた動詞ではあるまい。方言上では、以下のように、「ヤル」動詞のはばびろい使用が見られる。

長崎県五島で経験したことであるが、若い母おやがその子の幼女に、「眼鏡のおじさん（藤原のこと）にも、キャラメルをやりなさい。」と言っていた。また、共通語意識も持った他の中年女性は、

○マイットキ スルト テガミバ ダンテ ヤリマス。

もういっときすると、あなたの手紙を出してあげます。

と言った。これは、切手のはってない手紙を持って、郵便局の業務開始時刻をまっている私を、助けてくれたの発言であった。人々は、“目上にも「ヤル」を

つかう。”と言っている。「先生にオシエテヤル。」とも言っている。もっとも、人によれば、目下から目上へは「アグッ」を用いる、としている。

熊本県下南部でも、

○コレ アンタニ ヤリモソ<sup>↑</sup>ー カ。

これをあんたにあげましょうか。

などと言っているという。岡野信子氏は、熊本県出身の男教師が、「あげます」の意味で「ヤリマス」と言うのを、しじゅう、奇異に感じたよしであるが、やがて氏自身、北九州市内でも、見下げでの言いかたではない「ヤル」を、子どもたちがつかっているのを発見していられる。

私が、高知県下の、高知市西方の浦の内湾岸に、調査に行った時のことである。初老の一男子は、その息女に、

○コンバンワ センセニ、シッチョー コト ユーテ ヤッテ。

今晚は先生に、おまえさんの知ってることを言ってあげて。

と言った。私は、その場でこれを聞きながら、この「ヤッテ」が、見下げことばの「ヤッテ」ではないように思われたのである。のち、この地域の諸所で、目上用にも「ヤッテ」をよくつかうのを聞くことができた。

新潟県下のことであるが、共通語の「アゲル」とひとしなみに「ヤル」をつかうのを、私もいくどか経験してきた。私の知人の某氏も、“これを先生に持って行ってヤリなさい。”などとその子息に言う。

山梨県下西南部でも、私は、「ヤル」がつぎのようにつかわれるのを聞いた。

○ミンナ ヤッテモ イーダケンド。

みんなあげてもいいんだけど。

これは、泊めてもらった宿の老女が、私に、親切に言ってくれたことばであった。

関東、栃木県下の一例は、

○センセニ ヤリナ。

先生におあげ。

である。中年女性の言であった。河内郡私立教育会編『河内郡方言集 完』

<栃木県> (福田安吉 明治36年12月) には、

やんべー 差上マシヨウノ意

とある。関東地方になお、見下げて言う「ヤル」ではない「ヤル」ことばを聞くことができよう。『万葉集』巻第十四，三三六三，相模国歌には、

吾が夫を 大和へ遣りて まつしたす 足柄山の 杉の木の本  
 和我世古乎 夜麻登敵夜利氏 麻都之太須 安思我良夜麻乃 須疑乃本能  
 問か  
 末可

と見える。これは、人を行かせるばあいの「ヤル」ではあるけれども、やはり、今日の、相手を低めにとりあつかって言う「ヤル」(「つかいにヤル」など)とはちがっている。「ヤル」という動詞に、古今の用法差の見られることは明らかであろう。

東北、福島県下の白河駅でのことである。二十七・八歳の婦人が、新高校生ら三人兄妹に、

○アトデ オグッテ ヤッカラ ネ。

あとで送ってあげるからね。

とおお声でよびかけた。その時の情景、あるいは双方の表情のむすびぐあいは、どう見ても、見下げての「ヤル」というのではなくて、「アゲル」を思わせるものであった。

以上、西東に、方言上の「ヤル」の、はばびろいつかいかたを見ることができた。「ヤル」が本来、今日の共通語に見られるような「ヤル」ととどまるものでないことは、明らかであろう。

そのような「ヤル」に、「ナサイ」系のことばがつけられて(あるいはまた、共通語なみの「ヤル」に「ナサイ」系のことばがつけられて)、「ヤリナサイ」式の言いかたが形成された。相手のたちばに立って「ヤル」と言い(このさい、受け手は自分である。)、その動作に「ナサイ」系のことばをつけて、敬意をあらわす。その敬意表現は、「ヤル」行為の受け手が自分であるだけに、けっきょく、自己を低める表現になる。つまり、尊敬表現の言いかたが謙讓表現法に

なるのである。

## 二 ヤリナサイ類の分布と生態

九州地方では、ぬきんでて福岡県下が、問題事象をよく示す。

九州の他県下では、鹿児島県下の、

*m*ミキレバツカイ ヤックイヤン

三切れほど 下さい。

などの言いかたが注目される。（『全国方言資料』第6巻 「鹿児島県肝属郡高山町麓」）宮崎西南部にも、関連して「ヤックイヤン」が見いだされる。

熊本県下は、ややいちじるしく「ヤンナイ」（やりナイ）を示して注目される。「ヤンナイ」とともに、「ヤンナハリ」もそうとうにおこなわれている。「ヤンナハイ」もある。熊本市内で聞かれる、

○ウチー キテ ヤル カ(ヤ)。

○ウチー キテ ヤイ ヤ。

うちへ来てくれるか。

も、今、問題の事象としてとりあげられる。

長崎県島原半島にも、熊本県下のつづぎで、「ヤンナハリ」などが見いだされるらしい。長崎県西彼杵半島では、「ヤンナッセ」（やりナッセ）などと言っている。五島では、

○オレンモ ヤレー。

私にもちょうだい。

のような言いかたを聞き得ている。（土地人はこれについて、“ヤレは命令的で普通はクレレと言います。”と教えてくれた。）『全国方言資料』第9巻（へき地・離島編 III 九州 昭和42年5月）の「長崎県壱岐郡郷ノ浦町里触」には、

*f*マタ テノ イルトキャ イツデム ユーチ オヤリ

また 手が いるときには いつでも 言って ください。

と見える。対島にも、似たような「ヤル」の用法があるらしい。

さて福岡県下では、全般に「ヤンナイ（やりナイ）」がさかんである。「して下さい」は「シチャンナイ」と言う。博多湾西の糸島半島での「ヤンナイ」の一例は、つぎのとおりである。

○オカーサン ゼン ヤンナイ ヤー。

お母さん、ぜにをちょうだいよ。

「ヤンナイ」については、「ヤンシャイ（やりンシャイ）」もそうとうにおこなわれている。「読んでちょうだい」は、「読んで ヤンシャイ」, 「して下さい」は、「シチャンシャイ」である。「ヤンナッセー（やりナッセ）」などの言いかたもある。以上の諸事象は、福岡県下も、どちらかといえば筑前域にさかんであろう。命令形以外の活用形もおこなわれており、中において、命令形利用の特定謙讓表現がさかんである。——終止形を利用して、「ウチー キチャル ナ。」（うちへ来てくれる？）などと言ひあらわすばあいにも、これが謙讓表現になることは言うまでもない。博多ことばの、

○ヨシツマデ キチャラデス ナ。

吉津まで来てくれませんか。

というのにしても、これで一種の謙讓表現になっている。こういう点では、当県下では、特定謙讓表現法のはばをひろげて考えることもしなくてはならない。要するに、この種の「ヤル」を用いれば、相手の、われに対する動作を、へりくだったたちばでたのむことになるから、表現はすべて謙讓表現になる。福岡市内には、「読んで オヤンナイ（おやりナイ）。」などの言いかたもあるらしい。「シチャリー（してちょうだい）。」などの言いかたもある。北九州市域内にも、

○ミンギョ トッチャリー。

人形をとってよ。（小女→小女）

などの言いかたが見いだされる。（岡野信子氏による。）

九州ではなお、大分県下に、「取って くれ。」の意で、「トッチャレ。」と云ったりしている。

中国地方で、九州福岡県下に対応して、問題の事象をよく見せる所は、山陰

島根県下——それも主として、西部の石見地方——である。出雲東部山地などにも、

○マ<sup>ー</sup> ハナシ[i]=[i] キ[kç̥i]テ ヤッテ ク[ü]ダサエマシエ。

まあ、話しに来てやっってくださいませ。

などの言いかたがありはするが、単純に「ヤンナサイ」式の言いかたを見せているのは、石見である。石見地方では、「ヤンナサイ」とともに「ヤンサイ」がおこなわれており、「ヤンナイ」がおこなわれている。

○ユ<sup>ー</sup>チャンサイ<sup>↑</sup> ナ。

言うてくださいいな。

は、浜田市での一例である。

○カワサキデ オロシチャンサイ<sup>ー</sup> フ<sup>ー</sup>。

川崎でおろしてくださいねえ。（お寺まいりからかえる老婆）

は、山間部での一例である。

福岡県下と石見との間に、つなぎの分布がなくはない。山口県下北岸の萩市に属する沖の見島では、

○ワシニ ヤレ ヤイ。

わしにくれよ。

などと言っている。（岡野信子氏の調査による。）

森田道雄氏の『山口県柳井町方言集』（橋正一発行 昭和6年5月）にも、「ヤンナイ 下さい。」が見えており、

コリョ<sup>ー</sup>、ジッセンガ、ヤンナハレ。（ツカハンヘー）

が見えている。

広島県安芸の中部以北にも、石見での問題事象のつづきがたどられる。安芸西北部では、

○ヨ<sup>ー</sup>ロシュー ユ<sup>ー</sup>テ ヤンナサレ。

よろしく言ってください。

○アシター ミチウチダケー、デテ ヤンサレ。

あしたは道なおしですから、出てください。

などと言っている。

○マー、オヒルー グーチャンサイ。

まあ、おひるをくってください。

などともある。土地の有識者は、「「ヤンサイ」ことばは石州ことば。」と言っている。ともあれここでは、「ミチャリンサラン カ(見てやりンサランカ)。」などとも言っており、「ヤル」動詞による謙讓表現がさかんである。「ヤンナイ」もおこなわれている。

○ハヨ ヒャッコッチャンナイ ヤ。

早くだれそれを、おお声でよんでくださいよ。

じつは広島県備後北部にも、「ヤンナサイ」の言いかたが、いくらか見いだされなくはない。

中国地方では、このように、山陰西部、またはそれに関連する広島県北部に、「ヤリナサイ」類の色濃く分布するのが認められ、これらの地域のほかでは、問題の事象の見べきものがない。「ヤリナサイ」類の表現法のこういう生息状況は、何をものがたるだろうか。一方、四国に、ことに愛媛県南部に、「ヤンナハイ」の言いかたの、いちじるしくおこなわれているのを勘案するのに、問題の「ヤリナサイ」類は、もともと中四国に、今よりはよくおこなわれたものかと察せられる。端的に言って、石見と南予とに同一表現法の対存する状況は、これの、かつての広域分布を考えしめる。今、思いおこされる一種の語法に、広島県下にいちじるしい「何々と思ひンサイ」という語法、鳥根県下にいちじるしい「何々と思わッシャイ」という語法、岡山県下にいちじるしい「何何と見よ」という語法がある。相手に話しかけるのに、「思いなさい」などの言いかたをむすびとするのは、「ヤリナサイ」の言いかたとあい似てはいないか。つまりここには、発想法の似た二種の表現法があると考えられる。この両者を重ねあわせて、両方の分布を通覧すれば、「ヤリナサイ」類の分布もけっして偶然ではないことが知られ、かつ、今の分布状況も、残存の態としてしか

るべきものであることが理解される。九州の「ヤリナサイ」類分布につないで、中国四国の「ヤリナサイ」類分布を見る時、問題の特定謙譲表現法が、国の西寄りのそうとう広大な地域に生息し得たことを知りうる。

さて四国、愛媛県南部の問題の事象は、「ヤンナハイ」一本の形で、南部地域にさかんである。「この手紙 ミテ ヤンナハイ ヤ（見て下さいな。）」といったような調子である。「どうどうして ヤンナハラン カ。」などの言いかたもさかんである。「ヤンナハレ」「ヤンナハラン カ」の言いかたは、南予の方言風土の人間的なあたたかさをよく表徴するものとも解される。

徳島県下で、

○ソレ チョット トッテ オヤリナシテ

それをちょっととって下さい。

などと言っているという。（金沢治氏による。）「オヤリナシテ」あるいは「オヤンナシテ」の類も、ここにあわせて注意される。徳島県下に、「ヤンナハイ」そのものの見られることはないようである。

が、香川県下には、

○コノ テガミ ヨンデ オヤンナハンセ。

などがある。

近畿地方ともなると、もはや問題の事象の言うべきものがほとんどない。

中部地方にもまた、特筆すべきものは見いだされないようである。

関東地方もまた同様のようである。

東北地方についても、「ヤリナサイ」類の明確な分布を指摘することが、今、私には困難である。ただ、「ヤル」という動詞を、「さしあげる」にも近い意で用いたりすることもありうるのからすれば、問題事象の「ヤリナサイ」類の言いかたが、できていてもよさそうに思われなくはない。しかし、そこには、地つきの発想法の問題があろう。「ヤル」の動詞をどのように保有しようとも、「やりナサイ」式の発想法をとることがなければ、事象はさらにおこりようがないはずである。

以上、「ヤリナサイ」類の分布と生態とを見てきた。一口に言えば、「ヤリナサイ」類の言いかたは、国の西方系の表現法とも、関西系の表現法とも言うことができよう。

東西の方言を経験してきた私には、今、この表現法の関西性とでも言うべきものを、からだで受けとめることができるように思われる。

近畿に問題の事象が見いだされはしないものの、こういう表現法の根源地・発想中心地といえ、やはり近畿がそうであったのではないかとも思う。近畿中心のものが以西に伝播しやすかったことは、幾多の事例がこれを証明してくれる。今の問題事象のばあいは、伝播勢力を発揮したのち、近畿はみずからのものを失って（捨てて）いったということなのか。

ことによっては、近畿地方には関係なく、地方地域が、みずからこの種の表現法を胎成せしめたこともあったろうか。発想法の地方的な繁栄の自在さは、私どものつねに予定しておかなくてはならないことである。

## 第四節 オクレ類

### 一 はじめに

「ヤリナサイ」類の形態は、たとえば「ヤリナナサイ」とあって、助動詞「ナサル」が用いられている。これに対して、今、問題とするものは、「オナクレ」といったような形態で、これは、接頭辞「オ」を用いるものである。かれとこれと、表現法形式には、大きな相違が認められる。それにしても、現実の用途のうえでは、「オクレ」類にも、「ヤリナサイ」類に似たものがあるのは、注意すべきことである。これは、原動詞「ヤル」と「クレル」とが、かなり性質の似たことばであるのによるものであろう。今日の民間の俗用では、「ヤル」と「クレル」とは、ほぼ同様の環境に存立していると思われる。

「クレル」は、相手がたが自己に物をくれることを意味する。これに「オ」

を冠したものを命令表現につかって、「オクレ」と言えば、この言いかたは、自己に物をくれる相手の動作を敬することによって、受け手、自分を下位におくところの謙譲表現法になる。「オ+クレル」の命令形は、漸次、謙譲表現法に役だつものとされてきたようである。関西地方内で、民間の「オクレー」と「ツカイ」とは、あい似たものとして、人々にわきまえられがちである。——おとなが、「オクレー」と言って、かるい謙遜心を表現しているところを、子どもたちは、「ツカイ」と言いあらわしていたりする。「ツカイ」に比肩せしめうる「オクレー」「オクレ」は、もはや、特定謙譲法要素として、認定しやすいものである。（「オ・くれる」との言いかたとともに、「オ・帰る」の言いかたもなされている。が、「オクレー」が一般化しているほどには、「オカエレー」は一般化していない。私は、旧広島市域内で、かつてはこれをしばしば耳にし得たが、今はほとんど聞くことができない。）「オ着る」などの言いかたは、どこにもできてはいないだろう。動詞に、接頭辞「オ」を冠するのは、ごく少数の動詞に限られるようである。そういう中での「オクレル」、その命令形の「オクレ」の特殊な慣用がひろがっているところに、私どもは、独自の、あまり気をおかないでものを言うばあいの、特定謙譲表現法を認めることができる。

「オクレ」がさらに形の変化を示して、「オコレ」、あるいは「オゴレ」などになったもの、また「オッケ」などになったものは、——この種の方向の諸転形は、いうまでもなく、その異形をもって、ただちに明白な特定謙譲表現法をかもす。

## 二 オクレ類の分布と生態

「オ・クレル」動詞を存する地といえば、これはおそらく、広く全国的に、その存立の可能性を考えておいたのがよからう。しかし、「オクレ」類の謙譲法形式を、日常生活の中に生かしている方言となれば、これは、かなり限られてくる。順次に各地域を見ていこう。

九州では、概括して言えば、「オクレー」表現法がさほどにさかんではない

と言える。「オクレル」の言いかたは存しても、「オクレー」の言いかたは存していない、というような所があるかもしれない。今、私の手もとには、九州も、長崎県下、福岡県下、大分県下の「オクレー」表現法例がやや多い。長崎県北部、生月島では、

○イソイデ イッテ キテ オクレ ヨー。

などと言っている。福岡県下では、豊前分に、「オクレー」の言いかたがよりさかんであるかもしれない。これにつづいてと言いうることか、大分県下に「オクレ」がさかんである。ここでは、「オクレー」とともに、「オクリー」がよくおこなわれている。

○キチョクレ。

来ておくれ。

これは、豊後での一例である。

大分県下に、「読ンデ オクレン ナ？」など、「オクレン ナ」で相手にものを問う、一種謙遜の言いかたがある。——九州も、大分県下にかぎったことではあるまい。「オクレー」の言いかたがあれば、「オクレン ナ」の言いかたもあってよいはずである。

中国地方になると、山陽道では、「オクレー」の言いかたがかなり一般的である、と見られるか。山口県下では、「オクレー ナー」「オクレー ノ」などとも言われており、また、「オクレン カナ(カノ)」などとも言われている。「オクレーイ」の言いかたも、山口県下のものである。

山口県下に限られないことであるが、「クレサンセ」などの言いかたもある。が、この種の、「オ」は用いることなくして、尊敬法助動詞をつかったものは、いましばらく問題外とする。山口県下の「オクレンサレー」は、ここにとりあげてよいものである。

広島県下島嶼部の一例は、

○テーテットクレー。

つれていってちょうだいよ。 (小男→母)

である。

広島県下のつづきで、山陰、鳥根県石見に「オクレ」が見られる。

鳥取県下にも、「オクレ」「オクレー」がある。

ところで、出雲地方には、「オクレ」そのものはあまり見られない。土地ことばの「ゴセ」「ゴシナハイ」(p.84) などがおこなわれているからであろう。

岡山県下島嶼部での一例は、

○ヨットクレ。

まあ、寄っておくれ。

である。このばあいなど、したい人が来たのに対して座をすすめるものであるから、「何々を オクレー。」(何々をちょうだいよ。) などと言うばあいの「オクレ」なみには、謙遜の気分をくみとることができまい。が、ものが本質的には謙退の表現法であることは言うまでもない。岡山県下の北部には、「オクレー」に相当する「オッケー」がある。

○オッサーン、シンブン コーテ オッケー。

おじさん、新聞を買っておくれ。

などと言っている。

四国は「オクレー」のさかんな所ではない。伊予、南寄りの地の一例は、

○ヨンド オクレ ヤー。

読んでくださいな。

である。ちなみに、この地方には「読ンデ ヤ。」(読んでよ。)の言いかたもよくおこなわれている。「読ンデ ヤ。」の言いかたは、「ヨンド オクレ ヤー。」の言いかたに、かなり近いものと解してよさそうである。

土佐は、「オクレ」を見ることがあまりない。土地ことばに、「オーセ」(p. 85)の言いかたがよくおこなわれているからであろうか。

阿波では、おもに山地部に「オクレ」があるらしい。

近畿地方は、「オクレ」をかなり見せる。四国につづいて、兵庫県下に「オクレ」が見いだされ、播磨内には「オッケー」もあるらしく、『播州赤穂方言

集』には、

コレヲ ジュッセンホド コウトツケエ

これを 十銭ほど 買って下さい

などの例が見える。本書には、「コウトツケエ」「コウテッカ」がならべ示されている。兵庫県下、但馬に、「オクレー」がさかんである。「オクレー ナ」「オクレー ヨ」「オクレー ヤ」などと言われており、「オクレンサレ」「オクレンシャー」などとも言われている。但馬北部の「オクレー ナ」は、鳥取県下では聞かれないと、鳥取県人は言う。但馬南部の「オクレー」例は、

○ナンニモ ナァーケード ヨーケ タベトクレー ヨ。

○サー、ソッチー マワッテ オクレー。

さあ、そちらへまわってください。(老女→小学校長)

などである。第二例の「オクレー」に注目したい。

大阪府下にも「オクレ」があり、「てオクレ」は、「トクレ」と言われがちでもある。南要氏編『和泉郷莊村方言』（郷莊民俗会 昭和10年1月）には、

シテオクヤ して下さいよ(女)

というのが見えている。「オクヤ」は「オクレ ヤ」に近いものか。

和歌山県下にも「オクレー」がある。「トクレ」の言いかたもできている。

三重県にまた「オクレ」があり、「オクレ ヤー」などとも言っている。三重県下には、「ウクレ」の言いかたもできているらしい。

奈良県下にも「オクレ」がある。

京都府下にも、「オクレ」「トクレ」がある。「オッケ」「オッケイ」もあるか。綾部市などでは、子どもたちが「オッケイ」と言っているらしい。丹後方面には、「オクレー ナ。(ちょうだい)の言いかたがよくおこなわれている。(「オクレナハレ」なども聞かれる。)

滋賀県下にも、「オクレ」がよくおこなわれており、「読ソドクレ。」などもある。

近畿地方とともに、中部地方がまた、「オクレ」類をよく見せている。

福井県下に（若狭・越前とも）、「どうどうして オクレ。」の言いかたがよく聞かれる。——よそいきではない、気らかな言いかたである。県下に、「オッケー」「オッケ」もある。

石川県下、加賀でも、たとえば大聖寺で、

○コレ オッケ。

“これください。”

「オッケー ー。」などと言っている。

岐阜・愛知に「オクレ」はさかんである。「～て オクレ」の「トクレ」もよく言われる。美濃に「オクレンナレ」「オクンナレ」などもあり、愛知に「オクレン」もある。「オクレン」は「オクレンサイ」などの下略に成るものか。（「オクレー」の「オクレン」になったものもあるのかどうか。）

静岡県下にまた、「オクレー」がよく聞かれる。

○コフ コオ ダマイテ オクレ。

“この子を守りしておくれ。”

は、御前崎の一例である。浜名郡などでは、「オクッサー。」（ください。）、

○コレ ヨンデ オクッサー。

これを読んでちょうだい。

などが聞かれる。「オクンナイ」もあるという。

形が特定のものになってくれば、その謙譲表現法としてのはたらきは、いっそう明確なものになってくる。

山梨県下にも「オクレ」がある。少女などが店へ物を買いに来て、「ウツクレ。」（売っておくれ。）と言っている。「オクンネー」などもあるという。

○インメー オクライ。

これは、県西南山地内の「すこしください。」であるという。（「クダイ」>「クライ」の変化もうたがえるか。）

長野県下の南北でも、「オクレ」がよく聞かれる。

○ソンナノ オブイガ、タベテ オクレ。

そんな菓子、まずいけど、たべておくれ。

○ゴハンニ クダッテ オクレ。＜アクセント失＞

ごはんにおりてください。 (主婦→二階の私ども)

は、北信の二例である。『信州上田附近方言集』には、「オンクレ」「オンクレナ」「オンクレヤ」が見える。北信に、また、「オクライ」などもある。(佐伯隆治氏「長野市及び上水内郡方言集」『方言』第四卷第十一号、福沢武一氏『信州方言風物誌 第二』)

関東地方になると、「オクレ」の使用が、中部地方のほどではなさそうである。しかし、たとえば群馬県下での、

○アガットクレー。

上がっておくれ。

など、ほどほどには、「オクレ」が、ややていねいに言うのに用いられているらしい。

栃木県下には「オコレ」がある。宇都宮市で聞いた一例は、「コレ オコレ。」(“これをください。”)である。おとなでも子どもでも「オコレ」を言うという。県下の方々に「オコレ」があつて、かつ、「オゴレ」もある。大橋勝男氏は、県北で、老年層の、

○サー、ムコー イッテ タベトゴレー。

さあ、むこうへ行ってたべてください。

などを聞いていられる。

東北地方でも、福島県東部域内には、「オゴレ」「オコレ」がおこなわれている。(「オクレ」もあるが。)山形県内でも、南部方面で、「オゴヤェ。」(ちょうだい。)などが聞かれる。(「オゴレヤレ。」か。)山形県師範学校『山形県方言集』(山形県師範学校 昭和8年1月)には、

おごえ ogoe 動詞 下さい 置賜

も見えている。(「オゴレ」に相当するものであろう。)

残る東北地方では、概して、「オクレ」の言いかたがない。

全国的に見て、「オクレ」類は、国の両傍地方にすくないと言えるか。動詞に「オ」を冠らせる習慣の成長にも、地域的な限度があったらしい。

## 第五節 シンデ

福井県下に、「下さい」の意の「ンデー」がある。「ンデ マ。」「ンデ ノ。」などとも言っている。大田栄太郎氏『福井県方言』（自家版 昭和5年5月）にも、

ウンデマ 下さいな （越前）

とある。『福井県方言集』にも、

○チアンニャテ、バンゲアッチへ、イッテキテンデマ。

小さい姉さん、夜あちらへ行って来てください。

とある。「ンデ」は何か。上の「キテンデ」を、「来てくれんデ？」ととることはどうであろうか。「ンダル」は「与える」の敬語と説く人がある。「ンデ」は「ンダル」につながるものなのかどうか。ともあれここでは、「下さい」の意の言いかたに慣熟した「ンデ」をとらえることができる。

「ンデ」は、当地方に独自のものと見られる。

## 第六節 シンカ

大阪弁その他の、近畿のことば、「どうどうしてンカ。」という、「て」のものとの「ンカ」も、今、前述の「ンデ」にならべて見ることができる。双方、形態条件が等しく、また、「してンカ」は「して 下さい（おくれ）」の意にもなるものである。

「～て 下さい」ともなる「～テンカ」は、福井県下にもあり、石川県下にもある。近畿には広くこれがあって、兵庫県下でなど、「～テカ」もある。和歌山県下や三重県下には、「～テーカー」もある。

なお、和歌山県下には、「～トンカ」「～トーカー」もあるらしく、滋賀県下にも、「～トンカ」「～トーカー」などがある。滋賀県下には、「シテ トーカー」もあるという。「トーカー」や「トンカ」は、どういう出自のものであろうか。

## 第七節 テー

形態上、前掲の諸者との関連が認められるかもしれないので、孤例事実ではあるが、ここに、つぎのものをとり立てておく。愛宕八郎康隆氏の、昭和33年、能登東北部の相川新<sup>そごうしん</sup>で調査されたものである。

○ピンセン テー。

便箋をください。 (少年→店主)

## 第八節 もらわれシマヘンカ

これも大阪弁ないし近畿弁である。「もらわれはしませんか」との発想をもって、「下さい」に近いものをあらわしている。

「クレル」などは、他から自分へであり、「ヤリナサイ」類も、他から自分へのことであったが、——それだけに、相手本位とも言えるものであったが、「モラウ」は、自分のたちばから言うものである。それゆえ、「もらわれはしませんか」と問う発想になったのであろう。まわりどおい言いかたではあるが、これで、謙譲心理をよく表出し得もいる。

「～て モラオー」と、自己意志をあえて言う言いかたは、おしつけがましくて、謙遜的ではない。

## 第九節 ゴセ

さきにもふれたが (p. 79)、出雲地方には、「ゴセ」「ゴシナイ」「ゴシナハ

イ」「ゴサッシャイ」「ゴハッシャイ」「ガッシャイ」「ゴッサイ」などの慣用の言いかたがよくおこなわれている。もとになるのは「ゴス」という動詞である。「ゴセ」の命令表現のかわりに、「ゴイタ」（ごしタ）との言いかたもおこなわれたりしている。なぜか、山陰も出雲地方にとくに、「ゴス」動詞の存立がきわだっており（「ゴシナル」「ゴシナハル」「ゴサッシャル」「ゴハッシャル」などは、「下さる」相当のものとして広汎につかわれている）、ひいては、上記のような、さまざまな命令表現がきわだつことになっている。

「ゴス」の本体はおそらく「よこす」であろう。——「ヨコセ」の「ヨ」が脱落するとともに、「コ」は「ゴ」になり得たのだと見られる。注（「ヨコセ」命令形そのものは、関東地方などに、かなり広くおこなわれている。石川県下にも「イクセ」がある。——「イクス」形もおこなわれている。）

注 「コ」>「ゴ」の一傍例には、広島県安芸戸河内町内での、「ヨー トマリニ オヨイテ ツカーサイマシテ」（よくまあ泊まりにおこして下さいます）などというのがある。

出雲での「ゴサッシャイ」は、だいたい、「下さい」程度の意のものと思われようか。「ゴシナイ」などは、「おくれ」程度のものかと思われる。

出雲とともに、隠岐地方のいくらかの地にも、「ゴハッシャイ」その他が見いだされる。

出雲東隣の伯耆西部にもまた、「ゴッサイ」「ゴッサンシェ」その他がある。

## 第十節 オーセ

さきにもふれたように（p.79）、土佐では、その広くに、特定謙譲法動詞「オーセ」がおこなわれている。これは、「オーセ」命令形一形をもって成りたつ動詞である。

「～て オーセ」の言いかたの慣用されることがいちじるしい。（「て」を受けない言いかたも、ときにはなされている。）その意は、だいたい「～て、

オクレ」に近いものであろう。実例はつぎのようである。

○ヨ<sup>ン</sup>デ ミテ オーセ。

読んでみておくれよ。

○キ<sup>オ</sup>ツケテ オーセ ヨ。

気をつけてくださいよ。

「〜て オーセ」が「〜トーセ」ともなっている。

○ヘ<sup>ゴ</sup>ナ コトー ユーテモ コラエトーセ ヤ。

へんなことを言ってもこらえてくださいよ。

などと言う。「〜トーセ」のおこなわれることが比較的さかんであろうか。

「〜トーセ」の変形であろう、「〜トーゼ」というのも聞かれる。「読んで下さい。」の意の「読んで オーセ。」は、「ヨ<sup>ン</sup>ド<sup>ー</sup>ゼ ヤ。」ともなっている。「ドーゼ」相当の「ドーセ」もある。

「オーセ」は「おこせ」からきたものであろうか。「〜トーセ」が「〜トーゼ」ともなっているのに関しては、おなじく土佐の「アノ <sup>↑</sup>ア<sup>ー</sup>ゼ。」(あのね。)などの言いかたを思いあわせることができる。

いずれにもせよ、ここに興味ぶかく思われるのは、中国と四国とで、おのおのその背面に、出雲地方の「ゴセ」ことばと、土佐の「オーセ」ことばとが対存していることである。比較的交通便利とも見られる背面側に、あい応じて特殊な言いかたが存立しているのはおもしろい。中央語の四周伝播の主要言語路のうえでは、特殊なもの特定の分布などはありにくいことか。土佐と出雲との、今の問題事象は、たがいに実質の異なったものである。けれども、特異な謙讓表現法を存立せしめたということ自体は、彼我まさに相似である。

## 第十一節 取ラセ

『月刊琉球文学』第1巻第8号(昭和35年8月)に、不羈庵<宮良当壮氏>の「風雪」(8)があり、その中につぎの記事が見える。

私が「ウサビーラサイ」（押し待らんや。押しましようか）というとき、車夫は、「ア、助かった」といわんばかりに、「ウシト<sup>tu</sup>ッラ<sup>fe</sup>シェー」（押し取らせよ。押しして下さい）という。

沖繩の首里の坂道で、車のあと押しをする話である。「ウシト<sup>tu</sup>ッラ<sup>fe</sup>シェー」が「押しして下さい」の意になるのであれば、「取ラセ」が、今、問題の特定謙譲表現法になると見られる。このさい、「〜取ラセ」は助動詞（補動詞）の地位に立っている。

古く、私が、沖繩の知友に教えられたところによると、沖繩本島国頭などでは、

○ワナヤーカイ チトラスン ナー。

うちへ来てくれる？

○ワッターヤーカイ チトランミソーイン ナ。

わたしのうちへ来てくださいますか。

などと言っている。

○クス ティガミ ユディ トランソーレー。

この手紙を読んでくださいませ。

などとも言っている。（以上の方言文は、知友の平かながきを、そのまま、片かながきに直したものである。）最後の例では、「取ラス」動詞の連用形が受けとられよう。「チトラン」などとあるのでは、——「来トラン」などであろうから、助動詞（補動詞）用法の「取ラン」などが受けとられる。いずれにしても、ここには、「取らす」をつかった謙譲表現法があると見られよう。

「取らす」は、上位者からは、そうとうに見さげた言いかたである。<sup>注</sup>それを被動者が用いれば、ずいぶんへり下った言いかたになる。

注 奥能登の珠洲市では、「ターシル」（とらシル）を言っているという。「ターシル」は、「クレテ ャル」におなじとのことである。（愛宕八郎康隆氏による。）

南島方面のほかには、今、この種の謙譲の言いかたが見いだされない。南島は、しばしば、このように、一般からはかけはなれたものを存し、国語史実の

諸要点，あるいはくまどりを示す。

## 第十二節 タモレ

尊敬法動詞「タモル」に関しては，すでに、『方言敬語法の研究』（春陽堂 昭和53年1月）の p.166～p.181 で述べてところがあった。「タモル」動詞には「タモレ」命令法がある。「タモレ」形その他の「タモル」命令法の分布に関しては，分布図第3図について，その概略を想察せられたい。

「タモル」尊敬法動詞のうち，「タモレ」命令法が使用またはとくに頻用されて，「～て 下さい」の「下さい」の意に慣用されているとすれば，これは，およそ，特定命令形の特定用法と言いうるに近いものであり，したがってここに，——「タモル」尊敬法動詞についてのことではあるけれども，謙讓表現法の一態を認めることができる。以下にはしばらく，謙讓表現法へと習慣化した「タモレ」形式を見ていこう。「タモレ」が「タモ」などと，命令形の語形の変化を見せたものなどは，いよいよもって，これがもはや特定謙讓表現法にはたらいっていることを受けとらせやすい。

西南の奄美諸島では，すでに「タモル」の記述で明らかにしたとおり（p.166～p.169），命令形の「タバーリ」「タポーリ」「タポーレ」などがよくおこなわれている。「タバーリ」などは，たとえば与論島の「イッ<sup>チ</sup> ウハーチ タバ<sup>ー</sup>リ。」（どうぞおはいりください。）などのように，「～て」につづくならわしであり，まったく「～て 下さい」の「下さい」に相当している。ここに，「タモル」命令形用法の特定謙讓表現法化していることが明らかである。

九州南部地方の「タモレ」命令形にしても同様である。（「タモレ」が「タモーレ」ともなり，宮崎県南部では「タモーリ」ともある。）「タモル」のふくまれた「タモンセ」命令形にしても，これが，特定の「下さい」の意の謙讓表現法としてはたらくさまが見られるとも言える。——すでに謙讓意識を想定しうるものになっていることを，『方言敬語法の研究』p.175 で指摘した。「タモ

ス」の、「オアガイヤッタモス。」（おあがりください。）というような用法のほか  
あいもまた、上におなじである。「〜タモンセ」とともに「〜タモス」も  
よくおこなれわている。さてまた、「タモレ」に対する「タンモレ」もあり、「タ  
モス」に対する「タモン」「タモヒ」もあり、「タモンセ」に対する「タモン」も  
ある。ただの「タモ」もある。——「タモ」は、「タモス」「タモン」などから  
きたものか、それとも「タモンセ」からきたものか。大隅東岸の「タモ」例は、

○イトッ ヨクワセッタモ。

いっときやすませてください。

である。ついでに「タモン」の例をあげておこう。

○ドーカ タモイヤッタモン。

どうかおたべになってください。

「ヨクワセッタモ」や「タモイヤッタモン」などに「タモ」や「タモン」を  
見れば、これらは、形にあらわな「て」につづくことなく、おおよそ上の動詞  
に直続した形になっている。（その間に促音はあるけれども。）このような形態  
になっている「タモ」や「タモン」は（「タモンセ」でも「タモス」でも）、もは  
や助動詞あつかいにしてもよさそうなありさまでもある。

（九州南部地方の上の問題についても、『方言敬語法の研究』の「タモレ」  
関係の記述を参照せられたい。）

中四国以東の「タモレ」分布については、前述の分布図にゆずって、ここでは  
くわしく述べることはしない。

中国、広島県備後奥地には、「タモンセ（下さい）」があるという。（『方言敬  
語法の研究』p.363 参照）

徳島県下に、「チョット マッテ タモレ（下さい）」との言いかたがある  
という。（金沢治氏「阿波方言語法の研究」『徳島教育』昭和11年6月）

中部地方では、とくに福井県越前奥地での「タモレ」が目される。

八丈島の「タモレ」例は、

○ディタソ トキニワ ジカン オセーテタモレ ヨ。

“出発する時には”時間を教えてくださいよ。

などである。命令形ではないが、「たまわる」に関するつぎのような注目すべき用法が八丈島にはある。

f オヨソー テツダッテ タマウリヤルカノー

手伝いを 手伝って いただけますか、

注 「オ」は言いまちがい。「ヨソー」労働交換

f オカゲサマデー タマオロガ (中略) コラ モラッテ タマオッテノー

おかげさまで いただきますよ。こんなにいただいてしまいましたね。

これらは、『全国方言資料』第7巻「東京都八丈町宇津木」の条に出ているものである。「タマウリヤルカノー」が、たしかに「いただけますか」の意のものであり、「タマオロガ」が、たしかに「いただきますよ」の意のものであるとするならば、尊敬法動詞「たまわる」は、もはや、ここで、人が自己の謙退の動作を言う謙讓法動詞になっているとも見られる。

おなじようなことは福島県東部にもあるかのようである。「タモッタから」が、「いただいたから」と説明されている事例がある。すなわち、新妻三男氏の「相馬に於ける敬語動詞及び敬語助動詞について」(『国語研究』第二巻第四号 昭和9年4月)には、

○おむげーがら、ぼだ餅<sup>もじ</sup>たもっだがら早く食べねえーが

(お向ひの家から牡丹餅戴いたから早く食べないか)

とある。(『方言敬語法の研究』p.180 参照) ちなみに、新妻氏は、「たもる」などに関して、「但し『くだる』『おんなる』の外は中年以下の者には殆ど聞かない。」と述べていられる。

秋田県下には、「来テ タモレ。」などの「タモレ」がおこなわれており、これとともに、「タモランセ」かもしれない (p. 39) 「タンシェ」「タンエ」がよくおこなわれている。そのさまは、「〜て 下さい」の意の特定謙讓表現法を思わせるのにじゅうぶんである。

### 第十三節 仰セツケラレマセ

特定命令形の特定用法と言うほかはない一事実に、この「仰セツケラレマセ」の言いかたがある。たとえば、長崎県西彼杵半島のうちでは、

○オーシェツケラレマッ<sup>↑</sup>シエ。

“言いつけてくれの意ではない。何々してください。どうしてくだ  
さい。”

などと言っている。山口麻太郎氏の『壱岐島方言集』には、

それは私にオンツケラりまっせ

（それは私に下さい）

とある。都築頼助氏が、「全国珍語奇語集」（『言語生活』第三十五号 昭和29年8月）に、福岡県のものとして寄せていられるのは、

旧柳河嶺の例 「サア、アガッテ オスケラレ（仰せつけられ=下さい）」

はタベ、メセ（召せ）よりも鄭重な待遇の場合。

というのである。

「仰セツケラレマセ」のほかの、「仰セツケラレ」や「オスケラレ」などに関しては、吉町義雄氏の調査報告がある。（「九州方言敬讓・希求助動詞活用分布相」『文学研究』第四十一輯 昭和26年3月）問題の事象は、主として福岡県下・熊本県下・佐賀県下・長崎県下に分布している。久留米地方には、「オーツケラレ」の言いかたも存在するらしい。

「仰セツケラレマセ」が「仰セツケラレ」ともあり（——それが諸転形をおこしており）、また、「オーツケラレ」ともなっている。省略や転訛がしきりにひきおこされたのは、ものが、「下さい」の意の特定謙譲表現法として、いよいよ習慣的に用いられてきたことを示すものであろう。

山口県下の小郡あたりでも、「ゴメン<sup>↑</sup>オスケラレ。」（ごめんください。）の言いかたが、老人男子たちによってなされているという。とすれば、「仰セツケラ

レ」関係の言いかたは，九州にとどまらず，より広い範囲に，かつてはかなりよくおこなわれていたものと解することができようか。

## 第二章 自己の謙退の動作をあらわす謙讓法動詞または謙退の意の謙讓法助動詞による謙讓表現法

### 第一節 イタダク類

#### 一 はじめに

「イタダク」という謙讓法動詞による表現法以下のものは、他に対する願望を、他にはたらきかけて積極的に表現するのとはちがって、自己をおさえ、消極的なかまえて、謙退の情・念をあらわそうとするものである。おのれをあげ、立てることにおいては、彼我、かわりがないようでも、これはとくに、その「おのれ」を、しきりに低位におさえとどめようとする。謙讓表現法の、もっとも謙讓表現法らしいものがここにある。広義の尊敬表現法の、まったく特異なものがこの種のものであるとも言えよう。

「おのれ」は、第一人称者であっても、第二人称者であっても、第三人称者であってもよい。「受益者一般」とでも言うべきものが、ここに考えられる。

#### 二 イタダク系

##### 1 イタダク

「イタダク」は、事物をもらうことにも飲食をすることにもつかわれている。共通語にもなっているけれども、方言世界でもまた、これが広くにおこなわれている。

南島、喜界島には、「イタダチュイ」（戴く——頂戴する）があり、

○イタダチューラ

“頂戴いたします。”

などと言っている。(岩倉市郎氏『喜界島方言集』 中央公論社 昭和16年8月)

九州地方では、「オイタダキシマス」などの言いかたが特色的である。長崎県下で、はじめてこれを聞いた時は、私は、その発言者、一男性の、その場になり緊張しての、一つの錯誤の言いかただろうかと思った。が、のち、佐賀県下の婦人からも、手紙での「御戴きして居りながら」というのなどを受けとって、これが、方言習慣の言いかたであるらしいことを知った。『全国方言資料』第6巻「福岡県三井郡善導寺町」には、

*m*ヤー マー エンリョナシー オイタダキシマス

では まあ 遠慮なく いただきます。

とある。松田正義氏・糸井寛一氏『大分県方言の旅』第3巻(NHK大分放送局 昭和33年3月)の「大野郡野津町字野津市」にも、

△また、動詞に「お」をつけて、オイタダキイタシマス・マーオ寄りのような使い方もみられます。

と見える。

薩隅方面の言いかたの中には、「イタダッキヤゲモツシェ」(「頂き上げ申して」いただきまして)などの、「イタダキ+上げる」の鄭重な言いかたがある。——他地方では、おそらく聞かれまい。

中国、山陽地方などでは、もらうこと、たべることに関して、「イタダク」を言うことが、すくなくない。そのばあいの表現心情は、敬虔でいねいなものである。神仏に関しては、当方の動作を、「イタダク」と表現することが多い。岡山県下の真鍋島では、

○その おじゅずを イタダカヒテ ヤ。

そのおじゅずをいただかせてよ。

と、老女が言うのを聞いた。頂かせてもらうことは、いと、もったいないこと、ありがたいこととされている。同島で、‘お接待’(お大師まつりの日、たべも

のを参徒に供すること、またそのたべもの)を人にすすめるのに、せわ役の老女が、

○ドー<sup>ア</sup> イタダイテ オヤリ。

どうぞ‘お接待’をいただいでください。

と言っていた。「頂く」は「ご利益」に関連している。

四国に、言うべきかくべつのことはない。

近畿に言うべきことがある。「大阪府大阪市」の方言では、

fドーゾ オヨシーニナ オッシャッテ イタダキマスヨーニ

どうぞ およろしく おっしゃって いただきますように。

などと言っている。(『全国方言資料』第4巻 近畿編 昭和41年9月)和歌山県下には、「イタダカシテ ヨ」の、つぎのようなつかいかたがある。

女「マー ヨー キキテオクレタノシ。 ハヨ アガッテ イタダカシテ

まあ よく 来て下さいましたねえ。早く あがって 頂戴よ。

ヨ。」

(村内英一氏「和歌山」『HNK国語講座 方言の旅』宝文館 昭和31年9月)「どうどうして 頂カシテ」とたのみ願う言いかたは、紀州に広く、どの程度にか、見いだされるらしい。「イタダカシテ」が「イタダカヒテ」「イタダカイテ」ともあるらしい。いずれも、ていねいな「〜て下さい」にちがいない。

中部地方の諸県にも、「イタダク」の語がおこなわれている。

○センセガタニ ヨッテ イタダイター。

先生がたに寄っていただいでね。

は、富山県下の一例である。瀬戸重次郎氏の『岐阜県方言集成』には、「いなか」(いただく)が見える。

関東地方でも、「イタダク」動詞の通用が見られる。

○イタダキマス。(お茶を)

これは、茨城県下北部の一例である。

東北地方内でも、そこそこの土地弁に、「イタダク」が生きているか。新妻

三男氏の『相馬方言考音韻語法の部』には、

えただく(いただく = 食ふ, 飲む)  
(もらふ)

遠慮なしにえただきあーす

とある。宮城県下には、「イタダキス」(いただきます)などの言いかたがさかんである。土井八枝氏の『仙台の方言』(春陽堂 昭和13年4月)には、なお、「…………… ～て 頂きたござりす」(いたぶきたいのです)などの言いかたも見えている。秋田県東南部では、かつて、「イタダキンス」を聞いた。

## 2 イターカン(ヒ)テ

和歌山県下ないし紀州で、「頂カシテ」の言いかたが注意される。これは、だいたいには、近畿的な語法のようなのである。近畿方言ないし関西方言の風土では、「どうどうさせて」と、使役態利用の表現法でものをたのむことが、しぜんによく、人々の心に安定しているらしい。近畿方言下では、「イタダク」との謙譲法動詞に関しても(関してさえも)、使役態表現法をとる一傾向が生じている。「どうどうして 下さい。」の、「下さい」の気もちの、——その心からたのみたく思う気もちの、深い表白手段を求めて、人は「イタダク」を「イタダカシテ」とつかうようにもなったであろう。そのいちじるしい習慣が、今は紀州方面によく見られるというしだいである。

さてその「イタダカシテ」が、「ダ」音を落として、「イターカン(ヒ)テ」となると、これは、文字どおり特定の習慣形となった。和歌山県下の、おもに中部以北にこれが見られる。

○読んで イターカヒテ(下さい)。

など、「イターカン(ヒ)テ」の言いきりで、文表現の形づくられるのがふつうである。「イターカシテ」が「イタカシテ」ともあるか。いずれにもせよ、「下さい」を、「頂かせて!」とたのみ願うのであるから、ずいぶんおりいった言いかたをするものだとも言える。もっとも、今日では、おもに老人たちがこの言いかたをしているのでもあるか。

和歌山県下に、次項で言う「イタ」もよくおこなわれている。「頂く」の「イタ」略形を使用するばあいにくらべると、「イターカン(ヒ)テ」表現法は、“はるかにていねい”であるという。“女性につかわれることが多い。”と、教示してくれた人もあった。

井之口有一氏の『滋賀県言語の調査と対策——方言調査編——』（自家版昭和27年7月）には、

カン（老）

「～して下さい」

来テカン

が見える。この「カン」は何か。「頂カンテ」の「カン」であるのかどうか。

思いだすのに、私どもが少年時に経験した伊予北部弁に、「教えて！」とたむ時、

○ユータ カシテ。

と言うなどの、「～て カシテ」があった。（今も、大三島その他で、これが聞かれるのかもしれない。）私は、子ども心に、「～て カシテ」の「カシテ」に、「貸して」を感じがちだった。が、ことによると、これにも、「頂カシテ」の尾がのびているのかもしれない、と、今、思う。

### 3 イタ

「イタ」と言いあらわす、「下さい」「ちょうだい」の意の謙譲表現法がある。——「イタ」は「頂く」からのものに相違ないようである。

近畿も、「～て イターカン(ヒ)テ。」の特定表現法を展成させている和歌山県下に、「イタ」のよくおこなわれているのは、注目すべきことである。

○読んで イタ。

読んでください（ちょうだい）。

のように言う。当方での「イタ」は、「イターカン(ヒ)テ」の気もちからみち

びき出された省略形式ではなからうか。杉村楚人冠氏『和歌山方言集』（刀江書院 昭和11年9月）も、「イタ」を、「いたゞかせて」の略、としている。略形となって、これは当然、ていねいの度あいの低いものになった。上記方言書にも、

…テ、…テイタ、…テイターカヒテの以上三者は丁寧の度が順々になる。との考えが見えている。

「イタ」は、これの言いとめになるのがふつうのようである。ときには、「あれ アタイに（わたしに）イタ ヨ。」などの言いかたもするらしい。和歌山市域でなど、「イタ」は女性に多く用いられるという。

今日、「イタ」は、まったくの特定形で、「お見よ。」を言う「ゴラン」（ご覽）などともあい類している。「下さい」相当の「ツカーサイ」からの「ツカ」というのともあい類している。

和歌山県下のほかでは、じつに、四国香川県下にのみ、「イタ」が見いだされる。——と、現在の私は言いたい。

香川県下には、「イターカシ(ヒ)テ」などはなくて、もっぱら「イタ」だけがおこなわれている。しかも、その分布は広く、勢力はつよい。およそ全県下におこなわれているようか。西部域には、上述の「ツカ」がさかんでもある。西部の「ツカ」と、中部・東部の「イタ」との対存が認められもする。（徳島県下は、「イタ」を有することはなくして「ツカ」を有するのみである。）

さて、香川県下、内海、直島の「イタ」例は、

○コレ イター。

これちょうだい。

などである。備前に近い島であるが、やはり「イタ」を有している。島ならぬ県東部域での一例は、

○ソレ イター。

それちょうだい。

である。「フーシノ ヒトニワ ソレ モラエマスカ。」と言う。」などともあ

った。

「イター」は、「～て イター。」ではなくて、「タバコ イター。」(初老女→駅売店女性)などというように、しきりにつかわれているのが注意される。もちろん、自由に「～て イタ。」とも言っている。県下中部の二例をかかげよう。

○コレ イタ<sup>↑</sup>ナ。

これをちょうだいね。

○ドーゾ オトシナサッテ イタ。

どうぞおとりなさってください。(老女→男性)

香川県下には、「イターカン(ヒ)テ」の通用はないこともあってか、県下の「イタ」を、人は、「イタダキマス」の略形と見たりしている。是か非か。年少者などの間で、「イタ」が「イダ」となることもあるのかもしれない。

県東部の白鳥町では、目上の人に、「コノ テガミ 読ンデ オヤンナハンセ。」と言い、対等の人に、「コノ テガミ 読ンデ イタ。」と言い、目下の人に、「コノ テガミ 読ンデ クレ ダ。」(「ダ」は文末詞)と言う。「イタ」が「イダ」となったりするのは、「クレ ダ」式の言いかたの影響などもありうるのか。

「イタ」は、和歌山・香川に分布して、他には生息が認められない。近畿と四国との、相互に近接する地域に、おなじもの、同類同式の発想のあるのはわかるが、四国の徳島県下にこれがないのは不可解である。もし、「イタ」が、淡路にも阿波にもあって、讃岐にも紀州にもあるのなら、分布の事態は、おおいに首肯しうるものとされる。が、現状は、そのような関連分布になっていない。分布のふしぎがここにある。あるいは、紀州・讃岐が、今たがいに、ものの残留分布を示しあっているのでもあろうか。——双方間の、方言風土の類似は、ともかく、考えやすいことのようにである。

#### 4 ダーコ

「イタ」の分布は、その地域的特色が大きい。なお一つ、地域的特色の大き

いものに、「ダーコ」がある。これは、近畿の三重県伊賀にだけ分布している。

「イタダカシテ」などを有する近畿に、「頂こう」を思わせる「ダーコ」があっても、近畿内分布（存立）として、ふしぎではない。それがなぜ、今、伊賀にだけ見いだされるのか。この存在のしかたは、またふしぎでもある。今日、「ダーコ」は、全国内でも、ただ伊賀にだけ孤存するものとなっている。

伊賀には、現に、「イタダコー」の言いかたもおこなわれている。

○ゴメンナシテ イタダコー。

ごめんなさってください。（私の別辞への応答）（大工さん→藤原）

○アガッテ イタダコー。

上がってください。（座敷へ）

“おあがんなさい。”（飲食）

「イタダコー」は、おそらく「頂こう」であろう。これは、頂くことを予定して言う、自分の意志を出した表現法であろう。それは、「下さい」の意を示すことにもなってよく、また、人にすすめての、「どうぞしなさい。」の「なさい」の意を示すことにもなってよい。

「イタダコー」の言いとめが、「イタダコ」ともなっている。

○ドーゾ オハインナシテ イタダコ。

どうぞおはいいりなさってくださいませ。（主婦→藤原）

「イタダコ」とともに、「イダーコ」が見いだされる。

○オンナガ ナー。「ドー シテ イダーコ。」と言います。

女がねえ。「どうして イダーコ。」と言います。男は絶対言いません。

（老女→藤原）

○ゴメンナシテ イダーコ。

ごめんなさってください。（訪問あいさつ）

（「よくおいでくださいました。」との意で、「ヨー オイテナシテ イダーコ。」と言っていたようでもあるが、定かでない。）

○マー ハイナシテ イダーコ ワ。

まあおはいりなさってくださいませな。

「イダーコ」の「イ」のごくよわいものが聞かれる。

○アンタ マー ごゆっくり して イダーコ。

(こう私に言って、その婦人はさきに帰って行った。)

「イダーコ」を前提として、「ダーコ」は成立したのであろう。「ダーコ」の頻用が、調査者、私の耳をうった。

○マー ゴユックリ シテ ダーコ。

(文末の声調も特異である。若よめさんのことばであった。)

○マタ オイデナシテ ダーコ。

○マタ アスビニ オイデナシテ ダーコ。

(上二例の文アクセントを比較せられたい。) (老女一藤原)

「ダーコ」は「下さい」の意でおこなわれていると解してよかろう。アクセントは、文末の部位で、「………… ダーコ。」となり、また、「………… ダーコ。」となることが多いようである。そこに、この「頂こう」表現法の、すでに、「下さい」の気分をあらわすものになっていることが明らかである。

「ダーコ」の言いかたは、青年以上に見られるという。若い人たちもこの言いかたをしているところに、この特別語法の特別の生命力が認められる。方言の中には、別趣でありつつも、こうして、嶄然と一勢力をなしているものが、しばしば見いだされる。土地々々の、表現法体系の存立のしかたには、ふかしぎとも言えるものがある。

伊賀の「ダーコ」の、慣用のいちじるしさを示すものとして、ここには、つぎの一例をあげることができる。

○センセ、イタダイテ ダーコ。

先生、いただいてダーコ。

(このさいは、かようなアクセントになっている。)

こうして、「ダーコ」は、しぜんのうちに、手びろく活用されている。

「頂かせて！」ではなく、「頂こう」と意志を言う言いかたは、一風、変わ

っている。前者からは「ダ」音が消えた。後者からは「ダ」音は落ちないで、「ダ」がむしろ主音になっている。——前者では、「～せて」というところに、表現法の主点があったのではないか。だとしたら、はじめの「イタダ」のほうは、すこしくうすれてもかまわなかったはずである。後者のばあいは、「ダ」をはずせないもののように思われる。——「イタダ」を「ダ」につづめたか。（「イタダコ」>「イターコ」の変移のきわに、すぐ「イダーコ」ができたか。）要するに、結果では、「イタ」と「ダーコ」との顕著な対立が見られるにいたった。語法推移のはてでの、かれこれの、思いもかけぬ相違である。かくてこの二者が、今は、同性質の方言領野にありながらも、異端の二者然とした様相に輝く。

このことは、みな、関西においてのことなのである。全国の方言風土の中での関西地方というものが、ここでもまた熟視される。

### 三 頂戴

「頂戴する」の意の「頂戴」が、一種の詠えの表現に用いられることは、周知のことである。「頂戴」は、「御覧」などとともに、漢語出自の特定動詞となっている。

「頂戴する」は、事物を「頂く」意にも用いれば、飲食の饗応にあずかる（あずかって飲食する）を言うのにも用いる。しかし、一転して「頂戴」となったものは、事物を「頂く」ことに言うのみである。（事物の中に飲食物が含まれるとしても。）それが、はっきりとした謙讓表現法になる。

「チョーダイ」の歴史的存立、およびその全国的な頻用とともに、「下さい」類や「ツカーサイ」類の頻用されるのを見る時、いよいよ「下さい」類や「ツカーサイ」類の、特定謙讓表現法であることが明らかになる。

以下に、「チョーダイ」類としうるものについて、広く、その分布と生態とを見ていこう。

「頂戴」が、国語史上、すでに古くからおこなわれてきたのにもかかわらず、なぜか九州地方には、これの、特別なおこなわれかたが見いだされない。——すなわち九州については、「チョーダイ」のかくべつに論じるべきものがない。

中国地方にもまた、「チョーダイ」に関して特筆すべき事項がほとんどない。ただ一つ、昭和30年に友人から教示されたところによると、山口県周防北部に、

○チョット オイテ チョーダイマセー。

の言いかたがある。「チョーダイマセー」は、「頂戴」を、動詞命令形なみの形にしたようなものであろう。「チョーダイ」が、そもそも「下さい」を意味する動詞的なものである。しかもていねいの動詞である。ていねいに、「下さい」という気持ちもくんで、「チョーダイ」ということばをはたらかせれば、まさに「チョーダイマセ」形ができよう。このような創作は、表現者たちの当座即席の思いよりで、比較的容易になし得たことかと思われる。

四国地方の「チョーダイ」については、また、言うべきかくべつのことがない。香川県下では、「チョーダイ」表現法は、まったくと言ってよいくらいに、「イタ」表現法に、加えてまた、「ツカ」表現法に、とって代わられているありさまである。

つぎは近畿地方である。「チョーダイ」の汎用のことは、もはや言う必要がなかろう。ただひとこと、「チョーダイ」が小さい人たちにかかわりの深いものであることは、このさい、言いそえておきたい。(近畿地方にはかぎらないことである。どことも、たとえばおとなは小さな子に向かって、冗談になど、「それ、おばちゃんにもちょうだい。」などと言う。「チョーダイ」には、小さい人たちに向けて言うのにふさわしい語感要素がこもっているのだとしてよからうか。もともと漢語音である「チョーダイ」が、そういう語感要素をやどしているのは興味ぶかいことである。使用の習慣が、そのものに後天的な個性を賦与したか。) 神戸市域で、

○チョーダイ カ。

下さいませんか。

と言うという。(清瀬良一氏教示) 私も、かつて東京の寄席にあそんださい、大阪落語の中の、「………… チョーダイ カ。」を聞いた。大阪府下、河内町では、

○ソレ ワタシ トコ イレテ<sup>↑</sup>チョーダイ<sup>↑</sup>ン カ。

それを私とこへは入れてくださいませんか。(カステラの輪切りを買う) (若い主婦→店員)

というのを聞いたことがある。近畿内のどこの人であったかは知ることができなかったが、たしかに近畿弁をつかっていた若い母が、汽車で、

○チョット スミマセンガ、トーランテ ヤッテ チョーダイ カ。

ちょっとすみませんが、通らせてやってくださいませんか。(若い母、おさない女の子をつれて、人ごみの通路をトイレにゆく。)

と言っていたのを聞いたこともある。

近畿も三重県北寄りの地域となると、のちに述べる愛知県下の状況との関連もよろしく、「チョーダイ カ」の言いかたがよく聞かれる。(この地方に「クダサイ カ」もある。)

「チョーダイ」が命令形相当の詠え形であれば、「下さいませんか」のこちで「チョーダイ カ」あるいは「チョーダイ ンカ」などと言うのは、ごくしぜんのことと理解される。それにしても、「チョーダイ」という、名詞形とするほかはない外形のものに、いきなり「カ」をつけて、平然と、いわば動詞構文的表現をしてのけるのは、いかにも流通無碍の表現生活である。

『全国方言辞典』の補遺篇には、

たいたい(児) 子供の詞、頂戴。上方(言語違)・香川。

と見える。

さて「チョーダイ」に関するいちばんの問題領域は、中部地方である。わけでも注目されるのが、愛知県方面である。名古屋中心に、尾張一円では、「何何して チョーダイ。」の意の「チョー」が、じつによくおこなわれている。たとえば尾張西部の、

○レイチャン、水を モッテ キテ チョー。

れいちゃん、水を持ってきてちょうだい。（父→子女）

など。名古屋北部の、

○イッ<sup>ニ</sup>シュ<sup>ニ</sup>ーニ イッテ チョー ナモ。

いっしょに行ってくださいね。（女性）

など。「チョー」は、短く「チョ」と言われることもある。

名古屋中心の尾張ことばに、「チョーダイ」もあることはもとよりである。名古屋市域での「チョーダイ」ことばの、もっともていねいな言いかたは、「チョーダイアソバセ」である。たとえば「ごめんください。」は、

○ゴメン チョーダイアソバセ。

と言っている。男でもこの言いかたをしている。私が、生粋の名古屋人の中年女性から聞き得た一例は、

○ナニ イッテ チョーダイアソバスヤラ。

何をおっしゃってくださいますやら。

である。極上の言いかたであろう。名古屋ことばの伝統の中に、このような上等のことばづかいがあるということなのか。

『名古屋方言の語法』には、「チョーデァースバス」の形が見えている。「チョーダイアソバス」がこのように変じている。

ふつうの「チョーダイ」が、しきりに活用されて、その動詞としての諸形態を生んでいる点は、まことにめざましいものがある。当地方のことばづかいの一特色がここにあると言えようか。これに関しては、まず芥子川律治氏の『なごやことば』（市経済局 昭和31年12月）から重要な箇所をお借りしたい。

共通語の「ください」に当るものに、「ち<sup>ょ</sup>う<sup>で</sup>あ<sup>ー</sup>」があります。最近でち<sup>ょ</sup>う<sup>で</sup>あ<sup>ー</sup>の略されたち<sup>ょ</sup>う<sup>が</sup>勢<sup>を</sup>も<sup>っ</sup>て<sup>い</sup>ま<sup>す</sup>。「や<sup>っ</sup>て<sup>ち</sup>ょ<sup>う</sup>」「み<sup>て</sup>ち<sup>ょ</sup>う」「来<sup>て</sup>ち<sup>ょ</sup>う」と頻繁に用いられ、その終止形は「ち<sup>ょ</sup>う<sup>す</sup>」となり、打消の助動詞を伴う場合は「ち<sup>ょ</sup>う<sup>せん</sup>」となり、ほぼサ変動詞「頂<sup>戴</sup>する」の活用に近いものになっています。「頂<sup>せん</sup>、頂<sup>した</sup>、頂<sup>す</sup>、頂<sup>す</sup>、頂<sup>し</sup>や 頂<sup>〇</sup>」のように活用します。

連用形の「チョーシた」は「チョーた」ともなっている。べつに、「チョーダイた」との言いかたもある。（この「チョーダイ」も連用形に相当する。）

○ヨー オーキュー ナッテ チョーダエタ ナモ。

よく大きくなってくださいましたね。（まあ、よく大きくおなりでしたね。）（親戚へ行った子どもが、そのめざましい成長をほめられるところ。）

「チョーダイ」をつかった終止形に、「チョーデアース」があり、未然形に、「チョーデアーセン」「チョーデアッセン」「チョーデアッサン」がある。（『名古屋方言の語法』による。）森田草平氏『明治大正文学全集』第二十九卷（春陽堂 昭和2年11月）には、「下さいませんか」の意の、「頂戴はんか」が見えている。

さて愛知県下も三河となると、以上の「チョーダイ」ことばをつかっていないようである。三河人は、「チョーダイ」ことばの領域に来ては、ことばのはなはだしい違和感にうたれるという。

ところで、尾張の北の、岐阜美濃のうちには、「チョーダイ」ことばの「チョー」がある。『岐阜県方言集成』には、岐阜市の「ちょう」も、安八郡の「いってちゃうでああか〔句〕」（行って頂けませんか。）「ちょうした」も見えている。

東にとんで、山梨県下に、一・二の問題視すべき事項がある。石川緑泥氏「山梨県河内方言」（『方言と土俗』第四卷第九号 昭和9年1月）には、「東山梨郡日川村の方言」の、

一寸行って来て「チョウ」

の言いかたが見える。——「チョウ」は「頂戴」とされている。<sup>(オ)</sup>つぎに、深沢泉氏の『甲州方言』（地方書院 昭和36年10月）の中には、

尊敬の意をふくめた勧誘の語に「早く行っちゃー」「ごもしんだから、そうしてくれちゃー」のちゃーがある。

の記事が見える。この「ちゃー」は何なのか。

関東地方には、「頂戴する」の言いかたがふつうに存在している。「チョーダイ」もまた同様である。ほかに言うべきことは、ほとんどない。ただ一つ、神奈川県下のことばに、

アンチョ 下さい

のあることが、山本靖民氏「神奈川県方言資料」(『方言』第三巻第四号 昭和8年4月)などによって知られる。「アンチョ」は何なのか。日野資純氏・斎藤義七郎氏『神奈川県方言辞典』(神奈川県教育委員会 昭和40年3月)には、「私ももらいます。」「私に下さい。」の説明が付してある。

東北地方でも、「チョーダイ」はなまった形などでおこなわれている。

北海道でもまた、広くで、「チョーダイ」がつかわれている。——若い世代の人々には、よりふつうにこれがつかわれていようか。

#### 四 拝領

「頂戴」に対する「拝領」は、本来、頂戴したものをたいせつに長く保存して感謝することを意味するものであるという。それかあらぬか、方言世界でも、「拝領」は「頂戴」以上に特定のものらしく、そのおこなわれかたが、地域上、はなはだしく限られている。分布が近畿以西にとどまるのは、古語の、日本西半城内残存として意味が深い。

九州、熊本県下の広域に、「拝領」ことばが認められる。通常、「ハイリョー」「ハイリョ」「ハイヨー」「ハイヨ」の形のもがおこなわれており、わけでも「ハイヨ」「ハイヨー」が、特色語然としておこなわれている。

熊本市域では、たとえば店で物を買う時、

○オバサン コレ ハイヨー。

おばさん、これちょうだい。

などと言う。私の一友人は、“「下さい」という時には「ハイヨー」というのが全般的につかわれている。”、“「ハイヨー」は「拝領」だと、すぐに感じた。”と語ってくれた。市内で、

○ヨン テガンバ ヨンデ ハイヨ。

この手紙を読んでおくれ。

などとも言っている。「～て ハイヨ」は、対等にも目上にも用い、とくに目上によいことばをつかう時は、「～て クダハリマッセ」と言うのだという。熊本市域をはずれての南部で私が聞きとめた一例は、

○ヨンデ ハイヨ。

読んでちょうだい。

である。人は、おもに女が「ハイヨ」をつかうと言っていた。女にはかぎらないことだと思われる。

私が、阿蘇山南麓での一週間調査のさい、しばしば耳にすることができた「拝領」ことばの実例は、下のようなものであった。

○モッテ キトッテ ハイヨ。ナー。

持って来ておってください。ね。（男性の電話）

○ジュエ エン ハイヨ。

十円ちょうだい。（子ども）

○モッテ キテ ハイリヨ。

持って来てください。

最後の一例は、老人から聞かれたものである。当地方に、「キャーヤンナハリ。」（下さいな!）など「キャー」の、つよめ用の接頭辞が認められる。その「キャー」が「ハイヨ」にもつけられ、「キャーハイヨ。」（下さいよ。）とも言われている。

「…………… ハイヨ。」などと発言されるのを、私ども他郷者が、なにげなく聞きとめたとするか。そのさい、「ヨ」が「下さい よ」の「よ」であるかのように、誤認することがあるかもしれない。発言の外形だけを見て、かんたんに判断を下したりすると、つい、そのような認知もしかねない。が、阿蘇南麓ではこうであった。私が、「「いけません ヨ。」の「ヨ」とはちがうのですか。」と聞いてみたところ、土地っ子の一人は、直下に、ちがうと答え、「拝領チ

ューコトデス。」と説明してくれた。また、「ほんとうの肥後弁です。」とも補足してくれた。

熊本県下も天草島西岸などでは、「拝領」ことばが聞かれないであろう。「『ハイヨー』は熊本県本土だけ」と、人の言うのを私も聞いたことがある。県下南方でも、「拝領」ことばは見いだしにくい。

九州では、熊本県下について福岡県筑後のうちにも、いくらか「拝領」ことばがおこなわれている。熊本県北、玉名郡につづく筑後山門郡で、たとえば「ヨンデ ハイヨ。」(読んでください。)などと言っている。かの柳川市では、「ハイヨー」がかなりよく聞かれる。

○コレバ チョット ヨーデ ハイヨー。

これをちょっと読んでください。

などと言っている。「ハイヨー」は、いわゆる城内ことばに属するものらしい。柳川藩の古事にくわしい一老女は、私に、つぎのような説明をしてくれた。

「ヨーデ ハイヨー」は中等度の言いかたで、「ヨーデ クレメサン カ」が上等の言いかた。「ヨーデ クレン カン」と言うと、これは下の言いかた。

柳川に、「ハイリヨー」との言いかたも、なくはないらしい。いずれにしても、当柳川でも、「拝領」ことばは衰亡の運命をたどっているのではなからうか。

以上の九州分布のほかとなると、中国では、どこにも何も認められず、四国となって、土佐・阿波に問題の事実が認められる。——この時、私どもは、九州から四国にかけてのある種の底脈が、四国はその南半地方によく通じているのを見ることができる。

土佐に関しては、土井八枝氏の『土佐の方言』の、

○入れもんごし(或は入れもの)はいりょーしてかまいませんか。

の記事を、今はここに引用しうるばかりである。

かえって阿波に、比較的よく「拝領」ことばの残存が認められるのは、はなはだ興味ぶかいことである。——阿波と土佐との関連性のつよいものが、しば

しば認められるとともに、また、阿波では、ここに四国内の一特色地のおもむきが認められる。(それは、九州で、さきのように、とくに熊本県下などが特別のおもむきを示したことに似ている。歴史的な問題をはらみがちの大きい地域の中にもまた、特定的に変わった現象を示す所があるのを、私どもは興味ぶかく思う。) さて阿波の徳島市での実例は、

○マタ オイデテ ハイリョ。

またいらっしゃってください。(老女→青女)

○…………シテ ハイリョー。

…………してください。

○…………シテ ハイリョ ヨー。

…………してくださいよ。

などである。最後の例が「ヨー」の文末詞を持っている。徳島県下では、だいたい南部のかなり広い範囲を除いた地域のうちに、「ハイリョー」「ハイリョ」がいくらか見いだされるという状況なのか。いずれにしても、ものの残存のさまがいちじるしいようである。

四国を出はなれては、近畿地方も、ただ、淡路島のうちに、「拝領」ことばのおこなわれたあとかたが見いだされるだけである。と、今は言いうるばかりである。知友、服部敬之氏は、『淡路方言』放送まで(『兵庫方言』2 昭和30年12月)で、

旧御城下の洲本市では、「貸しては<sup>い</sup>り<sup>り</sup>よ」(貸して下さい)が昔用いられていた

と述べていられる。

以上、「拝領」ことばの分布・生態は、はなはだ特異なものである。別掲分布図上で、これと他の類似の表現法との分布関係をごらんいただきたい。図上、ものごとが、総体に西に偏した分布であるのは注目にあたいる。「拝領」などの表現法は、なぜ西の地方にだけ生きてきたのか。私どもは、ここで、日本

語の、全地盤にあっての地域的な発想差、あるいは地域的な精神傾向差を認めざるを得ない。日本全域での、地方・地域による精神風土差が問題になる。

近代の一用語習慣をなす「起立。」「着席。」などは、特別のものであろうけれども、全国いずれの地域でもおこなわれうるものとなった。これらは、日常の待遇表現法にあずかるものではない、特定の号令要素なので、おこなわれることもまた別趣で、共通語的なのか。

それにしてもここに、「起立。」「頂戴。」「拝領。」などと、漢語名詞を運用しつつ、その動詞性の機能を利用するのは、日本語表現法開拓の一努力とも解することができるものである。

## 五 重畳

倉岡幸吉氏『肥後方言集』（自家版 昭和13年4月）には、

チョウジョウ 有り難う

とある。

私は、阿蘇山南麓で、「ありがとう。」の意の「チョージョウ アタ。」をしばしば耳にした。（「アタ」は、「アナタ」からきた文末詞である。「スンナラアタ。」とも言っている。「さようなら。」の意のものである。）

「拝領」ことばのかなりさかんにおこなわれている熊本県下に、「重畳」ことばの見いだされるのも、興味ぶかいことである。

## 六 申シウケル・受ケル

○ヤッテ モーシケテ モーシワケアリマセン ノモン。

やっていたいで申しわけありませんねえ。

ここに、「モーシケル」（申シウケル）の特定動詞が認められる。謙譲表現法に役だつことのきまったものである。「ソー シテ モーシケル」は、「そうやっていただく」である。

愛知県渥美半島内などで、上のように言っている。

× × × × ×

「受ケル」に関しての、つぎの重要な記事を、ここに引用させていただきたい。

とってうける、あがってうけるなどのうけるは、敬語として残っている（東山梨）。来客があった時など「あがってもらって」というときに「あがってうけて」という。あがっていただく事につかっている。とってうけるも受けていただくという意味であろうかとも思うが、老人でなくては使わないことばの一つである。

深沢泉氏の『甲州方言』からのものである。こういう事実を教示せられた著者に、感謝したい思いがせつである。

## 第二節 イタス

「イタス」という動詞が謙讓法にはたらくことは、言うまでもなからう。自己の謙退の意中をあらわすことの、今日きわめて明確であるものが、「イタス」表現法である。

「イタス」は、現代に通用度の高い一重要語でもある。人々は、話しことばではもちろん、書きことばでも、「イタス」をそうとうによく用いていよう。飲食店などで、たてこんでいるところに来た客人に、店の人は、“すぐ おすきいたしますから。”などとも言っている。「イタス」をとり用いて、表現者は、その場を自分の責任の場としつつ、心ふかく謙退の情を表白している。——ことばづかいをまちがえてまで「イタス」をつかっているところに、表現者の、つよい謙讓心理があらわであろう。

「イタス」は、動詞としても用いられ、助動詞としても用いられている。

九州地方から東国地方まで、どの地方にも「イタス」が存在し得ていよう。ただそれが、いわゆる共通語のことばづかいの中で存在しているのか、方言的

な言いかたの中に存在しているのかとなると、その様相ははなはだ混然としている。

九州地方に、方言色の濃い「イタス」のことばづかいの存在することは、まづないようである。大分県下の「ソゲン コター イタシマスメエー。」などは、比較的方言色の濃いものとされようか。——この例の「イタス」は謙譲法動詞である。いずれにしても、「イタス」の用いられるかぎり、話者の謙退の態度は、はっきりと表現される。

明白な謙譲ことば「イタス」が、主としては、いわゆるあいさつことばによく用いられているのは、九州地方にかぎらないことである。あいさつことばが、人間関係上の対応相を微妙精細にあらわすものだとすると、そこにしばしば用いられがちの「イタス」ことばは、まさに、待遇上の謙譲表現法によく生きているものとされる。

中国地方の実例の中では、一つ、出雲奥で得ることのできた、つぎの例が注目される。

○コレワ マー ゴメーワク イタシマシタ。

これはまあ、ごめいわくをおかけいたしました。（とでも解すべきものだったか。私の礼金に対する謝辞だった。）

中四国とも、「オタノミイタシマス」といったような、あいさつことばに常用される「イタス」は、よく見せている。ただしこの種のものが、どこまで方言の習慣にも根ざしているのか、今、弁別のしようがない。

近畿地方の「イタス」に関しても、四国などのおなじことが言える。中部地方のにも関してもまた同様である。

全国の「イタス」ことばのありさまの中で、ひととき注目されるのが、八丈島・青ガ島の「イタス」である。ここでは「イタス」が、

○マカナッテ アゲイタソー ワ。

まかなっておあげいたしましょう。

といったぐあいに、本動詞を助ける地位に立っており、助動詞としての「イタ

ス」が認められる。例をなおあげてみよう。

○オー 行キイタソ<sup>↑</sup>ワ。

(これは、「ハヤク ヒタク シヤレ。」、「早くしたくをしなさい。」とのすすめに対する応答のことばであるという。)

○アンマリ ボーク ナリーイタシンナカ。

(これは、「ココノ ウシメワ ボーク オジャル ノー。」、「この牛は大きいねえ。」に対する返事である。「あんまり大きくはなりません。」の意であるという。)

○スミイタシンネー ノー。ヨロシク オッシャッテ<sup>↑</sup> タモリヤレ。

ほんとにすみませんでしたね。よろしくおっしゃってくださいませ。(物をもらった時のあいさつである。)

八丈島・青ガ島では、「イタス」がじつによく用いられているらしい。八丈島出身の一中年女性は、私に、広島で、「イタス」と「タモレ」がよいことばだと語ってくれた。「イタス」のよくおこなわれているいきおいの中でおこったことばづかいであろうか、つぎのような「イタシイタス」ということばづかきも見える。

○オー コリャ ナガバナショシテ ヒツレイ イタシイタソ ガ。

(おゝこれは長話をして失礼いたしました)。

これは、本山桂川氏の『海島民俗誌』(一誠社 昭和9年2月)に見られるものである。(その書では、「便宜上八丈本島のみ就て、其特異な『八丈島方言』の若干を述べることにする」<P.163>とある。)

八丈島方言に関する早期の調査結果、「口語法取調」(『八丈島教育会報』第二号 筆写物によつたため年月不詳)には、「〜申シイタス」の実例が見える。

○コノ本ヨチックリ借り申シイタス

(コノ本ヲ一寸オ借り申シマス)

など。

八丈島方面の「〜イタス」は、以上のように、自己の動作に言うことはい

ちじるしいものであり、「イタシマス」と言われているのによっても理解されるように、謙退の意の明らかなものである。が、「イマス」の頻用にともなつての自然結果であろうか、時に「イマス」が相手の行動を言うばあいにも用いられたりしている。私は、これを、「イマス」表現法の「ていねい表現法」化だろうと考えたい。——「私が話シ申シイマス。」（私がオ話シ申シマス。）などと言っているばあいも、これは自己の行動を言う表現ではあるが、「～イマス」が、もはや「～マス」なみにつかわれてもいるかと思われる。（これらに関して、のちにあらためて述べる。p. 167）

「イマス」が上のようにつかわれている習慣を見て、人は、ふしぎにも思うだろうが、方言上のこととしては、ふしぎとは見なくてよいのだと思う。九州の佐賀県方面では、「何々しゴザル」というように、「～ゴザル」の言いかたをすることがさかんである。中国山地のうちなどでも、「ナニ ショーゴンシャー。」（何をしてらっしゃる？）などと言っている。本動詞に、助動詞（補動詞）「ゴザル」をつけるのも、「イマス」をつけるのも、似たことである。共通語の面では、「行きナサル」「お行きナサッタ」など、「ナサル」を、本動詞を助ける第二動詞として用いる習慣が見られるか。「ナサル」のほかの動詞が第二動詞として運用されることは、あまりなかろう。それゆえ人は、「イキゴザル」や「申シイマス」を奇と見るのであろうけれども、動詞複合の原本の理にたちかえてみれば、これらは、いずれも同質同等のものとしてされる。考えてみれば、共通語法なるものは、二動詞複合の自由さをみずから切りすてているのである。——それが共通語の行きかた・生きかたでもあろう。ともかく私どもは、今、「～イマス」などの自在な運用を見ることによって、日本語表現法での二動詞複合の方法、ないしは助動詞運用のはばびろさを、興味ぶかく認めることができる。しかも「～イマス」の事実が、ことかわつて、太平洋上の孤島にばかり存在しているのは、別して私どもの注目をひくものである。

関東地方一般に、「下 イタシマシテ。」などという「イマス」ことばが流通していることは、言うまでもない。その中であつて、二・三、次下のような

事実が指摘される。斎藤秀一氏編『東京方言集』（自家版 昭和10年1月）には、

○ドーイ <sup>△</sup> タシテ (=どういたしまして。挨拶のことば)

との実例が見える。秩父市教育委員会編の『秩父の伝説と方言』（秩父市教育委員会 昭和37年5月）の中には、

○モヨーい | たします

雨が催する意。雨が降りそうだ。天氣が崩れかける。あいさつ。

との記事が見える。田口美雄氏は、「茨城方言語法二三の考察」（『方言研究』第十輯 昭和19年7月）で、

「致します」は「イタジャース」

と述べていられる。私は、かつて、茨城県北部の宿で、

○オスミデス <sup>カ</sup>。ドーモ オツマツ イタシマシタ。

とのあいさつことばを聞いた。

東北地方では、まず、土井八枝氏の『仙台の方言』に見える、仙台の古風なことばづかいを引用させていただきたい。

「あやにくまづ、とぶらなく致して居りして、おしょしござりす」（生憎、とり散らしてお恥しうございます）

本書P.281には、

いたしす（致します）

ござりす（ございます）

そーいたしすてござりすまづ（左様いたしますでございますよ）

との記事も見える。

岩手県下では、かつて、

○オツマツ イタシマシタ。

との別辞を聞いたことがある。婦人からであった。「おそまついたしました。」

との言いかたは、だいたい、国の東系の言いかたではないか。

### 第三節 ツカマツル

山口麻太郎氏の『続巻岐島方言集』（春陽堂 昭和12年2月）には、

ツカマツル 謙譲を表わす。連続，用法，標準語通り

との記事が見える。「標準語通り」とあるのからすると、この「ツカマツル」は、土地ふうのものであるのだろう。山本俊治氏の対島調査の結果にも、

- マタマカリデマスケ (普通) (辞去の挨拶)  
○マタサンジョーツカマツリマツョー (丁寧)

との実例が見える。

上の対島例だと、「ツカマツル」が助動詞ふうのものになっているとも見られようか。

近畿の方言書『南紀土俗資料』には、「ツカマツル」に関してのつぎの活用が見える。

<u>第一活用形</u>	<u>第二</u>	<u>第三</u>	<u>第四</u>	<u>第五</u>
お受けつかまつら	つかまつり	つかまつる	つかまつれ	つかまつろー
				つかまつろ

この表の「ツカマツル」は、明らかに助動詞であろう。

### 第四節 マイル マイラス類

本節では、自動詞の「マイル」と、他動詞の「マイラス」類ならびにその助動詞化したものを取りあつかう。

神社仏閣にお参りすることは、わが国の伝統的な習慣であり、そこには、「参る」という謙譲表現法動詞が、もっともふつうに用いられてきている。そのような「マイル」動詞の用法に関連することであろう、日常のあいさつことばの中でも、つよい謙讓心理の表現に、「マイル」動詞が熟用されている。あい

さつことばで、「行って 参ります。」などと言っているのは、その顕著な事例である。——おとなも子どもも、このさい、「行く」というようなふつうの動詞に、特定の古風な「マイル」を接続させているわけであるが、今日なお、だれしも、さほどこの接続にはあやしみの情などいだいてはいない。考えてみれば、特殊な連語法とも言えるものではあるが、それが人々に特殊とも感じられていないのは、それだけ「マイル」が、生活の中によくとけこんでいるということであろう。

以下に、方言上の「マイル」を見ていく。ところで、方言上では、「マイル」に関連して「マイラス」類も見いだされ、これの、動詞及び助動詞として用いられるさまが、別して私どもの注目をひくありさまである。

奄美大島には、

○マジン オモロー (一緒に行きませう)

との言いかたがあるという。(宮良当壮氏「南島方言採集行脚(一)」『方言』第一卷第二号 昭和6年10月)「オモロー」は、「マイロー」なのかどうなのか。

鹿児島県下に、「マイル」動詞用法のかなり目だたいものがある。「メンソ」、これは、「参りませう。来ませう。鄭重な言葉。」であるという。——野村伝四氏の『大隅肝属郡方言集』(中央公論社 昭和17年4月)に見える記事である。鹿児島県下に、「メ<sup>イ</sup>ア(ヤ)ゲモソ。」(ごめんください。)のあいさつことばが流布している。「参りあげ申そう。」との言いかたになっている。——「マイル」動詞に「上ゲル」を接続させるのは、鹿児島県下だけのことであろう。

私が鹿児島県下で聞いたことばに、

○ハ<sup>オ</sup>ル キッチ ゴ<sup>ル</sup> フンヂ ガ<sup>ッ</sup>コン メ<sup>ロ</sup> ヤ。

羽織を着てぞうりをはいて学校に行こうよ。

がある。「メ<sup>ロ</sup>」のところが「参ろう」であろう。また、県下で聞いた、ほかの一事例に、「メ<sup>ケ</sup> イ<sup>ッ</sup>タ」というのがある。これは、「参りに行った」であるという。

宮崎県の西南部域もまた、上述の鹿児島県下状況に通うものを、なにほどか

見せようとしている。「(「メイア(ヤ)ゲモン」なども聞かれる。)米良地方には、あいさつことばに「メール」が存在しているらしい。

三ヶ尻浩氏の『大分県方言の研究』には、

メーローヤー 参りませう。寺仏事などに人を誘ふ詞。(速)

との記事が見える。

さて、問題は九州南部の「マイラス」類である。

○オマイモ コユ メーラスッ ガ。

おまえにもこれをあげるよ。

○メーラスッデ ケー。

“やるから来い。”

この「メーラスル」ことばは、鹿児島県始良郡国分町出身の一女教師から、昭和14年に聞き得たものである。しかもこれらは、その女教師が、少女時、老女たちから聞いたものであるという。その14年の時、鹿児島女子師範学校女生徒の、甑島出身者たちが、私の前で語りあったことばは、

○メラスルチュー ホーゲンガ アッ トホラ。

「メーラスル」という方言があるよねほら。

である。

春日政治氏に、「甑島に遺れるマラスルとメーラスル」のご発表がある。(『九大国文学』第二号 昭和6年11月)これに、甑島三島での、「マラスル」系のことばと、「メーラスル」系のことばとの、分布と用法との詳論が見られる。論中の実例、

○あいばばーさんにマラせて来た。(あれをお婆さんに上げて来た。)

○こいばあぎやーマラスイ。(之を貴方に上げる。)

は、動詞用法の二事例である。

○教へメーラセー。(教へて上げよ。)

は、助動詞用法の一事例である。「メーラスル」の変化形としては、「メーラスー」「メーヤスイ」「メースル」「メース」があげられている。

春日博士に、最初、甌島の「マイラス」類のことばづかいを報告されたのは、上村孝二氏であった。その上村氏が、『世界文化地理大系 6 (日本 V 中国・四国・九州)』(平凡社 昭和32年9月)の中の「九州地方のことば」で、大隅の有明湾岸や甌(こしき)島には≪差上げる≫意味で古形のマラスルというのがある。

と述べていられる。同氏が、近年、「甌島方言概説」(荒木博之氏編『甌島の昔話』所収 三弥井書店 昭和45年11月)で説かれるところによると、「参らす」系の語群は、“廃語も同然”であるという。

かつては鹿児島県下の広くに、「マイラス」類のことばづかいが、かなりおこなわれていたのではなからうか。

肥後南部にも、鹿児島県下からのつづきで、「マイラス」類の注目すべき事例が見いだされる。熊本県球磨郡の湯之前町のことばについて、その地出身の森田武氏の教示せられるところは、つぎのとおりである。

- ミシエミャーセ。(お見せしなさい。)
- ミシエミャーセロ。
- ツレミャーセ。(ご案内しなさい。)
- 上のおばさんに ミシエミャーシテ ケー。

(上のおばさんに、お見せしてこい。)

「参らす」にあたる言いかたが、「ミャース」となっている。上の諸例は、「ミャース」が助動詞として用いられているものである。「ミャース」が、単独に動詞として用いられるばあい、それは、「お追従をする」の意になるという。

九州地方の他地域には、「ミャース」助動詞などが見いだされないようである。にもかかわらず、山口県東部の山地、旧広瀬町のことばには、「まいしょう」(上げよう)が見いだされたりする。近くはまた、長門北部で、岡野信子氏は、「オマエニ マセル イノ。」(以前、子どもに向かって言った、と、老女教示)などを聞きとめていられ、「マセル」「マスル」「マス」があるとしていられる。

島根県下にも問題事例がある。品川誠氏の『島根県仁多郡布勢村の言語生活

の体系的な記述』（稿本 昭和27年2月）には、つぎの特異な記事が見える。

○お金をかへしてくれなかった、

カシエマエラシエダッタ

○お金を返してはくれない、

カシエマエラシエン

これらは、相手が自分に返さないことを言って、「参らせん」などと言っている。鳥根女子師範学校（石田春昭氏担当）『隠岐島方言の研究』（鳥根女子師範学校 昭和11年9月）には、「マアスル」が見え、

「マアスル」といふ語があつて「参らす」と同じ働きをする。

としていられる。なお、

老人の間または片田舎にて普通に用ふ。幾分見下したる意もあり、また親しむ意もあり。何々して遣はさうの意。或場合には与ふる。

タツケテマーショ- = 助けてやらう、コリヨマーシャエ = 之を呉れ コリヨマーシャランカ = 之を呉れないか

との記述も見える。

中国地方の他地域や、四国地方には、「マイル」や「マイラス」類について述べるべきものがない。

近畿諸方言上でも、「マイル」や「マイラスル」類の、これという用法が、私にはまだとらえられていない。（和歌山県南内の「マイル」は「止める」であつて、—— 一見まぎらわしくもあるけれども、非なるものである。）

古文献、たとえば狂言本に見える「おませう」「おまする」などは、土井忠生先生訳『ロドリゲス 日本大文典』（三省堂 昭和30年3月）にも見える「おまらする」に縁の深いものであろう。その「おまらする」の、「おます」となったものが、今日近畿内に存在し得ているかという点、今日ではもはやそれが見られない、と答えることができよう。「あります」の意の「オマス」が近畿にしきりにおこなわれており、たとえば、「オマッカ。」（ありますか。）などと言われているが、このばあいの「オマス」は、単純な丁寧表現法にはたらく

ものである。語形は等しく「オマス」であっても、起源は異なるのが、後者の「オマス」であろう。——村内英一氏は、「オリマス」からこの「オマス」ができたと見ていられる。あるいは、謙譲の「オマス」が、丁寧の「オマス」に転用されているということもありうるのか。

『日本国語大辞典』第四巻の「おま・す」の条には、「語源ははっきりしないが、『御座ります』が『おざります』となり、これから変化したものか。」とある。

さて北陸となると、たとえば福井県東山地部内でなど、「おまする」に近い「オマセル」があって、注目される。(畿内にはもはやこの種のものが見られなくて、北陸にはその残存のさまの見られるのがたっとい。)天野俊也氏の『福井県大野郡北谷村に於ける敬語 附録 北郷村岩屋』(自家版 昭和28年1月)には、

「下さる」に關聯して「上げる」といふことを一般に「しんぜる」「おませる」といってゐる。

コレ シンジョーカ。(これ 差上げようか)

以下の数例は真砂でも同じいひ方があるといふ。(真砂出身の人が調査の時同席であった。)

コンダ オマセルトキニ イッショニ オマセル。(今度差上げる時に一緒に差上げる)

タバコ オッサンネ オマセ。(煙草を をちさんに 差上げよ)

オマンタカイ マダ オマンテナイ。(上げたか、まだ差上げてない)

ソリャー オマセン。(それは 上げない)

オマセリャー エーノニ ナンデ オマセナンダ。(上げればよいのに何故上げなかった)

オマジョーマイカ。(上げようではないか)

との記事が見える。

石川県の著者不詳『能登国鹿島郡方言』(七尾春成印刷 年月不詳)にも、

オマセル 進ゼル

というのが見える。愛宕八郎康隆氏が、能登東北端の珠洲市域を調査した結果によっても、そこに「オマシル」の存在することが知られる。氏は、「あげる」を言う珠洲のことばの諸相を、「上」から「下」への段階別で、つぎのようにとりたてていられる。

オアゲスル→アゲル→シンジル→オマシル→ターシル(取らせる)→イクス  
→ヤル

「取らせる」の「せ」を「シ」とするのと同様に、「進ぜる」の「ぜ」も「ジ」としており、同様に「オマセル」も「オマシル」としている。珠洲弁の、こういう特定習慣の中に、「お参らす」ことばの残影が温存されているというわけである。

富山県下に、

オマス さしあげる。敬語。(南谷村・宮島村)

オマセル 右に同じ。( " " )

が見られるのは、もっとも注目にあたいする。(佐伯安一氏『砺波民俗語彙』高志人社 昭和36年3月)

「マイルス」類のうち、「お参らす」類関係の「オマセル」「オマス」などが、とかく北陸地帯に見いだされるのは、私どもに、いくえにも北陸地域の連近畿性を考えしめる。

北陸を出はなれての中部地方一般には、もはや「マイル」や「マイルス」類に関して、特別にとりたてるべきものがない。

が、転じて、太平洋上の八丈島を見ると、ここには注目すべき「マイル」ことばがある。「また来ましよう。」というのだと、「メーロ ワヨー。」とされている。男女ともにこのような言いかたをするという。

○メーララーイ。

は、「参りました。」の意で、多く子どもがつかう訪問辞であるという。『全国方言資料』第7巻の八丈町に関する記事にも、

f ヤメー メーロ ツモイデ  
山へ 行く つもりで。

f コガン ネガッテ メヤラー

このように お願いに 来ました、  
などが見られる。八丈島出身の一婦人は、——通信で、  
「メーロ ワヨ。」(帰りますよ。)は、近しい人々のことばで、おとなも子  
どももこれを言い、「メーリー イタソワ。」は、かしこまっていていねいに  
言う時のもの、男女ともこれを言う。  
などと、私に説明してくれた。

あと、東国地方で問題の事象を指摘すべきは、東北内においてである。新妻  
三男氏の「相馬に於ける敬語動詞及び敬語助動詞について」には、

○さあ、めえーりすべ(さあ参りませう)

というのが見える。

注目すべきことに、福島県西南部内には、「まらする」系の「まあせる」が  
あるらしい。菅野宏氏が、これについてつぎのように報じていられる。(「檜枝  
岐の方言」『方言と文化』)

マーセルは、会津平や県下各地にはありませんが、田島町から西の方、つ  
まり南会津郡一带にはまだ使われています。これは中世のマイラスル、マ  
ラスルから出たもので、さしあげる意であります。

東国地方も、このように、交通上の幹線路からかなりはずれた地域となると、  
やはり古風なものをきれいに温存しているのか。それにつけても思われるのは、  
「マラスル」などという、もともと近畿中心に栄えたであろうことばが、西ば  
かりか東へも、こうしてよく弘通し得たものだということである。

仙台地方では、「参ります」の「メーリス」のおこなわれることがいちじる  
しい。打消しの言いかたは、「メーリセン」である。松島湾岸で私が調査して  
得た実例の一つは、

○マ<sup>マ</sup>メーリ[i]ス[ü]。

また来ます。

である。同地では、「メーリヤス」を多く聞くことができた。たとえば、

○汐が サシ[i]テ メーリ[i]ヤス[ü]から。

汐がさしてまいりますから。

○ナンデ メーリ[i]ヤス[ü]タ ヤー。

“なに用でまいりました?”

などと言っている。「参る」に「ます」がつづいたばあいは、「ま」の脱落したのに等しい結果になっているが、「参る」に「ヤス」がついたばあいは、「ヤ」略はおこっていない。

「メーリヤス」の言いかたは、岩手県下にも見いだされるらしい。

以上が、問題の事象の、全国での存立と生態とである。さきにもふれたように、「参らする」や「参る」の言いかたの広く国の東西に見いだされるのは、重要視すべきことであろう。やはりこの種のことばは、通用語として、かなりよく全国的におこなわれたものか。

## 第五節 参ジル

「参上する」については、方言上、言うべきことがない。「参ジル」について、いくつかの事実が指摘される。

山本靖民氏『肥前千々石町方言誌』（自家版 昭和4年7月）には、

サンジマス 参ります

というのが見える。長崎県下には、なお諸所に「参ジマス」が見いだされるのか。吉田弘文氏の「長崎県の方言」（『放送講演集 九州方言講座』日本放送協会九州支部 昭和6年5月）にも、

参ります サンジマス（長崎）

が見える。

中国地方内にも、「サンジマス」ことばが点在する。広島県下にも岡山県下

にもある。あいさつことばで、「えんりょなしに 参じました。」とか、「また参じます。」とかの言いかたをする所が方々にある。

内海島嶼のうちにも、

○イテ サンジマス。

行って参ります。

などのあいさつことばがあって、「参ジル」の特定の残存が認められる。

四国では、金沢治氏の『阿波言葉の辞典』に、

イテサンジマス [句] あいさつ語

いって参ります 家を出かける時のあいさつ語

との言いかたが見られる。

近畿となつては、前田勇氏の『大阪弁の研究』（朝日新聞社 昭和24年8月）に、

行て参じましてん

が見える。東条操先生編『全国方言辞典』（東京堂 昭和26年12月）にも「さんじます」が見え、

さんじます [句] まいります。「行てサンジマス」大阪。

とされている。

和歌山県下にも「サンジマス」ことばがあり、奈良県下にもそれがある。ただし、辻村佐平氏の『菟田之方言』（自家版 昭和14年10月）は、「サニマス」の形を出している。すなわち、

○ンぢや、いてサニマス（行って参ります）

とある。

三重県下にも「サンジマス」が見える。

中部地方では、土田吉左衛門氏がその『飛驒のことば』で、

いってさんじます [句] 行って参ります。慣用の挨拶ことば。（児・多）

としていられる。

関東、埼玉県下にも「サンジマス」ことばがあり、『秩父の伝説と方言』に

は、

○イッテサンジマ」シタ

「いってまいりました」という帰宅のあいさつ。

との記事が見える。

以上、「サンジマス」の言いかたの見られるのがつねであって、「サンジル」そのものの言いかたは、まず見いだしがたい。「参じる」ことばが残存するとすれば、そのように「+ます」というていねい形式でしか残りようがなかったということなのか。

## 第六節 ウカガウ

「ウカガウ」という謙譲法動詞のおこなわれることは、方言上では、あまりなからう。とはいいいながら、あらたまつたもの言いのばあい、方言人たちも、「ウカガウ」ことばをときにはつかうことがあるようにも思われる。——「ウカゴエテ」などの謙虚な言いかたが聞かれないでもない。

「ウカガイマス」となれば、これはほとんど、共通語の言いかたとしておこなわれていよう。

## 第七節 マカル・マカリデル

九州南部地方に「マカル」謙譲法動詞があり、

○イマ マカン デー。

今、まいりますから。

○イマ マカンデ、イットッ マッチョイヤッタモンセ。

今、まいりますから、ちょっとまっています。

のようにつかわれている。退出することではなくて、行くことを言っている。変化形には、「マカシタ」「マカイモソ」「マカンソ」「マカハン」などがある。

薩摩の一人は、「マカシタ」と「マカシンタ」とについて、前者は近い所へ行った感じ、後者は遠い所へ行った感じ、と説明してくれたりした。なお、「ドコドコエ マカシソ（まいりましょう）。」と言って、「マカソ」とは言わぬという。

私は、宮崎県中部西奥山地の西米良地方でも、「マカル」ことばの残存を知り得た。

○マッカリモース。

などの言いかたがある。さらにまた、

○マカシデモースー（モース）。

などとも言っている。ただし、いずれも、老男にごくまれに用いられる程度のものであるという。ここに、「マカリ出ル」の言いかたがあるのは注意をひく。土地の人、菊池むねお<漢字不詳>氏の『米良方言集』（稿本 年月不詳）には、

○まかっでもうした（参りました）

の例がある。「挨拶口上」だという。

「長崎県杵岐郡郷ノ浦町」では、

f オンメーニモ マカリデジ オリマシタラ マ トート ケサ オシ  
お見舞いにも あがらずに おりましたら、まあ とうとう けさ 死な  
ンダチ イーマスナー  
れた そうですね。

などと言っている。（『全国方言資料』第9巻）対馬でも、たとえば厳原でなど、

マタ マカリデマスケ

などと、辞去のあいさつをしているという。

肥前、佐賀県下などにも、「マカル」が存在するようである。（P.132）

転じて、中国、出雲地方に、「参上する」意の「マカイデル」がある。

○ハイ、イマ モッテ マカイデマス。

はい、今、持ってまいります。

などと言っている。（これについては、「オババの上等のことば」との解説があ

った。) 加藤義成氏は、

敬語動詞に於て、敬譲の意を表はすに、マカエデ～(罷出る=参上する) サ  
ジャーゲ～(差上げる) カスィコマ～(畏まる=承知す) 等を用ふる事は  
一般である。

と述べていられる。(「中央出雲方言語法考」『方言』第五卷第四号 昭和10年  
4月)

岡山県児島郡山田村では、「マカル」が、「仏壇等に供えてある菓子等を子  
供へ取り与える」意に用いられているという。

あと、「マカル」が問題になるのは、東北地方においてである。——「まか  
んでる」が、土井八枝氏の『仙台の方言』に見える。

「おや、まかんできるところでござりしたが、用できしてまづ、わたしまか  
んでしてござりす」(父が参上すると申して居りましたが、用事が出来ま  
したので私があがりましてございます)

などとある。「まかんできる」ともある。

このほ一さまがんできるばんでどごさもめーりせん。

(こちらへ伺ふきりでどちらへもあがりません。)

「まかんできす」(参上します) ともある。

小松代融一氏の『岩手方言の語彙』の、「旧伊達領」の部にも、

マガンデギル 参上する

マガンデル 同

の事例があがっている。

今日、知りうる分布状況は、以上のとおりである。その生息のさまは、薩隅  
地方のばあいを除いては、どこのばあいにも、強勢ではない。それはそれとし  
て、いずれの地でも、今日、「マカル」「マカリデル」などが、退出すること  
を言うものでなくなっている。語詞の時代推移に、人の用語意識の、予断をゆる  
さない変遷がおこりがちであるのを、ここでも認めることができようか。

## 第八節 アガル

「参上する」の意で、「アガル」を用いるのは、およそ全国通有のことであろう。「アガル」を用いる表現法が、謙退のいちじるしい情想をあらわすことは、多く言うまでもない。

九州方言例を、一つ、「福岡県三井郡善導寺町」(『全国方言資料』第6巻)からあげるならば、

*m*ソイヂャー マター アスノアサ ハヨー カエンニ アガリマスケンデ

それでは また 明朝 早く お返しに あがりますから。

がある。「アガル」に「マス」のつづくのは、もっとものことである。それはそれとして、たとえば「アガルケンデー(うかがいますから)」など、「アガル」のみを用いても、よく「あがります」的な気分をあらわしうることも、私どもの経験に明らかなところであろう。

「たべる」や「飲む」のばあいにも「アガル」のつかわれることは、また言うまでもない。ただし、このばあいは、「アガル」が尊敬法動詞である。それと「行く」や「訪ねる」を言う「アガル」とはものがちがうけれども、本来は、「アガル」という語の、一つがあるばかりである。したがってとも言えようか、現在も、「行く」や「訪ねる」を言う「アガル」の用いられる時の気分は、まさに、「たべる」や「飲む」を言う「アガル」を用いる時の気分にあい通っている。——謙讓表現法と尊敬表現法とのちがいはあっても、「アガル」動詞のばあい、両表現法の通じあいは顕著である。

## 第九節 アゲル・サシアゲル

「アゲル」は、今日の通用ではだいたい、謙讓法動詞とは言わなくてもよさそうなものになっていよう。「アゲマシヨ。」などの言いかたも一般におこな

われているが、この種の言いかたも、おおよそ、謙譲の心理のくみがないものになっていよう。このせつは、犬にも、「ごはんをあげる」などと、都会人たちは言いならわしたりしている。

しかし、「アゲル」が、本動詞「申す」などに接続してできた「申しあげる」の言いかたなどになると、これは、明らかな謙譲法動詞をなしている。(――複合動詞とすれば、これの第二動詞として「アゲル」が用いられて、その複合体のうえに、謙譲表現機能が成立している。)

「～アゲル」(第二動詞の「アゲル」を助動詞と見ることできる。)の見られる点でもっとも注目すべき地域は、九州南部地方である。種子島では、

○ドーカ ヨカゴト タノミヤゲモース ヨー(タノンミヤゲモース ヨー)。

どうかよろしく「たのみあげ」ますよ。

○ゴヤッカーサマー ナリヤゲモーションター。

などと、「頼む」や「なる」に、「アゲル」がつづけられている。諸動詞に、自由に第二動詞(助動詞化)の「アゲル(アグル)」のつづけられているのが注目される。上村孝二氏の「甌島方言概説」(荒木博之氏編『甌島の昔話』)には、一般的には薩隅式、アグル(上げる)を助動詞として、起コシアゲシカ(起こし申さぬか)のように云い、ついに貰イアグル(頂く)という複合形も出来た。

との記事が見える。薩隅地方の「ごめんください。」は、「メイアゲモス。」(参り上げ申す。)などである。

薩隅地方に、「申しあげ」の「モンヤゲ」、「語りあげ」の「カタイヤゲ」、「聞きあげ」の「キッキヤゲ」、「待ちあげ」の「マツチャゲ」、「頂きあげ」の「イタダッキヤゲ」、「もらいあげ」の「モレアゲ」など、「～アゲ」表現法のとられることは、まことに隆盛なものがある。どのような動詞にも「アゲ」がつづけられてよいのであろうか。それにしても、私などの経験からすれば、「たのみあげ」の「タノンミヤゲ」、「なりあげ」の「ナイヤゲ」などが、とくに慣用のいちじるしさをを見せているように思われる。

○ドーカ タノンミャゲモンデー。

どうかおたのみいたしますから。

○ゴヤッケサー ナイヤゲモス ナー。

ごやっかいになりますね。

は、大隅南方での二例である。

薩隅地方の「〜アゲ」表現法での「アゲ」に、第二動詞（助動詞）として熟用顕著なものがある証拠には、これが、さまざまに、上の第一動詞との融合を見せている。こういう融合態は、やがて、一語の謙譲法動詞にも該当するものになったか、「申しあげ」の「モシヤゲ」にも、さらに「モス」（申す）がつづくことになっている。「アイガト モシヤゲモス（ありがとう「申しあげ申す」）。」など。薩摩半島南部内では、

○アイガト モサゲモンタ ナー。

ありがとうございましたね。

などとも言っている。

九州南部を出はなれて肥前西部に来て、たとえば、佐世保市域で、「ミシヤゲテ（見せあげて）」などと言っている。

○フロシキバ ミシヤゲテ。

ふろしきをお見せして。

これは、店の老女が、そこの嫁さんに、みやげ用のふろしきの品物を私に「お見せして」と言うところであった。老女の説明に、このへんはみな「ミシヤゲル」です、ともあった。久保清氏・橋浦泰雄氏の『五島民俗図誌』（一誠社 昭和9年11月）には、福江のことば、

もつしやぐる（申し上る）

さしやぐる（差上る）

が見えている。

肥前は、佐賀県下にも、「まかりあげた」の言いかたなどが見える。

○キューワ マタ オフンミャー オッキャーバ イタダチャーテ、エンリョ

ノー マカイアゲタ バンタ。

きょうは、また、ごちそうのお使いをいただいて、えんりょなく参上  
しましたよ。

杵岐島にも「キキアゲマッシャ」（承りますれば）などの言いかたがあるとい  
う。（『全国方言資料』第9巻）

中国地方では、出雲での「〜アゲル」の用法、「サシャーゲ〜」（差上げる）  
などが注意される。（P.129）——出雲方言での古風な言いかたとして、こ  
れが生きているらしい。

ほかに、「サンアゲル」を、まずは方言生活の中で用いている所とすれば、  
関東地方をあげることができようか。

「オアゲシマス」の言いかたは、中部地方内にも見られる。

東北地方の『仙台の方言』（土井八枝氏）には、「〜アゲ」のつぎのような  
用法が見られる。

「まづ、こんなにおいたみかけあげしておしょっさんでござります。」

（まあこんなにお世話様になりましたして恐れ入ります、）

「おひまだれかけあげしてまづ……」

（お暇つぶしをさせ申しまして……）

ここには、「アゲル」動詞を助動詞ふうにつかう、自由な様相が見られる。——  
もとよりのことと言えようか、ここには、「もーしあげしてござります」など（P.  
147）、「申す」に対して「あげ」を接続させることもいちじるしい。

上のような言いかたは、仙台地方にかぎったものではないのであろう。とも  
あれ、東北地方内にも「〜アゲル」の手あつい表現法のあることが、九州南  
部地方でのとの対比のもとで注目される。

## 第十節 進ゼル

九州内には、「進ゼル」謙譲法動詞の見いだされることが、比較的すくない

のかもしれない。天草での一例は、

○シンゼモーセ。

「進ぜ申せ。」

である。——「アゲモーセ。」「シモーセ。」「シンゼモーセ。」などと、「申ス」がつかわれた、という話しの中に、「進ゼル」ことばの例も出たしだいである。話し手たちは、これらを過去のものとしていた。

中国地方に、比較的多く、「進ゼル」ことばを見いだすことができる。山口県長門北部に「進ゼル」があり、山口県東部内にも「進ゼル」がある。周防旧広瀬町などでは、「進デル」などとも言っている。山口県下の「進ゼル」は、「さしあげる」とか「進上する」とかの意のものである。山陰、隠岐の島に「進ゼル」ことばがあり、島後では、

○シェンシェガ カオー アラワッシャルケー、 ミヅー デーテ シンジ  
エー。

先生が顔をお洗いになるから、水を出してさしあげなさい。（老女  
→孫むすこ）

○オマエノ トコモ、チートワ シンジマス ワナ。

あなたのところも、すこしはあげますわ。（中女）

と言っている。（神部宏泰氏調査）神部氏は「シンジマス ワナ」はよく出ることばだと言っている。ここに「シンジる」の言いかたが注目される。横地満治氏・浅田芳朗氏『隠岐島の昔話と方言』（郷土文化社 昭和11年6月）や『隠岐島方言の研究』には、「センゼル」「センゼマス」などの言いかたが見える。鳥取県下にも「進ゼル」が見いだされる。

○イママデ ワタクシモ ハナシテ シンゼタケド テー。（老女→老女）

（“先生とか町の有力者に対して、あるいは、それらの人を前にしたときなどに、用いる。非常に改まった意識を伴う。”）

は、東伯郡三朝町の例である。（室山敏昭氏調査）岡山県下の内海島嶼、備中の真鍋島では、「進ゼル」ことばが、今も、かなりよくおこなわれている。

○コレオ コンタニ シンジョ。

これをあんたにあげよう。

など、若い者が老人に言ってもいる。

○コレオ コンタニ シンゼル ワイ。

については、

「シンゼル」は「アゲマス」だ。男女とも言う。年寄りが言う。年寄りが言うし、年寄りに向かって言う。男女ともに年寄り同士が言うのがふつう。

との説明があった。

○アレ イッポン アルケン、シンゼル ワイ。アレー アゲル ワー。

あれが一本あるから、あげるよ。あれをあげるよ。 (大男→大男)

という言いかたも聞かれた。岡山県東南隅、日生町内でも、「進ゼル」ことばが聞かれた。

○ヒンゼヤンセー。

あげなさい。(人に物を)

などと言っている。今石元久氏は、この地で、

○オシエテ ヘンジェラー。

教えてあげよう。(小女→今石氏)

○オシエテ ヘンジョ。

教えてあげよう。(小女→今石氏)

などの例を得ていられる。小女も「進ゼル」ことばをつかっているのか。

真鍋島からははるかに西に位する伊予大三島にも、「シンゼル」ことばがあるか。その島北の一集落、私の郷里などでは、「進ゼル」を、もっぱら神仏に物を供えるばあいだけつかってきている。讃岐の西端の島、伊吹島では、

○アノ ネー。エー コト オシエテ シンジョ カイ。

あのね。いいことを教えてあげましょうか。(老女)

などと言っている。

四国本土内には、「進ゼル」ことばがあまり見いだされないようである。土



氏調査) (p. 123)

北陸を除いての中部地方内では、岐阜県下や静岡県下・山梨県下、佐渡島などに、「進ゼル」ことばが見いだされる。子どもが言うばあいは、神仏に関してのことでありがちだろうか。

関東地方に関しては、今は、秩父市教育委員会編『秩父の伝説と方言』の、  
シンゼル → ヒンゼル ル 進ぜる。神仏に物を供える。  
を指摘しうるばかりである。

東北地方に、点々と「進ゼル」ことばが残存していようか。五十嵐正巳氏『会津若松市方言集稿』（自家版 昭和11年4月）には、

ヒンゼル (=ヘンゼル) 進ぜる 差上げる  
とある。山形県下の米沢弁にも、物をあげる意の「進ゼル」があるという。山形市西南方で私が聞き得た「進ゼル」例は、

○オ<sup>ー</sup>チャ シ[i]ンゼ<sup>ッ</sup>カラ。

お茶をさしあげますから。 (老女→藤原)

である。

## 第十一節 ソナエル

「ソナエル」ことばが、神仏やお月さまなどに物を供えるばあいにつかわれるのは、世上にありがちのことだろう。(——ただ、国の東の地方でよりも、西の関西地方のうちに、これがよくおこなわれていようか。)  
「お供えする」などの言いかたも熟している。

「お供えする」などは、いわゆる共通語にもなっているものであろう。

## 第十二節 申ス・申シアゲル

第一に、九州南部の「申ス」ことばが注目される。薩隅地方では、動詞とし

での「申ス」がよくおこなわれており、これの、上品な待遇表現にあずかることがいちじるしい。

○ゴブレサー モシヤゲモシター。

ご無礼いたしました。（ごくていねいであり、若い人よりも年寄りがよくこう言う。）

○アイガト モサゲモシタ。

ありがとうございました。

○アイガト モサゲモ。

ありがとうございました。

などと、かならずしも「言う」ことにはかかわりなく、謙譲法動詞「申ス」がよくおこなわれている。（「申シアゲ」とあり、「モシヤゲ」が「モシヤゲ」ともなっている。「アイガト シヤゲモシタ。」の言いかたもある。）「言う」ことを言う「申ス」に関しては、「オモシアゲ」（お申しあげ）などの言いかたもなされている。

上記のような、「申ス」の自由な使用は、「申ス」の助動詞用法にも見られる。たとえば種子島で、

○ヒョーゴケンニ オリモースラー。

兵庫県にいますよ。

などと言っている。この種の「モース」は、薩隅地方一般では、「モス」と短呼せられるのがふつうである。

○アイガト モシヤゲモス。

ありがとうございます。

など。この種の「モス」は、もはや丁寧表現法助動詞とされる。——種子島の「オリモース」などのばあいの「モース」も、当地方では、長呼形ではあるが、やはり丁寧表現法助動詞になっているものと見てよからう。

日向中部西奥内にも、

○何々を アゲモソ カイ。

何々をあげましょうか。

など、薩隅地方なみの「〜モス」が、わずかながらおこなわれている。さて、この地方に、謙譲法動詞の「申ス」がまた残存しており、“もとは「申ス」をつかっていた。家がらのよい家で。”と説明する人々もある。

○モーシアグッデス。

申しあげるのです。

と、私に話した人もあった。なお一例、私が聞きとめたものに、

○ナンテ モサイタ ナー。

なんとおっしゃったかねえ。

がある。——この「申ス」は「おっしゃる」の意につかわれているので、「申ス」の「非謙譲ていねい表現法化」用法と見られる。(P.163) この地方にまた、「オタノミモーシマス。」など、「申す」の助動詞用法の、「言う」には関係のうすい用法も見られる。この種の「申す」は、おおよそ九州中部北部の全般に見られよう。

天草下島の南部では、

○オジサンバ ツレモーシテ イケ。

おじさんをおつれして行け。

などの言いかたが聞かれる。天草下島東北岸佐伊津の、

*m*アー モー ミタテモ シェー

(よく)とむらってあげなさい。

の言いかたでの「ミタテモシェー」は、「モシェ」と短呼にはなっているが、やはり謙遜の意のこめられたものであろう。(『全国方言資料』第9巻「熊本県本渡市佐伊津」)

「長崎県北松浦郡中野村」(『全国方言資料』第6巻)では、

*m*オーキニ アリガトー モーシマシタ

たいそう ありがとう ございました。

オーキニ

ありがとう。

の言いかたがおこなわれている。この種の例だと、「申ス」は動詞と見られる。と同時に、「申ス」はもはや「非謙譲ていねい化表現法」に役だっているとも見られる。(P.163) 長崎県下の五島には、

○アンタニ アゲモス カ<sup>ニ</sup>。

あんたにあげますかなあ。

などの「〜モス」がおこなわれている。久保清氏・橋浦泰雄氏の『五島民俗図誌』にも、

差上る＝上げもす。

頂戴する＝もりやもす。

などの記事が見える。「アゲモセ」(お上げなさい) などとも言っているらしい。五島での「〜モス」の「モス」は、薩隅地方と同様の丁寧表現法助動詞「モス」ではなくて、謙譲表現法の助動詞なのであるうか。島原半島方面にも、同種のもが見られるようである。

山口麻太郎氏の『続壱岐島方言集』にも、

チヨ<sup>ニ</sup>デー<sup>ニ</sup>モ<sup>ニ</sup>ース 頂戴するを更に敬語化したもの。 遠慮ナシーチ  
ヨ<sup>ニ</sup>デー<sup>ニ</sup>モ<sup>ニ</sup>シマシタ。

との記事がある。『全国方言資料』第9巻「長崎県壱岐郡郷ノ浦町里触」では、

fアリガト<sup>ニ</sup> モ<sup>ニ</sup>シ<sup>ニ</sup>アゲマス モ<sup>ニ</sup>

ありがとう、申しあげます。

との言いかたをしている。滝山政太郎氏の『対島南部方言集』（中央公論社昭和19年9月）には、

是は粗相な物を差上げてオナブリモウシましたやうな物でありますけれども云々

とある。ここには、助動詞用法の「申ス」の謙譲表現法が見られる。

佐賀県南部の旧須古村では、

○オ<sup>ニ</sup>アイガト<sup>ニ</sup> モ<sup>ニ</sup>シ<sup>ニ</sup>ャゲマシタ。コ<sup>ニ</sup>リ<sup>ニ</sup>ャ<sup>ニ</sup> ナ<sup>ニ</sup>ター。

ありがとうございました。これはまあまあ。

との言いかたをしている。

福岡県下・大分県下に、「申ス」動詞や「申シアゲル」が広くおこなわれている。加えて、「オタノモーシマス」など、「〜申ス」もよくおこなわれている。——「オタノミモース」が「オタノモース」となり、「オタノミモーシアゲ」が「オタノモーシアゲ」になっているところには、あいさつことばでの、「〜申ス」の頻用の事実が認められよう。

中国地方では、「言う」に関して「申シマス」ことばのおこなわれるのが、まずは通有のことであろうか。ところで、たとえば広島県西部内などでは、

○ヨー ワカリモーサデ。

よくわかりませんで、どうもすみませんでした。

などの「〜申ス」も聞かれる。「申ス」ことばでとくに注目されるのは、備後南部の鞆地方である。「申シマス」ではない「申ス」ことばが、よくおこなわれている。

○テゴナリト シチャリモーセ。

てつだいなりとしてやりなさい。

○このつぎ マタ ヨーケ アゲモー ス ケン。

このつぎまた、たくさんあげますから。

など。(前者例は、神部宏泰氏による。)

四国地方については、特記するほどのことを、今、私は持たない。「言う」ことを「申ス」とも言うのは、通常のことであろう。「何々する」ことに「〜申します」と言うのも、諸地に見られることかと思われる。

近畿内に、

○ドーゾ オタノモーシマス。

どうぞおたのみいたします。

など、「オタノモーシマス」はよくおこなわれている。「京都府京都市」(『全国方言資料』第4巻)の、

*m*エライ オミソレオ モーシマシテ

とんだ お見それを いたしまして。

のような「モーシマス」用法も、近畿に多いことだろう。「申ス」の助動詞用法が、なお、「三重県一志郡美杉村川上」(『全国方言資料』第4巻)の「オカリモーシテ」(拝借して)など、諸所に見いだされよう。

和歌山県日高郡下や、紀州南部の三重県南牟婁郡下では、正月での訪問の、特定のあいさつことば、「モノ モー。」というのを聞き得ている。(これに対する返事は、「ドーレ。」である。)この「モノ モー。」は、「物申す。」であろうか。ここには、「申ス」動詞の異形の残存が認められよう。

中部地方では、「オもらい申シテ」とか、「オタノモーシマス。」(おたのみします。)  
「オ願ひ申シマス。」とかの言いかたが、広くにおこなわれているようである。金沢には「オタノモス」(お頼みします)があるという。(岩井隆盛氏「加賀と能登の『挨拶語』」『言語生活』第四十五号 昭和30年6月)

○ドーカ オタノモーシンス。

どうかおたのみいたします。

は、能登輪島のことばである。能登半島西岸の富来町では、“年寄りの女”が、

○モーシャシャイ。

申しなさい。

の言いかたをしている。

新潟県での渡辺慶一氏『頸城方言集』(高志社 昭和13年11月)には、

オタッパイモース 尊敬する。 多少敬遠する意味もある。

というのが見える。

「長野県更級郡芦の尻」(『全国方言資料』第2巻 関東・甲信越編 昭和42年2月)のことばには、

*f*オタノモシヤス

お頼み申します。

というのがある。「モシヤス」が注意される。

三河、渥美半島では、かつて、「申しうける」を聞いた。「ソー シテ モーシケル。」は、「そうやっていただく。」であるという。——「申ス」がもはや「言う」ことには関係のないものになっていようが、ここに、「申ス」の謙譲心意はなお明らかである。

関東地方にも、「オタノモーシマス」はよくおこなわれている。田口美雄氏の「茨城方言語法二三の考察」(『方言研究』第十輯)には、

「申します」は「モーシャース」  
とある。同県下では、

○オヤイバセモーシマシタ。

“御足労をかけました。”

などと言ってもいたらしい。『全国方言辞典』には、

おそれまおす 他家を訪問して帰る時の最もていねいな挨拶の詞。常陸  
(常陸方言)。

との記事が見える。

「神奈川県愛甲郡宮ヶ瀬村」(『全国方言資料』第2巻)のことばでは、

*m*………… マー オネガイシマスヨー

………… まあ お願いしますよ。

*f*ハイ モーシツギマシヨーヨ

申しつぎましょう。

との、「申シツグ」という言いかたが見られる。

八丈島には、保科孝一氏の「八丈島方言」(『言語学雑誌』第一巻第四号 明治33年5月)によるのに、

見モース (普通の敬語)

などがある。飯豊毅一氏は、「八丈島方言の語法」(国立国語研究所論集1『ことばの研究』昭和34年2月)で、

謙譲の場合は「〜モオス・〜イタス」を用いる。……(中略)……カ  
キモオセロワ(書き申します)、カキイタソワ(書きます)。ただしモオス

は現在では老人，特に老女に用いられる程度である。  
と述べていられる。

東北地方は，九州地方と対応して，「申ス」問題の深みを見せている。東北では，まず，「あげ申シタ」「あげ申セ」などの「～申ス」用法が注目される。

○えっこおがめえーもさねえで（一向おかまひ申さないで）

○御飯食べてがら遊<sup>あそ</sup>んもーっしあくんの（——遊び申しに来るの）子供をたしなめる。

○つえでにお頼<sup>たの</sup>んもーせ（——おたのみ申せ）

は，福島県東北部の例である。（新妻三男氏「相馬に於ける敬語動詞及び敬語助動詞について」）

f アイヤ コゲ サマザマ ナニモ ネードコ エタミリモンテ  
いや こんなに いろいろ，なにも ないところを<sup>1)</sup>恐れ入りました。

1) 「なにもおかまいできないところに」の意であろう。

は，「山形県東田川郡黒川村」の一例である。（『全国方言資料』第1巻）「～モンテ」と，短呼されている。「山形県南置賜郡三沢村」の例では，

m イヤ ドーモ ファー ゴチソーニ ナリモーシテ マンジ マンジ フ  
いや どうも ごちそうに なりまして， どうも どうも。

アー

との，「ナリモーシテ」などというのものもある。（『全国方言資料』第1巻）（ただし，こういう「～モーシテ」が，だんだん，「～まして」に近いものになるのであろうか。）山形県下での，『高島町ヲ中心トセル方言』（著者不詳，自家版 昭和15年2月）には，

オガモス 動（拝ン申ス）拝ム

というのが出ている。

「おぼんつあんのおてーひけーてあげ申せ，そら」（おばあさんのお手を引いておあげ，さあ）

「それ、旦那様さ、とってあげもーしさえ」（それを旦那様へ取つてお上げ申しなさい）

などは、土井八枝氏『仙台の方言』の例である。同書の、

「そのお方、まーだ一ぺんもみもーしたことござりいんてがす」（そのお方はまだ一度もお目もじしたことはございません）

などでも、「〜もーした」が、謙遜の意で発言されていよう。私が松島湾岸で聞いた一例は、

○私も ジョーブ[ü]ッデ イ[i]ル[ü] ウ[ü]チ[i]=[i], キ[kçi]  
キ[kçi] モーシ[ji]テ ネ[ç]ー。

私も、丈夫でいるうちに、あなたのお話しをお聞きいたしましてねえ。である。

○お姫さまに ホドオ アゲモーシタという 話し

お姫さまにホド（芋の一種。山芋とはちがう。）をあげ申した……

などとあるのは岩手県下である。同県下に、「〜申ス」の言いかたはよくおこなわれており、

オダノモス 訪問の時の挨拶、食事の時に口の辺りに米粒がついている  
のをいう

もある。（小松代融一氏『岩手方言の語彙』旧南部領）県下にまた、「〜モーシヤンス」式の言いかたもある。

○ドーカ オネガイモース[ü]アンス[ü]。

どうかお願いいたします。

これは花巻市の一例である。

○十二円に マゲモーシ[i]ヤンス[i]タ……。

十二円におまけいたしました……。

○モッテ アガリ[i]モーシヤンス[i]タ。

お持ちしてまいりました。

これらは、盛岡市東方の下閉伊郡の北部で聞いた例である。（——いずれも老

女の発言であった。)

○貸シテアゲモーソー

○私モ参リモーソー

などは大山宏氏等編『<sup>秋田</sup>方言音韻及口語法』<『羽城』第三十九号附録>(秋田県立秋田中学校校友会 明治44年5月)に見えるものである。内田武志氏の『鹿角方言集』には、

アゲモス 奉る。捧げる。「神サンサ——」

がある。

○アゲモース[ü]ンダ。

おあげするんだ。

は、青森県東南辺での一例である。青森県下では、「〜申ス」は、東部の、いわゆる南部地方のうちにありがちなのか。

東北地方に、単純な「申シマス」のおこなわれることは、——純方言上では、あまりないのか。そこに、「〜申ス」表現法の古風さも、よく認められる。(「申ス」を、より古風のままで温存しているということか。)[「〜申シヤンス」式の言いかたのできているのは、「ヤンス」という古態語の承接だけに、もっともと思われる。「〜モーシ[i]ヤンス」などが、老年層に見られがちなものも注意される。

奥羽内に、「アゲモス」など、「申ス」ことばの短呼も見られることは、上の諸例のとおりである。東北弁の、「どこへ行くのか？」の「下サ。」などでもわかる、あの、省略簡叙の口調の中では、「モース」形の「モス」化なども、おこりやすいことではなかったか。それにしても、当方のは、ものが、依然、謙讓表現法にとどまっているところが、九州南部地方の、丁寧表現法にはたっている「〜モス」とはちがう。

つぎには、東北地方について、「申ス」動詞の謙讓表現法を見よう。

福島県下に「申ス」動詞があり、また、「申シアゲル」が、県東部の浜通りで、

モーシアゲル〔句〕さしあげる

○盃一つもーしあげます

のようにもつかわれている。(児玉卯一郎氏『福島県方言辞典』)

宮城県下で、『仙台の方言』にも、

「ひとつもーしあげしてござります」(一つさしあげませう)と盃をさす。とある。「もーしあげす」は「モウシャゲス」とも発言されるようである。)奥羽の東がわには、「申シアゲル」ことばの、こうしたおもしろい転用法があるらしい。仙台税務監督局『東北方言集』(東北印刷株式会社出版社 大正9年8月)にもその指摘があり(「宮南」のこととされている。), 世古正昭氏の『細倉の言葉』(三菱金属鉱業株式会社細倉鉱業所文化会 昭和31年3月)にも、

もうしあげす(句)

差アゲマス、献酬の言葉。

酒席で人に盃をさすとき、モウシアゲス といつて差す。因みに他では盃は目上から目下に差すものであるが、当地では目下から目上へモウシアゲル のである。

とある。

なお、宮城県下では、

のずがたもうしあげす(句)

サヨナラの丁寧な言葉

の言いかたもおこなわれている。(『細倉の言葉』)

仙台ことばに、

○ドーモ アリ〔i〕ガト モーシャゲス〔ü〕。

どうもありがとうございます。

や、「ありがともしゃげてがす」(『仙台の方言』)があり、この種の言いかたは、なお宮城県下の諸方に聞かれる。

宮城県下などでは、子どもが店に買い物をしにはいる時、

○モーシ〔i〕ー。

などと言っている。「申ス」ことばであろう。（「もしもし。」の一步まえである。）（奥羽の西がわには、「買ウ！」との言いかたがあり、それとこれとは対立する。）そのようにも「申ス」が利用されてきたほどに、「申ス」謙譲法動詞は、よく土地に根づいたというわけか。

岩手県下の「申ス」動詞に関しては、また、「ヤンス」の承接のある言いかたが注目される。

○オシ[i]ル[ü]シ[i]バカリ[i]デ ゴザンス[ü]トモ、オイワイ モーシ[i]アゲヤンス[ü]。

おしるしばかりでございますけど、お祝いを申しあげます。

など。——これは、下閉伊郡北部で聞きとめた、結婚祝いのあいさつである。

奥羽で、「申シアゲル」に関しては、「モーシャゲス」などや「モーシ[i]アゲヤンス」などの言いかたが、おもにとりあげられそうである。「申シアゲマス」そのままの言いかたは、やはり、土地ことばふうにはなっていないのではないか。

山形県下に、「申ス」動詞の特記すべきものがある。『山形県方言集』には、  
まをす mōsu 動詞 御免下さい 置賜

まをす。半紙一帖くれ。（御免下さい。半紙一帖下さい。）

というのがある。『米沢言音考』には、

申さば。 不足をいへば。不足ヲ申サバの略語。「大層え江げんても、一  
一、少し小さ江」

との記事が見える。

福島県相馬地方でも、

○何をも一せ金のある人にあかな一ねえ

などと言っている。（新妻三男氏前掲論文）

以上のとおり、古風な「申ス」「申シアゲル」ことばが、東北地方のうちに、わりによく見られる。このことは、九州路に「申ス」ことばのいちじるしいのに対応するようで、注目をひく。国の両傍は、やはりよく古態を示しがちでも

あるのか。

用法のことはしばらくおき、形だけを見るならば、短呼の「モス」や熟合の「モシヤゲ」などが、やはり九州と奥羽とに見られ、注目にあたいる。

ところで、九州南部地方では、「申ス」ことばが「〜モス」丁寧表現法にはたらいて、その勢力が今日もじつにさかんなのに対して、東北地方では、「申ス」「申シアゲル」ことばの全体が、かなりの退潮傾向を示している。用法の進展がおこっての、そのものの盛況と、用法に進展はおこらないままでの、そのものの退存状況と、顕著な対照である。

### 第十三節 ウケタマワル

謙譲法動詞「ウケタマワル」は、むしろ特別な共通語となっていると見たほうがよいかもしれない。

それにしても、民間の、吉凶禍福のあいさつことばでは、「ウケタマワル」動詞の特用されることが、今日なお、すくなくはなかるう。その多くは、「ウケタマワリマスレバ」「ウケタマワリマチャー」といった語法で用いられている。つまり条件法の言いかたである。

一般には、「ウケタマワレバ」のように、「ます」助動詞なじに用いられることは、今日すくなくて——あるいはまれで、「ウケタマワリマス」表現法のとられることが通常であろう。

関西地方でのばあい、「ウケタマワリマチャー」などは、あらたまって凶事に言うことのほうが、より多かるうか。不幸ごととなれば、あいさつをする人人は、しぜん、もっともきびしくあらたまらう。「ウケタマワル」動詞は、そういうばあいの用にならっている。

戸川安章氏の「羽黒の山伏しと言葉」(『NHK国語講座』昭和31年11月)には、その道での特定語「うけたもう。」が見えている。三度つづけて、「うけたもう。うけた、うけたもう。」と言う答えもあることがしるされている。

能田多代子氏の『五戸の方言』（国学院大学方言研究会 昭和13年3月）には、

あの家の建築を誰が、ウゲダマったかな。

ウゲダマル〔承る〕建築工事等の請負にも云ふ

との、かわった「承る」がある。

一つの不明な例をここに添記しておく。『全国方言資料』第6巻の「長崎県南高来郡有家町」では、「*m* アー ウケタマワルヤヒト アッテ ウチニャーアナイ」（承りますと、お宅にはねえ）と言っているという。これは、どういうことばづかいになっているのであろうか。

#### 第十四節 カシコマル

これもまた、「カシコマリマシタ」など、「+マス」の表現法のとられるのがつね、と言ってもよいものであろうか。

やはり「カシコマル」も、共通語の特別なものになっていよう。

「カシコマリマシテ ゴザイマス。」というような、謙遜のきわみをあらわす言いかたができています。

#### 第十五節 存ジル

「存ジマス」が通有の言いかたであろう。——「+マス」の形をとるのがつねになっていよう。

「存ジアゲマス」表現法は、特用のものとされよう。

#### 第十六節 ～マセ

「マス」は、通常、丁寧表現法助動詞として利用されている。その「マス」が、命令形「マセ」を示すばあい、「イラッシャイマセ」などは（「マセ」が

「マシ」とあっても)、一般に丁寧の表現と見られている。

ところで、たとえば伊予北部地方のことばの、

○お客さんに ゴゼン ツイデ アゲマセ。

お客さんにごはんをおつぎしてさしあげなさい。(家の老女から、たとえば孫娘へなど)

というようなものになると、「～マセ」は、謙譲の意をつよくあらわすと解される。神部宏泰氏の、隠岐島後五箇方言について得られた例、

○カシエマシエ。

お貸ししなさい。(老男→中男)

のようなにしても、当方のものを先方へお貸しするという時の「マセ」なので、やはりここに謙譲の意がくまれる。手まえのすることに関して言うばあいの「マセ」命令形は、謙譲表現法の「～マセ」と解してよかろう。「お客さんを つれマシテ」というようなばあいの「マシ」の言いかたも、謙譲表現法になっていると解される。(——「つれマシテ」は、「おつれ申シテ」というのにも近いかな。)

謙譲表現法の「～マセ」ないし「～マス」に関しては、あらためてこれを、丁寧表現法「～マス」の記述の中で細説する。(p. 348)

## 第十七節 候

「候」が、元来、謙譲の動詞または助動詞(いわゆる補動詞)であり得たこととは言うまでもない。そういう「候」ことばが、今日の方言中に見いだされるであろうか。私の経験し得ているかぎりでは、方言の「候」ことばは、まず見いだされない。従来、「候」ことばの伝存に関して、諸方言についても、いろいろのことが言われもしてきたが、私には、いまだ納得しうる「候」ことばがつかめていない。「候」ことばらしいものは、たいてい、文末の特定の訴えこ

とば、「そら」(ほら)系のものである。

考えてみるのに、いわゆる「候」は、手紙文の特定用語として、先ごろまで伝承されてきた。思えば私どもの「候」ことばは、まったく、手紙文での特別のことばであった。あの「候」、文章語の「候」が、もし方言に遺存していて、人々が日常「候」ことばをつかっていたとしたら、それは、ずいぶん、木に竹をついだようなことばづかいがなされていることになる。自然言語の自然言語、方言の世界に、「候」ことばの一個特定の残存のしかたなど、理論的には考えにくいことである。

金田一春彦氏は、「伊豆神津島のことば(東京)」(『NHK国語講座』昭和32年7月)で、

大島の南の利島は、全島ツバキという小さな可愛らしい島ですが、  
オレモソーオモツタソーロー

のように、今でも「候」を文尾に用いる唯一の地方として有名です。と述べていられる。「おれもそう思った」という言いかたに、「候」がつづけられているとして、無理はないことばづかいだろうか。

松田正義氏・糸井寛一氏『大分県方言の旅』第2巻(NHK大分放送局 昭和31年11月)のP.97には、

このゴレンソーがつまり「御覧候へ」であり「ごらんなさい」であり、少し乱暴に申しますと「それ見ろ」というところです。

とある。ただし、このばあいの「候へ」は、「ナサイ」に相当していて、ことばづかいは謙讓表現法ではなくなっている。

昔話の中には、特別のばあい、明らかな「候」ことばが出てくるようである。野村純一氏・同敬子氏の『笛吹き髯 最上の昔話』(東出版 昭和43年6月)には、

「ソーレ物語り語り候」語ればもっての物語り  
などとある。

昔話などではなくても、たとえば“宮座のまつりの時のことば”に、「候」

ことばらしいものが見えたりしている。——天野俊也氏は、それを福井県大野郡下に見ていられる。

○イタダキマシテソーロ。

イザオテアゲラレヨ。

イタダキマシテソーロ。

同郡西谷村温見でのことであるという。

## 第十八節 ゴザル

たとえば大和南部の十津川では、「ありがとうございますね。」ということ

を、  
○カタジケノー ゴザッタ ヨ。

と言っている。また、「これはわしのですよ。」を、

○コリヤー オレノデ ゴザル。

と言うのだそうでもある。後者例など、「ゴザル」が謙退の心理を表現しはしないか。前者例も、謙讓心意と丁寧心意とのあい通うものとも見られる。

方言上に例はすくなかろうが、ときに「ゴザル」動詞の謙讓表現法があるかもしれない。

「ゴザル」関係の「ゴイス」などには、謙讓心意のくまれるばあいなどはほとんどなさそうである。

香川県下の丸亀市などでは、「知りません。」の意の「シランゴザ。」の言いかたがおこなわれているという。“時には言うが、今は、ほとんど使わない。”、“目上の人には言わず、親しい間柄で使う女性言葉である。”、“友人とか、目下の人に使う。”、“聞いたことはある。丸亀市内（都市部）の人は今でも使っている。今は、土器町あたりは、あまり、使わない。上流の人の、きれいなことばである。”などと言われているそうである。人によれば、“言わない。聞いたことはある。”などとも言っているという。ともあれ、実例は、

○シランゴザ。

○ソナ コト シランゴザ。

○シットルゴザー。

知っています。

○キヨルゴザー。

来ています。

などである。(以上、丸亀出身の来田隆氏の教示による。)自分の知らないことを、「シランゴザ。」と言う点では、「～ゴザ」は謙譲表現法に役だっていると見ることができよう。ところで、「キヨルゴザー。」となると、これは、謙譲表現法とはしがたい。いずれにもせよ、「ゴザル」の「ゴザ」となったものがこの地にあり、あるいは、主としてそれが謙譲表現法に役だっているかと思われる。

## 第十九節 その他

「拝見スル」など、漢語を用いて謙譲表現法動詞をつくることは、世にかなりありうることであって、また、当然のことでもある。広島市東方の坂町では、かつて老人から、

○オテラカラ ゲッコースル。

との言いかたを聞くことができた。「ゲッコースル」はどのような漢語をふまえたものであろうか。民間で、こうした民間漢語とも言うべきものの利用があり、そこにまた、謙譲法動詞の成立せしめられていることもある。

「おいとます」「おじゃます」などと、「オ～スル」表現法のおこなわれているのは、今日の明らかな一共通語事実と認められよう。小松寿雄氏には、『『お～する』の語詞』（『国語研究室』第五号 昭和41年12月）のご発表がある。南島、沖縄本島などでは、「ナチャビラン。」（泣きません。）といったようなことばづかいがおこなわれている。この「ビラ」のところには、「はべり(る)」

ことばが看取されるのであろうか、どうであらうか。もし看取されるとすれば、当地方には「〜ハベリ」流の謙讓表現法があることになる。

南島方言の敬語法に関して、仲宗根政善氏の発表せられた「宮古および沖縄本島方言の敬語法——『いらっしゃる』を中心として——」（九学会連合沖縄調査委員会『沖縄—自然・文化・社会—』 弘文堂 昭和51年2月）には、つぎの‘謙讓動詞’が指摘されている。

スキズくさしあげる>

ウイシズくさしあげる> (“謙讓動詞ウイシズくさしあげる>は、補助動詞としても用いられる。”)

ウサギズくさしあげる>

スサイズく申し上げる>

### 第三章 特定表現法による謙讓表現法

#### 第一節 「～テ ……」類

方言の世界での生活者たちは、一般共通語の生活からは思いもおよばないような特殊な言いかたをして、その生活感情の、もっともしぜんな表出をはかっていることが、すくなくない。謙讓表現法のばあいにも、特殊な言いかた、——特定表現法とも言ってよいものによって、謙讓心意を表現していることがある。

～テ オクレル

若狭，小浜湾頭の堅海<sup>かつみ</sup>でのことだった。私どもが，一週間調査をおえて辞去しようとした朝，泊めてもらっていたうちのおじいさんは，

○アンタラ ケサ カエッテ オクレル カ。

あんたら，けさ，「帰っておくれる」か。

とあいさつしてくれた。「～テ オクレル」の言いかたが，ここにある。これは，おじいさんひとりのもの言いではなくて，近所のせわになったおばあさんも，浜べで，

○カエッテ オクレル カ。

と，私のつれていたふたりの娘どもに，なごりを惜しんでくれたのだった。当方言下の語法，「～テ オクレル」が，ここに観察される。

この言いかたで，人は，一種の謙讓表現を示していると見ることができよう。これは，近畿ぶりの表現法かと思われる。

～テ モラウ

これもまた近畿ぶりの表現法である。近畿で広く，「ホンナラ，コー サセ

「テモライマス。」などと言っている。これは、たしかに謙讓の表現法になっている。

地方を歩いていて、たとえば道を聞いたとするか。教えてくれる人が、しばしばこのように言っている。

○コレ マッスグ イテ モライマスト、……………。

この道をまっすぐ行ってくださいますと、……………。

～テ オキマス

「福岡県三井郡善導寺町」では、

*m*ソイチャー オタノミントキマス サヨナラ

それでは お頼みます。 さよなら。

と言っている。(『全国方言資料』第6巻)この「オタノミントキマス」(おたのみシテ おきます)は、わずかながらも謙遜の意をくましめるものであろうか。——そうではないかもしれない。

～テ ホシー

近畿地方の、ものの言いかたに、「どうどうシテ ホシー。」「どうどうシテ ホシーと 思います。」などというのがある。これが関西系の表現法であることは明瞭であろう。(表現法の地方性といえば、これはまさに、その地方性を云々せしめるのに好適の例である。)

私の孫幼女は、二歳半のころ、しきりに「どうどうシテ ホシカッタ。」と言っていた。幼児の自然発想にも、こういう表現法がうまれうるのか。こうして、「～テ ホシー」表現法の柔軟性が認められはするものの、方言上では、この表現法が、とりわけ近畿風土のものになっているのは、注目にあたいる。

近畿の人たちは、遠慮・謙讓の気もちのままに、「～テ ホシー」の言いかたを創造した。——そうした創造にしたがいたかったのが、近畿の人たちの心情だったとされよう。

## 第二節 「カリテ イク」など

岐阜県下のことである。美濃の、岐阜県立郡上高等学校方言研究会『郡上方言』第一集・語彙編（岐阜県立郡上高等学校方言研究会 昭和27年6月）に、つぎのような記事がある。

卑下の表現

カリテ=イク （行く，お邪魔する）

カリテ=ネル （寝る，休ませていただく）

ムラッテ=クー （食う，頂戴する）

モラッテ=ノム （飲む，頂戴する）

これによれば、「カリテ（借りて?）」という「動詞連用形+テ」に「イク」をつづければ、「お邪魔する」という卑下の表現が成りたつのかと解される。また、「モラッテ」に「ノム」をつづければ、「頂戴する」との卑下の表現が成立するのかと解される。ここには、「カリテ」と「モラッテ」との二用法が注意される。——これら特定動詞に「テ」をつけ、そのあとへ所望の動詞をつければ、その動詞に関する謙讓表現法が成りたつことになっているようである。めずらしい言いかたである。

他地方に、こうしたものが見いだされるのかどうか。（「モラッテ ノム」が、飲むことの卑下の表現になるのなどは、一方から言えば、わかりやすいことでもある。が、「カリテ」の言いかたをするほうは、じつに変わっている。）

## 第三節 動詞複合の特定のばあい

かつて三重県伊賀の調査にしたがったさい、こういう経験をした。一老女と話しあっている時であった。その人は、

○ヨネン デサガシタ モンヤサカイ ナ。

四年間、出てたもんですからね。

との言いかたを私にしてみせた。私は興味を持って、「デサガシタ」の説明を求めた。すると相手の老女は、「どうぞこうぞ、尻へついで出た」ことだと説明してくれた。思うのに、この言いかたのばあい、「出る」という動詞へ俗語の「サガス」という動詞を接合したので、卑下の気もちが表現されているのであろう。あえて低卑の動詞を累加することが、一種の謙讓表現法になるらしい。こういうところに、方言の世界での、独特の謙讓表現法があるとも言えよう。

広島市北郊で、かつてこういうことばづかいに接したこともある。

○イマ チョード デアシフンドリマスケン。

今ちょうど出かけようとしていますから。 (中年の女性→藤原)

ここに「出アン踏ソドル」という慣用句が見られる。——これは、もとより、二動詞の複合とはちがう。が、ここにもまた、「出アン踏ソドル」という、かなり低卑の言いかたがなされるのによって、よわいながらも、一種の謙讓表現法が仕立てられているのを見ることができよう。低卑効果の動詞は、方言上で、とかく、謙讓表現法におもしろい関係を持つようである。

#### 第四節 特殊の表現態

たとえば瀬戸内海島嶼のうちで、

○コガナ ホイトミタイナ フー ヒトルケン。

こんな、乞食みたいなふうをしてるから。

などと言っている。この種の言いかたも、たしかに謙讓・卑下の表現法である。「ホイトミタイナ」との表現態が、謙讓表現を成さしめている。

きょくたんにいやしいもの、あるいはひどく卑俗なものなどをとりきたって、比喩の表現法をひきおこせば、それは、程度のひどい謙讓表現法になるというわけである。方言人たちは、尊敬すべき人に向かっても、他からは低俗と評されるかもしれない比喩を、素朴な気もちで用いて、純真な謙讓心意を表現して

もいる。

## 第五節 特定語の採択

『信州上田附近方言集』には、

ヤラカス 致します

とある。「ヤラカス」の語を用いれば、これなりの謙譲表現が成されるというのか。

「新潟県佐渡郡羽茂村大崎」では、

fアルクレジャネー ノベマス

ありますとも、 さし上げます。

と言っている。(『全国方言資料』第8巻)「ノベル」が「さし上げる」という意になるのか。上の例「ノベマス」は、店主から客へのことばであるという。

私どもにしたしみぶかい「ヨバレル」という語、「ごちそうになる」ことを言うこの語にしても、そのつかわれる現場は、謙譲表現のものになると考えてよからうか。「ヨバレテ キマシタ。」などと言うばあい、私どもはたしかに、「ヨバレテ」のところで、なにほどかの、謙遜の気もちのゆらめくのおぼえる。考えてみれば、「ヨバレル」ということば自体、「ヨブ」の受身法がとられている。「～レル」身は、へりくだる人である。

「お招きに アズカリマシテ」というのでは、ここに「アズカル」という、特定の動詞の利用が認められる。「～ニ アズカリマシテ」は、一種の謙譲表現法になっていよう。

「コウムル」(蒙る)その他の語を利用して、また、私どもは、謙譲心理を表現している。

○ソレジャー ゴメンコームッテ、…………。

それではごめんこうむって、…………。

などは、共通語的な言いかたになっていよう。

## 第六節 謙讓表現法の人代名詞

一人称の「テマエ」などが謙讓表現法にあずかることは、言うまでもなからう。「ワタシ」「ワシ」なども、また、しばしば謙讓表現法に役だてられている。

『全国方言資料』第2巻の「東京都」の部には、

*m* マタ ソノウチニ ドーゾ テマエノ ホーエモ

などというのがある。

人代名詞によって謙讓表現法をなすのもまた、前節に言った「特定語の採択」にほかならないのである。

## 第七節 接辞

特定の接辞を用いれば、そこに謙讓表現が成りたつ。

大分県下では、つぎのような言いかたを聞いたことがある。

○コノアイダモ オイタダキ シマシテ。

このあいだもちょうだいいたしまして。

接辞「オ」が、あつい謙讓心意の表現を可能にしている。

このような「オ」の利用は、長崎県下などでも聞いたことがある。九州地方に注意されるものようである。(P.94)

## 第四章 その他の方法による謙讓表現法

### 第一節 文末詞による謙讓表現法

方言しだいによることであるが、たとえば中国山陽の方言などでは、「ワイノ」という文末詞をもって一文の表現をむすぶと、この文表現は、「ワイノ」ゆえに謙退の気分の濃いものになる。

さまざまな文末詞が、文表現上、特定文末部になって、その文の表現を謙讓効果のものにしている。

### 第二節 表現音声による謙讓表現法

もの言いのことばの、声づかいそのものも、謙讓表現法に關与する。おごりたかぶったような声が謙讓効果をひきおこすことのないなどは、自明のことであろう。

## 第五章 謙譲法外形の「非謙譲ていねい表現法」

謙譲法形式のものが、現場で、現実に、「非謙譲ていねい」の表現に用いられることがある。ここに、謙譲法形式の「非謙譲ていねい表現法」化が認められる。——謙譲法外形の「非謙譲ていねい表現法」がある、と言ってもよい。

謙譲表現法が、もとよりのこと、謙譲の意をあらわすばあいも、それが「ていねい」の表現法であることは、言うまでもない。(謙譲表現法も「ていねい表現法」の一態とされる。) その謙譲表現法が、たとえば「申す」表現法のばあいにも、「言う」ことに関係してではなく、「する」ことに関係して用いられても、——つまりそのように転用されても、そこになお謙譲の意があれば、その「申す」表現法は、依然として謙譲表現法とされる。しかし、なんらかの「申す」表現法に、——一般化して言えば、謙譲表現法の実際の場合に、もはや謙譲の意が見られず、謙譲表現法が謙譲の意にはかかわりなく用いられていけば、それは、まさに「非謙譲ていねい」の表現法になっていると見られ、これが、現実の「非謙譲ていねい表現法」と解されるしだいである。

尊敬表現法助動詞「レル・ラレル」「シャル・サッシャル」などが、表現の現場で「ていねい表現法」化しもすることは、一方の明らかな事実である。一方方言上に、明らかなその慣用がある。いわゆる京都弁の「〜ハル・ヤハル」なども、年たけた婦人が人まえで自家のものを言うのに用いられたりもする。

以下には、謙譲表現法に属するものの「ていねい表現法」化の事実を見よう。

「申す」

○ナンテ モサイタ ナー。

なんとおっしゃったかねえ。(P.139)

日向中部西奥内のこの言いかたは、「申す」ことば——モサイタ——が、「おっしゃった」の意をあらわして、ここに、まさに謙譲表現法の「非謙譲ていねい表現法」化が認められる。

mオーキニ アリガトー モーシマシタ

たいそう ありがとう ございました。 (P.139)

長崎県北松浦郡中野村のこの言いかたも、「モーシマシタ」が「ございました」と言いなおされているので、ここにも明らかに、謙讓表現法の「非謙讓ていねい表現法」化が認められることになる。

fオッカサンニモ ドード ヨロシユ モーシテオクレナヘー

奥さんにも どうぞ よろしく おっしゃってください。

この例(『全国方言資料』第6巻「長崎県南高来郡有家町」)の「モーシテ」も、「おっしゃって」と言いあらわされているので、やはりこの「申す」ことばが、このさい、「非謙讓ていねい表現法」とされていることがわかる。(自分が謙遜のたちばで言うことをあらわす「申す」が、相手の言語行動を言うのに用いられているのであるから、いわば変な転用であるが、表現者の心意が「おっしゃって」のつもりのものであるとするならば、これは、ひたすらていねいにものを言おうとして、今は、「申す」ことばをえらんだのだと解さなくてはならない。そのえらびかたの是非は、今、問うところではない。)

fマダ オヤスマカト オモテ ヤシタ

まだ お休みかと 思って いました。

(シー) アノ コナイダ モーシテ マシタナ (エー) アノ  
(m) この間 話して おいででしたね、 (m)

カオミシエ オコンヤッカ

顔見せ(芝居)に おいでになりますか。

これは、『全国方言資料』第4巻、「大阪府大阪市」の一例である。「モーシテ」には注があり、

「申して」はここでは尊敬表現に使われているらしい。

としらされている。

fウタオ ウタウ モノワネー (へー) ガギグゲゴオ ヤカマシク モ  
歌を 歌う ものはねえ、 (m) 「ガギグゲゴ」を やかましく 申

ーサレマ(ス)

されます。

これは、『全国方言資料』第2巻、「東京都」の例である。

土井八枝氏の『仙台の方言』には、つぎのような例が見られる。

「そつたにわってかたられもーすと、わたっしゃも黙っていられん、よがすまづ、なぢょにかお世話いたしめてござりす」(そんな風に打明けられますと私もじつとしては居られません、よろしいですとも、なんとかお世話いたしませう)

この「かたられもーすと」は、「打明けられますと」と言いかえられているのからすれば、「申す」の「非謙讓ていねい表現法」化を見せたものかと察せられる。——つまり、「申す」の本来の意の、もはやくみとりがたいありさまが、ここに見うけられる。おそらく、「申す」は「ていねい」意識で利用されている。ところで、同書の、

「しりもしゃねお人に助けられもーした」(知りもしないお人に助けて頂きました)

の例となると、「助けられもーした」が、「助けて頂きました」とされているので、このばあいは、「申す」ことばが、やはり謙讓心意で用いられていると見られる。当地方で、だいたい「申す」ことばの「非謙讓ていねい表現法」化が見えにくいのではなかろうか。

『全国方言資料』第1巻、「山形県南置賜郡三沢村」の条には、つぎの問題例が見える。

f コソニチワ オドスカサネノ<sup>2)</sup> ゴズウエ<sup>3)</sup> オメデテーコンデ ゴザエモス  
 こんには お年かさねの お祝い おめでたいことで ございます。  
 ゴネンナ オチケー<sup>4)</sup> オクレヤッタカラ ハー ゴツォーナガラ  
 ていねいな 御招待 くださいましたから ごちそうをいただき  
 マエリモーシタ  
 がてらに まいました。

2) 年重ね厄年に厄払いの意味で行う。 3) [gozuwe] 4) 「おつかい」の転。

「ゴザエモス」(ございます)とあるが、この「モス」は、「申ス」には関係のない「ます」的なものであろうか。ところで、「マエリモシタ」(まいりました)の「〜モシタ」は、やはり謙譲表現法になっていよう。

東北地方に「申ス」ことばのおこなわれることは、すくなくない。しかし、この用法が、「非謙譲ていねい化表現法」になることは、たとえあっても、ごくまれなのではなからうかと思われる。

これに反して、九州南部地方となれば、「申ス」ことばがじつによく用いられており、「申ス」は、種子島などを除いては、薩隅地方の全般で、「モス」と縮約されていて、この縮約形が日常会話に頻用されている。しかもその「モス」ことばは、

○ワ<sup>タ</sup>ヤ<sup>シ</sup>ヤ シモハン<sup>ヂ</sup>ャ(ニャ)シタ。

わたしはしはしませんでした。

などのように、もはや共通語の「ます」ことばと同様に用いられて、ここに、「モス」ことばの、丁寧表現法に慣熟したものが見られる。「申ス」が、表現の現場で、話者の「ていねい」意識のもとに「非謙譲ていねい」表現に用いられることが、当地方のつよい習慣になるのにつれて、その「非謙譲ていねい化表現法」が、ついに、謙譲表現用の「申ス」を丁寧法助動詞化せしめるにいたっている。——南九州地方の「申ス」は、動詞としてではなく助動詞として頻用せられるところに特色がある。(南九州地方に、丁寧表現法助動詞の「マス」のおこなわれることはない。共通語の「〜ます」表現にあたる場所は「〜モス」表現になる。)

種子島では、たとえば、

○ヨカ<sup>ゴ</sup>ド ユー<sup>テ</sup> タモリ<sup>モー</sup>セ ナー。

よろしく言ってくださいませねえ。

などと言っている。先生その他の遠慮すべき人にはすべて、「タモリモーセ」を言うという。

○マー ヨーコソ オヂャッテ オクリャリモーンタ。

まあようこそいらしてくださいました。

のような言いかたもされている。これらに見られる「申ス」ことばは、「モス」形のものではないけれども、やはり、丁寧表現法助動詞化した「申ス」を見ているものであろう。

「イタス」

八丈島方言では、「きょうの船でも着きませば、……………」というところを、

○ケイノ フネデモ ツギイタセバ、……………」

と言っている。ここには、「イタス」ことばの「非謙譲ていねい表現法」が見られる。『全国方言資料』第7巻「八丈町宇津木」の条にも、

*m*ケイワ アメノ フリソードト オモーランネーヤ テンキン ナリー  
 きょうは 雨が 降りそうだと 思いましたが 天気になりま  
 テートーガ オメーラワ アニョ シータスカノー  
 して お宅では 何を なさいますか(ね)。

の実例が見える。この「シートス」も、「し致す」のようである。大脇繁吉氏『八丈島仙郷誌』（大脇書店 大正13年1月）その他の諸文献にも、「イタス」ことばの助動詞用法に、明らかな「非謙譲ていねい化表現法」が見られる。「イタス」ことばの盛行は、八丈島、青ガ島の方言に見られる出色のものであるが、その盛行につれて、「〜イタス」が「非謙譲ていねい表現法」化しているのもあろう。ことによっては、南九州地方での「〜モス」の「モス」と同様に、ここで、「イタス」助動詞を、もはや丁寧表現法助動詞化したものと見てもよいのかもしれない。（あるいは、丁寧表現法助動詞化しようとしている、と言うべきか。）「此筆ワー本イクラシートスカ」（此筆ワー本イクラシマスカ）（『八丈島教育会報』第二号、「口語法取調」）の「シートス」などは、「シます」を思わせやすい例であらう。（p. 115）

「マイル」

『八丈島仙郷誌』に、

此の煙草はわか手作のよけ煙草だらめ江れ（あがれ）……………。

とある。「め江れ」が「参レ」だとしたら、「参ル」動詞が、ここに「非謙譲ていねい表現法」に用いられているとされる。柴田武氏編『お国ことばのユーモア』には、谷開石雄氏の報じる、飛驒、上宝村の老人の、

ジョウニマイル。

たくさん召上れ

ということばが見える。石川県の白峰村史編集委員会『白峰村史』下巻（白峰村役場 昭和34年4月）の「方言」の記事（岩井隆盛氏）の中には、

主 アイ（はい）、寒いニ（のに）、ヨー（よく）、マイッテ下さったノ。

マイット（もつと）、ヌクンデ（あたたまって）、話でもして行カッサリヤ、よいニ（のに）ニャ。

というのが見えている。岐阜県下にも、問題の「マイル」ことばがあるか。

fアー ソードスカ フッデ モー ホカーモ マイリヤサシマヘンドシ

ああ そうですか。それで もう ほかへも いらっしゃりはしなかつ

タンドスカ

たんですか。

は、「京都府京都市」（『全国方言資料』第4巻）の一例である。

「～候へ」

〔御覧候へ〕が〔ごらんなさい〕であるとすれば（P. 152）、この「～候へ」は、「非謙譲ていねい表現法」になっていると言える。

## 結 語

謙讓表現の直接的契機をなす諸語法・諸形態は、以上に述べてきたとおりである。

命令形をもってはたらく特定謙讓表現法は、一つの、特別に注目すべきものであった。たとえば「ツカーサイ」にしても、一方で、「ツカーサル」「ツカーサった」などの活用形がはたらいていて、動詞「ツカーサル」は、一義的に謙讓法動詞と見さだめることはできないけれども、命令形の「ツカーサイ」（「ツカーサレ」も）の特用のいちじるしさは、またかくべつであって、日本語方言状態という一大統一態のうえでは、その形が、「ツカイ」「ツカー」などとも変転している。それゆえ、命令形態の、謙讓表現法として定着するさまが明らかとなっている。他者に対する自己、この一極に、おのれをおきつくそうとすることによって謙退の情をあらわす表現法を求める時、人は、かならずしも謙讓法動詞とはきめがたいものの命令形用法をも、また、やがて謙讓表現法にしていく。今は、こうしたところにもあらわな謙讓心意の活動を、重視したい。

国内諸方、そこそこの方言によって、その謙讓表現法の諸種のもを具有するありさまが、もとより異なる。総じては、関西地域内の諸方言に、諸形態を具有することのよりゆたかなものがあるろうか。

地域の方言のそれぞれが、おのおの、どれだけかの謙讓表現法を具有するには、必然性があると解される。どことも、そこには、謙讓表現生活上の必要な手段がそろっているのに相違ない。手段の諸相に、精粗・厚薄があるのは、みな、それぞれの方言の表現生活の特色を示すものとして注視される。

諸方言上の謙讓表現法状況を見わたす時は、また、共通的なものと非共通的なものが見わけられもする。共通的なものは、しばしば、いわゆる共通語の

直下をいくものとなっている。

謙讓表現法にはたらく動詞，助動詞の大群がある。（一動詞が，また助動詞としてもはたらいたりしている。）これが，尊敬表現法にはたらく動詞，助動詞の大群と対応し，あい牽引する。もとより，つぎの第二部にとりあげる丁寧表現法の動詞，助動詞もまた，一大群落をなして，上に言う二大群とわたりあろう。

以上すべての動詞，助動詞の大々群，または一大綜合体が，日本語方言状態にあって，待遇表現法の花を咲かせている。そこには，いわゆる敬語法の総合的な美観があるとしてもよい。

## 第二部 丁寧表現法



## 序 説

尊敬の言いかた、謙譲の言いかた、丁寧の言いかたがあり、通常、この三者が、鼎立するものと考えられている。

始源・根源をなすものは、一元的な「ていねい」意識である。(このことは、たびかさねて強調してきた。) 可動的な「ていねい」意識がはたらいて、あるいは尊敬表現法ができ、あるいは謙譲表現法ができ、あるいは丁寧表現法ができしていると考えることができる。「参る」という動詞があるとするか。参詣する意で「マイル」を用いれば、これは、謙譲表現法とされよう。かりに「どこへまいりますか。」と、これを「どこへいらっしゃいますか。」の意で言ったとすれば、ここには「マイル」の尊敬表現法があるとされる。「マイル」を謙譲法動詞と規定したさいは、この特定の用法は、「非謙譲ていねい化表現法」とされる。さてまた、「マイル」をつかって、「どうやら降ってまいりましたね。」と言ったとすれば、ここには、丁寧表現法が成りたっている。ただし、「マイル」動詞を謙譲法動詞と規定すれば、ここには、「非謙譲ていねい化表現法」が成りたっているとされる。「参る」に関する、以上のような諸用法を通観する時、私どもの待遇表現意識は、じつに「ていねい」意識を根幹とするものであることが知られ、その待遇意識が、きわめて可動的に表現生活の現場に顕現して、謙譲表現法その他の諸法になっていることが知られる。その諸法となることがつよく慣習化して、尊敬表現法・謙譲表現法・丁寧表現法が分立していると解される。

丁寧表現法が、広義の(—尊敬表現法・謙譲表現法・丁寧表現法をつつむものとして考えられる—)「ていねい表現法」の、特定明瞭のばあいであることは、もはや多言を要しないであろう。丁寧表現法も、もとより、「ていねい」意識をぬきにしては考えられないものである。「ていねい」意識にささえ

られた、特定のていねいな表現が、尊敬の意も謙譲の意もあらわさないことで、習慣化の度あいをつよくしたところに、丁寧表現法が成りたっている。

結婚式場でのあいさつ，“だれそれさんは、どこどこ出身の才媛であらレ，”などと、「あらレ」の言われることは、世に、すくなくない。尊敬表現法助動詞「レル、ラレル」の使用としたら、これは、特殊特例的なものであろう。「ある」は、まったくの自然態を言う動詞だからである。ところで、尊敬表現法助動詞の「レル・ラレル」を、「あらレ」などと用いているのには、たしかに、その場でのものの言いかたを、ていねいにしようとの意識がある。人は、だいたい、もの言いをていねいにしようとして、「レル・ラレル」（尊敬表現法助動詞）を用いる。この心意に即応して、この表現習慣を理解することにつとめるとすれば、私なりの言いかたをすると、ここに、尊敬表現法の「非尊敬ていねい表現法」化が成りたっているとされる。（このように、「ていねいな言いかた」という趣意のものと見られた時に、私は、その表現を、ひらかな書きで、「ていねい」な表現とする。）

「申す」謙譲法動詞（または助動詞）が、たとえば“ご用のかたは申しでてください。”とか、“今、だれそれさんが申されたように，”とか、尊敬用に（尊敬心意で）用いられれば、これもまた、謙譲表現法の「非謙譲ていねい表現法」化とされることになる。「申す」のばあい、その「非謙譲ていねい表現法」化がすこぶるひんばんで、ことに助動詞用法のばあい、とくに九州南部地方でなど、「しモス」「しモはん」（し申さん）などと頻用されれば、そこには、謙譲法助動詞「申す」の丁寧表現法助動詞化が見られることになる。ものの使用がいちじるしければ、そのいちじるしいところに、その使用法の習慣が成りたつ。かくて「申す」に関しては、謙譲法動詞（または助動詞）としてのはたらきとともに、丁寧法助動詞としてのはたらきも成りたっていることが認められる。——「ていねい」の心意を軸心とする、一語二態化の成立である。

「ヤンス、ヤス」のばあいにも、「ていねい」意識の活動のままに、「ヤンス、

ヤス」丁寧表現法助動詞がひきおこされている。「ヤンス、ヤス」は、本来、尊敬表現法助動詞として成立した。ところが、その、「お早う ありヤンス。」「私も きのう 行きヤンた。」などと用いられることが社会的にしだいに慣熟して、ここに、「ヤンス、ヤス」丁寧表現法助動詞がおこった。もし、「ヤンス、ヤス」を「ある」ことや自分の行動などに言うことがすくなくて、そのような用法の社会的な慣熟が見られない程度であったら、私どもは、その程度の特異な「ヤンス、ヤス」用法は、なお、「ヤンス・ヤス」尊敬表現法の「非尊敬ていねい表現法」化とよぶのにとどめるほかはない。

以上、「ていねい表現法」と区別して丁寧表現法を受けとる考えかたを、明らかにし得たであろう。

しかし、この「丁寧」も、尊敬・謙譲とは無縁と言えるものではない。丁寧に関して、あらためて、尊敬・謙譲との密接な関係が考えられる。

人は、丁寧（あるいは丁寧法）を説明して尊敬（あるいは尊敬法）、謙譲（あるいは謙譲法）とは峻別し、「人々には関係なく、場面にかかわって言うもの。」と説いたりする。が、人にかかわらない場面というものが有り得ようか。また人は、「相手がどうこうというよりも、自分の物言いを上品にするために敬語——言わば丁寧語とでも言うべきものです——を使うということもかなり強く行われています。」と言う。が、そういうものを、私どもが、「自分の物言いを上品にするために」つかっても、それは当然、相手への敬意の表現になる。相手を思えばこそ、その場で、自分のもの言いを上品にしようとするのではないか。要するに、「丁寧」にも対人関係がはいってくると言える。——丁寧の表現も、対人関係の把握にもとづく表現である。

さて、この丁寧表現法での対人関係の把握が、どのようなものであるかをかえりみたい。しょせん、対人関係の把握法には、ふたとおりしかあるまい。一つは、他を見てその地位を高く仰ぎ、そうすることによって、自他の関係（対人関係）をとらえようとするものである。いま一つは、他に対して自己の地位

を低めることにつとめつつ、自他の関係（対人関係）をとらえようとするものである。丁寧表現法は、このどちらの対人関係の把握法によっているのであろうか。私は、自己の位置を低めるほうの把握法によっていると考える。二種の対人関係把握法は、けっきょく、尊敬表現法と謙讓表現法とになろう。してみれば、丁寧表現法は、謙讓表現法に属するものとも考えられることになる。

丁寧の助動詞「マス」が、謙讓法動詞「マイラスル」から出たものであることは、このさい、意味ぶかく受けとられる。「デス」が、「デ候」から出たものとも考えられることも、このさい、見のがせない。九州南部で、「モス」が、他地方での「マス」同様であるのも注目すべきことである。

尊敬表現法は、他に対する能動の表現法であると思えることができよう。謙讓表現法は、他に対する退肅の表現法であると思えることができようか。こういう見かたをした時も、いわゆる丁寧表現法は、他に対する退肅・自謹の表現法と受けとることができて、やはり謙讓表現法系のもつとされる。「お早うゴザイマス。」などと言うさいの「ゴザイマス」にしても、これは、おおいに自謹する心を表現するものであろう。それは、はなはだ謙讓的でもある。

「ていねい」意識も、けっきょくは、謙遜の心意が根本にあるものともされる。静岡県御前崎の近くで、

○オゴツォーサマデ ゴザリガシタ。

ごちそうさまでございました。

（“たべることでなくても。おみやげをもらったときも。”）

と言っているのを見ても、「ゴザリガシタ」と、ずいぶん丁寧の心をこめて言っていて、「ゴザル」丁寧法動詞と「ガス」丁寧法助動詞とをつかっているが、その表現心情は、まことに謙遜的である。

丁寧とは、丁寧に言って謙遜することを言うものとも考えられる。

## 第一章 丁寧法動詞（またはそれに助動詞の そわったもの）による丁寧表現法

### 第一節 ゴザル

「行く」や「来る」に関しては、「ゴザル」動詞が、尊敬法動詞（あるいは助動詞）としてはたらいている。「ある」に関して、「ゴザル」が、丁寧法動詞としてはたらいている。

「ていねい」の意識が可動的にはたらいて、「行く」や「来る」や「ある」に関して、一つの「ゴザル」の多様の運営をきたさしめている。

「ゴザル」尊敬表現法では、「ゴザレ」「ゴザイ」は、重要な表現形であった。丁寧表現法「ゴザル」には、命令形があり得ない。

「ゴザル」丁寧表現法は、史上、かなり古くからおこなわれてきている。「ゴザル」の淵源が「ゴザアル」であることを、ここに想起したい。

以下、全国諸方言上に、「ゴザル」丁寧表現法動詞をたずねてみよう。概して言えば、これは、今日、劣勢のものである。

九州地方にも、「ゴザル」動詞が、いわば微弱である。今、私のとらえ得ている「ゴザル」生息状況は、以下のとおりである。

鹿児島県下の、トカラ列島の宝島では、

○アリガト ござった。

○そんとは 私の もん ござっ で。

○そんとは おいがと ざっ ど。

などと言っているという。吉町義雄氏の「吐噺刺諸島方言」（『旅と伝説』第十三巻第四号 昭和15年4月）には、

○ソソ花ハ、ドシヨカ？ ハイ、二十銭デ、ゴザー。

○新聞ハ、ソケ<sup>ー</sup>ナ、ネーカ。ハイ、ゴザランド。

などの例が見える。薩隅本土には、「ゴザル」丁寧法動詞の単独におこなわれるものが、通常、見られない。ただ、甌島などでの昔話には、「ゴザル」丁寧法動詞が用いられてもいるようである。

種子島では、のちに述べるように、丁寧表現法の「ゴザリモース」がおこなわれている。(p.187)ここに、「ゴザル」丁寧法動詞のはたらきが認められるが、それは、「モース」にそわれてのことになっている。

『全国方言資料』第6巻の「熊本県熊本市中唐人町」のことばには、

fハイ アリガト ゴザル……

はい、ありがとう ございます。

との言いかたがあるという。

昭和26年の末に佐世保市内の人から聞いた話しであるが、五島列島の北部内のどこかでは、「さよういたそうではござらぬか。」などと言っているそうである。(単なる見聞談としてここにのしるして見るまでである。)田中千禾夫氏は、その作品「肥前風土記」(『新劇』31 第三巻第十号 昭和31年10月)で、つぎのような筆づかいをしていられる。

は…… たばこはもろとくばつてん、魚はいやじや。庄屋の下知でござる。結城次郎氏の「肥前国北高来郡昔話集」(『方言誌』第二十二輯 昭和14年10月)にも、

「子ぢやござらん親でござる」

とある。清水平一郎氏『佐賀県方言辞典一斑』(平井奎文館 明治36年10月)にも、

ヨミマッスンゴザア (ヨミマス) 終止法

ヨミマッセンゴザア (ヨミマセン) 終止法

などの記事が見える。「ヨミマッスンゴザア」は、「ヨミマスルデゴザイマス」のようである。——「マッスンゴザア (Massungozā) マッセンゴザア (Massengozā) 共に敬意を表す言葉である。これも西部にて多く用ひらるゝ

様である。」との説明も見える。

以上のほかには、九州域について言うべきものを、私は持ち得ていない。

つぎは中国地方である。山口県萩市では、その昔の武家ことばのなごりでもあるのか、「天气がようゴザル。」などとの言いかたが見いだされるといふ。（昭和34年に、女子学生から私はこの報を受けた。じっさいは、どの程度に「ゴザル」が生きているものであろうか。）山口県下には、「ゴザル」丁寧法動詞がいくらか点在しているかのようである。

中国地方内で、とくに注目される「ゴザル」生息地は、隠岐島であろう。そこには、「ゴザル」の丁寧表現法がよくおこなわれている。——神部宏泰氏の「隠岐島五箇方言の『ゴザル』について」（『国文学攷』第二十二号 昭和34年11月）にくわしい。氏からかねて教示されている実例の一・二をかかげてみる。

○シェーネンヤラ チンヤラデ ギョーギガ ヨー ゴザル デ。

（今の若い者は）青年会とか何とかで行儀がようございますよ。

○ドージェンノヨーナ コター ゴザラヌ ワ。

島前のように大じかけなことはありませんわい。

出雲内にも、「お天气がようゴザル。」などの言いかたが、なくはなかったらしい。ただし、伯耆地方では、「ゴザル」丁寧法動詞の、へいぜいおこなわれたあとを、今、見るができない。

転じて四国地方を見るのに、全般的には、「ゴザル」動詞の、言うべきものがない。ただ、香川県下の丸亀ことばなどには、「ゴザ」の注意すべきものがある。来田隆氏の教示によれば、丸亀方言では、

○ヨー ゴザ。

ようござんす。（ただし近所の人に対しての気やすい言いかた）

○ソレデ ヨー ゴザ。

それでようござんす。

○シットル ゴザ。

知っています。

などと言っているよしである。当方言に、今は老人ことばとなった丁寧表現法の「～ゴザ」が認められる。ではあるが、この「ゴザ」は、「ゴザンス」などからの省略形らしい。当方言に「～マス」も「～マ」となっており、丸亀の土地っ子は、みずからこれらを、“半分ことば”と意識してもいる。したがって、ここでは、「ゴザル」丁寧法動詞を認定することができない。来田氏も、

「ゴザル」ということばは、丸亀の土地っ子には、まったく聞きなれぬものようであって、  
と述べていられる。

私は内海島嶼の出身であるが、島人の、一つの特定の言いかたに、「菓子でゴザレ、うどんでゴザレ、……。」などというのがある。「菓子であれ、うどんであれ」というのに近い。「ゴザレ」がつかわれている。じっさいには、ややおどけた気分などのもとでこの言いかたをするので、純粹丁寧の表現法がここに見られるわけではないが、それにしても、この「ゴザル」動詞は、丁寧法動詞とされる。「ゴザレ」は、その已然形としてよかろう。(——この種の言いかたは、他地方にも見いだされるのではないか。)

つぎは近畿地方についてである。だいたいには、「ゴザル」丁寧法動詞の言いかたがなされていない。ただ、大和南部の十津川には、

○カタジケノー ゴザッタ ヨ。

ありがとうございましたね。

○コリャー オレノデ ゴザル。

これはわしのですよ。

などとの言いかたが見いだされる。三重県下にも、なにほどこか、「ゴザル」丁寧法動詞がおこなわれているか。井之口有一氏編『明治31年蒐集  
各郡役所謄写本滋賀県方言取調書』(滋賀県短期大学国語研究室 昭和25年10月)には、

カタヘゴザル 忝ナウゴザル

滋賀郡葛川村

とある。——私もかつて、湖西、朽木村で、土地の人の方言記録の中に、

おはよござる（おはようございます）

を見たことがある。

さて、「ゴザル」丁寧法動詞の、全国中でも、とりわけ注目されるのは、北陸においてである。福井県越前の奥地では、「ござる」の「ゴラル」がおこなわれているという。天野俊也氏の教示によれば、大野郡北谷村の内には、

○ソーデ ゴラル。

○ソーデ ゴラルー。

そうです。

○キョーワ エー テンキデ ゴラル ノー。

きょうはいい天気ですねえ。

などの言いかたがある。

天野氏が、なお、「福井県勝山町に於ける『行けへん』『行きねへん』等の否定法」（『福井県勝山高等学校研究紀要』第1号 年月不詳）にあげていられる「ゴゼヘン」「ゴヘン」は、「ゴザル」に関係のあるものなのかどうか。（氏は、これらを「謙遜したいひ方」との区分の中においていられる。）福井県今井郡下に、

○イレモンモテラ、オモライモーシテモ、ヨウゴザリガンショーカ。

との言いかたがあるという。（『簡約方言手帖』への佐飛翰氏の記述による。昭和8年1月）「ゴザリガンショー」には、丁寧法動詞「ゴザル」の連用形が認められる。

福井県下の奥地につづいては、石川県加賀東南部の「ゴザル」が注目される。私が精査し得たのは、白峰村の「ゴザル」である。次下のように、「ゴザル」使用のいちじるしいありさまが見られる。

○ソーデ ゴザル。

（「そうじゃ。」の敬態）

○ソーデ ゴザル。ソレワ。

“そりゃそうじゃ。”(ただし敬態) (老女)

○シャンデ ゴザル。

そうでございます。(老)

(そうか、そうかと言うばあいにも、「シャン カ。」と言う。)

○デキン モナ シカタガ ゴザラン。

できないものはしかたがありません。(小学校六年女子の成績のこと)

(中女)

○ヨー ゴザル。ミ シェー デモ。

よろしいです。見せなくても。(中女)

○オー、シャンデ ゴザッタ ワ。(老女)

(私の調査カードを検閲してくれた人は、これに、「そうございましたか」とのそえ書きをされていてくださる。)

○ヨン ベ ケン チジサマ ゴザッテ、エン ゼツカイガ ゴザッテ。

ゆうべ県知事さまがいらして、演説会がありました。

当地方に、尊敬法動詞の「ゴザル」がおこなわれていて、しかも丁寧法動詞の「ゴザル」がおこなわれている。共存の態が明らかである。『白峰村史』下巻の「方言」の部からも実例をお借りしよう。

○花でゴザッチャ(です)がノー(ね)

○ヨー(よう)ゴザッチャ(ございます)

などとある。当地方に、「ゴザル」丁寧法動詞のおこなわれることはさかんである。

金沢市域に、丁寧の「ゴザル」があるのかどうか。

能登には、丁寧の「ゴザル」が、だいたい聞かれぬようである。

富山県下に、いくらか、丁寧表現法の「ゴザル」動詞が見られるようである。『全国方言資料』第8巻の「富山県東砺波郡平村上梨」の例はつぎのである。

f ハイ イクワエ ゴーサテ ゴザッテ ハヤ

では 帰りますよ。お世話さま でした、 どうも。

私がかつて、高岡市伏木港でものを聞いた時は、「ゴザル」動詞のどんなものも聞くことができなかった。富山市教育委員会の『富山県方言集成稿（二）』（富山市教育委員会 昭和35年2月）には、

おはよー 朝の挨拶 ・「——ござい」

「おはよござんす」も同様に用いる。

というのが見えている。

つづいては新潟県下である。『全国方言資料』第8巻の「新潟県佐渡郡羽茂村大崎」の条に、

*m* アリガチャー コッテ ゴザル コリャマー

ありがたい ことで ございます、これはまあ。

*m* ソラグチュー カッテ イッタノオ マー ナシニ キタガ ヤボニ

もっこを 借りて 行ったのを まあ 返しに 来たが、たいそう

アリガトー ゴザッタ

ありがとう ございました。

などという「ゴザル」ことばが見えている。

北陸路との関連であろうか、岐阜県飛騨にも丁寧法動詞の「ゴザル」が見える。土田吉左衛門氏の「飛騨白川の方言」（『NHK国語講座』昭和31年11月）には、

「この間の祭ね、えらいぞさでござったのし」

（この間のお祭には、大変御馳走様になりましたなあ…）

「おらこそ、おおぞさでござってのし」

（私こそ却って大変頂戴致しましてどうも…）

との記事が見えている。『分類方言辞典』の「小詞」の部にも、

ヨゴザル 岐阜県北部・東山陰。

との記事が見える。

東海道地方に、「ゴザル」丁寧法動詞の見るべきものは、だいたい、ない。それにしても、静岡県遠江の御前崎方面で、私は、かつて、

○オゴツォーサマデ ゴザリガシタ。

(前出 P.176)

○ソーデ ゴザリガス カ。

そうでございますか。

との言いかたを聞いたことがある。丁寧の「ゴザル」が、どこにどう伏在しているかもしれないことではある。(御前崎方面に、「ゴザル」動詞が、「ガス」には関係なく単独に用いられることは、ないようであった。)

長野県下では、丁寧の「ゴザル」の使用例を、私は、まだ、見ることができていない。「山梨県南巨摩郡早川町奈良田」(『全国方言資料』第2巻)には、

mコワイ コッデ ゴザッケ ソレデモ

苦しい ことで あった、ほんとうに。

との言いかたがおこなわれている。

関東一円は、丁寧法動詞「ゴザル」をほとんど見せていない、と言ってもよいのではなからうか。「マキデ ゴザレ、スミデ ゴザレ」(まきであれ、炭であれ) <千葉県下例>といったような言いかたは、所どころに見いだされもするか。

東北地方については、今のところ、つぎのことが言える。福島県西南奥の檜枝岐の、昔話の語りでは、聞いていた子どもたちが、

○オモシロー ゴザッタ。

と言っていた。(昭和42年2月27日 NHK T.V.放送)

「全国珍語奇語集 秋田県」(北条忠雄氏)(『言語生活』第三十五号)には、

ンデゴザラホ(本莊)・ンダデホ(玉米)

ソウデゴザイマシヨウ・ソウデショウにあたる。

というのが見える。『<sup>秋田県</sup>方言音韻及口語法』にも、

ソーデ { ゴザリイ  
ゴザハイ } (市外町女)

というのが見える。秋田県下に、「ゴザル」丁寧法動詞は存在している。

岩手県下でも、昔話の語りには、丁寧の「ゴザル」が出ている。なお、小松代融一氏の『岩手方言の語彙』にも、「旧伊達領」の部に、

ゴザル 有る，居る，行く，帰るなど （敬）

というのが見える。

青森県下の東南部で、私は、つぎのような、「ゴザル」関係のことばを聞いている。

○アリ[い]ガドー ゴジャ ヨ。

ありがとうございますね。

○ゴダゲデ ゴジャ。

ごくろうさんでございます。

識者は、これらを、老人におこなわれてまねなもの、かつ上品なものとしている。「ゴジャ」は、どういう形の「ゴザル」ことばなのであろうか。「ゴジャッ」のむすびになることもある。

北海道地方に関しては、丁寧法動詞「ゴザル」の、とりあげるべきものを、今、私は、持ち得ていない。

今日、「ゴザル」丁寧法動詞は、限られた存在を見せるのみのものとなっている。一・二時代まえまでは、この種の「ゴザル」も、武家ことばなどとして、そうとうによくおこなわれていたであろうか。それが今は、偏頗な存在となっている。——北陸路その他に、偏頗な存在を見せているがゆえに、また、丁寧表現法の「ゴザル」の、かつては武家など、特定位相に、別してよくおこなわれたらしいことも、察知されるのではないか。

今日も、俚語の文句に出る丁寧の「ゴザル」、昔話の語りに出る丁寧の「ゴザル」に目をやれば、「ゴザル」丁寧法動詞の存立は上述の程度をこえて、より広汎に見いだされることであろう。

口語上、「……………で ゴザル。」との言いかたは、——たとえ丁寧表現法にはなっていない、しだいににおこなわれなくなった。方言の日常対話では、「ゴザ

ル」の言いきりにはたえられない気もちがつよまってきて、人はしだいに、「ゴザル+ $x$ （『マス』など）」の形式を採択するにいたった。今日、「ゴザル」丁寧法動詞単独用法の命運は、まさに落日のおもむきである。

## 第二節 ゴザリマス ゴザリモス

「ゴザル」に「マス」を添加した丁寧表現法形式は、「ヤンス、ヤス」などを添加したものよりも、いっそう一般的なものとなっており、ほぼ全国にわたって、——その多少はともかく、これの分布が見わたされる。

「ゴザリマス」の言いかたは、可能態としてはまさに、広く全国的におこり得たものであろうか。その後身である「ゴザイマス」は、じつに全日本的な存在であり、これは、共通語の一分子としても有力なはたらきを見せている。

「ゴザイマス」の前提形としての「ゴザリマス」が、今まず、観察されるしだいである。

丁寧法動詞「ゴザル」に「マス」の接合したものが、やはり丁寧法動詞なみの活動体であることは、言うまでもない。「ゴザリマス」形式が成就すると、この熟合形の新形ゆえに、「ゴザリマス」は、いよいよ、「ある」ことを言う丁寧表現の具として栄えることになったと思われる。「ゴザリマス」では、その栄えかたが、いまだふじゅうぶんだったとされるかもしれないが、この熟合形が、さらに転移して「ゴザイマス」の新形になると、これはいよいよ全国的に栄えて、その機能的価値の大を見せることになった。

「ゴザリマス」の存立を全国的に見ていくにあたっては、最初に、九州南部地方の「ゴザリモース」「ゴザリモス」を問題にしなくてはならない。

薩隅地方——薩隅を主地域とする九州南部地方——は、丁寧法助動詞「マス」のない地方である。それゆえ、当地方に関しては、「ゴザル+マス」の形式を考えることは、通常、できない。当地方で、「マス」に該当するものは「モス」

である。（「申す」起源の語とされている。）

九州南部地方では、他地方の「ゴザリマス」に相当するものとして、「ゴザリモース」「ゴザリモス」が認められる。（「ゴザイモス」も認められるが、それは、後節の問題である。）種子島では、「ゴザリモース」丁寧表現法がよく聞かれる。たとえば、

○コンニョー ユキガ フローゴト ゴザリモース ヨー。

今夜は雪が降りそうでございますよ。

などと言っている。「アリガトー ゴザリモース。」との言いかたは、「アリガトー モーシャゲモースー。」との言いかたの下の位にあるものという。

種子島以外の九州南部地方では、甌島に、「ゴザリモス」が比較的によくおこなわれているのか。薩隅本土では、「ゴザリモス」ことばのおこなわれることがすくないのかもしれない。——「ゴザイモス」がおこなわれているのであろう。

薩隅に関連することの深い地方、日向中部西奥で、

○オエイドノ オハヨ ゴザリモース。モー ハヨカラ オハリソトガ  
ハジマリモースタ カ。

などの言いかたを、人が、“とのさま時代のことば”と説明してくれたのは、興味ぶかいことであった。当地で、今日も、「ゴザリモス」（ございます）の言いかたが、わずかには聞かれるようである。

九州南部地方を除いては、国内に、「ゴザリモース」「ゴザリモス」を言う所が、今日ほとんどなかるう。それにしても、思われることである。「ゴザル」が通用語で、「申す」も通用語であったとすれば、両者の一体化した言いかたが、国内の広くに存立し得たとしても、ふしぎではないわけである。『米沢言音考』に、

ござりも於さん。又、ござりも於さな江。

ございませぬ。「そおて——」御座り申さんナリ。

又、甲、物ノ有無ヲ問フ時、

乙、無シト云フコトヲ、——ト云フ。

などとあるのも、偶然ではないことなのではないか。さて、その自在の存立の可能であったはずのものが、今日、九州南部地方にのみ特定の存立のようすを見せているのは、他の表現法との相互依存の関係にもよることとはいえ、一つの奇異の現象と見られる。——武家ことばふうのものなごりを残しとどめやすい方言風土がそこにあったとも見られるのか。

九州地方の「ゴザリマス」を見る。

宮崎県北部の延岡での家中弁には、

○オハヨ<sup>ー</sup> ゴザリマス。

との言いかたがある。

熊本県下に、「ゴザリマス」ことばのおこなわれることがいちじるしい。原田芳起氏は、「九州方言に現われた弱母音化通則」(『音声学会会報』第86号 昭和29年12月)で、

方言の本来の形は、熊本県下の多くの地域では〔ゴザルマス〕であり、一部の地域(これは阿蘇郡を中心とした東部方言)では〔ゴザリマス〕である。と述べていられる。諸他の方言資料を見るにつけても、「ゴザルマス」のよくおこなわれているさまがうかがわれる。ただし「ましょう」のばあいは、「ゴザルマッシュ<sup>ー</sup>」「ゴザルマッシュ」となる。「ゴザリマス」の言いかたも、たとえば熊本市域などでもおこなわれており、また肥後北部にもそれが見られる。(「ゴザリマッシュ」も言っている。)

○ソーデ<sup>ー</sup> ゴザリマッス ワイ。

そうでございますよ。(老男→藤原)

これは、阿蘇山麓での一例である。

佐賀県下にも、いくらか「ゴザリマス」が見いだされる。

長崎県下にも、「ゴザリマス」の、いくらかの存立が認められる。

○ソッヂャ<sup>ー</sup> サヨ<sup>ー</sup> ゴザリマッショ<sup>ー</sup>。

それではおいとまいたしまししょう。

は、西彼杵半島東北岸の一例である。五島には、「ゴザリマスル」があるか。県下の沓岐島や対島にも、「ゴザリマス」ことばがある。対島では、「ゴザリマッス」や「ゴザールマッス」も見いだされるようである。『全国方言資料』第9巻の「長崎県下県郡厳原町豆酸」の条下には、

f オーキニ オアガトー ゴザルマス  
 ありがとう。ありがとう ございます。

がある。

福岡県下にも、なにほどかの「ゴザリマス」ことばがある。筑後には「ゴザリマッスル」もあるか。

大分県下にも、「ゴザリマス」があり、たとえば国東半島内で、  
 ○ウツシュ ゴザリマス。

うっとしゅうございます。

などと言っている。——「ゴザリマス」が「ゴダリマス」ともなっている。『全国方言資料』第9巻の「大分県臼杵市諏訪津留」のことばには、

m バーサン オメレトー ゴラリマス  
 ばあさん おめでとー ございます。

というの見える。大分県南部などでは、「ゴザリマスル」も言っている。

○オサムー ゴザリマスル。  
 おさむうございます。

三ヶ尻浩氏の『大分県方言の研究』にも、

デゴザリマスル系  
 (活用セ、ジススル、スリヤー、○)  
 ○左様デゴザンスル。(分)(野)

とある。

大分県下に、なお、「オザリマス」がある。『全国方言資料』第6巻の「大分県大分郡西庄内村」の条に、

fへー アリガトー オザリマス マー

はい、ありがとう ございます、まあ。

とある。この「オザリマス」は、「オジャリマス」なのか、「ゴザリマス」なのか。

中国地方では、山口県下に、問題の事象のやや多いのが注目される。山口市のことばでも、「ごめんください。」との訪問あいさつで、「オーチンデ ゴザリマス カ。」などと言っている。

○アンタンデ ゴザリマス カ。

との訪問あいさつも、長門地方にかなりおこなわれていよう。長門北部の青海島の「ゴザリマス」例は、

○ソレガ ナンデ ゴザリマスィ ナ。

それが、なんでございますよ。

○ベンリヤ ヨロシュ ゴザリマス ヨ。

便利はよろしゅうございますよ。

などである。（「ゴザリマス」が「ゴダリマス」ともなっている。）

山口県下、周防のうちにも、なにほどかは（あるいは、かなり）「ゴザリマス」ことばが見いだされる。（「ゴザリマスル」もあるか。）

○オセワデ ゴザリマシタ ノー。

おせわでございましたね。（他家を辞去する時のあいさつ）

は、周防東部の一例である。『山口県方言調査』によれば、

○オコマリデゴアリマシヨー（お困りでせう）

の、周防東南部によく分布しているさまが見られる。「ゴアリマス」の形が注目される。島嶼部に「ゴダリマス」もある。

ともあれ山口県下は、「ゴザリマス」表現法に関して、中国地方ではなかなく注目される地域である。——九州との関連も思いよえられる。

山陰の島根県には、「ゴザリマス」ことばの、今、とりあげるべきものがない。「ゴザル」ことばのさかんな隠岐に関して、今、「ゴザリマス」ことばを

指摘することができない。山陰一帯に、「ゴザリマス」の言いかたが不毛のようである。

南がわの広島県下・岡山県下でも、「ゴザリマス」ことばは、ほとんど見いだすことができない。私の経験では、ただ岡山県美作西部奥で、

○アイソモ ナイ コッテ ゴザリマシタ。ドーモ。

おあいそもないことでした。どうも。

などと言うのを聞いている。なおここで、私は、

○エロー ゴアリマシタ。

○エロー ゴハリマシタ ナー。

“えらかったなあ。”（ねぎらいことば）

などと言われているのも聞くことができた。——特定の人の発言かのようにもあった。ともあれ、「ゴアリマシタ」「ゴハリマシタ」は、「ござりました」に関するものであろう。

四国地方には、山口県下を除く中国地方にくらべると、「ゴザリマス」ことばが、ややよくおこなわれているとされようか。伊予に属する内海島嶼のうちに、「ゴダリマス」というのなどが、いくらかあろうか。『土佐方言集』には、「ゴザリマス」が見える。老人のことばであろう。『阿波言葉の辞典』にまた、「ゴザリマス」が見えている。あらたまって丁寧にものを言う時に、中年女性も「ゴザリマス」を言うのを、私も聞いたことがある。讃岐の本土および島嶼に、また、若干の「ゴザリマス」ことばが見いだされる。あいさつことばなどでのばあいが多いようである。

○へー ヨ ゴザリマス。

はい、よろしゅうございます。

は、丸亀地域での老女のことばの一例である。

近畿では、次下に述べる程度に、「ゴザリマス」ことばが見いだされる。兵庫県下では、北部の但馬に、いくらか「ゴザリマス」があろう。たとえば但馬の南部で、

○ゴクローサンデ ゴザリマシタ ナー。

ごくろうさんでございましたねえ。

などと言っている。

大阪弁の古風の中には、「ゴザリマス」ことばが存在しているのか。諸家の記事にその指摘が見える。『全国方言資料』第4巻の「大阪府大阪市」にも、

fイエ マ ナガイサンテ イタダキマシテ ゴザリマスワ マ ……。<sup>1)</sup>

いえ、長居させて いただきましたよ。

1) はっきり聞き取れない。

などが見えている。茂木草介氏は、「<横堀川>と大阪の言葉」(『放送文化』第22巻4号 昭和47年4月)の中で、

「さいでござりまんな(さいでござりますね)」と幾分の気取りをこめた会話は無いこともなかった。

と述べていられる。この「ござりまん」は、「ゴザリマス」に該当するものか。——ともあれ、異形のものがここに一つ見られる。私は、大阪府下の南河内郡で、老人から、

○ソーデ ゴザリマス。

との返事を聞いた。

和歌山県下南方に、「ゴダリマス」があるか。(県下に、「ゴザリマス」がある。)

奈良県南部の東山峡で、かつて私は、

○ワリカタ スクフ ナッタンデ ゴザリマスルガ。

わりあいすくなくなっただんでございますが。(農協主任→藤原)

などを聞いた。県南、吉野郡下のそちこちに、「ゴザリマス」ことばが見いだされるようである。

三重県下の西南方、紀州分に、やはり「ゴザリマス」ことばがある。老人にときどき聞かれる程度のようにあるが。

京都府下の一般では、とくに丹後のうちなどに、「ゴダリマス」などがわず

かに見いだされる。

近畿東部に、「ゴザリマス」ことばの見いだしがたいのに比して、中部地方では、「ゴザリマス」ことばがやや手びろく見いだされる。ことに北陸路では、それがかなりよく見いだされる。——北陸は、注目すべき地帯になっているようである。（近畿に關係の深い北陸路が、近畿東部に反して、よく問題の現象を示しがちなのは、なにか古態保存のようにも思われて、興味が深い。）

福井県下の若狭にも、「ゴザリマス」がある。敦賀市の立石でも、

○ホンナ モン ゴザリマヘン ワー。

そんなものはありませんわ。 （老女）

と言っている。（愛宕八郎康隆氏による。）越前にも、「ゴザリマス」ことばがあるらしい。

石川県下では、今、加賀東南部の「ゴザリマス」をあげることができる。

○アリガトー ゴザリマシテ ワー。

ありがとうございましてね。

若よめさんなども、こう言ってあいさつしている。

○イヤハヤ、ナンモ ゴッソーガ ゴザリマセンデ。

これはどうも、なにもごちそうがございませんで。

これは、老女のあいさつことばである。

金沢市域にも、「ゴザリマス」ことばがある。ただし「ゴザリミス」と言う。土地人から聞き得た実話であるが、そのむかし、明治天皇、金沢行幸のみぎり、当時の金沢医学所の学生某氏は、御前講演の稽古にあたって、「ゴザリミス」を「ゴザイマス」にあらためるのにつとめたという。（ついでながら、返事ことばの「ヤー。」も、「ハイ。」にあらためるのにつとめたという。）

富山県下に、かなりの「ゴザリマス」ことばが見いだされるようである。富山県教育会編『富山県方言』には、

ゴザルマス

〔ござります〕（御座）ござります

## i が u に変訛

とある。『全国方言資料』第3巻の「富山県氷見市飯久保」の条にも、

fンナ アンガト ゴザルマシター

それでは ありがとう ございました。

などである。

新潟県下では、南部その他に「ゴザリマス」が点在しているようである。

転じて岐阜県北、飛騨に「ゴザリマス」ことばがある。

愛知県下にも、「ゴザリマス」ことばがいくらか見いだされる。私は、渥美半島南岸で「ゴザリマス」を聞いた。

長野県下にも、「ゴザリマス」がなくはない。(中部・南部でなど)

「山梨県南巨摩郡早川町奈良田」(『全国方言資料』第2巻)では、

mオメーデトー ゴザリマス

などと言っている。

静岡県下例では、御前崎方面の、

○マーズ ソーデ ゴザリマス カホン。

ああら、そうでございますかまあ。

などがある。

関東地方は、「ゴザリマス」ことばの、まずはおこなわれない所である。私は、千葉県下例を一・二有しているのにすぎない。

東北地方では、主として岩手県下・青森県東部に、問題の事象が見いだされる。

その手まえには、仙台ことばなどの「ゴザリス」がある。「ゴザリス」は、これとしてまた、注目しなくてはならない。(後述 第五節)

岩手県下では、どちらかという、県北あるいは県北をふくむ「旧南部領」で、「ゴザリマス」ことばがさかんか。県北での例は、

○ハイ。アリ[i]ガト ゴザリ[i]マス[i]。

などである。小松代融一氏の『岩手方言の語彙』の「旧南部領」の条下には、

ゴザルマツェ      ございます

というのが出ている。

岩手県北では、「ゴジャリマス」との言いかたもおこなわれている。

○キョー オフ[ü]リャネバ ヨー ゴジャリ[i]マス[i] ナッス[i]。

きょう、お降りにならねばよろしゅうございますね。

つづいてその北の、青森県東部にも、「ゴジャリマス」がある。

○アリ[i]ンガト ゴジャリ[i]マス[i]。

ありがとうございます。

など。能田多代子氏の『五戸の方言』にも、

まんつおはやごじやります。

えいお天気でごじやりますねす。

などの例が出ている。氏は、

老婦人の会話になると「ござります」は皆、「ごじやります」と発音する。とも説明してられる。北部の上北郡野辺地町でも、

○オハヨ ゴジャリ[i]マス[i]。

○アリ[i]ガト ゴジャリ[i]マス[i]。

などの言いかたが聞かれる。このようではあるが、青森県東南部に、「ゴザリマス」の言いかたも聞かれなくはない。

○キョア ゴダイギ[i]デ ゴザリ[i]マス[i]。

きょうは“ごくろうさまでござります”。

などとも言っている。青森県東の北部にも、「ゴザリマス」があるらしい。

北海道地方には、「ゴザリマス」ことばが、さほどおこなわれていないのではないか。

「ゴザリマス」ことばについて全国の状況をかえりみるのに、関東地方にはほとんどこれがなく、東北地方にも、おこなわれかたが東がわに片よっており、他方、近畿、中国、四国にも、「ゴザリマス」ことばの頻用などが見られない。

ただ、近畿をおいて東の中部地方に見るべきものがあり、また、中国地方でも、その西部の山口県下に見るべきものがあるのは、注目にあたいする。それにしても、おこなわれている「ゴザリマス」が、いちじるしく残存的であることは、多く言うまでもない。九州の「ゴザリマス」「ゴザリ申ス」にしても、その存立のさまは、古態の残存状況と見ることができよう。

全国一帯に、「ゴザリマス」(「ゴザリ申ス」も)ことばは、ほぼ余命を保っているありさまである。つまりは、「ゴザル」動詞の衰退ということであろうか。

新形「ゴザイマス」の全国的な隆盛からするのには、「ゴザル」ことばの「ゴザリマス」などの言いかたが、以上のように退歩してきたのは、まさに「ゴザリマス」の音感ゆえにであったろうと察せられる。——人は、正格の「ゴザリ〜」に、音感のうえではかえって異風なものを意識するようになったのであろう。

## 第二節 ゴザリヤンス以下の異形式類

### 一 ゴザリヤンスほか

「ゴザル」に「マス」がつくのならば、同様の理によって、「ヤンス」などがついてよい。「ゴザル」には、いろいろなものがつき得た。

九州地方では、長崎県下・大分県下の事象が見られる。『全国方言資料』第9巻の「長崎県壱岐郡郷ノ浦町里触」のことばでは、

fゴンニチャ マ ヨロシー テンキデ ゴザリアンス

きょうは まあ よろしい 天気で ございます。

という言いかたがある。「ゴザリアンス」が見える。「〜アンス」は、「〜ヤンス」に該当するものであろう。「大分県大分郡西庄内村」(『全国方言資料』第6巻)には、

f コリヤマ リッパナ オテンキデ ゴザリヤンス

これはまあ いい お天気で ございます。

f マー ゴフノ ワルイ コトジ ヤンスル マー

まあ ご運の 悪い ことで ございます、 まあ。

との言いかたがある。日本放送協会九州支部『放送講演集 九州方言講座』（日本放送協会九州支部 昭和6年5月）の大分県の条にも、

お早うござりやんする、  
が見えている。

中国地方に問題例は見いだされなくて、四国地方にもまた、問題例が見いだされない。四国では、香川県東部で、一度、「ゴザリヤンス」を聞いたかに思うが、けっきょくのところ、疑問とするほかはないものだった。

近畿地方にもまた、「ゴザリヤンス」がない。

中部地方の越後の西南部域で、「ゴザリヤンス」がおこなわれたか。小林存氏の「越後方言の結語法概観」（『国語研究』第十巻第七号 昭和17年8月）には、

ゴザリヤンスは東頸城郡安塚郷から中頸城西頸城信州移入近畿語系の勢力領に現はれるが、之も相当敬語である、（中略）髭を生やした男達が、

ゴザリヤンスルデゴザリヤンスル

などと連発するので結構物笑ひの種となる、

と見える。小林存氏は、のち、『越後方言七十五年（完）』（高志社 昭和26年12月）で、

村松のコザリヤンスルなどもう何処かへ行つてしまつただらう。

と述べていられる。県北、村上市方面には、今も、「ゴザリヤンス」が見いだされるらしい。

ほかの中部地方域には、問題の事象が見えない。関東地方の大部分でもまたそうである。

東北地方となって、まず日本海がわに、「ゴザリヤンス」「ゴザリアンス」が

見られる。秋田県西南部内には、「ゴザリヤンス」があるという。知友、佐藤 鍊太郎氏は、これを、士族ことばであると説明してくれた。北条忠雄氏は、おなじく秋田県西南部の本荘市のことばについて、「そうでございます」相当の「ソーデゴザリアンス」をあげていられ、つづいてまた、山形県新庄市のことばについて、

○ホー ヤハギサンノ オトツツァンデァンスナ。

というのをあげていられる。(『方言の旅』みちのくの巻〔1〕——日本海筋——出羽路の旅<羽後><羽前>)「〜アンス」は、「〜ァンス」の形でもあらわれている。

秋田県下とせなかあわせの岩手県下に、「ゴザリアンス」の、今もなお、かなりさかんなものが見られる。金田一京助博士の「私自身の方言を顧みて」(『方言研究』第三輯 昭和16年6月)には、

私共の郷里などの詞では、『さうです』に次の様な段々がある。

さやうでござりあんす [=さやうでございます] さやうで (或は  
さうで) ござんす さうでござんす そでがんす そであんす  
そだんす そだす [=さうです] そだ [=さうだ]

とある。「そであんす」にも、「ヤンス」が認められよう。「そだんす」は、「ソデアンス」のつづまったものか。「そだす」は、「ソダンス」のつづまったものか。博士は、

『そだす』といふ風な形は、ごく親しい、又は目下に使ふ粗末な詞遣で、…と述べていられる。岩手県北では、

○ゴーゴーデ ゴザリ[i]アンス[ü]ヘンデ、オギ[i]ギャッテ ク[ü]ダ  
サリ[i]マセ。

こうこうでございますから、お聞きなさってくださいませ。  
などと言っている。

「ゴザリヤンス」相当の「ゴザリアンス」形は、「ゴザリヤンス」の比較的よわめの言いかたから、しぜんに派生したものではなかるうか。よわい「ゴザ

「リヤンス」は、人に、「ゴザリアンス」と聞こえやすくもある。さて、「ゴザリアンス」が「ゴザリヤンス」の変形と見られるのに相応して、のちにとりあつかう「ゴザリアス」もまた、「ゴザリヤス」の転と考えられる。

岩手県下には、「ゴザリヤンス」もあろうか。「ゴザリアンス」も見える。（小松代融一氏『岩手方言の語彙』旧南部領）

寺井義弘氏『青森県南部方言考』（八戸市教育委員会 昭和37年10月）には、

ございます ござりアんす ゴザリ'アンス

が見えている。

東北地方から北に行つての北海道地方には言うべきものがなくて、東北地方を南下して茨城県下となると、そこに「ゴザリヤンス」が見える。（田口美雄氏「茨城方言語法の二三の考察」『方言研究』第十輯）関東東北部域は、とかく、南奥に同じる地域である。「ゴザリヤンス」に関しては、福島県下には言うべきものがないが、「ゴザリヤス」は、後述するように、同県下にかなりいちじるしいものがある。今、「～ヤンス」「～ヤス」を一括して注目することにすれば、茨城県下は、奥羽の東がわにたつたものをよく示すと見ることができる。——茨城県下に「ゴザリヤンス」とともにまた、「ゴザイヤス」などもある。

なお、群馬県下にも「ゴザリヤンス」があるという。（都竹通年雄氏「群馬方言の語法」『季刊 国語』昭和22年冬季号 3 昭和23年1月）

以上、「ゴザリヤンス」ほかの全国分布をたずねた。その存在が、片よりの多い、もはや弱勢とも言ってよいものであることは、上に明らかであろう。つぎの「ゴザリヤス」ほかは、「ゴザリヤンス」ほかよりも、やや優勢な生態を見せているか。

#### 一' ゴザリヤスほか

九州では、天草に「ゴザリヤス」がある。原田芳起氏の「天草島の方言に就て」（『方言』第四卷第九号 昭和9年9月）に、

「ございます」に当る敬語助動詞は「ござァす」乃至「ござす」、或は「ござりやす」である。

と見える。

ついで長崎県下が、「ゴザリヤス」を比較的良好に見せる地域である。「長崎県南高来郡有家町」(『全国方言資料』第6巻)のことばには、

*f*アー アリガト ゴザリヤヒ  
ああ、ありがとう ございます。

*m*アリガト ゴザリアヒタ  
ありがとう ございました。

との言いかたが見られる。この地方に、「ゴザリヤス」の言いかたもおこなわれている。私が平戸島で聞き得た「ゴザリヤス」例は、

○キョーワ サムー ゴザリヤス テー。  
きょうはさむうございますねえ。

である。——平戸方言では、「ゴザリヤス」の形のほうがふつうのようである。

「ゴザリヤス」のばあい、中国地方の、原安雄氏の『周防大島方言集』にも、これが見られる。なかんづく丁寧なことばであるという。

四国・近畿には、「ゴザリヤンス」のばあいとおなじく、とりたてるべきものが見いだされない。

中部地方となって、「ゴザリヤンス」のばあいとおなじく、また新潟県下に、「ゴザリヤス」がいくらか見いだされる。

つぎに関東地方では、群馬県下に「ゴザリヤス」が見いだされる。(都竹通年雄氏の前掲論文による。)

東北地方では、さきにもふれたように、まず福島県下に、「ゴザリヤス」が優勢である。飯豊毅一氏は、「福島県方言における対者尊敬表現について」(『国語学』59 昭和39年12月)の中で、「デヤス」「デ ゴザリヤス」の類について、分布図を示し、県下の分布を詳説してられる。「デヤス」の変化形「デ

ース」にもふれていられる。ちなみに、氏に「ダンス」の指摘もある。——これは、「ダンス」に相当するものか。

「ゴザリヤンス」はもっとも丁寧な言い方で女性に多く現われる。

という。なお飯豊氏は、県下の概勢について、

以上「ヤス」「デヤス」の類を総合して分布を考察した場合にどのようなことを言い得るであろうか。

これらは一般的には宮城県から浜通り、茨城県にかけてはかなり盛んに用いられているが、中通り、会津地方ではあまり勢力を持っていない。と述べていられる。

児玉卯一郎氏の『福島県方言辞典』には、「ゴザリアス」があげられている。県下東部域には、南に「ゴザリヤス」、北に「ゴザリヤース」がさかんである。相馬中村弁の「ゴザリヤース」の一例は、

○オヒ[i]マダレデ ゴザリヤース[ü]ガ、コノ テガミ[i]ヲ ヨンデ  
ク[ü]ダハリヤース。

おてまをとらせて恐縮でございますが、この手紙を読んでくださいませ。である。

福島県下については、宮城県下に「ゴザリヤス」が見いだされる。(宮城県以北では、通常、「ゴザリヤース」とは言っていないようである。)松島湾岸の例では、

○オドッゲデ ナイ[i]ッデ ゴザリ[i]ヤス[ü]ッペ。

おどけではないんでございましょうよ。

○タヨッテ イ[i]グ[ü]ジェートモ ゴザリ[i]ヤス[ü]カラ。

たよっていく生徒もでございますから。

などをひくことができる。——「ゴザリヤス」が「ゴザリヤース」にもなっている。仙台方言の文献『浜荻』にも「ゴザリヤース」が見える。

宮城県下につづく、北の岩手県下には、広く「ゴザリヤース」が見いだされる。(小松代融一氏『岩手方言の語彙』など)「ゴザリヤース」は、「ゴザリヤス」に

近いものであろう。県南地方に、「ゴザリヤス」もまたよく聞かれる。この「アス」が「ヤス」に該当するものであることは明らかであろう。（——県南に、「ゴザリヤス」も聞かれる。）「ヤンス、ヤス」に、「アンス、アス」が対応する。すでに前項で、東北地方の「アンス」に関し、それが「ヤンス」であることを言った。「アス」は、「アンス」の縮約されたものであろう。「アス」は「マス」ではないと考えられる。東北地方では、「マス」は「ス」に縮約されている。（ただの「ス」ではなくて、その上に「ア」があるのは、「アス」が「ヤス」の転であることを証するものであろう。）県南、水沢地方では、

○オハヨゴザリ[*i*]ェス[*ü*]。(「リ[*i*]ェ」は「レ」に近い)

○オバンデ ゴザリ[*i*]ェス[*ü*]。

などと、「ゴザリェス」の言いかたをしている。

「ゴザリヤス」のばあいは、奥羽東がわに、そうとうの広い分布が見いだされるのと同時に、西、秋田県南に、つぎの事例を見いだすこともできる。

○ンデゴザリアヘン（そうではありません）

北条忠雄氏の、前掲の、本荘市についてのご報告にこれが見える。

北海道地方については、今、言うべきものを持たない。

前項の「ゴザリヤンス」ほかと本項の「ゴザリヤス」ほかとは、相互に関連するものである。上来の、両者各個の記述も、対比集合されるべきものであることは言うまでもない。東北地方での、問題の諸事象の分布にしても、双方を合一して観察する時、だいたい東がわが注視すべき地域をなすことが看取される。——東北地方が、このさいもまた、東西両がわのたて仕切りに見わけられようとするのは、注目にあたいする。

「ゴザリヤンス」ほかと「ゴザリヤス」ほかとを合わせ見て、今、私どもは、全国諸方言上で、これらによることばづかいが、まったく衰退途上にあることを認めることができる。共通語の「ございます」流通のいきおいのもとでは、「ゴザリヤンス」や「ゴザリヤス」などは、その「ヤンス、ヤス」ゆえに、い

ちじるしく古態味をおびたものとされてきているのであろう。

## 二 ゴザリガンス ゴザリガス

静岡県下の御前崎方面で私が聞き得たものに、

○ソーデ ゴザリガス カ。

そうでございますか。

がある。「ゴザリガシタ」などとも言っている。(P.176, 184) すでに静岡県師範学校・女子師範学校『静岡県方言辞典 附 音韻法 口語法』(吉見書店 明治43年3月)にも、「オハヨーゴザリガス」が見えている。

「ゴザリ」に「ガス」がついているのは、一見、特異ではあるけれども、「ゴザリ」に、「ヤンス」がつくのも「申す」がつくのも、既成の「ガス」がつくのも、理は同一と考えられる。本動詞に対する補助の要素を自由にとりきたって、そこにこだわりのない承接を見せるのが、日本語「文表現」の述部構造である。

今、私の手もとには、福井県越前内の「ゴザリガス」例もある。「オハヨゴザリガス。」などと言っているらしい。

越前に、「ゴザリガンス」もあるのか。

○イレモンモテラ、オモライモーンテモ、ヨウゴザリガンショーカ。  
などとの事例が見いだされる。(P.181)

## 三 ゴンサリマス

長崎県西彼杵半島東北岸での調査のさい、私は、つぎの事例を得た。

○サヨデ ゴンサリマス。

さようでございます。

土地の人はこれを、士族ことばだと説明した。主としては老女の層に、まれに聞かれるものであるらしい。この地で、私はまた、西彼杵半島の他地にも「ゴンサリマス」のあることを聞かされた。

この「ゴンサリマス」は、たとえば「ゴザリナサリマス」を考えしめるかど

うか。それは不明であるけれども、「ゴザル」に関して、「ゴザリナサリマス」などの言いかたができてふしぎではないと思われる。方言生活の中では、人人は、語と句法とを、きわめて自由に運用しがちである。ものの転用されることも、きょくたんにおよぶことさえある。

#### 四 ゴアハンス ゴハンス

『和歌山県方言』に、西牟婁郡のことば、

ゴアハンス（段訛） 御ごいます

があげられている。また、

ゴハンス（段訛） ございます

というのもあげられている。串本町役場『和歌山県西牟婁郡串本町誌』（串本町役場 大正13年8月）にも、

ゴアハンス（御座います）

があげられている。——「ゴワハンス」の言いかたも聞かれる。

「ゴアハンス」の前身は「ゴザハンス」か。「ゴザハンス」の前身を求めると、「ゴザリナハンス」までいくことができるかと思う。「ゴハンス」は、「ゴアハンス」からのものではないか。

「ゴザリヤンス」以下の異形式類は、おおよそ上述のとおりのもが見いだされる。この分野がかなり特殊的事であること、またその勢力の限定的なものであることは、多言を要しないであろう。

### 第三節 ゴザイマス ゴザイモス

「ゴザル」に「マス」の結合した「ゴザイマス」が、丁寧法要素として盛大の活動を見せていることは、周知のとおりである。（西中国地方では、「アリマス」との言いかたが「ゴザイマス」に対応してもいる。）丁寧表現法の「ゴザイ

マス」ことばに、「ゴザイマセ」命令形はあり得ない。

丁寧表現法のばあいも、丁寧法動詞の「ゴザル」を使用することにとどまらないで、これに補助要素を熟合せしめたが、熟合は用法のあらたな展開をまねくことになり、そこにまた、ものの用いられることの頻度に応じて、熟合形の新展開もおこった。「ゴザリマス」から「ゴザイマス」へもまた、その新展開の一つだったのにちがいない。

「ゴザイマス」の成立は、人々に、丁寧法動詞の近代化を感知せしめたであろう。ものは、「リ」から「イ」へのわずかの音転を見せたのにすぎないものであるけれども、できた「ゴザイマス」という渾一体は、「ゴザリマス」からははなはだしく音感の距った言いかたになっている。つまりここに、近代音感の「ゴザイマス」が成立したであろう。これは必然、新しい機能価値をになって、国語生活の大衆の胸をぬっていったことと思われる。（——そこで、しぜんにもまた、使用上の転訛形も、続々と生産されたのであろう。）

以下に、「ゴザイマス」ことばの全国状況を見よう。一方では、共通語の、国民生活必須の一要素たり得ているものが、方言上ではどのような生態を見ているか。——今日の共通語の上層波の「ございます」にはこだわりなく、方言現実態の「ゴザイマス」ことばを見ていく。

はじめに、九州南部地方の「ゴザイ<sup>キ</sup>申ス」を問題にする。

例によって種子島では、「ゴザイモース」の言いかたがおこなわれている。薩隅本土地方では（薩摩の甌島も）、「ゴザイモス」の、短呼の言いかたがおこなわれている。薩南では、「ゴザイモス」のおこなわれることがさかんである。瀬戸口俊治氏に例を借りるならば、薩摩半島東南部で、

○ソラ ヨシュ ゴザイモシ トオー。

“それはそれは結構でございますとも。”

と言う。氏はこれを、中・老年女性の、ややあらたまつたもの言いのばあいとされる。上村孝二氏の「薩南諸島方言語法資料」（『鹿児島大学 文科報告』第

7号 昭和33年8月)には、甌島の「ゴザイモス」例、

○ホンヤラ エヤラ ナンカケーカ モローテ アイゴトーゴザイモイタ。  
が見える。甌島もまた、「ゴザイモス」のさかんな所ようである。

大隅地方では、薩摩地方にくらべて、「ゴザイモス」ことばのおこなわれることが、ややよわいか。

熊本県南部の球磨郡では、「ゴザンモス」がおこなわれている。原田芳起氏の『熊本方言の研究』(日本談義社 昭和28年1月)には、

球磨郡が、「申す」系の「ゴザンモス」で代表されることばを使い、他は「ござります」系で現在では標準語に引かれて「ゴザイマス」だが、とある。「ゴザンモス」は、薩摩地方などにもありうるのだろうか。薩摩西南部の笠沙半島で聞き得た、

○今、習字は、ゴザンサン トナー。

今、習字はございませぬのですか。

などの「ゴザンサン」は、「ゴザンモサン」に相当するものではなからうか。瀬戸口俊治氏は、種子島、西之表市のことば、

○イモーワ モ ギッターマリデゴザンモスバッテン ナァラー。

今はもうゴムまりでございますけれどもね。

をとりたてていられる。

以下に、九州地方の「ゴザイマス」ことばを見ていこう。

宮崎県下については、言うべきかくべつのことばがない。

熊本県下にいちじるしい「ゴザイマス」ことばについて、阿蘇山南麓の一例を見るならば、

○オヨリマスト ヨー ゴザイマス。

“およりくださいませ。”

というのがある。「熊本県上益城郡浜町」では、

f アリガト ゴザーマース

ありがとう ございます。

との言いかたをしている。（『全国方言資料』第6巻）

長崎県下の「ゴザイマス」ことばの中には、「長崎県杵岐郡郷ノ浦町里触」などの「ゴザマス」もあるらしく、また、「長崎県下県郡巖原町豆酸」などの「ゴザイマース」もあるらしい。（『全国方言資料』第9巻）

佐賀県下・福岡県下に「ゴザイマス」のよくおこなわれることは言うまでもなく、推量では「ゴザイマシツロ」などと言っている。

福岡県下に、「ゴザイマス」の訛形がある。『全国方言資料』第6巻の「福岡県三井郡善導寺町」のことばには、

m コリャー ホンナー スコシデ ゴザイマスバッテンカー オイワイノ

これはほんの少しで ございますが、 お祝いの

シルシー オサメチクナサエ

しるしに お納めください。

というのが見える。（なお、「善導寺町」では「ゴザエマス」も言っている。）

福岡県嘉穂郡下には、

○オアツ ゴザイ。

との言いかたもある。土地人は、これを、「お暑うございます。」だとしている。——通りすがりに会った、したしい者どうしがこれを言うという。

筑後西部内には、「アツー ザイマス ノー。」（お暑うございますね。）などの言いかたが見いだされもする。

肥筑の地には、べつに「ゴザイマッス」の言いかたもそうとうつよくおこなわれており、これにともなって、「ゴザイマッスル」の言いかたも見られる。

熊本市内の例を見るならば、

○アーラ、ヨー ゴザイマッショー カ。こんないたきものをして。

ああら、ようございましょうか。こんないたきものをして。

などがある。

天草でも、

○アツー ゴザイマッシュェーン。

暑くはございません。

などと言っている。佐賀県南の一例は、

○ゴメンナサイ。オウチ ゴザイマッスー。

ごめんなさい。いらっしゃいますか。

である。県下で、「ゴザイマッシュォー」の言いかたもよくおこなわれている。

長崎県下、対島の例は、

○オサムー ゴザイマッス。

などである。(山本俊治氏の調査による。)

福岡県下に、「ゴザイマッス」「ゴザイマッスル」がさかんである。県南、筑後には、

○イレモンナガラ イタデーテ ヨゴザイマッシュェーノ。

いれものごといただいてよろしゅうございますか。

との言いかたもある。(某氏記述の『方言手帖』による。)

○オユー ゴザイマッスル。

どうぞございます。

は、筑前、北九州市域内の「ゴザイマッスル」例である。

大分県下は、「ゴザイマス」のさかんなものを見せている。豊後西奥の二・三例をあげるならば、

○キョーワ ヨー ゴザイマシタ。

(夕がたのあいさつ)

○オシルシュー ゴザイマショー。

ご大儀でございましょう。

○オジャク (エジャク) ワルー ゴザイマシタ。

(人を送る時のあいさつ)

などがある。

大分県下に、「ゴゼーマス」もおこなわれている。「ゴザーマス」もある。  
豊後内では、たとえば国東半島でなど、

○オハヨ ゴザイマスル。ドージョ オテンキナラ ヨー ゴザイマスルガ。

お早うございます。どうぞお天気ならようございますが。

というような言いかたも聞かれる。昔話の語り口などでは、「ゴザイマスル」  
が出がちのようでもある。

大分県下では、なお、「オザイマス」の聞かれるのを、特記しなくてはなら  
ない。豊後内では、

○アリガトー オザイマヒタ。

ありがとうございました。

などと言う。「ザイマス」の言いかたもある。

以上、九州での大勢では、「ゴザイマス」の訛形もさることながら、べつに、  
「ゴザイマッスル」などの古形の見られるのが注目をひく。ただし、この種  
のもの、時とともに、漸次衰退していくことであろうか。

つぎは中国地方である。「ゴザイマス」形が一般的におこなわれていること  
については、もはや言わないことにする。

山口県下には、たとえば周防、祝島などにも、「ゴザイマスル」の言いかた  
がある。

○チンデ ゴザイマスル、……………。

なんでございます、……………。

などと言っている。県下にまた、「ゴザエマス」がある。（長門地方には、「ゴ  
ザエイマス」の言いかたもある。）県下に、「ゴザーマス」もかなりおこなわれ  
ているらしい。「ゴダイマス」もかなり聞かれるようである。

○シバイア コージョーデ ゴザイマスィ フー。

のように、「ゴザイマス」を、「ゴザイマスィ」と言うこともまた、山口県下に  
一般的である。——この事象は、だいたい、中国地方に特立している。

広島県下についての、言うべき形としては、一つ、「ゴザーマス」がある。(『全国方言資料』第5巻「広島県庄原市山内町」)——備後地方では、「ゴザエーマス」もおこなわれていようか。なお、備後の三原市方面には「ございمایشょう」のくずれ「ガイモー」もおこなわれているらしい。(三原市役所総務課『三原市大観』 広島県三原市役所 昭和26年11月) 県西域内には、「オバンデ ゴザイ。」(こんばんは。)などの言いかたがあるという。この「ゴザイ」は「ゴザイマス」の下略であろうか。

岡山県下では、「ゴザエーマス」「ゴゼーマス」などの訛形がよくおこなわれている。「岡山県真庭郡勝山町神代」では、

f オメデトー ゴザイマッス

おめでとう ございます。

どの言いかたがおこなわれているというが(『全国方言資料』第5巻)、「ゴザイマッス」は、どの程度におこなわれているものであろうか。

山陰の出雲地方では、「ゴザエマス」の言いかたがほぼ一般的であろうか。

○ホン<sup>ニ</sup> ケー オチャドコデ ゴザエマス。

ほんどに、まあ、ここはお茶どころでございます。

などと言っている。訛形「ゴダエマス」も聞かれる。さて、「ゴザイマス」形についてであるが、出雲地方での敬虔な「ゴザイマス」あいさつことばの一例をかかげてみよう。

○ド<sup>ー</sup>モ ヨ<sup>ー</sup> フリマシテ ゴザイマス。

これはどうもよく降ることでございます。

鳥取県下には「ゴザーマス」がある。「きょうは雨が降るだろうか。」も、「…………… フルダラー カ。」と言っている土地がらなので、とかく「ゴザーマス」も発言されがちなのか。

四国地方ではまず、「ゴザエーマス」以下の訛形のおこなわれることはない。当方は、[ai] 連母音の不同化の地域である。(そのことは、当地方アクセント

の性質に関連することだと、私は考えている。）

愛媛県下については言うべきことが、さらさない。

高知県下についても同様である。（ただ、「ございますでしょう？」の言いかたが、「ゴザイマスロー。」であったりするのが、一つ注目される。）

徳島県下については言うべきことがなくて、香川県下に一問題事項がある。草薙金四郎氏は、『讃岐の方言』（高松ブックセンター 昭和37年11月）で、

ござ（接尾）御座います。「ございます」の「います」が脱落したものである。「そうでござ」「今日はええ天気でござ」

と述べていられる。丸亀方言では「ゴザ」が注目される。人は、「ヨー ゴザ。」を、「ようございます。」の気もちのものとしているとのことである。「ゴザンス」が「ゴザ」となったことも考えられはしないか。丸亀方言では、

○ソエデ エーデス ワ。

それでいいですわ。

○ソレデ ヨー ゴザ。

○ヨー ゴザンス。

などと言っている。人によっては、「ヨー ゴザンス。」よりも「ヘー ヨー ゴザ。」のほうが、“かんたんで早い感じがする。”などとも言っているそうである。

近畿地方の主部分にも、「ゴザエーマス」以下の転訛形のおこなわれることが、まず、ない。兵庫県下の西播地方などには、

○オアツー ゴザエーマス。

お暑うございます。

というような言いかたも聞かれる。「兵庫県神崎郡神崎町粟賀」（『全国方言資料』第4巻）には、

f オウチノ オジーサンガ ヨーゴゼーデガラニ オキノドクナゴッテ<sup>1)</sup>  
お宅の おじいさんが よくなくて お気の毒なことで

ゴゼーマンタ

ございました。

1) 「カラ＝」とあるべきところ、[k]が有声化している。次の「コッテ>ゴッテ」も並行的な現象。

ともある。

兵庫県下に、「ガイマス」形がある。和田実氏の「兵庫県高砂市伊保町（旧印南郡伊保村）」についての記述には（『日本方言の記述的研究』）

ガイマスは「ある」の最もいねいな語。多くは補助動詞的に用いる。

とある。

大阪府下に関しては、「ゴザイマス」形についてではあるが、その用法の、注目すべきものを、一つあげたい。山本俊治氏は、「しなさだめ」（『兵庫方言』4）の中で、

○サムー オマスデ ゴザイマス。

などの言いかたを見せていてくれる。

和歌山県下には、訛形「ゴダイマス」が見られる。

奈良県下には「ゴアイマス」がある。（『菟田之方言』）（新藤正雄氏『大和方言集』大和地名研究所 昭和26年10月）「それはなんでございますか。」を、「ソレ ナンデ ゴザイマン ノゾ。」と言っている所もあるらしい。『全国方言資料』第8巻の「奈良県吉野郡十津川村小原」の条には、

*m*ヤー ダンダン オーキ ゴクロー ゴザエマンタ アー

いろいろ たいそう ご苦労で ございました。

というのが見える。

三重県下については、言うべきことがない。

京都府下では、丹後地域となると、「ゴザーマス」などの言いかたが聞かれる。井上正一氏の『丹後網野の方言』には、

○オハヨーゴザーマス。 同輩又は目上に。

というのが見える。

滋賀県下については、今、言うべきものがない。

つぎに中部について見る。

北陸地方では、石川県下の「ゴザイミス」が特別の問題になる。その前に、石川県下東南部内の、あいさつことばでの「ゴザイマス」例を一・二あげておこう。

○ゴク<sup>ラ</sup>ロサンデ ゴザイマシテ<sup>ア</sup> アー。

ごくろさんでございましてね。（別辞）

○アリガト ゴザイマシテ<sup>ア</sup> アー。

ありがとうございます。

「ゴザイマンテ」と言いとめる表現法が熟している。

ついでながら、能登のうちでは、

○オハヨー ゴザイマス。

お早うございます。

との文アクセントが、一つ注目される。（能登島例。愛宕八郎康隆氏の調査による。）——この種のことばづかいでの、この種の文アクセントは、山口県下では、つよい傾向をなしている。

能登半島内では、「ゴザイマス」の「ゴザエマス」「ゴゼーマス」「ゴゼマス」も聞かれる。（『全国方言資料』第3巻「石川県輪島市名舟町」の記事による。）なお、『全国方言資料』第8巻の「石川県鹿島郡能登島町向田」の条には、「ザエマシタ」も見えている。

f<sup>(注)</sup>アッ ゾンメーノ ウチワ ハヤ アリガトゴザイ イロイロ  
存命の うちは ありがとうございます(ました) いろいろ  
ハヨ オシエワン ナッテ アリガトー ザエマシタ  
お世話に なって ありがとう ございました。

（注 アッ あいさつの表情音）

さて、問題の「ゴザイミス」ことばは、方言絵はがき『加賀ことば』などでも、しきりにとりたてられている。『全国方言集』にも、

ソウデゴザイミスキー 左様ですか 金沢市

などである。私が、能登半島の宇出津で聞いた実例は、

○アリガト ゴザイミス。

○ゴツツォサマデ ゴザイミシタ。

などである。この地でまた、「ゴジミス」も聞いた。

○ソーデ ゴジミス。

さようでございます。

などと言っている。「ます」は「ミス」となるから、「いらっしやいませ。」も「イラシミセ。」である。ただし、これらの事実を書きとめることができた昭和24年にあっても、人々は、「ゴジミス」や「イラシミセ」がだんだん失われていくと言っていた。年寄りだけのものとも言われた。ただまた、あんがい子どもたちには残っている、などともあった。

富山県下には、「ゴザイミス」のおこなわれることはなくて、「ゴザイマス」ことばがおおはばにおこなわれている。ところで、その中にあって一つ、「ゴザンマス」という言いかたが光る。これは、県西部の高岡市、ならびに東がわの射水郡下に見られる。『富山県方言』には、

ゴザンマス 高岡の挨拶

「ヤアヤア あんがと ござんます。」(中流の女同志)

とある。柴山幸氏は「富山県射水郡榑田村地方方言」(『方言誌』第十三輯 国学院大学方言研究会 昭和10年1月)で、榑田村の婦人どうしのあいさつ、

○ゴクロサマデゴザンマス、サエサエキマンテ ハヤ ゴツツオハンナ。  
をあげていられる。

『全国方言資料』第3巻の「富山県下新川郡入善町小摺戸」の条には、「ゴザーマシタロー」(ごぞいましたでしよ)がある。この「ゴザーマス」ことばは、上の「ゴザンマス」ことばと密接な関係にあるものだろう。——「ザー」と伸ばされるのが、しぜん「ザン」とはねられることにもなるのだろう。(おなじく「小摺戸」のことばには、「ごぞいます」の「ザイマス」もある。)

新潟県越後では、「ゴザイマス」にまじって「ゴザエマス」「ゴザエマス」が見られる。越後北部には「ゴゼーマス」もある。

佐渡には、「ゴジャエマス」「ゴジャーマス」「ゴジャマス」「ゴザマス」「ゴゼマス」などがある。

○オハヨ ゴザマス。

は、佐渡、水津のことばである。

岐阜県下・長野県下については、言うべきことがない。

愛知県尾張地方には、「ゴザーマス」「ゴゼーマス」などの言いかたがおこなわれている。

静岡県下にも、「ゴザエマス」「ゴゼーマス」などが見られる。伊豆のほうでは、

○オハヨーゴゼーマス。

との朝のあいさつをしている。（山本靖民氏「伊豆宇佐美方言」『方言』第二卷第七号 昭和7年7月）

山梨県下西南山地部には、「ございました」の「ダイヤモンド」形があるらしい。ただしそれは、

奈良田には「ございました」が「ダイマヒタ」の形となって、尊敬をあらわすに用いられ、敬語の助動詞はこの語以外はみとめられなかった。

と説明されている。（清水茂夫氏・渡辺宦弘氏「西山村方言の語法」『西山村総合調査報告書』山梨県教育委員会 昭和33年3月）

つぎは関東地方である。総体に、「ゴザイマス」が用いられるのは、あいさつことばにおいてであろう。神奈川県下については言うべきことがない。東京弁のあいさつことばに、

○オヤカマシューゴザイマシタ<sup>△</sup>。

というのもあるという。（斎藤秀一氏編『東京方言集』東条操先生は、

東京の「ゴザイマス」は京都の「オス」大阪の「オマス」に相当する。

と述べていられる。(『方言と国語教育』 国語シリーズ 11 文部省 昭和28年3月)

伊豆諸島内には、別して注目すべきものがあるらしい。私が一つ聞き得ているのは、新島の、

○オハヨー ゴダイ。

お早うございます。(成人のていねいなあいさつ)

である。

千葉県下では、「ゴゼーマス」などの訛形が、“農家あたりのことば”とされているのを、かつて私は聞きとめた。

埼玉県東部内では、

○スミマセンデ ゴザイマシタ ネー。

などと、婦人がていねいに「ゴザイマス」ことばをつかっていて、また、「オハヨース。」などの男ことばも聞かれる。

群馬県の、前橋地方で聞いた「ゴザイマス」のあいさつことばに、

○オホリノー ゴザイマス。

ありがとうございます。

というのがある。

○オホンノー ゴザイマス。

は、“ごちそうさまでございます。”だという。(物をもらった時もこれを言うのだという。ただし、上二者の言いかたは、今日、ほとんどすたれきっているようである。)

栃木県下・茨城県下で「ゴゼーマス」などの訛形も見られるのは、関東他県下のばあい同様である。

北上して東北地方を見よう。全般に、日常生活上、「ゴザイマス」ことばのおこなわれることが、かなりすくないようである。(——そのようなことばづかいにおよぶことのすくない言語環境にある、と言えようか。)もとより、て

いねいにあいさつして、「オ晩デ ゴザイマス。」などと言うこともありはしよう。以下に、各県下の問題をひろう。

福島県の会津弁には、

○アノ  $\overline{\text{ネ}[\epsilon]ー}$ 。シ $[\text{i}]$ ミ $[\text{i}]$ ンヅ $[\text{ü}]$  ゴンザイマス $[\text{ü}]$ カラ。そこへ  
行って顔を洗いなさい。

というような発言がある。

「山形県南置賜郡三沢村」(『全国方言資料』第1巻)では、

*m*ヤー アリガトー ゴザエモシタ  
やあ ありがとう ございました。

との言いかたをしているという。

小松代融一氏『岩手方言の語彙』(旧伊達領)には、

ゴザンマス ゴザルにおなじ

というのが見える。

青森県上北郡野辺地町では、婦人が、

○ム $[\text{i}]$ カシ $[\text{i}]$ カラ コゴデ $[\epsilon]$  ゴザイマサイ。

昔からここでございますわ。

のような言いかたをしている。

東北地方でも、総体に、特別にていねいなあいさつことばで、「ゴザイマス」をつかうありさまである。

北海道地方でも、「ゴザイマス」「ゴザエマス」は、特別にていねいことばとして用いられている。

以上の全国状況では、東北地方が、比較的事の簡素なありさまを示しているのが、注目をひく。——それにしても、共通語ふうのことばづかいとして、「ゴザイマス」ことばを、便宜、利用し得ていることは、言うまでもあるまい。

全国一般に、人々は、「ゴザイマス」ことばの方言生活の中にあっても、また、同時に、それとの区別を意識しない程度においてさえ自由に、共通語ふうの

「ゴザイマス」ことばを撮取運用していよう。こういう、方言要素であると共通語要素であることを問わない、「ゴザイマス」ことば運用の生活は、今後も（—今日、予想しうるかぎりのこと）そのいきおいをよわめることはないであろう。

### 第三節 ゴザイヤンス以下の異形式類

#### 一 ゴザイヤンスほか

まず九州では、大分県下に、「ゴザイヤンスル」が聞かれる。松田正義氏の『大分県方言の旅』第1巻（NHK大分放送局 年月不詳）の、「大分郡西庄内村」の条には、つぎの言いかたが出ている。

○コリャマー、マイニチコマツタオテンキデゴザイヤンスル。マー  
これはまあ、毎日困った お天気でございます。 まあ。

「山口県都濃郡都濃町」（『全国方言資料』第5巻）では、

fユーン セテ オカエリャ ヨロシュ ゴザエンスガ  
ゆっくり して お帰りになれば よろしゅう ございますが。

と言っているという。この「ゴザエンス」は、「ゴザイヤンス」に通うものか。

「島根県大原郡大東町春殖畑鶯」（『全国方言資料』第5巻）には、

fダンドン アリガト ゴザイアンシタ  
どうも ありがとう ございました。

fイヤ ヨロシユー ゴデュヤンスワネー  
いや よろしゅう ございますね。

との言いかたが見えている。

「石川県輪島市名舟町」（『全国方言資料』第3巻）には、

fソクサイデ ゴゼァンスカー  
息災で いらっしゃいますか。

との言いかたがある。

関東地方の栃木県下・茨城県下に、「ゴザイ(エ)ヤンス」がある。

一' ゴザイヤスほか

「ゴザイヤンス」ほかよりも「ゴザイヤス」ほかのほうが、分布のややつよいものを見せている。

九州では、「長崎県南高来郡有家町」(『全国方言資料』第6巻)に、「ゴザイヤヒタ」が見える。

*m*オーデ コナイダ コリャ マ ホメッキヨデ ゴザイヤヒタロ  
たいそう このごろは これは まあ 暑いことで ございますね。

山口県下には、「ゴザイヤス」がなにほどか分布しているらしい。「山口県都濃郡都濃町」(『全国方言資料』第5巻)には、

*f*アンシンデ オゼヤシタ  
安心で ございました。

との言いかたがある。「オゼヤシタ」は、「オザイヤシタ」で、それは、「ゴザイヤシタ」としうるものではないか。

「島根県大原郡大東町春殖畑鶯」(『全国方言集』第5巻)では、

*f*アゲーデ ゴダエヤス  
そうで ございます。

*m*オメデトースナ コトデ ゴダヤスネ  
おめでたい ことで ございますね。

などと言っている。またここに、

*f*アゲナ コト イワッシャッスワ ナイヤネー ゴダイアッス  
あんな ことを 言いなさる方々は ないようで ございます。

との言いかたもある。「ゴダイアッス」は、「ゴザイヤス」にならべてみてよいものではなからうか。

四国では、高知県下の東隅で、かつて「ゴザヤス」を、私は聞くことができた。

近畿では、「奈良県吉野郡下北小村桑原」(『全国方言資料』第8巻)の、

*m*アリガトー ゴザイアス

があり、また、「京都府京都市」(『全国方言資料』第4巻)の、

*m*チョット アノナ キンジョエ イカンナラン ヨーガ ゴザイ

ちょっと あのね、近所へ 行かなければならない 用事が ござい

アスノデー

ますので、

がある。

中部地方では、新潟県北、村上市の「ゴゼーヤス」を見ることができる。

関東地方では、池ノ内好次郎氏の「埼玉県入間郡方言集稿」(『方言』第七巻第二号 昭和12年3月)に、「ゴザイアス」を見ることができ、また杉山正世氏編『埼玉県川越市近傍言語集稿』(自家版 昭和5年8月)に、「まことに おめでテー こって ごぜやす。」を見ることができる。

栃木・茨城にまた、「ゴザイ(エ)ヤス」がある。

福島県下が、わけても「ゴザイヤス」のいちじるしいものを見せている。県下に「ゴザイヤス」ことばはよく生きている、と言ってよかろう。(当県下が、上来、問題の諸現象をよく共在せしめているのを注意したい。表現法上の諸事項というものは、生活表現の手段・方法として、まことによく関連しあうものだと痛感せざるを得ない。)福島県下の「ゴザイヤス」例は、山口弥一郎氏『会津方言集』(増訂版)(岩磐郷土研究会 昭和28年8月)の、

○ハエ、アリガド<sup>△</sup>ー ゴザイヤス。

「福島県河沼郡勝常村」(『全国方言資料』第1巻)の、

*f*アー キョーワ オメデトーゴザイヤス

ああ きょうは おめでとうございます。

などである。県下の中通りには、「ゴゼエヤス」形もよくおこなわれている。

武藤要氏『福島県棚倉町方言集』(自家版 昭和7年2月)にも、

お早お、ごぜえやす。そおでごぜえやす

などである。

会津地方には、「ゴザイヤス」に相当する「オザイヤス」「オザェヤス」「オゼェヤス」がある。

『会津方言集』には、「オザンヤス」も見える。つぎのように説明されている。

ソウデゴザンヤスデオザンヤス、一般に古い言葉は丁寧で、めだるいまでの、やわらかな敬語が重複して用いられた。

「ゴザンヤス」と「オザンヤス」との連立の見られるのが、興味ぶかい。

児玉卯一郎氏の『福島県方言辞典』には、

このゴザリアスの外にザィアス・ゴサイアスゴゼエマ等形態はこの語にも多い。

との記事が見える。「ザィアス」という頭略形が目される。私は、会津北部で「ザィヤス」を聞いた。例は、

○オハヨザィヤス[ü]。

などである。

東北地方での当問題事象は、福島県下を除いては、岩手県下でだけ、私は、見だし得ている。

○ソーデ ゴジエヤス[ü]。

そうでございます。

などは、県北での例である。「岩手県宮古市高浜」(『全国方言資料』第1巻)の例には、

*m*コナイダズーワ      ドーモ   オーキニ   オアリガトー   ゴザィアシタ

このあいだじゅうは   どうも   たいそう   ありがとう   ございました。

がある。

## 二 ゴザィガス

○オヤカマシュエー   ゴザィガシタ。

おやかましゅうございました。

例によって、静岡県下の御前崎に、「〜+ガス」の言いかたが見いだされる。

「+ガス」は「+ヤンス、ヤス」に比べれば、はなはだしく、分布がよわいありさまである。この種の言いかたは、全国的見地からすれば、もはや消失寸前のものとも見られよう。

#### 第四節 ゴザリンス ゴザインス

「ゴザリマス」「ゴザイマス」という複合形が、かたい一体者として利用運用されるにつれ、そのものを、より簡便な形にして利用しようとするはたつきが、もっともしげんに、順よく展開した。この結果、「ゴザリマス」「ゴザイマス」の転訛形が多彩に生じてきている。

しだいにおこってきた諸転訛形が、順次、より短小なものになっていったのは、ことのしげんであった。——ものがよくおこなわれればおこなわれるほど、そのものはいっそう簡約された形になってもいった。

「ゴザイマス」は、「ゴザンス」「ゴアンス」「ガンス」「ガス」などと移っていった。これは、「ナサイマス」が「ナサンス」「ナンス」などになっていったのと同様である。

第三節まででは、「ゴザル」丁寧法動詞に関する言いかたで、「ゴザリマス」「ゴザイマス」など、「マス」のはっきりと見とられるものをとりあつかった。したがってまた、「ゴザリヤンス（ヤス）」「ゴザイヤンス（ヤス）」ことばのばあいも、「ヤンス」「ヤス」の形の、それと見とられるものを問題にしたわけである。要するに上來は、複合形の接合分子の、形態にあらわなものをとりあつかった。第四節以下では、「後接分子の形態が変化するもの」以降の事例をとりあつかう。

最初に問題とされるのは、「ゴザリンス」「ゴザインス」である。これらは、

前身、「ゴザリマス」「ゴザイマス」をすぐに思わせよう。

### ゴザリンス

「ゴザリンス」らしいものを、私が見いだし得ているのは、宮城県下においてである。松島湾岸で一老翁は、

○見たことは ゴザリンスが、…………。

見たことはございますが、…………。

と言ったかと思う。

### ゴザインス

愛宕八郎康隆氏は、能登半島三・四地の「ゴザインス」を調取し得ていられる。その一例をお借りするならば、半島西岸南部では、

○オハヨー ゴザインス。

お早うございます。

などである。

橋正一氏は、「デス・ダス・ドス」(『コトバ』第七卷第三号 昭和12年3月)で、「ゴザインス」(出雲)、「ゴザエンス」(越前・出雲・備中)などを指摘していられる。

『福井の方言』にも、

……エンス 断定の語尾 (大野郡)

そふでござえんす

と見える。

「ゴザリマス」「ゴザイマス」おのおのからの直下の転訛形、「ゴザリンス」「ゴザイ(エ)ンス」は、おこなわれることが、以上のように微弱である。この程度の転訛形は、生起しは得るものの、広くはおこなわれるにいたらなかったということか。

## 第五節 ゴザリス ゴザイス

「ゴザリマス」も、転じて「ゴザリス」とまでなると（つまり、「ゴザリンズ」の「ン」を落とした形にまでなると）、これは、転訛結果の、一つの明確な安定形として、かなりよくおこなわれることになった。——ただし、その地域如何は別問題である。

「ゴザイマス」からの「ゴザイス」もまた、「ゴザリス」に似て、一つの明確な安定形となり、これもまたそうとうによくおこなわれることになった。——地域のことは、また別問題である。

「ゴザリス」「ゴザイス」ともに、「マス」の「マ」が略されたものと見ることできる。結果は、そう見ることゆゑのものであるが、「ゴザリマス」「ゴザイマス」から単純に「マ」が落ちたのでないことは、「ゴザリンズ」「ゴザインズ」の存立によって、うかがい知ることができる。（もっとも、時とばあいによっては、また所によっては、単純に「マ」の落とされることもあり得たであろうか。）

### ゴザリス

「ゴザリマス」ことばが、「ゴザリス」となっているのを見るのに、これはいかにも、一つの、できあがった安定形と受けとられる。ものは、こうあって、しげんに、これなりのニュアンスをそなえるにいたっている。——「ゴザリス」との言いかたは、「ゴザリマス」との言いかたからは、一歩へだたったものであるに相違ない。

「ゴザリス」は、主として宮城県地方に見られるものである。分布の特色が明白である。

藤原勉氏「仙台方言」（『仙台市史』6〈別篇4〉 仙台市役所 昭和27年3月）には、

ゴザリス [godzarisu] = 御座ります。

ゴザル＋ス＝ゴザリス

最も丁寧な敬語法。重ねて使うので有名である。

例 そうでござりしてござります。

とある。「ゴザリスの否定語法」,

ゴザリセエン [godzarisen] / ゴザリシェン [godzarifen]

ゴザリエン [godzarien]

ゴザリン [godzarin]

ゴザエン [godzaen]

も、示されている。

なお、本書には、廃語の「ガイス」も示されている。「ガイス」は、「ゴザリス」に近い「ガリス」からのものか。

土井八枝氏も、『仙台の方言』で、「ゴザリス」につき、

ござりますの訛

ござりますの否定はござりません、ござりいんである。

と述べていられ、敬讓の度のさらにつよいものとして、

ござりしてす ござりしてがす ござりしてござりす

をあげていられる。

仙台地方に、「ゴザリス」ことばは、今日もさかんなようである。（このことも、全国的見地からは、異とするにたりよう。）私が仙台市で聞き得た一・二例は、

○ミ[ī]ンナ タッサデ ゴザリ[ī]ス[ü]。

みんな達者でございます。

○アリ[ī]ガト ゴザリ[ī]シ[ī]テ ゴザリ[ī]ス[ü]。

ありがとうございますでございます。

○ゴザリ[ī]シ[ī]テ ゴザリ[ī]ス[ü]。

ございましてございます。

というのである。「ゴザリ[i]シ[i]テ ゴザリ[i]ス[ü]。」の、鄭重をきわめる言いかたは、今日、おおよそは女性の年長者におこなわれがちのものであろうか。

仙台弁での、「ゴザリス」の否定形の例文をあげるなら、

○ゴザリ[i]ンデ ゴザリ[i]ス[ü]。

ございませんでございます。

などがある。否定形の「ゴザリン」は、「ゴザリセン」→「ゴザリエ(イ)ン」のつづまったものであろう。

宮城県下、南北の広い範囲に、「ゴザリス」ことばが聞かれる。県北の一例は、

○アツ[ü]ー ゴザリ[i]ス[ü]。

暑うございます。

である。

石巻弁の一・二例は、

○アー オアツ[ü]ゴザリ[i]ス[ü]。

ああ、お暑うございます。

○オバンデ ゴザリ[i]ス[ü]ー。

お晩でございます。

などである。——土地の人は、「オバンデ ゴザリ[i]ス[ü]ー。」を、「オバンデ ガス[ü]ー。」の上の言いかたとしている。松島湾岸の二例は、

○アリ[i]ガド ゴザリ[i]シ[i]ター。

ありがとうございました。

○ばかばかしいような ことが ゴザリ[i]ス[ü]べ。

ばかばかしいようなことがございますでしょう。(推想を語る。)

である。

○明けましてよい春でござりス。

これは、県南端の人がよこしてくれた年賀状の一文である。

岩手県下も、南部地域内には「ゴザリス」が聞かれるのか。一ノ関弁では、

○ソーデ ゴザリ[ī]ス。

そうでございます。

○エ[ē]ー テンキ[kçi]デ ゴザリ[ī]ス[ü]。

いい天気でございます。

などと言っている。

山形県下にも「ゴザリス」がある。最上地方の昔話にも、

「左様まよでござりす。」

などとある。『山形県方言集』には、

ござりえん gozarien 連続語 御座いません 村山

それは私でござりえん。

(それは私でござりません。)

との記事が見えている。

東北地方のほかでは、今日、「ゴザリス」が見いだされない。——と、今は言えそうである。全国的に見て、「ゴザリス」の東北偏在が注目される。(つぎの「ゴザイス」の分布とくらべていただきたい。)

注 橋正一氏の「ダス・ダス・ドス」(『コトバ』第七卷第三号)には、「甲斐では、ガイスとも、ガリスともいふ。」とある。この「ガリス」は、「ゴザリス」に近いものであろうか。異形の孤存が注目される。「ガイス」は、「ガリス」から出たものであろう。(p. 225)

## ゴザイス

「ゴザイス」は、かなり活動力のつよい一形態であろうか。「ゴザイス」による丁寧表現法は、諸転訛形を見せつつ、諸地方に、今も、かなりおこなわれているようである。

九州地方は、「ゴザイス」関係の、「ゴザース」や「ゴザッス(ゴザッスル)」を見せている。

長音と促音とが対応関係に立ちがちであることは、多く言うまでもなからう。九州に特有の「ゴザッス（ゴザッスル）」は、「ゴザース」類似のものと思われる。

九州では、歴史的には、「ゴザッスル」「ゴザッス」が、早くもその盛行を見せたであろうか。今日も、「ゴザッス（ゴザッスル）」ことばが、肥筑地方にかなり広く見いだされる。

「ゴザッスル」の形態は、島原半島や平戸島、あるいは筑前内などにも見られる。

○ソーデ ゴザッスル。

そうでございます。

は、筑前若松市域での一例である。（岡野信子氏の調査による。）「ます」の「マッスル」がおこなわれる所では、「ゴザッスル」もまたおこなわれがちか。

「ゴザッス」、「ゴザッシタ」、「ゴザッショー」・「ゴザッシュー」、「ゴザッシェン」などの言いかたは、肥筑の地方にかなりいちじるしいものがある。

○アリガト ゴザッシタ。

ありがとうございました。

は、天草下島での例である。

○ソーユー アンバイデ ゴザッショ アタ。

そういうあんばいでございますよ。

○オタイクツデ ゴザッショー。

○オタイクツデ ガッショー。

お退屈でございますよ。

これらは、阿蘇南麓で聞いたものである。「ゴザッショー」が「ガッショー」ともなっている。

○モー ハチジューバッカデ ゴザッシュ モンデ。

もう八十歳ばかりでございますよもの。

は、天草下島での一例である。能田太郎氏の「肥後南関方言類集 用言篇」

（『方言と土俗』第四卷第八号 昭和8年12月）には、

「おッけでござッシユ（ゴッシユ）。(敬語)

というのが見える。「人を慰ふ詞（お疲れ様）」であるという。「ゴザッシユ」が「ゴッシユ」ともなっている。

○コンヤ<sup>ー</sup> セカラ<sup>シユ</sup>ー ゴザ<sup>ッシ</sup>ョーバ<sup>ッテ</sup>, ココノ カサレマ<sup>ッシ</sup>ョ  
ー カ。

“今晚はおじゃまでしょうが、ここが貸されましょか。”

は、筑前糸島半島の一例である。「ゴザッシユ（ゴザッシユ）」よりも、「ゴザッショ（ゴザッショ）」のほうがよくおこなわれている。福岡県下では、「ゴザッショー」「ゴザッショ」がふつうであろうか。「ユックリ ヨ ゴザッショ。」（“遠路のしたしい外来客をねぎらう調子”であるという。）は、太宰府での一例である。

「ゴザッス」ことばの、他の活用形の例、二・三をあげよう。

○ナーモ ゴザ<sup>ッシ</sup>ェデ ナー。

何もございませんでね。

は、天草下島の一例である。

○ゴザ<sup>ッシ</sup>ェジャ<sup>ッタ</sup>。

ございませんでした。

は、阿蘇南麓の一例である。

○ソギ<sup>ャ</sup>ン ナサル モン<sup>ジャ</sup> ゴザ<sup>ッシ</sup>ェン。

そんなになさるものではございませんで。

は、長崎県平戸島の一例である。

○ウレ<sup>シ</sup> ゴザ<sup>ッス</sup> ヨ。

うれしゅうございますわ。

は、五島列島内の老女から聞いたものである。

『全国方言資料』第6巻の「福岡県福岡市博多」の条に見える、

f エー ヨゴザッ シェナゴテ

ええ よろしゅうございますとも。

には、「ゴザッ シェナ」の言いかたが見えている。

岡野信子氏は、若松市岩屋のことばとして、つぎの言いかたのものを教示された。

ござっすメー

ゴザッセメー

『佐賀県方言語典一斑』には、「ゴザッス」「ゴザイマッス」の説明があり、

山.デゴザッス (山デゴザイマス)

私.デゴザッス (私デゴザイマス)

ガッスと同じ意にてガッスよりも上等なことばである。

「ゴザッス」を今、一段上等にいふ時には「ゴザイマッス」といふ。

としている。——「ゴザッス」の簡約形「ガッス」もできている。(P.309)

つぎに九州地方での「ゴザース」を見よう。(これが、「ゴザイス」に関係の深いものであることは、明白であろう。)

薩摩に「ゴザース」があり、天草に「ゴザース」があり、肥前内に「ゴザース」があり、福岡県下に「ゴザース」がある。が、総じて「ゴザース」の勢力はよわい。

○ヨカ オテンキデ ゴザース。

よい天気でございます。(人の家へ行つてのあいさつ)

は、肥前西彼杵半島での一例である。熊本県下には、なお「ゴゼース」との言いかたも見いだされるらしい。

中国地方では、おもに西半域が注目される。山口県周防東部では、

○オハヨー ゴアイス。

お早うございます。

との言いかたが聞かれる。また、同地域に、「ゴザイス」「ゴザイシタ」の言いかたも聞かれる。『全国方言資料』第5巻の「山口県美禰郡秋芳町別府江原」の条には、

mオハヨー ゴヤース

おはよう ございます。

というのが見える。「ゴヤース」の言いかたがある。

広島県西部にも「ゴザイス」があり、島根県石見にも「ゴザイス」がある。出雲地方は、「ゴザエ(イ)ス」の言いかたがさかんである。私が出雲南奥で聞いた例は、

○ソゲニ<sup>[i]</sup> ゴザイ<sup>[e]</sup>ス カイネア。

そんなでございますかねえ。

○アゲーデ ゴザエイス。

あんなでございます。

○ヘー ス<sup>[ü]</sup>ンダ フ<sup>[Fü]</sup>トガ オーイデ ゴザイショー。

はや、済んだ人が多うございましょう。

などである。出雲地方では、「ゴザエ(イ)ス」の「ザ」が「ダ」になってもいる。——このなまりも、かなりいちじるしいものがある。「ゴザエ(イ)ス」が、「ザエ(イ)ス」「ダエ(イ)ス」ともなっている。(ただし、「ダエ(イ)ス」は、「ザエ(イ)ス」からよりも、「ゴダエ(イ)ス」から生起しやすかったか。)

○ホンニ<sup>[i]</sup> デビャクショーテテ ナサケネ<sup>[ε]</sup>ー モンデ ザエシ<sup>[i]</sup>

タワ。

ほんとに出百姓といったら、情ないものでございましたよ。(老男)は、「ザエ(イ)ス」の一例である。

出雲地方でも、以上の「ゴザエ(イ)ス」ことばは、だいたい老年層におこなわれていようか。隠岐のばあいも、だいたいそのようなのであるかと思う。

○マタ ゴザイセヤ。

またおいでなさいよ。

は、隠岐の一老女が神部宏泰氏に語ったことばである。

中国地方の、以上のほかでは、岡山県下、美作地方に、いくらかの「ゴザイス」が認められる。今石元久氏は、備前方面で、諸地点に「ゴゼース」をとらえていられる。

四国地方では、土佐ことばの「ゴザース」が注目される。土井八枝氏の『土佐の方言』には、「ゴザース」例が多く見えている。たとえば、

○一円でござーす。

など。これは、「此帽子はなんぼぞよ。」(此帽子はいくらだ。)の問いに対する答えのことばである。「ございます」を「ゴザース」と言っている。土佐の「ゴザース」は、どの範囲におこなわれているものだろうか。広範囲におこなわれるものであったり、優勢なものであったりはしないのではないか。

孤立的な土佐の「ゴザース」ことばにあい対するかのよう、愛媛県下の内海島嶼、魚島に、「ゴザイス」ことばが存在している。ここでは、目上に、

○オハヨ ゴザイス。

お早うございます。

○キューラ サブ ゴザイス ノー。

きょうはさむうございますね。

などと言っている。(この島にはまた、「ゴザイス」の転じた「ゴダイス」も聞かれるようである。)

四国についてとりあげうることのすくないのにおなじく、近畿についても、とりあげることがすくない。すくないというよりもほとんどなくて、今は、奈良県南部に「ゴザイス」ことばがあるらしいのを指摘しうるばかりである。

つぎに、中部地方となって、「ゴザイス」ことばがそうとうに広く認められ

るのは、興味ぶかいことである。北陸道に、まず、分布がたどられて、福井県下に「ゴザイス」がある。

*m*オハヨー ゴザイス

おはよう ございます。

(『全国方言資料』第3巻 「福井県丹生郡織田町笈松」) 加賀、能登に、「ゴザイス」ことばが見いだされる。「石川県輪島市名舟町」(『全国方言資料』第3巻)の例は、

*f*エ アンガト ゴザェース

ええ、ありがとう ございます。

である。ここに、「ゴゼässer」「ゴゼース」などの言いかたもあるらしい。なお、この名舟町の事例に、「ゴゼッス」もある。

*f*エーエッ アルガト ゴゼッスワ

ええ。 ありがとう ございます。

促音のはいった「ゴゼッス」がおこなわれているとすれば、注目にあたいする。「アブノ ゴゼッソナ」(お気をつけてください。)というのも見えている。「ゴザイス」ことばが、さまざまな形でかなりよくおこなわれているらしい。北陸を越後にたどると、越後北部は、「ゴザイス」の、そうとうにさかんな所である。ここでも、「ゴゼース」「ゴゼイス」などの転訛形が見えてもいる。

越後につづき、その南の長野県下に、「ゴザイス」ことばがかなりよくおこなわれている。おもに北半地方のうちに「ゴザイス」があり、南半内にも「ゴザース」が見いだされる。北信の埴科郡松代町に関しては、「ゴザイス」ことばが有名である。

松代言葉をオイダレ(私達) きけば ハイコン(今日は) ゴザイス

(御座います) クダシカレ(下さい)

との言いぐさがある。(佐伯隆治氏「信州北部方言語法(下)」『国語研究』第十卷第八号 昭和17年9月)

「ゴザイス」は、山梨県内にもあるのか。

静岡県下には、「ゴザエース」などがある。『静岡県方言辞典』には、

○左様でござえーす

○おあつうござあーす

などを出ている。『全国方言資料』第3巻の「静岡県掛川市上西之谷」のことばには、

*f*ハ オハヨー ゴゼーアス アン

はあ、おはよう ございます。

というのがある。

転じて、岐阜県下にも「ゴザイス」ことばの見いだされるのを、指摘しておきたい。『全国方言資料』第3巻、「岐阜県吉城郡古川町黒内」のことばに、

*m*マ アリガト ゴザイシタ

まあ、ありがとう ございました。

とある。

中部地方の注目すべき分布に比較しては、関東地方では、見るべきものがない。ただ、中部地方に関係の深い群馬県下に、「ゴザイス」がある。(大橋勝男氏教示)「ゴゼース」もあるらしい。(飯豊毅一氏による。『福島県史』第二十四巻「民俗 二」所収「第六章 言語生活」昭和42年3月)

栃木県下にも、「ゴゼィース」(御座います)があるという。(大田栄太郎氏『栃木県方言』自家版 昭和5年2月)『全国方言資料』第2巻の「栃木県那須郡黒羽町」の条にも、

*m*アリガトー ゴゼース ドーモ

とある。

北関東を受ける奥羽地方のうちに、いくつかの「ゴザイス」ことばが見いだされる。宮城県下には、

○オハヨ ゴザイス[ü]。

お早うございます。

○オアヅ[ü]ー ゴザイス[ü]。

お暑うございます。

などの言いかたがある。

私の知り得たところによれば、「ゴザイス」ことばは、とかく奥羽の東がわにたどられる。岩手県北の一例は、

○アメッコ アンマリ[i] フラーネバ ヨー ゴジェス[ü] ナー。

雨があんまり降らねばようございますなあ。

である。このばあい、「ゴジェス」とあって、「ゴジェース」ではないけれども、この「ゴジェス」は、「ゴザイス」相当のものかと思われる。青森県下にはいつての東南部では、

○アリ[i]ガト ゴジャース[ü]。

ありがとうございます。

○ゴタゲ[e]デ ゴジャース[ü]。

ご大儀でございます。

のような言いかたが聞かれる。『全国方言資料』第1巻の「青森県三戸郡五戸」の条に、

f マンツ アリガトゴジャス

どうも ありがとうございます。

というのが見えるが、この「ゴジャス」も「ゴザイス」系のものではなからうか。能田多代子氏の『五戸の方言』には、「お晩でござエす。」というのが見えている。（五戸の昔話にも、「ごぜアす」との語り口があるらしい。）寺井義弘氏の『青森県南部方言考』にも、

そうでございます そうでござェアす ソウデゴヂェアス

というのが見えている。

なお工藤祐氏は、「買物言葉」（『民間伝承』第十九巻第九号 昭和30年9月）で、

なお又今は専ら南部地方の敬語としてのみ使用されている対者敬語「ゴジャス」が弘前市近郊の一町田などに微かながら昔の面影をとどめて残存しているらしいが、  
と述べていられる。

以上の全国状況をかえりみて、まず、九州域の「ゴザッス(ゴザッスル)」ことばが注目される。中国地方では、ものがおもに山陰がわにあり、四国近畿には分布がすくなくて、中部地方に分布がやや多い。歴史的に見て注意される、国の中央方面が空白的である。北関東から奥羽にかけての点在分布は、注視すべきものである。

「ゴザイス」が諸転訛形を見せつつ、このように、東西に分存しているのは、私どもに「ゴザイス」ことばの全国的な流布を考えしめるのにじゅうぶんである。直接に「ゴザイス」ことばそのものが広まったのではなくても、「ゴザイス」ことばをおこすような要因が、国内の広くに伝播するところがあったらう。

中央方面で、今日それが空白状況なのは、「ゴザイス」ことばないし「ゴザイス」表現の方途が、他の表現法によって、とってかわられたということでもあろうか。

ともあれ、上に分存と称した、「ゴザイス」ことばの今の分布状況は、「ゴザイス」表現法の、あすに生きる力を思わせるものではない。すなわち、「ゴザイス」ことばは、いよいよ衰滅の方向をたどるであろうことが推察される。

## 第六節 ゴザス系のもの

### 一 ゴザス

「ゴザイス」につぐ略形の一つは、「ゴザス」である。「ゴザッス」からもまた、「ゴザス」はできやすかったらう。

今日、「ゴザス」もまた全国の諸方に見いだされて、その、広い範囲での存在が注目される。

まず、九州地方に「ゴザス」の分布がいちじるしい。はじめに、九州南部、薩隅地方の「ゴザス」がとりあげられる。

ここで一つの問題は、さきの「ゴザッス」の見えなかった薩隅地方に、なぜ、「ゴザス」はよくおこなわれているのかということである。九州の「ゴザッス」地方、すなわち肥筑の地方に、「ゴザス」もまたよくおこなわれているのは、受けとるのに困難をおぼえないことがらである。——「ゴザッス」は、容易に「ゴザス」にもなったであろう。

方言上の事象の出現・不出現には、ときに合理的推測を越えるものがある。何かの対他関係あるいは前後関係などで、ときに非合理的にも新事象の生成を見せることがある。薩隅地方には、「ゴザル+モス（申す）」の表現習慣がいちじるしくて、「ゴザリモス」は「ゴザイモス」となっており、この「ゴザイモス」からは、「ゴザッス」などには関係なく「ゴザス」ができたようである。——「ゴザンス」は経由したとしても、「ゴザッス」はひきおこさなかったということなのか。

さて、薩摩東南部出身の瀬戸口俊治氏の言をここでお借りしておきたい。

“南薩では「ゴザイモス」と言い、かならず「モ」が出る。「ゴザンス」  
「ゴザス」は町ごとばだとの意識がある。”

氏の言には、「ゴザンス」「ゴザス」と「ゴザイモス」との対比があって、「ゴザッス」はなんらここに登場しない。

「ゴザッス(ゴザッスル)」地方(だいたい肥筑地方)は、「+モス(申す)」の表現法をとることはない。「+マス」表現法がとられる。そうして「マス」を、たとえば「マッセン」などとも言っている。「マッセン」地方に、「ゴザッス」の「ゴザッセン」などがある。「+マス」に関係のない九州南部地方では、肥筑地方ふうの「ゴザッス」は、生じるべくもなかったことかとも思われる。

以下、薩隅地方の「ゴザス」ことばを見ていこう。トカラ列島の硫黄島でも、「お早うございます。」のあいさつで、

○コンチャ マダ ゴザンタ。

のような言いかたをしている。目上へのことばであるという。甌島にも「ゴザス」があり、薩隅本土に「ゴザス」がさかんである。

○ゴザン トー。

ございますよ。

これは、薩摩西南端の笠沙町で聞いた例であるが、「ゴザス」が「ゴザン」形になっている。「ございました」は、むしろ「ゴザン<sup>ニ</sup>タ」である。大隅東岸の「ゴザス」例をひくなら、

○イケン ゴザス カイナー。

どんなでございますかいなあ。

などがある。

さきの笠沙町の例、

○………… ゴザンデ ナー。

…………ございますでねえ。

などの「ゴザン」は、「ゴザス」の「ゴザン」か。（「ゴザル」の「ゴザン」ではないのだろう。）鹿児島県下に、「何々 ゴザン ド。」などとの言いかたはさかんである。

薩隅（——鹿児島県下）の「ゴザス」ことばそのままのものが、日向西南部にたどられる。日向中部西奥でも、

○アリガト ゴザス ナー。

ありがとうございますね。

というようなのが聞かれる。（児湯郡下にも「ゴザス」がある。）——西奥地方に、「ゴザッタ」とともに「ゴザイタ」があるというが、後者の「ゴザイ」は、「ゴザス」の連用形の「イ」音便形であろう。

熊本県では、全般に、「ゴザス」がよくおこなわれているようである。天草

諸島にもこれがいちじるしくて、各地で、

○オハヨ ゴザス。

お早うございます。

○アリガト ゴザシタ。

ありがとうございました。

などと言っている。

○ハーイ、ワッカ トキャ イッタ コタ ゴザスバツテ、アンター。

はい、若い時は行ったことはございますけれど、ね。

は、天草下島西南岸の一例である。天草の「ゴザス」ことばでは、「ゴザス」形・「ゴザシ」連用形がなかんずくよくおこなわれていようか。肥後本土南部では、水俣方面の「ゴザス」が注目される。

○オメデト ゴザス。

おめでとうございます。

は、八代の一例である。つぎに阿蘇山南麓での「ゴザス」ことばをあげるなら、

○ゴフキョーデ ゴザシター。

ご不興でございました。（藤原があいさつして辞去するのを送ってける老男のことばだった。）

○ひる はたらいて、よる、夜学に イタンデ ゴザス タイ。

……行ったのでございますよ。（老女→藤原）

などがある。

長崎県下にも、「ゴザス」がそうとうおこなわれているらしい。島原半島にこれがあり、長崎市・佐世保市の方面でもこれが聞かれる。

○キョーワ サム ゴザス ナ。

きょうはさむうございますね。

は、平戸島のことばであり、

○オーキニ アリガト ゴザシター。

どうもどうもありがとうございました。

は、生月島のことばである。

○ドチラデ ゴザス カ。

どちらの学校でございますか。 (四十歳女→二十歳男)

は、宍岐島のことばである。本県下でもやはり「ゴザス」形がよくおこなわれており、ついで「ゴザシ」連用形が見られる。「ゴザセ」例では、五島の、

○ダク<sup>ニ</sup>ジャ ゴザ<sup>ニ</sup>セン。

らくではございません。

のようなのがある。

ところで、肥前も佐賀県下には、「ゴザス」ことばがさほど見いだされないか。南部一地での一週間調査では、「ゴザス」を求めたけれども得られなかった。

福岡県下に、「ゴザス」がさかんである。やはり「ゴザス」形がよくおこなわれている。

○ヤッ<sup>ニ</sup>バ アッタ<sup>ニ</sup>ドコロ<sup>ニ</sup>デ ゴザス。

(鉄道開通のちようちん行列は) やはり、あったどころじゃございません。ありました。——当然ありました。

は、博多湾西の糸島半島のことばである。なお、糸島半島での「ゴザシ」例を出すなら、

○ムカ<sup>ニ</sup>シノ 「ネー」ワ ワールカ イミノ 「ネー」デ ゴザ<sup>ニ</sup>シタ。

昔の「ねえ」はわるい意味の「ねえ」でございました。

(老女→藤原)

などがある。筑前東部にも「ゴザス」ことばがおこなわれており、

○イーエ。アリガト ゴザ<sup>ニ</sup>シタ。

いいえ。ありがとうございました。 (中女)

などと言っている。

○ヨソ<sup>ニ</sup>ニ イッ<sup>ニ</sup>テモ タマガルゴト ゴザ<sup>ニ</sup>ス。

よそに行ってもおどろくようでございます。

は、筑前の若松市内のことばである。（岡野信子氏による。）

福岡県下の豊前分には、だいたい「ゴザス」ことばはおこなわれていないようである。これにつづいて大分県下に、「ゴザス」ことばが見えず、宮崎県下の、まずはだいたいにまた、「ゴザス」ことばが見られない。九州も東半面となると、問題の「ゴザス」のおこなわれていないのが注目される。

九州の、上のような状況につながって、中国地方もまた、今日、「ゴザス」ことばを見せることがよわい。ことに山陽道がわのだいたいは、「ゴザス」空白地帯になっている。

ただ山陰がわに、いくらかの「ゴザス」がある。吉川隆美氏は、「ゴジシタ」が、鳥根県安濃郡川合村の七十歳前後の老人に聞かれるよしを、かつて私に報じてくれた。「ゴジシタ」は、「ゴザシタ」に近いものだろうか。鳥取県下には、「ゴザス」がかなり見いだされるか。

○オハヨ ゴザス。

お早うございます。

は、東部のあいさつことばである。「よう ございます。」を「ヨー ゴザス。」と言うのなど、「ゴザス」ことばは、もはや老人ことばと言いうるものになっていようか。

岡山県東北部にも、「ゴザス」が見いだされる。（神部宏泰氏・室山敏昭氏による。）因幡方面のとのつづきというものであろうか。

四国もまた、九州東半面の状況につながるかのように、ほとんどその全域が「ゴザス」空白の状況を見せている。ただ、愛媛県南部に「ゴザス」ことばがあつて、宇和島市では、

○キョーワ サム ゴザス チー。

きょうはさむうございますねえ。

などと言っている。県南辺では、かつて、人が“「ゴザス」は「ゴザイマス」のつぎの位のもの。”と言うのを聞いた。

中四国につながる近畿地方はどうであろうか。兵庫県播磨では、

○ユーテヤ ゴザス マイ。

先方は、何も言われはしますまい。

○モッテ カエルホドノ モノデワ ゴザヘンケド。

持って帰るほどのものではございませんけれど。

などの言いかたがされている。——未然形の「ゴザへ」が注目される。『全国方言資料』第4巻の「兵庫県城崎郡城崎町飯谷」の条には、

*m*オハヨーゴザス

おはようございます。

とある。

大阪弁にも、「ゴザス」「ゴザへん」がある。（「あった」と言うべきものなのかもしれない。）

京都府丹後方面には、「ゴザス」があって、

○オアツー ゴザス ナー。

お暑うございますねえ。

などと言っている。国語学会編『国語学辞典』（東京堂 昭和30年8月）の「近畿地方の方言」によるのに、奥丹波にも「ゴザス」があるらしい。また、『全国方言資料』第4巻の「京都府京都市」の条にも「ゴザス」の用例が見える。

*m*………… モー コレデ トリアエズ シツレーサシテ イタダキマスデ

………… もう これで とりあえず 失礼させて いただきますで

ゴザシテ

ございますので……。

などとある。

奈良県下では、吉野郡上市町のことばに、「殿さんの宮さんは高取にもゴザスシ。」というのがあるという。（岸田定雄氏「大和諸藩の武家言葉とその影響」『近畿方言双書』第一冊 近畿方言学会 昭和30年4月）

近畿では、以上のほかの地については、今、私は、「ゴザス」ことばを指摘することができない。

中部地方も、全般に「ゴザス」がまれである。

福井県下には、「ゴザス」がある。打消は、「ゴザセン」とも「ゴザヘン」とも言っている。

つぎに私が指摘しうるのは、静岡県御前崎の「ゴザス」である。

○アガッテ ゴロージタ ホーガ ヨー ゴザス。

上がってごらんになったほうがようございます。

○ソーデ ゴザス ネー。

そうでございますねえ。

などと言っている。——老年層に「ゴザス」は存在しているらしい。

関東地方がまた、「ゴザス」を見せること、まれである。

千葉県下に、

○オヤカマシュー ゴザシタ。

などのあいさつことばがあるらしい。

栃木県下では、かつて、

○ソーデ ゴザス タイ。

そうでございますよ。

というようなのを聞いた。——老男のことばであった。

東北地方に、「ゴザス」ことばのやや見るべきものがあるか。

福島県下、会津で、

○オメ[e]ザメ[e]デス[ü] カ。オハヨ ゴザス[ü]。

お目ざめですか。お早うございます。

などと言っている。

宮城県下では、松島湾岸の一週間調査のさい、おもには老年層の人たちから（とくに老男から）、たびたび「ゴザス」ことばを聞くことができた。

○ワタシャ アンス[ü]ンデ ゴザス[ü]。

私は安心でございます。（老男→中女）

○ドーモ ゴツォサンデ ゴザン[i]ター。

どうもごちそうさまでございました。(辞去) (中女)

などと言っていた。

『山形県方言集』には、

ござへん gozahen 連続語 御座いません 村山

などというのが見える。

秋田県下では、東南部の田沢湖近くで、

○ドーモ。オハヨ ゴザス[ü]。

どうも。お早うございます。

というのを聞いている。(これは、ことによると、「ございます」の共通語のつもりで言われたことばなのかもしれない。——と思っている。)

岩手県下では、「ゴザス」ことばが、かなり方々に見いだされるのか。私は、盛岡市南方の地のことば、

○ハ、アリ[i]ガト ゴザシ[i]タ。

はあ、ありがとうございます。(店の主婦→客人)

を聞いており、また、県中部東寄りの山地で、

○オレ、シ[i]ラチ ゴザス[ü]。

わしは知らないんです。(わらび餅のつくりかたのこと) (老男)

○アリ[i]ガト ゴザス[ü]。

ありがとうございます。

などの言いかたを聞きとめている。この後二例は、老男のことばであったが、これらのカードを検閲してくれた土地の識者は、“ここでは、ゴザンスでなければ使はない。”と注してくれていられる。(しかし、私は、他の老女たちからも、「アシタモ カガッ コッテ ゴザス。」「あしたもかかることでございます。」「この草とりしごとは、あすもかかるだろうと思われる、という話しである。」などというのを聞いた。)

青森県「南部」にも「ゴザス」があるか。私は、「南部」の南辺で、

○ゴヒャク[ü]エンデ ゴザス[i] ナス[ü]。

五百円でございますね。（五百円を受けとってこう言った。）

というのを聞きとめている。

以上で、「ゴザス」ことばの全国動態をかえりみるのに、まず、九州の西がわに「ゴザス」ことばの勢威のつよいのが注目される。東北地方の叙上の状況は、九州の状況に見あわせて受けとる時、散在状況ながら、その存在が、かなり意味ぶかいものに思われる。

もとは、「ゴザス」の言いかたも、広く全国的におこり得たのではないか。——あり得たのではないか。「ゴザス」が、「ゴザイマス」からの、かなりはなはだしい略形ではあるにしても、「ゴザリマス」「ゴザイマス」などの「ザ」音は、たしかに保有している。「ザ」音を保有し得ていれば、そういう形態は、簡潔ながらも、「ございます」的なものをかなりよく示しうるかもしれない。そういう「ゴザス」は、つまり「ザ」ゆえに、本来、分布の普遍性をそなえたのだったかもしれない、と考えられる。

「ゴザス」とあって「ザ」音が保有されているのにふさわしく、「ゴザス」ことばは、これを存すどこのばあいにも、かなりよいことばとして生きていようである。

「ゴザス」分布の様態は、上述のとおり、関東・中部にごく粗であり、旧来の、国の中央、近畿地方にもまた、おおよそ粗であって、中国四国にもまずは粗である。——中四国では、山陰方面と愛媛県南部とにその分布がとくに認められて、中四国での「ゴザス」退存のさまが、ことに明らかである。要するに、「ゴザス」ことばは、全国的に見て、衰亡の道をたどっていると解される。九州などでは、なおしばらくこれが独特の役わりをになうでもあろうが、それにもかかわらず、私どもは、「ゴザス」ことばが、将来、広い地域であらためて重要視されるようになるだろうなどは、考えることができない。

## 二 ゴアス ゴワス

「ゴザス」の変化形としたら、「ゴザス」直下に「ゴアス」があろう。じじつ、「ゴザス」ことばのよくおこなわれている九州薩隅地方には、「ゴアス」ことばもまたさかんである。

「ゴアス」は、発音上、「ゴワス」とされやすい。「ゴアス」「ゴワス」は、両々あいともなっておこなわれていがちである。

南島方面には、「ゴザス」や「ゴアス」はない。九州南部となって、はじめて「ゴザス」や「ゴアス」が見られることになる。

鹿児島県下では、全国でもとりわけ「ゴアス」がさかんであり、かねて「ゴワス」もさかんである。

本県下には、トカラ列島内にも、種子島・屋久島・甕島にも、「ゴアス」「ゴワス」がある。

○コンタ オマンサント ゴアヒ カ。

これはあなたさんのでござんすか。

は、種子島の一例である。

薩隅本土の、「ゴアス」「ゴワス」のさかんなありさまは、とくに注目にあたいする。薩摩西南岸の一例は、

○アタイガ センセイデ ゴアス トー。

私の先生ですよ。

である。（「ゴワス トー」とも、「ゴアシ トー」とも言う。）大隅東岸の例は、

○コンニャ アダッ ゴアシター。

（夜のあいさつ）「今夜はまだでござんした。」

○この 辺の 人は ミナ チア ヒトタッ ゴアヒ カ。

……みんな地の人たちでござんすか。

○ココアタリワ マジリガ オー ゴアンデ ナー。

ここあたりは、ことばのまじりが多うござんすね。

などである。最後の例の「ゴアン」は、「ゴアス」なのか、「ござる」なのか。

「ゴアス」を「ゴアシ」と言うことは多く、「ゴアヒ」とも言う。また「ゴアイ」とも言う。「ス」「シ」「ヒ」「イ」がならぶ。枕崎では、

○アイガト  $\overline{\text{ゴアイ}}$  ナー。

ありがとうござんすわね。

○サンカ ヒ  $\overline{\text{ゴアイ}}$  ナー。

さむい日でござんすね。

などと言っている。

鹿児島県下に、「ゴアス」ことを言う、

○ゴアン  $\overline{\text{ガー}}$ 。

などの、「ゴアン」の言いかたが、かなりよくおこなわれているようである。

「ゴアン」は「ゴアス」か。「 $\overline{\text{キューワ}}$   $\overline{\text{サム}}$   $\overline{\text{ゴアン}}$   $\overline{\text{ドナー}}$ 。」(きょうはさむうござんすよねえ。) <大隅南部例>などの「ゴアン」にも、「ゴアス」が認められよう。

傍証的なことにふれてみる。南薩枕崎では、「 $\overline{\text{ゴアン}}$   $\overline{\text{ガー}}$ 。」の言いかたにならべて、「 $\overline{\text{ゴザン}}$   $\overline{\text{ドナー}}$ 。」の言いかたをしている。この「 $\overline{\text{ゴザン}}$ 」は、「 $\overline{\text{ゴザス}}$ 」ではないか。「 $\overline{\text{ゴザス}}$ 」に対せしめられている「 $\overline{\text{ゴアン}}$ 」は、やはり、「 $\overline{\text{ゴアス}}$ 」ではないか。

「 $\overline{\text{ゴアン}}$   $\overline{\text{ガ}}$ 」「 $\overline{\text{ゴアン}}$   $\overline{\text{ド}}$ 」(「 $\overline{\text{ゴワン}}$   $\overline{\text{ド}}$ 」も)。

(○ $\overline{\text{オチャナンドワ}}$   $\overline{\text{ヨカロ}}$   $\overline{\text{ゴアン}}$   $\overline{\text{ドー}}$ 。

お茶など植えたらようござんしょうよ。(三十歳代女性)

また「 $\overline{\text{ゴアン}}$   $\overline{\text{テ}}$ 」など、限られた濁音節の前で「 $\overline{\text{ゴアン}}$ 」形が見えている。察するに、これらの濁音との関係で、「 $\overline{\text{ゴアス}}$ 」は「 $\overline{\text{ゴアン}}$ 」になっていったか。(昭和51年9月、上村孝二氏からも、「 $\overline{\text{ゴアン}}$ 」は「 $\overline{\text{ゴアス}}$ 」と考えてよい旨、ご教示をいただくことができた。)

鹿児島市の南の谷山市などでは、「 $\overline{\text{ゴアッ}}$ 」の言いかたもおこなわれているという。

○ $\overline{\text{キョーワ}}$   $\overline{\text{ヨカ}}$   $\overline{\text{オテンキサー}}$   $\overline{\text{ゴアッ}}$  ナー。

きょうはいいお天気でござんすね。

○キョーワ ホンニ オメデトー ゴアッ。

きょうはほんとにおめでとうござんす。

これらの「ゴアッ」は、「ゴアス」であろう。

鹿児島県下で、「ゴアス」または「ゴワス」が、「ゴヤス」になることもあるか。薩摩南部では、かつて、

○ケサ マッ ゴヤンダ。

「けさまだござんした。」お早うござんす。

とのことばづかいを聞いた。

鹿児島県下を出はなれると、九州に、「ゴアス」「ゴワス」のおこなわれることはよわい。日向南部・熊本南部・長崎県島原半島などにわずかな分布があって、つぎには、福岡県下にやや目だたしい分布があるというのが、鹿児島県以外での九州の大勢である。

宮崎県下では、その薩隅方言系の地域に、「ゴアス」「ゴワス」が認められる。

○ソリャ ソゲン ゴアン トオー。

そりゃそんなでござんすよ。

○ヨカ バン ゴアス ナー。

いい晩でござんすねえ。

は、都城での例である。

小林市域では、

○コラ アツ ゴアフ ナー。

こりゃ暑うござんすね。

のような言いかたをしているという。ここには、「ゴアス」の「ゴアフ」が見られる。(日向内に「ゴアス」の「ゴアヒ」もある。)——小林市域に、「ゴワス」の言いかたもあるらしい。

以前、旧宮崎県女子師範学校の一生徒は、本県下(日向)南部の北諸郡下のことば、

○ソラ ナニ グワヒ ドカイ。

それは何でござんすか。

というのと、都城市のことば、

○ソラ ナニ グワン ドカイ。

それは何でござんすか。

というのとを教示せられた。（文書によるものであった。）上に、「グワヒ」と「グワン」との対応が見られる。「グワン」もおそらくは、「グワヒ」的なものではないか。——この点でも、私どもは、「ゴアン」または「ゴワン」の「ゴアス」「ゴワス」を考慮することができるようである。

『全国方言集』の「熊本県方言」の部には、球磨郡の「ゴハサン」（有りませぬ）というのが見えている。

『全国方言資料』第6巻の「長崎県南高来郡有家町」のことばには、

*m*アリガト ゴアヒ

ありがとう ございます。

などの言いかたがある。

福岡県下に「ゴアス」「ゴワス」の見られること、つぎのとおりである。博多湾西の糸島半島内では、

○ノーハンキジャ ゴワッセンケン。

農繁期ではござんせんから。

などとの言いかたが聞かれる。「ゴワッセン」の終止形は、「ゴワッス」か。「ゴワッス」は、「ゴザッス」「ゴアッス」に該当する。さて、私は、糸島半島内で「ゴワッス」は聞くことができなかった。「ゴザッセン」相当と受けとられた「ゴワッセン」が聞かれたただけであった。（ことによると、終止形「ゴワッス」を用いるとともに、未然形表現では「ゴワッセン」を言うことがあるのかもしれない。）

筑前で、私は、「ゴザッシャル」とともに「ゴワッシャルん」を聞いたことがある。

太宰府方面では、

○サンヨーシエンモ ズイブン ナゴ ゴワス ナー。

山陽線もずいぶん長うござんすね。

との言いかたを聞いた。

福岡市域に、「ゴアス」「ゴワス」がある。『全国方言資料』第6巻の「福岡県福岡市博多」の条について、それらを見ることができる。

筑前東部にも「ゴワス」ことばがあるらしい。嘉穂郡下では、

○ソゲン コター ゴワスマイ。

そういうことはござんすまい。 (老男→老女)

のような言いかたをしているという。

岡野信子氏は、若松市域内について、つぎのような「ゴワス」ことばを見ていられる。

○ニサンジュリダレー キタデ ゴワシチョロー。

二・三十里ほど北でござんしたろう。

中国地方を見る。

山口県下では、長門・周防に「ゴワス」の点在するのが認められる。

○サヨーデ ゴワス。

は、長門西北部での一例である。当地方で、「ゴワス」は農家の老男に聞かれるものであるという。今は、まれのものになっていよう。

○ココワ スズシュー ゴワス。

ここは涼しゅうござんす。

○スマン コトデ ゴワシタ。

すみませんでした。

は、周防の平郡島の例である。(国安功氏による。)

広島県下の安芸・備後にも「ゴワス」が点在する。

○ターサン アリガト ゴワシタ。

どうもどうもありがとうござんした。

は、安芸西北隅の一例である。

○サヨ<sup>ー</sup>デ<sup>ー</sup> ゴ<sup>ワ</sup>ス。

さようでござんす。

は、備後三原市での一例であり、

○ニオ<sup>ユ</sup>ー<sup>ー</sup> キ<sup>ー</sup>テ<sup>ー</sup> ク<sup>ル</sup>モ<sup>ン</sup>ヂ<sup>ャ</sup>ー<sup>ー</sup> ゴ<sup>ワ</sup>サ<sup>ッ</sup>ター。

（火縄の）臭をかぎつけて来るものではありませんでした。（狐のこと）

は、備後北部での一例である。ともに岡田統夫氏の教示によるものである。氏は、「備後地方で「ゴワス」はすくない。」とも言ってられる。氏が、三原市例としてあげられる、

○キ<sup>ョ</sup>ネ<sup>ン</sup>ヨ<sup>リ</sup> タ<sup>コ</sup>ー<sup>ー</sup> ゴ<sup>ワ</sup>ン<sup>ド</sup>。コ<sup>ト</sup>シ<sup>ャ</sup>ー。

昨年よりは高いですよ。今年は。

○コ<sup>レ</sup>ター<sup>ー</sup> オ<sup>ー</sup>キ<sup>ュ</sup>ー<sup>ー</sup> ゴ<sup>ワ</sup>ン<sup>デ</sup>。

これよりは大きいですよ。

の二者での「ゴワン」は、九州南部の「ゴアン」を思わせるものであろう。三原市の「ゴワン」も、「ゴワス」系のものではないか。

岡山県下については、今、言うべきものがない。

山陰の島根県下に「ゴワス」がある。

○ア<sup>メ</sup>[<sup>e</sup>]ガ<sup>ー</sup> オ<sup>ー</sup> ゴ<sup>ワ</sup>ス[<sup>ü</sup>]ケン。

雨が多うござんすから。

は、出雲内の一例である。（神部宏泰氏による。）

鳥取県伯耆内では、

○シ<sup>モ</sup>ヒ<sup>ル</sup>ゼ<sup>ン</sup>ワ<sup>ー</sup> ヒ<sup>ク</sup>ー<sup>ー</sup> ゴ<sup>ア</sup>ス<sup>ダー</sup>。

下蒜山は低うござんす。

などの言いかたが聞かれる。（室山敏昭氏による。）

中国地方での「ゴアス」「ゴワス」分布は、以上の程度のものようである。およそ、劣勢の残存状況が認められるありさまである。

四国地方では、「ゴアス」「ゴワス」がよりいっそう劣勢である。私は、愛媛・香川については、言うべきものを、何も持ち得ていない。

高知県下には、いくらか「ゴアス」「ゴワス」が見いだされるらしい。(土居重俊氏『土佐言葉』などによる。)

徳島県下には、「ゴアス」「ゴワス」の分布の、やや見るべきものがある。南の山地部では、私も、老年者が「ゴワス」「ゴワヘン」などと、よく「ゴワス」ことばをつかうのを聞いた。

○アンマリ カワリワ ゴワヘン。

あんまりかわりはござんせん。

本県下では、平地部にもかなり方々で、「ゴアス」などが聞かれるのか。

○オハヨー ゴアス。

は、私が鳴門市域で聞いたものである。県下に、「ゴワス」相当の「グァース」もあるか。「ゴヤス」というものもあるらしい。『全国方言資料』第5巻の「徳島県那賀郡延野村雄」の条には、

*m*ヘイ アリガト ゴヤス

とある。

つぎは近畿である。

兵庫県播磨のうちでは、老年層に「ゴワス」が聞かれる。

京都府下の丹後に「ゴワス」「ゴアス」があり、

○ゴワヘン ナー。

ござんせんねえ。

などと言っており、丹波内にも「ゴワス」がある。(「ソーデ ゴワシタ カ。」など。)京都市域にも「ゴワス」があるらしい。『全国方言資料』第4巻の「京都府京都市」の条にも、

*m*………… ゴワヘンノデスガー

………… ございませぬのですが、

とある。

大阪の船場ことばには、「ゴアス」「ゴワス」がある。『全国方言資料』第4巻の「大阪府大阪市」の条には、

f………… アレ ヤッパリ ウレシ ゴワッセ  
………… あれ やはり うれしゅう ございますよ。

などの「ゴワッセ」の言いかたも見える。また、

fエー シュジンモ サツソクニナ オヨロコビニ アガラン ナリ  
主人も さっそくにね お喜びに 上がらなければ なら  
マヘン ゴワンノヤケド  
ないので ございますけれど、

との「ゴワン」の言いかたも見える。——「ゴワン」は「ゴワス」に相当するものである。茂木草介氏の「<横堀川>と大阪の言葉」にも、

いかにも明治期らしい老人の船場人が店頭で「ごわへん」「ごわす」「ごわんな」というような薩摩言葉（伝承的に船場人には薩摩の蔵役人の言葉が入っているといわれている）を使っているのを小耳にはさんだ記憶はあるが、奥ではあまり聞かなかった。

とある。なお、牧村史陽氏の「大阪弁集成」（『大阪弁』第一輯 清文堂書店 昭和23年4月）には、

ゴワス… ございます，文字に書くと薩摩のゴワスと同じなので大阪にこんな言葉があるのかとうたがう人があるが，これとはアクセントも違い語調も全く違うもので，「宜しごわ（ゴワス）」、「そんなことごわへんやろ」などゝ使用する

との記事が見える。「ゴワス」の「ごわ」が目される。大阪の市中で「ゴアス」「ゴワス」がしきりにおこなわれてきたらしいことは、注目にあたいする。榎垣実氏の『京阪方言比較考』（土俗趣味社 昭和23年5月）にも「ゴワス」の記事が見える。私は、大阪府下の南河内郡下で、つぎのような「ゴアス」を老男から聞いている。

○ゴハンワ オイシ ゴアス ノヤ。

ごはんはおいしゅうござんすですよ。

「ゴアス」の三音節は、早口に発音されていた。「ゴアヘン」の四音節もまた、早口に発音されていた。

大阪府内で、「ゴアス」が、「ヨロシ アス。」など、「アス」に発音されてもいよう。

和歌山県下にも、いくらかの「ゴアス」「ゴワス」がある。（「ゴワス」の打消は、「ゴワヘン」である。）いずれにしても、「ゴアス」「ゴワス」は老年層のものらしい。

奈良県下の状況もまた、上述の和歌山県下のに似ている。——「ゴワヘン」とともに「ゴワヒン」もあるか。南部などに「アス」もある。

三重県下に、「ゴワス」が比較的よく聞かれる。（やはり老年層のものではあろう。）つぎのは伊賀の実例である。

○オーキニ, アリガト ゴワス。

ほんとに、ありがとうございます。

○オハヨ ゴワスー。

お早うござんす。

○ハタラキサイ シタラ ヨロシ ゴワシタンヤ。

はたらきさえしたらよろしゅうござんしたのよ。

調査時、年配の女性が、よく「ゴワス」ことばをつかうのを聞いた。

○エー, オー ゴワス。

ええ、多うござんす。（老男→佐藤氏）

は、伊勢北部の例である。（佐藤虎男氏による。）

滋賀県下に関しては、今のところ、私は、湖西の、つぎの例をあげることができるばかりである。

○コナイダカラ サブ ゴワシタ デー。

このあいだからさむうござんしたからね。

近畿に「ゴワス」（「ゴアス」も）が、かなり見られる。

つづいて中部地方である。福井県下の若狭には、南の近畿域とのつづきもよく、「ゴワス」が存在している。『全国方言資料』第3巻の「福井県遠敷郡名田庄村納田終」の条には、

*m*ゴクローサンデ ゴワシタ

ご苦労さまで ございました。

というのが見える。

北陸地方では、——私の経験によれば、つぎに、とんで富山県下に「ゴアス」「ゴワス」が見られる。（越前・加賀・能登の状況はどのようなのであろうか。）

○オサム ゴアスー。

おさむうござんす。

○ハヨ ゴワシタ ネー。

早うござんしたねえ。

は、富山市西北部の例である。——ここでは、「ゴアス」は中年以上の人たちに、ふつうにおこなわれているようである。その品位は、中の位のものであるという。

新潟県内では、北部に、

○サクラデ ゴワスネス（桜でございます）

との言いかたがある。（佐渡謙吉氏「新潟県北蒲原郡西山  
長蒲村方言」『方言誌』第十八輯 昭和12年1月）

岐阜県下に、「ゴヤス」がある。『全国方言資料』第3巻の「岐阜県吉城郡古川町黒内」の条に、

*m*ハー アリガト ゴヤス マー

はい、ありがとう ございます、まあ。

というのが見える。

長野県下に、言うべきことがやや多い。県下の中部・北部のうちに「ゴアス」

があり、また、同地域に「ゴウス」のよりつよいものが見られる。

○アリガト ゴウス。

ありがとうございます。

○オツカレデ ゴウス。

おつかれでござんす。

『信州上田附近方言集』には、

ゴウスイ ござりますよ (ワイ)

オンゴワシヨー (句) ございませうの意。

の記事が見える。青木千代吉氏の『信州方言読本 語法篇』には、「ごわす」についての、

この語は時に「がーす」と訛って発音され、更に「そうであす」「ありがとわした」などとも言われる場合があったりして、

との記事が見える。

静岡県に関しては、今、『全国方言資料』第7巻の「静岡県安倍郡井川村田代」の条の、

*m*アヨゴアンタ

お早うございました。

をあげることができる。(県下に、「ゴウス」の「ゴアン」「ガーン」もあるのかどうか。)

関東地方に関しては、今、手もとには、次下の二例があるばかりである。

*m*アー ケッコデ ゴアシター

けっこうで ございました。

これは、『全国方言資料』第2巻の「東京都」の例である。

○エーエー サム ゴウス ネー

ええええ、さむうござんすねえ。

これは、千葉県東岸中部での例である。

東北地方についても、今、私が指摘しうることはすくない。

『山形県方言集』には、

ごあすまえ goasumae 連続語 御座いますまい 庄内  
が見える。

岩手県下に、いくらかの「ゴアス」「ゴワス」があるらしい。小松代融一氏の『岩手方言の語彙』の「旧伊達領」の部には、

エゲアス よいです

というのが見える。「ゲアス」は「ゴアス」に近いものかどうか。

東北地方も、とくに青森県下には、言うべきことがやや多い。県東域のいわゆる「南部」に、「ゴアス」「ゴワス」が認められる。かなりつよいおこなわれかたがあるか。「南部」南辺での私の一週間調査では、「ゴアス」の広くさかんにおこなわれるのを聞くことができた。

○オバンデ  $\overline{\text{ゴアス}}[\ddot{u}]$ 。

(夕刻のあいさつ)

○サツムー  $\overline{\text{ゴアスベ}}$  カ。

さむうござんしょうか。

中年以上の男女の人たちに、「ゴアス」がふつうにおこなわれている。五戸・八戸の地方にも「ゴアス」がおこなわれており、「ゴアス」が早口ぶりに発音されもしている。

○オハヨ  $\overline{\text{ゴアス}}$ 。

お早うござんす。

は、八戸の一例である。十和田湖畔で私が聞き得た「ゴアス」例は、

○オバンデ  $\overline{\text{ゴアス}}[\ddot{u}]$ 。

こんばんは。

○ムッタド  $\overline{\text{セワニ}}$   $\overline{\text{ナッテ}}$   $\overline{\text{アリガト}}$   $\overline{\text{ゴアス}}[\ddot{u}]$ 。

いつもお世話になってありがとうございます。

などである。ここでは「ゴワス」も聞かれた。「ゴワス」について土地人は、

“八戸ことばのはいったものだ。”と語った。

東北地方中、この青森県東域に、別して「ゴアス」（「ゴワス」も）がさかんなようでもあるのは、注目すべきことである。

北海道に関しては、今、言うべきことがない。

以上、「ゴアス」「ゴワス」について、全国状況を見てきた。「ゴアス」に対する「ゴワス」は、もっともしげんの転訛形と見られるものであり、二者はたがいに随伴しあってもいる。じつは、「ゴアス」に発言したつもりであっても、「ゴワス」に聞こえることも多かろう。「ゴアス」から「ゴヤス」への転訛も、ごくしげんのことと見られる。それにしても、「ゴヤス」の存立はすくない。

「ゴアス」「ゴワス」は、九州南部にいちじるしいものがあり、中国四国には分布がわりあいよわくて、近畿地方にはやや見るべきものがあり、——この点、近畿以西の、国の西半域の分布が注目されて、かつは東北隅の、いわゆる南部地方の分布が注目される。九州南部と奥羽北部との対立状況が、多少、見られないではない。

「ゴアス」「ゴワス」が全国的なものであり得たことは、明らかであろう。しかし、その存立はしだいにふるわなくなって、今日は、残存状況が顕著である。——中部地方・関東地方の状況を見ても、そのことが明らかである。日々に衰退の道をたどっているのが「ゴアス」「ゴワス」ことばであろう。

### 三 ガース

「ゴアス」にならべて「ガース」を見る。

「ゴアス」と「ガース」とはあい近いものとも考えられるけれども、すでに「ガース」となったものは、その音の聞こえのゆえに、独自のであると見られる。ただし、これの分布は限られている。岡山県下・徳島県下・大阪府下・和歌山県下・長野県下・静岡県下に、その散在するのが認められる。

岡山県下では、美作地域にやや色濃く「ガース」が存在しているようである。作州西部の例だと、

- オハヨー ガース。
- マ<sup>ン</sup>ダ トー ガーセン。

まだ耳が遠くはござんせん。

などである。作州西部出身の今石元久氏によれば、「ガーショー」「ガーシタ」などもおこなわれているという。

「ガース」に近い「ガェース」も存在しているか。作州に、「ゴザイス」などからの「ガイス」の「ガェース」もあるかもしれない。(p. 310)

徳島県下では、私自身は、南部で「ガース」ことばを聞いている。南部山地の一例は、

- フ<sup>ト</sup>ンガ モト ギョーサン ガーシテ ナー。

ふとんがもとたくさんありましてね。

である。「ガース」は老人語だとのことであった。県南ばかりにではなく県北内にも、

- エー オテンキデ ガース。

いいお天気でござんす。(中男→中男)

などの言いかたがある。県下に、「ガーヘン」(ござんせん)などの言いかたもあるという。(宮城文雄氏「徳島方言概観」『徳島大学学芸紀要(人文科学)』第V巻 昭和30年9月)

大阪府下では、南要氏の『和泉郷荘村方言』に、

オイシガーサー

美味しうございます

との記事が見える。

和歌山県下に関しては、和歌山県女子師範学校編の『和歌山県方言』の「ガース」を引用することができる。

ガース ございます

また、楠本実二氏の「奥熊野地方の言語」（地方史研究所『熊野』 地方史研究所 昭和32年7月）の中で、

新宮では「ガース」高池に行くと「アース」となる……………

とあるのを見ることができる。

長野県下の「ガース」は、青木千代吉氏の『信州方言読本 語法篇』に見える。(P.256)

静岡県下では、『静岡県方言辞典』の、

お早うがーす ゴザイマス

と、坂野徳治氏『静岡県島田方言誌』（三琳書屋 昭和37年12月）の、

ガース ございます 御座います

とを引用することができる。

## 第七節 ゴイス系のもの

### 一 ゴイス ゴエス ゲース

「ゴイス」「ゴエス」「ゲース」が問題とされる。

「ゴイス」は、「ゴザス」に対立するものと考えられる。（——対立の地位にあるものと見てよいように思われる。）「ゴザイス」から「ゴイス」ができた、というようなことがあるかもしれないけれども、できた「ゴイス」は、まさに「ゴザス」に対応するさまのものと見られる。

「リ」は「イ」に転じやすい。しかし、「ザ」は「イ」に転じやすいかどうか。「ゴザス」から「ゴイス」が生まれたとすることは、容易ではあるまい。あるいは、「ゴザイス」>「ゴイス」の線が考えやすいのであろうか。——この出自考にしたがえば、「ゴイス」は、さきの第五節でとりあげた「ゴザイス」の条下でとりあつかったほうが、よりよいことにもなる。が、今は、「ゴイス」の生態にかえりみ、これの共時論的処置を重んじて、出自はともあれ、「ゴザス」に対立するものとして「ゴイス」をとりたてる。

## ゴインス

「ゴイス」関係のものに「ゴインス」がある。石橋重吉氏『若越の方言』（安田書店 昭和22年10月）に、「ゴイス」にならべて「ゴインス」をあげているのが見られる。（ちなみに、「アリガス」にならべて「アリンス」をあげてもある。）

以下、「ゴイス」（「ゴエス」・「ゲース」）の記述にしたがう。

九州地方では、大分県下に「ゴイス」が認められるばかりである。このさい、九州の他地域が「ゴイス」に無関係であるのは、注目をひく。大分県下などの九州東北部地域は、中国地方との方言連関を示しがちの地域でもある。

さて中国地方となると、山口県下に「ゴイス」がよくおこなわれている。

○ソーデ ゴイス ノー。

そうでござんすね。

は、周防島嶼部での一例である。

○マー ナンデ ゴイス ノー。

まあなんでござんすねえ。

は、周防本土東部内の一例である。県下に、「ゴエス」の言いかたもよくおこなわれている。「ゴエショー」「ゴエセン」などとある。国安功氏によれば、周防平郡島では「ゴエース」などとも言っているという。さらにはまた、

○チニー シタンデ ゲース カ。

“どうされました？”

などとも言っているという。——国安氏は、この例を老男の発言としており、かつ「古風な表現である」としていられる。「ゲース」は、「ゴエス」などからしげんにできたものか。「ゴエース」も「ゲース」に近い。

広島県下にもいくらかの「ゴイス」が認められる。ただし、「来る」ことを言う「ゴイス」も混在している。

○イエニ ゴイス カイ。

うちにいらっしゃる？

は、安芸西辺での、当の「ゴイス」例である。

岡山県下には、北部内に「ゴイス」があるか。

中国地方の山陰がわには、「ゴイス」が見えないようである。概して、九州地方に「ゴイス」がなくかつ山陰にもこれがないのは、意味のあることと思われる。すなわち、えてして古態の現象を示しがちの双方が、今は、あいともに、「ゴイス」を示していないのである。——「ゴイス」などという変形は、もはや地域的な偶然形とも言うるものなのか。

四国地方には「ゴイス」が見られない。

近畿地方にもまた、概して、「ゴイス」が見られず、ただ和歌山県下に「ゴイス」がある。『和歌山県方言』には、「厭でゴイサ」などとある。「ゴイサ」は、「ゴイス ワ」に相当するものか。県下の「ゴイス」は、南部域に認められるものである。さきの楠本実二氏も、「奥熊野地方の言語」で、

大島の須江では

そうでゴイサ。(そうでございます)

となるのはよいとしても、これが否定の意味を持つ場合になると

そうでないゴイサ。

と述べていられる。岸田定雄氏も「熊野のことば(上)——瀬峡・北山峡附近を中心として——」(『和歌山方言』3 昭和29年12月)で、

大島あたりでは此のヤニコイを全国方言辞典でも挙げているように「大変、大層」の意に用い

ヤニコイゴイサ (沢山ある)

と説いていられる。

四国・近畿に、「ゴイス」の、広い空白地域が認められる。にもかかわらず、近畿の状況に関連を示すことの多い北陸の福井県下となると、ここは「ゴイス」ことばを示すことが、じつにさかんである。

越前の広くに「ゴイス」ことばがおこなわれており、「ゴエス」の言いかたも、ある程度、混在する。

○イクラデモ ゴイス。

いくらでもごんす。

○コンタビワ エー アンバイデ オメデトー ゴイシタ。

このたびはいいあんばいで、おめでとうござんした。（結婚についての老男のあいさつ）

などは平地部の例であり、

○コドモ ツレテッテモ ダンノー ゴイス ケーノー。

“子どもを連れていってもさしつかえございませんかねえ。”

○アリガト ゴエンタ。

ありがとうごんした。

などは、東山地部の例である。

橘正一氏の「デス・ダス・ドス」(『コトバ』第七卷第三号)には、「越前大野郡ではゴエンスといふ。」との記事が見える。

「ゴイス」の打消形は、「ゴイセン」とも「ゴイへん」ともある。

北陸では他に、新潟県下、『頸城方言集』の「ゴエス」が指摘される。「ゴツォーでゴエス」(御馳走でございます。)などとある。

中部地方では、いま一つ、山梨県下で「ゴイス」ことばのさかんなのが注目される。県下に名だたい言いぐさは、

ハンデ メタメタ イナヨ ゴッチョデ ゴイス (早く いくどもい  
くども 気もちがわるい ごやっかいで ごんす)

である。例の奈良田方言では、そのあいさつことばに、「ゴイス」の使用がいちじるしい。私が山梨県西南部内で聞き得た「ゴイス」例は、

○ブチョーホーデ ゴイシタ。

お粗末でした。(老女の、客人を送ることば)

○バーヤン。キョーワ ゴクロサンデ ゴイシタ ヨ。

おばさん。きょうはご苦労さんでござんしたわね。 (中女→老女)  
 などである。

○オバンデ ゴイス。

(夕方の、おつかれさんでというあいさつ)

は、甲府での一例である。瀬川敏氏は、『坊』と『ぼこ』(山梨県国中地方) (『言語生活』第七十号 昭和32年7月)で、「よくねェ、おうちのぼこたちはいい成績だそうで……………ほんとにようごいすじゃん」との会話例をあげていられる。

関東地方に「ゴイス」はない。

東北の一般にもこれが見られなくて、ただ北端の津軽には、なぜか「ゴイス」「ゴエス」の、かなりいちじるしいものが見られる。

○アリガドー ゴイス [ji]。

ありがとうございます。

などと言っている。打消形には、「ゴエへん」などがある。

北海道地方に関しては、「ゴイス(ゴエス)」ことばの言うべきものがない。

以上にしたがって、「ゴイス」ことばの存立と活動をまとめてみる。「ゴイス」はしぜん「ゴエス」とも転じており(—東北地方では、「ゴイス」のつもりの発音も、しぜん、「ゴエス」の発音になっており)、「ゴエス」からは「ゲース」ができてもある。「ゲース」の短呼が「ゲス」となってもいる。ただし、「ゲス」の存在はさまで多くはないのか。

さて、上記の諸相を呈する「ゴイス」ことばの分布は、かなり偏頗なものになっている。九州は、大分県下にだけこれが見られ、その点では中国山陽の「ゴイス」分布とつながりはよいありさまであるが、四国には「ゴイス」がない。近畿の和歌山県下にのみこれが見られるのは、もともと近畿に広く存在した「ゴイス」が、この地方に残存するにいたったというのか。それとも、近畿では「ゴイス」がおこらなくて、ただこの西南辺にその生起が認められるというのか。中部地方の福井・山梨での「ゴイス」隆盛は、一種の異常状況とも見

られる。東北津軽での「ゴイス」「ゴエス」がまた、異常的である。これを要するに、「ゴイス（ゴエス）」分布の地域的偶然性とでも言いうる状況が認められる。近畿地方では、これがほとんど生起しなかったのではないか。（四国でも、である。）九州の大部分と山陰地方と東国地方の大部分ともまた、「ゴイス」「ゴエス」ことばには無縁だったのか。

考えてみるのに、「ゴザイマス」系のことばの諸転訛形の成立も、「ゴイス」などの、三音節語というような短縮形になると、その成立は、地域的にかなり偶然のものであったかと察せられる。現存の状況を大観するにつけても、これの全国的な残存状況に、さしての合理性は認めることができず、むしろ、ものの偶発性が察知せられるばかりである。

## 二 ゴンス

「ゴイス」に対する「ゴンス」がある。「ゴンス」も、全国的に見て、そのおこなわれかたの総量は、「ゴイス」のそれに近いものがある。

「ゴンス」もまた、前の「ゴイス」同様、諸地域に偶生（偶成）したもののようである。

「ゴンス」は、「ゴイス」からも生じ得たか。「ガンス」から生じうることがあったかもしれない。

「ゴアンス」の「ア」がぬけて「ゴンス」ができた、ということがあったかもしれない。（「ゴアス」の「ア」がぬけて「ゴス」ができることがあったかもしれないのと同様に。）

九州地方ではまず、熊本県下、天草島の「ゴンス」が指摘される。江口達雄氏の『『英文方言訳』<sup>20</sup> 熊本県天草郡維和村』（『土の香』創刊五周年記念 土俗趣味社 昭和8年5月）には、

わいがとごんす（ありがとう）。ほんに達者しとしましてごんす（大層達者にしてをります）。

とある。

長崎県下の「肥前国北高来郡昔話集」（結城次郎氏『方言誌』第二十二輯）

には、「ゴンスル」の例が多く見えている。「ゴンス」の例も見られる。打消の「ゴンセン」や、推量法の「ゴンシュウ」も見られる。

○もう居らっさんとでござんしゅうか  
などがある。

○ドーデ ゴンスー。

どうぞござんす？

は、同郡下での私の聞きがき例である。長崎県下の諸所に、「ゴンスル」「ゴンス」が認められるようである。

筑後の「ゴンスル」に関しては、野田宇太郎氏の「九州なまり」（『言語生活』第六十五号 昭和32年2月）に、

筑後でも私の生れた松崎方面……。私の少年時代（大正後期から昭和初期）にはまだ「なーい、さうでござんする」などといふ「ごんする」言葉がきかれた。「はい、左様でござるます」という意味だが今はもう「ごんする」などほとんどきくことが出来なくなった。

とあるのをひくことができる。

中国地方では、山口県下・広島県下・岡山県下に「ゴンス」があり、山陰鳥取県下にも「ゴンス」が認められる。私が聞いた岡山県作州西部の「ゴンス」例は、——尊敬表現法ふうの、

○ドガイ ショーゴンジャー。

どんなにしていらっしゃる？

などである。中国地方の「ゴンス」は、残存色のつよいものであろう。

四国では、土佐と阿波とに「ゴンス」が認められる。

近畿では、兵庫県播磨・和歌山県下・三重県下に「ゴンス」が認められる。

中部地方に関しては、石川県教育会『石川県方言彙集』（石川県教育会 明治34年12月）に、

ごんす ゴザリマス 県外ニ用フル所アリ 羽

との記事が見える。とんで、新潟県佐渡に「ゴンス」が見いだされる。

関東地方では、栃木・茨城の二県に「ゴンス」が見いだされる。

東北地方には「ゴンス」がない。

以上、「ゴンス」の偶生的な分布状況が明らかである。——東北は、まったく「ゴンス」に無縁の地域のようにである。九州に「ゴンスル」のあるのは、古形として注目される。——それにしても、全九州にあっての「ゴンスル」存立という見かたをすると、やはり、これは、偶生的な様相を示していると思われる。（以前は、「ゴンスル」がかなりの広域に生きていたのかもしれない。）

全国的に見て、言うところの偶生的な「ゴンス」ことばが、いちじるしく退存の状況にあることもまた、上記に明らかであろう。

### 三 ゴッス

「ゴッス」に関しては、言うべきことがすくない。

一つに、九州地方で、島原第一尋常高等小学校『島原半嶋方言の研究』（島原第一尋常高等小学校 昭和7年5月）に、「ゴッスル」が見える。

○ありがと ごつする

（ありがとうございます）

○こんひつつあん な やまださん ゆーひつ つあん で ごつする

（この方は山田さんといふ方です。）

などである。

つぎに、中部地方山梨県で、石川緑泥氏の「山梨県河内方言（南巨摩郡飯富村）」（『方言と土俗』第四卷第九号）に、

ゴイス	} ございます、有ります
ゴッス	

とある。

つぎに、関東、茨城県下で、「ゴッス」が見いだされる。茨城教育協会『茨城方言集覧』（茨城教育協会 明治34年4月）に、

ごっしょー（成） 御座イマシヨーノ意 新，水

ごっさー (成) 御座イマスヨノ意 新

ごっさら (成) 御座イマスカノ意 新

などの記事が見える。私自身も、県東北部の磯原町で、

○オラウヂデワ ソーデ ゴッセン。

私のうちではそうではございません。

との実例を聞き得ている。——これは、野口雨情の母ごさんのことばであったという。(この母ごさんだけのことばだったと教示された。)(「ソーデ ゴッセン」とともに、「ソーデ アリセン」との言いかたもなされたという。)

以上が、私のとらえ得ている「ゴッス」存在である。やはり、偶生的なものとも見ることができそうである。

#### 四 ゴース

「ゴンス」「ゴッス」に対応するものに、「ゴース」がある。

「ゴンス」から「ゴッス」ができることがあったかもしれず、同時にまた、「ゴンス」から「ゴース」ができることがあったかもしれない。ことによっては、「ゴッス」の発言気分が「ゴース」を産むことがあったかもしれない。(逆にまた、「ゴース」の発言気分が「ゴッス」を産むことも、あったかもしれない。)

「ゴース」が、「ゴアス」の「ガース」からできることも、あり得たかもしれない。

さて、「ゴース」の存在がまた偶然的である。

一つに、広島県安芸奥地内で、

○デテ ゴースガ。

家の者は今、外出していますが。(初老男→中女)

というのが聞かれる。(吉住治男氏の調査による。)

佐藤虎男氏の「近畿・中部接境地方方言状態の調査報告」(『国文学攷』第十七号 昭和34年4月)には、

なお、本郷〈三重県員弁郡本郷村〉では、その昔古老たちが「ゴース」  
「ゴース」を云っていたという。

との記事が見える。

とんで、東北の北部、津軽地方に、

ヨゴォス （複）

宜しう御座います。此れでヨゴォスカ。

との言いかたが見いだされる。（菅沼貴一氏『青森県方言集』青森県師範学校  
昭和10年6月）

## 五 ゴス

「ゴス」生起の可能性は、種々に見られよう。「ゴース」から「ゴス」はできやすかったろう。「ゴイス」からもまた、「ゴス」ができやすかったろう。「ゴンス」からもまた、「ゴス」ができやすかったろう。あるいはまた、「ゴース」からただちに「ゴス」が生じるようなことも、あったかもしれない。なにぶんにも、方言上のことは、口ことばのことである。すなわち、記録によることではない。したがって、口頭上の微妙な事態しだいによっては、何がどうおこるかもしれない、と考えられもするしだいである。

「ゴース」の存立にもまた、偏頗がいちじるしい。

まず、九州地方には「ゴス」が認められない。

中国地方となって、山口県周防で、

○ババガ イーゴシタイ。

ばあさんが言っていましたよ。 （老女→中女）

というなどが聞かれる。ただし、この例では、「ゴス」ことばが助動詞的なものとして見いだされる。周防平郡島では、

○オハヨー ゴイタ。

お早うござんす。

との言いかたが聞かれるという。（国安功氏調査）「ゴイタ」はもと「ゴシタ」

で、ここに「ゴス」があるのか。周防のほかでは、中国地方で、ただ、岡山県北部内に「ゴス」が見いだされるばかりである。

四国地方には「ゴス」がない。

近畿では、一つに、京都方言に「何々で ゴス」があるという。三ヶ尻浩氏の「京都言葉の敬語法」(『国語研究』第三卷第六号 昭和10年6月)には、

「でげす」「でござ」「でござす」

との記事が見える。

大阪府下に聞かれる「ゴヘン」というのは、「ゴワセン」「ゴヘン」というような「ゴヘン」だとすると、これは、「ゴス」を思わせるものか。

和歌山県下・奈良県下・三重県下に「ゴス」があるらしい。

中部地方では、福井県下に「ゴス」がある。越前東部内に、

○アンマリ 下ーデワ ゴヘン ガー。

あんまり昔ではありませんよ。(老男→青男)

との言いかたが聞かれるよしである。(愛宕八郎康隆氏による。)天野俊也氏からも「ゴヘン」を教示されている。

つぎに、恵那郡教育会『東濃方言集』(明治36年4月)に「ござ」(ございます)の記事が見える。

つぎに、私は、山梨県西南山地内で「ゴス」ことばを聞き得ている。

○アリガト 下ーゴシタ。

ありがとうございます。

○オメーサン 下ーコデ ゴッサー。

あんたさんはどこの人でござんすか。

後者例の「ゴッサー」は、「ゴス エー」か。当地方での「ゴス」は、本県下によく聞かれる「ゴイス」からのものかと思われる。

関東地方では、一つに、千葉県下の「ゴス」がある。大橋勝男氏によるのに、千葉県長生郡内では、

○オーシューノ サケツチューノワ ヨー ゴス ヨネー。

東州の酒っていうのはようござんすよねえ。（老男→大橋氏）

との言いかたが聞かれる。（私は、千葉県下の諸所で「ゴス」「ゲス」をさがしたけれども、聞きとることができなかった。）二つに、群馬県下・栃木県下・茨城県下に「ゴス」が見いだされるらしい。桐生市乙種学会編『桐生地方方言訛語調査』（自家版 昭和11年2月）には、

ごす（句） ございますの方言。日常盛に使用さる。男女共用なれども特に女に多し。「ようごす」の如し。

との記事が見える。

東北地方では、まず、福島県下に「ゴス」が見いだされる。『福島県方言辞典』には、

オハヨーゴス〔句〕お早うございます 中会

とある。また『福島県棚倉町方言集』にも、「ゴス」が見えている。本書には、「ゴラス(アス)」にならべて「ゴス」をあげてもあるので、「ゴス」は、「ゴラス」からのものかとも考えさせられる。

つぎに、宮城県下に「ゴス」がある。

つぎに、青森県津軽地方に、「ゴス〔i〕」ことばのかなりさかんにおこなわれているのが注目される。津軽半島内の一例は、つぎのものである。

○アリ〔i〕ガ<sup>下</sup> ゴン〔i〕 デア。

ありがとうござんすね。

弘前市での例は、

○アリッガトン ゴン〔i〕。

ありがとうござんす。

○ヤヤ、エ〔i〕 ゴン〔i〕 デァ。エ〔i〕 ゴン〔i〕 デァ。

いえいえ、ようござんすよ。ようござんすよ。

である。青森県『青森県方言訛語』（青森県庁 明治41年9月）には、

ごえへん } ございません、より来る  
ごへん }

との記事が見える。

さきに、当津軽弁では、「ゴイ(エ)ス」のよくおこなわれているのが見られた。(P. 264)「ゴイ(エ)ス」とともに「ゴス」がよくおこなわれている。当地方の「ゴス」は、「ゴイ(エ)ス」から出たものか。

以上、全国での分布を大観するのに、第一にはまた、「ゴス」の、地域に即して偶発的なのが注意される。九州・四国には「ゴス」が見られなくて、中国地方には一部にこれが点在し、近畿地域内でもまた、これの点在の様相が見られる。中部地方・関東地方についても、「ゴス」の存立が、いわば偶然的なのを見ることができよう。——二県・三県にわたって見いだされるようでも、その地域にそれのあることが、より広い範囲から見ると、やはり偶然的である。東北地方となって、「ゴイ(エ)ス」同様、「ゴス」がまた、ぬきん出て津軽地方によくおこなわれているのは、一方の顕著な特異さ・偶然さと言えようか。

「ゴス」は、大観するのに、津軽地方を除いては、——あるいは山梨県下も除外すれば、他ではすべて、衰亡一步てまえの存立状況を示すようである。

「ゴンス」や「ゴイス」のばあいには、これらが尊敬法動詞としても立っているのを見いだすことができたが、「ゴス」(また「ゲス」も)というような簡略形になると、これはもう、「来る」ことを言う動詞などとしては存立しうべくもないものになっている。

## 第八節 ゲス

「ゲス」は、さきに「ゴイス」の条下で指摘した「ゲース」からできたものと見ることができよう。とはいいいながら、さきにも述べたように(P. 269)、方言事象は、なにぶんにも口頭上のことである。「ガス」が「ゲス」になったというようなことも、所によっては、あったかもしれない。また、「ゴス」が「ゲス」になったようなことも、あったかもしれない。「ゲス」を一つの変化コースのうえでだけ考えることは、無理なのではないか。上来しばしば考えさせられ

てきた「偶生」（偶然生起）を思うにつけても、地域々々での、はかりがたい「ゲス」の成立が予想される。このように考えられる「ゲス」は、ただに「ゴイス」の条下などで説いてよいものではなからう。

ここに単純に共時論的な考えかたをすれば、「ゲス」は「ゴス」の対存者と受けとることが容易である。（また「ゲス」は、後述の「ガス」とも対応すると見ることができる。）「ゲス」「ゴス」「ガス」の、三者対応の鼎立関係が了解しやすくなっている。これら三者は、語感上、きれいに、正三角形の各頂点に立っているとも見られる。

上のように考える時は、私どもは、「ゲス」を、ただに「ゴイス」流のものとして位置づけるのにはとどめないで、むしろこれを分立して、一個の節におくことをすべきか、と考えさせられる。

以下に、「ゲス」の存立を見よう。——諸方にわずかに点在するさまが問題視される。

長崎県北高来郡の昔話に、

他ン人なら倍でん貰はんば出来んちよか 御隠居のこつでげすけん、掛引  
なしで 三百兩位なら売つちよきまつしゆ、

とある。（『昔話研究』第二卷第十一号 昭和12年9月）

つぎは、京都ことばの中のものである。三ヶ尻浩氏の「京都言葉の敬語法」に、「でござ」などととも「でげす」があげられている。

関東地方に、いくらかの分布が見いだされる。大久保忠国氏の「埼玉方言の語法」（『ニュースクール』7 昭和25年7月）によれば、入間・秩父・南埼玉・北葛の諸郡には、補助動詞「げす」があるという。大久保氏はまた、『言語生活』（第十二号 昭和27年9月）の「埼玉」の条で、

でずの意のデゲスなども根絶しそうだし珍しい動詞の二段活用も今では容易に採集できなくなって来た。

と述べていられる。

『茨城方言集覧』には、

げっしょー

けーす

御座イマショーノ意

というのが見える。田口美雄氏の「茨城県方言の考察——主として音韻・語法について——」(『研究誌』昭和14年7月)にも、

さうでございます ソーデゲス

というのが見える。

つぎに、東北地方に二・三、見いだされるものがある。一つに、『山形県方言集』に、

えげす egesu 連続語 たくさんです 最上

水ああとえげす。

(水はもう沢山です。)

えげすか egesuka 同 ようございますか 最上

これで答はえげすか。(これで答はようございますか。)

との記事が見える。

『全国方言資料』第1巻の「岩手県胆沢郡佐倉河村」の条には、

fオカゲサンデ スバラク エゲス<sup>2)</sup>

おかげさまで ここしばらく いいですよ。

2) 「ゲス」は、「ございます」のくずれ。

というのがある。

『全国方言資料』第1巻「青森県南津軽郡黒石町」の条には、

fエジツゲシャー

5歳です。

というのが見える。

以上、「ゲス」の、散発的な分布が見られる。(あるいは、以前にはいますこし多く、「ゲス」が諸方に見られたのかもしれない。) 関東・東北の地方は、

ことによると、「ゲス」ことばの根づく方言風土だったのかもしれない。

「ゴザイマス」ことばも、「ゲス」ともなれば、異形の異形である。特殊性がまったく顕著であると言えよう。こういうものであるだけに、その存立のしかたには、独自の傾向・くせがあったろうし、したがって「ゲス」は、かならずしも広くつづく分布状況などは示すにいたらなかったのかと思われる。

「ゲス」を、すでに過去のものとするには、難がなからう。

## 第九節 ゴザンス系のもの

### 一 ゴザンス

上の「ゲス」が、「ゴザイマス」ことばの特殊化の一極点にあたるものであったとすれば、この「ゴザンス」は、「ゴザイマス」系のことばの、まさに本流を行く一つの重要な変化形である。「ゴザンス」は、現代の諸方言上に、全国的な大勢力をなして生きており、年長の女性などにあっては、しばしばこれが、準「標準語法」の一つのようにもなっている。（つまり、人々は、「ゴザンス」の言いかたで、一種の上品なもの言いをしており、それでもって、よそいきのことばづかひの用をたしている。）

「ゴザンス」は、「ゴザイス」（第五節）からきたものかもしれない。「ゴザイス」に近い「ゴザス」「ゴザッス」とも、関係の深いものであろう。（「ゴザッス」から「ゴザンス」がおこることも、あり得なかつたことではなからう。）ことによると、「ゴザイマス」から「ゴザイス」がおこったのと同様に、「ゴザイマス」から「ゴザンス」がおこったかもしれない。——「ゴザイス」が発言されるきわに、いきおいによっては、「ゴザンス」が発言されたというような、ことのしだいもあり得たのではないか。

起源はどのように考えられるのにもせよ、できた「ゴザンス」（文語形では「ゴザンスル」）は、まさに「ゴザイマス」ことばを代表するにたる、いわば本

格的な一後生形式であった。これの、世におこなわれることをつよさは、「ゴザイス」のおこなわれかたの比ではない。語形上、「ゴザイス」などには近い「ゴザンス」ではあるが、現代日本語方言世界での「ゴザンス」存立ぶりは、にわかには「ゴザイス」などを思いよせさせないものであり、その独自性が大きい。 「ゴザイマス」ことばの諸変化形を共時論的に処理する時は、私どもは、「ゴザンス」を、独自特定のものとして、「ゴザイマス」ことば流伝界の正統に位置づけることができる。

この「ゴザンス」が、やがてまた「ゴアンス」「ガンス」などを産む基本体ともなっていることは、言うまでもなからう。以下、「ゴザンス」の存立と活動とを、全国諸方言について見ていく。

九州では、はじめに鹿児島県下の「ゴザンス」を見る。瀬戸口俊治氏によれば、南薩では「ゴザイモス」と、かならず「モ」が出るという。（「ゴザンス」は町ことばとの意識がある、とも言われる。） p. 237

注 福里栄三氏は、「山川町附近の方言について」(『方言』第一巻第三号 昭和6年11月)で、「敬語の『ゴアス』(ございます)は元々鹿児島市の言葉で、出水郡では『ゴザンス』。揖宿郡では『ゴザイモス』。」と述べていられる。

他地方とはちがいで、当地方では、「ゴザイマス」を考えることはできない。したがって、当地方に見いだされる「ゴザンス」については、「ゴザリ(イ)モス」起源を考えなくてはならない。

薩隅地方で、一般的には「ゴザンス」ことばが見いだされる、としてよいのであろうか。島嶼部にも「ゴザンス」ことばが認められる。

○ソーデ ゴザンス カー。

そうでござんすか。

は、種子島の一例である。（種子島では、「ゴザンス」の上の言いかた、「ゴザリモース」もよくおこなわれている。）

○サヨー ゴザンヒ カ。



などとある。——米良地方の「ゴザンス」は、薩隅方言系の「ゴザンス」なのかどうか。日向中部、児湯郡などにさかんな「ゴザンス」は、「ゴザイマス」系のものかと思われる。（私は、かつて、例の青島を見わたす地域でも、「ゴザンス」ことばを聞いた。）

熊本県下に「ゴザンス」の見だしにくいのに対して、長崎県下以降には、次下のように「ゴザンス」が見いだされる。

長崎県下では、広く諸方に「ゴザンス」が見いだされる。「ゴザンスル」もある。未来・推量では「ゴザンシュー」が聞かれる。

○ジューネンバッカマエデ ゴザンス パイ。

十年ばかり前でござんすわ。

は、県東部の「ゴザンス」例である。

○オサヨデ ゴザンスル カ。

さようでござんすか。

は、五島列島の「ゴザンスル」例である。種ヶ島克巳氏の『平戸方言語法草案』（稿本 昭和10余年?）には、

ござんさる（御座遊ばさる）

というのが見える。

佐賀県下でも、諸方に「ゴザンス」が見いだされる。

○オキツ ゴザンショ。

おつかれでござんしょう。

は、県南部内の一例である。「ゴザンシュー」とも言っている。ついでながら、

○オウチ ゴザンシター。

というのは、やはり県南で聞かれた、「ごめんください。」のあいさつことばである。

福岡県下でも、いくらかの「ゴザンス」が聞かれる。福岡市内にも「ゴザンス」ことばがある。博多湾西などでは、

○ドンテモ コシテモ カミオ キラントユ ヒトガ、コノ ムラニモ

ゴザンシタ タイナー。

どうしてもこうしても髪を切らないと言う人が、この村にもござんしたよねえ。

などと言っている。小倉若松方面その他の県東域にも「ゴザンス」ことばがあることは、岡野信子氏からも教示されている。

大分県下には、「ゴザンス」ことば（「ゴザンスル」ことばも）のおこなわれることが、かなりいちじるしい。

○タバコン シューニューワ フト ゴザンス。

たばこの収入は大きいんです。

は、国東半島での一例である。未来・推量の言いかたでは、「ゴザンショー」もかなりおこなわれているか。県南域では「ゴザンシュー」も聞かれる。

大分県下にもまた、「ゴダンス」ことばも聞かれる。（「ゴダンスル」ことばも。）

以上、九州地方をかえりみるのに、まずは、広域に「ゴザンス」関係の言いかたが多く見いだされる、としうるように思う。「ゴザンス」ことばは、現にかなりよく生きているものと見られる。——「ゴザイマス」に近い有力な略形ということであろうか。しばしば古風なものを示す九州は、このさいもまた、「ゴザ(ダ)ンスル」の言いかたをも存している。この点、九州の特異さを思わせる。九州地方は、そういう特異性を示しつつ、しかも、「ゴザ(ダ)ンス」ことばの現在勢力のつよさを見せている。

中国地方でも、五県のそれぞれに、「ゴザンス」ことばのそうとうの流行が見られる。

山口県下は、「ゴザンス」ことばのさかんな所である。なまって「ゴダンス」になっているばあいもある。

○アンタンデ ゴザンス カ。

“ごめんください。”

は、山口県光市方面の一例である。当県下では、「ゴザンス」が現実に発言さ

れる時は、多く「ゴザ<sup>ー</sup>ンス」のアクセントになる。

○オーチンデ ゴザ<sup>ー</sup>ンス カ。

“おうちにおいでますか。”

は、周防東辺での一例である。

長門で、「ゴザ(ダ)ンスル」の言いかたも聞かれるらしい。当方と九州との親縁関係が思われる。

山口県下につづいて、山陰石見地方に「ゴザンス」が広くおこなわれている。(いくらか「ゴダンス」もあるか。) 隠岐にも「ゴザンス」のおこなわれることがさかんである。隠岐にくらべれば、出雲では、「ゴザンス」のおこなわれることが、よりすくなかろうか。

○オシマイサンデ ゴザ<sup>ー</sup>ンス。

おしまいでございます。

は、隠岐、西郷ことばの「ゴザンス」例である。(神部宏泰氏のご教示による。) —「ゴザ<sup>ー</sup>ンス」「ゴザ<sup>ー</sup>ンシタ」など、「ザ」だけ高いアクセントになっているのは、山口県下でのと同様である。(隠岐に「ゴダンス」の言いかたもあるらしい。)

○女の人が イッショ<sup>ー</sup>デ ゴザ<sup>ー</sup>ンシ[i]タ。

女の人がいっしょでござんした。

は、出雲の南部山地内での一例である。

鳥取県下では、総体に「ゴザンス」ことばがよくおこなわれているようである。石黒武頭氏の『鳥取県方言辞典 後編』(鳥取県方言研究会 昭和27年12月)には、「ござんす」「ごだんす」があがっている。県下では、ことに東部の因幡に、「ゴザンス」のおこなわれることがつよいか。(「ゴダンス」もいくらかはおこなわれている。)

○エー サムシ<sup>ー</sup> ゴザ<sup>ー</sup>ンサ。

ええさびしゅうござんすわ。

は、因幡南部山地での一例である。県西部にも「ゴザンス」ことばが見いださ

れる。

○コリャー ホンニ タズデ ゴザンスデ。

これはほんとにくずでござんすから。

（しいたけについての謙遜）

は、県西部の南寄りでの一例である。

山陽の広島県下は、山口県下ほどには「ゴザンス」ことばを見せないようである。「ガンス」のさかんにおこなわれているのが目だたく、「ゴザンス」ことばは、かなり劣勢のもののように思われる。それにしても、県下の内海島嶼部などでは、老年者たちからしばしば「ゴザンス」ことばを聞くことができもする。やや心を用いれば、本土部の人たちも、「ゴザンス」をつかいうるというのである。広島市近郊などでは、「ゴザンス」ではない「ゴダンス」が、「ガンス」につれそうものとして存立していたりするが、これは、「ゴダンス」が「ゴザンス」の訛形であるだけに、もっとものことに思われる。県下備後北部の「ゴザンス」例は、

○トバンイェー カーテ ゴザンシタゲナ。

塗板へ書いてござんしたそうな。

である。岡田統夫氏は、その郷里の三原市のことばとして、

○オイシュー ゴザン デ。

“おいしいんですよ。”

をとりたてていられる。この「ゴザン」は、「ゴザンス」の「ス」略と見られるものであろうか。「ゴザス」が「ゴザン」と言われもしたろうか。一方では、「ヤンス」の「ス」略が見られる。「私が行きます。」の意の「ウチガ イキャン。」など。これに合わせて考えれば、「ゴザンス」からの「ゴザン」が受けとられやすい。

岡山県下では、広島県下でよりも、「ゴザンス」ことばがなお劣勢ではないか。備中北部の一例は、

○ワリー アンバーデ ゴザンス。

わるいあんばいでござんす。

である。

○センセワ ナンボデ ゴザンス カ。

先生はいくつでござんすか。

は、内海島嶼、真鍋島での一例である。

一時代前ならば、内海島嶼部で、諸県下にわたり、「ゴザンス」が多く聞かれたであろう。

四国地方は、「ゴザンス」ことばのおこなわれることが、総体としては、わりあいすくないか。

愛媛県下では、「ゴザンス」ことばが見られはするものの、おこなわれかたがわりあいすくないありさまである。もっとも、すこしくていねいなもの言いをするというだんになると、「ゴザンス」ことばをつかいうる老年者たちは、なおかなり多かるう。南子の「ゴザンス」例では、つぎのような言いかたが、老人層で聞かれる。

○アリガト ゴザンシター。

ありがとうございます。

○ゴザンヘン ノヨ。

ござんせんのよ。

高知県下でも、「ゴザンス」ことばのおこなわれることがすくないか。それにしても、やはり老年者たちからは、

○ヒトツ[tu] ヤッターラ ヨ ゴザンスケンド。

(酒を) 一ぱいお飲みになったらようござんすが。(老男、藤原に酒をすすめる。)

などと、「ゴザンス」の言いかたがいくら聞かれる。

徳島県下も、老年層が「ゴザンス」ことばを見せる程度であろうか。南部山地の一例は、

○ソノ クワンケイデ ゴザンショー ゴイ。

その関係でござんしょうよ。

である。西北部山地，祖谷の一例は，

○ハナシアイテワ ゴザンセン ワノー。

話し相手はござんせんわね。

である。

ところで，香川県下では，四国四県中とりわけよく，「ゴザンス」ことばがおこなわれていよう。県東部の一例は，

○オマイリガ オー ゴザンスシ ナー。

お参りが多うござんすしねえ。（老男→中男）

である。——もっとも，この地方でも，年寄りが「ゴザンス」を言う，と人は言っている。県中部の一・二例は，

○アリガト ゴザンシタ。

ありがとうござんした。（老女→初老女）

○オンマイデ ゴザンス。

おしまいでござんす。（夕食前のうすぐらいころの訪問でのあいさつ）

である。

近畿地方については，まず，つぎのように言える。総体には「ゴザンス」ことばが目だたない，と。

兵庫県下について言えば，まず，淡路島で「ゴザンス」がありはするものの，さほど目だっていない。播磨でも「ゴザンス」が目だたない。（播磨西北奥では，因幡との関係もあってか，「ゴザンス」が見られる。）但馬地方には，「ゴザンス」ことばがそうとうに見られるのか。

京都府下，丹後地方に，「ゴザンス」ことばがかなり聞かれるか。老女が，

○オハヨ ゴザンス。

お早うござんす。

などと言っている。他の京都府下については、今、言うべきことがさほどにはない。

大阪府下に関しては、今、「ゴザンス」ことばについて言うべきものを、私はほとんど持たない。

和歌山県下についてもまた、およそ同様なことが言える。

奈良県下についても、私は今、言うべきことがない。

三重県下では、「ゴザンス」ことばが、上の二県でよりもややよくおこなわれていようか。大田栄太郎氏の『三重県方言』（自家版 昭和5年4月）には、「来い」の意の「ゴザンシ」が見える。伊勢南部内のことばらしい。

滋賀県下については、今までのところ、私は、「ゴザンス」ことばをほとんど見得ていない。——北部に「ゴダンス」などと言う所もあるか。

中部地方は、近畿にくらべて、「ゴザンス」ことばのおこなわれることが、いちだんといちじるしいようである。——総体には、「ゴザンス」ことばがよくおこなわれている、とも言うことができようか。

福井県下の若狭・越前に、「ゴザンス」ことばがさかんである。若狭中部の「ゴザンス」例は、

○ハヨ ゴザンス ノー。

お早うござんすね。

○コッチャイ ゴザンシェ ノ。

こっちへござんせね。

などである。越前福井の一例は、

○ジョルサン アリガト ゴザンシタ。

おくさん、ありがとうござんした。 （中男→中女）

である。福井県下で、「ゴザンス」は、純朴さをにじませたことばとされている。

越前で、「ゴゼンス」形が聞かれる。注目すべきものである。

石川県下にも、「ゴゼ(ジェ)ンス」ことばがある。

○ナンデ ゴゼンス エ[e]ー。

あれでござんすわ。 (初老女)

は、能登輪島の一例である。

○オレ ヒトリデ ゴゼンス。

わたしひとりでござんす。 (老女→青男)

は、能登東北端部の一例である。(上二例、愛宕八郎康隆氏教示) 本県下に、「ゴザンス」の言いかたもよくおこなわれている。

○サー シェンシエ。ナンデ ゴザンス ウェーネー。

さあ、先生。あれでござんすわねえ。 (老女→藤原)

は、能登西岸の一例である。本県下に「ゴジンス」もある。

富山県下にも、「ゴザンス」ことばがよくおこなわれている。中部の一例は、

○ゴツツォハンデ ゴザンシタ。

ごちそうさんでござんした。

である。

新潟県下にも、「ゴザンス」ことばがかなりおこなわれているか。ところで、越後北部内には、「ゴゼンス」の言いかたが、かなりおこなわれているらしい。

矢田求氏『佐渡方言集』(佐渡新聞社出版部 明治42年3月)には、「ゴジンス」の略として、「じんす」があげられている。

反転して、岐阜県下を見る。「ゴザンス」ことばがそうとうにおこなわれているらしい。

○ズイブ アツ ゴザンス ナー。

ずいぶん暑うござんすねえ。

は、美濃北部の、老女の発言例である。

愛知県下にも、「ゴザンス」ことばがそうとうにおこなわれている。

○ミナ オナジ モンデ ゴザンス デ。

みんなおなじものでござんすから。

は、渥美半島での、老男の発言例である。

静岡県下でもまた、「ゴザンス」ことばがかなりよく用いられているか。

○ゴチソーサマデ ゴザンス。

ありがとうございます。（礼品への謝辞）

は、御前崎方面での一例である。

柳田国男先生の『毎日の言葉』の「あいさつの言葉」の条には、

オンマイデゴゼンスカ 静岡県一部

というのが出ている。

長野県下にも、南北に「ゴザンス」があるか。

○オショッサマデ ゴザンス。

ありがとうございます。

は、西北部内の一例である。

山梨県下も、「ゴザンス」ことばをかなり見せていよう。山田正紀氏の『山梨県方言の諸相——資料篇——』（山梨言語地理学会 昭和9年3月）には、

標準的な「ごさいます」はあまり行はれず郡内では「ござんす」「ごだんす」、国内では「ごいす」といふ形が一般に行はれる。

との記事が見える。

関東地方にも、「ゴザンス」ことばが、かなりよくおこなわれているか。ところで、その全般的ないきおいは、ことによると、中部地方でのそれよりもややわいかもしれない。——ややきびしい概括のしかたかもしれないが。

神奈川県下に「ゴザンス」ことばがあり、東京都下にもある。「東京方言」について、吉田澄夫氏は、

ヨーゴザンスの如き言葉は屢屢ヨーゴゼンスの如くに発音されたのであるが、これなどもイーデスといふ言葉に置き換へられつつある。

と述べていられる。（『国文学 解釈と鑑賞』第四卷第七号 昭和14年7月）

千葉県下に、「ゴザンス」ことばはかなり見いださうのか。

○ソ<sup>ー</sup>デ ゴザ<sup>ンス</sup> ョ<sup>ー</sup>。

そうでござんすよ。（あいづちをうつことば）

は、房総半島南部の一例である。

埼玉県下でも、「ゴザンス」ことばがよく聞かれる。

○オシツ<sup>カナ</sup> オシガ<sup>ンデ</sup> オメデ<sup>ト</sup>ー ゴザ<sup>ンス</sup>。

お静かなお彼岸でおめでとうござんす。

は、県東辺での一例である。

群馬県下の「ゴザンス」例は、

○オメデ<sup>ト</sup>ー ゴザ<sup>ンス</sup>。

おめでとうござんす。

などである。ただし、人は、上例について、「ゴザ<sup>ンス</sup>」は昔の人が言った、今の人は「ゴザ<sup>イマス</sup>」と言う、と語った。「キョ<sup>ー</sup>ワ シズカ<sup>デ</sup> イ<sup>ー</sup> アンバイ<sup>デ</sup> ゴザ<sup>ンス</sup> ネ<sup>ー</sup>。」（きょうは静かで、いいあんばいでござんすね。）というのも、昔の老女のあいさつことばであるという。

栃木県・茨城県下に、「ゴザンス」ことばが、ほぼ同様に、かなりよくおこなわれている。

東北地方となって、総体には、「ゴザンス」ことばがよわい。

福島県下には、その東西に、「ゴザンス」ことばがいくらか聞かれるようである。

○セン<sup>セ</sup>。オバ<sup>ンデ</sup> ゴザ<sup>ンス</sup> [ü]。

先生。こんばんは。

は、西北内の一例である。

山形県下に関しては、今、私には、言いうるものがない。（——昔話の語り口には、「アリガドサンシタ」などというのものもあるらしい。）

宮城県下でも、「ゴザンス」はふるわないもようである。

秋田県下もまた同様である。ただし、県東南部内では、私は、「オザンス」

を聞いている。

○タンビ[i]ンゴト アリ[i]ンガド オザンス[ü]。

“いつもおせわになります。”(中へは行って上がってからのあいさつ)

東北地方内でとくに注目されるのは、岩手県下である。ここには、「ゴザンス」ことばのおこなわれることがいちじるしい。「旧南部領」域にさかんなのか。

○ヤーヤー 下ーモ。アリ[i]ンガド ゴザンシ[i]タ ハー。ス[ü]ンズ  
カ=[i]。

やあやあどうも。ありがとうございますわ。お静かに。(およそ五十歳の女性→より若い女性)

は、盛岡市方面での一例である。

○コンチニ=[i] キ[kçi]モノ メサッター アツツ ゴザンス[ü] エー。

こんなに着物をお召しになったら暑うござんしょう？

○チゴザンス[ü]ヘデ、…………。

ありませんから、…………。

は、県北の二例である。後者例の「ナゴザンス」の言いかたでは、

fソースモ<sup>1)</sup> カワイーモ ナゴゼンスケ  
はずかしいも<sup>2)</sup> かわいいも ないようですね。

1) [sc:sümo]

2) 「恥ずかしいことなんかないようですね」の意。

の例(『全国方言資料』第1巻「岩手県宮古市高浜」)とも見あわすのに、「ゴザンス」ことばが補助的な地位に立っているようでもある。県中部東寄りで聞いた例には、

○ソーリャー ナーゴザンス[ü]ー。

それはござんせん。

○イ[i]ー シ[i]チモノニ=[i]ワ, ヒョントナドワ イ[i]ワチゴザンス

[ü]。

いい品物には、「ヒョンタナ」とは言いません。（中女→藤原）  
 というのもある。「イワナゴザンス」などとあるのを見ていると、「言わない  
 のでゴザンス」のような気もちの言いかたが、こうつづまったようにも思われ  
 る。

上の「宮古市高浜」の「ゴゼンス」は、一つの変形として注目される。こ  
 の方面には、「ゴゼンス」ことばがかなりおこなわれていたらしい。「ゴゼー  
 ンス」「クゼーンス」ともある。「ゴゼンス」ことばは、なお、他地域にも認  
 められるか。

岩手県「旧南部領」のつづきで、青森県「旧南部領」にも「ゴザンス」こと  
 ばが見いだされる。

○聞いて みても よう ゴザンス[ü]ッドモ（ゴザンスけれども）、……。  
 は、その一例である。

北海道地方については、今、言うべきものを持たない。

「ゴザンス」の言いかたは、いわば「ゴザイマス」の言いかたに近く、した  
 がって「ゴザンス」ことばは、共通語法的要素を持つものとも見られる。この  
 ためでもあろうか。「ゴザンス」ことばは、全国に、よく流布している。

もっとも、地域別に見ると、九州・中国以下の各地域で、その内部に分布の  
 むらが大きく、「ゴザンス」ことばのおこなわれることは、今日、かならずし  
 も共通的、ないし共通語的ではない。略形「ゴザンス」にふさわしく、その使  
 用にはやはり、それそとうの方言習慣がおこっているのであろう。

東北地方に「ゴザンス」ことばの微弱な地域が広いのを見ると、「ゴザンス」  
 の表現法は、基本的にはおよそ関西的なものかとも思われてくる。がしかし、  
 中部地方にもこれが多く、関東地方にもかなりよくこれが見いだされるのから  
 すれば、やはり、これを、東西によく流布し得たものと見るべきかと考えられ

る。(——ものそのものが直接に伝播したのでなくて、「ゴザンス」略形使用の心意が、しぜんに感染・伝播したのもよい。)東北地方にあっても、特別にはあるけれども、岩手県地方に「ゴザンス」ことばがいちじるしい。これは、国の西南方の九州(つづいては中国地方にも)に「ゴザンス」「ゴザル」に「<sup>キ</sup>申ス」のついたもの)のさかんであるのとの対応を思わせ、したがって、私もは、このものの東西分布を考えたい。

そうではあっても、現在の「ゴザンス」ことばのおこなわれようが、主として老年層の世界においてであるのからすれば、これの将来は、漸次、沈滞の道をたどるらしいことが察せられる。若年層の人たちは、「ゴザンス」をつかわないばかりか、しだいに「ゴザンス」を忘れてもいくことであろう。ということとは、「ゴザンス」ことばの退亡を意味する。

現在、地方的には優良な共通分子ともされる「ゴザンス」丁寧表現法も、これを、将来をみざしての標準語法とすることは、不適切だろうと考えられる。

## 二 ゴアンス ゴワンス など

「ゴザンス」にすぐつづくものは、「ゴアンス」「ゴワンス」である。(「ゴワンス」は、「ゴアンス」からすぐにできたであろう。)

「ゴア(ワ)ンス」ことばの存立と活動とは、さきの「ゴザンス」ことばのそれに類似するところがある。九州と東北とがまた注目される所である。

九州南部の鹿児島県地方では、「ゴザンス」ことばとともに、「ゴアンス」ことばがよくおこなわれている。(これらは、「ゴザル」に「<sup>キ</sup>申ス」のついたものであるが。)薩摩・大隅の全般に、「ゴアンス」ことばがさかんであろう。島嶼部にも「ゴアンス」ことばがさかんである。薩摩半島、枕崎での一例は、

○コラ アダイガ ゴアンサー。

これは私のですよ。(「ゴアンサー」は「ゴアンス ワ」である。)である。大隅半島東岸、内之浦の一例は、

○キョア モー スキ ゴアンサ オー。

きょうはもうあたたかいですよ。

である。薩隅に、「ゴアンサ」「ゴアンソ」の言いかたはいちじるしい。

○コンター オハンガ シヤッタト ゴアンソ。

これはあなたがなされたんでござんしょ？

は、薩摩伊集院の「ゴアンソ」例である。

薩摩地方には、「ゴワンス」の言いかたもある。（大隅地方にもあるのではないか。）薩摩北部での一例は、

○ソゲン ゴワンサー。

そうでござんすわ。

である。

宮崎県下南方には、「ゴアンス」がおこなわれている。「ゴワンス」もある。なお、「宮崎県東臼杵郡南方村」（『全国方言資料』第6巻）にも、

fアリガトー ゴワンシタ

ありがとう ございました。

のような例が見える。

熊本県南部にも、「ゴアンス」がおこなわれている。

以上のほかでは、九州地方に、「ゴア(ワ)ンス」ことばがあまり見いだされない。長崎県下の東寄りの地域には、なにほどこかの「ゴアンス」ことばがおこなわれているか。「長崎県南高来郡有家町」（『全国方言資料』第6巻）には、

fへ アータ オーキニ アーター ナーンモ ゴアンヘンデ ガヒ

ええあなた ありがとう あなた、なんにも ありませんで ございます。

との言いかたが見える。

○ソノ ショモツガ ゴアンス ター。

その書物がでござんすよ。（——じいやがきせる掃除につかったんですよ。）

は、長崎市東方の古賀村の例である。

中国地方では、山口県下に「ゴアンス」「ゴワンス」のおこなわれることが目だたしい。——さきには、「ゴザンス」ことばが、本県下に多くつよくおこなわれているのを見た。本県下で「ゴアンス」は、長門・周防にわたって見わたされる。周防東部の一例は、

○オバーサンガ オデンカイガ デキマセンゲナ。コマッタ コトデ ゴア  
ンス。

おばあさんをご全快ができませんでしたようで。こまったことござ  
んすね。

である。(神部宏泰氏調査)

「ゴワンス」も、本県下の東西に見られ、周防には比較的そのいちじるしい  
ものがあり、周防島嶼でも、

○ヤナーデ ゴワンス。

柳井でござんす。

などと言っている。(国安功氏調査)

広島県下は、後述するように、「ガンス」のさかんな所である。その「ガ  
ンス」流布の中に、いくらか、「ゴアンス」あるいは「ゴワンス」が、ごくし  
ぜんな混在のしかたをしているようである。

○ミチュー シタコトガ ゴワンスダドモ コーバイガ キューニ ゴワ  
ンスケー ー。

“道をつけた事がございますが、勾配が急ですからねえ。”

は、備後北辺の一「ゴワンス」例である。(岡田統夫氏調査)

島根県下では、隠岐地方に「ゴアンス」「ゴワンス」が認められる。(神部  
宏泰氏の調査がある。)

石黒武顕氏の『鳥取方言分布の実態』(自家版 昭和32年2月)には、「ご  
あんす」というのも見えている。

岡山県下については、今、私は、県北、作州西部内の、

○ヨー キヤリマシタ ゴアンス。

よくいらっしゃいました。

などをあげうるばかりである。

中国地方も山口県下・隠岐地方を除けば、「ゴアンス」や「ゴワンス」は、  
さしておこなわれていない状況である。

四国地方にも、「ゴアンス」ことばはまれである。

今、私が指摘しうるのは、下記の二・三の事項である。愛媛県南部内に、

○ソーデ ゴアンス ナー。

そうでござんすなあ。

などの言いかたがある。徳島県下に、「ゴアンス」の言いかたがいくらかある  
か。香川県下に「ゴワンス」があるかもしれない。

近畿地方では、注目すべきいくらかの分布が見いだされる。

和歌山県下に、「ゴアンス」「ゴワンス」がある。

○オハヨー ゴアンス。

お早うござんす。

は、南海岸、串本の「ゴアンス」例である。田辺市地方では、「ゴワンス」と  
ともに「ゴヤンス」の言いかたがおこなわれている。「ゴヤンス」は、「ゴア  
ンス」からできやすかったろう。田辺方言関係の諸文献は、よく「ゴヤンス」  
ことばをとりあげており、「ゴヤンヒタカ」（ございましたか）その他の形も示  
している。

三重県下に「ゴアンス」があるのか。『三重県方言』に、

ソゴアンタ 左様でありました 全（三重）

と見える。

中部地方に、今、言うべきことはすくない。その中にあって一つ、越前の「ゴエンス」が注目される。——これは、さきに「ゴザンス」ことばで、越前に「ゴゼンス」の認められたのに即応する事実であろう。[a]>[e]の転訛の、根づよいものが認められるようである。越前では、主として東部の大野郡下に、「ゴエンス」ことばが見いだされるのか。天野俊也氏の教示された例は、

○ソーデ ゴエンス。

そうでございます。

である。この「ゴエンス」の「エ」は、[je]の発音だという。

石川県下の能登に、「ゴアンス」が見いだされる。「ゴワンス」もある。

○ゴクロサンデ ゴワンス。

“ごくろうさまでございます。”

は、能登半島東北端部の「ゴワンス」例である。（愛宕八郎康隆氏調査）

中部地方に、「ゴザンス」ことばはそうとうにおこなわれているのが見られるが、「ゴアンス」類の言いかたはふるわない。

「静岡県掛川市上西之谷」（『全国方言資料』第3巻）には、

*m*ドーモ ゴヤッカイデ ゴヤンシタ

どうも おじゃま いたしました。

とあって、「ゴヤンス」の言いかたが見える。

関東地方でもまた、「ゴザンス」ことばのおこなわれかたにくらべれば、「ゴアシス」などの言いかたは、はるかに弱勢のものとされる。東京都下・千葉県下・埼玉県下・栃木県下に、「ゴアンス」の点在が認められる。「千葉県安房郡富崎村布良」（『全国方言資料』第2巻）に、

*m*エー アリガトー オアンスヨ

というのが見える。「オアンス」は、「ゴアンス」に該当するものか。

東北地方でもまた、「ゴアンス」「ゴワンス」が弱勢である。福島県下につい

では、今、言うべきものがない。

『山形県方言集』に、

ごあんすね goansune 連続語 ございませぬ 庄内  
何もごあんすね。（何もございませぬ。）

との記事が見える。大槻文彦博士担任の国語調査委員会『口語法別記』（大日本図書株式会社 大正6年4月）の中にも、羽前西村山郡の「でごあんす」が指摘されている。

『秋田方言』には、由利郡の「ゴアンス」が指摘されている。

そでごあんす（連）〔由〕さうでございます。

「あれがそでごあんす。」

などとある。

岩手県下「旧南部領」で、「ゴアンス」ことばが、さきの「ゴザンス」ことばとともに注目される。小松代融一氏の『岩手方言の語彙』には、「ゴアンス」「グワンス」の形も見える。宮良当壮氏も、「日本語に於けるクワ〔kwa〕行音群に就いて」（『言語研究』第十・十一号 昭和17年11月）の中で、

nani hosi gwansi（何が欲しいのですか）〔遠野〕

の例をあげていられる。

岩手県下につづいて、青森県東部の「旧南部領」がまた「ゴアンス」を見せる。

○オバン<sup>ー</sup>デ ゴア<sup>ン</sup>ス〔ü〕。

○ソー<sup>ン</sup>デ ゴア<sup>ン</sup>セン。

そうではござんせん。

などと言っている。（「ゴアンス」とともに「ゴアス」がおこなわれている。）

東北地方内も、「旧南部領」は別で、「ゴアンス」ことばの注目すべきものがある。

北海道地方については、今、言うべきことがない。

全国状況をかえりみるのに、「ゴア(ワ)ンス」ことばは、「ゴザンス」ことばよりも、おこなわれることがそうとうにすくない。転訛の、ややはなはだしいものともなれば、こういう結果になるのか。「ゴア(ワ)ンス」ことばの語感もまた、おのずから、「ゴザンス」ことばのそれからは、格差のあるものになっている。

九州南部にさかんな「ゴア(ワ)ンス」ことば（ついでは山口県下のそれ）と見あわせて注目されるのは、やはり、東北、岩手県・青森県東部の「ゴアンス」ことばである。九州や中国での問題事象の色濃さは、国の西辺地方のそれとして、もっとも分布に思われるが、東北の叙上の分布は、どう解すればよいものであろうか。岩手県下などにとくに、このものが自生したとも考えにくい。——やはり、伝播・流布の結果・所産がこのさまを呈しているのではなからうか。もともと事象は「ゴザル」本位のことばである。「ゴザル」や「ゴザリマス」の、国の中央での勢力のつよさは言うまでもない。そのものは、しぜんに東西に波及したことであろう。「ゴザンス」のばあいも「ゴア(ワ)ンス」のばあいも、中部地方の北陸地方に、ものが相応に見られるのが重視される。伝播の一重要経路がここにあろう。

「ゴア(ワ)ンス」ことばのばあい、「ゴヤンス」形が、和歌山県下・静岡県下に見られた。自然派生的なものであろう。それゆえ、偶然的にそちこちの地点に、これが見られるわけであろう。二地のほかにも、こういう偶生物があるかもしれない。方言上では、さまざまな訛形が、そこそこに、あたかも人しれず咲く花のように自生しているか。

「ゴア(ワ)ンス」ことばの将来については、もはや多く言う必要がなからう。これは、栄えようもないもののように思われる。

「ゴア(ワ)ンス」ことばが、標準語法制定のさいの話題項目となるようなことはないであろう。

## 三 ガンス ガン

「ゴアンス」は、「ガンス」になりやすかったろう。ときには、「ゴザンス」からすぐに（と言ってもよいほどかたんに）、「ガンス」ができたかもしれない。「ゴアンス」の転、「グアンス」からも、「ガンス」ができやすかったことであろう。

「ガンス」ことばの品位は、「ゴザンス」ことばのそれにくらべれば、かくだんに低位のものとなっている。「ゴザイマス」ことばも「ガンス」形となって、ここに、もっとも日常的な、いわばふだん着の、気がるな丁寧表現法となった。——「ガンス」以降の簡略形がすべて、「ゴザンス」からはいちだんへだたったものになっていることは、多く言うまでもない。

「ガンス」ことばは、「ある」ことを言うていねいことばになっている。「行く」や「来る」ことを言うものとはなっていない。

以下に、「ガンス」ことば、すなわち「ガンス」表現法の生態を、全国に見る。

九州での「ガンス」ことばは、やや特殊な存立のしかたを見せている。

鹿児島県下にはこれがなくて、つぎに、宮崎県下で、その中部域あたりに「ガンス」が見られる。

○ア<sup>↑</sup>シタン ヒヨリヤ ドヂ ガンソ カナ。

あしたの日和はどうでござんしょうかな？

は、児湯郡下の例である。『全国方言資料』第6巻の「宮崎県東臼杵郡南方村」の条には、

fオコデンオ クンナドッカイ マー オッキン アリガト グランスガ  
お香奠を くださいますか まあ たいそう ありがとう ございます  
マー  
が、まあ。

とある。ここに見られる「グンス」は、さきの「ゴアンス」系の「グア(ワ)ンス」に近いものか。それとも、「ガンス」に近いものか。

つぎに、長崎県下で「ガンス」が見られる。県東部にこれがあり、「ガンショー」は、「ガンヒョー」「ガンヒョ」と言っている。『嶋原半嶋方言の研究』から「ガンヒョ」例をひくならば、

○ふれ いらしてかる ねらしちや どがんで がんひよかい。

“お風呂を、おめしになりましてから、およつては、如何です。”

などがある。山本靖民氏の『島原半島方言集』（湯江中学校 昭和28年5月）には、

ガンシン ありません （千々石町）

というのが見えている。

つぎには、福岡県内の筑後で、「ガンス」ことばを見いだすことができる。梅林新市氏『複製本<sup>福岡県内</sup>方言集』（福岡土俗玩具研究会 昭和9年2月）には、

がーんす（ゴザリマス）

（井）＜三井郡＞（瀧）＜三瀧郡＞（八女郡北部）

同輩以下ニ対シテイフ詞ナリ

との記事が見える。当地方では、「がーんす」の長呼の言いかたが、一つの熟したものになっているのか。浮羽古文化財保存会『浮羽方言』（『宇枳波』第三号 昭和32年4月）には、

がーんす（がんす） ござんす、ございます。

がんす（がーんす） でございます。

とある。

九州については、今のところ、上の三県下について、私は「ガンス」ことばを指摘しうるばかりである。存立のこの偏頗は、何を意味するのか。あるいは他地域にも、なお「ガンス」の言いかたが存立しているのでもあろうか。

中国地方では、山口県下の若干の分布と、広島県下の大分布とが注目される。

山口県下では、おもに周防域に、「ガンス」ことばがおこなわれている。ここでは、本土部・島嶼部ともに「ガンス」がさかんである。

ところで、私は、長門北部の青海島でも、

○イマ ナンデ ガンスィ ノー。

今、あれですよ。（老男→藤原）

などの言いかたを聞いている。長門本土内にも、どのようにか、「ガンス」ことばが存在するのかもしれない。

広島県下は、まず、周防に隣る安芸一円に、「ガンス」ことばがさかんである。

○エー テンキデ ガンス ノー。

いい天気でごぜんすな。

○オハヨ ガンシタ。

お早うござんす。

（「ガンシタ」が「ガシタ」とも聞こえるくらいに、「ン」をよわめて言うことも多い。それは、「ガンシタ」と表記しうるものでもある。）

○セラー ガンセ(へ)ン。

かまいはしません。

（「ガンヘン」「ガンビョー」などと発言することが、かなり多い。）

などの調子の言いかたが通用されている。人々も、古来、「ガンス」ことばの通用をよく自認しており、安芸地方に、製作者不明のつぎのような語りことばも産みだされている。

可部のがんせん坊にこのごろ説教ががんすんでがんしょうか。がんすんならがんすと、がんせんのならがんせんと知らせががんすんでがんしょう。（「可部の」ではじまるのもあれば、「坂の」ではじまるのもあり、そのような地名は言わないのもある。とりどりである。語りことばの本文に異動を見せたものが、そちこちに聞かれる。ものは要するに、「ガンス」ことばの過度とも言える頻用を指摘している。）

「ガンス」の用法に、

○カワン<sup>デ</sup>モ <sup>エ</sup> ガンスジャ ナイ カ。

“買わなくてもいいではないですか。” (中女→青男)

といったようなものもあるという。(瀬戸口俊治氏による。安芸東部内のことである。)——後述の、岩手県下の表現法と比較されたい。

安芸の老年層の人たちの中には、「ガンス」に似た「ゴンス」をつかう人もある。こうした「ゴンス」は、「ゴイス」系のものなどではなくて、「ガンス」関係のものかとも思われる。「ゴアンス」を「ガンス」と言いかえたように、「ゴアンス」を「ゴンス」と言いかえたのかもしれないと思われる。ときには、「ガ」を「ゴ」に転じて、「ガンス」を「ゴンス」にした人もありはしなかったか。——なにさま方言の世界(口ことばの世界)でのことである。人は自在に、さまざまの言いかたをする。それゆえ、私どもは、転訛の経路もさまざまに推測しておかなくてはならない。

安芸地方の注視すべき転訛形に「ガン」がある。

○ナン<sup>デ</sup> ガン ヨ<sup>ノ</sup>。

あれですよねえ。

○ヨ<sup>ー</sup> ガン ヨ。

ええ、いいですよ。(応諾)

○トキ<sup>ニ</sup>ャー <sup>エ</sup> ガン。

“時にはいいではないですか。”

(「ヨ <sup>ガン</sup>」とも言い、かつ、このように「エ <sup>ガン</sup>」とも言う。上の「エ <sup>ガンス</sup>」にくらべていただきたい。)

○<sup>ダ</sup>サー<sup>デ</sup>モ ヨ <sup>ガン</sup>。

○<sup>ダ</sup>サー<sup>デ</sup>モ <sup>エ</sup> <sup>ガン</sup>。

出さなくてもいいわよ。(老女)

○アリ<sup>ャ</sup>ー ミ<sup>ミ</sup>ガ ト<sup>ユ</sup>ー <sup>ガン</sup>ケー。

あの人は耳が遠うござんすから。

などのように言っている。「ガンス」には、多少とも、あらたまった気分があるとも言えようか。それが「ガン」ともなると、そのような気分は失せて、むしろそこに、なにほどこかの卑俗味が生じる。ぞんざいとも言いうる、なんのかがざり気もない、ごく卑近なことばづかいにあてられるのが「ガン」であるとも言えよう。初老以上の男性などの、もっとも日常的な卑近な用語の一つとして、「ガン」は存立しているようか。女性もこれを言わないことはないけれども、若い者のことばではない。なお、「ガン」の言いかたは、広島市周辺などでは、「ヨ」「ヨノー」といった文末詞にむすばれることが多い。こうした構文に応じて、発言の様態あるいは速度にも一定の特色ができており、やや緩慢な調子のもの言いが、ここに聞かれることにもなっている。

「ガン」は、「ガンス」からきたものか。そう思わせるような語感が、「ガン」にはある。ところで、「ガス」>「ガン」の転訛も考えられる。人は、「行きますよ。」という意味で、「行きマン<sup>ノ</sup>デ。」などと言うことも多い。「マス」を「マン」と言ってもいる。これとおなじように、「ガス」を「ガン」ともしたか。ただし、ここで問題なのは、安芸地方内に、「ガス」の言いかたがほとんどおこなわれていないことである。皆無ではないけれども、その存在がわずかなので、今、にわかには「ガス」>「ガン」を決定考とはしがたい。そうではあるのだけれども、「あった『ガス』が、『ガン』化とともにほろんだのだ。」と考えることもできなくはないので、今、あながちに「ガン」の「ガス」起源を否定しすることもできないように思われる。

安芸地方の「ガンス」ことばを、今日、大観するのに、これは、しだいに老年層のものとなりつつある。かつては広島市北部でなど、子どもたちも「ガン」の言いかたをしたそうであるが、今は、「ガン」はおろか「ガンス」も、もはや全般に、子どもたちのことばではなくなっている。青年たちは、ときにおどけぎみで「ガンス」ことばをつかったりしてもいる。共通語になれた人たちは、しだいに「ガンス」ことばを見ずてしまうであろう。——老年者たちが、したい間がらでなど、「ガンス」や「ガン」をつかいたれているのを見うるの

も、ここ十年以内ぐらいのことか。

広島県下の備後地方にも、「ガンス」ことばがなくはない。ことに備後北部には、これが比較的よく見いだされる。

○ムカシノ イェデ ガンス ノー。

昔の家でござんすねえ。

などと言っている。

備後南部の三原市などでは、「ガン」も聞かれる。岡田統夫氏にもその指摘がある。

しかし、備後地方にあっても、「ガンス」や「ガン」は、いよいよ見いだしにくいものとなっていくことであろう。

山口・広島二県の、以上の状況をほかにしては、中国地方で、あと、島根県出雲に、わずかの「ガンス」が見いだされる。『全国方言資料』第5巻の「島根県大原郡大東町春殖畑鶯」の条に、

*m*キノドクナコトデ ガンシタネー

気の毒なことで ございましたね。

というのが見える。かつて神部宏泰氏は、出雲、平田市小酒井のことばとして、

○サヨナラ。ゴツォサンデ ガンシテ。

さようなら。ごちそうさんでございました。

というのを教示せられた。

私は、鳥取県下についても、岡山県下についても、今、「ガンス」ことばの言うべきものを持っていない。中国地方での「ガンス」ことばの存立状況には、特色がある。どちらかといえば、近畿地方につながる地域に、これが見られないありきまである。——近畿地方は、「ガンス」ことばのほとんどおこなわれない地域である。

四国も、いったいには、「ガンス」ことばの風土と云いうる状況ではない。

愛媛県下では、伊予南部内に、「ガンス」が見いだされる。

高知県下では、西南の幡多郡下に「ガンス」があるらしく、中部海辺でも、私は、「ガス」に近い「ガンス」を聞いたが、県下一般では、「ガンス」ことばは、今日、ほとんど言うにたりないもようのようである。

四国四県では、徳島県下にややよく「ガンス」ことばが見いだされるか。

香川県下には、今日もはや、「ガンス」ことばの、問題とすべきものが、ほとんどなきさうである。

さきにもふれたように、近畿地方には、「ガンス」ことばがほとんどおこなわれていない。

中部地方も、「ガンス」ことばのまれな地域である。

ことに西半域には（北陸は新潟県下まで）、これがない。近畿の状況へのつながりのよさが見られる。

東半域の、静岡・長野両県下には、いくらかの「ガンス」ことばが見いだされる。これは、東の関東地方の「ガンス」分布にいくらか関連している。ところで、山梨県下の状況はどうなのであろう。

静岡県下のこととしては、早くから『静岡県方言辞典』が、

ガンス 左様でがंस

ガーンシタ さうでがーんした

ガンハー いやでがんはー

などを指摘している。『静岡県島田方言誌』には、

ソーデガンハー そうでございます そうで御座います

イキガーンシタ いきました 行きました

ソーデガンス そうでございます そうで御座います

ガンサー ございます 左様でガンサー

などの指摘がある。

長野県下の『信州上田附近方言集』には、

ガンス 御座います

というのが見える。

関東地方では、「ガンス」ことばがやや広く見わたされる。(これは、東北地方の状況との、いくらかのつながりのよさを見せている。)

関東域では、千葉県下が、まずは「ガンス」に無縁の所か。

神奈川県・東京都についても、私は、今、これという「ガンス」例をとりたてることができない。

埼玉県下では、ほぼその全域にわたって、そちこちに「ガンス」ことばが見いだされるようである。東辺内では、私自身、「ゴザンス」「ガンス」「ガス」を聞いている。

○エー、ヨー ガンス。

ええ、ようござんす。

などと言っている。(以前には、「ガンス」もかなりよくつかわれていたらしい。) 県下西方の秩父地方に、「ガンス」がかなりよくおこなわれている。

○ソーデ ガンス。

そうでござんす。

などといった調子である。「ガンショー」などとも言っている。

群馬県下がまた、「ガンス」のよく見られる地域である。大橋勝男氏の調査結果などがある。県下の全域にわたって、諸地に「ガンス」が見られる。前橋市の北部の「ガンス」例は、

○アー ヨー ガンス。

ええようござんす。(と、ひきうけてくれる。)

などである。——この地では、老年層に、ことに老男に「ガンス」がよく聞かれる。“昔は、「ガンス」をよく言った。”と語る人もあった。

栃木県下では、主としてその西南域に、群馬県下状況とのつづきがらもよく、「ガンス」ことばが聞かれるか。二・三の、過去の方言文献にも、県西南部の

安蘇郡についての「ガンス」ことばの指摘が見える。

茨城県下は、諸地にかなり「ガンス」ことばを存するの<sup>を</sup>か。水戸弁では、

○キョーワ イー オテンキデ ガンス ナー。

きょうはいいお天気でござんすねえ。

などと言うという。私は、県東北部内で、

○オハヨー ガンス。

お早うござんす。

というのを聞いている。土地の人は、これを、七十歳八十歳の人のことばだと説明してくれた。（「イマノ（今の） シトワー（人は） つかわない。」ともあった。）

関東地方では、西がわの埼玉・群馬の両県下が、とくに注目されるようである。この姿勢は、「ガンス」ことばが、栃木・茨城の二県下はもとよりのこと、関東の大域に、かつてはよくおこなわれたことを示唆するものか。

東北地方では、とくに岩手県下に、「ガンス」ことばがいちじるしいようである。それに関連する状況を、福島県下から見ていく。

福島県下では、会津に「ガンス」ことばが見られる。

○シ[i]タ ガンス[ü] ヱー。

ほんとうにまったくそのとおりです。

（“同感の意をあらわすばあいつかう。”）

これは、会津西北辺でのその一例である。一般に、「ガンス」は老年者のものらしい。

山形県下でも、とくに庄内地方に「ガンス」ことばが聞かれる。——かなりよくおこなわれているようである。

○チョットデモ イチデ ガンス[ü] ネー。

ちょっとでも（ちょっと上がって話しても）いいじゃないですか。

○オハヨ ガンス[ü]。

は、酒田市で聞きとめたものである。庄内で別して私の記憶に明らかなのは、「ガンス<sup>↑</sup>ネー」ということばづかいである。「ガンス<sup>↑</sup>ネ」などとも言っている。いずれも「ござんせん」の意のものである。(はじめてこれを聞きとめた時は、ずいぶん、奇異に感じた。)山形県下も、とりわけて、庄内地方に「ガンス」が聞かれるのは、どうしてのことであろうか。

秋田県西南部に、庄内とのつづきで「ガンス」が聞かれる。

○サカナ イガンス<sup>↑</sup>カー。

魚はようござんすか？

など。本県下の北部域内に、「ガンス」が比較的よく見いだされるらしい。

○オバンデ ガンス[ü]。

○マイド アリガト ガンスー。

毎度ありがとうございます。(女性のことは)

は、花輪市内のことばである。県東北部内の「ガンス」状況は、どのようにか、岩手県下の「ガンス」状況につながるものなのか。

岩手県下は、その南北にわたって、諸地に「ガンス」ことばを見せている。

○アリ[i]ガド ガンス[ü]ター。

ありがとうございます。

○ス[ü]ル[ü]=[i] イ(ヨ) ガンス[ü]カ。

することができますか。

は、花巻市での二例である。

○アリ[i]ガド ガンス[ü]。

ありがとうございます。

○オラホノ チ[i]サマ=[i] アワチー ガンシ[i]ス[ü]カ。

私ほうのじいさんにあわなかったでしょうか。

○オラホサ オデテ ク[ü]ナハル[ü]=[i] ヨー ガンシ[i]ンカ。

私のほうへいらしていただきませんか。

は、盛岡市北方の渋民村での三例である。小松代融一氏の『岩手方言の語彙』

の「旧南部領」の部には、

ケドガン（セ） 下さい

との記載が見える。これは「くれとかんせ。」の言いかたをしたものか。それにしてもここに「〜ガン(セ)」の見えるのは注目される。広島県下での、「ガンス」に対する「ガン」の存在が思いあわされもする。伊能嘉矩氏の『遠野方言誌』（郷土研究社 大正15年6月）には、

ガンス ヌガァ ゴザイマス ござんすの転。

との記事が見える。この「ガァ」は、広島県下での「ガンス」相当の「ガン」に比照しうるものか。

青森県下では、岩手県つづきに、県東南部地方に「ガンス」ことばが見いだされる。

○トーフ〔ü〕 ナットー ヨー ガンス〔ü〕 カーイ。

豆腐や納豆はようござんすかあ。

は、八戸市内で聞いた、朝の「物売り声」である。

北海道地方については、今、私の言いうることが、ほとんどない。ただ、松前地方などには、どれほどかの「ガンス」ことばが聞かれるのか。石垣福雄氏は、「北海道は方言試練の場 死滅したことばと生き残ることば」（『放送文化』第22巻第2号 昭和42年2月）で、

松前の老婆は、「オマハン、コナイダノ先生サンデネガンス」のような丁寧な敬語を使う。

と述べていられる。

「ガンス」ことばを全国にわたって見わたすのに、まず、近畿地方にこれがないのが刮目される。「オマス」ことばの隆盛などは、ここに考えあわせてよいことであろうか。近畿が「ガンス」ことばの風土ではないのに類して、中部地方の西半方面も「ガンス」ことばを見せず、四国地方もまた、「ガンス」を

見せることが、だいたいよわい。中国地方にしても、岡山・鳥取両県下などは、「ガンス」ことばを見せることがない。

「ゴザイマス」ことばでの「ガンス」形は、やはり、なんらかの前提条件から、諸地域で、自然発生的に偶生し得たものであったか。九州は、宮崎・長崎・福岡の三県下にこれが見られたが、それは、自然発生的なものではなかったか。中国、出雲地方の「ガンス」も、偶生的のもののように思われる。

関東と東北とに、かなり広い分布域が見られるのと同時に、西は広島県地方に「ガンス」存立の盛大なものが見られるのは、近畿系の地域を除く両辺に、対応する「ガンス」分布が見られるありさまで、見るからに興味が深い。このような状況を拡大解釈すれば、「ガンス」ことばも、いつのころにかは、かなり全国的におこなわれたものかとも思われる。

しかし、今日、これが、退勢の分布状況を示していることは、明らかである。「ガンス」ことばは、画然と老年層者のものとなっている。もちろん、これが、標準語教育の対象とされることなどは、ありうべくもなからう。

#### 四 ガッス

「ガッス」は「ガンス」に隣るものである。（「ガンス」から「ガッス」がおこることもあったろう。「ガッス」から「ガンス」のできることも考えられる。）

「ガッス」ことばでは、九州と東北とにこれの対存するさまが注目される。——他地方にはない。

九州では、熊本県天草・佐賀県下・福岡県下に「ガッス」ことばが見いだされる。

○ヨー ガッ<sup>↑</sup>ンヨー。

ああそれでいいでしょうよ。

は、福岡県筑後山地の例である。

○アンマリ ガッ<sup>↑</sup>ンエン。

あんまりごんせん。

は、筑前糸島半島内の例である。福岡県下などでは、「ゴザッス」が、「ゴアッス」をへて「ガッス」になったかもしれない。「ガッショー」などは、「ゴアッショー」を思わせやすい。——それにしても、「ガッッ」が見とられる以上は、これを「ガッス」ことばと見ることができる。佐賀県教育会『佐賀県方言辞典』（河内汲古堂 明治35年6月）には、「ガッス」の条に、「ゴザリマス」との注解が見える。

九州の「ガッス」ことばは、およそ老年層のものようである。老男に「ガッス」ことばが見られがちのようでもある。

東北地方では、岩手県下に「ガッス」が認められる。私が、盛岡市南方地のことばとして聞かされたのは、つぎのものである。

○キョーワ ナンダカ モヨーワ イケナ ガッス[ü] ナッス[ü]。

きょうはなんだかお天気もようがわるごんすね。

○ソンナノ イワネ ガッス[ü] ナッス[ü]。

そんなことは言いませんねえ。

山形弁に、「ふんだがつす。」（さうですか。）というような言いかたがある。（『山形県方言集』）ここに「ガッス」ことばが見いだされるか。否である。上記の対訳にも明らかなおり、「ふんだがつす」は「か」表現である。「ガッス」とはあるが、これは、「か」とたずねて、しかも最後に「す」とよびかけたことをあらわすものである。——この「す」は、「もし」の「し」にあたる。（「し」[ʃi]の発音が「す」と表記されている。）それにしても、「ガッス」ことばにややまぎらわしい「がつす」があったものではある。

後述するように、東北地方内に、「ガス」形はかなりさかんでもある。だのに、その前身とも言える「ガッス」は、きわめて劣勢である。このような存否の事情は、にわかには解しがたいものである。——いずれも、存立は、偶然的・自然発生的のものでもあるか。

## 五 ガイスなど

第六節に述べた「ガース」にかかわる「ガイス」も、あり得よう。(「ガイス」から「ガース」のできることもあり得たことかと考えられる。)が、また、「ガンス」関係の「ガイス」もありうることかと考えられる。——「ガッス」から「ガイス」のできることも、あり得ないことではなからう。「ガイス」に関して、いろいろの成立経路が考えられる。

「ガイス」に関しては、まず、中国地方にその点在するのが認められる。山口県周防内にこれがあり、広島県江田島にもこれがある。備後北部にも「ガイス」がある。備後の「ガース」は「ガイス」に近いものか。岡山県下の作州には、「ガェース」があるらしい。(P. 259)

私の知り得ている範囲でのことであるが、つぎには、中部地方の山梨県下に「ガ-イス」がある。——県下西南部内で、私は、

○オハヨ ガ-イス。

お早うござんす。

○オサムー ガ-イス。

おさむうござんす。

などとの言いかたに接した。人は「ガイス」を、“今は言わぬ。昔、年寄りが言ってた。”とも説明してくれた。

東北、岩手県下には、「ゲァース」「ゲァス」「ガース」などがあるという。(『岩手方言の語彙』<旧伊達領>など) これらは、「ガイス」に近いものなのかどうか。

以上、「ガイス」ことばの分布は、偶然的なものとも言えるようである。

## 六 ガス

さきの「ガンス」ことばに対立するいきおいを見せるのは、「ガス」ことばである。

「ガンス」形と「ガス」形とは、関係の深いものであろう。「ガンス」は「ガス」になりやすい。

ところでまた、「ガース」も「ガス」になりやすい。「ガッス」もまた「ガス」になりやすい。いずれも、ほんの一步の変移と見られるものである。

「ゴアス」「ゴワス」からも「ガス」は成立し得よう。「ゴス」も「ガス」になりうることだと思われる。

「ガス」動詞は、「存在」を意味する、まったく単純な丁寧法動詞である。語形がこれほどまでに簡約化されたものになると、これに、もはや「行く」とか「来る」とかの意は宿り得ないのであろう。

さてここに、記述上の一困難がある。すでに「ガンス」などのばあいにもかなり感じられたことであるが、いよいよ「ガス」形ともなると、私もは、これに適切な共通語を対置することが困難である。というよりも、もはや不可能である。以下に、文例のいわゆる対訳を出しても、それは、便宜的な言いかたにしたがっているものである。このことを了としていただきたい。

以下に、「ガス」ことばの分布を見よう。

九州地方には、「ガス」のおこなわれることが、総体にすくない。

鹿児島県下にはこれがない。『全国方言資料』第6巻の「鹿児島県枕崎市鹿籠」の条に、

f マシ イクッ グウシタロカー

まだ、いくつで ございましたでしょうかねえ。

と見えるが、この「グウシタロ」は、「ガシタロ」に近いものではなくて、「ゴアシタロ」に近いものではないか。

宮崎県下にも、「ガス」ことばはなさそうである。やはり「グッス」はあるが、これも、「ゴアス」「グアス」または「グワス」に近いものであろう。——県南部で、「オ暑グワス ナ。」などと言ってもいる。

熊本県下に、なにほどかの「ガス」がある。天草では、「ヨー ガス。ヨーガス。」「有難う ガシタ。」などと、「ガス」ことばがかなりおこなわれている

か。

長崎県下が、九州では「ガス」ことばを比較的好く見せる地域とされようか。島原半島方面は、天草とも関連してか、ことによく「ガス」ことばを見せている。もろもろの方言文献にその指摘がある。終止形「ガス」は、「ガシ」とも「ガヒ」ともなっている。『島原半島方言の研究』には、

おはよがし 「島原町」

(おはよう)

というのがある。『全国方言資料』第6巻の「長崎県南高来郡有家町」の条には、

fアー タッシャ アラヒテ ガヒナー

ああ お達者で ございますねえ。

と見える。県下、西彼杵半島では、私は、つぎのような事例を聞き得ている。

○シナヤカナ バンデ ガシター。

しなやかな晩でござんして。(あいさつことば。風もなく雨も降らず、おだやかな晩であることを言う。)

○ヨー ガス ト。

ようござんすわ。(中女→藤原)

つぎに福岡県内に、いくらかの「ガス」が見いだされる。『浮羽方言』(『宇积波』第三号)には、

がす(がーす) ございます。

との記事が見える。岡野信子氏は、「島郷生活語における形容詞——その構成と表現——」(『研究紀要』第10集)の中に、

○アラケネー、スタクラシー コトバデガス。

荒っぽくて投げやりな言葉ですよ。(老男→岡野氏)

との「ガス」例を見せていられる。

九州では、西辺域ならびに福岡県下が、問題の地域となっている。九州東部は、「ガス」に無縁の地域のようにある。——これは、四国に「ガス」ことばのごくすくないのと見あわすことができる。

中国地方も、全般的には「ガス」ことばがよわい。山口県下には言うべきものがなくて、広島県下の安芸に、やや見るべきものがある。安芸西部では、

○ヨー ガス。

ようござんす。

などと言っている。備後南北にも、「ガス」ことばが聞かれなくはない。

○イマ ボンデスケー フー。ミナ コトガ タヨーニ ガス。

“今、盆ですからねえ。皆、忙しくしています。”

は、岡田統夫氏のとらえられた、備後中部での一例である。山陰、出雲では、いくらかの「ガス」ことばが聞かれる。南部山地例は、

○イ[i]ヅ[ü]モワ、ホーゲンガ オーガス[ü]ケン ナー。

出雲は方言が多いですからねえ。

○ヅ[ü]ーサンデ ガシ[i]タ。

十三歳でござんした。（十三歳で入婚） （老男）

などである。神部宏泰氏は、隠岐、島後の、

○イフヨワ クイモノフ イワイデガス。

亥子は食物の祝いです。

というのを教示せられた。鳥取県下に関しては、室山敏昭氏の教示せられた伯耆例、

○ベンリガ ヨー ガスケド ナー。

便利がようござんすけどねえ。 （老女）

などをあげることができるばかりである。

伯耆に対応する岡山県美作地方に、かなりの「ガス」ことばが見いだされる。（「ガース」もある。）西部例は、

○フーカデ ガスケド ナー。

農家でござんすけどねえ。

○ボンサンデ ガシテ ナー。

坊さんでござんしてねえ。

などである。ところで、土地の有識者は、私のこれらの聞きとりを、カードについて検閲してくださって、「ガス」「ガン」のところへいずれも長音記号を加えられた。「ガース」「ガーン」だと言われるのである。ちなみに、「……………ガス　ワイ。」は、「……………ガサイ。」とも発言されている。岡山県下の他地域には、「ガス」ことばがほとんど聞かれないか。

四国地方は、さきにもふれたように、「ガス」ことばを見せることが、ごくよわい。土佐の東部にはこれがあるか。「ガス」ことばをいくらか見せるのが徳島県下である。南部山地例は、

○エライ　ヌク<sup>ー</sup>　ガス　ゾナ<sup>ー</sup>。

ひどくあったこうござんすよね。

などである。

近畿地方は、およそ、「ガス」ことば不毛の地域と言えよう。丹後・大阪府南部・三重県下などに、「ガス」の散在が認められはする。

中部地方には、限られた地域に、「ガス」の注目すべき用法が見いだされる。まず、静岡県下が問題の地域である。県下に、「オハヨー　ガス。」などの、わかりやすい「ガス」用法があるのと同時に、

○ソーデ　ゴザリガス　カ。

そうでございますか。

○ドーモ　オジャマサマニ　ナリガシタ。

どうもおじゃまさまになりました。

のような「ガス」用法が見いだされる。これは、御前崎の例である。「ガス」が助動詞あつかいにされていると見ることができる。(——この「ガス」も、たぶん、「ゴザイマス」系の「ガス」に相違あるまい。)すでに『静岡県方言辞典』に

も、「御本ヲオ借り申シガス」「コチラエオ上シナハレガシ」などの「ガス」用法が記述されている。「ガス」は、まったく「ます」相当のものになっている。『静岡県島田方言誌』、後藤一日氏『遠州の方言』（美哉堂書店 昭和43年2月）その他の方言文献にも、こうした「ガス」用法が見える。坂本幸次郎氏は、「遠州方言における助動詞」（『遠江方言の研究』土のいろ社 昭和7年5月）の中で、

崇敬の助動詞には「れる」「られる」「ます」「なざる」「まうす」「がす」等があり、本来の助動詞と転来の助動詞とがある。

と述べていられる。

山梨県下にも、「おぼんになりがした。」などの言いかたがあるという。（深沢泉氏『甲州方言』）稲垣正幸氏も、「富士北麓のことば（山梨）」（『NHK国語講座』 昭和32年5月）で、

夕方のあいさつの「お晩になりガシタ」「申しガシタ」のように、ていねいな言い方にガシタという助動詞が用いられている。

と述べていられる。

長野県下に、「ガス」ことばがあるが、助動詞用法のものではない。それは、「ソーデガスカイ」（『信州上田附近方言集』）などである。

ところで、佐藤茂氏によるのに、福井県下には、

デカケナハリガス（おでかけになる）

の言いかたが見られる。「今立郡池田村一旧下池田村西角間」のことばであるという。（佐藤茂氏「補助動詞について（3）」『近畿方言双書』第六冊 方言論文集〔2〕 昭和32年2月）「ガス」のこのような使用法は、所を異にしても、生じうるのか。つまりは、はなはだしい略形である「ガス」が、ぞうさもなく転用されるということなのであろう。

「ガンス」ことばのばあい同様、関東地方が、やや注目すべき「ガス」分布を見せている。

神奈川県下にも「ガス」ことばがあるらしい。

『東京方言集』には、

ヨーガス

あの石の多い山路は、歩きつけねえ方にはえらうがすよ。

のような「ガス」例が見える。

埼玉県下に、「ガス」がややいちじるしい。西部山地にもある。東部方面には、これがよりいちじるしい。

○ズイブン、ネー ヨー ガス ネー。

ずいぶん、値がようござんすねえ。

○サッテノ テンノーサマ フル ガス ヨー。

幸手のおみこしは古うござんすよ。

は、東辺での二例である。ただし、埼玉県下の「ガス」ことばも、たいていは老年層のものであろう。

つぎに群馬県下にも、「ガス」ことばが、かなり見いだされるらしい。『桐に生地方方言訛語調に於ける調査』には、

「ごぞいます」が「ごす」となり「ごす」が「がす」となれるか。

との解釈が見える。

栃木県下にも、なにほどかの「ガス」ことばが見いだされる。

茨城県下にも、「ガス」ことばがかなりおこなわれているのか。長塚節氏の『土』（春陽堂 大正15年9月）には、

…………疎末にや成んねえんがすかんね、

などのことばづかいが見える。

東北地方を見る。なかでも、問題の地方である。

福島県下では、東西に、いくらかの「ガス」ことばが見られるが、主としては平地部に「ガス」ことばがおこなわれている。

ところで、山形県下には「ガス」ことばがない。会津方面にすくないのとつ

ながりあったものであろう。

秋田県下には、南北に、なにほどかの「ガス」ことばが見られる。『秋田方言』にもその指摘がある。同書に、

「がす」の代りに、「す」を用いることもある。

との説明があるのは興味ぶかい。なるほど、

おれだばえがねあが<sup>△△</sup>す（私なれば行きません、「えがねあがす」の時は「行けません」）

のような言いかたの「がす」は、「す」にかえてもよからう。（「す」は、「もし」の「し」だと思われる。）『秋田方言』の説明のようなものが成りたつところには、「ガス」ことばの、はなはだしく付属的なものになっているさまが認められよう。

東北地方での「ガス」ことばの一等地は、宮城県下である。本県では、全県下に、「ガス」ことばがじつにさかんである。「ガンス」ことばは岩手県下にさかんであって、南隣の宮城県下にはこれがなかった。しかるに、「ガス」ことばとなると、宮城県下にじつにさかんである。当地方では、「ゴザイマス」ことばも、なんら「ガンス」形などにとどまることはなくて、早くも「ガス」形に到達してしまったということなのか。

宮城県下では、

おーすー せんでえー  
奥州の仙台名物おらせんだ、そーつしやそでがす、そでがえんか。

などの言いぐさが成りたっている。

本県南の「ガス」例は、

○アー イ[i]ー ガス[ü]。イ[i]ー ガス[ü]。

ああようござんす。ようござんす。

などである。本県北の「ガス」例は、

○ミテッグニ[i] ヨー ガス[ü]。

見ていくことができます。（老男→藤原）

○ンジャ、ソノ ヒ[i]トデ ガス[ü]ッペ。

じゃあ，“その人でしょうよ”。

などである。

宮城県下では、「ガエ(イ)ン」の言いかたがよくおこなわれている。

○ユ[ü]ーガダ マダ ク[ü]ンデ ガイン カ。

夕方また帰るんでござんせんか？

など。

○ソソチ モノ， ガイン (ガーイン)。

そんなもの， ござんせん。 (老女)

など。「ガス」の未然形「ガセ(ん)」が、「ガエ(イ)」となっているのではないか。(「ゴザリス」のばあいも，その未然形「ゴザリセ(ん)」が、「ゴザリエ(イ)」ともなっている。)

『仙台の方言』には，

「きのーな参りしてがす」(昨日，参りました)

といったような「ガス」用法が見える。

「きまりいー人，嫁にもらいたがす」(几帳面な人を嫁に欲しいです)

というような「ガス」用法も見える。同書には，

がすはありすよりも，又ござらざる，おんなざる等は同項のその他のものよりも敬讓を欠く。

との説明も見えている。

『仙台の方言』に，なおつぎのような，注意すべき「ガス」がある。

「鍵かいしたか。かわねど用心わるがすつお」(鍵をかけたの，かけないと用心が悪いですよ)

「ガスツォ」というのが見えている。

「あの人少したかったんでがえんか，なんだか眼付き変でがつつお」(あの人は少し気が変でないの，眼付きが妙ですよ)

などとある「ガツォ」も、「ガスツォ」に類するものか。『東北方言集』は，宮城県北部の言いかたとして，「さうでがちよ」というのをあげている。

宮城県下に、「ガス」用法の異なるものも見いだされる。

「ガンス」ことばのよくおこなわれている岩手県下に、「ガス」ことばもまた、かなりよくおこなわれている。どちらかといえば、県北よりも県南に、「ガス」ことばが見られやすかろうか。南の水沢ことばでの「ガス」例は、

○オハヨ ガス[ü]。

お早うございます。

○モース[ü] コシ[i] ザッパナ コトバは「オハヤ ガス[ü]」。

もうすこしざっとしたことばは「オハヤ ガス。」です。

などである。(宿の手つだい老女の教示) 当県南でも、「ガス」の打消を「ガエン」にしている。水沢ことばに、また、

○サー イガネ ガス[ü] カ。

さあ行きませんか。

などというのがあるが、このようなばあいにも、「ガス」が、用法上、「ス」(「もし」の「し」) 的なものになっているとも見ることができよう。

『全国方言資料』第1巻の「岩手県胆沢郡佐倉河村」の条には、「ガツェ」の言いかたが見える。

mヤーヤー ドモ アリガト ガツェ

いやいや どうも ありがとう ございました。

これは、宮城県下の「ガツォ」などに類するものであろう。

岩手県下につづき、その北の、青森県東部、すなわち「南部」地方にも、「ガス」ことばが聞かれる。

○ソリャ ヨー ガス[ü] ナ。

それはようござんすね。

○タイシ[i] タ アジ[i] ヨー ガス[ü]。

たいへん味がようござんす。(中男→藤原)

などは、「南部」南方の例である。八戸市や野辺地町その他でも「ガス」ことばが聞かれる。中市謙三氏『野辺地方言集』(三元社 昭和11年8月)には、

「おはす」が「ごはす」になり、更にガスとなつた。「そうでガス」「ヨオガス」「寒むガス」等といふ。

との説明が見えている。

東北地方には、「ガス」ことばの、そうとうに広い分布が見わたされる。

北海道地方に関しては、「ガス」ことばについて言うべきものを、今、私は持たない。

「ガス」ことばは、「ガンス」ことばと見あわすことのできるものである。が、「ガス」形となったものは、独自の簡略形と見られ、これの表現上の効果は、「ガンス」ことばのそれとはあい距ったものになっている。

「ガンス」ことばが、関西地方内にもつよい勢力を見せたのに対して、「ガス」ことばは、かなり東国的のものになっている。——東国風土によく根ざすものようである。「ガス」ことばは、つまり、東国方言風土によく生きてみると見られる。

それにしても、全国総体に、「ガス」ことばを、いまや古風のものとしていることはあらそえまい。「ガス」ことばは、老年層のものになっている。

## 七 ス

たとえば、近江、湖西の朽木村で、「お早う。」のあいさつに、

○オハヨ ス。

と言う。外形上、ともかく「ス」が受けとられる。この「ス」は、「お早うオス。」(京都ふうの「オス」ことば)の言いかたのうえにできたものであろうか。

京都府の丹後北辺などにも、「オハヨース。」などの言いかたが聞かれる。

『三重方言資料』にも、

オハヨース 阿山郡山田村

オハヨッス 飯南郡波瀬村

と見える。

近畿地方の「ス」は、おおかた近畿弁の「オス」の系統のものであろうか。とすれば、これは、七の項目内におくべきものとはされないことになる。（「第十三節 オス」の条内におくべきものとされる。）

ところで、秋田県東南、田沢湖町の生保内で聞かれた、

○オハエ[ɛ]ン ス[ü]。

お早うござんす。

の「ス」は、「ございます」的なものと見ることができはしないか。——「オマス」や「オス」を考えることはできまい。

この「ス」は、ともかく、転訛の末端の、はなはだしい略形のようなのである。「ス」を独自特定のものとすることができよう。——（その「ス」が、意味上では「ございます」的なものを思わせるので、今は、これを、第九節内の末部、七の項におく。）

昭和31年6月、私は、東京、原宿駅前の理髪店で、

○ドーモ アス。

どうもありがとうございます。

というあいさつことばを受けた。場面上、「アス」は、「ありがとうございます」の意のものと受けとられた。この「ス」がまた、「ございます」のかげを宿した「ス」とされる。

本節で「ゴザンス」系のものをとりあつかった最後に、「ス」をとりあつかつてみるが、このものは、方言上に分布が見いだされるといったような性質のものではなさそうである。しかし、偶然的にもせよ、また、個人に片よったことばぐせの中にもせよ、「ゴザンス」系の「ス」形が、生成しうるものであることは、明らかなようである。

私どもは、このようなものを見るにつけても、人間の言語表現行為には、場に応じた、はなはだしい自在性とも言えるものがたしかにあるのを知る。

## 第十節 ゴザリマス(モス)系 総収

### (第二節～第九節)

以上、第一章内で、第一節から第九節にわたり、「ゴザル」→「ゴザリマス(モス)」系の丁寧法動詞、丁寧法要素を観察してきた。全体は、一括して、「ゴザリマス」ことばの大系とも言いあらわすことができる。

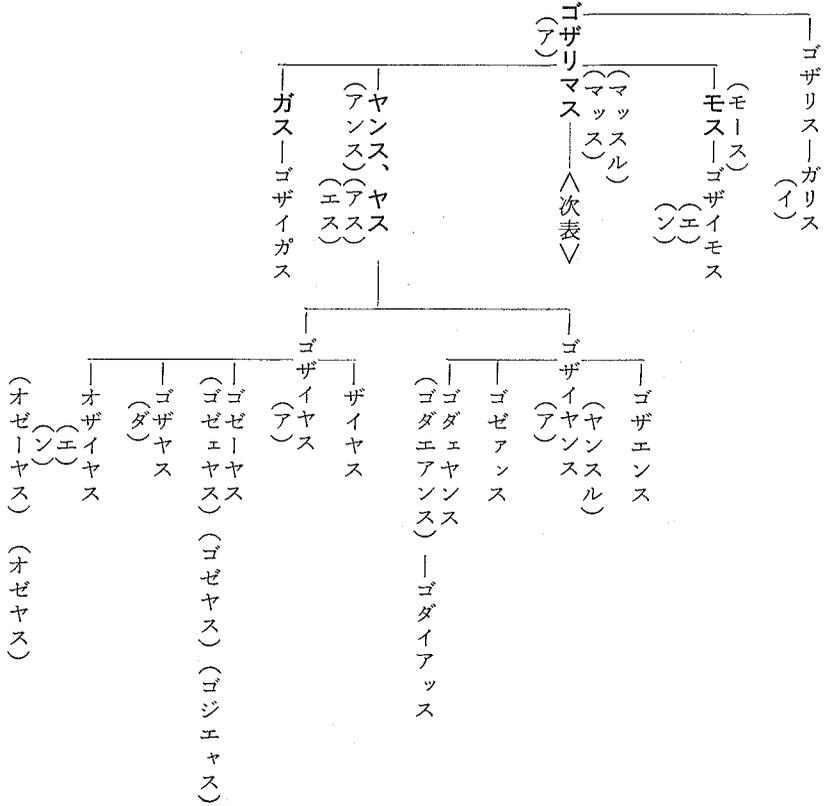
その、なんと広大な組織状況であることか。「ゴザイマス」ことば(卑近な言いかたをして)は、日本語の現代丁寧表現の生活の中で、きわめて大きな役わりをするものになっている。「ゴザイマス」ことばの全体をとりわけられたら、私どもはたちまち、日常の言語行動に窮してしまうであろう。)節にわけてこまかく見たのに明らかなとおり、共通語界から見れば、もはや衰運の定まった諸語も多い。——共通語界でよく用いられている分子は、むしろ限られたものである。しかし、方言界では、要するに、以上の全相のものが、日々の丁寧表現法をささえる活動体として生きている。——ものによる成形の大小はあっても、一々が、どのようにかどの方言にか生きてはたらいっている。

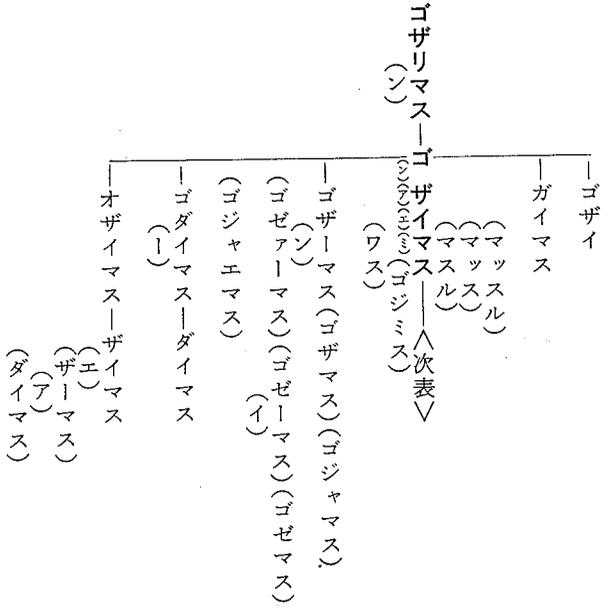
「ゴザイマス」ことばの生命力の強靱さが思われる。

「ゴザイマス」ことばを、上来の諸節に明らかにしたとおりによく展開させた、国語主体の活動力は、刮目すべきものであるとも言える。

つぎに、「ゴザリマス」以下「ス」までの、もろもろの成語を、一覧表にかかげよう。

ゴザリマス(モス)系丁寧法動詞分生体系要素







これは、「ゴザル」→「ゴザリマス(モス)」の分生体系とも言える。――また、系統表と言ってもよからう。

『方言敬語法の研究』では、「ナサル|ことばについて分生体系をかかげた。それとこれとを比照してみることも無意味ではない。尊敬法助動詞の中では、とくに「ナサル」に関して、そのいちじるしい発展分化相(分生体系)が見られた。丁寧表現法の中では、「ゴザル」→「ゴザリマス(モス)」に関して、広大な発展分化相が見られる。それとこれとを合わせ見るにつけても、私どもはまた、言語生態の自律的展開とも言うべきものを、あるいは一国語の自己推進とでも言うべきものを、思いみることができる。

上の表覧に関して、二・三のことわりを注しておきたい。

1. 棒線によってものの前後関係をつけているが、全体は、要するに、「配置するとすれば、まずばこうも配置しうるか。」との考えをあらわしたものである。位置づけまたは対比関係に注目せられることを乞う。
2. ものによっては、前後関係・生成過程を、一義的には定めかねるばあいがある。たとえば「ゴス」や「ガス」の成立には、二途・三途が考えられる。なにぶんにも無記録上の口頭言語でのことである。変化・推移には、せまい見かたをゆるさないものがある。したがって私は、一般的なことわりとして、つぎのようにも述べておきたい。「主としては、このような変化過程が考えられるだろう。」と。
3. 事象の関連を見ようとするばあい、問題の二事象について、それぞれの分布を見あわすことが肝要である。以上の分生解釈にあたっては、事象分布状況・事象分布関連への配慮はおこたらなかったつもりである。

## 第十一節 オジャル

第一節から第十節までは、「ゴザル」に関する一系の事項である。第一章内では、この一系の事項全体を、一つの節におさめてしかるべきでもある。しかし、じっさいには、「ゴザル」関係の記述事項がはなはだしく多量なので、以上では、節をわける方式をとった。いきおい、「ゴザル」関係の事項につく「オジャル」は、第十一節に立てざるを得ない。

「オジャル」が、丁寧法動詞としてもおこなわれている。近古末以来のことである。土井忠生先生訳『ロドリゲス日本大文典』には、「深う おぢらぬ。」というようなことばづかいが見えている。

むろん、これには命令形はない。

諸方言上での「オジャル」の存立を見よう。

九州、鹿児島県下に、「オヂャル」がある。『全国方言資料』第6巻の「鹿児島県枕崎市鹿籠」の条には、

fハー コノヨナ ヨカ エチャ オヂャイサーン  
はあ、このような いい 家は ございません。

とある。

宮崎県中部西奥の椎葉村では、

クッポンオンヂャツナラー、御世話様になりました。

との言いかたが聞かれたという。（小田寛次郎氏「椎葉紀行」『方言研究』発会記念冊 昭和15年10月）これの「オンヂャツ」のところには、「オジャル」ことばがあるのかどうか。

まぎれもない「オジャル」ことばの、ひとりさかんにおこなわれているのは、じつに八丈島においてである。（属島の青島にも「オジャル」ことばがおこなわれているのではなからうか。）八丈島ことばの特色事項をとりたてよと言われたら、人は多く、この「オジャル」ことばをあげるのではなからうか。従来——明治以降、八丈島ことばに探究の手をさしのべられた先学たちも、あるいは新鋭の研究者たちも、等しく「オジャル」ことばに目をそそいでいられる。明治の『言語学雑誌』から昭和の『全国方言資料』第7巻にいたるまで、「オジャル」ことばについての報告を見せるものがかず多い。望月諠三氏・安田秀文氏など、発表こそはしてられないけれども、いずれも八丈島方言の臨地調査で、「オジャル」ことばを精査していられる。

私は、広島県下で、八丈島出身の婦人から、八丈島方言についての教示を受けたさい、「オジャル」ことばの、つぎの諸例を聞きとめることができた。

○キビガワルク オカゲサマデ オジャロ ワ。

(人から物をもらったのあいさつである。「キビガワルク」は、「おそろしく」の意であるという。「オジャロ ワ」というのが「ございます」だ、とあった。)

○キノドクデ オジャル ノー。

○ハヤク オジャロ ジャーイ。



“お早うございます。”

○アンマリ ハヤクモ オジャリンナカー。

○ヤノー、ハヤク オジャル ノー。

(途中で出あったばあいのあいさつである。「ヤノー」は、「ほんとに」の意であるという。)

本山桂川氏の『海島民俗誌』にも、「オジャル」ことばの指摘が多い。その中から、一つの長文のものをお借りしてみよう。

オメーアニモショクオジャリイタシンジャンノーニテワガヨックショクオ  
ジャリイタソワ

“あなたは何も御存じないでせうが、私は能く存じて居りますよ”

丁寧法動詞の「オジャル」は、今日、きわめて限られた、特異とも見られる存在になっている。

ちなみに、鹿児島県下には「オヂャス」というものもある。上村孝二氏は、

鹿児島島の婦人はオヂャスを「在る」の丁寧体として用い、

としていられる。(「鹿児島県下の表現語法覚書」『鹿児島大学文理学部研究紀要文科報告』第三号 昭和29年3月)

## 第十二節 オマス

まず分布を見るのに、四国の徳島県下、——徳島市奥の横瀬町で、

○シヤ シンモ ミーンナ オイテ オマスン ジャケンド ナ。

写真もみんなおいてますんですけどね。

というのを聞いたのが心にとどまっている。（四国の他地では「オマス」を聞いたことがない。）四国にも、このように「オマス」ことばがあり得たのか。

中国地方の島根県出雲にも「オマス」があるか。神部宏泰氏の教示せられた、

○イヤ、ソゲー タイシタ コター オマシェン。

いえ、そんなにたいしたことはありません。

○エロンナ ヤツガ オマサー。

いろんなやつがありますよ。

は、「オマス」ことばとしてよいものか。

中国四国では、「オマス」ことばはまず稀存の事実のようである。九州では、これがすこしも聞かれない。中四国での存在は、偶然的偶発的事情によるものであろうか。一般には、中四国は「オマス」ことばの風土にはなっていない、と言えるように思われる。

「オマス」ことばは、近畿本位のことばと言うことができよう。

兵庫県下に「オマス」はさかんである。

○アンタラ トシワ ワコ オマス ナー。

あんたは年はお若いですねえ。（老男→藤原）

は、淡路北部での一例である。

○チョット ザイサンガ オマス ノエ。

ちょっと財産がありますのよ。（初老女→藤原）

は、播磨中部での一例である。「オマス」は、「オマへん」「オマシて」「オマッシャロ」「オマッ カ」というようにつかわれることがいちじるしい。「オマス」終止形が、神戸市方面その他では、「ヨロシ オマ。」（よろしゅうございます。）などと、「オマ」形にもされている。

大阪府下の「オマス」ことばは、兵庫県下でのに似たおこなわれかたを見ている。しかも、そのおこなわれることはさかんである。古来の上方ことばが

ここにある。大阪弁では、「オマへん」が一つの代表的なことばづかいにもなっているようか。「オマッ カ」「オマッ シャロ」なども、劣らずよくおこなわれているようである。府下の全般に、「オマン」もよくおこなわれている。

○アツ オマン ナー。

暑うございますねえ。

○アッチニ ギョーサン エー デンジ オマン ノヤ。

あちらにたくさんいい田地があるんです。(老男→藤原)

「オマン ネン」の言いかたも、大阪府下にいちじるしいものである。「オマス」の言いかたを「デ」文末詞で受けて、「オマッ デー。」と言うことも、府下にありうるのか。大阪弁に、終止形の「オマ」形も聞かれる。「オマ。オマ。」などと言っている。山本俊治氏の「大阪方言における待遇法(2)」(『近畿方言』8 昭和25年10月)によれば、

○オアリガトウサンデオマスデゴザイマス。(老婆→僧侶)

といったようになっていねいな言いかたも、一方ではおこなわれているのが知られる。——老年層でのことであろう。私は、府下の南河内郡内で、老男女から「オマス」ことばを多く聞いたが、「オマスデ ゴザイマス」というようになっていねいな言いかたは聞かれなかった。ただし、ここの人たちからは、連用形の「オマヒ」を聞くことができたし、また、

○コエガ ワル ハン ノヤ。

声がわるうござんすのや。

というような「〜 ハン」の言いかたを聞くことができた。この「ハン」は、「オマス」の「オマン」に、意味・用法上では、さも似ている。「オマン」形が「オハン」形に転移することが、ありうるのかどうか。それは、あったとしたら、かなり大きな転移である。「オハン」ができたとしたら、「ハン」になることは、考えにくいことではない。(この問題は、のちの第十四節で、あらためてとりあげる。)

私はさきに、謙譲法の「オマス」にふれた所で、丁寧表現法にはたらく「オ

マス」にもふれた。外形は等しく「オマス」であっても、実質上これに両語があることは、再説するまでもない。そもそも両者で、「オマス」の起源が異なろう。丁寧表現法の「オマス」の起源についても、上述の箇所ですでにふれた。(P.122)「御座ります」→「おざります」から、やがて「オマス」ができたであろうことも、考えにくいことではない。一方、村内英一氏の「オリマス」起源説も、和歌山方言について同氏の指摘される、つぎの会話例などを見ていると、いかにもと首肯される。

「ハサミ オリマスカ？」 「ハイ、オリマス。」

(村内英一氏「和歌山」『NHK国語講座 方言の旅』による。)

京都府下では、「オマス」がほとんどおこなわれていない、と言ってもよからうか。(——山城南部内には、「オマス」や「オマッセ」などがありもするか。)大阪方面の「オマス」ことばに対して、京都府下では、「オス」ことばがよくおこなわれている。

奈良県下には、ことに北部域では、「オマス」ことばがかなりよくおこなわれているか。北部内には、「オマス」の略形「オマ」もあるらしい。(都竹通年雄氏『奈良県北部方言覚書』 近畿方言学会 昭和30年12月)

近畿内の他地では、おおよそ「オマス」が聞かれない。ただし、滋賀県大津方面には、なにほどこかの「オマス」ことばがあるか。

近畿をはなれた、福井県敦賀市方面などに、「オマス」ことばがあることを、かつて私は、愛宕八郎康隆氏から教示された。

中部地方内での「オマス」分布では、他に、『岐阜県方言集成』の、

おます〔動〕 ございます。

が見いだされ(羽島郡)、また、『信州上田附近方言集』の、

オマス(助動) 御座ります。

が見いだされる。(その他、富山県内にも「オマス」があるか。)

関東以東に、「オマス」ことばを見いだすことはできない。中部地方の分布もまた、はなはだしく劣勢であって、どちらかといえば、その近畿によりよく

関連する地域に「オマス」が見いだされる。近畿内にも、和歌山県下や三重県下など、「オマス」そのものを欠く所があるけれども、上述の全分布状態からするならば、「オマス」ことばは、やはり近畿本位のものとするができる。上方ことばらしい上方ことばの一例がここにある、と言えよう。——「オマス」はまさに、上方の風土の中に生いそだった一特定語だと思われる。

その勢力が、大阪方面を中心として現に強盛であるのは、注目すべきことである。土地の人たちは、この、いきいきとした現代語の「オマス」をとりのけられたら、ほとんど日常会話に窮するほどであろう。ではあるが、「オマス」ことばの活動範囲の、さまで広くはないことは、これを一国語の標準語法と見ようとしたりするうえでの、大きな難点になる。

### 第十三節 オス

「オス」については、第九節の七の中でも、いくらかふれるところがあった。

前節でも述べたように、京都府下に「オス」ことばがさかんである。まず、山城・丹波の広くに、「オッセ（オス エ）」などの言いかたが見いだされる。京都ことばでは、「オス」がことに有名であろう。「オス」「オへん」

○ソリャ ヨロシ オス ワナー。

それはいいですわねえ。

などと、しきりにこれがおこなわれている。——京都の「オス」は、まさに大阪の「オマス」に該当する。つぎには、北桑田郡周山町（丹波）の用例をかかげよう。

○サム オス ワー。

さむうございますわ。（私が、「この辺はさむいですね。」と言ったの  
に対する返事）

○ツロー オッセー。

つろうございますよ。（乳の痛いのは）

現地調査のさい、「オス」ことばがおとなの男女によくつかわれるのを知り得た。府下に、否定形の「オへん」ではない「オせん」もあるか。また、「オス」が「オン」「ホン」となることもあるらしい。山城南部出身の東辻保和氏は、その郷里語のことばづかい、

○ソー オン ナ。

そうですね。

○ソー ラシ ホン ナ。

そうらしいですね。

○アー ソー オッ カ。

ああそうですか。

との言いかたを教示された。（「オン」「ホン」は、やはり「ナ」の前でおこっている。）

京都府北部の丹後は、「オス」ことばを見せない所かのようにであるが、第九節の七でもふれたように、「オハヨース。」などの言いかたが見られる。井上正一氏の『丹後網野の方言』には、

おうちの坊ちゃんはクセがようてようすなあ

との言いかた——「ようす」——が見られ、「オス」の「ス」とされるものが見いだされるとともに、また、

美シオス（美しいです） タコオス（高いです） アコオス（赤いです）

というような指摘も見られる。今石元久氏は、実地調査の結果、「よう オス。」の「ヨース。」が、但馬北部と、それにつづく丹後西辺とにおこなわれていることを見いだしていられる。室山敏昭氏は、今石氏の上の調査結果に加えて、“但馬と奥丹波との境まで、京都系の「オス」がある。”と語られた。なお、岡田荘之輔氏の『但馬国温泉町方言記』（自家版 昭和31年11月）には、

形容詞語幹にオスをつけて丁寧動詞にする

良オオス、ヨオス、は良いといらぬと両義。

悪ルオス、ワルウス、痛タオス、イタアス、嬉シオス、ウレンイス

との記事が見える。——ここには、「オス」の用法が明らかであるとともに、「オス」の「ウス」や「アス」や「イス」になっているのが注目される。(なかでも「イス」への転訛は、特筆すべきものである。)

「オス」ことばは、山城・丹波に限られるものではないことが明らかである。

「オス」の起源は何か。「オマス」から「オス」ができたか。これが一つの考えかたである。榎垣実氏は、

このオスはオウスがつまったものだともいわれ、と述べていられる。(「京おんなの京ことば」『放送文化』第25巻第1号 昭和45年1月)「オス」を活用させて「オセン」とし、また「オへん」としたと考えられるが、一方、「オマへん」から「オへん」へは、距離が近いとも考えられる。(「ゴウス」の「ゴワセン」からも「ゴへん」ができています。)

「オス」ことばは、広く京都府下に見いだされて、かつ、滋賀県下にもこれがそうとうにさかんである。

京都弁にさかんな「ドス」ことばも、——その成立が「テ オス」からであるとすれば、「オス」の隆盛をものがたるものである。

湖西、朽木村例では、まず、

○オハヨ ス。

お早う。

○エー ソー オス。(「オ」がはいりぎみというのが、私の調査時の感想である。)

ええそうです。

などが聞かれ、また、

○クツキノ コトバワ マズ、ヒョージュンゴニ チコー オス ナー。

朽木のことばはまず、標準語に近いですね。

○コ シトッタラ スク オッシャロシ ナー。

こうしとつたらぬくいでしょうしねえ。(若い婦人が、じゃがいもを植えながら説明する。)

○アトカタ オヘンサケニ、…………。

あとかたはありませんから、…………。

などが聞かれる。ここに「オセン」の「オへん」も見られる。「オヘン」では、私は、「オマへん」を直覚した。（——「オス」は、「オマス」的なものではないか。）

湖東では、佐藤虎男氏の調査結果などが、「オセン」形をも見せている。佐藤氏は、

○セーワ アンマリ タコーオセン カ。 (中男→初老男)

この種の「形容詞・オス」の型が特徴的である。(中略)「オス」は、独立動詞(存在詞)としても繁く行われている。

と言われる。(「近畿・中部接境地方方言状態の調査報告」『国文学攷』第十七号 昭和32年4月)

○キタナイ コト オセン。

きたないことはありません。

は、私が彦根市で聞き得た「オセン」例である。

通常、「大阪の『オマス』に京都の『オス』」と、言われたり見られたりしがちであるけれども、私どもは、大阪府下についてもまた、なにほどかの「オス」ことばを見いだすことができる。『全国方言資料』第4巻の「大阪府大阪市」の条には、

mソヤケド アノ ジブンノ オーカワ ヨロシ オンタナー  
 けれども、あの ころの 大川は よろしゅう ございましたねえ、  
 ヒローテ  
 広くて。

というのが見られる。山本俊佐氏の、北河内内に関してあげられる実例は、

○キョーワ ニチヨードモ スクノ オス ナー。

きょうは日曜日でもすくないですね。(中女間)

である。私は、南河内内で、

○ムカシノ コトバワ ダラクサ アス ワ。

昔のことばはダラクサイですよ。 (老男→藤原)

「アス」の「ア」はよわかった。「オ」から転じたものか。「ダラクサウ」が「ダラクサ」になるのととも、つぎの「オス」も「アス」になりやすかったか。

などというのを聞き得ている。

大阪府下につづいての和歌山県下では、「オス」ことばの明確なものを見いだすことが、今、私はできない。ただ一つ、問題とすべきものがある。梅園氏『田辺方言』（発行者 多屋秀太郎 明治20年印刷 昭和3年7月再刻）によると、「女詞」とされるものの中に、

「笑ひおすら」 「ワラヒマスヨ」

などとある。ここの「おす」は、いま問題としている「オス」ことばなのかどうか。「みやおせな」（「ミハシマセン」）ともある。

三重県下に「オス」らしい「ス」のあることは、すでに第九節の七で述べた。やはり『三重方言資料』に、

オイデオス

というも見えている。——上野市のことばで、「訪問の応答」であるという。滋賀県下の「オス」や「ス」のおこなわれかたから察すれば、三重県下にも、なんらかの「オス」ことばがあってもよさそうに思われる。

以上、「オス」の近畿に存立するありさまを通観した。京都府下・滋賀県下での「オス」のおこなわれかたが、かくべつに注目される。奈良県下にはこれが見られなくて、大阪府ほかの三府県下に、多少の問題がある。「オス」ことばは、近畿で、東北域のものとも見られようか。（近畿での「オマス」の存立状況と、この「オス」の存立状況とを対照していただきたい。）

滋賀県下の状況のつづきとも言えようか。福井県下に「オス」ことばが見いだされる。愛宕八郎康隆氏は、敦賀市域を広くに調査せられた結果、

○アノ ヒト マダ ワコ オス <sup>↑</sup>ゼ。

あの人はまだ若いですよ。 (初老女→青男)

○ナニモ オヘンケド ドーゾ。

“何もありませんが、どうぞ。”

などの実例を得ていられる。永田吉太郎氏は、「助動詞の記載について」（『土の香』創刊五周年記念）の中で、

オス 福井県大飯郡、京都市  
 としるしていられる。

中部地方は、一般的には、「オス」を見せていない所としうるようである。ただ、牛山初男氏の「中部日本における近畿方言の分布(二)——主として語法的な面から——」（『信濃』第10巻第12号 昭和33年12月）によれば、

「新聞はどこにオス？」などと用いられる「オス」があるが、  
 とあり、岐阜県下・愛知県下・長野県下の分布がとりたてられている。

全国での「オス」ことばの存立状況は、以上に見てきたとおりである。近畿では、「オス」表現法が、「オマス」表現法とともに、土地のたいせつな日常語法になっており、ときに近畿標準語的な風格をも見せているが、その分布が、限られて、特定のことは、上述のようである。強力な表現法分子であるものも、限られた地域のうちのものは、全国の見地で標準語を考えるたちばでは、容易にはとりあげることができない。

## 第十四節 オワス

徳島県三好郡西祖谷山村のことばに、丁寧法動詞とされる「オワス」があるらしい。これについては、前著『方言敬語法の研究』の P.144 でいらかふれた。そこでは、

昭和41年4月21日付『朝日新聞』に出た“という話もおわす”（徳島県祖谷の里の人のことば）

としている。手もとには、なお、関連の新聞切りぬきの数葉があった。一連の記事は、吉岡ナミさんに関するものである。記者の問いに答えてナミさんが語

ったことばに、多くの「オワス」ことばの例が出ている。

けれど、わたしゃ、いまのこどものように、友だちと遊んだ覚えがおわせん。

そのころ、村に平家の流れをくむという家がおわしてな。

などがある。未然形「オワセ」と連用形「オワシ」とが見える。新聞記事のことではあるけれども、とくにしばしば書きうつされている、この「オワス」ことばは、たぶん、土地っ子、吉岡ナミさんのものであろう。私もは、ここで、「オワス」の丁寧法動詞を認めることができそうである。

榎垣実氏は、さきの「京おんなの京ことば」(P.334)で、

奈良県にはオワスからできたハスがある。

と述べていられる。奈良県下の「ハス」ことばは、「オワス」系のものなのか。——ここで、近畿地方には丁寧法動詞化した「オワス」形のものは見られなくて、四国の祖谷に、はなれてひとつ、「オワス」丁寧法動詞の見いだされることが、あらためて注目される。近畿地方では、「オワス」は、しぜんに「ハス」形になって、丁寧法動詞になり得たというわけか。

西宮一民氏は、「奈良県磯城郡多武峯村の方言」(『帝塚山学院短期大学研究年報』第3号 昭和31年1月)で、

○モ一、オソハッサカイニ、ヨロシハシタラ、トマッテイキナハレ。

[もうおそいですから、およろしかったら、泊っていらっしゃい。]

というようなことばづかいをとりあげていられる。「ハッ」「ハシ」は、「オワス」「オワシ」を考えさせるものか。(前著『方言敬語法の研究』P.144～P.145) 西宮氏はまた、『日本方言の記述的研究』の中の「奈良県磯城郡織田村(新 <sup>オオミワ</sup>大三輪町)」の中で、

「ハス」丁寧な断定。形容詞の第4活用形より接続する。

○ ～ハシ～ ○ ～ハス(～)、(ハシ～) ～ハシ～ ○ ○

ヨロシハシタラ ムサイトコダッケド トマッテイキナハレ。[およろしかったらむさくるしい所ですけど泊って行きなさい。]

とするしてられる。氏はまた、同報告の他の箇所で、

エライ ハヤハンナー。〔たいそう早いですねえ。〕

「ハス」は後続子音[n]音によって同化され、撥音化する。

とするしてられる。

私はかつて、奈良県女子師範学校生徒諸氏に方言語法の質問をして、北葛城郡王寺町の人からは、

暑はずな (お暑うございます)

暑うをますな ( " )

暑うございままな ( " )

との教示を得ている。

奈良県下のほか、大阪府南河内郡内でも、私は、つぎのような実例を聞きとっている。

○アンナ コワ スクナ ハン ナー。

あんな子はすくないですね。 (老女→藤原)

○コエガ ワル ハン ノヤ。

声が変わるんですよ。(声が変わるうござんすのや。)

(これらの「ハン」については、「第十二節 オマス」の中でふれるところがあった。P. 330) やはり、大阪府下のこれらも、「オワス」系の「ハス」の「ハン」なのか。

他地方に、この種のものを見いだすことはできない。——と、今、私は言わなくてはならない。「オワス」といったようなことばが、用法変化を示したり、語態の変化を示したりしながら残存したのが、上述の地にとどまる状況は、意味ぶかいことのようにも思われる。

## 第十五節 アリマス

「アリマス」(動詞+助動詞)を用いる特定の丁寧表現法がある。主として

中国地方西半域内に、これが見られる。(前著『方言敬語法の研究』でもこれにふれた。P.187)

その前に、九州、大分県下に「ア<sup>マ</sup>リマス」の用法があるのを指摘しなくてはならない。池田勸氏によれば、豊後南海部郡下では、

○ア<sup>マ</sup>リガト ア<sup>マ</sup>リマヒタ。

(これは、「ア<sup>マ</sup>リガトー オザイ<sup>マ</sup>ヒタ。」がていねいな言いかたであるのに対して、ふつうの言いかたであるという。)

などと言うという。私は、豊後日田地方の、

○オハヨ ア<sup>マ</sup>リマス。

とのあいさつことばを、中津市で、一教員氏から教示されている。(ちなみに中津市では、「オハヨ ゴザイマス。」である。)九州、大分県下ならびに福岡県東部の豊前は、しばしば中国山陽西部に同調するものを示す。(四国西・南に同調するものを示しもするが。)<sup>1</sup>「ア<sup>マ</sup>リマス」ことばが、中国西部のみならず大分県下にも見いだされるのを、私は、なるほどと首肯するのである。

九州内に、「どうどうして アル。」との言いかたをし、これによって敬意をあらわすことは、いくらかの地域にあるらしい。大分県地方の「ア<sup>マ</sup>リマス」ことば、すなわち「アル」の用法も、それと無縁ではないとも見られるか。中国地方の「ア<sup>マ</sup>リマス」ことばも、もともと、「オ行きアル」→「オ行きヤル」といったような「アル」の用法、すなわち「アル」敬意表現法に関連するものと見られるのではなからうか。

「～アル」と言いあらわすのは、ものごとを傍観する態度をよく表示するものである。ただただ、ものごとの存在するのを客観的に叙述することによって、婉曲心理の敬意をあらわす。その「アル」表現法が、時代の人人の胸に伝承されて、中国西部内・九州内では、今も人々に生きていとされるのか。

山口県下は、「ア<sup>マ</sup>リマス」丁寧表現法をよく見せる所である。「ア<sup>マ</sup>リマス」と「ゴザイマス」とが、ならびおこなわれている。

○ゴト<sup>ー</sup>ケニワ オヒガラヨ<sup>ー</sup> シューゲンガ トトノイマスゲナ、オメデ  
ト<sup>ー</sup> アリマス。

は、周防の一例である。

周防東部の「アリマス」ことばにつづいて、広島県安芸に、「アリマス」ことばがさかんである。これらの地域では、

○オハヨ<sup>ー</sup> ガンシタ。

（朝のあいさつ）

を言うとともに、

○オハヨ<sup>ー</sup> アリマシタ。

○オハヨ<sup>ー</sup> アリマス。

を言い、人々は、たいてい、「ガンス」「ガンシタ」よりは「アリマス」「アリマシタ」のほうを、よりていねいなことばとしている。

○サム アリマ<sup>ス</sup>ノ。

さむうございますね。

○オマメニヤ<sup>ー</sup> アリマ<sup>ス</sup>カノ。

達者でございますか。

などは、安芸弁での熟した「アリマス」のあいさつである。「アリマス」の言いかたは、だいたい、共通語の「ございます」の言いかたに対応していよう。安芸地方では、「ガンス」（←「ゴザイマス」）のおこなわれることが、かくべつさかんである。「ゴザイマス」は、「ガンス」に転訛してしまったので、「ございます」表現法の機能は、まさに「アリマス」がになっているというありさまである。

安芸地方では、「～デ アリマス」が「～ダリマス」「～ジャリマス」ともなっている。

○ソ<sup>ー</sup>ダリマス。

そうでございます。

などと、老年者はよく言っている。

河野頼人氏は、山口県防府市のことばとして、「ナカノウラ ニマイデ オンスデ。」(中ノ浦、二枚ですよ。)というのを教示せられた。「オンスデ」というのは、“ごく気堅ないひぶりである”という。この「オンス」は、「アリマス」からきたことばなのかどうなのか。当地方に、「ヤンス」はさほどおこなわれているとも見られないので、今これを、ここに問題としてみる。

中国内では、山口県下・広島県下とともに島根県石見が、「アリマス」ことばをよく見せている。——総体に石見地方は、安芸・周防と同調しがちである。『全国方言資料』第5巻の「島根県那賀郡雲城村」の条には、

f ナンデ アリマサー

なんで ありますね…。

f アサッテーデ アリマショー

あさって でしょう。

などというのが見えている。

中国地方の出雲・備後から東は、なぜ「アリマス」ことばを見せていないのだろう。分布のふしぎである。やはり、他の表現法との競合・協調などの関係もあって、地域ごとに、問題の表現法を存する・存しないという差異が生じているのであろう。

小松代融一氏の『岩手方言の語彙』には、「旧南部領」の部に、

アルス あります

というのが見える。

## 第十六節 オリマス

和歌山県下に「オリマス」表現法のあることは、さきに、第十二節で「オマス」を論じるさいに述べた。「オリマス」の言いかたが、ひとり本県下に見いだされるのは、一奇とすべきことである。

榎垣実氏も、村内英一氏も、早くから当地方の「オリマス」ことばを指摘してられる。

○オハヨー オリマス。

などと言うという。

「オル」(居る)動詞を用いることは、ただに偶然のことなのではあるまい。「オル」の古い用法の一端が、なぜかこの地方に色濃く残ったものではないかと考えられる。

思いあわされることであるが、南島の奄美大島などに、「+居り」の丁寧表現法がある。このことについて、私は、すでに前著『方言敬語法の研究』で述べるところがあった。(P.242)

○ワンナ スッリャ シャーオラン。

私はしはしません。

などの例をあげている。「シャーオラン」は「しは居らん」か。上村孝二氏は、「書きます」はカキヤヲリというのですが、これを分解して見ると、カキ+ヤ+ヲリという組立てになっていて、ヤは共通語の助詞「は」に当るものです。一寸変った丁寧表現の形式です。

と述べていられる。(「奄美大島」日本放送協会編『方言と文化』宝文館 昭和32年10月)「シャーオラン」や「ショーラン」では、——「居る」動詞が活動しているとしても、「居る」が一つの句法の中に熟合されていて、「オハヨーオリマス。」といったような、「居る」のあらわなものではない。けれども、分析してみれば、「居る」動詞の丁寧表現法のはたらきは認められる。

「居る」は、上述のように、丁寧表現法の世界には特殊なあらわれかたをしているのにすぎないが、私は、この、はなはだしく片よった存在を重視する。こうした分布の背後に、「居る」丁寧表現法の広い隠在の状況、または存在可能の状況が推察されるのではなからうか。

## 第十七節 マイル

○マーマー。ゴネンノ マイリマシテ。ヨー キッツカーサイマシタ。

まあまあ、ご念がいりまして。よく来てくださいました。

これは、旧広島市域を西にはずれた所での一例である。年頭のあいさつに行った私どもを送り出す、老女のあいさつことばであった。

○タッタ、ゴネンノ マイリマシテ、アリガトー アリマシテ。

たびたび、ご念がいりまして、ありがとうございます。

○コナイダ ゴネンノ マイリマシテ、マー エー モナー。

こないだはご念がいりまして、まあいいものを。

これらは、広島県安芸西北奥の、老女の発言例である。

広島県下に、「ご念の 参りまして」という表現法がある。——今は、ほとんど老年層に、わずかに聞かれるものになっていよう。ともあれ、「マイル」が自由に、丁寧表現法に用いられている。ていねいな言いかたをしよう、よいことばをつかおうとして、人が心をはたらかすうちに、ことにあいさつことばでは、気分が張りきって、「ご念の 参りまして」というような言いかたもするようになったのであろう。

## 第十八節 その他の丁寧法動詞

丁寧法動詞（またはそれに助動詞のそわったもの）による丁寧表現法の観点でとりあげうるおもなものは、以上のとおりである。

このほかになお、丁寧表現法にはたらくと見られるいくらかの丁寧法動詞を指摘することも、不可能ではない。すなわち、以下のものを列挙してみることができる。

### ゴザル

山陰地方に、人の死去を、「ゴザッタ」と表現する所が、だんだんに見いだされる。これは、「ゴザル」尊敬法動詞の特定用法と見ることもできるものであったが、考えかたによっては、死亡することをあらわす特定の丁寧法動詞「ゴザル」がある、ともせられないことはない。

### オザル

「ゴザル」の「オザル」に転化したものは、「ゴザル」からひきはなして、「オザル」丁寧法動詞と見ることもできよう。

### ジャーマス

『全国方言資料』第9巻の「長崎県下県郡厳原町豆酸」の条には、

*m*アー ケッコー ジャーマス

ああ 結構で ございます。

とある。これでは、「ございます」相当の「ジャーマス」をとらえることができる。

東京方面での婦人ことば、「ザーマス」などのことも、ここに思いあわされる。

### ヤスム

「ねる」ことを「ヤスム」と言う。この習慣は一般化してもいよう。

「ヤスム」は、一丁寧法動詞としうる。

### タベル

「食う」を「タベル」と言う。この習慣も諸地方につよい。「タベル」も丁寧法動詞とされよう。

### アゲル

「やる」に対する「アゲル」も、一丁寧法動詞とされる。

○コンテニ アゲルノ オトマシー ー。

“こんなに沢山あげるの惜しいなあ。” (小男→母)

は、福井市に聞かれる一例である。

### クレル

『全国方言資料』第2巻「長野県更級郡大岡村芦の尻」の条には、

*f*コドモニ (*m*ウー) ツクッテクレタリ (*m*ヤッターリサ) シチャー  
こどもに ( ) 作って与えたり ( ) やったり。 しては

ハカシチャー データダオ

はかして 出したものですよ。

との言いかたが見られる。『全国方言資料』第2巻「山梨県南巨摩郡早川町奈良田」の条には、

*m*マット モッテ キテ クレタイトーガ ダメー コイダケ クレル  
 もっと 持って 来て あげたかったが だめでした。これだけ あげる  
 ドーヨ  
 のですよ。

との言いかたが見られる。『全国方言資料』第9巻の「長崎県老岐郡郷ノ浦町里触」の条には、

*f*ソーネ ソリャ モー クレテム ヨカバッチガ  
 そうですか、それは もう やっても よいのですが。

との言いかたが見られる。

これらに見られる「クレル」の言いかたは、一種の丁寧表現法になっていると解してよかるう。とすると、ここに、「クレル」丁寧法動詞が認められることになる。

### ナクナル

人の死亡することを言う「ナクナル」も、一丁寧法動詞とすることができようか。大橋勝男氏の教示によれば、千葉県安房郡白浜町では、

○アッデー オヤジガ ナクナンネーバ……。オヤジガ シナネーバ……。  
 (あれで)  
 (老男→大橋氏)

○ナグレッチマッタ。 (初老女→大橋氏)

と言っているという。「ナグレル」に対して「ナクナル」がある。

「ナクナル」は、現象を客視して、これを静叙するものである。おのずから丁寧表現法になるのであろう。

モース (申す)

たとえば、土井八枝氏の『仙台の方言』には、

「なんともまづありがたもしやげしてがす」（どうもありがとうございます）

などである。これの「申す」は、——「申しあげ」となっているが、丁寧表現法の用法になっていよう。

この種の用例にはかぎらないことである。諸方で、「申す」が丁寧表現法にもつかわれていよう。

候

土田吉左衛門氏は、『飛驒のことば』の中で、

こんもんそー（名）

につき、

「御免候え」の意か。尻はぐり遊戯。

としていられる。越後の粟島に「候」ことばがあるとか、奥丹後に「候」ことばがあるとか、ときに言われてきた。伊豆諸島の利島では、

子どもたちが、「お早うソーロー」のように、ソウロウ文のことばを使って遊んでいると言います。

とのことである。（金田一春彦氏「伊豆七島」『NHK国語講座』昭和31年7月）利島について「候」ことばを指摘するむきは、他にもある。

私はいまだ、「候」ことばの確たるものはとらえ得ていない。感動詞「ソラ」の変、「ソロ」などが、「候」ことばと誤認されたりしている。

『全国方言資料』第1巻「青森県南津軽郡黒石町」の条の、

mニャ ウット ゴツツオニ ナテソロー

いや たいへん ごちそうに になりました。

は、たまたま「ソーロー」などという形を見せていて、私どもに、どういうことばなのだろう、といぶからせる。

## 第二章 丁寧法助動詞による丁寧表現法

### 第一節 マス モス

#### 一 モス

上来、長く、動詞類をとりあげてその丁寧表現法を見てきたが、これについて、以下にしばらく、助動詞類による丁寧表現法を見る。最初にとりあげられるのは、世上に通有の「マス」である。

九州南部地方内では、「～マス」に該当する表現法として、もっぱら「～モス」がおこなわれている。今、全国にわたって「マス」丁寧表現法助動詞を見ていくにあたって、国の南部地方から叙述をおこそうとすれば、まず、九州南部地域内の「モス」を問題にしなくてはならない。

鹿児島県下に「マス」はない。他地方に「マス」助動詞のおこなわれるのに相当して、鹿児島県下では、「モス」助動詞がおこなわれている。——所によっては「モース」形を見せてもいる。

「モス」「モース」が「申す」に出たものであることは、すでに人のよく知るところであろう。

上には鹿児島県下にとったが、奄美諸島は、「モス」「モース」の言いかたを見せない。(つづいて沖縄県下もまた同様である。)

九州南部の「モス」ことばが、他地方通有の「マス」ことばにそっくりおなじものになっているかどうかは、瀬戸内海島嶼出身の私には、しかとはわかりかねることである。現地の「モス」「モース」のつかわれざまを見るのに、おそらくはこれが、他地方の「マス」ことばにごく近いものになっているであろう

と推察されるのであるが、保証のかぎりではない。

ここには、念のためいちおうの疑念を表明しておきたい。かつてこんなことがあった。山陽線東上の車中、鹿児島駅以来同道の一種子島老男（旧西之表町出身）が、進路を錯覚して、“ガツイ九州サ モドッテ イク ヨーナ 気が シモス。”（まったく九州にもどっていくような気がします。）と言った。私は、この時、この素朴な表現に接して——相手が老年の人であったのにもよってか、「～モス」になにかしら古典的な風韻を感じた。ともかくも、「申す」ことばの敦厚な心ねの流露を、「シモス」に感じた。「モス」は「マス」とおなじものになっているとされようと、私には、この実例の「モス」が、「マス」とは一脈ちがった内実を持っているように思われた。さて、鹿児島県下の人たちには、「モス」ことばについてのどのような内観があるのだろうか。「申す」の残影をふんでいるからには、なにか私を感じたのに通じるようなものをも、人々は、意識の底に沈めているかもしれない。あるいはまた、人々は、まったく単純に、「モス」「モース」を「マス」的につかっているのかもしれない。

鹿児島県下の「モス」ことばの実態を見る。

○アソビー イッモソ カイ。

“あそびに行ってくださいかい。”

は、薩摩西南、笠沙半島での一例である。

○オヤットサー ゴアンソ。

おつかれさんでございましょう。

は、大隅東岸、内之浦での一例である。——「ゴアンソ」に「ござりモソ」が見られる。

種子島では、「モス」ことばが、主として「モース」形でおこなわれている。

○オマヤー ドケー イキョーリモース カーイ。

あんたはどこへ行ってらっしゃる（行ってる）？

は、「～モース」の一例である。（この例などは、自分の動作に関してでは

なく、相手の動作に関して「モース」をつかっているの、その、丁寧表現法であることが、わかりやすい。)

トカラ列島内では、「モース」ではなくて「モス」がおこなわれているか。井上一男氏の「硫黄島方言集」(『方言』第四卷第九号 昭和9年9月)には、  
行つて参ります(イタッキモス)  
というのなどが見える。

屋久島では、

○ヤッケー ナイモシタ。

おせわになりました。

などと、「モス」ことばがおこなわれている。

薩摩の甑島では、「モス」とともに「モース」がおこなわれているらしい。早く、春日政治博士は、「甑島に遺れるマラスルとメーラスル」(『九大国文学』第二号)で、

因みに丁寧助動詞マスの位置には、全島モス又はモースを用ゐることは、  
鹿児島方言と一般である。

と述べていられる。北条忠雄氏が「甑島語法の考察」(『方言』第八卷第二号 昭和13年5月)にかかげられた「モース」例の一つは、

オチャツテ、タモイ<sup>リ</sup>ヤイモーセ。(中甑村)

お出でになつて下さいませ。

である。(この例も、相手の動作に関して「モーセ」と言っている。)

薩摩半島南辺地域にも、「モース」長音形があるらしい。

県下での、「モス」助動詞の活用を見よう。(「モース」助動詞の活用も、「モス」の準じて考えとることができる。)未然形は「モサ」「モハ」である。連用形は「モン」である。終止形は「モス」である。假定形はない。命令形は「モン」などである。なお、未来形(意向形)の「モン」がある。終止形には「モン」の形の出ることもある。——下に「デ」や「ド」の音などがきたばあいである。終止形に「モン」のあらわれるばあいもある。

*m*メヅラスカ フトカ スイクッオバ アイガトサゲモシナ

珍しい 大きな すいかを ありがとうございますねえ。

など。『全国方言資料』第6巻「鹿児島県枕崎市鹿籠」終止形に「モヒ」の  
あらわれるばあいもある。

*m*チャ トッハッチモヒデー

では 取って行きますから。

など。『全国方言資料』第6巻「鹿児島県肝属郡高山町麓」終止形に「モイ」  
のあらわれるばあいもある。

*f*ハイ ヤメ オチャイ モイナラ ケガ シヤイ モサンゴッシヤッタ

はい、山に 行かれ ますなら けがを しない ようにして

モイモスナー

くださいね。

など。『全国方言資料』第6巻「鹿児島県枕崎市鹿籠」つぎに、命令形「モン」  
が「モイ」になってもいる。

*f*ハイ ハヨシテ モドッ オチャイモイ

はい、早く 帰って おいでなさい。

は、「鹿児島県枕崎市鹿籠」(『全国方言資料』第6巻)の一例である。つぎに、  
未来形に「モッソー」の聞こえることもあるか。『全国方言資料』第6巻の「鹿  
児島県枕崎市鹿籠」の条には、

*f*ハー ヨンジューネンカラ ナイモッソーナー

はあ、40年にも なりますかねえ。

とある。つぎに、「モス」終止形が、文末詞の「ワ」と結合して「モサ」にな  
ってもいる。

○ハー モ ヒトガ トイチッモサ。

(あの人は、焼酎を人によく振舞うから) ハー、もう、人が取りつき  
ますよ。(老女→老女)

は、井上親雄氏が教示せられた、薩摩北部内の一例である。つぎに、連用形に

促音の出るものも見られる。

f………… オシオー マゼモッセー ソシテ ソラ キナコエ オシヨト  
 …………… お塩を まぜまして、 そして そら きなこに お塩と  
 マゼッセー ……………  
 まぜて ……………。

などのばあいである。(『全国方言資料』第6巻「鹿児島県鹿児島市」)連用形は「モヒ」にもなり、その「モヒ」が「ヒ」だけの形になることもある。「イキモヒタ」が「イキヒタ」になるなど。連用形「モン」が「シ」にもなっている。「イキシタ」「デキシタ」(できモンタ)など。

○ユカラ アガッテカラ キシタ オ。

湯から上って来ましたよ。(初老女→初老女)

は、井上氏の教示せられたものである。終止形「モン」が「シ」形であらわれることもある。薩摩北部では、

○ハイ。ヤッパイ ヨーリョーガ アシ ト。

はい。やっぱり要領があるんですよ(ありモン ト)。

などとも言う。未然形の「モハ」は、たとえば「行ッキャハん」(行きヤリモハん)でのように、「モ」の見えない形にもなっている。「オイヤモハん」(居りヤリモハん)が「オイヤハん」になっているのも同様である。

このほかになお、諸態の変化を指摘することができる。たとえば、「よ<sup>ヨカイ</sup>かりモス」の「ヨカンス」,「まかり申した」の「マカンシタ」(「まかり申せ」の「マカンセ」),「居りモサン」の「オンサン」など。

「モス」は、各活用形ごとに自在に運用されており、また、各活用形に関して、奔放とも言えるほどに諸形態がひきおこされている。これほどに、「モス」ことばは、当県下の生活語の中に、普遍的な丁寧法助動詞となっているのである。「たもりモス」が、「〜タモス」「〜タモンセ」などの形で多用されていることなどは、言うまでもない。

九州地方は、「マラスル」系統の「マス」ことばの、いかにも地ことばとし

てよくおこなわれる所である。この九州に、南部を画して、このように「モス」ことばのよくおこなわれているのは、なぜだろうか。（——「マス」ことばはおこなわれることなしに。）察するに、九州南部地方では——（あるいは薩隅地方と言うべきか。）——、早くから、「申す」謙譲法助動詞、あるいは「申す」謙譲法助動詞が、ことにつよくおこなわれたのであろう。それは、当地方の敬意表現法に見られる諸多の敬語法との関連もよく、そうなったのだと思われる。敬意表現法の関連構造の中で、「申す」ことばがさかんにとりおこなわれたものと思われる。今日の種子島の方言状態は、今なお、そのような「申す」ことばの残影をよく示している。すなわち、老年層では、

○ヨカゴト ユーテ タモリモーセ ナー。

よろしく言ってくださいませねえ。

○マー ヨーコソ オヂャッテ オクリャリモーシタ。

まあ、ようこそおいでいただきました。

などのように、「モーセ」「モーシ」などを用いることがいちじるしい。（今日、一般の傾向としては、「モス」などの短呼形のおこなわれるのが見られるという。）こうして、謙譲法の「申す」を用いつつ、人々は、それを、丁寧の表現にした。丁寧の表現にすることが薩隅地方でつよく慣熟し、それが一般化するとともに、「モース」などの長呼形も、「モス」などの短呼形にされたのである。要するに、九州南部での丁寧法助動詞「モス」の定着は、「申す」を用いる謙譲法の「非謙譲ていねい表現法」化に淵源するものであろう。——謙譲法外形の非謙譲の「ていねい表現法」が、丁寧法助動詞「モス」を生んだ。昔の「読み申す」は、今の「読みモス」であり、これは、他地方の「読みマス」と、ほとんどえらぶところがない。

薩隅に「参らする」の「メーラスル」などは現に存在するのに、「参らする」→「マラスル」起源の「マス」はおこなわれていない。そのことからして明らかなおおりに、当地域には、「申す」謙譲法外形の「非謙譲ていねい表現法」化が、ひとえにいちじるしかったのである。

「モース」が「モス」と短呼されていることについては、若干の考察を加えることができる。用法の転化が語形式の変移を招いたとすることは容易であるが、なお、つぎのことも考えられる。九州南部地方では、「書く」も「カッ」であり、「靴」も「クッ」である。聞こえの短呼が明白である。つぎに、大根は「デコン」と言う。「西郷どん」も「セゴドン」である。「サイ」の「セ」など、[ai] 連母音の〔e〕化がいちじるしい。「デコン」「セゴドン」などの発音はまた、短呼のいちじるしいものであろう。このような音声基盤の土地にあっては、「モース」も「モス」と短呼されやすかったはずなのではないか。

九州南部地方にかぎったことではない。古文獻にも、「マウス（申す）の「マス」になったものが見える。木枝増一氏は、その『高等国文法新講 品詞篇』（東洋図書株式会社 昭和13年11月）のp.594に、

あな心憂などまし騒げど、（栄花物語）

とするしてられる。春日和男氏も、『ます』及びその類語の発生と展開』（『国文学』第五卷第二号 昭和35年1月号臨時増刊）の中で、

次にはマウス（申す）の音約と見られるマス、例えば

人のそしりをおひ給ふこと歎かしげにまし給ふ（栄華 月の宴）

の如き謙讓の動詞マスのことである。

と述べてられる。

室町時代末には、種々の短音化傾向が見られたか。原刊本『捷解新語』には、

うれし御さる

などとある。たまたまのことかどうか、豊臣秀吉は、淀殿浅井氏宛消息で、「火の用心」を「ひのよ志ん」と書きあらわしている。

薩隅にさかんな「モス」ことばが、例によって、薩隅地方に関連の深い日向南部にもおこなわれている。都城方面の「モス」ことばは、薩隅のままである。

○ダイモ キモハンヂャンタ。

だれも来ませんでした。

など。日向中部西奥方面にも、「モス」（「モース」も）ことばの遺存しているのが見られる。古老が、「何々を アゲモソ カイ。」（何々をあげましょうか。）、「イッテ キモソ。」（行ってきましょう。）などと言っている。

○カ<sup>ラ</sup>ロ<sup>シ</sup>テ クイガナリ<sup>モ</sup>ーサンナラ ユ<sup>デ</sup>モ ミズ<sup>デ</sup>モ イ<sup>レ</sup>テ タ<sup>モ</sup>  
ッ<sup>テ</sup> クレヤリ<sup>モ</sup>ーセ。

からくてたべることができませんようでしたら、湯でも水でも入れて  
たべてくださいませ。

は、「モーセ」形の例である。この地域の北方にあたる椎葉地方にも、「モス」  
ことばがあるか。小田寛次郎氏の「椎葉紀行」には、

テーギメシ<sup>モ</sup>ーシタナラー、御苦労様でした。

とある。(文末詞「ナラー」が見られる。「ラー」は、薩摩半島南部などにい  
ちじるしい、九州南部独特の文末詞である。それが、ここにも見られるほどな  
ので、「〜モーシ」などの言いかたがあってもふしぎではないように思われ  
る。)

上の日向地方に関連して、熊本県南部域にも「モス(モース)」ことばが見ら  
れる。——薩隅地方なみである。球磨地方の「モス」ことばについて報じる文  
献が、一・二にとどまらず、ある。私がとらえ得た球磨郡一勝地村での実例は、

○ミ<sup>テ</sup> クダハン<sup>モ</sup>シ ヨ。

見てくださいませよ。

○ミ<sup>テ</sup> クダン<sup>モ</sup>サン カ。

見てくださいませんか。

などである。瀬戸口俊治氏は、人吉方面で、「ナハンモシタ」に相当する「ナ  
ハンムシタ」を聞いていられる。森田武氏は、つぎのように教示せられた。

人吉では、「何々し<sup>ナ</sup>ン<sup>モ</sup>ーシ。」「イ<sup>コ</sup>ーテ 行<sup>キ</sup>ナン<sup>モ</sup>ーシ。」(やすんで  
行きなさいませ。)などと言う。人吉を除いてその奥の、上球磨地域では、  
「申し」を言わぬ。下球磨の特徴は、「来<sup>キ</sup>ナン<sup>モ</sup>ーシ」「来<sup>キ</sup>ナン<sup>モ</sup>シタ テ  
ー。」である。

斎藤俊三氏の『熊本県南部方言考』(熊本県南部方言考刊行会 昭和33年2月)  
には、

モス (もうす)

右は「イキモシタ、イキモサン」の「モス」である。八代、水俣にも曾って農村の老人語に在ったが現在は無い。

とある。

天草内に、今も「モス」ことばがあるらしいのは、注目にあたいる。松本美恵氏は、「天草一町田方言における敬語法」（熊本女子大『国文研究』第十四号 昭和43年）で、

○モーチナット ヤーテ アゲモシエ。

“餅でも焼いてさしあげなさい。（老・男）”

との例をあげていられる。——もっともこの「〜モシエ」は、謙讓表現法になっているとも解されようか。氏の、つぎの例はどうであろう。

○マーダ アイモーシタランゴテ ゴザスパッテ マータ キナシ タトキ  
ヤ アワシエ モーシテ クダッシエ。

“まだ会い足りないようにございますが、また今度いらっしゃったときは、おじゃまさせてください。（老・女→青・女）”

「アイモーシタランゴテ」などとある。ともあれ、問題になる「モス(モース)」ことばがあると見られよう。ちなみに天草本渡では、かつて、「オセワナリモシタ。」というのは、聞くことができなかった。

長崎県五島列島内に、一種の「モス」があるか。林田明氏は、私に提示せられたその『五島方言考』（稿本 昭昭25年）で、

頂戴する→もりゃあもす

お願いする→おねげえもす

（卑讓の場合(動作を讓る))

福江を中心にして

としていられる。

九州から出はなれて、「モス」「モース」をたずねてみる。今、私が問題とするのは、次下に述べる程度のものである。

「山口県都濃郡都濃町」では、

fハー モッテ オイデモシエ

ええ、持って おいでなさい。

などと言うらしい。(『全国方言資料』第5巻)「オイデモシエ」とあるが、この「モシエ」は、丁寧用法のものとなっていると見てよいのだろうか、どうだろうか。

東北地方内に、問題の事象が見いだされる。まず岩手県下が注目される。『気仙方言誌』(自家版 昭和39年11月)によれば、その「第2部 語彙」(菊池武人氏)のうちに、

アゲモウス……………差し上げる。神仏に供物を奉げる。

アガンモサレ……………①お入り下さい②召し上つて下さい。

などの記述が見られる。『昔話研究』の第六号(昭和10年10月)に見られる平野直氏「南部昔話抄(三)」の「神徳丸齋徳丸」には、

お<sup>お</sup>子<sup>こ</sup>や、薬<sup>こ</sup>呑み申さい (継母→継子)

の「〜モーサイ」例が見られ、また、

お城の大きな櫻の木の下に、大きな池があるはんて、そこで、ちんごろ〜と啼いて呉もさい。(神徳丸(継子)→鷹)

との「〜モサイ」例が見られる。『昔話研究』第十号(昭和11年2月)の「木舟泥舟」(平野直氏「南部昔話抄(五)」)には、

丁度今が刈り終つた所だはんて、そなだ馬になり申せ (兎→貉)

の「〜モーセ」例が見られる。小松代融一氏の『岩手方言の語彙』の「旧南部領」の部には、

ソモス 言う(謙)

ソーモスカ そうですか

ヘーモセエ お入り下さい

ヤルモシエ やりなさい

などの記事が見られる。——「〜モシエ」が「〜ナサイ」相当のものにな

っている。ちなみに「岩手県胆沢郡佐倉河村」(『全国方言資料』第1巻)には、

*m*………… マズ オメートー モーサンス マズ  
………… おめでとう ございます。

というのがある。「ゴザイマス」相当の「モーサンス」が見える。

岩手県下にならぶ宮城県下が、やはり問題の地である。早く、『東北方言集』には、

左様にいはれまうすと私は何とも面目がありませぬ「宮南」  
との例文がかかげられている。私は、かつて仙台で、当時八十六歳という老嫗  
から、

○シ[i]ッテタ コタ オシ[i]エモス[ü]カラ。

知ってることは教えますから。

○シ[i]ッテタ コタ オハナン[i] シ[i]ス[ü]カラ。

知ってることはお話ししますから。

などというのを聞いた。この老嫗からはまた、「タマレ モシ[i]テ、」(た  
のまれモシテ)などというのを聞いている。松島湾岸で老男から聞いた「モー  
ス」の一例は、

○(シェンシェは、昔のことを)キキモースンダガラ ネ。

(先生は、昔のことを)聞きモースんだからね。

である。——「モース」とあるけれども、現に「先生」について言っている。  
非謙譲の「ていねい表現法」になっていることはたしかであろう。

山形県下にも問題例がある。板垣スエ氏「北村山郡昔話—山形県・西郷村名  
取—」(『昔話研究』第二十三号 昭和12年9月)には、

「けるもす、けるもす」(上げます〜)と云つてナレ、卵一つ貰つて、猿  
もさ行つたけど。

とある。私が現地得た『米沢方言手拭』(方言手拭)には、

さえ〜ごめんどうに成りもうして

(何時もお世話様です)

との文句がのっている。

東北地方に、九州南部地方のと思えば合わせることでできる問題事象が、以上のように見わたされるのは、興味ぶかいことである。西南と東北との一致を言うのに急であってはならないが、関西地方や中部地方・関東地方において、奥羽の地方に、上のような「申す」用法が見られるのは、意義ぶかい分布を示すものと解される。

伊豆大島に、「買っとき申せ」「安うしとき申す」などの「モース」ことばがあるのかどうか。大島油を売る女性たちのことばとして、「モース」ことばが、諸方の人々に受けとられている。大分県日田郡では、土地の人が、

○まけとくけん，トリモース。

○コビッチョ，ヒラキモース。

“子どもさんたち，そこをのいておあげください。”

というようなことばを、「大島油を売りにきた女」から聞いたと語った。大島のことは定かではない。かりに、伊豆諸島にもこうした「モース」があったとしたら、これと、上述の西南・東北の分布とが、関連して、「申す」ことばの、かつての全国的な流行を証明することになるうか。

## 二 南島の「ます」相当のもの

南島方面に「マス」はおこなわわれていない。

ところで、「ます」の意ととればとりうるものが見いだされる。

与論島では、「行きましょ。」ときそう時に、目上へは「イカン ハン。」と言ひ、目下には「イカン ビン。」と言うという。（“自分一人が行く時も” <町博光氏教示「私が行こうか？」の時も>であるという。）

沖縄本島的那覇市などでは、「菓子があります。」を「クワーンシガ アイビーン。」と言ひ。沖縄本島内で、また、「イカビーン。」（行きます。）「イチャビーン。」（行きます。）（土地によっては「イチャビーン。」）「ユマビーン。」（読みます。）などが聞かれる。また、「行きましょ。」の「イチャビラ。」が聞かれ

る。

こういう「ャビラ」に関しては、旧来、「侍り」ことばかとの推論がなされてもきた。これについての金城朝永氏のご見解は、『那覇方言概説』（三省堂 昭和19年8月）に見える。氏は説かれる。「また、 $waj ko : jabira$  (< $ko : i-jabira$ , 私買ひませう)などにおける、 $jabi : \eta$ の未然形  $jabira$ は、「侍ら」( $habera$ )の音に似てゐるので、「侍り言葉」が那覇方言に行はれてゐるかの如く、考へられてゐたものであるが、 $jabira$ と $habera$ とを比較した場合、第二音節以下の $be > bi$ ,  $ra = ra$ はよいとしても国語の $ha$ が、那覇方言で $ja$ となるといふ対応関係は見当らないので、両者を直ちに同根の語と解するのは早計で、もつと、考究してみる余地が充分あると思ふ。」

宮古島では、「学校へ行きます。」というような時に、「学校へ  $\overline{イカヤーン}$ 。」と目上には言っているという。同等には「 $\overline{イカッチャーン}$ 。」と言うのだという。与那国島では、「菓子があります。」を、「 $\overline{カチャーン}$ 。」と言うという。今日、「ャビラ」「ャビーン」などに関して「侍り」ことばを想定する人は、南島内の研究者にも、すくなくないのであろうか。

ここに、金城氏の書から、問題の語の活用表を引用させていただく。

本形 (j)abi :  $\eta$     未然 (j)abira    連用 (j)abi :

終止 (j)abi :  $\eta$     連体 (j)abi : ru    已然 (j)abiri

命令 (j)abiri

なお、与論島から、問題の語の実例をひくなら、

○ $\overline{イチーン}$   $\overline{ヤッケー}$  $\overline{パッカイ}$   $\overline{ナヤビュン}$ 。

いつもごやっかいにばかりなります。

などがある。沖永良部島から、問題の語の実例をひくなら、

○ $\overline{チ}$   $\overline{ネツワ}$   $\overline{イヂャブラン}$   $\overline{ドー}$ 。

もう熱は出ないでしょうね。

などがある。

いずれにしても、南島に、特異な一丁寧表現法助動詞が認められる。(南島方言では、これと、「～ミソリー」関係の言いかただが、敬語法の二大特色になっている。)

共通語の「ます」表現法に相当することばづかいは、日本語のどの方言でも、必要欠くべからざるものにちがいない。

### 三 九州の「メス」

九州地方内に、「召ス」かと思れわる語の諸所に遺存していることは、すでに前著『方言敬語法の研究』の中で指摘するところがあった。本動詞として「召ス」が用いられるばかりでなく、動詞複合の第二動詞として、あるいは補助動詞(すなわち助動詞)として、これの用いられるさまが見られる。主としては、鹿児島県下、それにつづく肥後南部、福岡県筑後、大分県内(おもに国東半島)に、上述の「召ス」ことばが見いだされる。(『嶋原半嶋方言の研究』にも、「とんさん の とーらし めして」「いわし めした」などとある。)

ちなみに、近畿地方・中部地方や関東地方・東北地方のうちにも、「召ス」ことばが、わずかながら見いだされる。

筑後柳川の、いちじるしい「召ス」ことばの中での二例は、

○オアガリメシエ。

おあがりなさいませ。

○先生が オリメス。

である。

九州での「召ス」の「～メス」用法に関して、あえて一つのうたがいを加えるならば、「マス」「マセ」などが、「メス」「メセ」などになったりもしなかったらうかとされる。「マ」から「メ」への音転は、さほど不自由なことではあるまい。あまりにも自由な「～メス」用法であるのにつけて、まずは一つのうたがいをおこしてみるのである。

しかし、このうたがいは、ほとんど無用であろう。「マス」ことばが地こと

ばとしておこなわれることのない、九州南部地方（鹿児島県下ならびにそれに  
つながる肥後南部）に見られる「来<sup>マ</sup>メシタ」などは、たしかに「召ス」の助動  
詞用法を見せるものにもちがいあるまい。——現に「召ス」の本動詞がおこなわ  
れているのである。大分県内の、——私が国東半島内で聞いた例、

○アス<sup>マ</sup>アバン キ<sup>マ</sup>メシエー。

あすの晩おいでなさい。

の「キ<sup>マ</sup>メシエー」にしても、「来ませ」ではではなくて「キ召セ」なのであろ  
う。

（「召ス」は、いつの時代にか、全国にわたってかなり広く存在し得たのでは  
なからうか。そのあとかたが諸方に見られるのではないか。九州では、とりわ  
けよく「召ス」が生きて、このように助動詞的に用いられることになっている  
のだと思われる。）

#### 四 「マス」汎説

丁寧表現法の助動詞としての「マス」が、日本語の助動詞の中でも、特異な、  
しかもおこなわれることのいちじるしい助動詞であることは、多く言うまでも  
ない。

「マス」丁寧法助動詞の認識は、一般につぎのようなものである。

「ます」は、話しぶりを丁寧にするのに用ひる語ですから、話手・話相手・  
第三者を問はず、その動作・存在を表はす動詞につけます。

（橋本進吉氏『新文典 別記』 富山房 昭和7年4月）

——諸家みなこの「マス」に命令形「マセ」「マシ」を認めていられる。

「マス」助動詞は、要するに、私どもが表現の場にしがたがってもの言いをして  
いねいにするための特定語にほかなるまい。私どもは、場面に適応しつつ、お  
のずから「マス」ことばを用いている。

ところで、私は、一方言研究者として、ずいぶん久しく、命令形「マセ（マ  
シ）」の問題に悩んできた。「どうどうしなさいマセ。」などの「マセ」が、はた

して単純に「丁寧」としうるものだろうかと考えさせられてきたのである。尊敬感情のものではなかろうか、と、たえず思わせられてきた。中にはまた、謙譲の気もちをくまねばならないものもあると思ってきた。

私個人の考える、一般論的なものであるが、丁寧の「ます」は、命令形の用法を持たないのが妥当ではないかと思われる。「ここにありマス。」「あすは晴れマス。」といったような丁寧表現を見る時、丁寧表示の「マス」に、「マセ」命令形があつたりしたのでは、変なように思われる。丁寧の助動詞として、「マス」と「デス」とを列挙してみる。「デス」について、「マセ」相当の命令形を考えようとしても、「デセ」などを考えとることはできない。「デス」助動詞に命令形用法などのあり得ないと同様に、丁寧の「マス」助動詞にも、命令形用法はなくて当然なのではないか。こういう見地のもとで、私は「マス」助動詞に関する、諸家のかかげる命令形「マセ」「マシ」は、特用のものと考えてきた。命令形は、つかえば、尊敬表現になるか謙譲表現になるかのものがある。

命令形「マセ(シ)」が特定のものであり、人々に、対人意識のもとで特用されるものであることを、卑近な一事例からもながめてみたい。年おさない子が、おとなの**ことば**をまねて、「いらっしやいませ。」と言おうとし、いかにも心をこめたようすで、「イラッシャイマセイ。」と言う。(身辺の実例である。)また、他児は、おとなの**口ぶり**をまねて、「がんばって クダサイマセン。」と言った。「マセイ」も「マセン」も、ともに、「マセ」の言いかたを、心ことに重ねてしたためにひきおこされた形態ではないか。すなわち、「マセイ」や「マセン」には、対人鄭重意識の、ことに顕著なものがあるように解される。「マセ」は、そういった役わりに立つ、特別のものではないか。

「アリマセ。」の言いかたなどはありようもないことを、かさねて思いたい。

命令形使用は、すべて対他意識によってつよくささえられているものであろう。「マセ(シ)」のばあいもそうである。

諸方言状態について見るのに、「…………マセ。」とあつたら、これは、現実に

尊敬か謙讓かの表現になっていると見られる。私は、尊敬と謙讓とのわかれかたを、つぎのように見ている。すなわち、先方の動作に関して「マセ(シ)」がつかわれたら、これは尊敬である。当方の動作に関してつかうばあいは、謙讓としうる。「あれ 見マセ。」とあれば、これは尊敬表現である。「早くなさいマセ。」のばあいも同様である。「案内して あげマセ。」とあれば、——「あげる」のはこちらの動作であるから、謙讓表現である。(前著『方言敬語法の研究』第五章第十一節および本書第一部第二章第十六節 参照)

命令形を区別して機能の相違をこれに認定することに関しては、なにほどかのこだわりがないでもない。語に関して、諸活用形を通じ、それらに一貫する機能的価値を見いだすことができれば、それは、説明としてあざやかなものであろう。しかし、私は、やはり命令形という活用形の特殊性を思わざるを得ない。さきには、謙讓表現法動詞を見たさい、「ツカーサル」(つかわさる)の命令形「ツカーサイ」の類などを、私は、特定謙讓法動詞とした。「ツカーサイ」が変じて「ツカイ」となり、「ツカー」となってもいる。これらのものには、特定謙讓法動詞の性格がもはや明白である。尊敬法動詞の活用形の命令形について、そこに、私は、謙讓表現法動詞としての機能を認めざるを得なかった。(「クダサイ」類もそう見られるものである。) 特定謙讓法動詞のあつかいに等しく、今、丁寧表現法助動詞「マス」の命令形に関しても、これを、他活用形群からはきりはなして、特定尊敬(または謙讓)表現用の命令形と見る。

さきには、九州南部の「モス」ことばをとりあつかって、丁寧表現法助動詞としての「モス(モース)」に、命令形を認めた。(P. 350)「モス」のばあいは、現用の命令形「モン」などをもふくめて一律に丁寧表現法を認め、「マス」のばあいには、「マセ」命令形だけを別あつかいにするのは、矛盾したとりあつかいではないかと批判されようか。これについては、つぎのように考えてみる。「モーセ」が「上がりモーセ」などとあると、「モース」は元来、謙讓法動詞なので、そこに謙讓法外形の非謙讓の「ていねい表現法」が成りたつ。そういう「ていねい表現法」が慣熟固定した結果、「～モーセ」「～モセ」なども丁

丁寧表現法としうるものになった。こう考えると、この「モセ（モーセ）」なども、「モス（モース）」丁寧表現法助動詞の活用系列においてよいことになる。

松村明氏編『日本文法大辞典』（明治書院 昭和46年10月）P.799の「ます」の「変遷」の条を見ると、

命令形「ませ」は古く、「まし」は新しい。この命令形は尊敬または謙讓の動詞につくので、この命令形もそれに準ずる語として扱い、他の活用形と区別すべきであろう。（吉田金彦氏）

との説明があがっている。私は、これに敬意を表したいと思う。ただ、方言上では、「行きマセ」「来<sup>キ</sup>マセ」（「マヘ」「マエ」「マイ」など）などともあるので、「この命令形は尊敬または謙讓の動詞につくので、」とは言えない。

以上、命令形を特論してきたが、方言によっては、「マセ（シ）」謙讓表現法のばあいには、なお連用形その他にもわたって、謙讓表現法の認められることがある。その種のことについては、当の箇所々々で、事例を見ることにしたい。（「マス」助動詞の謙讓用法習慣に関しては、「マス」の「申す」起源を考えることもできる。P.354参照。「マス」用法の自然発展もあるか。）

以下、現代諸方言状態の全般にわたって、「マス」表現法の世界を見ていこう。これを、そこそこで、「マセ」特定尊敬表現用命令形に着目して、つぎのように見わけることができる。

- ① 通常の動詞に、かまわず「マセ」をつけてもいる地域（——「見マセ」のような言いかたとともに、「オ見マセ」のような言いかたがなされたりしてもいる。）
- ② 「来なさいマセ」「おいでなさいマセ」「しなさいマセ」「なさいマセ」「つかあさいマセ」「下さいマセ」「おっしゃいマセ」「いらっしゃいマセ」などと、「マセ（または「マシ」）」の用いられる地域（こちらは、要するに、「マセ」が、通常動詞に直接させられることのない地域である。——「なさいマセ（シ）」だと、この「なさい」は、「なさる」という尊敬法動詞である

から、「行く」や「来る」の通常動詞とはちがうわけである。なお、「おいでませ」は、「おいでなさいませ」からはなして注意すべきものである。）

□「～ませ」に加えて、「～ますな」（禁止命令形）を考えあわせることができる。「命令形」「禁止命令形」は、同種のもと見てよい。

①②の別は、すなわち、「マス」助動詞のおこなわれかたの広狭とも見ることができる。「行きませ」「おいでませ」などのばあいの「ませ」は、「行きなさいませ」「おいでなさいませ」の「なさいませ（またはその転のなさんせ）」に該当するとも見ることができよう。「ませ」のはたらきかたは、多角的である。

特定謙讓用の「ませ」命令形（ないしは他の活用形）に着目して、諸方言・諸地域を見わけるとは、今の私には、できかねる。じっさいに、問題の事態は遺存的のようであって、そこにもここにも広い分布が認められるというようではない。（総じて、関西内に、この種の微妙な「マス」用法が見いだされるようである。）

#### 以下の記述方針

「マス」の命令形（ならびに禁止命令形）——主として——について、「尊敬」法または「謙讓」法を見るべきことを述べた。残るものは「丁寧」と見られることになる。ところで、

○私は 知りません。

というのであっても、「知る」という当方の動作に関する「ません」は、いきおい謙讓の意をあらわしがちである。——純粹丁寧とはしがたい。また、

○どこへ 行きませ か。

などであっても、「行く」という先方の動作に関する「マス」は、尊敬表現に参与していないとはしがたいであろう。——対話相手をはっきりとしているだけに、ただの「丁寧」とはしがたいように思われる。

○久しぶりに 雪が 降りました ね。

などのセンテンスである、いわゆる無生物が表現の主部にとりたてられている

るので、「～マス」は、いかにも丁寧表現法然としており、まぎれがないありさまである。

人間に関してつかわれる「マス」についての、記述処理の困難さが痛感される。

以下の、地域別の「マス」記述では、つぎのような方針にそうことにしたい。

- 「マス」は、本体的には、「丁寧の助動詞」(鄭重語・丁寧語)であるとして、これの各活用形を一括方式でとりあげることにつとめる。
  - 「マセ(シ)」と「マス」とには、用法(機能)上の変異があることを認め、各方言ごとに、命令形の活動を注視する。
- 命令形(禁止命令形も)は、特定尊敬表現法または特定謙讓表現法をなすものとする。

実例本位の説明をしていく。(「尊敬」などの注解は、省略してもいく。)

- 「マセ(シ)」に関連して、他活用形の謙讓用法もあるようであれば、それをとりたてることにしていく。

## 五 九州地方の「マス」

「モス(モース)」のおこなわれる九州南部地域には、「マス」ことばがない。共通語の「マス」が流入して、鹿児島県下でこれがおこなわれたりもしているが、それは、今、別問題とする。

鹿児島県下の「行キマスナ」「書キマスナ」などについては、上村孝二氏の累次のご発表がある。

宮崎県下の大部分は、共通語なみの「マス」ことばのおこなわれる所である。九州南部地域に関連する底脈を持つと考えられる日向中部西奥にしても、

○オチャ シマシヨール ヤ。

お三時にしましよるよ。

といったようなことばづかいを見せてもいる。

熊本県下から長崎・佐賀・福岡の三県下にかけては、「マッシュェン」「マッシ

ョー」などの、特色ある「マス」ことばがおこなわれている。(これが、従来、九州弁の一代表的事項ともされてきた。)

肥筑の地方に、「マッスル」色の「マス」ことばがおこなわれているのは、いかにもと思われて、興味が深い。「マッスル」が「マラスル」起源のものであるとするならば、「マラスル」の前身の「メーラスル(参らする)」などの言いかたは、現に九州南部に遺存してもいることであるから、九州域に「マッスル」色が見られても、もっとものことに思われる。

九州東がわが「マッスル」などの促音形を見せないのは、既有的ものを失ったと解してよいのではないか。(中四国がわかからの言語影響によったことであろう。)(「ヨカ」ことばの衰退と、軌を一にしていよう。)

熊本県下は、「マッスル」系の言いかたをよく見せている。「マッセ(シエ)ン」「マッシュョー」「マッシュ」などがよくおこなわれており、命令形「マッセ(シエ)」の用いられることもさかんである。

○ソナ、カエリ オヨルマッシュェ。

ほんなら、帰りにお寄りなさい。

は、阿蘇山南麓の命令形例である。——「お寄りナサイマセ」とはなっていない。

○オシマイナハリマッセ。

おしまいなさいませ。

これは、熊本市内の一例である。「通常動詞+マセ」のばあい、「オ行きマッセ」「オたべマッシュェ」などとも、「行きマッセ」「たべマッシュェ」などともある。(「おいでマッセ」のばあいは、「いでマッセ」を見るができない。)未来形の「マッシュョ」が「マッシュ」ともあるのについては、どういう時に「マッシュ」となるのか、人にもたずね、私自身、注意もしてきたが、いまだそのあらわれかたを判別し得てはいない。人によってのちがいだと言う人もある。

○ジェンブ、ハナシテ ミマッシュェ カ。

全部、話してみましょか。

は、阿蘇山南麓の「マッシュ」例である。終止形は、県下で、「マス」となったりもしている。

長崎県地方でもまた、「マス」ことばが、「マッスル」「マッシュョー」「マッシュュ」「マッシュェ」などの形でよくおこなわれている。禁止命令形は、「マスナ」である。壱岐・対島では、「マッス」終止形も聞かれるという。種ヶ島克巳氏が、その『平戸方言語法草案』（未発表稿本）で示された「マッスル」の活用は、

行きまっせん　行きまっした　行きまっする　行きまっする時  
行きまっせば　お行きまっせ

である。五島では、終止形の「マッスル」がよく聞かれる。県下に、「オ+通常動詞+マッセ(シェ)」「通常動詞+マッセ(シェ)」の言いかたもよく聞かれる。

○オヤスンマッシュェー。

おやすみなさい。(辞去のあいさつ)

は、生月島の一例である。山口麻太郎氏の『続壱岐島方言集』にも、

オ書キマツセエ。

などとある。

タベマッセー  
カシマッセー  
オクレマッセー

などは、山本靖民氏の『島原半島方言集』の例である。

佐賀県下でも、「マッス」「マッセ(シェ)ン」などがよく聞かれる。

○ネンヂュー　オセワンナッテ　ホンナコテ　スミマッセン。

年中おせわになって、ほんとうにすみません。

は、佐賀県唐津市「城外ことば」の一例である。県下に、

○オシマッセ。

しなさい。(妻→夫)

などの「マッセ」の言いかたも注意される。

ちなみに、唐津市城内ことば——家中弁——では、「…………… ～マセう。」の言いかたの最高敬意表現法が聞かれる。たとえば人が、もっとも敦い敬意をこめて、「こっちへ オイデマシヨ。」などと言っている。

福岡県内も広くに、——東部の若松地方にもわたって、「マッセ(シェ)ン」「マシヨ」などの言いかたがよくおこなわれている。終止形「マッスル」(主として老)もあり、かつ「マッス」「マッス」「マス」もある。

○イチリグライ アリマシユ カ。

一里ぐらいありましょか。(老女)

これは、筑後での「マシユ」例である。かつて私が、筑前糸島半島の中部に滞在した時は、「マシユ」(ませう)は言わないと聞かされた。「マシヨ」が通用されていた。

○ソー シテ クダシマシ。

そうしてくださいませ。

これは、筑後内での命令形「マン」例である。——「マン」形がこの地にあるのは、注目にあたいする。

○オバチャン バケツバ カシマッセ。

おばちゃん、バケツを貸してちょうだい。(少女→中女)

は、筑前内の「マッセ」例である。「カシマッセ」とあって、「オカシマッセ」とはない。

「マッセ(シェ)ン」「マシヨ」など、促音のある「マス」ことばは、今日、しだいに促音のない「マス」ことばにおされてきていようか。一方では、促音のあるものの根づよさもうかがわれるけれども、また、その種のものの、年配の人たちがわに片よっていく傾向も認められるようである。

大分県下は、促音のない「マス」ことばの地である。命令形の言いかたに、「オ+動詞連用形+マセ」の尊敬の言いかたがある。「マセ」は「マン」ともある。柴田武氏編『お国ことばのユーモア』に、松田正義氏が「大分県日田市」の例として出された、「ヒザマズイちゃ足が痛かろう。スワッておくれまし。」

がある。小野米一氏の教示せられた豊後南部例の一つは、

○フ<sup>ラ</sup>ガ アイ<sup>タ</sup>ラ ハイ<sup>リ</sup>マシ<sup>エ</sup>イ。

風呂がわいたらおはいりなさいませ。

である。小野氏は、「動詞連用形+マセイ」の尊敬表現の度あいに関して、つぎの順位を示していただける。

イ<sup>キ</sup>マ<sup>セ</sup>イ → イ<sup>カ</sup>シャ<sup>リ</sup>ー → イ<sup>キ</sup>ナ<sup>サ</sup>レ → イ<sup>キ</sup>ナ<sup>ン</sup>セ → イ<sup>カ</sup>ン<sup>セ</sup>  
→ イ<sup>ケ</sup> ノ → イ<sup>ケ</sup>

これによれば、「イ<sup>キ</sup>マ<sup>セ</sup>イ」が最高の敬意表現法である。私が国東半島内で聞いた「オ〜マセ」例は、

○コ<sup>ッ</sup>チニ オ<sup>ア</sup>ガ<sup>リ</sup>マ<sup>セ</sup>。

こっちにお上がりなさい。

○オ<sup>キ</sup> オ<sup>ツ</sup>ケ<sup>マ</sup>シ<sup>ー</sup>。

お気をおつけなさい。(送辞)

などである。「マシ」の形が目される。なお、ここでは、「オ」をとらない「〜マセ(シ)」は聞くことができなかった。豊後南部では、「クレマシー」などが聞かれやすいか。県下に広く「マシ」命令形があり、それが、尊敬表現法に役だっている。(——「ナサイマシ」のような言いかたも、ともにおこなわれている。)

○モ<sup>ー</sup> ソ<sup>ゲ</sup>ー カ<sup>ム</sup>ーチ<sup>ョ</sup>ク<sup>レ</sup>マ<sup>ス</sup>ル<sup>ナ</sup>。

“もうそんなにして下さいますな。”

は、豊後南部内の、「〜マスルナ」禁止命令尊敬表現法の一例である。丁寧の「マス」の諸活用形では、「マシた」に隣って「マヒた」もあり、「マスレば」の「マスリャー」もある。「マセン」は、しばしば「マシエン」である。

## 六 中国地方の「マス」

中国地方内にも、「マス」の用法の注目すべきものを見せる所がある。

山口県地方では、「(オ) 動詞連用形+マセ」の尊敬表現法がよくおこなわれて

いる。

○オイデマセ。

○オイデマセ。

おいでなさい。

は、県下の東西によく聞かれる実例である。

○センセー。ゴハン アガリマセ。

先生。ごはんをおたべなさい。

は、小野田市で聞いた、中学一年生男子の発言例である。周防、祝島でも、

○キマセー。

来なさい。

○カキマスナー。

書きなさんな。

のような例を多く聞いた経験がある。周防東南部方面の広くでは、

○コッチー キマ(マエ)イ ノー。

こっちへ来なさいねえ。

などの「〜マ(マエ)イ」の言いかたもよく聞く。(これは、四国、讃岐路などで聞かれるのとおなじ表現色のものであろう。)[見ーマイ][為<sup>キ</sup>マイ]などの言いかたになるのは、山口県がわのことである。「ツカサレマセ」などのことは、今、記述をはぶく。「〜で あります」が「ダリマス」となることも、県下にかなりいちじるしいものがある。

広島県下の「マス」について、ひとまずその活用をかえりみれば、未然形に「マせん」「マへん」「マエン」「メエン」「メン」があり、連用形に「マシた」「マヒた」「マイた」「マエーた」などがある。未来形に「マショー」「マヒョー」「メョー」「モー」があり、終止形に「マス」「ワス」「マン」がある。「〜マス ワイ」が「〜マサー」になることも多い。「広島県佐伯郡水内村」(『全国方言資料』第5巻)の条に見える、

fセヤー アリンセンヨ

なんでも ありませんよ。

は、「ありマセン」が「アリンセン」となっているのか。

○キシヤワ ツイテ オリマサッタ。

汽車はついていませんでした。

の「マサッタ」は、「マセザッタ」のつづまったものか。「〜デ アリマス」の「ダリマス」は、当県下でも聞かれる。つぎに、命令形の「マセ」「マヘ」を見る。

○オイデマヘ。

おいでなさい。

○オアガリマヘ。

お上がりなさい。

○アガリマセー。

お上がりなさい。

などは、安芸での「マセ(へ)」尊敬表現法例である。山口県下に見られた「マイ」はない。岡田統夫氏の調査によるのに、備後弁には「アゲマシ。」などの言いかたがある。氏は、

○アゲマシ。

は「丁寧」で、

○アゲマシ。

は「謙譲」であると説明せられた。「アゲマシナサイ。」の言いかたもあるという。なお、氏は、その出身地の三原市のことばとして、つぎのような例をあげられた。

○オツクリニシテ ダンナサンニ タベサシマシナチャー。

おつくりにして、だんなさんにたべさせもうしなさいな。(魚うり)

「〜マシ」が謙譲表現法になっようなか。岡田氏も、かねてそう解している。 (上に「もうし」とも言いかえていられる。)

○アガ<sup>ー</sup> ヨ<sup>ー</sup>ッテンジャケ<sup>ー</sup>, イカセマスガ<sup>ー</sup> エ<sup>ー</sup>。

あんなに言ってらっしゃるんだから行かせてさしあげるのがいいよ。

○ジブンノ<sup>コト</sup> オンナシヨ<sup>ー</sup>ニ ベンキョ<sup>ー</sup> サセマス<sup>ー</sup> ヨ<sup>ー</sup>テデシタ<sup>ー</sup>。

自分の子と同じように勉強をおさせするって言ってらっしゃいました。のような例も示された。備後に、微妙な「マン」「マス」謙譲表現法が聞かれるようである。ここになお、岡田氏が備後南部内で調査して得られた「マス」ことばの、丁寧表現法ではあるが、接続法のことかわっているものをあげておこう。

○ワシガ<sup>ー</sup> ナニユ<sup>ー</sup> イワレマンモ<sup>ー</sup> ニ<sup>ー</sup>。

私が何を言うことができますか。

○ソ<sup>ー</sup>チャリマンモ<sup>ー</sup> ガ<sup>ー</sup>。

そうでありましょうか？

氏は、「ましよう」が「マホ<sup>ー</sup>」になり、「モ<sup>ー</sup>」になったと見る。「マンモ<sup>ー</sup>」の「マン」も、「マス」ことばの、なんらかの変形なのではないか。とにかく、「マン」と「モ<sup>ー</sup>」との結合は、ふかしぎとも言えるものである。方言での表現生活では、「マス」がしきりに用いられるのにつれて、その利用は、通常の規格を越えに越えていくことにもなるのか。思いもかけない所で、奇妙な形態の花が咲いたりする。

島根県下の「マス」ことばを見る。石見地方はだいたい、周防や安芸に類同する状況を見せている。出雲で、「マシエ」の尊敬表現法が目される。

○ドコソコニ[<sup>i</sup>] ア<sup>ー</sup>トモワッシャ<sup>ー</sup>マシエ<sup>ー</sup>。

どこそこにあると思わっシャイマセ。(「トモワッシャ<sup>ー</sup>マシエ<sup>ー</sup>」は、ほとんど「というわけですよ」などというのに近いものになっている。)

などである。

○アガ<sup>ー</sup>マン[<sup>i</sup>]テ ゴシ[<sup>i</sup>]ナエ<sup>ー</sup>。

お上がりになってください。

のような言いかたもおこなわれており、こういう「マシ」にも、尊敬感情がくまれる。(上例は、藤木敦氏の教示せられたものである。) 神部宏泰氏は、隠岐島後内の方言例、

○エキレーダケワ、ファイクランシテ、カエラレマシエー。

駅鈴だけは拝観してお帰りなさい。

○チット、チャグチュー、サレマシエー。オトリナンシエー。

少し茶菓子をお食べなさい。おとりなさい。(老女→神部氏)

を教示せられた。これらは、尊敬表現法助動詞「レル・ラレル」の下に「マセ」命令形のついているものである。(—「マシ」形は、方々にありうることが知られる。) 出雲の、つぎの「〜マシエ」例は、謙讓表現法になっているものであろう。

○カシエテ、アゲマシエ。

貸してあげなさい。

老女がその孫の幼女に、お貸ししてあげなさいとすすめるところである。出雲と隠岐との丁寧の「マス」に関して、「マッス」「マッシュョー」などの促音形が注意される。

○オバサン。ハブラン、イッポン、モライマッシュョー。

おばさん。歯ブランを一本くださいね。

は、神部氏の教示せられた出雲方言例である。東条操先生の『全国方言辞典』P. 879には、隠岐の「マースル」があがっている。これは、「マラスル」の後身にあたるものか。神部氏は、隠岐島後の中村の、

○コレ、マースル。

これをさしあげる。

を教示せられた。—ただし、消滅に近いのだという。島根県下に、「マースル」形も見いだされる。

鳥取県下の「マス」については、さほど、述べることがない。伯耆西南部の南寄りでは、「どうどうシテ、ツカハイマセ。」、「マー、アガリマシテ、ツカ

ーサイ。」などを聞いた。こういう「マセ」は、県下の諸方におこなわれている。 「アガリマシテ」の言いかたは、古風な用法とされよう。——尊敬感情が認められる。(謙讓「マセ」に類する「マシ」の転用であろうか。)

岡山県下では、県北、作州の西北部で得たつぎの例がある。

○センセニ ミセマシテ、…………。

先生にお見せして、…………。

○サケオ ゴシヨ一ホド カシマシテ ミナサイ。おおごとだ。

酒を五升ほどお貸ししてみなさい。(掛売り) おおこまりです。

ここに、「マシ」謙讓表現法が明らかであろう。この地に、「オイデマヘ」というのもあった。県下一般に(鳥取県下でと同様)、通常の「マス」の丁寧表現法がよくおこなわれている。

○マイリゲコ ヨ一 シマスンジャ。

お参り(参り下向)をよくするんです。

は、備中真鍋島での丁寧「マス」の一例である。

## 七 四国地方の「マス」

愛媛県東部では、「アレ オ見マセ。」などの、「オ〜マセ」尊敬表現法がよくおこなわれている。東辺部では、

○アンタラ ハヨ フロニ オハイリマヘ。

あんた、早くおふろにおはいいなさい。(老妻→老夫)

などと、「オ〜マヘ」の言いかたもよくおこなわれている。このほうでまた、「アンタ オ行キマヘン デ。」(あんたはおいでませんか。)などとも言われている。県北部の今治市方面から東には、謙讓の「マセ」もおこなわれている。「お酒 ついで アゲマセ。」「食ベサシマセ。」などと、古老の、おもに女性が言っている。最東部で聞いた、

○シーヤ、コレ オクサンニ ミセテ アゲマシ ナ。

しい(しいは名まえの頭音)や、これ(このみごとな松茸)をおくさ

んに見せてさしあげなさいな。

の一例も、「マシ」の謙譲としうるものか。南予地方は、上にかかげたような東予の事象を見せていない。中予方面では、「～ますよ」の意で「～マサイ」と言うことがいちじるしい。「アリマサイ。」「オリマサイ。」などと言っている。

高知県下については、特説すべきものが、私には、ない。「ツカーサイマセ」などは、県下の諸所に見いだされようか。県下一般で「マス・マシ・マジョー・マスリャー」などがふつうにおこなわれているか。土居重俊氏の『土佐言葉』には、

マスは、連用形にマイのあらわれることがある。これは女性の使用する場  
合がやや多い。

ヨーヨ ウチノ マゴモ アルクヨーニ ナリマイタ (やっとわたしの  
家の孫も歩くようになりました)

と見える。

徳島県下も、まずは丁寧の「マス」がふつうにおこなわれていると言える状況である。「どうどうしマセ」などの言いかたを聞くことはできない。金沢治氏の「阿波方言の語法」(『方言』第二卷第一号 昭和7年1月)には、

「ます」の発音は徳島市を中心とした町人仲間では「マフ」の如く転訛して  
ある。

との説明が見える。

香川県下は、四国中でもよく「マス」ことばの特色を見せる所である。愛媛県東部に「～マセ(マヘ)」の尊敬表現法が見られたが、それは、香川県下の同事象につづくものであって、じつは本県下が、「マセ」用法の主域をなしている。県下全般にわたって、通常の動詞に、かまわず「マセ」をつけて尊敬表現法とすることがざかんである。「行きマセ。」「しマヘ。」などといったぐあいである。「見ナサイマセ。」「ツカーサイマセ。」などと言うことはほとんどしないで、「見マセ(オ見マセ)」「くれマセ。」などというように言っている。四国

もとくに香川県下で、「マス」ことばのこの種の尊敬表現法が、どうして慣熟するにいたったのであろう。愛媛東部のことをも合わせ考えると、なぜか四国の瀬戸内海斜面東寄りに、こういう特定表現法が成長している。おそらくは、諸多の表現法との連合関係で、こういうものが特定の存立のしかたをするようになっているのであろう。「～ませ」は、その盛用に依じてか、さまざまな形を見せている。「～マセ」に対して「～マーセ」もある。(これがそうとうによく用いられている。)  
「～マへ」もあって「～マーへ」もある。「マへ」「マーへ」のあらわれることは、よりすくないか。「マーへ」などよりは、「マーセ」などのほうがよい言いかたであることは、言うまでもない。やさしい言いかたに、「～マエ」「～マイ」がある。おやが小さい子になど、ごく気がるに「マイ」をつかっている。簡略な言いかたに、「～マ(マー)」もある。これは、あらわれることがすくないようである。

○行き<sup>マ</sup>マーセ。

は、県内海部の直島での一例である。(瀬戸口俊治氏による。)

○ハヨ<sup>マ</sup>ー イキ<sup>マ</sup>マーセ。

早くお行きなさい。

○ハヨ<sup>マ</sup>ー イキ<sup>マ</sup>マイ。

早く行きなさい。

は、県下東部でのものである。県中央部地域での一連の実例は、つぎのとおりである。

○サンヨ<sup>マ</sup>ーシテ オン<sup>マ</sup>マセ。

計算してオみマセ。(初老女→若男先生)

○イマノウチニ トリ<sup>マ</sup>マエ。

今のうちにおとりなさい。(小二男→校長先生)

○イケガ フカイケン、<sup>マ</sup>マーセ。

池が深いから、ほら、ごらんなさい。(中女→子の幼男)

(「見<sup>マ</sup>マーセ」が「マーセ」になっている。これによって、「マーセ」

は、「ね」などというのにも近い、よびかけことば的なものになろうとしている。）

○モ一、イキマスナ。アブナイノニ。

もう、(自転車では)行きますな。危いのに。 (中女→子の中学生男)

(と言うのを聞かないで、子は自転車を出ていった。)

最後の例の「～マスナ」も、「～マセ」系のものである。この地で、若い母からそのおさな子へのことば、

○ハイ キ一マセ。

早く来なさい。

というのも聞かれた。この地の多くの人たちが、「マセ」ことばを自覚している。生活の中で随一のたいせつなことばがこれである。しぜんの転訛形が多くでき、よく用いられているのも当然であろう。さて、当県下では、謙讓の「マセ」は聞かれないうのである。丁寧の「マス」では、略形の「マ」もある。来田隆氏は、丸亀方言に関して、「シットリマ」(知ってます)「キヨリマ一」(来てます)などを教示せられた。

## 八 近畿地方の「マス」

兵庫県下の「マス」に関しては、原朗氏と和田実氏との、注目すべきご記述がある。原朗氏の「神戸と比較した播州高砂市方言の語法抄」(『兵庫方言』3 昭和31年)には、

ここにあげたマスは、丁寧語として広く用いられる「ます」とちがって、動詞アゲル(進呈する)と助動詞タゲルのみにつき、その他の用法はないようである。

コノ本ワ、アンタニアゲマソ思トッタンヤ

駅マデ送ッタゲマセ

とある。ここに謙讓の「マセ」が見られ、かつ、氏によれば、「マソ」もとり

あげられることになる。和田実氏は、「兵庫県高砂市伊保町(旧印南郡伊保村)」(国立国語研究所報告16『日本方言の記述的研究』 明治書院 昭和34年11月)の中で、

語	意味	活用の型	語幹形	否定形	将然形	連用形	音便形	終止形	假定形	命令形
マス	ていねい	特殊		マヘ	マホ		マシ	マス マア		
マス	たてまつる	動詞五段		マサ	マソ	マシ	マシ	マス	マサ	マセ

との記述を示していられる。また、

マス(ていねい) 知りマヘン。止メマホ。ソラ頭イ当ッたら死ニマナー。

マス(たてまつる) アゲル・タゲル(<テアゲル)にのみ接続: ヨー咲イタ、隣イモ一枝上ゲマセ; ヨッポド言ウタゲマソカ<sup>お</sup>思タケンド…。とある。ここにも「マセ」「マソ」が見られ、かつ「マサ」未然形も見られる。——和田氏は、私の言う謙譲の「マセ」に関連する諸活用形をとりたてていられ、いわば、特定の「マス」謙譲法助動詞を認めていられる。「たてまつる」としていられる。)なるほど、このようにもなっているのか。これによれば、かねて見てきた「マセ」などの謙譲表現法は、通常の丁寧の助動詞「マス」の表現機能の系列の外のものと見られることになる。一方の未然形「マヘ」に対して、他方に未然形「マサ」のあるのが、別して注目される。「マス」ことばには、——「マス」外形の現実のもとに——、このように二系が存立し得ているのか。「マサ」は「マウサ」(申さ)を考えさせやすい。さて、播磨地方にも淡路島にも、「行キマセ」「キマセ」といったような「〜マセ」尊敬表現法はない。

兵庫県一般での、丁寧の「マス」の活用形には、「マス」の「マフ」があり(連用形「マシ」の「マヒ」があり)、「〜マス カ」の「〜マッ カ」があ

り、なお、終止形関係の「マッ セ」「マッ ソ」「マッシャロ」などがある。さらにまた、終止形の言いかた、「マン ガ(ますよ)」「マン ノ(ますの?)」「マン ネン」「マン ネ(ますの)がしきりに用いられている。未来形には、「マヒョー」「マホ」がある。

播磨地方で、「……～マス ゼ。」の、「ゼ」の明らかな言いかたは、通常、おこなわれていなくて、しかも「ゼ」のふくまれた「マッ セ」の言いかたはよくおこなわれている。

中谷竹蔵氏の『赤穂言葉の研究』には、

だらう

↓

チャロ

でせう

ダホウ

ダハン

で御座りませう

との記事が見え、

書いたダハン(書いたでしょう・ですよ)

行ったダハン(行ったでしょう・ましたよ)

見えるダハン(見えるでしょう・ますよ)

とあり、また、

行かれマハン(行かれますよ)

ありマハン(ありますよ)

とある。「ありますよ」とされている「ありマハン」は、「マス」のどういう活用形を示しているものであろうか。播磨に、「～マハ」の言いかたもある。

私が但馬南部西奥で聞いた、

○インデ アギンス ワー。

(つれになっていっしょに) 帰ってあげますよ。

の「アギンス」は、「あげます」に該当するものだとすると、「ンス」に、終止形「ます」がくまれそうである。（「アギンス」は老人語で、ほろびつつあるという。）神戸市域などでは、「ヨロシ オマ。」（よろしゅうオマス。）の言いかたとともに、

○ヨー ワカリマッ(マ)。

“よくわかりました。”

の言いかたが聞かれる。（安達隆一氏による。）姫路市内では、

○ワジャ シリッセン。

“わしは知らない。”

○ワジャ シッセン。

“わしはしない。”

などの、老人の言いかたが聞かれるという。「ッセン」は「ません」に相当するのではないのか。

兵庫県下でにかぎらず近畿内で、「なに おっしゃいマスやら。」といったあいさつことばがおこなわれている。近畿の表現法と言えるものであろう。（――婉曲な謙退心意のこまやかなものがある。）播磨などで、なお、「よう おっしゃいマシテ。」も言われている。

京都府下でも、丁寧の「マス」が、「マへん」「マッ サ」「マッサカイニ」「マッシャロ」「マンので」「マヒョー」「マホ」などの活用形を見せている。

○ワタシラ ネマス ンヤ。

（テレビでボクシングがかかると、）わたしらはねるんです。

（老女）

は、丹後半島内の、一つの「マス」例である。

大阪府内の「マス」を見る。諸活用形のありさまは、兵庫県下・京都府下のものに酷似している。「マッ サ」「マッ セ」のおこなわれることはいちじるしく、「マヒョ・マホ・マヨ・マオ」のおこなわれることもさかんである。終止形「マフ」もおこなわれており、たとえば、南河内で、

○モー ゴジュー ネンカラ ソー テマフ チー。

もう五十年もつれそってますねえ。 (老女→藤原)

などと言っている。「マン ネン」(マス ノヤ)などの耳だたいしいことは、多く言うまでもなからう。「オマス」が「オマ」となり「ダス」が「ダ」になっているのと同様に、「マス」が「マ」になってもいる。

○ユー タハリマ。

言ってるしゃいます。

○ヤッ タハリマ。

してらっしゃいます。

などと言っている。「マス」の「マ」形は、さきに香川県下で見られた。阪神地方に「〜マ」のさかんなのに対して、香川県下にも同格のものがあるのは、分布として注目するにたる。移入などと言いうるものではあるまい。おそらくは、彼我あいともにしぜんのいきおいの中で、こういうものを産みだしたのである。——方言風土の相関が考えられる。大阪の丁寧の「マス」について、かつて、一知人から聞かされたことがある。

「読みマせん」が「読みマへん」になると、やや品が低くなる。「読みません」に相当する言いかたは、「読メンマへん」である。

というのである。

和歌山県下には、特説すべきことがすくなくない。南の新宮市では言う。

○ノ マサセ マセ ヤ。

飲ましてさしあげなさいよ。

○ヤレ ヤレ マー カワイ ソーニ。 ダイ ダイ セン ジテ ノ マハレ マセ ヤ。

やれやれまあかわいそうに。だいたいを煎じてお飲みなさいよ。

前者例は謙譲の「マセ」であろう。後者例は尊敬の「マセ」であろう。『南紀土俗資料』その他の方言書には、

ごいされませ (御免下さいませ) [老人]

というのが見える。県南部から私が得た方言文例には、

○アレミテミヤマセ。(あれを御覧なさい。)

○ココヘキヤマセ。(こゝへお来<sup>い</sup>でなさい。)

というのがある。「ミヤマセ」「キヤマセ」が注目される。和歌山県女子師範学校編の『和歌山県方言』にも、県南のことばとして、「キヤマセ」(来なされ)「シヤマセ」(しなさい)などがあげられている。同書には、県の北部にもあるという「マイシヤマセ」なども見える。「見ヤマセ」「シヤマセ」などの「ヤマセ」は、どう解すべきものであろうか。ともかく、「～ヤマセ」が尊敬表現法になることは、たしかのようである。県下に、謙讓表現法と見られる「マス」ことばも、どれほどかおこなわれているのか。日高郡山地部で私が聞いた、

○アレ ナニー イレマシタラ エー ワダ。

あれをなにに(かごに)お入れしたらよいわ。(老女→嫁)

は、謙讓の「マシ」と見られるものであろうか。県下一般での丁寧「マス」の活用では、まず、「マッ セ」「マヒョー」などの活用形が見られる。「マシタ」の「マイタ」もあるか。

○タノミマシヨ。タノミマシヨ。

たのみましよう。たのみましよう。(ごめんください。)

これは、南部の西牟婁郡の山地部で聞いた、昔、庄屋さんのうちをたずねた時のあいさつことばである。(庄屋さんは、「どうれ。」と答えて出てきたそうである。)

和歌山県下に、一つの特異な問題事項がある。——「マッテンス」「マッテン」の言いかたがおこなわれている。これは、「マス」に関係のあるものなのかどうか。村内英一氏は、かつて、「語法調査票試案」(『和歌山方言』4)で、

いきます。 いきま。 いきまっさ。 いきまんね。 いきまっせ。 いきまってんす。

というのを示された。「～マス」の系列に「～マッテンス」がおかれている。氏は、和歌山県下のことを言っている。私は、往年の、県南、西牟婁郡串本町での調査で、

○ドーゾ オタノミモーチマッテンス。

どうぞおたのみ申します。

○アリマッテンス ラ。

ありますよ。

○シリマッテンセン。

知りません。

○ハヨ ゴハン タベマッテンシヨ ラ。

早くごはんをたべましょう。

などというのを聞いている。かねてまた、

○オンマイナサリマイテンス カ。

おしまいなさっていらっしゃいますか。

というのも聞かれた。「マッテンス」に対する「マイテンス」が、私どもの注意をひく。「マイテ」は「マシテ」を思わせはしないか。「マイテンス」が「マッテンス」にうつっていったか。「マイテンス」は何だろう。村内英一氏は、和歌山方言に関する氏の諸研究で、「～マイテンス」にも言及してられる。『和歌山県方言』にも、

イキマツテンス 行きます

イキマツテンセンカ 行きませんか

イキマツテンシヨウ 行きませう

などがあがっている。楳垣実氏は、「紀州ことば(4)」(『和歌山方言』4)で、「田辺のマッテンスことば」に言及せられ、

「マイテンス→マッテンス」と変化したらしく

と述べていられ、

おそらく「行き・まし・て・です」といった形から変化して生まれたものではなかるうかと思う。

と言われ、また、

ただこのマッテンスの形は、田辺市ばかりでなく、ずっと南へ、東牟婁郡

の海岸地区へも広まっていることは注意すべきである。

と述べていられる。『和歌山県方言』には、「イクマッテン」などともある。つまり、「行く」という終止形に、「マッテンス」に近い「マッテン」がつけられてもいる。(大田柴太郎氏の『和歌山県方言(其二)』<東京広文社印刷 昭和5年12月>P.183に「アルマッタ 有ります「串本誌」とある「アルマッタ」もまた、「アルマッテン」に近いものではないか。)思うのに、「イキマッテンス」「イキマッテン」などの言いかたがずれて「イクマッテン」などともなったのではないか。終止形にもつくようにずれたからでもあろう、

○ソーヤマッテン。

そうです。

○アカンマッテン。

あきません。

○ヨワッタマッテン。

よわったなあ。

のような言いかたもできている。——これらは、県南辺で、私が聞きとめたものである。

つぎは奈良県下である。だいたいには、「〜マヘン」「〜マヒョ」「マン(ます) ノヤ(ネン)」「〜マッ(ます) カ」など、京阪ふうの言いかたがよくおこなわれている。

○イーイェー。アキマヘン ノヤ。

いいえ。だめなんです。(老女)

は、県南吉野郡の東部での一例である。県下で、「ソレカラ ワカヤマイ クダリマシテ ン。」「(それから和歌山へ下ったんです。)など、「〜マシテ ン」の言いかたもよくおこなわれている。——これも、「マス」ことばの中の、近畿的な一慣用表現法と見られる。なお一つ注意すべきものに、

イテサニマス 行って参ります。(榛原町)

の言いかたがある。(『大和方言集』『和歌山県方言』にも、

サンニマス 参じます, 参ります

サンリマス 参じます

というのが見えている。

三重県下では、『三重方言資料』によるのに、

ヤスマシヤ 志摩郡立神村

とある。——命令形の「マシ」が見られる。巖佐正三氏の「平古に残る桑名武家ことば——アクセント・語法について——」(『三重県方言』第3号 昭和31年12月)にも、

次に、丁寧の言い方で、マスの命令形はマシが普通である。

ゴメンナサイ マシ。

ドーゾ オアガリクダサイ マシ

とある。私が伊賀で調査し得た实例には、

○オジ<sup>マ</sup>ーサンガ アゲ<sup>マ</sup>シタンヤ ワ。

おじいさん(話し手の夫)が(それをお寺へ)寄付したんですわ。

(老女→中女の小学校教師)

というのがある。この「マシ」は、謙譲の表現に役だっているのかどうか。夫の寄付行為を謙遜して表現したのかもしれないが、また、女先生に丁寧にものを言おうとして、単純に「マシ」をつかったのかもしれない。三重県下に、活用形、「マヘン」「マシヤロ」もおこなわれているれば、「マッ サ」(「マス ワ」にあたる)などもおこなわれている。

滋賀県下でもまた、丁寧の「マス」がふつうによくおこなわれており、活用形も、京阪方面に見られるのと同様のものが多くおこなわれている。

○モイッペン, セトハンニ ソー ユートキマッ サ。

もういっぺん瀬戸さんにそう言っておきます。

○コレヤッターラ, ダイタイ デテマッ セ。

これだったら、(ここの方言は)だいたいみな出ていますよ。(方言集を見せての説明)

は、湖西の北寄りの地の二例である。

### 九 中部地方の「マス」

まず北陸に、問題とすべき事項が多い。

福井県下の若狭には、さしてとりたてるべきことがない。

○ソー オモイマッ サナ。

そう思いますわね。 (老女→藤原)

などと、近畿流の調子の「マス」ことばがおこなわれている。愛宕八郎康隆氏は、若狭に隣る敦賀市域内で、

○モー ジキニ キマッスヤロー。

(船が) もうすぐに来ますでしょう。 (五十歳男→愛宕氏)

との言いかたを聞かれたという。——「マッス」が、土地の発言習慣になっているのかどうか。さて、木ノ芽峠を越えると、越前の広域に「マス」の諸変形がおこなわれていて注目される。『福井県方言集』には、

イキス 行きます

「イキス」は「いきます」の略

とある。また、

イキンシタ 行きました

「イキンシタ」は「いきました」の転訛

とある。「イキンショー」(行きませう) というのも見えている。なおまた、同書に、

頼メイス 「メイス」は「みます」が「メンス」になり更に訛つたもの

ともある。「頼みます」が「〜ンス」または「〜イス」とあるのか。福井県の人であって、当地方の方言を精査してられる天野俊也氏にも、「ンス」(ます)の研究があり、氏のご発表、「福井県大野郡勝山町猪野(カツヤママチイノ)」(『福井県大野郡北谷村に於ける敬語』自家版 昭和28年1月)には、

「ます」はそのまゝの形でも広く使はれるが「……んす」「……えす」の

形に熟することが多い。「イキマス」よりも「エケンス」「エクス」の方が地ことばとして勢力があるし自然でもある。

とある。

ミース (見ます) ミーヘン (見ません) ミーシタ (見ました)

の言いかたもされるといふ。天野氏の「福井県勝山町に於ける『行けへん』『行きねへん』等の否定法」には、

「上げます」は「アケンス」又は「アゲス」といふが、一段と敬意が加はれば「アゲマセンス」といふ。

とある。おなじく当県出身の愛宕八郎康隆氏は、県奥の北部内で、

○クサモ ヤリスシー、……………。

(牛に) 草もやりますし、……………。(老女→中男)

との例を得ていられる。——これには「マス」の「ス」が見える。

○ジャー イッテ キンス。

では行って来ます。

は、福井市方面に聞かれる「～ンス」例である。『福井県方言集』には、

イクス (行きます)

「イクス」は「行きます」の転訛

ともある。「イクショー」(行きませう) も見えている。「行キ」が「行ケ」ともあるのは、天野氏の「エクス」などのばあい同様である。「マス」の簡略化とともに、接続形にも変化がおこったということか。『若越の方言』に、

居りません オリシン

というのが見えている。

石川県下では、加賀東南隅の白峰村で、私は、

○ラクニ アスピニ キテモロテ クダハリマセ。

ここへ気軽にあそびに来てもらってくださいませ。

○ゴユックリ オアガッテ クダサイマシ。

ごゆっくりおあがってくださいませ。

などというのを聞いている。郷土語としての「マシ」も注意される。この地で、

○ツクエ ダシマセ ヨ。

机をお出しなさいよ。 (老女→青男)

○ソコイ ヒトリ スマリマシ。

そこへひとりすわりなさい。(と言って運転台の右わきにすわらせる。)  
(四十歳代男バス運転手→青男客)

というのも聞くことができた。「普通動詞連用形+マセ(シ)」の尊敬表現法が見られる。加賀大聖寺駅前で問い聞きをした時には、「早う 行きマセ。」などの言いかたを得ることができなかった。ところで、能登半島西岸域では、

○ソコエ カケマシエ。

そこへこしかけなさい。

などの例を得ることができた。同地域で、

○ソッチ デマシテ クダンシエ。サーサー。

そちらへお出になってください。さあさあ。

というのも聞かれた。「デマシテ」は、尊敬感情の「マシ」用法になっているか。加賀・能登に、謙讓の「マス」用法もあるらしい。『白峰村史』下巻の「方言」の部に見える、

行きましてワイ(ね)

は、「マシ」の謙讓表現になっているのかどうか。能登半島東北部の南岸、宇出津では、

○コレヲ アア ヒトニ ミサシマシタラ イー ネー。

これをあの人にお見せしたらいいね。

というのを聞くことができた。この「マシ」は、謙讓表現に役だてられているよう。能登半島西岸域の例には、

○アンタニ 聞カシマシテ いいような 話しも ありません。 (老女→藤原)

などというのがある。馬場宏氏は、「木郎方言考(其の二)」(『国語方言』第四

号 昭和34年3月)で、『まする』に相当する方言助動詞」を説かれ、『マシル』=まする」の諸活用形をあげていられる。この「マシル」ことばは、謙讓表現法に関係の深いものか。「アゲマシル」は「おそなえする。又はおそなえをさげる」であるという。愛宕八郎康隆氏は、やはり能登半島東北部の、珠洲市に属する「大坊部落」について、つぎのように、「マス」謙讓の表現法を見ていられる。(昭和35年8月に調査せられたものの教示である。)

○サー アゲマシテ クダッシー。(老女→老男) さあ(先程のおつりを)おあげして下さい。

○ナシモ ノーテ。アゲマスル モナー ノーテ。(老女→愛宕氏) 何も御馳走がなくて。おあげするものはなくて。

氏の「奥能登珠洲方言の研究——敬語法について——」(『方言研究叢書』第8巻 三弥井書店 昭和53年3月)には、「マサ」未然形の例も見える。

加賀・能登の「ます」に関して、すでに世にも聞かえているのは、「ミス」の言いかたである。——「ます」が「ミス」形をとるのは、全国でもこの地方だけである。もとより「マス」もあり得て、

○ワタジャ トンニ イキマッ ソ。

私はとりに行きますよ。

などとも言われている。この「マッ ソ」に相当する「ミッ ソ」もおこなわれているというわけである。「ゴザイマス」に対する「ゴザリミス」は、金沢市内などで、いちだんよいことばとされてきたろう。——「ミス」のおこなわれる範囲は、加賀で、かならずしも広くはないかもしれない。しかし、能登半島にも「ミス」のおこなわれていることが、また明らかである。私が半島西岸で聞き得たものをかかげるならば、

○オラー イマ、アソコカラ キミシタ ガー。

わしは今、あそこから来ましたけど。(中女)

などがある。同地で私は、

○マタ オハナシ シメスサカロ ネー。

あしたまたお話しをしますからね。(老女→藤原)

○ツクッテ ダシメシタ トイネー。

(孫が作文) つくって出しましたんですって。 (老女→藤原)

などというのも聞いた。この「シメス」「ダシメシタ」については、現地の有識者が私の記録カードを検閲せられて、「メ」を「ミ」とあらためていられる。「ダシメシタ」のばあいなど、じじつ、私も、「メン」の「メ」について、「このメはミとメとの間の音だ。[e]」と注している。私が、金沢市の眼科医院で、土地っ子老男の、医師長岡博男氏に述べたことば、

○ワカリミシタ。ダイブ カスンドルケー。

はい、わかりました。だいぶんかすんですか。(自分の目のことを医師に問う。)

というのを傍受した時も、「ワカリミシタ」の「ミシ」の「ミ」が、「ミ」と「メ」との間の音に聞こえた。能登半島西岸で聞きとめた上例「シメス」の類も、おそらく、「ます」の「ミス」に相当するものにほかなるまい。

「〜メス」に関しては、一方で、九州でのように、「召ス」が考えられる。が、上の「メス」は、たぶん、「マス」関係のものとしてよいのであろう。

「〜ミス」の言いかたと「〜マサル」の言いかたとが、石川県下にある。「ミス」と「マサル」とは、同系同列のものではない。「マサル」は、「マシャル」—「マッシャル」と解される。「マッシャル」の命令形が、「マッシャイ」をへて「マッ」ともなっているか。——これが、能登、輪島などで、「マーシー」などとも言われているが、このように変形したものも、もとより「ミス」には無関係のものである。金沢ことばでの、

○コレ アンタ ミテ クマッセ。

これをあんた見てくださいよ。

の「クマッセ」は、「くれマッシャイ」である。「マッシャイ」の「マッ」は、「参らっしゃい」の「参ら」に血をひくとしても、現形は、「ます」を思わせやすいものである。ふつう、尊敬法助動詞「シャル」と「マス」とがむすびつく

時は、「シャリマス」「シャイマス」,「シャンス」となるが、加賀・能登では、「マス」が逆にかしらについたかっこうである。「マッ」に「マス」を思いみるとすれば、石川県下には、「マス」的なものの異様な用法が見られることになる。「どうどうしマッ マ。」との言いかたが県下に熟しているが——最後の「マ」はよびかけの文末詞であるが、こんなばあいには、「マ」が前後対応してひびきあっていて、土地ことばの土地ふうのおもむきがいっそう濃くなっている。能登では、

○アンタ シリマッシエン カ。

あなたはお知りじゃありませんか。

など、「マッシエン」の言いかたが聞かれる。

○ソクサーイニ オルマッシエ。

お元気でいらしてください。(別辞)

など、「マッシエ」というのも聞かれる。これらに接すると、私どもは、ふと、九州なみの「マス」の「マッシエン」などが能登にもあるのかと思わせられる。が、おそらく、その即断はきんもつなのであろう。「マッシエ」命令形は「マッシャイ」に相違あるまい。「マッシエン」は、「マッシャラン」相当のものではなかろうか。「マッシエン」が「マッセン」であったりするのを聞いた時は、九州なみの「マス」ことばかと、つい思わせられたりするのだけれども、おそらくそうなのではなかろう。

加賀でよりも能登に、「マス」相当の「ンス」がしきりにおこなわれている。能登北部例だと、「オリンス」(おります)。

○タノミンシヨ。

ごめんください。

などというありさまである。「ンス」形のほかに、「ありません」を「アリーセン」と言うなど、長音のある言いかたもおこなわれているか。さて、馬場宏氏は、「木郎方言考(其の二)」(『国語方言』第四号)で、

シス＝ます 「ン」は「ま」の訛り、金沢方言の「ミス」は姉妹語

といったような記述を示していただける。

曲ギンス＝曲げます 考インス＝考えます

という例もかかべていただける。

「立て」<sup>て</sup>「捨て」<sup>て</sup>等の際は「て」は変化しない、但し「イ」が挿入される。

立てインス＝立て<sup>て</sup>ます 捨てインス＝捨て<sup>て</sup>ます

とも記述していただける。石川県下は、「マス」ことばについての注目すべき事象が多い。

東隣の富山県下となると、ことが比較的かんたんである。まず、

○シカレテ クダサイマセ。

(座ぶとんを) おしきになってくださいませ。(主婦→藤原)

などと、尊敬の「マセ」がおこなわれている。(「シカレテ」と、ここに「レ」尊敬法助動詞がおこなわれている。)[「レル・ラレル」尊敬法助動詞のよくおこなわれる当地方では、

○ゴハン タベテ、ヤスマレマセ ヨ。

ごはんをたべておやすみなさいよ。

○ジックリ セラレマセ。

ゆっくりなさいませ。(中男→藤原)

のような言いかたが慣用されている。——他地方では、「～レ(ラレ)マセ」の表現法はあまり見られまい。当県下で、「マセ」は「くださり(クダハリ、クダハル、クタハレ)マセ(マへ)」などの言いかたでもよくおこなわれている。『富山県方言』には、

○ませ ませ ませる ませれ

使役相「させ」を受けて 寝させませんか 寝させませて 寝させませる 寝させませれど

とある。ここに謙譲の「マス」が認められようか。——「マセテ」「マセル」などとあるのが注意される。塚田長夫氏は、古く、私に富山県下の敬語法を教示せられて、

させます 着させます (お着せする) 行かせませたれど (おゆかせ申したけれど)

とも説かれた。当県下の丁寧の「マス」が、文末詞の「ワ」と合体して「マッサ」ともなっている。『全国方言資料』第3巻の「富山県氷見市飯久保」の条には、

f ンナラー ドーカ マー セワスカロケド タノンマッサネー  
では どうか 忙しいでしょうが 頼みますよ。

とある。なお、『富山県方言集成稿(二)』には、

いきんさ 行きます ・「いきんしょうか」 行きましょうか。  
・「いきんっさ」「いきっさ」 行きます。

というのが出ている。

新潟県下では、佐渡のことばに、

○オヤスミナセ<sup>ア</sup>マシ。

○オヤスミナセ<sup>マ</sup>マシ。

おやすみなさいませ。

などの「マシ」尊敬表現法がある。(佐渡東部例。押見虎三二氏による。) 佐渡西北辺の「マシ」例は、

○ニカイエ アガ<sup>テ</sup>クダサイマシ。

二階へ上がってくださいませ。

○オヤスミナサイマシ。

おやすみなさいませ。

○マー アガ<sup>リ</sup>マシ。

まあおあがりなさい。(食事どきの辞去のあいさつ)

などである。佐渡の丁寧の「マス」が「ンス」にもなっているか。越後では、「マス」ことばに、「アイスママセン。」の一慣用があるか。

転じて、岐阜県下を見るのに、美濃の北部でなど、

○ヒダノ<sup>ノ</sup>ホーニワ、コーザンガ アリ<sup>マ</sup>スィナ。

飛驒のほうには、鉾山がありますよね。 (老男→藤原)

のような言いかたがされている。『岐阜県方言集成』には、養老郡の、

きめした〔句〕 来ました。

が見える。

愛知県下については、特筆すべきものがある。例の名古屋弁の「頂戴マセ」は、「マセ」の特異な用法を示すものである。三河となると、尊敬表現法の「マセウ」がさかんである。渥美半島南岸例だと、

○ゴメンマシヨー。

ごめんなさい。

○オハイリマシヨー。

おはいりなさい。

○ココイ オアガリテ クレマシヨー。

ここへお上がりになってください。

などと言っている。渥美半島の他地でも、「マシヨ」を、“丁寧なことば” “女のことば” “年寄りのことば” と人は言っている。高瀬徳雄氏が「豊橋方言の文末助詞についての実情報告」(『方言研究年報』第一巻 昭和32年12月)にのせていられる「マシヨ」例は、

○チョット ゴメンマシヨー。

一寸御免下さい。 (中男→乗客一同)

○ミンナシテ アスビー オイデトクレマシヨー。

皆で遊びにお出で下さいませ。 (中女→同)

などである。「マセ」を「マセウ」とするのを、私は、未来化表現法とよんでいる。こうしたほうがいっそうていねいになることが明らかなようである。三河東部の「南設楽郡作手村菅沼」の「マシヨ」例は、

*m*サー オアガリマシヨー

さあ、さようなら。

*f*アー ゴメンマシヨー マー

ごめんください。

などである。(『全国方言資料』第3巻)

名古屋弁に、

○トモサマ ツレマシテ、おいでくださいませ。

知子さまをおつれになっておいでくださいませ。

のような言いかたがある。この「マシ」は、尊敬感情のものになっていようか。尾崎久弥氏の「方言小説新書目の二三(上)」(『方言』第七巻第一号 昭和21年1月)には、

ごつさりまし(ゴメンナサイ)

という「マシ」が見える。尾張西部から、丁寧の「マス」の一例をあげるなら、

○オムツカシュー ゴザイマシテ。

というのがある。これはじつに、私が、ごちそうさまでございましたと、食後のあいさつをしたのに対する、もてなし主、初老女の鄭重な応答あいさつであった。谷亮平氏は、「豊橋方言の音声と語法」(『方言』第二巻第四号 昭和7年4月)で、

会話の「ます」は稀に用ゐられるもので、これこそ残された唯一の敬語だらうか。

マセ マシ マスル マスル マスレ マシ

とするしていられる。

長野県下にもまた、特筆すべき一・二のことがある。まず、三河につづいて「マシヨ」がある。県北西隅の北安曇郡で私が得た例をあげるならば、

○カケマシヨ。

おかけなさい。(つれの人に、バスの座席をすすめる。)

○オババ キマッシヨ。

ばあちゃん、おいでなさい。(中女→老女)

○キオツケテ イキマシヨイ。

気をつけてお行きなさい。

というのなどがある。福沢武一氏は、その著『信州方言風物誌 第二』で、  
本来はマセにヨが添い、やがてつづまって、見マシヨとなったもの。(中略)

もはや命令といわんよりは、懇請である。(中略)

これも婦人に愛される。子供に用いられ、可憐さを発揮する。中信の特徴語として愛惜すべき一語である。

としていられる。

信州の丁寧の「マス」の用法に、つぎのようなものがある。

○ワ<sup>マ</sup>シラワ、ソーユ<sup>マ</sup>ー コトワ イ<sup>マ</sup>マンナイ ワネ<sup>マ</sup>ー。

わたしらは、そういうことは言いませんわね。

「マシ」に打消の「ナイ」が接続している。全国でもまれな表現法である。(山形県庄内地方に、「ありません。」を言う「ガンスネー。」がある。「ガンス」を打消の「ナイ」で否定している。)青木千代吉氏の『信州方言読本 語法篇』には、

申しわけございませない。(ございません) いきませね。(行きません)

木曾の奈川村・諏訪地方

などの例が見える。なお、青木氏は同書の中で、

信州の下伊那では、口語の敬語として、この「であります」がよく用いられているのであります。

下伊那では、女の人までが、しきりにこの語を用いて居りまして、「そうです」などと言う場合より、余分に丁寧な感じで語られているように受け取れます。

と記述していられる。

信州北部に「マス」の「ス」がある。佐伯隆治氏は、「信州北部方言語法(上)」(『国語研究』第十卷第七号)で、

「ス」「ゴザイス」

対話敬語「マス」の「マ」が略されたもの。これは更級・埴科両郡に行

はれる。旧松代藩に行はれて「松代のマ抜け言葉」として有名である。

と述べていられる。氏は実例として、

オレヤリシヨカ（私がやりませうか）

一シニ行キシヨ。

面白イコトデアリシタ。

面白イコトデゴザイス（御座います）

などをあげていられる。青木氏もまた、上書で、北信の「す」を指摘していら  
れる。『信州上田附近方言集』にも、

アリス（句）（川中）有ります。

との記事が見える。

山梨県下に、注目すべき「～マシ」「～マセ」尊敬表現法がある。県西  
南辺山地の十谷での一週間調査では、私は、いちじるしい「マシ」ことばを聞  
くことができた。

○ソ<sup>ー</sup> シマシ<sup>ー</sup>。

そうしなさい。

○コレ クイマシ<sup>ー</sup>。

これをたべなさい。

などと言っている。“ヤマナツケンノ 「クイマシ、ノミマシ」”との言いぐ  
さもあるとのことだった。

○オチャドモ イレロマシ<sup>ー</sup>。

お茶でもお入れなさい。

のような言いかたも聞くことができた。「イレロマシ」が注目される。——こ  
のようにも、「マシ」はつかわれるのか。ともかく、これで、目上に言うこと  
ばだという。目下には、「オチャドモ イレロヤシ。」と言うのだという。土  
地の一老年男子は、私に説明して、

目上の人に話す時は、アガメルチャーワケデ、どうしてもマシをつかう。

と語った。

○オメー ヤリマシ。カイト ヤリマン。

お前さんがおやりなさい。書いておやりなさい。(幼男たちに)  
これは、一老男が私に語ったことばである。当地の人で、

デカシマシ。(出してください。) 中等の言いかた 今の人が言う。

デカシマセ。(出してください。) 上等の言いかた 昔の人が言った。  
と言う人もあった。ある人は、“マセがなまってマシとなったろう。”と言った。

十谷集落にほど近い、北方の集落では、

○ヤスンマセ ヨ。

おやすみなさいよ。

などの言いかたがあるという。十谷西北地方山地内の奈良田では、

アガリヤリマセ。(おあがり下さいませ。)

などと言っているという。(清水茂夫氏「奈良田ことばの語法」『奈良田の方言』山梨民俗の会 昭和32年8月)『全国方言資料』第2巻の「山梨県南巨摩郡早川町奈良田」の条にも、

fイエコー オシャリマシエ

回向 なさってくださいませ。

などとある。

南巨摩郡の東がわにある西八代郡の人、初老の男子は、十谷滞在の私に、“ここへ来てはじめてマシを聞いた。西八代郡では全然言わない。”と語った。“鯉沢までいけば、もうマシは言わぬ。”と語る人もあった。

南の静岡県下では、「～マス」尊敬表現法に「～マシヨ」の言いかたがあって、注目をひく。坂本幸次郎氏の「遠州方言における助動詞」(『遠江方言の研究』)には、

「ます」の用法に於て、湖西(浜名湖西岸地方)には特別の用法がある。(三河方言の影響であらう)「ませ」の未然形に未来の助動詞「う」の添うた「ませう」は「ませ」の意で、丁寧な願意を表す。

例 持って来ておくれませう。

早くお休みませう。(お休みなさいませ。)

との記述が見える。清瀬良一氏は、浜名郡新居町の方言について、

○ゴメンマシヨ。 (ごめんください。)

○オイデマシヨ。 (おいでください。) <応答>

○オアガリマシヨ。 (おあがりなさい。) <ごはんどきにさよならを言って

辞去するばあい>

などを聞いていられる。望月誼三氏にも、「～マシヨ」のご指摘がある。

『静岡県方言辞典』には、

オ上リマッセ

などが見えている。『全国方言資料』第7巻の「静岡県安倍郡井川村田代」の条にも、

fハイー イラッシャイマッセ

はい、いらっしゃいませ。

などとある。「ませ」は、県下で「マシ」とも言われている。

後藤一日氏の『遠州の方言』には、

行きましない (行きません)

との記事が見える。信州で見られたのと同様の「～マシ+打消助動詞<ない>」である。

## 十 関東地方の「マス」

関東一般では、丁寧表現法助動詞「マス」が、もっともふつうにおこなわれている。

神奈川県下に、「マシ」命令形がかなりよくおこなわれている。土地人の男女が、これを言っている。県下西北部内での一例は、

○サー オチャ オアガンナサイマシ ヨー。

さあ、お茶をおあがんなさいました。(中女—藤原)

である。おなじく西北部内で、私は、

○フキ<sup>ー</sup> トリマシ<sup>ョー</sup> ヨ<sup>ー</sup>。

ふぎ(お茶うけに出された)をおとりくださいな。(中女→藤原)

との言いかたも受けた。山本靖民氏の「神奈川県方言資料」(『方言』第三巻第四号)には、

アリンス 御座います。上「清水

との記事が見える。

東京都下に「マス」ことばのさかんであることは、言うまでもない。以前は、旧東京市内で、「マシ」命令形がよく聞かれた。『東京方言集』にも、「オヤ<sup>ン</sup>ナサイマシ<sup>△</sup>」「オトンナサイマシ<sup>△</sup>」などとある。今日は、一般に、「マシ」形の勢力が落ちていると見られようか。「マシ」を言う中青年の男性などは見かけにくかろう。「マセ」に対する「マシ」が持つ微妙な音効果、したがって微妙な表現効果などは、今日、通用しがたい一般状況(騒音の中での、かなり荒れた発音状況)になっているのか。——日本橋方面の生粋の土地っ子が、今も「マシ」表現の生活をしている、などということがあられるかもしれないが。

「マシ」命令形に関する、昭和20年前後の私の記述を、ここに引用しておいてみたい。当時、私は、つぎのように考察している。“東京語を中心としては「マセ」命令形の「マシ」がおこなわれ、そのいきおいは、近來、ようやくつよまりつつある。東国地方内で、所によっては、早くから「マシ」の言いかたをしていて、「マセ」は言ったことはなかったという土地もすくなくないが、現代東京語の「マシ」は、新しく知識人たちによって支持されつつ、あるいは放送用語などによっても、漸次、その流布・拡大をきたしつつあるようである。もっとも、近ごろまた、放送員が、このことばを、かならずしも、きわだつほどにはつかおうとしなくなっていることも注意される。”

東京都下の伊豆大島では、「読みます」が「ヨムターイ(シ)」「ヨミター」などであるという。八丈島では、「けりません」が、「ケリンナカ」「ケンナカ」などであるという。

千葉県下にも、「マセ」の「マシ」がある。

○ネサツ<sup>ニ</sup>シエー<sup>マシ</sup> ヨー。(おやすみなさいませよ。)〈中女→中男〉  
は、大橋勝男氏が房総半島南部で聴取記録されたものである。

埼玉県下にも、「イラッ<sup>シ</sup>イ<sup>マシ</sup>」などの言いかたが、ふつうにおこなわれている。

○イラッ<sup>シ</sup>イ<sup>マシ</sup>。

などのアクセントも聞かれて、この点いささか地方的である。今泉忠義氏は、「現代の敬語」(国語教育学会『現代語法の諸相』 岩波書店 昭和18年6月)で、

前にも挙げた秩父地方の「ありません」「ございません」は関西語の影響を受ける前の江戸語乃至は坂東語の倅を残してあるのであらし、と述べていられる。ここでもまた、「〜マシ+打消助動詞〈ない〉」の言いかたが注意される。

群馬県下にも、「〜マシネー」がある。上野勇氏は、『万場の方言』(自家版 昭和27年6月)で、

呉れマシネーカは「呉れませんか」である。

としるしていられる。——さきの秩父地方のすぐ北に万場がある。

栃木県下の東北部内の一地での一週間滞在で経験したことであるが、丁寧の「マス」の、話しことばに出てくる頻度は、「デス」のばあいのよりも、はるかに低いように思われた。

今、茨城県下に関しても、言うべきことがほとんどない。柳田国男先生の『毎日の言葉』に見える、

カインシヨ 茨城県久慈郡

は、「〜マシヨ」に近いものを見せているのだろうか。

## 十一 東北地方・北海道地方の「マス」

東北地方には、「マス」の変化形、と結果論的に考えられる「ス」の問題(ならびに、それに関連する問題)が、大きくよこたわっている。新妻三男氏の

『相馬方言考音韻語法の部』には、

- ▲ます(ました)はその過去の形「ま」のMが脱落して次のやうに音韻変化をする。㊦, し, す, する(すれ)㊦

とある。「ありあーす」「来あーす」などの例が見える。(ところで、これらには「ヤス」ことばも想定されはしないか。) 大田 栄太郎氏は、『福島県方言』(自家版 昭和5年1月)で、『大沼郡誌』(同郡役所)よりの引用、

であります を だあーに転じ語尾にしと云ふ辞を添へることがある。  
さうであります=さうだあーし

を示していただける。

宮城県下に、「マス」の「マ」略とも言いうる現象がさかんである。ともかく、「マス」が「ス」形になっている。(中部地方では信州に、同趣の、いちじるしいものがあるのをさきに見た。P.398) 菊沢季生氏は、「宮城県方言文法の一斑」(『国語研究』第二巻第四号 昭和9年4月)で、

アリス・ゴザリマス等のマが落ちて、アリス・ゴザリス等となるのは著しい現象で、これも仙台を中心とする地方の方言の注目すべき一特徴であると言はねばならない。例へば、ミシタカは「見ましたか」でありイギシタカは「行きましたか」といふ事である。また、「ござりません」はゴザリセンとなり、更にS音が落ちてゴザリエンとなる。

と述べていただける。仙台市内で私が聞きとめた実例は、

○バン ナリ[ī]シ[i]テ ガス[ü]。

お晩になりましたね。

○ダンナサン ドッカラ キ[kçi]シ[i]ター。

あなたさんどこから来ました？

○ダレモ イ[i]シ[ī]ンカッタ カイ。

だれもいませんでしたか。

などである。土井八枝氏は、『仙台の方言』で、

<敬語><ます> まが脱けおちたのである。

いたしす (致します)

ござりす (ございます)

そーいたししてござりすまづ (左様いたしますでござりますよ)

と述べていられる。私が石巻市内で聞き得た実例は、

○ドゴサ イギ [gçi] ス[ü]。

“どちらへ行きます?”

○ドゴサ イ[i]ッテ ギ[gçi] ス[ü]ッター。

どちらへ行ってきました?

などである。松島湾岸で聞き得た実例は、

○カタッテワ オキ[i]ス[ü]。

話してはおきます。

○アー オリ[i]シ[i]タ。

ああ、おります。(私が、おじいさんはいらっしゃいますか、と訪ねていったのに対する返事である。)

○サンジュ[ü]ーク[ü]ニ[i]チ[ü] オリ[i]シ[i]テス[ü]。

(入院して) 三十九日間“おりました”。

などである。

『仙台の方言』にはなお、

「まだはらすきいん」(まだ空腹になりません)

といった記事も見える。「ません」に相当する「いん」がある。「マセン」の「マ」が落ち、「セ」が「エ」になれば、「エン」は「いん」とも表記される音のはずである。ちなみに、「ゴザリエン」は、人が「ゴザリイン」とも表記しがちである。なお、「ゴザリエン」の果ては「ガエ(イ)ン」である。

つぎに山形県下を見る。庄内に、「上あがませ」などの「～マセ」尊敬表現法が見えたりしてはいるものの、県下の主問題はなお、「マス」の略形である。「アリマス」が「アンス」になってはいないか。『山形県方言集』は、村山・置賜二郡のことばとして、

あんした anshita 連続語 ございました

をあげている。——「あんした」は「アリマシタ」ではないか。斎藤義七郎氏は、「山形県村山郡方言助動詞考」(『方言研究』第四輯 昭和16年10月)で、

ウソ<sup>△</sup>デ<sup>△</sup>アンス (うそでございます)

などをするしていられる。作家の外村繁氏は、その作品「東北」(『中央公論』昭和25年5月)で、「～で あんす」をたびたび用いられ、

これが志村であんす。

とか、

ほうがっす。大したものであんすな。

とかの表現をしていられる。「この度は、また、おめてたうござりあんす。」などの、「ヤンス」相当の「アンス」も見えてはいるが、上二例などは、「アンス」が「アリマス」を思わせやすかろう。(あるいは「ゴアンス」に近いものか。)

ところで、上の「ほうがっす。」は、「そうかね。」であろうか。だとすれば、「そうか」に「ス」がついたものであって、この「ス」は、「もし」形の文末詞「シ」であろうと思われる。「マス」の「ス」ではない「ス(シ)」が——すなわち、文末詞の「もし」形の「シ(ス)」が、山形県下では、べつにまたよくおこなわれている。方言絵はがきの『山形方言集』に見いだされる一例、

ヤロコサ ショワセテ ヤルツス。(子供(男児)にしよはせて届けます)は、「ヤル」に「ス」が後続している。「ヤルツス」は、「ヤリマス」ではない。

北条忠雄氏は「北陸道・出羽・陸奥」(『NHK国語講座』昭和33年11月)で、越後北部につき、

〔敬語〕① 聞手尊敬マス、エギマス・エギマシ<sup>行</sup>ネ<sup>エ</sup> (否定)

との指摘をしていられる。ここにも、「～マシ+打消助動詞<ない>」が見える。北越でのこのような状況を承けるものであろうか、庄内地方に、「アリマセン。」という意味の、「アリマシネー。」ならぬ「ガンスネ。」がある。藤島町の宿では、若い婦人の、

○ナ=[i]モ ガンス[ü]ネ。

何ありません。(食事についての謙遜)

(「ガンスナイ」とも言った。)

○ナ=[i]モ ガンス[ü]ネク[ü]テ ス[ü]ミ[i]マセン。

何ごさいませんですみません。

(「ネクテ」が「テクテ」とも言われた。)

などというのを聞きとめ得てもいる。北条忠雄氏は、上のNHK国語講座の昭和33年12月11日の放送で、庄内、鶴岡の「ミサハリマシネーカ。」を紹介された。(「ミサハリマスカ。」は、「ごらんになりますか。」である。)これには「マシネー」が見える。

北上して、秋田県下を見よう。県南、横手市域では、

○ドチライ オザリ[i]ス[ü] ゲー。

どちらへいらっしゃいますか。

などと言っている。この「オザリス」については、「オザリます」を考えることができようか。『秋田方言』を見ると、たとえば、「なるんす」について、「なります」の説明を与えている。ところで、同書に、

あえこ一つやる。あえこ一つたのむ。あえこしてあげんす。

などともある。「あげんす」は何か。

かうんす(連)[平] 買ひます。

「今日は本を買うんす。」 平=平鹿郡

ともある。これだと、「んす」が「ます」に相当する。ところでまた、

するんし(連)[雄] します。

「今するんし。」 雄=雄勝郡

ともある。このさいは、「する」の形の下に「んし」が見えるが、説明はやはり、「します」となっている。「んし」は「ます」なのか、それとも他源のものなのか。「あげんす」のぼあいの「んす」に、もし「ます」を考えてよいのだとすると、「んす」「んし」は、本来「ます」であったのだが、こういう形に

転化したのち、やがてそれは、自由な用法に生きて、「するんす」などとも言われるようになった、とされようか。横手弁の、

○若い人でも ツカウンス ナ。

は、“若い人でもつかいますな。”と説明された。秋田市では、

○オザルス カ。

は、「おいでになりますか。」の意のものだと教示された。「オジャル」相当の「オザル」に——それは「オザリ」とおなじようなものであろうが——「マス」の「ス」がついているのかどうか。『秋田方言』には、

す

普通語の「ます」に似てゐるが、活用はない。(以下略)

おれもいっしょにえぐす (えぎす, えぐんす えぐんさ) (私

も一所に行きます)

おめあもはやぐおぎるすか (おぎすか, おぎるんすか) (お前も

早く起きますか)

との記事がある。これを見るのに、「えぐす」は「えぎす」と等しいらしい。——その「す」は「ます」を思わせやすいか。ところで、「えぐんす」もある。ここでは、「えぎす」→「えぐす」→「えぐんす」の変化も考えられはしないか。つぎに「おぎるすか」「おぎるんすか」が見えるが、そこに「おぎす」も対置されているので、私どもは、まずは「おぎす」について、「おぎます」を考えることができる。さて、そういう「す」が、「おぎ」ではなくて「おぎる」にもつくようになったとは解されないだろうか。(「おぎるんす」は、「おぎるす」からの転と見たい。)『秋田方言』の記述者は、すでに「ます」からはなして「す」を認めている。現実に「す」が独自のものとして存在することはあらずわれないが、これについて、なおその前身を考えることは可能であるし、また、考えることも必要だと思う。北条忠雄氏は、「津軽路から南部へ」(『方言の旅』<みちのくの巻(1)——日本海筋——>)で、秋田のことばに関し、

聞き手尊敬は「申す」に由来すると考えられる「ス」を使い、

行きます—エギス

行きました—エギンタ

と述べていられる。「申す」起源の考えも一案であろう。柳田国男先生も、その最終の音が余りに簡略になり、屢々シともスとも聞えるのですが、多くはンシとかンスとか謂ひますから、即ち是も亦申すの変化だつたことが判るのであります。

というような考えかたをしていられる。(『毎日の言葉』) いずれにしても、その「ス」を「おぎるす」「おぎるんす」のようにもつかっているのは、用法のはなはだしい転移と考えなくてはならない。

『秋田方言』には、

えへん(連)[平] めません。

「父さんは学校に行つてえへん。」 平=平鹿郡

との記事も見える。「マセン」に相当する「ヘン」がある。「マセン」の「マ」が落ちて、「セン」が「ヘン」になったとはされないだろうか。(「マ」が落ちるといふのは、大きい事態ではある。)

秋田県下の状況と岩手県下の状況とを見あわせたい。やはり、いちおうは「マス」の「ス」を認めてよいのではなからうか。一ノ関弁の、

○ゼヒ[i] イッテ ケライン ヤ。タノミ[i]ス[ü] ヨ。

ぜひ行ってくださいな。たのみますよ。

での「タノミス」は、「タノミマス」ではないか。県中部東北寄り、下閉伊郡下の一例、

○そのことばは、ツ[ü]カ<sup>↑</sup>ェイス[ü]ー。

そのことばはつかいます。

は、「つかいマス」を思わせやすい。同地の、

○ソア イ[i]ミ[i]モ ハイッテンス[ü]。

その意味もはっています。

の「〜テンス」も、「ス」が「ます」をにおわせてはいないか。小松代融一

氏は、『平泉方言の研究』（岩手方言研究会 昭和29年10月）で、「ます」について述べられ、

- ①ら行四段活用動詞につくときは、その動詞の語尾が撥音になるか、「ます」が「あす」になる。

あります……あんます……ありあす      のります……のんます……のりあす

- ②ら行四段活用以外の動詞の場合（他の行の四段活用も除く）には、間に撥音をはさむ。か行変格活用には否定形につく。

起きます—おぎんます—おぎあす  
来ます—こんます—きあす

- ③四段活用動詞（ら変を除く）には、終止形についたようになる。

書きます—かぐます—かぎあす  
死にます—すぬます—すにあす

- ④四段活用の動詞の場合には、撥音になったり、加わったりしない。

- ⑤「あんます・おぎんます・かぐます」の類は年長者に、「ありあす・おぎあす・かぎあす」の類は若い層に多く用いられる。

と記述していただける。この中で、「四段活用動詞には、終止形についたようになる。」としていられるところが注目をひく。連用形も、その〔i〕母音の発音が、いわゆる東北発音のもとで、浮動的なので、しぜんに「終止形についたようになる」のではないか。——（『秋田方言』に「えぐす」とあるのも、ここに見あわせられる。さて、「ス」は、それ自体、独自のであり、「えぐ」などが終止形として意識されるようになると、その独自の「ス」は、「おぎるす」などと、「起きる」終止形にもついたりするようになるのか。）小林好日氏は、『方言語彙学的研究』（岩波書店 昭和25年11月）の中で、

岩手県の南部領では丁寧語のマスが動詞助動詞の終止形につくことがある。従つて動詞につく時は普通の連用形につくものと両様の云ひ方がある。例へば

イグマス イギマス (行きます)

キグマス キギマス (聞きます)

アルマス アリマス (有ります)

従つて次のやうな云ひ方が出てくる。

ソダマス さうです

オボエテダマス

オボエテイタッタマス

オボエテダマス

オボエテラマス

オボエテラタマス

} 知つて居りました

ユカネマス

行きません

かゝる云ひ方の出来た理由を文法史の問題として考へると説明は容易でないが、一種の意味移入の現象と見れば、さまでむづかしいことでない。

これは嘗て終止形につく感動助詞のモンがあり、東北方言ではモスと発音するから、これに丁寧語のマスが同音牽引で意味を移入したのではないかと思ふ。

と述べていられる。小松代融一氏も、『岩手方言の語彙』の「旧南部領」の条で、

ソダマス (そうです)

などとするしていられる。当県下の昔話類にも、「云はねます」「だれも来なかつたます」「したらよがべます」などとある。「マス」の自由な転用もはなはだしいとされようか。(「終止形につく感動助詞のモンがあり」とは、小林氏の考えかたであるが、東北方言では、「モン」「モス」が活用語の終止形の下にくる段になっては、すでにそれは、「モン(モス)」形ではあり得なくて、「シ(ス)」形であつたはずである。)

「どうどうしないマス」ではない「どうどうし<sup>ネ</sup>ネース」もある。たとえば、花巻市のことばでは、

○イ[i]ネース[ü] ジャ。

いないよ。

などとある。県北、岩手郡下で聞いたものには、

○オメ オス[ü]ス[ü] ク[ü]ス[ü] カ。カネス[ü] カ。

あんた、おすしをたべますか。たべませんか。(……たべる？ たべない？)

○コンヤ アメ フ[ü]ル[ü]ベス[ü] カ。フ[ü]ラネベス[ü] カ。

今夜雨が降るだろうか。降らないだろうか。(……降るでしょうか。降らないでしょうか。)

というのなどがある。「フルベス カ」は、「フルベ」というのへ、「マス」ならぬ「ス」がついている。(これは、前頁末の「よがべます」などに相当するものである。)「クス カ」「カネス カ。」を見るのに、「クス カ」では、「ス」に「マス」を考えることが容易である。「クス カ」との対応関係のもとで存立する「カネス カ。」の「ス」は、「クス」の「ス」と同一のものとしてよからう。「カネス」では、「ス」がはなはだしい転用を見せているというわけなのであろう。

青森県下を見るのに、まず、「あります」のなまり「あんす」が指摘される。(『青森県方言訛語』) つぎに、「アリマス」相当の「アリ[i]ス[i]」が聞かれる。かつて津軽半島の一小駅の前で、私が土地の人に、“宿屋がありましょるか。”と聞くと、相手の人は、“アリ[i]ス[i]。”と答えてくれた。たしかに「マス」の「ス」があるだろう。土地の研究者も、「ス」に「マス」を認めていられる。(人によっては、この「ス」に「申す」起源を考えるのであろう。) 私が木造町でとらえた「シ」の例をあげる。

○アオモリ[i]サ イ[i]ギ[gc̣i] シ[i]タ ガー。

青森へ行きましたか。

(“「イギンタ ガー」は目上への言いかたで、同等には「イッタ ガー」と言う。”とのことであつた。)

弘前市での一例は、

○イ[i]ージ[ji]タバ シ[i]ー。

おられたでしょう。

である。この例はおもしろい。おわりの「シー」は、「もし」系の文末詞「シ」である。“すこし敬意をあらわしたばあい”にこれをつかう。その「シ」とは区別されるのが、「イージタ」の「シ」である。この「シ」には、「ます」を想定してよかろうか。ところで、おなじく弘前弁に、

○イ[i]ギ[gçi]シ[ji]ナー。

行きなさいますな。

などとある。こういうことばづかいでの「シ[ji]」は——かなで書けば「ス」とすべきであろうが——、たとえ「マス」起源のものであったとしても、もはや「マス」にもどして解したりすることが不穏当なものかもしれない。津軽、木造町でも、

○イ[i]ギ[gçi]シ[ji]チ ガー。

行きませんか。（“行きなさい。”）

などと言っている。津軽半島内でも、

○アレ ミ[i]シ[ji]チ ガ。

あれを見ませんか。（親切なことばだという。）

などと言っている。これらで、待遇表現法分子「シ」をとりたてることができるか。もし「～シナ ガ」などが「シ」に「マス」を想定させるものであったら、このばあいもまた、「マス+ない<打消助動詞>」をとらえしめることになる。

「シ」「ス」について、一々「マス」ことばを考えるよりも、もはや「ス」ことばの成立を考えたほうがよいかもしれない。「あります」を言う「アリス」に対して、「ありません」を言う「アリサネ」も、津軽にあるという。

さてまた、津軽弁に、

○アリ[i]シ[i]テス[i]。

あります。

などの言いかたがある。「～シテス」の「ス」は何か。上述の「ス」が自由につかわれて、このようにも言われたりしているのかどうか。(宮城県下に於いて述べた時にも、「～シテス」の実例をあげた。P.405) 工藤祐氏は、「買物言葉」(『民間伝承』 第十九卷第九号)で、

「アッテンタガ」は「アッテインタガ」の略であり、「あっていましたか」の意である。

と述べていられる。(神部宏泰氏は、隠岐に「テス」を見いだしていられ、それは「テゴザンス」「テゴワンス」「テゴワス」からのものと見ていられる。P.423) (なお P.433 参照)

青森県「南部」の「マス」命令形の例は、

○ $\overline{\text{マ}}-\overline{\text{マ}}$ 。アガラシ[i]テ ク[ü]ダサ $\overline{\text{マ}}$ へ。

まあまあ。お上がりになってくださいませ。

などである。『青森県方言訛語』には、

そへば 行きへん (其れならば行きません)

などの言いかたが見える。——「マセン」の「へん」が見られる。『青森県方言集』にも、「山さ行げ<sup>へん</sup>。(山へ行キマセン)」などが見えている。なお同書には、

少し話コ<sup>へ</sup>ず。(少シオ話ヲイタシマス)

の言いかたが見える。『方言』第五卷第二号(昭和10年2月)の瀧野沢栄一氏「津軽方言の語法」の条にも、

コトスァキットトーセンヘス。今年はきつと当選します。

との実例が見える。「ヘス」には、「ます」のなんらかの投影が認められるか。(「マセン」相当の「へん」を起点として「ヘス」という形をおこすことはなかったか。)

「南部」野辺地町では、かつてつぎのような「申す」ことばも聞くことができた。

○イツ<sup>ニ</sup>[i]モ オセワ<sup>ニ</sup>[i] ナリ[i]モシ<sup>ニ</sup>[i]テ (申して) <sup>ニ</sup>[i]シ  
[i]。

いつもおせわになりましてねえ。

「モシテ」の「モ」が落ちれば「シテ」にはなる。

北海道地方の「マス」に関しては、今、言うべきかくべつのことがない。

○イラッシャイマセ。

○モシモシ。オハヨ <sup>↑</sup>ゴザイマシタ。

もしもし。お早うございました。(お早うございます。) (旭川での電話)

○オハヨ <sup>↑</sup>ゴザイマシター。

(これは、釧路での経験である。土地っ子の男性に、私が「お早うございます。」とあいさつすると、先方は上のように答えた。)

土地っ子どうしの通常会話に「マス」「デス」の出てくることは、すくないようである。

## 十二 むすび

「マス」助動詞のおこなわれかたは、さほど複雑ではなさそうであって、そのじつ、そうとうに複雑なものがある。活用のこと、その音変化のことなどはおくとしても、用法上、あるいはものに、「丁寧」と「尊敬」と「謙譲」との別があり得て、この点がはなはだ微妙である。もっとも、そのような微妙さ・複雑さを示す地域・地点は限られていて、日本語方言状態の現勢下では、謙譲の「マス」ことばのおこなわれかたについて、諸地域上に合理的な分布脈を見いだすことなどは、できかねる。

ともあれ、全国的に見て、「マス」ことばのおこなわれることはさかんである。人の、会話生活での待遇心理のはたらきのことを考えてみれば、かっこうの丁寧表現法因子「マス」の盛行は、もっともしぜんのことのように思われる。素朴な表現に富む方言世界のばあいであっても、「マス」はやはり、欠きがた

い重要因子であろう。(日本人の、対人表現にかける伝統的な表現心理にかえりみるにつけても、「マス」が歴史的に流行盛大をきたしていることが、いかにもと首肯される。)

「ゴザンス」「ナサンス」「クダサンス」や「ヤンス、ヤス」、「ジャンス・サッシュャンス」「ンス・サンス」の、日本語方言状態での広汎なおこなわれかたを見るにつけても、「マス」はさかんにおこなわれてきたのだということが、じゅうぶん察知される。上諸語はいずれも、その語態末尾に「マス」をふくんでいる。

「マス」問題で疑問を感じしめるのは、東北地方の「ス」である。「マス」に相当する「ス」のあることは、たしかであろう。それは、「マ」が落ちたものかもしれないし、「マス」の縮約されたものかもしれない。——どのように縮約されたとしても、結果は「マ」略と言いうるものである。さて一方に、ただちには「マス」を推定しにくいものもあるか。(——あるいは、「『マス』を推定しにくい状況の『ス』もできている。」とすべきか。)

## 第二節 デス

### 一 はじめに

今日は「マス」「デス」の時代であるとも言えよう。丁寧表現法がさかんにおこなわれ、「マス」ことば・「デス」ことばがさかんにおこなわれている。その状態は、方言表現の「マス」「デス」の言いかたと、いわゆる共通語での「マス」「デス」の言いかたとの重なりあった状態である。前節末でもふれたように、人は、つねに、一方で、ていねいにものを言おうとする。この意識は、方言生活と共通語生活とをつらぬいてはたらく。上に言うような重なりあいのできることもまた当然である。

「マス」と「デス」とでは、「マス」の上位性と「デス」の次位性とを指摘

することができようか。「ありません。」と言うほどではない時に、人は「ないです。」と言っているがちかもしれない。私どもは、諸方言下の人々の「ないデス。」との言いかたを、みだりに「デス」の勝手な用法などと言うことはできない。なるほど「デス」の気ままな用法ひろげであったかもしれないけれども、「デス」をこのようにつかいはじめたのには、待遇表現上の、一定の根拠があったのだとしなくてはならない。（——「マスとまで、あらたまて丁寧に言わなくてもよいのではないか。」「デスの程度でよいのではないか。」といったような意識・判断がはたらいたことであろう。）関東地方北部などで、「マス」のおこなわれかたが、「デス」のおこなわれかたよりも、はるかにすくない状況であるのなども、ここに考えあわされる事項である。

「デス」の語源については、従来、諸説がある。それらを簡潔にまとめたものは、日本大辞典刊行会『日本国語大辞典』第十四卷(小学館 昭和50年3月)の、つぎの記事であろう。

「です」の起源については、「であります」説、「でございます」説(藤原注「でございます」とすべきか。),「でおはす」説,「でそう(候)」説,「です」説など、諸説ある。狂言に見える「です」については「でそう」説が、近世中期に見える「です」については「でございます」説が有力である。両者は直接の関係がないとみることになるが、相互の連関を認めようとする考え方もある。また、近世の「です」が、そのまま明治以降の「です」につながるかどうかにも意見が分かれるが、明治以前の特殊社会の用語が、明治初年地方出身の武士階級の使用によって一般化したものと普通には考えられている。

「で」にサ変動詞「す」がついたと考えることは、今、私には、容易でない。

起源はともあれ、「デス」が明治中期以降さかんにおこなわれてきていることは、すでに周知の事実であろう。

「体言+デス」のばあいと、「静カデス」「シナヤカデス」などの形容動詞丁寧態のばあいとがあって、かたがた「デス」形の出現頻度は大である。

要するに、「デス」が一般丁寧語として広く各界・各層におこなわれていることは、言うまでもなからう。

## 二 南島方言の中のこと

さきには「マス」相当のものについて述べるところがあった。(「ジャピラ」「ジャビーン」P.359) 今、「デス」に関連しても、いくらかの問題事実をくみあげてみる。(これは、私がわからないので、念のためひとまず問題視しておく、という意味である。)

岩倉市郎氏の『喜界島方言集』のP.4には、

アイガテー クンデール

有難う御座います。有難い、ことですの義。最敬の謝辞。

とある。同書P.188には、

デー ですーでございます。ヂャの敬語。

アン・デー さうですーその通りです。

アン・デーロ さうでせうーそれに相違ありますまいの意。

アセー・デンガ それはさうですがーとは言ひますものの。

ヌー・デー 何ですか一言はれた事を再問する場合。又は、それは何ですか。

ヌー・チ・デー 何ですつて。

イチュス デー 行くの、です。

とある。ちなみに、同書P.17には、

▽  
アエー、アレー (上嘉) 御座います。存在の意をあらはすアイの敬語。  
デー参照。

とあり、P.286には、

▽  
ミドゥーサ・エール お目遠う、ございます。——お久し振ですねの挨拶



徳之島  $\left\{ \begin{array}{l} \text{ダレン(亀津町一円)} \\ \text{デ ン(天城村一円)} \\ \text{ダーニ(伊仙村)} \end{array} \right\}$  活用なし

永良部 デーロ

なお、

オボラ, ダーニ。オボラ。 $\overset{\text{ダ}}{\text{テ}}\overset{\text{ニ}}{\text{ニ}}$ 。

ともある。

### 三 九州地方の「デス」

鹿児島県下についても、宮崎県下についても、「デス」の通用が認められる。「何々デス モンター。」との言いかたは、宮崎県下に熟しており、また、熊本県下でもそうである。

熊本県下でも、宮崎県下でも、「なにごとですか。」のようなばあいは、「ナゴッテス カー。」の言いかたになりやすい。

○イカシタッデス カ。

お行きになりましたか。

は、熊本県下にいちじるしい一つの言いかたである。

○ゴユックリ ヨカッデス バイ。

ごゆっくりなさったらいいんですのに。

の「ヨカッデス」は、「ヨカトデス」か。熊本県南には、「〜デッショ(でしょう)」の言いかたがある。また、「デース」もあるという。(白石寿文氏による。)

○ソギャンデッショ ナーン。

そんなでしょうね。

は、天草島本渡で私が聞いた「デッショ」例である。天草には、「デッショ」のおこなわれることがさかんであろうか。「デッショ」はまた、県北でもよく聞かれる。阿蘇南麓では、かつて私も、「デッショ-」が「マッセン」「マッ

シュ」とともによくおこなわれるのを聞いた。ちなみに、

○何々と オモートッタッテショ一。

何々と思ってたんでしょ。

も、同地で聞いたものである。

長崎県下に、「です」の「デヒ」があり、

mア一 モ一 オカエリデンヒョカエ

ああ、もう お帰りでしょうか。

のような言いかたもある。『全国方言資料』第6巻「長崎県南高来郡有家町」県下に、「デッショ」「デッショ一」もいちじるしく、種ヶ島克巳氏の『平戸方言語法草案』（稿本）には、

「だっしょう」「でっしょう」「でゃっしょう」

一般ニハ長音ニ云ハズ短音ニ「だっしょ」「でっしょ」「でゃっしょ」ト云フ傾向アリ

この分なら明日良かと

{	だっしょう
	(だっしょ)
	でっしょう
	(でっしょ)
	でゃっしょう
	(でゃっしょ)

とある。「でっしょう」は、「でゃっしょう」に関係の深いものなのかどうか。(「デッショ一」が、「マッシュ一」などの促音形からの刺戟で生起することはなかったらうか。)『壱岐島方言集』には、「デッショ一」も見え、かつ、

ネッショ一

でせう。「デッショ一」に同じ。

というの見える。——「ネッソル ですよ。」ともある。

○何々の ホーワ オナシ コッチェス。

何々のほうはおなじことです。

は、長崎県本土部で聞いたものである。

佐賀県下の「デス」に関しては、「ワタシントデス。(わたしのです。)」などの言いかたもよくなされていることを指摘しておく。

福岡県筑後での「デス」一例は、

○マダ デテ クットデス カ。

まだ出てくるのですか。

である。博多ことばなどでは、「デス」が「レス」ともなっている。

fソーレスタイ エー

そうですね、 ええ。

などがある。(『全国方言資料』第6巻「福岡県福岡市博多」)筑後に「デッショ-」があり、筑前にもまた「デッショ-」がある。

大分県下では、「デッショ-」などは聞かれないようである。

ちなみに、全九州でも、終止形の「デッス」は聞かれないように思う。

#### 四 中国地方の「デス」

山口県下では、「デス」の言いきりが、たとえば「ホントデスィ。」などのように、「デスィ」となりがちである。——その特色が濃い。もう一つの当県下での特色は、訪問辞として、「アンタンデス カ。」(おうちですか。)の言いかたのなされていることである。山口県長門西部に、「デ-ンス」の言いかたがある。これは、「デ-ア-ンス」の言いかたにつれあうものである。「ソレデ-ア-ンス ケェ。」(そうでありますか。)などを見るのに、「デ-ア-ンス」は、「ヤンス (アンス)」を認めしめるものであろうか。とすると「デ-ア-ンス」も、「ヤンス (アンス)」系のもと考えられることになる。

広島県下の「デス」では、「でしょう」の「デヒョ-」などが耳だたく、また、「何々デス ワイ。」の「何々デサー (デサイ)。」が耳だたい。

島根県下、出雲での、

○インヤデス。

いいえ。

の言いかたは、注目にあたいする。「いいえ。」との言いかたにははいりきれないで、在来の「<sup>インヤ</sup>いや。」の言いかたをとり、しかもこれに「デス」を加えて、

「いや。」ではない「いいえ。」の言いかたをしている。方言生活下での言語くふうとして、まことに妙を得たものではないか。

ここに、「マス」と「デス」とでは、やはり「デス」のほうがいくらかとりつきやすいものであること（いくらか敬意度のかかるものであること）がほの見えていよう。

隠岐島での「デース」「テス」に関しては、神部宏泰氏のご研究がある。「隠岐方言の丁寧表現法」(『国文研究』第十三号 昭和42年11月)には、

「テゴザンス」「テゴワンス」(「テゴワス」)が「テス」を、「デゴザンス」「デゴワンス」(「デゴワス」)が「デース」を、相即的に、それぞれ特異な丁寧語を成立せしめている点は、別して興味深い。

とある。また、

以上にとりあげた、「ゴザンス」系とみられる「テス」「デース」が、共に、「島後」南部地区を、分布の主域としている点は、注目に値する。

とある。「テス」「デース」の実例は、

○コノ キンネンワ オトロエマシテス チー。

最近は衰えましたねえ。〈西郷・今津〉

○サザエガ トレマスルデース。

さざえがとれます。〈西郷・今津〉

などである。(「テス」に関してはP.433参照)

鳥取県下で、「ことです」の「コッテス」,「ことでした」の「コッテシタ」が聞かれる。——これは、広く中国地方にも聞かれるものでもある。室山敏昭氏によれば、

○インマデス。

いいえ。

は、西伯地方のかなり広い範囲に認められるようであるという。

岡山県下の「デス」では、慣用の、

○ラククデス。

ええ、けっこうです。(だいじょうぶです。)の言いかたが注目すべきものである。

## 五 四国地方の「デス」

愛媛県下では、南部の、  
○ソーデス ライ。

そうですわ。(そうです。)

が、特記すべき慣用の言いかたである。

高知県下については、言うべきことがない。

徳島県下に、「でしょう」の「デヒョー」がある。「何々デス セ。」の「何々デッセ。」は、本県下だけのものではない。

香川県下にも「何々デッセ。」がある。

## 六 近畿地方の「デス」

兵庫県但馬では、「わたしのです。」を言う時、「ワタシノンデス。」とすることがすくなくないようである。播磨に、「何々ですけど」の「(～)デヒケド」, 「そうですか。」の「ソーデヒ カ。」があり、「そうですな。」の「ソーデン ナー。」がある。「デス カ」の「デッ カ」もある。「ソーデッ カ。」などと言っている。「デス」の「デフ」も県下にある。「デッサロ」の推量形のおこなわれることもいちじるしい。

京都府下にも、「ワタシノンデス。」などの「ン」のはいる言いかたがある。

大阪府下を見る。「何々のです。」が「何々ノンデス。」ともなっている。大阪弁でも、「何々デヒケド」がよく聞かれる。「デス」の「デフ」もある。「何何デス ノヤ。」にあたる「何々デン ネ。」の言いかたもさかんである。「何々デス ナ。」が「何々デン ナ。」と言われている。「デス セ」の「デッ セ」もよく聞かれる。「デッ サイ」「デッ サ」(デス ワイ)もある。「デス カ」の「デッ カ」もまたさかんである。「デッサロ」もよくおこなわれている。

おなじく「デス」ことばがおこなわれるにしても、近畿、大阪弁などでの「デス」ことばの諸相は、東京語でのそれとは、はなはだしく異なっている。—こういふところにも、関東弁と関西弁との根づかいちがいが看取されよう。

和歌山県下にも、「デヒョー」があり「レス」(です)がある。県南にまた、「デンス」が聞かれる。

○コリャ アタシャーンデンス。

これはわたしのです。

は、南の串本町での一例である。『和歌山県西牟婁郡串本町誌』にも、

デンス (ですの意 そうでんす等)

との記事が見える。『和歌山県方言』にも、

デンスラ ですよ

などとある。煤垣実氏は、「紀州ことば(4)」(『和歌山方言』4)で、

「です」に対応する形にも鼻音化形があって、

そうでんす。　　そうでんひょう。

そうでんした。　　そうでんすりゃ。

となるが、打消の形はどうなるのか尋ねおとした。

と述べていられる。『和歌山県方言(其二)』の中の「『田辺方言』中より」にも、「でんす詞」の説明が見えて、

この語はですの訛りであるから

とある。が、思うのに、紀州の「デンス」(『南紀土俗資料』にも見える。)も、「でヤンス」に近いものではないか。それが、現実には、ほとんど「デス」なみにつかわれているのであるらしい。

奈良県下南部の「ソーデヒ ネー。」は、「そうです ノヤ。」である。

三重県下、伊賀での「そうです ノヤ。」は、

○ソーデヒ ネァ。

である。「ネァ」が「ニャ」にもなる。巖佐正三氏は、「平古に残る桑名武家ことば——アクセント・語法について——」(『三重県方言』第3号)で、

丁寧のデス（指定の助動詞，形容動詞の語尾）は使わなかつたという。  
と述べていられる。

滋賀県下については，今，とりたてて言うべきことがない。

## 七 中部地方の「デス」

福井県若狭では，「これです ノヤ。」を「コレデス ンヤ。」と言っている。  
「デス ンヤ」の言いかたは，当地方に熟している。

石川県下，能登半島東北端の珠洲市域内では，

○ソ<sup>ナ</sup>ナガ<sup>デ</sup>ンス ノケー。

そうでございますねえ。

などの言いかたが聞かれるという。（愛宕八郎康隆氏教示）愛宕氏は，指定断定の助動詞として，「ヤ」と「ジャ」と「デア」と「デンス」とを見ていられる。——「デンス」はやはり「でヤンス」的なものではなからうか。（ことによっては，「デス」の「デンス」があるのかもしれないけれども。）

○コ<sup>リ</sup>ャー オモカンガデス。

“これはうごかないのです。”

は，珠洲市域内に聞かれる「デス」例である。

富山県下でも，また，「〜ガ(ガ)デス」が聞かれる。

○コ<sup>リ</sup>ャ オラノ<sup>ガ</sup>デス。

これはわしのです。

は，県下東部での一例である。

新潟県下に関しては，小林存氏が「越後方言の結語法概観」（『国語研究』第十卷第七号）で，

デス系は比較的中越に濃いが本来的なものではないと思はれる。新発展の工業地帯に多く発見されるが，……………。

と述べていられる。越後の「デス」用法では「ワタシノノデス。」「オレンノデス。」などの言いかたが注目される。

「新潟県佐渡郡相川町大倉」(『全国方言資料』第8巻)には、

*m*ハー ソーイス

そうです。

などがある。佐渡では、「デス」が「レース」などとも言われている。

岐阜県下では、『岐阜県方言集成』の「不破郡」の条に、

そうすか(さう) [句] さうですか。

が見える。美濃北部で私が聞いた一例は、つぎのものである。

○ホーデス<sup>ン</sup> ナー。

そうですねあ。

愛知県に関しては、『全国方言資料』第3巻の「愛知県南設楽郡作手村菅沼」の条に、

*m*ホリャ ソリャ アリガトーサマエス\*

それは それは ありがとうございます。

\* [es]。「です」の粗略な発音。

というのが見える。

長野県下では、『信州方言読本 語法篇』に、

信州にも今は、「です言葉」が盛んに用いられて居りますが、年寄りの方は一般に「でござす」「でやす」を用いて、「です」はあまり用いません。

とある。私は、県北部の西辺で、

○ソーデス<sup>ン</sup> ネー。

そうですね。

○モー、ネンネン チガウヨーデス<sup>ン</sup> ネー。

もう、年々、ちがうようですね。

などを聞いている。「……デスィ」の言いかたも、当方にあるらしい。“木曾一帯および下伊那南部にかけて”、

そーしてれすね (そうしてですね)

が聞かれるという。(『信州方言読本』) 新村出先生は、「方言史談」(『方言』第

四卷第一号 昭和9年1月)で、

上州草津道中の統膝栗毛(第十編上巻)を見ると、信州上高井郡仁礼駅あたりの山寺の和尚の言葉の中に、「ゑいこんでへす」といふ文句があつて、デエス即ち所謂デス言葉が出てゐる。

と述べていられる。

「静岡県安倍郡井川村田代」(『全国方言資料』第7巻)には、

f オジーチャン キョー ヤマエ イクデスカネ

おじいちゃん きょう 山へ いらっしゃいますかね。

の言いかたが見える。「イクノデスカネ」とはなっていない。御前崎の、

○イカイ モナ ユワナイデス ヨ。

大きい者(おとな)は言わないんですよ。

というのも、「ユワニンデス ヨ」とはなっていない。静岡県下に、「ワタシンノデス。」「ボクンノデス。」のような言いかたもある。徳田晴彦氏は、「岳陽語法一用言之部一」(『方言』第五卷第二号 昭和10年2月)で、

(上略) ノッポナヤンデ、 ドーンヨーモネア<sup>ウ</sup>ダデス 向ふ見ず(暴れん坊)な奴で、どう為様も無いのです。

との言いかたを示していられる。——「〜ダデス」の言いかたが注目される。

「山梨県北都留郡上野原町西原」(『全国方言資料』第2巻)では、

m ハイ アリガト<sup>ウ</sup>ーサンデンタ

はあい、ありがとうございました。

との言いかたをすするという。清水茂夫氏・渡辺宦弘氏は、「西山村方言の語法」(『西山村総合調査報告書』)で、

指定の意味をあらわす「だ」「です」は、西山村において「ドー」「デス」が用いられるが、「デス」は湯島にのみ少し使われているくらいであつて、奈良田では「ドー」を普通用いる。そのため「です」は多く、「ダイ」を用いて表わしている。

山あ不便ドー。(山は不便だ)

こみよ煮るダイ。(米を煮るです)

と述べていられる。「ダイ」は、どういうことばなのであろうか。

## 八 関東地方の「デス」

『全国方言資料』第2巻の「神奈川県愛甲郡宮ヶ瀬村」の条には、

*f*ウチエネー イグデスヨー

実家へねえ 行くんですよ。

というのが見える。私は、西北部で、「つかうンデスケド」などの言いかたを聞いた。日野資純氏は、「神奈川県愛甲郡煤ヶ谷村」での、

ソンナラ、ハヤク、カクデンタネー

との言いかたをあげていられる。(『日本方言の記述的研究』)

「東京都」(『全国方言資料』第2巻)に、

*m*アー ソースカナー

ああ、そうですかねえ。

などの「ス」(です)の言いかたがある。さて、旧来の東京語では、「ありませんデス。」とは言わないで、「ありませんノデス。」と言う。また、「行くデス。」とは言わないで、「行くンデス。」と言う。「なかったデス。」とは言わないで、「なかったンデス。」と言う。「ほしいデス。」とは言わないで、「ほしいンデス。」と言う。東条操先生は、昭和のはじめごろ広島に来住されて、東京語に、以上のような「ノ(ン)」の用法の画然としていることを強調せられた。関西人の私などは、「どうどうしましたデス。」などとは言おうと思わなかったけれども、「ほしいデス。」は、このままでよきように思えた。「ン」をいれると、なんだかちがったことばになるように思われたのである。——方言人の単なる感懐であった。しかし、そのごに、東京っ子の人たちのことばを聞くたびに、たとえば、「読んでいただきたいンデスガ」などと、きまりよく「ン」が入れられるのを、なるほどと了解することができた。ところで、『全国方言資料』第2巻「東京都」の条には、

mニヒャクゴジューエンデモ アンマリ ニンソクワ ヨロコバナイデシタ  
250円でも あまり 人足は よろこばなかったで

ローガ

しょうが、

などとある。

『東京方言集』に、「テス」が見える。つぎのとおりにするされている。

マシタ、ゴザンシタを一層丁寧にして、タの代りにテスを用ゐる語法がある。

たった今お電話がカカリマシテスよ。あちらに御飯の支度をさしてオキマシテス。私はどんなに気味が悪うゴザンシテシヨ。さぞあなた御迷惑でゴザンシテシヨ。

ここに、外形としては「デス」に似た「テス」がある。「デス」ことばでないことは明らかであろう。神部宏泰氏は、隠岐の「テス」について、「てゴザ(ワ)ンス」起源を考えていられる。(P.423)

千葉県下でも、

○ソース[ワ] カ。

そうですか。

などとも言っている。本山桂川氏の『千葉県郡別方言集 中篇』（日本民俗研究会 昭和7年7月）には、山武郡の、

サウダデン さうです

が見える。

埼玉県東部の、

○イワナイッス。

は、「言わないんです。」である。池ノ内好次郎氏の『埼玉県入間郡宗岡村言語集』（自家版 昭和5年9月）には、

。。。デサ ……………です

（ちよつくらそこまで行くん——）

というのなどが見える。

「群馬県勢多郡大胡町」（『全国方言資料』第2巻）では、

*f*ドノクレー ホシーンデスネ

どのくらい ほしいんですね。

との言いかたをしている。県下に、「ワタシノガンデス。」などの言いかたもある。『万場の方言』には、

無いんデンサイ （老）…のです。

との言いかたが見える。ここにまた「デンス」が認められる。「でヤンス」を思わせるか。

栃木県下に、「ワタシナデス。」（わたしのです。）、「オレンノデス。」（おれのです。）、「オレンナデス。」などの言いかたがある。

飯豊毅一氏は、『福島県史』第24巻「民俗 二」の中で、栃木・茨城に関して、「デース」を指摘してられる。

茨城に「デンス」もある。

○ソーデンス。

そうです。

は、県北の一例である。『茨城県方言の考察』には、「デンス」「デンシヨ」の言いかたが見えている。県下に、「ワダシノガンデス。」（わたしのです。）などの言いかたがあり、また、「ソース[ $\text{u}$ ] ヨー。」（そうですよ。）などの言いかたがある。『全国方言資料』第2巻の「茨城県新治郡葦穂村」の条には、

*f*アルゲネス

歩けません。

とある。

## 九 東北地方・北海道地方の「デス」

東北地方では、「マス」のばあい同様、「デス」のばあいにも、やがて、略形の問題が出る。

福島県相馬郡関沢村には、大橋勝男氏の教示によれば、

○コタンビヤグショ<sup>ー</sup>ガ オーインデスカラー。  
(小反百姓)

との言いかたもあれば、

○ソンスル コトガ オーイデス <sup>↑</sup>ネー。

との言いかたもある。県下に、「ワタシナンデス。」などの言いかたもある。県下のいわゆる中通りの地域（東北本線すじ）に、

○ナンジン ナッタンデッス。

何時になったのです？

のような言いかたがあるか。——この「デッス」は、「デス」にあたるものとしてよかるか。『相馬方言考音韻語法の部』には、「デース」が見えている。すなわち、

▲です（「でした」はその過去の形）

「だ（だった）」の敬譲。「で」が「でえー」と訛し「でえーす」となる。

どなたでえーす どなたでえーした ひどえ風でえーすな ひどえ風  
でえーしたな

ほーでえーすか（さうですか）

というような記事が見える。『福島県中村町方言集』（一言社 昭和6年10月）にも、

このぼおし、なんぼだ。」はあ、えちえんでェす。

というのが見える。

宮城県下に、まず、「オレンナデス。」などの言いかたがある。この「デス」が、「ス」になってもいる。「ソス カ。」は、「そうですね。」であろう。松島湾岸での私の調査では、

○サンジュ[ü]エ[ɛ]ンデ エ[ɛ]ー ワクス[ü] カイ。

三十円でいいわけですか。

などが聞かれた。

○コレ アンダナス[ü] <sup>↑</sup>カ。

これはあんたのですか。

は、石巻弁の一例である。仙台方言に関する古書、贅庵『方言達用抄』（文政10年秋8月）には、

なんでいす。 なんの事。 なんとアへ。

というのが見える。

仙台弁では、

○オネガイ[i]ン[i]ス[ü]テ[e]ス[ü]。

などと言う。土地の人は、「システス」を説明して、「しましてございます」の簡約化だとした。また、ここに「テス」が見られる。『仙台の方言』には、

「いがすてす」（はいよろしいです）

「いがすてがす」（はい、よろしうございます）

「いがすてござりす」（はい、かしこまりました）

この記事が見える。「てす」があり、「てがす」があり、「てござりす」がある。「てす」は、「てござりす」「てがす」系のものか。（P.414,423）

山形県下に関しては、言うべきことがない。

岩手県下に、「デス」の「ス」が認められる。『全国方言資料』第1巻の「岩手県宮古市高浜」には、

*m*イヤ トリアエズ マー ソノ ナラブモンダッテ セメラレタノ

いや とりあえず まあ その 並ばなければいけないと 責められたの

ス

です。

の言いかたが見られる。花巻弁の、

○オデァッタス[ü] カ。

いらっしゃいますか。

もまた、「オデァッタデス カ。」であろうか。下閉伊郡の一例は、

○ヤマガダノ ナニ[i]ガワス[ü]ー。

山形の何川です？

である。県下に、「デス」相当の「ス」がよくおこなわれている。

当県下に、「デンス」「デース」の言いかたもあるらしい。『全国方言資料』第1巻の「岩手県宮古市高浜」の条には、

*m* ウーン ソーソー ウーン ホッキツキデ ソノ タンゴーノ ホッキ  
                   そうそう                  ほっき突きで                  端午の節句の ほっき

オ ツキサ  $\left( \begin{array}{c} \text{ウーン} \\ m \end{array} \right)$  イッターンデース  
 を 突きに                  行ったのです。

*m* アノ アノトキ アレダモネンス アノ オラエノ オー カカガトー  
 あの あのと き あれですものね あの わたしの家の 家内などが  
 ガ ヨメニ コノ エサ クル ヤタリモデース

嫁に わたしの 家へ 来る 当時もね、

などとある。「端午の」が「タンゴーノ」と言われている。その下方に「デンス」が見えている。「デンス」については、やはり「でヤンス」も考えておかなくてはならないか。「デンス」「デンス」と「デース」とは、つねには同質のものではあるまい。

小松代融一氏は、『方言学講座』第二巻（東京堂 昭和36年3月）の「岩手」の条で、

旧伊達には「テス」（大体「デス」に当る）を加えて、「ございます」系を、（よんでみ<sup>あ</sup>すテステゴザリ<sup>ア</sup>ス）（読んでみたのでございます）という用法がある。

と述べていられる。ここにも、問題の「テス」があるか。小松代氏はまた、同所で、

旧伊達には、また丁寧をこめた伝聞の意の助動詞に、「テァス・ツァス」がある。

東京サ行<sup>エ</sup>ぐテァス（東京へ行く<sup>エ</sup>と<sup>エ</sup>言<sup>エ</sup>て<sup>エ</sup>いま<sup>エ</sup>す）

盛岡サ来<sup>ク</sup>ッツァスタ（盛岡に<sup>ク</sup>来<sup>ク</sup>られる<sup>ク</sup>という<sup>ク</sup>由）

と述べてもいられる。「伝聞の意の助動詞」とされる「テァス・ツァス」は、

どういふものであろう。(――念のために、これをここにかかしておく。)

秋田県下の、

○ケサ オザツタス[ü] カ。

けさ(秋田駅に)来られましたか。

などとある「ス」は、「デス」相当のものか。この種の「ス」がよくおこなわれている。

○ス[ü]グ[ü]フ ホーサ デハッテ ミ[i]ネス[ü] カ。

宿(地域名)のほうへ出かけてみないですか。

は、県東辺の一例である。『秋田方言』には、「でえす」が見える。

でえす(助) [雄] です。

「さうでえす。」 雄=雄勝郡

などとある。

青森県下の「デス」に関しては、『言語生活』第五号(昭和27年2月)の「方言をめぐって」の談話に、東条操先生・此島正年氏・北条忠雄氏の、つぎのような会話が見える。

東条 デスが標準語から入ったか、元からあったか、問題になるね。

此島 デスは問題になりますね。津軽あたりの、デスは、東京あたりの「です」と違いますね。

北条 津軽にも、デスがありますか。秋田県にもデンがあります。「いきます」は、イクデン。「そうです」は、ンダテン。これは形からいうと、「です」と同じです。聞き手の尊敬ですから内容も同じですが、違うところは成立と気持が多少違うんです。形だけ同じで内容も同じだといってもまた違うんですが、これは方言のむずかしいところです。

青森県下にも、単純に「デス」と解してよいものがあることは、たしかであろう。

○ソ<sup>ノ</sup>ンデス[i] ネ。

は、「そうですね。」にちがひがあるまい。『野辺地方言集』には、「オバンデス」が見えており、「御晩です」との説明がある。『青森県方言訛語』には、

行くげです（行くそうです）

高いげです（高いそうです）

そだげです（そだそうです）

などがある。ところで、弘前ことばの、

○オ $\overline{\text{メー}}$  ド $\overline{\text{ゴサ}}$  イ $\overline{\text{グ}}$ [ $\overline{\text{ü}}$ ]デ $\overline{\text{シ}}$ [ $\overline{\text{i}}$ ]  $\overline{\text{バー}}$ 。

あんたどこへ行きます？

などとなると、この「デシ」は何か、と思われてもくる。

「青森県南津軽郡黒石町」（『全国方言資料』第1巻）の、

$\overline{\text{m}}$ ニャー ホントネ シヌド $\overline{\text{ゴシタネ}}$ <sup>1)</sup>

いや ほんとうに 死ぬところでしたね。

1) 「です」はこの地方では「ス」となる。

や、「南部」地方南方での、

○ツ[ $\overline{\text{ü}}$ ]イ $\overline{\text{タ}}$  モノ $\overline{\text{ス}}$ [ $\overline{\text{i}}$ ]。

搦いたものです。

は、「シ」「ス」に、「デス」ことばを認めしめるものであろうか。

北海道地方では、「わたしのデス。」「わたしデス。」などの言いかたが、ふつうにおこなわれている。全道に、「デス」ことばが流通している。

○オ $\overline{\text{バンデス}}$ 。

○オ $\overline{\text{バンデシタ}}$ 。

は、通用のあいさつことばである。

○ト $\overline{\text{キー}}$ マ $\overline{\text{デシカ}}$  ナ $\overline{\text{インデス}}$ 。

（旅行したことは）東京までしかないんです。

は、道東部で聞きとめた一例である。

## 十 むすび

「デス」と「マス」との相関のことは、もはや言う必要がない。

「デス」ことばにもまた、方言習慣でのそれと、共通語習慣でのそれとの、分別しがたい重複が、ときに認められる。

「これはデス ㊦ー。」「沖繩のどこかのデス ㊦ー。」などと、「デス」が慣用されているのは、共通語「デス」の、はばびろい生きかたを証するものであろう。「デス」を用いれば、——「前にデス ㊦ー。」などにしてもであるが、「デス」の前にかいていることばのまとまりを、「デス」が体言化する。これは、一種の便利な表現法でもある。共通語「デス」は、はばびろく用いられるはずだとも考えられる。

「うれしいノ(ン)デス。」を「うれしいデス。」と言うなど、今日は、「ン」や「ノ」をおかないで「デス」をつかう言いかたが、一般化しつつある。方言での、本来的なその傾向と、共通語でのその新傾向とが、重なりあっていようか。

「デス」ことばは、進展してやまない。「デス」の生命力はさかんである。——このように言うことができよう。共通語の「デス」の前途は、開豁である。「デス」語法が標準語に登録されることも、うたがう余地がなかろう。

## 第三節 ドス

### 一 はじめに

「〜で オス」からの「ドス」が、「デス」相当のことばとしておこなわれている。京都府下を、分布の主域とするものであり、京都弁の「ドス」は、大阪弁の「ダス」と、あざやかに対応する。

「デス」や「ダ」が指定断定の助動詞としてはたらくことは、言うまでもな

い。「ドス」も、「ダス」とともにまた、指定断定の助動詞である。さて、「ダ」や「デス」は体言に接続する。この時、私は、「ダ」や「デス」にも動詞性能が内存すると考える。今、「ドス」を見るにいたって、そのことが、いちだんと考えやすい。なぜなれば、「ドス」には「オス」が内存し、「オス」は「ある」ことを言う動詞だからである。

京都弁では、「ドス」ことばと「オス」ことばとが、あいつながってよくおこなわれている。

## 二 近畿分布

九州地方のうちに、「ドス」があるかどうか。次節に述べるように、「ダス」は、そうとうに広く存在している。「ダス」からの変形として、「ドス」が成立していたりするかもしれない。(「〜で オス」からの「ドス」は、存在し得てはいまい。——近畿ふうの「オス」は、九州にはないように思われる。)

ところで、都築頼助氏の「福岡」に関する記述(『方言学講座』第四巻〈東京堂 昭和36年6月〉の「方言の実態と共通語化の問題点」の条)には、

「ラス・ダス・ドス」も時に聞く。単なる指定「だ」等と異り、丁寧さがある。

との説明が見える。

中国地方にも四国地方にも、「ドス」はおこなわれていない、と見てよからう。

「ドス」はおよそ、近畿地方のものと思われる。

さきに、大阪弁の「ダス」に京都弁の「ドス」が対応することを述べたが、大阪市内にも「ドス」がなくはないらしい。「大阪府大阪市」(『全国方言資料』第4巻)の条には、

*m*ソラー ソードスワ フンナンナー ( *f* ソー ) アノー センニチマ  
 それは そうですよ、それならねえ。 ( *f* そう。 ) 千日前に<sup>1)</sup>  
 エニ アリマシタナー 1) 地名  
 ありましたね。

とある。

「ドス」「ダス」の分布について早く発表せられたのは、泉井久之助氏であった。『方言』第二巻第一号（昭和7年1月）に、「淀川沿岸地方におけるドス・ダスの分布について」のご発表が見える。氏の、昭和22年6月発行『言語民族学』（秋田屋）にも、「近畿の方言について」の章にまた、「ドス」「ダス」「デス」の分布図が見える。『方言』のご論文には、

二つを比べると丸（どす系統）の方がやゝ優勢であつて地勢上よりして当然界線を劃するであらうと思はれる山脈を超えて大阪府の方に乗り出して丸（ドス）と四角（ダス）の混合地の出現を余儀なくせしめてゐるのは、とある。

「ドス」の本場は、京都府下、加えて滋賀県下である。京都弁の「ドス」のことは、すでに周知のところであろう。京の舞妓のこぼなど象徴される「ドス」ことばは、京の地顔をえがくものであろう。——「ドス」は、だいたい、女ことばとされよう。その「ドス」が、人々に、いかにも自由につかわれている。使用頻度は、はなはだ高い。「ドス」形と連用形「ドン」とがよくおこなわれているようか。「ドス」と「オス」とが併用されることは、さきにもふれた。

○ソードス カ。ソリャ ヨロシ オス ナー。

そうですか。それはいいですね。（女性のあいづち）

の調子で、両者を自在に運用する。「ドスヤロ」の言いかたも頻用されている。「……ドス エー。」「……ドス エナー。」の女性ことばも、いかにも京都ふうである。「……ドッ ↑セ。」の言いかたも、人の耳にしたしいものであろう。おもしろいのは、「……ドス。」で問いになることである。「それは何ですか。」と聞くのにも、「ソレ ナンドス。」と言う。今日、「ドス」ことばは、一般には、

しだいに年長の人のことばになりつつあるか。京都府下での「ドス」ことばの分布は、北、丹波内におよぶ。北方の船井郡内にも、「ワタシノドス。」などの言いかたがある。北桑田郡の例をあげるならば、

○アー ソードス カ。

などがある。——(丹後に、「ドス」は見いだされないのである。)

滋賀県下に「ドス」がよくおこなわれているのは、刮目にあたいする。県下の東西南北に「ドス」ことばが見られる。岸田定雄氏は、「ドスの領域」(『方言』第七卷第十号 昭和12年12月)で、

ドスの領域であるが、大まかに言って江州一円はドスである。

と述べていられる。

○ソードス ㊦ー。

そうですねえ。

○アキンドーバッカリドス。

商人ばかりです。

は、彦根ことばの二例である。(安土へんでは、「ソードス。」はあまりおこなわれていないのか。)湖西、朽木村での「ドス」例は、

○ヨソイ イトルドス。

よそへ行ってるんです。

○ウマワ チョットモ イヤ センノドス ノヤ。

馬はすこしもいやしないんですよ。(大女→藤原)

などである。この地で、老男が私に説明して、

○熊が ギョーサン オルノッセ。

熊がたくさんおるのですよ。

と言った。この「オルノッセ」は、どんな言いかたなのであろうか。県立大津高等女学校が、生徒用につくった刷り物、『正しい日常語』(県立大津高等女学校 昭和18年9月)には、

ソードス } さうです  
 ソース }

というのが見える。「ドス」の「ス」もあるのか。

岸田氏の、さきのご発表には、

鈴鹿峠では一寸考へるとこれこそ自然の障壁でドスは此処で止りさうに思へるが、実は峠を越えて、例の坂は照る照るの勢州、坂の下迄来てゐるとの記事も見える。

### 三 近畿の外

岸田定雄氏は、上のご発表で、また、

江州湖北今津町と若州小浜町とを結ぶ路線を若狭街道と言ひ、此の街道筋は殆どドスで終点の小浜も亦ドスであつた。小浜以西は未踏であるが、三方郡の萬葉三方の海のあたりはドスが聞かれなかつた。

と述べていられる。小浜湾頭の堅海での、私の一週間調査では、「ドス」を聞き得ていない。永江秀雄氏は、上中町近くの村について、「そうドスなー」「ええお天気さんドス」などの言いかたを聞きとめていられる。若狭の「ドス」は、越前にはいって敦賀市域の分布につづく。愛宕八郎康隆氏教示の実例をあげるならば、敦賀市域内に、

○タ<sup>↑</sup>テイソ ミズモ イ<sup>↑</sup>ードス。

立石の水もいいんです。(老女→愛宕氏)

(立石は、敦賀湾頭の一集落である。この地の人自身、“私とこはドスことばで、”と言っていたという。)

○エー ベッピンサンドス フ。

いい娘さんですわ。

などがある。愛宕氏は、「ドス」「オス」「ヤス」は杉津(半島部とは反対がわの敦賀湾壁の地)までたどられる、と言われる。

岐阜・愛知の二県下に、いくらか「ドス」が認められるようである。岐阜県に関しては、佐藤虎男氏の「近畿・中部接境地方方言状態の調査報告」（『国文学攷』第十七号）がある。氏は、美濃西辺の広瀬について、

最後に、丁寧表現に「ドス」「でオス」を見出す。

○ミナ ソコライ アスピニイッテキタンドス。（老女）

○ナニモカモ カワリマス。エライゴトデオス。（老女）

の記述をされている。

牛山初男氏は、「中部日本における近畿方言の分布（二）一主として語法的な面から一」で、

この語（藤原注「ドス」）は山城・丹波の一部に広く分布している語であるが、中部日本においてはほとんど見ない。いま、報告を得た地点をあげると、岐阜県で益田郡下呂町、可児郡今度町・不破郡宮代村・養老郡笠郷村程度であり、愛知県においては、愛知郡鳴海町だけである。

と述べていられる。——ここに、愛知県下についてのご指摘もある。

以上の地域を出はなれての、国の東方には、「ドス」ことばは存立していないであろう。東北地方に、「……ドッス。」などの言いかたがあっても、これは、「ドス」ことばではない。（現に、「ドッス」と聞かれている。）

『津軽方言絵ハガキ』第一輯（方言絵はがき）に、

チャペコア、ノミテドス

猫は 飲みたいとき

などである「ドス」も、現に、「とき」と言いかえられているのにも明らかなおり、京都弁などの「ドス」ことばとは、似て非なるものである。「ス」は、「モン」の「シ」にあたるよびかけの文末詞であろう。

## 第四節 ダス

### 一 はじめに

「ダス」は、「ドス」「デス」に相当する。「～でヤス」が変化して「ダス」になったとすると、この「ダス」は、<sup>注</sup>「ヤス」から言えば、一種の、くだけたことばとされる。が、「ダス」は、語感上でも、よく「ドス」や「デス」となれば並び立っており、一新態の丁寧法助動詞であることが明らかである。

注 「たのんでやってくれ。」が、「タノンダッテ クレ。」とも言われている。

### 二 九州内の「ダス」

天草島に「ダス」がある。早く、江上たつゑ氏は、「天草島牛深町方言集」(『方言』第三卷第八号 昭和8年8月)で、

△この方は山田さんと云ふ方です。

コノフトハ 山田サンテ イワシトダス。

などの例をあげていられる。。天草下島西岸の高浜その他では、「ダス」が聞かれないようである。私が牛深町で得た例をあげるなら、

○ソガ<sup>ン</sup>ダス タイ。

そうですよ。

などがある。天草下島東北岸の一例は、

○五百人バカリ イ<sup>ッ</sup>タダス トイ。

五百人ばかり行ったそうですよ。

である。

長崎県にはいって、平戸島の「ダス」が注目される。種ヶ島克巳氏の『平戸方言語法草案』には、「ダス」の記事が見えて、「主トシテ家中婦人用語」とあり、

そりゃなんだすな　　こりゃ本だす。

行くとだすか　　良かとだす。

そーだしたか　　そーだっしょ。

などの実例が見える。種ヶ島氏はまた、

「ぎす」「だす」を訛りて「ぎす」トモ云フ

としてられる。私は、平戸島対岸の平戸口で、

○ソーザス　カ。

そうですか。

というのを聞いたことがある。——“女に限る”言いかた、とのことであった。

男性は、

○ソーデァス　カ。

と言う、とのことであった。この「～デァス」には、「デァス」が認められはしないか。「ダス」の前身としての「デァス」が、ここに明らかかなようである。そのとき聞き得た、つぎの言いかたもある。

○ソーデァッショ。

そうでしょう。

種ヶ島氏は、前著の中で、「だっしょう」「でっしょう」「でゃっしょう」の指摘もしてられ、「一般ニハ長音ニ云ハズ短音ニ『だっしょ』『でっしょ』『でゃっしょ』ト云フ傾向アリ」とも述べてられる。氏のかかげられる実例は、

この分なら明日良かと  $\left\{ \begin{array}{l} \text{だっしょう} \\ \quad \text{(だっしょ)} \\ \text{でっしょう} \\ \quad \text{(でっしょ)} \\ \text{でゃっしょう} \\ \quad \text{(でゃっしょ)} \end{array} \right.$

である。「だっしょう」は、「でゃっしょう」からきたものであろう。平戸方言にあって、「ダス」の「デァス」起源が明らかである。

今日、「ダス」ことばは、人、多くが、これをかんとんに近畿弁的なものときめがちでもあるが、事実是这样でないことを、私は、上来、明らかにしつつある。「ヤス」のおこなわれる所には、どこにでもあれ、「デァス」経由の「ダ

ス」が生じてもよかったのである。九州に「ヤンス、ヤス」があるのは、古来のことである。九州にも、しぜんに「ダス」が成立した。ただそれが、西に片よった地域に見られるのが現状である。

ところで、北の福岡県下には、「ダス」ことばがかなりよくおこなわれているようである。まず、博多ことばの「ダス」がとりあげられる。『全国方言資料』第6巻の「福岡県福岡市博多」の条にも、

*m*ナンダスナー マー カイリガケガ

なんですね、 帰りがけが

などの実例が見える。

*f*ソースット モ トチューデ アリガ ガラスラスモンジャケ ワレマ  
 そうすると もう 途中で あれが ガラスだものですから 割れま  
 スナー

すね。

との実例も見える。「ガラスラス」は、「ガラスダス」ではないか。当地方にいちじるしいダ行音のラ行音化で、「ラス」ができていたのであろう。(上のばあいは、「ガラス」の「ラ」の影響もあったかもしれない。) 県下では、主として筑前域に、「ダス」ことばが見られる状況であろうか。筑前西部、糸島半島内の実例は、

○ソーダスゲナ。

そうなんだそうですよ。

○ソーラス タイ。

そうですよ。

などである。男性も「ダ(ラ)ス」を、“あらたまつた時につかう。”という。(“ていねいなことばで、女がよく言う。”) 「ダス」ではなくて「ラス」を言うことが、しばしばのようである。

○ソーラッシュョー。

そうでしょう。

これを、“女がよく言う。”という。この地で私は、

○ソーデヤス タイ。

そうですよ。(老男→藤原)

○コトジャー ヤッパ、ジョーデキデヤス ナー。

今年はやはり、上出来ですねえ。(稲作) (老男→藤原)

などというのも聞くことができた。老年層にこういう言いかたの聞かれるのが注意された。太宰府での老女の言、

○ミーンナ ハヤウマレヤス タイ。

みんな早うまれですよ。(子守りをしながら、そばの中年女性に語ったもの。)

との一例(浮橋康彦氏教示)に見られる「早うまれヤス」は、「ダス」の「ヤス」ではなくて、「～でヤス」の「～ヤス」であろうか。(P.473)

### 三 中国内の「ダス」

山口県周防東部の旧広瀬町などに、「ダス」の言いかたがあるか。「ソレカラ モー ナンダス。」(それから、もう、なんです。)などと、老年層の人が言っているという。

広島県下では、備後内に、問題の「ダス」があるらしい。岡田統夫氏は、備後西北隅について、

○モメンバタター オソーニ ハナワッタンダス ー。

“木綿機より後にはじまったんですね。”

○ニンゲンガ ショージキナンダスケー。

“人間が正直なのですから。”

○ロクリサンチョータラ ヨンチョータラ アルユー コッタス ー。

“六里三丁とか四丁とかあるということですねえ。”

などの実例を見ていられる。広島県下に、「ヤンス」の言いかたはかなり広くおこなわれている。「ヤンス」に関連する「ヤス」もありうること、あり得た

ことであろう。したがってまた、「でヤス」に関連する「ダス」もおこり得たことなのか。それにしても、今日、一般には、広島県下で、「ダス」ことばが聞かれにくい。

石黒武顕氏『鳥取県方言辞典 後編』（鳥取県方言研究会 昭和27年12月）には、

だん〔助〕です 「そーだん」

との記事が見える。「ダス」の「ダン」であるのかどうか。

#### 四 四国内の「ダス」

はじめに、愛媛西南部（いわゆる南予）の「ダス」ことばが注目される。南予の一男性は、私に語って聞かせた。“君、南予か。”と問われて、「ハイ、ソーダス。」（はい、そうです。）と答えてしまったが、その時、方言というものに目がさめた、と。「ダス」は南予のものである。

○イワシワ ドーダッ ソー。

いわしはどうですぞ。

などとも言っている。

○ソーダス ライ。

そうですよ。

というのは、わけてもしたしみぶかさの受けとりやすい、当方の「ダス」ことばである。今日も、南予に、「ダス」ことばは各階層でおこなわれており、「ヤス」ことばが、他地方で年長者の世界に聞かれがちなのは、おもむきを異にする。

高知県西南部の幡多郡にも「ダス」があるか。『全国方言資料』第8巻（へき地・離島編Ⅱ 中部・近畿 中国・四国 昭和42年4月）の「高知県幡多郡大月町竜ヶ迫」の条には、

fオドリバー セバイホドナー ヒトダシタナーシ

踊り場が 狭いほど 人でしたねえ。

などである。私もかつて、中国・四国・西近畿・九州東部に関する言語地理学的調査をおこなったさい、幡多郡では、「ハナデヤス」との言いかたを見ることができた。——「ダス」の前身の言いかたか。

徳島県下にまた、なにほどこかの「ダス」ことばが見いだされる。金沢治氏は、「阿波美馬郡方言語彙」（『方言』第四卷第二号 昭和9年2月）の中で、

ドウダッソ「ドウデスカ、ヨクデキテキルデンヨウ」

との言いかたを指摘してられる。同氏の「阿波方言の研究」（『徳島教育』第一一四号 昭和32年5月）にも、阿波弁として——大阪弁「ダス」、京都弁「ドス」とくらべて——、

デヤス、デアフ、

ダァフ、ジャナフ

などの言いかたをあげてられる。

四国での「ダス」ことばの存立のしかたには、特色がある。南予の「ダス」は、阪神地方の「ダス」と同一のものであったとしても、大阪弁などが南予に流入したと考えることなどは、すぐにはできまい。（徳島県下ならいざしらずである。）私は、昭和10年代に、南予の「ダス」を考察して、「デヤス」ではなからうかと想察した。（——「ソーダス ライ。」などを聞くに、そのやさしさ・したしみぶかきから、よいことば、「デヤス」を想像したのである。）かつては南予地方にも「ヤス」が自在におこなわれて、このように「ダス」を生むことにもなったのではないか。四国での「ダス」ことばの偏在に関して、私どもは、比較的自由に、ものの、地域を異にしての同似的発生を考えることができる。準体助詞の「ガ」の存立に関しては、北陸地方と南予地方とがあい応じて同様の状況を示す。これなども、やはり、土地を異にしての、ものの自然的成立であろう。（そのような成立のおこる前提条件とも言うべきものが、彼我に共通的にあり得たのであろう。）

## 五 近畿の「ダス」

今日、「ダス」ことばといえば、まずは近畿地方が本場と見られる。阪神地区が、その中心地区であろう。

兵庫県下は、播磨にも「ダス」ことばがよくおこなわれている。(但馬地方が別地域のようである。)播磨一般の「ダス」状況では、終止形の、

○ソーダス。

そうです。

をはじめとして、「ダス カ、ダッ カ(ケ) (アー ソーダッ カ。)],「ダシテ」,「ダッシュャロ」などがよくおこなわれている。

○コンド マタ キテダッシュャロガ ナー。

こんどまたいらっしゃるでしょうがねえ。

は、「ダッシュャロ」の一例である。「ダス カ」が「ダヒ カ」などとも言われている。「ダス ナー」は、「ダン ナー」となるのがつねである。「ダッセ」の形もよくおこなわれている。「こと」を「ダス」が受ければ、「コッタス」となる。

○ジョーシキ オセワンナッテ、スマン コッタス。

しじゅうお世話になってすまんことです。(老女)

『播州赤穂方言集』には、「ダスイ」の形が見える。

誰ダスイ 誰ですか

ナンダスイ 何ですか

などがある。播磨西辺には、「ダス」を存しない所もあるようであるが、総体には、「ダス」が丁寧の表現に用いられることがいちじるしく、かつ、これが、女性層にだけおこなわれたりはしていない。その習熟の度の大からくことであろうか、「ダス」が「ダー」とも言いならわされたりしている。和田実氏の「高砂」(『兵庫方言』6 昭和35年2月)から一例をお借りするならば、

アンタトコガ来タッタラミナ来テダー <だす>来なさいます

というありさまである。姫路では、

○ソーダ ナー。

そうですよ。

○アノ シバイ エーダ ハー。

あのしばいはいいですよ。

というような言いかたがおこなわれている。当地方に、「……ダ ハン。」の言いかたもおこなわれている。赤穂などにも「ダ ハン」があるらしい。（「ダ ハー」も、姫路市域にかぎったものではないようである。）中谷竹蔵氏の『赤穂言葉の研究』には、

ちよつと あれ 何<sup>で</sup>ダ<sup>す</sup>ッ<sup>す</sup>シャイ<sup>かい</sup>。  
 ぎつと何かある<sup>の</sup>ン<sup>です</sup>ダ<sup>よ</sup>ッ。  
 こゝ どん<sup>な</sup>タエにしとん<sup>です</sup>ダ<sup>か</sup>シい。

などの実例が見えている。「ダス」ことばの現実形にはさまざまなものがあるが、「デス」の「デセ（デセウ）」に相当するものはない。——「でヤス」のばあいなら、「でヤセウ」はありうるが。

神戸から大阪へは、「ダス」ことばの隆盛地帯がなだらかにつづく。大阪「ダス」のばあいもまた、「ダン ナ」「ダン ネン」「ダッ カ」「ダッ セ」「ダッ シャロ」などの形がよくおこなわれている。それにまた、終止形の「ダッ」「ダ」がある。「ソーダ。」（そうです。）と聞こえるようなばあいにも、じつは、よわく末尾促音のあることがすくなくない。下降調の文アクセントにはならないで「ダ」でとまっているということは、すなわち「ダッ」状況でありがちなことを示すものである。——いずれにしても、文末が「ダ」に近く聞こえるばあい、「ダス」ことばのかるやかな敬意度が明らかである。山本俊治氏「大阪方言における措定法」（『日本方言研究会 第5回研究発表会発表論集』昭和42年11月）の中の、

○コッチャ ジューエンダ。（五十男→客）

（こちらの品は十円です。）

も、「ダ」が高調音であるのが注目される。ちなみに、山本氏は、この例について、“その短呼「ダ」をつかう。しかし若い世代にあっては、「デス」をつかうのが一般である。”としていられる。「ダス」が「ダ」になるのは、「オマス」が「オマ」になるのと同趣であろう。大阪、中之島の一商家で聞いた「ダ」例は、

○ソーダッ。

そうです。

○ソーダ。ソーダッ。

そうです。そうです。

などである。末尾の促音が明らかであった。なお、当家の人は、

○ダンサン、ソー オシヤシタラ ドーデス。

だんなさん、そうおしなさったらどうです？

との実例をあげて、「ドーデス」に「ドーダス」を対比し、“デスよりもダスのほうがことばがあらい。”と説明した。茂木草介氏の「<横堀川>と大阪の言葉」(『放送文化』第22巻第4号)には、

標準語で「そうです」というのを、明治期の大阪弁では「そうでおます」という。大正期は「そうだす」、昭和期は「そうです」である(標準語と昭和期は表記的には同じだがアクセントは違う)。この三期の分け方は学問的には不確かであるかも知れないが、私の経験と記憶ではそういうことになっている。

との記事が見える。東条操先生は、「方言と国語教育」(『国語シリーズ』11)の中で、

大阪ではこの「ダス」の「ス」を落していったり、「ソウダッカ」「ソウダッセ」など促音化するので、大阪のことばは京都に比べて元気よく活動的に聞える。

と述べていられる。

大阪府南部域にも「ダス」ことばがさかんであることは、言うまでもない。

○ゴジュ<sup>ー</sup>ネンカラ ウエダヒ ナ<sup>ー</sup>。

つれそってから五十年以上ですねえ。(説明)

など、「ダヒ」の形もよく聞かれる。なお、和歌山県近くの地に関しては、かつて、大阪府女子師範学校生徒から、「ダス」に対応する「ヤス」を聞いたことがある。この時、私は、「ダス」の成立を考えるうえの参考事例が得られたと思った。榎垣実氏の「貝塚市の方言」(『貝塚市史』第二巻 昭和32年3月)にも、

「でやす」が大阪では「だす」となり、泉南では「やす」となつたので、

デヤス →  $\begin{cases} \text{デアス} \rightarrow \text{※ダース} \rightarrow \text{ダス} \\ \text{※ジャース} \rightarrow \text{ジャス} \rightarrow \text{ヤス} \end{cases}$

のような二つの変化コースをたどつたものと思われる。

(※印の語形は現実には現れない。)

との記述が見える。ともかく、「ダス」に対応する「ヤス」が、こうして認められる。南要氏の『和泉郷荘村方言』にも、「そうですか」相当の「ソーダスカ」「ソーヤスカ」があげられている。

和歌山県下は、おおよそ、「ダス」ことばを見せない地域であろう。

奈良県下は、北部で、より多く、南部もかなり、「ダス」ことばを見せている。「……ダッ<sup>↑</sup>セ。」などは、北部でふつりに聞かれよう。南部、吉野郡下の「ダス」ことばの実例は、

○ソ<sup>ー</sup>ダス。

そうです。

○コリ<sup>ャ</sup> モ<sup>ー</sup> ナンダス シヤ。

これはもうなんですよ。(大男→藤原)

○ソ<sup>ー</sup>ダフン ナ<sup>ー</sup>。

(○ソ<sup>ー</sup>デヒン ナ<sup>ー</sup>。  
○ソ<sup>ー</sup>デヘン ナ<sup>ー</sup>。)

そうですねえ。

などである。(これらは、吉野郡東部内で得たものである。この時、こういうことがあった。私が相手の人に、“「ソーダス。」と言いますか。”と聞くと、“言わん。”と答えた。そのあと、その人はすぐにこれを言っていた。老女層には、「ダス」ことばのおこなわれることがさかんであった。)

三重県下も、かなりよく「ダス」ことばを見せている。伊賀の例は、

○ソリャー、ナンダッ ソナー。

それは、何ダスカ。(大男→藤原)

○ハー ソーダス ノ。

はあそうですの。(返事) (老女→藤原)

○ムカシモンダスサカイ。

私は、むかし者ですから。

○アツイ ヒーダッス ワー。

暑い日ですわ。

○ソーダッ ササー。

そうですわね。(同調のことば)

などである。男女に、しかもおもには年長の人に、「ダス」ことばがおこなわれている。伊勢北部例には、

○ナンダス ナ。(老男→中女)

などがある。(佐藤虎男氏教示例)

京都府下では、山城の南部のうちや丹波西北辺などに「ダス」ことばが見いだされるが、概して府下は、「ダス」ことばに縁がうすいようである。奥村三雄氏は、「方言の区劃」(『国語国文』第二十七卷第三号 昭和33年3月)で、

福知山言葉におけるダス形は、福知山線が大阪から運んできたものと考え  
る必要はない。兵庫県氷上郡あたりのダス形と共に、尚よく考えるべきで  
あろう。

と述べていられる。

滋賀県下には、「ダス」ことばがおこなわれていないようである。

近畿地方も、南北の外周部分に「ダス」ことばがよわい。

## 六 中部地方以東内の「ダス」

福井県若狭には「ダス」がある。方言絵はがきの「福井言葉」(『方言』第三卷第二号 昭和8年2月)にも、

ソーダスケイ  
・ソーであります

が見えている。

『富山県方言』に、  
だす [こーだす] (かうです)

の記事が見える。

新潟県下に関しては、一つ、丸茂武重氏の「粟島採集録」(『方言誌』第三輯 昭和7年7月)の、注目すべき記事を引用したい。

××ダッセ ××です。 内浦  
ダメダッセ 駄目だ

とある。この「ダッセ」は何であろうか。粟島は、新潟県北の岩船郡に属するが、国学院大学民俗文学研究会編集委員『岩船地方昔話集』(『伝承文芸』第三号 昭和40年3月)にも、

よすよす、まま喰わねえあばでは、貰いてえと思ってだだす。だら貰う。  
などの記事が見える。

長野県下に関しては、青木千代吉氏『信州方言読本 発音篇』(信濃教育会 昭和26年6月)の、

そーだすかい so: dejasukai > so: daskai  
(北信)

の記述を見ることができる。「デヤス」が「ダス」になっているのだとしたら、ここには、近畿のと同様の「ダス」が認められることになる。

それにしても、中部地方内では、今のところ、私は、以上の事実を指摘する

ことができるばかりである。

関東地方となると、なおなお、「ダス」が見いだしにくい。ここには、二事例をとりあげることができるばかりである。

大久保忠国氏の「埼玉方言の語法」(『ニュースクール』7 昭和25年7月)には、

です→(だす)

ダス・ダシタ・ダンシタ

ダッセ (北葛)

との記事が見える。——「ダシタ」に対する「ダンシタ」が注目される。

栃木県東北辺で私が聞きとめたものに、

○コレダス <sup>↑</sup>が。

というのがある。発言者の青年男子は、これを、「これをあげましょうか。」であると説明した。「これですか？」に該当することばづかいであるのかどうか。

中部地方の事例存立を見ても、関東地方の事例存立を見ても——それらがもし「ダス」ことば関係のものであるとしたら、その存立が散発的であり、かつ偶然的であるのが問題視される。これからは、二つのことが考えられようか。一つには、以前はもっと多く諸地域に、「ダス」ことばらしいものが存立していたかもしれない、ということが考えられる。いま一つには、かりに偶然的にものが生起しているにもせよ、たとえば「ヤス」ことばの分布が前段にかなり広がったとしたら、「ダス」的なものも、じつは、諸方に生起してよかったわけだ、と考えられる。

東北地方では、いちばんに秋田県下の状況が注視される。『秋田方言』には、そだすべ (連) [市] さうでせう。

「そだすべ、あの人金持だもの。」

市=秋田市

などの例が見える。この「ダス」は、関西のにおなじものなのではないか。同書に、

やすみ<sup>△△</sup>あ七日まで<sup>△△△</sup>だす 「<sup>△△△</sup>で<sup>△△△△</sup>あす、<sup>△△△△△</sup>で<sup>△△△△△△</sup>あ<sup>△△△△△△△</sup>んす、<sup>△△△△△△△△</sup>で<sup>△△△△△△△△△</sup>あ<sup>△△△△△△△△△△</sup>り<sup>△△△△△△△△△△△</sup>ん<sup>△△△△△△△△△△△△</sup>す、<sup>△△△△△△△△△△△△△</sup>で<sup>△△△△△△△△△△△△△△</sup>お<sup>△△△△△△△△△△△△△△△</sup>ん<sup>△△△△△△△△△△△△△△△△</sup>ぎ<sup>△△△△△△△△△△△△△△△△△</sup>る)  
(休は七日まで<sup>△</sup>す)

などともある。また、

「なだす」「な<sup>△</sup>で<sup>△△</sup>あ<sup>△△△</sup>す」「な<sup>△</sup>で<sup>△△</sup>あ<sup>△△△</sup>ん<sup>△△△△</sup>す」は用言の第三活用形（終止連体形）に接続する。

これ<sup>△△△</sup>あ<sup>△△△</sup>いま<sup>△△△</sup>な<sup>△△△</sup>げ<sup>△△△</sup>る<sup>△△△</sup>な<sup>△△△</sup>だ<sup>△△△</sup>す (な<sup>△</sup>で<sup>△△</sup>あ<sup>△△△</sup>す、な<sup>△</sup>で<sup>△△</sup>あ<sup>△△△</sup>ん<sup>△△△△</sup>す)  
(之は今<sup>△</sup>投<sup>△△</sup>げ<sup>△△△</sup>る<sup>△△△</sup>の<sup>△△△</sup>で<sup>△△△</sup>す)

などともある。湯沢幸吉郎氏も、「語法上から見た秋田方言」（『国語史概説』八木書店 昭和18年1月）で、「ダス」「デアンス」,「ナダス」「ナデアンス」を指摘され、

これは指定の「ダ」「ナダ」に敬讓の意の含まつたもので、口語の「デス」「ノデス」に相当する。

と述べていられる。私が船川港町で聞き得た一例は、

○ミ〔i〕<sup>△</sup>タ<sup>△△</sup>ラ <sup>△△△</sup>ナ<sup>△△△</sup>ント<sup>△△△</sup>ダ<sup>△△△</sup>ス。

見たらどうですか。

である。芳賀綏氏は、「秋田」（日本放送協会『NHK国語講座 方言の旅』宝文館 昭和31年9月）の中で、

「今日はいいお天気です。」に当る言いかたは、

今日<sup>△</sup>ダン<sup>△△</sup>バ <sup>△△</sup>イ<sup>△△</sup>イ<sup>△△</sup>お<sup>△△</sup>天<sup>△△</sup>気<sup>△△</sup>ダ<sup>△△</sup>ス (ダ<sup>△△</sup>ン<sup>△△</sup>ス)

とありますが、それ以上でいねいな、「でございます」に当る言いかたは、特別にありません。

と述べていられる。「ダンス」とともに「ダス」がとりあげられている。この「ダス」は、やはり、「デヤ(ア)ス」からの「ダス」なのか。『東北方言集』以降、諸文献に、問題視しうる「ダス」が見える。

県下の東能代では、かつて、

○ソ<sup>ー</sup>ダ<sup>ッ</sup>ス[ü] ナ。

そうですね。

○オンナシ<sup>ィ</sup>ダ<sup>ッ</sup>ス[ü] ナー。

おなじですね。

との言いかたを聞いた。県南の横手市域では、かつて、

○エー オチャタ<sup>ッ</sup>ス[ü] ナ。

いいお茶ですね。

というのを聞いた。この「タ<sup>ッ</sup>ス」は、「ダ<sup>ッ</sup>ス」相当のものかどうか。

『秋田方言』は、県最南地域の「んなす」（さうです）を指摘している。「んなすべ」は、「さうですか」である。「ダ<sup>ッ</sup>ス」が「ナ<sup>ッ</sup>ス」になっているのか。

秋田県下に隣る岩手県下もまた注目される。『岩手県南昔話集』（『伝承文芸』第六号）には、「いいんだす。」「閉めてしまったんだす。」などとある。盛岡市の北の岩手郡内で私が聞き得たものには、

○ヨ<sup>ッ</sup>コ アル<sup>ッ</sup>ダ<sup>ッ</sup>ス[ü]。

用事があるんです。

○ヨ<sup>ー</sup>ガ ゴザ<sup>ッ</sup>ス[ü]ダ<sup>ッ</sup>ス[ü]。

用事がございますんです。

などがある。これらの、丁寧表現文の「ダ<sup>ッ</sup>ス」は、やはり、「でヤ<sup>ッ</sup>ス」関係のものか。花巻市では、かつて、

○ソ<sup>ー</sup>ダ<sup>ッ</sup>ス[ü] カ。

(目下→目上)

○ソ<sup>ッ</sup>ダ<sup>ッ</sup>ス[ü]。

との応答文を聞いた。（「ダ<sup>ッ</sup>ス」と聞いたが、これには問題があるか？）

山形県下にも、一見「ダ<sup>ッ</sup>ス」らしきものがおこなわれているが、当地方のは、明瞭な「ダ<sup>ッ</sup>ス」である。「だ」終止のあとに、「もし」系の文末詞「シ(ス)」がついたのが「ダ<sup>ッ</sup>ス」であると見られる。県下には、だいたい、「でヤ<sup>ッ</sup>ス」形の「ダ<sup>ッ</sup>ス」は見がたいであろう。

『福島県方言辞典』には、

ソダシ [句] さうです 北会

の記事が見える。この「ダシ」は、はたしてどういう成立のものであろうか。

北海道に関しては、私は、今、述べるべきものを持たない。

## 七 むすび

「ダス」ことばの、上述の分布をかえりみるのに、これは、だいたい、関西本位のものとも見ることができる。——西日本の的なものとも見られるが。

「ダス」ことばが、とくに関西方面に色濃く存立しているのは、このものが、それだけによく、関西方面の言語風土に適合しているということであろう。中部以東にも分布が見られるという点で、「ダス」ことばの存立可能性は、国の東西に認められるともされるけれども、そのような一般性の中にあって、関西方面は、なおさらに、「ダス」ことばをつよくいだきこむことによって、その方言性を明らかにしている、と解することができる。

## 第五節 ヤンス、ヤス

### 一 はじめに

丁寧表現法にはたらく丁寧法助動詞の有力なものに、「ヤンス、ヤス」がある。これに関しては、すでに前著『方言敬語法の研究』の、第五章第十節「尊敬法助動詞『ヤンス、ヤス』による尊敬表現法」の中で述べるところがあった。

「～ヤンス、ヤス」丁寧表現法は、「～ヤンス、ヤス」尊敬表現法から開けてきている。自己（話し手自身の動作など）に関して、あるいは無生物に関して、あるいは気象などに関して「ヤンス、ヤス」を用いれば、そこにはもはや、丁寧の表現がかもされる。「ある」に関して「ヤンス、ヤス」が用いられ

るようであるならば、そこには丁寧表現法の「～ヤンス、ヤス」のあることが明らかである。

「ヤンス、ヤス」が「～でヤンス、ヤス」というように用いられるばあいには、たいてい、「ヤンス、ヤス」の丁寧表現が明らかであろう。「そうでヤンショー。」などというのは、「そうで ありヤンショー。」に近いものであろう。「でヤンス」「でアンス」のばあい、「ヤンス」「アンス」について「ごあんす」を考えるむきもあるが、今は、「でヤンス」などのばあいも、「ヤンス」ことばの自在な転用と考えたい。

「ヤンス」形は、しぜんのうちに、じつに機械的にも発生しうるのではないか。私に、こういう経験がある。出雲奥地の仁多郡の馬木村で調査にしたがっている時だった。一軒の家で初老男の人と気らくに対話していて、私は、「……であります」のところで、「でヤンスが」と言ってしまった。自分にも思いがけないことであった。きわめてしぜんに、「ヤンス」が出たのである。「～であります」が「～でアンス」ともなり得、また、「～でヤンス」ともなりうるようである。ものは、どういうところでどのようにできるかもしれないことである。

ともあれ、「～ヤンス、ヤス」丁寧表現法は、「～ます」丁寧表現法に類同する。さて今日では、どこにあっても、「ヤンス、ヤス」ことばよりは「マス」ことばのほうが、よりとおりのよいものになっていよう。——品位も、よりよいありさまであろう。ちなみに、湯沢幸吉郎氏は、『国語史 近世篇』（刀江書院 昭和12年3月）のP.106で、

江戸の「やす」は、「ます」と同性質の語であるが、比較して見ると、言葉としての品格が劣ると言ひ得るのである。

と述べていられる。

## 二 九州地方の「ヤンス、ヤス」

薩隅地方の「ヤンス、ヤス」は、「ヤリ+マス」からのものではなくて、「ヤ

リ+申ス」からのものである。それにしても、できあがった形態「ヤンス、ヤス」は、他地方の「ヤリ+マス」系のものとまったく同様である。しぜんのこととして、私どもは、薩隅地方と他地方とを通じて、一括的に「ヤンス、ヤス」ことばを受けとることができる。(薩隅地方の「ヤンス、ヤス」の意義上の実質と、他地方の「ヤンス、ヤス」の意義上の実質とに、敬語法見地から見ての高下はなからう。) 薩隅地方に尊敬表現法「〜ヤンス、ヤス」がさかんであることは、すでに前著でこれを明らかにした。薩隅地方は、「〜ヤンス、ヤス」尊敬表現法をもって濃く色どられている所である。ところで、薩隅内に、丁寧表現法の「〜ヤンス、ヤス」もあるか。薩摩北部内の事象について、出身者、井上親雄氏が教示せられたのは、つぎのようなものである。

○コレワ ビンタヤシ ト。

これはビンタであります。

(「ヤシ」は「ヂャシ」にあたるか。)

○キノー ジャイヤシタ。

昨日でございました。(目上の人について)

この種のものでは、「〜ヤス」丁寧表現法が明らかであろう。

○メガ フクルッチョイゴッ アシタ。

“稲の芽がふくらんでいるようでした。”

というのものもある。これの「アシタ」は、「ヤシタ」に相当するものか。薩摩北辺海岸の一老女が私に語ってくれたことばには、

○どどここへ オヂャンス カ。

どどここへ行きますか。

というのがあり、

○何々で オヂャンス カ。

何々でありますか。

というのがあった。後者の「オヂャンス」は、丁寧表現になっているとされようか。方言文献にも、丁寧の「ヤス」を見せているものがあるらしい。

そういえば、薩隅地方に聞かれる、

○チャン トー。

そうですよ。

の言いかた——丁寧表現法——にしても、「ヤス」形の内在を認めしめる。

○チャンス トー。

そうですよ。

との言いかた、丁寧表現法もあり、これには、「ヤンス」形の内在が認められる。他地方の「何々で アリヤンス。」「そうでヤス。」のような「～ヤンス、ヤス」(丁寧表現法)は見られないけれども、丁寧の「ヤス」「ヤンス」とする形そのものを、とり出すとすれば、とり出しうる表現形式があることは認められる。瀬戸口俊治氏教示の、南薩での、

○コンタ テア イオヂャス ト。

これは鯛の魚ですよ。

も、「ヂャス」丁寧表現法の例とされよう。枕崎のことばには、

○ダイサーモ オヂャハンヂャンスロ ダーイ。

○ダイサーモ オサイヂャハンヂャッスロ ガ。

どなたもいらっしゃらないでしょう？

○ダイモ オイモハンヂャシタロ ガ。

だれもいませんでしたでしょう？

などというのがある。——「チャンス」「ヂャッス」「ヂャシ」とある。

○ダイモ オヂャハンヂャシタヂャンソ。

だれもいらっしゃいませんでしたでしょう？

これは、薩摩中部の伊集院での一例である。——「ヂャシタヂャンソ」とあって、丁寧表現法の重複が見られ、しかも、「ヤス」内在と「ヤンス」内在との対応が見られる。

大隅内にも、この種の言いかたがおこなわれていよう。

ところで、このほうでは、「チャンス」「ヂャシタ」などの形のおこなわれる

ことがふつうである。この点では、当方に、「チャンス」「ヂャス」ことばを認めることもできようか。

日向西南方も、薩隅地方なみの方言状態にあるため、たとえば小林中学校『日向国小林地方方言雑纂』（自家版 年月不詳）には、

見事魚じやんす（きれいな魚でございます）

などと見えている。

日向のこの地方と薩隅地方とには、「+モス」系ではあるけれども、形をくみとればとれる「～ヤンス、ヤス」の丁寧表現法が、一特色をなしておこなわれている。

熊本県下には、ことに天草方面で、「～ヤス」丁寧表現法がさかんにおこなわれている。——もっとも、今日は、主として中年以上に「ヤス」ことばがおこなわれがちか。比較的古風な問答の一例をしるせば、つぎのとおりである。

○イク 下カノーマイ。

↑  
行くかね。

○メーリヤス。

まいります。

当地方には、「ヤス」がもっぱらおこなわれている。天草下島牛深の「ヤス」ことばを見よう。

○イツモ オシエワン ナリヤンデー。

いつもお世話になりました。

○ナンゴトモ デケヤッシュェデ ナー。

おかまいもできませんでね。

○イキヤッシュュ カ。

行きましょうか。

（「～ヤッシュョー」と言わぬこともない。）

○カツカイ、ハヨ、メシバ クイヤッシュュ イ。

かあさん、早くごはんをたべましょうよ。

などと言う。

○クマ<sup>マ</sup>モト ニサンペン イキヤ<sup>ン</sup>ンタ。

熊本へは二・三度行きました。

○ソリ<sup>リ</sup>ジャ タノミヤ<sup>ス</sup>ッス バナン。

“それじゃ一つおたのみしますぞ。”

は、天草下島東北岸での実例である。——後者例では、「ヤッス」が注目される。天草下島西岸の一例は、

○オシ<sup>エ</sup>ワ<sup>ン</sup> ナリヤ<sup>シ</sup>タ。

おせわになりました。(辞去のあいさつ)

である。天草下島、本渡市の実例は、

○ユ<sup>キ</sup>ン フリヤ<sup>ス</sup> ドー。

雪が降りますよ。

○オネ<sup>ガ</sup>イシヤ<sup>ス</sup>。

おねがいます。

○ワ<sup>シ</sup>ャ コンヤ ドケ<sup>ー</sup>モ イキヤ<sup>ッ</sup>ッセン。

わたしは今夜どこへも行きません。

などである。第一例の言いかたは、「ユキン フル ドー。」の上位の言いかたとされた。第二例では、「シヤース」との長呼が注目される。

長崎県下の島原半島にまた——天草との関連よろしく、「〜ヤス」丁寧表現法がさかんである。『島原半島方言の研究』などにもそれが説かれており、『全国方言資料』第6巻の「長崎県南高来郡有家町」の条にも、

mへー ドード ホンナ オタノミシヤス

はあ、どうぞ それでは おたのみいたします。

などがある。(また、「頼んでみますから」が「タノジミヤヒケン」ともある。)『島原半島方言の研究』には、「ヤンス」も見える。

こけ くるばつかつで どーけでん いきやんせん

などがある。——「行きヤンセン」が見える。「いきやんせん」は、北部の言

いかたで、「いつきやんへん」は、南部の言いかたであるという。さきの『全国方言資料』第6巻の「長崎県南高来郡有家町」の条からも「ヤンス」例をひくならば、

fヘー マタ アウンヤンヒョーケン アータ ヨロシュエー モンテ オク  
ええ、また 会いましょうから あなた、よろしく 申して くだ  
レナンヘー  
さい。

などというのがある。山本靖民氏の『肥前千々石町方言誌』には、

ヤクソカシナガラ、イカデナ ホンナコチスミヤンセンチャッタ。  
モウヂキ大雨ノヤッテキヤンシュウ。

などが見える。この書物には、もとよりのこと、「〜ヤス」丁寧表現法例も多く見えている。長崎県下では、佐世保市方面についても、丁寧表現法の「ナリヤンタ」などを見ることが出来る。北部の平戸がまた、注視すべきものを見せている。

○ゴザリヤス ナ。

ございますね。

などと女性も言い、

○シジュー オセウエァ ナリヤーギヤス。

しじゅうおせわになります。

と人々が言っている。——「なりあげヤス」が注目される。

○コリヤ ワタシントデアス。

これは私のです。

○ソー デァス カ。

そうですか。

○ソー デァッショ。

そうでしょう。

などの言いかたも、私は聞きとめている。これらには、「でヤス」ではない「で

ァス」が見られる。「でァス」がつづまれば「ヂ(ジ)ャス」ともなる。種ヶ島克巳氏の『平戸方言語法草案』には、

こりゃなんじゃすな 本じゃす

などの例があげられている。(氏は、「じゃす」を「子供ノ間ニ使用セラル」ものとしていられる。) なお、種ヶ島氏の著作には、

この分なら明日良かと { だっしょう  
(だっしょ)  
でっしょう  
(でっしょ)  
でゃっしょう  
(でゃっしょ)

などともある。——「だっしょう」の言いかたもできている。「でァ」「でァ」から「ヂ(ジ)ャ」ができ、また、「ダ」音ができている。平戸島対岸地方で私が聞いた「ジャス」例は、

○コメ<sup>ー</sup>ジャス カ。

米ですか。

○ソー<sup>ー</sup>ジャス。

そうです。

などである。長崎県北部方面に「〜ジャス」はよくおこなわれているか。

○ゲ<sup>ー</sup>ッキュートリ ヒ<sup>ー</sup>トッチャス ヨ。

では、「月給とりひとつヂャス ヨ。」が、「チャス ヨ」になっている。さて、五島列島にも、「ありヤス」などの言いかたがあり、「長崎県老岐郡郷ノ浦町里触」(『全国方言資料』第9巻)にも、

f ミナサエニャ ヨロシュ モーシアゲチ オクレアッシェ

みなさまには よろしく 申しあげて ください。

などの言いかたが見える。——「オクレアッシェ」とあるのは、「〜ヤッシェ」に類するものであろう。岡野信子氏は、老岐で、あいさつことばの、

○オカゲデ ヨ<sup>ー</sup> ナギヤシタ ノ<sup>ー</sup>。

おかげでよく風ぎましたねえ。

を聴取していただける。対島の厳原町でも、

○ドーシタトデアスカ。

などと言っているという。(山本俊治氏教示)

佐賀県下に関しては、『佐賀県方言辞典』の、

だんす〔助〕デアリマス。「サウだんす。」

が注目される。「だんす」は「でヤンス」に相当するものか。

福岡県内ではまず、筑後内の「〜ヤンス」丁寧表現法が注目される。『複製本<sup>福岡県内</sup>方言集』には、筑後浮羽郡の「ありやんす(アリマス)」が見える。『宇  
枳波』第三号所載の『浮羽方言』にも、

やんす ございます。(そうでございます。) (古)

とある。つぎに、筑前の「福岡県福岡市博多」(『全国方言資料』第6巻)には、

mサキバ マットリヤスタイ アナター エ

将来を 期待していますよ あなた、 はい。

などの言いかたが見える。ところで、岡野信子氏は、“博多で「ヤス」は聞かない。”と言われる。“「マス」のゆるんだ音訛”とも言われるのである。筑前、糸島半島などでは「ヤス」が聞かれた。(P.446)

大分県地方となると、県下の広域にわたって、「〜ヤンス(ヤンスル)」丁寧表現法が見いだされる。「ゴザリヤンスル」などともある。

○アシタ アミチャー ハレヤンシュー カナ。

あした雨は晴れましょかね。

は、豊後西北部での一例である。国東半島内では、私は、

○アー ソーデアンス カ。

ああそうですか。

というのを聞き得ている。「ヤンス」の「アンス」が見られる。

大分県下につづいて、宮崎市方面以北は、丁寧表現法の「〜ヤンス」を示すことがいちじるしい。「〜でヤンス」が「〜デヤンス」にもなっている。

○火は オキヤンシタ<sup>↑</sup> カ。

火はおきましたか。

は、宮崎県中部での一例である。——「オキヤンシタ」が「オキヤンシタ」になるなど、「ヤンス」の「ヤ」のところに熟合がおこるのは、どこにもふつうにありうることである。県北、延岡市での家中弁では、

○オレラー ドコソコニ イッテ キヤッ サー。

わしらはどこそこに行くてくるよ。

などと言う。（“自分のことは「ワタン」と言い、目下の者には「オレ」と言う。”）「ヤス」ことばが「オレ」という人代名詞に対応している。「キヤッサー」は、比較的かるい言いかたになっていようか。

九州地方は、「～ヤンス、ヤス」丁寧表現法を比較的好く示していると言えよう。

### 三 中国地方の「ヤンス、ヤス」

九州地方に対して中国地方は、総体には、「ヤンス・ヤス」ことばを示すことが、ややよわいか。ただし、例外の地域もあることは下述のとおりである。

山口県下では、丁寧表現法の、「ヤンス、ヤス」ことばとしうるものが、そうとうに見いだされるようである。——周防に、よりいちじるしいものがあるか。「ヤンス」は、「アンス」のかたちでも見えている。原安雄氏の『周防大島方言集』には、

行くんダンス

などが見えているが、この「ダンス」は、「デアンス」のつづまったものか。周防大島には、「～でアンス」の言いかたもおこなわれている。周防東北部にも、

○ハチジャーニダンス。

八十二歳です。

などとの言いかたがある。岩国市方面には、「～ヤス」丁寧表現法がいちじるしく、これが、広島県下の「ヤス」ことばにつづく。

長門西部に、「ヤンス」系と考えられる「デアンス」のあることは、すでに

述べた。(P.422)

広島県下は、中国地方内であって、「～ヤンス、ヤス」丁寧表現法を見ることがとくにさかんである。備後地方に「ヤンス」ことばがいちじるしいが、精査してみると、安芸地方にもまた、そうとうに「ヤンス」ことばがおこなわれており、一時代前には、安芸地方でも「ヤンス」ことばのよくおこなわれたらしいことが察知される。そうであって、安芸地方には、「ヤス」ことばもまた、かなりよくおこなわれている。

○エーエー。ドコニデモ アリヤス ヨー。

ええええ。どこにでもありますよ(どこの店にだって売っていますよ)。は、広島市域での「ヤス」例である。安芸北部には、

○ヘージャー マタ キャースケー ノ。

それではまた来ますからね。

などの言いかたもある。安芸本土西部や広島湾内島嶼には「でヤンス」の「ジャンス」、<sup>1</sup>「でヤス」の「ジャス」も見いだされる。

○コミャー チューニ ナイトコジャンス。

ここは、米はまったくない所です。

は、江田島での一例である。また安芸に、「ヤンス」の「ヤン」もある。「ヤンス」の「アンス」もある。

○アリヤンヒョー ガノ<sup>2</sup>。

ありますでしょうか？

というように「ヤンヒョー」を言うのは、県下一般でのことである。備後地方に関しては、岡田統夫氏の詳細なご研究があるのを紹介したい。氏に、昭和29年10月、口頭発表の、「備後地方における『ヤンス』の諸相」がある。(広島大学の小研究会で発表され、詳細なプリントが配布された。)これにしたがえば、「ヤンショー」→「ヤンヒョー」からの変化形「ヤンホー」「ヤンヨー」も認められる。備後西南部に「ヤンヨー」がある。「ヤンス」ことばは、総じて、中年以上の男女に用いられているという。備後南部にさかんで、北部によわいらし

い。「アル」に「ヤンス」のそわった「アリヤンス」は、

○オハヨー アリヤンス。

お早うございます。

などと、備後南部によくおこなわれている。「アリヤンス」が「アリヤン」ともなっている。「ガンス」が「ガン」になるのと同様である。

○ジコージガ アリヤン ノー。

慈光寺があるわねえ。 (中女→小女)

(「わたしが行きます。」の意で、「ウチガ イキヤン。」などとも言う。)

「〜に アリヤンス」の言いかたがあって、これが「〜ニヤリヤンス」ともなっている。

○ヨメゴサンオ オモライニ ナッタゾーニヤリヤンス。

お嫁さんをおもらいになったそうです。

「〜で アリヤンス」の言いかたは、「〜ジャリヤンス」にもなっている。

一方、「〜でヤンス」が「〜ジャンス」にもなっている。

○ニッポンジュノー マツリジャンスケー ノー。

日本中の祭ですからねえ。

「〜でジャンホー」などの言いかたもおこっている。「〜でヤンス」からの「〜ダンス」も、備後北部内に見いだされる。

○ムカンノ シワ マメニ アッタ モンダンス ノー。

昔の人は健康だったものですねえ。

備後北部内に、「〜にヤンス」が見いだされもする。

○アガーニヤンショー。

そんなでしょう。

などとある。なお、北部内に「〜でヤス」の言いかたもある。

○サキヤー ホーラクノ ミデヤシタ。

酒は飲み放題でした。

などとある。以上が、岡田氏の発表内容からの引用である。ちなみに、神部宏泰

氏も、かつて備後北部の「デヤンス」→「ダンス」→「ダス」を教示せられた。「ダス」には、「デヤス」からのものとともに、「ダンス」からのものもあるのか。さて、備後北部には「ヤス」ことばも見いだされるのが注目される。この地域は、南部域よりもいっそうよく、安芸地方とのつながりを見せる地域である。

「～でヤンス」などでの「ヤンス」は、動詞にそってはいないけれども、すでによく「～でヤンス」の言いかたが熟している。「アル」や「オル」「イル」の動詞がなくても、「ヤンス」にはもともと、「ヤル（ある）」が存在している。「ヤンス」ことばは、動詞ぬきでもおこなわれてよいもののはずである。——このことは、「ヤス」ことばについても言える。

岡山県下では、北部内にわずかに「～ヤス」丁寧表現法が見いだされるか。

鳥取県下にも「～ヤンス、ヤス」丁寧表現法はあまり見いだされないようである。伯耆東部での「ヤス」ことばの一例は、

○ジ<sup>バ</sup>ンワ ニ<sup>バ</sup>ンゴデ アリヤスシ ナー。

自分は二番子でありますしねえ。

である。(室山敏昭氏教示)

島根県下となって、やや見るべきものがある。出雲内で、丁寧の「ヤンス、ヤス」を聞く。

○この裏の道のところは、ずっと ハカ<sup>デ</sup>ヤンシ[*i*]タ。

……………、ずっと墓でした。

○ハジ[*i*]メノ アイダワ アル[*ü*]ーテ ヤリ<sup>ョ</sup>ーダ モンデヤス[*ü*]。

はじめのあいだは歩いてやってたもんです。(大社参りを)

は、出雲奥地での二例である。——「～でヤス」とともに「～でヤース」もおこなわれている。(「ヤース」が「ヤエシ[*i*]」に近く聞こえもする。)県下、石見東北部内でも、

○エー、ソーデ ヤンショー。

などの言いかたが聞かれる。県下に、「ヤンス」の「アンス」もあるか。「でヤンス」の「ジャンス」となったものも、石見東北部内にあるらしい。石見にま

た、「ダンス」もあるのか。

#### 四 四国地方の「ヤンス、ヤス」

四国は、問題の事象のごくよわい所である。

愛媛県下については、今、言うべきことがない。

「高知県香美郡美良布町」(『全国方言資料』第5巻)での、

*m*ヤー エライ イー マダニ ヒヤイ コトデヤンスノーン

ああ ずいぶん まだ 寒い ことでございますね。

は、問題の「ヤンス」を見せているものなのかどうか。脚注には、[deəs] とある。(偶然的にもせよ、「ヤンス」などの言いかたは、諸方におこりうるのではないか。)

徳島県下、祖谷に「ヤス」があるのか。金沢治氏は、その『阿波言葉の辞典』の中で、

ニガル〔動五〕 祖谷の特別の古語 困ること 雨デニガリヤシタナ〔雨天で困りましたネ〕

と記述してられる。氏の直話によれば、「ニガリヤシタ。」は、“こまったことを言うのだが、ただのこまったというのよりもニュアンスがちがう。”とのことである。——「日でりがつづいて、田地が荒れて、こまった。」などであるという。金沢治氏はなお、「阿波美馬郡方言語彙」(『方言』第四卷第二号)で、

(甲)アンタハオグワイガオワルイトイフハナシジャガドウチャツソ。

と記述してられる。「チャツソ」は、「でヤス ゾ」か。

香川県下に関しては、今、県東部内の、

○ナンデ<sup>ハ</sup>ヤス ワイ。…………。

なんですよ。…………。

などの言いかたをとり出すことができるばかりである。

四国内では、「ヤンス、ヤス」ことばは、今日、限られた土地のうちに、——しかも古老に、わずかに見いだされるありさまか。

## 五 近畿地方の「ヤンス、ヤス」

中国も広島県下などには、「～ヤンス、ヤス」丁寧表現法の、そうとうにさかんなものが見られた。中国地方は、広島県下・山口県下を主体として、まずは広い範囲に、「ヤンス、ヤス」ことばの、ものそのものは見せ得ている。これに対して四国地方は、一般的には、「ヤンス、ヤス」ことばをほとんど見せていないのに近い。

近畿はどういう状況であるか。

兵庫県下には、「ヤンス」または「ヤス」の形の明らかな言いかたは、だいたい、おこなわれていない。ところで、中島貞一郎氏『但馬方言』（但馬五郡聯合教育会 昭和6年3月）に見える、「あげょう」に対する「あげんしょう」は、「あげヤンショー」であるかどうか。

大阪府下となって、問題の事象がある。大阪の榎垣実氏『船場言葉』（近畿方言学会 昭和30年9月）には、

コレカラオイオイオサムーナリヤスサカイニ（これから追々とお寒くなりますから）終止形。

などの言いかたが見える。谷崎潤一郎氏の『細雪 上』（中央公論社 昭和21年6月）からは、

そのうち貞之助も戻って来やすさかいに、ゆっくり晩の御飯でもたべて行っとくれやす。

というような会話例を引用することができる。「～ヤスサカイニ」は、一つの慣用の言いかたになっていよう。これが「ヤッサカイニ」ともなっている。『全国方言資料』第4巻の「大阪府大阪市」から「ヤス」例をひくならば、

fアタシラ      イツモ      イツモナー      ヤカタデ      イキヤスノヤケドナー

わたしたちは      いつもね      屋形船で      行くんですけれどもね。

などがある。——「ヤス」の「ヤフ」となっている例も見える。私がお大阪府南河内郡内でとらえ得た例は、

○イエ, メーテヤス ワ。

いえ, 見えてますよ。

(「ヤス ワ」が「ヤッ サ」ともなる。)

○ソーデヤス カ。ソーダッ カ。

そうですか。そうですか。(老男→藤原)

などである。この地で、

○ゴツツイ エー カゴヤシタ ↑  
ワ。

じょうぶないいかごでしたよ。(老男→藤原)

のような言いかたも聞かれた。「〜でヤシタ」からの「〜ヤシタ」がある。岸和田市朝陽国民学校の『岸和田市を中心とする方言集抄』(自家版 昭和16年8月)に見える、

キイタラ, キクホド, アハレナ話ヤスナア。

という「話ヤス」も、「話でヤス」に関係の深い言いかたか。体言に「ヤス」が直続しているものは、「体言+ダス」を思わせやすいけれども、それは文法上でのことであって、「ヤス」そのものは、「ダス」からではなく「でヤス」からきているか。

さきに「第四節 ダス」の「五 近畿の『ダス』」の中では、「ダス」に対応する「ヤス」との言いかたをしている。(P.452)

榎垣実氏の「貝塚市の方言」(『貝塚市史』第二巻)には、

むさい<sup>とこ</sup>所やす<sup>とこ</sup>けと上<sup>とこ</sup>っちょくなあれ

(むさ苦しい所ですけれど上つて下さい)

これは、蕎原あたりでは老人が

そうでやす これじゃすけど

などと使うものだから、

デヤス→ジヤス→ヤス

と変化したことが判る。このヤスは「あります」「ございます」に対応するもので、「でやす」は「です」と対応する。

とある。(九州内に見えた「ジャス」がここにも見えるのは、興味ぶかい。——しぜんにおこりうる変化ということであろう。)

大阪府下に、「～ヤス」丁寧表現法はあっても、「～ヤンス」丁寧表現法はおこなわれていないのが注目される。

和歌山県下となると、「～ヤンス」丁寧表現法がある。『和歌山県方言』には、日高郡の「イキヤンシヨウ」(行きませう)、「シヤンシヨラ」(しませう)「マイリヤンシヨラ」(参りませう)などの言いかたが見える。(他書にも同種のものが見える。)『南紀土俗資料』にも、「いきやんしよら」(行きませう)などが見える。『和歌山県方言』では、県北部内にも「カイチャンシヨ」(貸してあげます)などがあるのを見ることができる。なお、同書では、県北的那賀郡の「スルンヤス」(します)を見ることができる。

紀州の、「ヤンス」系かと思われる「デンス」に関しては、すでに述べた。

(P.425)

奈良県下となるとまた、「ヤンス」ことばは見ることができなくて「ヤス」が見られる。ただし、それも、今の私には、一つの「十津川ことば」例があげられるばかりである。

○ソヤス カアラ。

そうですかねえ。

というのを聞き得ている。吉野郡東部内の川上村での一週間調査のさいは、どのような「ヤンス、ヤス」ことばも聞くことができなかった。「オイシ アス。」(おいしゅうござんす。)などと、「阿斯」がよく聞かれたが、これは、「ヤス」には無縁の「ゴ阿斯」関係のものであろう。

三重県下、伊賀内での一週間調査のさいにも、どのような「ヤンス、ヤス」ことばも聞かれなかった。——「来させて」は、「キラシテ」相当の「キャンテ」になってもいるが。

三重県伊勢に、丁寧の「ヤス」や「ヤンス」があるのかどうか、定かでない。京都弁には、

○ユーベ カガ イヤシタ デー。

ゆうべ、蚊がいました？

などと、「ヤス」丁寧表現法がおこなわれている。しかし、丹後をはじめとして、府下に「～ヤンス、ヤス」丁寧表現法がどのくらいおこなわれているか、明らかでない。

滋賀県下では、「ヤンス、ヤス」丁寧表現法が、さほどには見られないか。

前著『方言敬語法の研究』のP.587で、「近畿では、『～ヤス』の丁寧表現法がさかんであり、」と述べたところは、「近畿には、『～ヤス』の丁寧表現法のさかんなものがあり、」としたい。

## 六 中部地方の「ヤンス、ヤス」

北陸から見ていく。

福井県下の若狭の、おもには老年層に、「～ヤンス」丁寧表現法がおこなわれている。小浜湾岸で、

○オマエイトコノ イネァ メッソー ヨー デケヤンシタ ノー。

あんたとこの稲は、たいへんよくできましたねえ。 (老男)

などと言っている。老女の言には、

○きょう 山へ イッタラ、ヤット サラー オッリヤンヒタ ノノ。

きょう山へ行ったら、“たくさんさるがおりましたよ”。

などが聞かれる。

『福井県方言』には、

ホヤスカイ 左様ですか 全(福井)

との言いかたが見いだされる。

石川県下は、「～ヤンス、ヤス」丁寧表現法を見せることがほとんどなさそうである。ところで、愛宕八郎康隆氏によれば、能登東北部内には、

○ガニ チャンス。(蟹です。)

などの言いかたがなされているという。「チャンス」は「でヤンス」か。「で

ヤンス」的かとも見た「デンス」のことは、すでに述べた。(P. 426)

『富山県方言』には、

○ぢゃす [そーぢゃす] (さうです)

というのが見え、

○であす [そーであす] (さうです)

というのも見える。また、

○やす [ないがやす] (無いのです)

というのも見られる。県下諸地についての私の調査経験では、丁寧の「ヤンス」や「ヤス」の言いかたがとらえられていない。

新潟県下では、越後西南部に関する『頸城方言集』に、「ありやんした」(ありました) などが見いだされる。県南隅の豪雪地域、秋山郷では、

○ツメカケルコトモ アッ下モ ソンゲンコター メッタニ ネーデヤス。

爪で引掻くことも あるけれども そんなことは めつたに ないので ございます。

などの言いかたをしているという。(押見虎三二氏の教示による。) 越後の広域に「〜ヤンス、ヤス」丁寧表現法が聞かれず、北部になってこれが聞かれる。新発田市域内の一例は、

○トンダ シ[i]ンパイ カケヤシ[i]テ。オーキ[i]=[i] ハヤ。

とんだご心配をおかけしまして。おおきにどうも。

である。村上市方面にも、「ゴザリヤンス」などの言いかたが聞かれる。(P. 197)

渋谷玲子氏は、「三光方言の待遇表現」(『国文学会誌』五号 昭和36年3月)で、新潟県新発田市三光方言について、「エンス」の記述をしていられる。「終止形」のばあいとしては、

オ願申シエンス <老男→神>

というのがあげられている。「エンス」は「ヤンス」に相当するものであろうか。

なお、『伝承文芸』第三号をうずめている『岩船地方昔話集』には、  
話したであんす。

などの言いかたが見え、また、  
そうゆったであすネ、  
などの言いかたも見えている。

佐渡については、天沢坦氏の「佐渡昔語」(『昔話研究』第十七号 昭和11年9月)から、

ハイおりやんすおりやんす  
というのをひくことができる。

さて南に転じ、岐阜県下となって飛騨では、「岐阜県吉城郡古川町黒内」(『全国方言資料』第3巻)に、

*m*ハッ アリガテヤンス  
はい、ありがとうございます。  
*m*アッ アリガトヤス マー  
ああ、ありがとうございます、まあ。

などが見える。美濃にも、「〜ヤス」丁寧表現法がおこなわれている。北部での一例は、

○ア<sup>リ</sup>ャー ツレゴシテ キヤシタ。  
あれはつれ子をしてきました。

である。(ここでは、この種の「ヤス」ことばを、“これは飛騨のほうのことばがはいってきたのだと思う。”と言う人があった。「イキ<sup>リ</sup>ヤシタ」が「イキ<sup>リ</sup>ヤシタ」にもなっている。)「ヤンス」は、美濃におこなわれているのかどうか。

愛知県下の尾張にも、「〜ヤス」丁寧表現法が認められる。名古屋弁の一例は、

○ユメデモ ミヤース ダモンナモ。  
ゆめでも見ますものね。

である。尾張西部の一例は、

○タマニワ 標準語を ツカイヤシテ。

たまには標準語をつかいます。(母おやが、その小さな男の子のことを説明する。)

である。鈴木規夫氏『南知多方言集』(土俗趣味社 昭和8年9月)には、

今日はいゝ天気です 今日ワエー天気デヤス(男)

というのが見える。三河、渥美半島内の調査で、「エー 日ニ ナリヤシタ。」などの言いかたをたずねたけれども、「ナリヤシタ」は言わぬ、との答えがあった。

長野県下は、「〜ヤンス、ヤス」丁寧表現法をよく見せている。青木千代吉氏は、『信州方言読本 語法篇』で、「ヤス」について、

この語は、江戸時代前期から上方言葉として盛んに用いられ、後期江戸語としても大変勢力のあった語で、これが信州一帯に伝えられて、今も伊那・木曾を除いて諸方に用いられていますが、明治以後東京ではもう「ます」のみが普通に用いられるようになっているのに、信州では昔の「やす」を盛んに用いているのであります。「やす」の行われる前記の諸地域では、あらゆる動詞の連用形に連って、丁寧語としての表現の役を担って居ります。

と述べていられる。また、

もともと、「やす」という語は「やんす」という語から変形して出きたものであります。で、「やす」を用いる地方の古老の方などの語を注意して聞いていると、稀に、この「やんす」が聞かれることがあります。

ともある。南佐久郡下の「ヤス」例をあげるならば、

○オーブリデヤシタ。

(雨のたくさん降った時のあいさつ)

などがある。『信州上田附近方言集』にも、「シヤス」(致します)などが見えている。佐伯隆治氏は、「信州北部方言語法 上」(『国語研究』第十卷第七号)で、

稀には「ヤンス」といふ人もある。

雨が降りヤンシテ困リヤス。

とするしていられる。

山梨県下にも、問題の「ヤス」がある。（「ヤンス」は見られないのか。）県西南部内での一例は、

○イッテ キヤンタ。

行ってきました。

である。（——ただし、人は、これを昔のことばと言っていた。）『奈良田の方言』の中の深沢正志氏「奈良田方言語彙」の中には、

おしつまりやした 大晦日の挨拶。

というのなどが見える。

静岡県下では、『静岡県方言辞典』に、「さうでやんす」「さうでやす」が見え、『静岡県島田方言誌』には、

イキヤース いきます 行きます

イキヤーヘン いきません 行きません

が見える。私の、御前崎方面での調査のさいには、「ヤンス、ヤス」が出てこなかった。柳田国男先生の『毎日の言葉』の「あいさつの言葉」の条には、

オバンニナリヤンタ 静岡県一部

との記事が見える。

## 七 関東地方の「ヤンス、ヤス」

神奈川県下については、言うべきものがない。

東京都に関しては、『東京方言集』の二例を引用することができる。

じゃ、お頼ん申しやす

いやようがす先生のお顔を立てやせう

『全国方言資料』第2巻の「東京都」の条には、

mエ オタクニ アノ ナニガ アリアスカー  
お宅に あれが ありますか。

というのが出ている。「アス」は、「ヤス」に相当するものか。本文には、[ari'āska'] との音声記号が注記されている。——ものは「ヤンス」に関連もしていることを思わせる。

千葉県下には、言うべきものがない。

埼玉県下に、本題の事象がある。池ノ内好次郎氏は、「東武地方の方言」(『言語生活』第九十号 昭和34年3月)で、

そうでありますとかそうですというのを、ソーデヤンスということが多い。

と述べていられる。東部の幸手町で私がとりあげ得た実例は、

○ワカリヤンシタ。

わかりました。

○ソーデヤンス ネー。

“そうですね。”

などである。「ヤンス」はだんだんに、おこなわれなくなってきているようである。なお、この地で私は、老男から、

○アリヤシタ。

ありました。

などの「ヤス」ことばも聞くことができた。幸手から出て、近くの茨城県五霞村には行って見た時も、その老男が、

○タクサンニ ミガ デヤスカラ、…………。

たくさんに実が出ますから、…………。

などと言ってもいた。県下西部の秩父地方には、問題の事象があまり見られないか。前年の一日、自動車の便を得て秩父の東西をかけめぐった時は、「～ヤンス、ヤス」丁寧表現法を聞くことができなかった。

大久保忠国氏の「埼玉方言の語法」(『ニューズクール』7)には、

「ます」の代りにヤスを使う所は全県まばらにあつて、どの郡にも及んでいる。活用のしかたは「ます」に似ていて、ヤシヨー・ヤセン・ヤシタ・ヤス・ヤストキ・ヤスレバ（又はヤセバ・ヤスリャー・ヤシャー等）・ヤシ。ヤスの代りにヤンスを使う所もある。北埼玉・南埼玉・北葛の東部三郡では、むしろこの方が多いかと思われる。その他北足・秩父・児玉等にもヤスと入り混つて行われる。活用のしかたはヤスと同様らしい。

との記述が見える。ここに「ヤス」ことばのとりあげられているのが注目される。なお、氏によっては、秩父地方もとりあげられている。

群馬県下には、「～ヤンス」丁寧表現法が認められる。まばらながらも、東西にありうるのではなからうか。西北山地の吾妻郡でも、「アリヤンス ヨ。」などの言いかたがおこなわれているようである。東南部域には、「～アンス」もあるらしい。『万場の方言』には、

さうデンス（さうです）

というのが見える。（「デンス」の言いかたは、すでに P.431 で指摘した。）県下に「ヤス」ことばがないらしいのが、一特色とされようか。

栃木県下では、「ヤンス（アンス）」「ヤス（アス）」がよくおこなわれている。県東南部の例をひくならば、

○ナカナカ カカリヤスカラ ナー。

なかなか費用がかかりますからねえ。

○オーケニ アリヤシタカラ。

（樗の木が）大きかったですから。（それを素材にしたという話し）などがある。これらは、土地の老男が、共通語で私に話しをしようとして表現したことばづかいである。県東北部、那須郡の一例は、

mイロイロ オセワサマン ナリヤス

いろいろ お世話さまに なります。

である。（『全国方言資料』第2巻「栃木県那須郡黒羽町」）宇都宮市域で聞きとめたものには、

○ヤッ<sup>テ</sup> ミヤンシヨ。

やってみましょう。

○イギヤンシヨ。

行きましょう。

などがある。人は、これらに、“男でもいくらか言う。”とか、“教育程度の低い人が言う。”とかの説明を加えた。

茨城県下でも、広くに「ヤンス（アンス）」「ヤース」「ヤス（アス）」などがおこなわれている。県北の「ヤンス」例は、

○ダベ<sup>ッ</sup> コトニ シヤンシヨ。

たべることにしましょう。

○ソー シヤンスペ。

そうしましょう。

○オバ<sup>ン</sup> ナリヤンシタ。

（夕方のあいさつ）

などである。田口美雄氏の「茨城方言語法二三の考察」（『方言研究』第十輯）には、

ソージャンス（さうでございます）

との記事が見える。「でヤンス」が「ジャンス」になっている。県下には、「ヤース」の言いかたもかなりよく見いだされるか。田口氏の上記論文にも、「否定形」の、

アリヤー<sup>セン</sup>（有りません）

や、「推量形」の、

アリヤー<sup>シヨ</sup>・アリヤーン<sup>シヨ</sup>（有りませう）

などが見える。『全国方言資料』第2巻の「茨城県新治郡葦穂村」の条にも、

fアリヤーシタトモ

ありましたとも。

などがある。『茨城県方言の考察』には、

ソーデァース さうでございます

との記述があり、「ァース」が目目される。県下北辺での、私の一週間調査では、「ヤンス」「ァンス」が聞かれて、「ヤス」の言いかたは聞かれなかった。

○ソーデァンス ニー。

そうですねえ。

は、「ァンス」の一例である。——老年層のものとされていた。ちなみに、長塚節の作品『土』には、「ァンス」ことばが多く見られる。なお、「ヤス」ことばとしうるものもあるか。

わし居なくても成つちや子奴等仕やうがあせんから、  
などとある。「あせん」は「ありヤセン」か。『全国方言資料』第2巻の「茨城県新治郡葦穂村」の条から「ヤス」「ァス」の例をひくならば、

f トーシ デヤシタヨ

しょっちゅう 出ましたよ。

f オソッチグ ナリァシタ

お涼しく になりました。

などがある。永田吉太郎氏の「助動詞の記載について」(『土の香』創刊五周年記念)には、

エンス 三つを九十銭でやっておきえんしよ。(茨城県東城郡吉田)

との記事が見える。「エンス」は、「ヤンス」に相当するものであろうか。「えんしよ」は、「ヤンしよ」に相当するものであろう。県北、多賀郡下で私が聞き得たものには、

○ソーユー ワゲデンス カー。

そういうわけですか(でござんすか)。

がある。「デンス」の「デ」の下には、「ァ」がすこしくひびくかのようでもあったが、ひびかないのもたしかに聞かれた。県北辺の調査でも、老年層の、

○ソーデァンス カ。

を聞き得ている。ここでは、同時に「ソーデァヤンス。」も聞かれ、「ソーデァン

「スカー。」というのも聞かれた。関英馬氏が、茨城について、「敬語と普通語」(『民間伝承』第二十卷第二号 昭和31年2月)で述べていられるところには、  
 大人同志の会話においても、相手が目上の場合には、勿論、前に述べた敬語のだっぺも使われますが、大抵の場合は、そうでェんすぺェと云う云い方が使われます。

の記事が見える。——「でェんす」がある。栃木・茨城の「デーンズ」「デンス」のことは、P.431でも述べた。

大橋勝男氏の『関東地方方言事象分布地図』第二巻<表現法篇>(桜楓社昭和51年2月)のMap 66では、「ありANSU」の、茨城栃木方面にいちじるしく分布するのを見ることができる。(「ありASU」も「ありYANSU」「ありYASU」もそこに見られる。) 加えてMap 67では、「すみANSEん」の、茨城栃木方面にいちじるしく分布するのを見ることができる。(「すみASEん」もそこにかなり見られ、また、「すみYANSEん」「すみYASEん」もいくらか見られる。)

## 八 東北地方・北海道地方の「ヤンス、ヤス」

福島県下には、「～ヤンス、ヤス」丁寧表現法のかなりさかんなものがある。関東東北部地方に「～ヤンス、ヤス」丁寧表現法がさかんであるのがけっして偶然ではないことが、ここに知られよう。(福島県下は、しばしば、茨城・栃木両県方面の状況によくつながるものを示す。) 飯豊毅一氏は、「福島県方言における対者尊敬表現について」(『国語学』59)の中で、「エギヤス」「デヤス」の図をかかげていられる。「エギヤス」の図では、これを「稀に使う」所が示されており、このばあい、県東部は空白である。「デヤス」の図では、「デゴゼーヤス」や「デヤス」が、おおよそ全般に見わたされる。以上のかぎりでは、県下に「ヤス」ことばがつよいと言えよう。県東北部で私が聞きとめている「ヤス」例は、

○ク[ü]サ ム[ü]シ[i]ッテヤン[i]ター。

草をむしってるところです。

○オバンガタニ[*i*] ナリヤーンシ[*i*]タ。

(夕方訪問のあいさつ。おばんがたになりました。)

などである。「ヤス」ことばは、「ヤース」の形でおこなわれてもいる。当地域では、むしろ長呼形のほうが多く用いられているか。「アース」にもなっている。

○ベツ[*ü*]=[*i*] ナニ[*i*]モ シ[*i*]テァーセン。

べつに何もしていません。

などと言う。県東北部に、じつは、「アンス」も見いだされる。『全国方言資料』第1巻の「福島県相馬郡石神村」の条には、

*f*カエッテ ハー オセワサマニ ナリアンス ハー  
かえって お世話さまに なります。

とある。さて、県西北部(会津北部)にも、「ヤンス」「アンス」が見いだされる。『全国方言資料』第1巻の「福島県河沼郡勝常村」から例をひくならば、

*f*アー イロイロ マー キリッコ カェサ イッテキヤンシタ コメラノ  
ああ いろいろ まあ 布地を 買いに 行ってきました、 こどもた  
マー  
ちの まあ。

*m*マー オチカラオドシデ オザイアンス  
まあ お力落しのことで ございますね。

などがある。私は、会津北辺で、

○アー ゴツツォン ナイヤンス[*ü*]。

これはごちそうになります。(菓子をたべる。) (老女)

などの例を得ている。この地で得ている「ヤス」例は、

○オバン ナイヤンシ[*i*]タ。

おばんになりました。

などである。東西を問わず県下に、「ゴザリ(イ)ヤス」「ゴザリヤース」の言い

かたも聞かれる。「オザリ(イ)ヤス」の慣用語法もある。ここに、檜枝岐の「ヤス」ことばを引用しよう。菅野宏氏の「檜枝岐の方言」(『方言と文化』)には、

ア、ゴツツオ デヤンタ。アンマリ呼バレタシ、オレモイッテミザラニ。  
とある。なお、「ヤス」ことばの分布に関しては、本堂寛氏の「地方特有語についての言語地理学的一考察」(『文化』第二十一卷第四号 昭和32年7月)にも、その調査結果が見えていることをしるしておきたい。ところで、氏によれば、会津盆地の大沼郡には分布がない。興味ぶかいことに、古く大正12年刊の『大沼郡誌』には、

帰ります=かへりやす。

食ひます=くひやす。

「西部地方」

との記事が見えるという。(大田栄太郎氏の『福島県方言』による。)『福島県方言辞典』には、

づなえ大根デァスなえ。そうデァスとも。

とあり、「デァス」が見える。同辞典にまた、「売れアスがえ。(売れマスかね)ここに居りヤスぞし。(ここに居りマスよ)」なども見える。「ヤンス」も見える。)

宮城県下でも、「〜ヤス」丁寧表現法がかなりよくおこなわれているらしい。松島湾岸の例は、

○ドーカ オイデナス[ü]ッテ イタダキ[kçi]ヤス[ü]。

以後も、どうか私のうちへおいでなさっていただきます。

(老男→藤原)

などである。ここでは「ヤス」ことばが聞かれ、「オモッテ オリャース[ü]」(思っております)などの長呼の言いかたも聞かれたが、「ヤンス」ことばは聞かれなかった。しかし、『全国方言資料』第1巻の「宮城県宮城郡根白石村」の条には、

f オンツァンエサ デ ミンナステ イガンネーカラ ヒトリダリ ヒ  
 おじさんの家に だから みんなでは 行かれないから、ひとりなり ふ  
 タリダリ ヤリヤンスッカラ ンデ エコッタラバ  
 たりなり やりますから、 それで よろしかったら。

などである。『仙台の方言』にも、

「どっちのお娘であらんすべまづ、おばやお供にしてくならくならおんなんした」(どちらのお嬢さんでせう、ばあやお供にしてしゃなりしゃなりおいでなさるよ)

などに見える。——この「あらんす」は、「アリヤンス」だろうか。宮城県下になお、「ヤス」に類する「エス」もあるらしいことを付記しておきたい。

さて、山形県下では「アンス」「ヤンス」「ヤイス」もが見られ、かつ、「ヤス」「アス」も見られる。斎藤義七郎氏は、『方言学講座』第二巻の「宮城・山形」の条で、

中流婦人にでありますをデアンスというものも僅かにある。

と述べていられる。「アンス」「ヤンス」は、庄内地方を除いた地域に見られがちのものであろうか。新庄弁では、

○オバンデ ゴザリヤンス[ü]。

おばんでございます。

○オハヨー ゴザリヤンス[ü]。

お早うございます。

などと言っている。「ヤイス」は、やはり最上郡に見られるよし、『山形県方言集』に見える。「ヤス」ことばもやはり、「アンス」「ヤンス」の地域内——その南北——に見られるか。「ヤス」の打消形は、「ヤへん」ともある。

秋田県下には、「アンス」が広くおこなわれており、「アス」もまたそうである。(ただし、そのおこなわれる年層は、古いほうに片よっतीयよう。)かつて私が秋田市で調査したおりも、「ヤンス」はないと答える人があった。『秋田方言』には、「<sup>△△</sup>だす」「<sup>△△△</sup>です」「<sup>△△△△</sup>であんす」が見える。(湯沢幸吉郎氏の先

掲書にも、「デアンス」などの記事が見える。P.456) 同書で、平鹿郡のこととして、

しらねあんす 知りません。

との言いかたをしるしているのは、一つ、注目にあたいる。「アンス」が上につづくつづきかたが注意される。『秋田県方言音韻及口語法』には、「ソレガヨクナイノデアス」の意の、

ソレガエグネデアス

が見える。——同書に、「～デアンス」も見えている。北条忠雄氏は、“秋田の会話”について、

「お早うございますが」オハヨウアンス<sup>○</sup>となつていますが、これはオハヨウアリ申スから来たものらしく……………。

と述べていられる。(『方言と文化』)ともあれ、「アンス」は、「ヤンス」類縁のものとする事ができる。北条氏の『方言学講座』第二巻「秋田」でのご記述には、「戻りません」の言いかたとして、花輪町の「モドラネァンシ」、秋田市の「モドラナァガンシ」、本荘市の「モドリァヘン」があげられている。秋田県西南部内の「アンス」例は、

○ソッデ ゴッザリアンス[ü] <sup>↑</sup>カー。

そうでございますか。

などである。県東北隅の鹿角郡方面には、「ヤンス」形がおこなわれてもいるという。(『秋田方言』など)

県南、横手弁では、

○ソッダンス[ü] ナ。

そうですね。(あいづちをうつ。)

○コーダンス[ü] ベー。

こうでしょう？

○ハリ[i]シ[i]ゴト シ[i]テダンス[ü]。

針しごとをしております。

などと言っている。——“自分より目上の人または同等の人に言う。”とのことである。県のほぼ中部の、東寄りの広い地域にも、「ダンス」ことばが見いだされるようである。田沢湖近辺の例は、

○ソーダンス[ü] カ。

そうですか。

などである。「ダンス」は、「でヤンス」のつづまったものであろう。田沢湖へんで私は、「でヤンス」や「ヤンス」「ヤス」は聞き得ていないが、「ダンス」例はいくつも聞いている。今村義孝氏編の『秋田むがしご』（未来社 昭和34年9月）にも、

川の中 <sup>(です)</sup> だんす。

などの言いかたが見える。

岩手県下では、「アンス（ァンス）」ことばが、全県的にさかんである。「ダンス」「ダーンス」の形も見られる。「アス」もまた、全県下にさかんなようである。——その用法は、まったく「ます」相当でもある。「ヤンス」もまた、県下に広くおこなわれている。「ヤス」ことばも、県下の南北に見いだされる。

○ソー<sup>テ</sup>ァンス[ü]。

そうです。

は、花巻市の一例である。

○ド<sup>ッ</sup>ァンズ オネガイ<sup>ン</sup>[i]ヤンス[ü]。

は、盛岡市南方での一例である。県東北部域での二例は、

○イ<sup>ッ</sup>テ キャンス[ü]。

行ってきます。

○サ<sup>ッ</sup>ツ[ü]リ[ī]=[i]モ モ<sup>ッ</sup>テコイダンス ナー。コ<sup>リ</sup>ャー。

沢釣りにももってこいですねえ。この釣り竿は。

である。（「ご主人はいらっしゃいますか。」との問いへの返事は「イヤンシ[i]タ。」である。）東北部内で聞かれる「ヤス」ことばは、

○サガセバ アル ゴッテヤス[ü]ガ。

さがせばあることですが。

などである。同地方で、

○アンチ フ[ü]ーニ ナッテス[ü]ケド。

あんなふうになってますけど。

などというのも聞かれる。「テス」は、「てイヤス」か。県下に、「ヤス」相当の「エス」も聞かれる。

○エー、ソーユ[ü]ーゴドモ アレンシ[i]タ ヨー。

ええ、そういうこともありましたよ。

は、県南、水沢のことばである。県東北部で私は、「デヤンス」相当の「ジャンス」を聞くことができた。

○ソー ジャンス[ü] ナー。

そうでヤンスなあ。

などと言っている。『岩手方言の語彙』には、「旧南部領」の部に、

ソندانズ そうですよ

が見える。『東北方言集』にも、

そだあんす[連] さやうです「岩中」

との記事があり、高橋藤作氏の『西和賀方言之研究』にも、

デスは、ダンス ソーダンス

の記事が見える。八重樫真氏の『岩手県釜石町方言誌』（千葉市川町日本民俗研究会 昭和7年3月）には、つぎの記事が見える。

行ッテアンス（行きました）

行ッテアンセ（行きなさい）

はテアが縮まって、「行ッタンシ」、「行ッタンセ」となる。

私が東北部内で聞き得たものに、「ダンス」相当の「ドンス」がある。

○オデァッタドンス[ü] カー。

いらっしゃいましたですか。

などと言っている。最後に、承接上、問題視されるものをあげれば、岩手県西南隅に位する和賀郡のうちに、

マセンは ネァンす 来<sup>コ</sup>ネァンす

などの言いかたがある。(『西和賀方言之研究』)

盛岡市南方の例なら、

○オ<sup>ラ</sup> カ<sup>ネ</sup>ヤンス。

わしはたべません。

というのがある。

『昔話研究』第三号(昭和10年7月)の岩手県和賀郡更木村新田の話し、「お月お星ばなし」(平野直氏「南部昔話抄(一)」)には、

祖<sup>ばあ</sup>母なし、祖母なし。おれ家のお月、お星<sup>お</sup>コアきてるアンすか

との言いかたが見えている。

さて、べつに、岩手県下にも、問題視すべき「デァンス」のあることは、

P.434で述べた。(栃木・茨城でと同様である。)

岩手県下につづく青森県東南部では、岩手県下でに類して、「ヤンス(アンス)」「ヤス(アス)」がよくおこなわれている。

○キョ<sup>ー</sup>ワ ス<sup>[ü]</sup>バ<sup>レ</sup>ヤンス<sup>[ü]</sup> ナ<sup>ー</sup>。

きょうは“さむいですな”。

は、八戸市での一例である。県東南辺での実例は、

○ソ<sup>ー</sup>ン<sup>デ</sup> ア<sup>リ</sup>ヤ<sup>ン</sup>ス<sup>[ü]</sup>。

“そうであります。”

○三十歳を コ<sup>ン</sup>[i]テ<sup>ヤ</sup>ン<sup>ス</sup>[ü]ベ<sup>ー</sup> ナ<sup>シ</sup>[i]。

三十歳を越してしましょねえ。

○オ<sup>モ</sup>ン[i]ワ<sup>ゲ</sup> ア<sup>リ</sup>ヤ<sup>ン</sup>セ<sup>ン</sup>ド<sup>モ</sup> オ<sup>ネ</sup>ガ<sup>イ</sup> シ<sup>[i]</sup>ヤ<sup>ン</sup>ス<sup>[ü]</sup>。

お申しわけありませんけれどお願いします。

などである。県東南部地方に、「アンス」もよくおこなわれている。しかも、「ヤス」「アス」もあり、「青森県三戸郡五戸町」(『全国方言資料』第1巻)に

も、

*m*ハイ マイド アリガトアス

はい、毎度 ありがとうございます。

ワー アレ イマ ターサ イッテ クルトコダエ

わたしは ほら いま 田へ 行って くるところです。

などとある。

青森県津軽は、「ヤンス、ヤス」ことばをあまり見せない土地か。ところで、『方言』第五卷第二号の「津軽方言の語法」の条には、

ウンドーカタガダ、マヅミネ、エゲショー

(運動がてら、町を見に、行きます)

とある。「エゲショー」は、「行きヤショー」でもあるか。よくはわからない。なお、『言語生活』第五号(昭和27年2月)の「方言をめぐる」の座談記事には、此島正年氏の、

南部系にはイキャンタが多い。津軽はイギャンタですね。

とのおことばが見える。

東北地方は、福島県下以北青森県内まで、広くに「ヤンス(アンス)」「ヤス(アス)」ことばの丁寧表現法が認められる。「～ヤンス、ヤス」表現法に関しては、九州南部地域に主として尊敬表現法が見いだされ、この東北地方には、つよい丁寧表現法が見いだされる。顕著な対照と見られるものである。(東北地方の「～ヤンス、ヤス」丁寧表現法に関しては、『方言敬語法の研究』のP.590～P.592で、いくらか述べるところがあった。)

北海道地方には、「～ヤンス、ヤス」丁寧表現法のいちじるしいおこなわれかたは、さほど見られないのではなからうか。今は、柴田武氏編『お国ことばのユーモア』に寄稿された佐藤誠氏の「北海道江差」のことば、

あんれ、あんれ。なして怒ってるだんす。

を引用しうるばかりである。——この「だんす」は、「でヤンス」であろうか。

こういうことからすると、北海道内にも、「ヤンス」ことばなどが、だんだんに見いだされるのかもしれない、と思われもする。

## 九 むすび

相手に向かって「〜ヤンセ」と言うのは、尊敬の表現法である。本節では、命令表現などにはならない「ヤンス、ヤス」ことばを見てきた。茨城栃木二県以北の、広い東国地方に、「〜ヤンス、ヤス」丁寧表現法のおこなわれているのは、「〜ヤンス、ヤス」尊敬表現法の丁寧表現法化の実情をよく示すものである。今日、待遇表現上のいわゆる敬語が、「マス」「デス」の言いかたを主流ともしているのを見るにつけても、「〜ヤンス、ヤス」の、尊敬表現法から丁寧表現法への転移は、もっともしぜんのことであつたろうと想察される。

ここに、「〜ヤンス、ヤス」表現法の丁寧表現法化の事実について、一つの考察を加えておきたい。「ヤンス、ヤス」の本源である「ヤル」は、もともと「ある」動詞である。「〜ヤル」は尊敬表現法であった。なのに、「〜ヤル」にやがて「マス」が累加されて、「〜ヤンス、ヤス」の言いかたがおこなわれるようになると、これがやがて丁寧表現法になったというのであるから、「ヤンス、ヤス」の表現機能重点は、「ヤル」の部分から「マス」の部分に下垂したと考えることができる。すなわち、「ヤンス、ヤス」ことばは、「ヤル」本位のことばづかいから「マス」本位のことばづかいに転移していったと見られる。——さて、このような、重点の下方推移は、また、日本語表現法の助辭的發展での一般的傾向と軌を一にするものとも見られる。

重点推移の結果とされる「〜ヤンス、ヤス」丁寧表現法が、ことに広く東国方面におこなわれるのは、「ヤンス、ヤス」ことばの全国分布の次第・有様を推想せしめて、興味が深い。おそらくは、とでも言おうか、「ヤンス、ヤス」ことばは、時の推移につれて中央から地方へと伝播するうち、伝播に時間を要した東国地方へは、もはや丁寧表現法化した「ヤンス、ヤス」ことばを流布せ

しめることにもなったか。

丁寧表現法の「ヤンス、ヤス」ことばでは、全国状況について見るのに、「〜でヤンス、ヤス」の言いかたのおこなわれることが、すくなくない。「で」に直接して「ヤンス、ヤス」があるのは、一見、奇異であるけれども、「で」の下で「ある」動詞や「いる」動詞がはぶかれているのだと見れば、難はない。他事実ながら、「降っている」も「フッテル」となっている。「売っています」も「ウッテマス」になっている。「マス」が「て」に直接するように、「ヤンス、ヤス」も「で」に直接し得たのであろう。

「ヤンス、ヤス」ことば——主として丁寧表現法——は、近世期内のいつごろか、おそらく全国的に広くおこなわれて、共通語法とも言えるものになっていたであろう。そうは考えられるが、今日では、すでに上に述べたとおり、全国的に見たばあい、「ヤンス、ヤス」ことばは、分布域の大小の欠けも、諸地方に見られる。「〜ヤンス、ヤス」丁寧表現法がかなりさかんにおこなわれる所でも、ものはおおよそ、年配者たちの生活表現法に役だっていがちのありさまである。「ヤンス、ヤス」ことばの命運は、いかにもくんだり坂のもの判断することができる。「ヤンス、ヤス」の音感・語感にしても、これはすでに、若い人たちの生活感情にはそぐわないものになっていよう。

さしもの「ヤンス、ヤス」ことばではあるが、私どもは、これを、将来を重視する標準語観のもとにあっては、標準語法にとりたててすることはできない。

## 第六節 イタス

八丈島方言では、

○ヨク フリイタス フー。

よく降りますねえ。

○ケイノ フネデモ ツキイタセバ、キツト ウンマケ セイノ キーイタ  
ソソテ、ソイマデ マッテ タモーリヤレ。

きょうの船便でもつきませば、きっとおいしいおかずがきますから、  
それまでまってくださいませ。

○スミイタシンネー ー。

ほんとにすみませんでしたね。

などと言う。「イタス」が丁寧表現法助動詞のはたらきをしている。当地方の「イタス」の盛用が、この結果をきたしているのであろう。「アライタス」が「アリータス」にもなっているか。

### 第七節 ガンス ガス

前著『方言敬語法の研究』P.631に、静岡県御前崎ちかくのことば、

○オゴツツォーサマデ ゴザリガシタ。

ごちそうさまでございました。（“たべることでなくても。おみやげを  
もらった時も。”）

があげられている。（前著の「ガシ」は「ガシ」にあらためる。）このばあい、「ガシ」  
は、丁寧表現法助動詞のはたらきをしていると見ることができる。

岩手県下のことばづかいには、

○モーシ[i]ワケ ナガンス[ü]。

申しわけございません。

○フ[ü]ル[ü]ガモ シ[i]レナガンス[ü] ナー。

降るかもしれませんですね。

などというのがある。これらのばあいの「ガンス」もまた、丁寧表現法助動詞  
の役わりをしていると見られようか。

### 第八節 オル

山下文武氏の「奄美大島方言（二）」（鹿児島民俗学会『鹿児島民俗 NO 2』

昭和29年6月)には、

アリョッカ。あります、ございます。

アリョーラン。ありません。ございません。

アリョーランド。①ありませんよ、ございませんよ。

②そうではございませんよ。

などがある。「アリョッカ。」などには、「ある+オル」が認められはしないか。「オル」の内在が認められるとすれば、この「オル」は、丁寧表現法助動詞の役わりをはたしていると解される。

私も、前著『方言敬語法の研究』P.241以降で、「チャンヤ ダーチ イキ  
ョータ カイ。」(お父さんはどこへ行きなされたかい?)などにふれている。「+居る」の言いかたが、「イキョーラン」(行きません)などとあるものでは、丁寧の表現が見られようか。(P.243)

○ヨーネヤ アム[ü]イヌ フリョーロ ヤー。 <名瀬>

今晚は雨が降りましょうよ。

とあるものでは、丁寧表現法が明らかである。「居る」が「ある」に複合する事例もまた、P.243 にあげている。

### 第三章 諸他の方法による丁寧表現法

#### 第一節 文末詞による丁寧表現法

文末詞が、文表現上、特定文末部となって待遇表現にたちはたらくことは、多言を要しない事実である。すべての待遇表現は、——文表現上、特定文末部(文末詞)によってその価値が決定される、とも言うことができる。

「何々 ヨ。」と「何々 ゴ。」との二表現では、「ヨ」と「ゴ」との別ゆえに、両者の表現価の相違が明らかである。「ゴ」の訛形の「ド」があらわれると、この文表現は、いちだんと下卑たものになる。四国伊予方言のうちには、

○<sup>マ</sup>ゾー カ。

そうなの。(受け答え)

と、

○<sup>マ</sup>ゾー カン。

そうですか。(受け答え)

となど、「カ」と「カン」とを用いわけている所があり、人々は、当然という顔をして、「カン」のほうがいいことばだと言っている。——「ゴ」に対しても「ゴン」というのを所有している。土佐西南部内にも、この種のことが見られる。

例の「ナモン」ことばにしても、「ナ」に「モン」を重ねた、このような手あつい言いかたは、丁寧表現法におおいに役だつものにちがいない。「ナーシ」とあってもまたしかりであろう。阪神地方で一つ注目されるのは、「カ」の用法である。

○きょうの試合は巨人と阪神 カ。

などと、車中でなど若い女性が男性に言っている。こうした「カ」は、共通語

で一般にぞんざいな調子でつかう「カ」とはちがったものに相違ない。「どう  
 どうしてくださいませんか。」と言う時に、阪神人は、「どうどう シテン  
 カ。」と言っているが、こういう「カ」に通じるのが、「巨人と阪神 カ。」の  
 「カ」ではなからうか。

文末詞を用いての待遇表現に、地方的な用法習慣の種々にできているのが注  
 目される。

## 第二節 語えらびによる丁寧表現法

私どもは、共通語生活にあっても、丁寧にものを言おうとすると、「食いも  
 の」とは言わないで「たべもの」と言う。「汁」とは言わないで「おつゆ」な  
 どと言う。「ばんめし」と「ばんごはん」とも、多くの人が、区別してつかっ  
 ていよう。みな、語えらびによる丁寧表現法の生活である。こういうばあい、  
 しばしば漢字ことばによりがちなのも、私どものしぜんの傾向である。「よい」  
 ことを言うのに、かしこまっては、「けっこうです」などと言う。「ぎょうは」  
 とは言わないで、「今日は」と言う時なども、私どもは、たしかに、あらたま  
 った、丁寧の気もちでこう言っている。

もとよりのこと、方言生活上に、語えらびによる丁寧表現法がいちじるしい。  
 (前節に述べた、文末詞のとりかたが、すでにそれであるとも言える)。先般は、  
 土佐で、婦人たちが刺身のことを「チマ」「オチマ」と言っているのを聞いた。  
 「チマ」の言いかたも、たしかに丁寧表現の言いかただった。

寺田泰政氏は、「大井川流域方言の概観」(『国語研究』第六号 昭和32年4  
 月)の中で、

金谷町などにおいては、

アメフランは単に「雨が降らない」を表わしているが、アメガフラナ  
 イは「雨が降りません」を表わしている。

このようにナイはンの丁寧を表わしている。

と述べていられる。

九州弁の、例の「ヨカ」ことばがここに思っておこされる。「デス」「マス」を用いて会話して、その中で、人は、「ヨカ。」「ヨカー。」などと言う。こういうさいの「ヨカ。」は、「いいです。」ぐらいの気もちのようにも、私には受けとられるのであるが、どんなものであろうか。「ヨカ」形は、「ゴタル」形などとおなじく、それで言いきりとなる習慣の形ゆえ、これらは、こうあったままで、ぞんざいではない言いかたにもなるのではないかと察せられる。

○ソー タイ。

そうなのよ。

などの言いかたにしても、これに「デス」「マス」は出ていないが、この言いかたで、「そうですよ。」というようなものにもなるのではないか。

### 第三節 接辞による丁寧表現法

#### 一 接尾辞によるもの

接辞のついた語を表現の場に用いて、特定の丁寧表現をかもしこも、世に一般的な表現法である。

九州、鹿児島県下で、

○コンニチワ、オヤットサマ。

こんにちは、ごくろうさん。

などと言う。——接尾辞の「サマ」が見られる。(接頭辞の「オ」と対応している。この種のことが通有的であるのは、言うまでもない。)九州南部地方では、「シンパイサマ」「ゴクロサマー」などとも言っており、「サマ」がよく用いられている。「サン」が「サー」ともある。

国立国語研究所の『宮崎県都市方言録音資料』（国立国語研究所 昭和42

年3月)には、

a<sup>1</sup>:<sup>1</sup> ganzjo<sup>1</sup>na<sup>1</sup> koqte<sup>1</sup>do<sup>1</sup>Nzjaga:.

ああ 頑丈な 雄牛殿だが……  
(丈夫な)

などと、雄牛に「殿」をつけた例が見える。

「ゴ苦勞サン」などは、九州に広くおこなわれていよう。

中国地方の出雲弁の婦人から聞いたことばに、

○アヒタサマ お肉の 配給が……。

というのがある。「アヒタサマ」は、「あしたサマ」であろうか。山口県下には、——尊敬表現法にもかかわる、「ニーサマ」「ネーサマ」<上の言いかた>、「ニーマ」「ネーマ」<中の言いかた>、「ニーサ」「ネーサ」<下の言いかた>がありもする。

「ゴチソーサン」「ゴツォーサン」などの言いかたは、中国・四国に多からう。

近畿では、「オカゆサン」「オ豆サン」などの言いかたがよくおこなわれている。「オハヨーサン。」「アリガトサン。」といったような言いかたもまた、近畿流のものであろう。

中部地方では、能登半島西岸で、かつて私は、土地っ子のしぜんのことば、

○キノドクサマダ ネー。

お気のどくですね。

というのを聞いた。

『全国方言辞典』には、

まいどさん 挨拶の詞。今日は。富山県砺波地方・石川県松任。

というのが見える。

信州北部では、

○オジョーシサマ。

“ありがとう。”

などと言われている。

「山梨県北都留郡上野原町西原」（『全国方言資料』第2巻）には、

*m*アリガトーサマ

ありがとうさま。

というのがある。私は、伊豆半島南端部でも、

○アリガトーサマ。

というのを聞いた。——年寄りの人がよく言うとのことであった。

関東地方、東京都域などで、「オカゲサマ」を言い、「ゴクローサマ」を言う。これらは、全国的な共通語になっていよう。（関東内では、「ゴクローサマ」も見いだされる。）「ゴクローサン」も全国的なものであろう。

東北、山形県の米沢方面には、

○オハヨーサマー。

お早う。

というような言いかたがあるか。

仙台弁に、「オ〜サン」の言いかたがかなり聞かれるのか。『仙台の方言』には、

オシヨツサンテゴザリス

おしょしさんでござりす 句 痛み入ります、恐れ入ります等の挨拶。

などの言いかたが見える。

以上によって思うのに、接尾辞による丁寧表現法は、接頭辞との関連をも示しつつ、全国によく栄えているらしいことが察せられる。しぜんのいきおいとして、「ゴチソーサマ」「オマチドーサマ」なども全国的な共通語になっており、この種のものの共通語化する傾向はつよい。——そこにまた、おのずから、「ゴチソーサマ」の「ゴツッァン」など、地方的な訛形もできているのは、おもし

ろいことである。

## 二 接頭辞によるもの

『喜界島方言集』には、

吸物にはウシムンといふが、

と見える。

九州、「鹿児島県鹿児島市」(『全国方言資料』第6巻)には、

fハ ハー オアイガト モシヤゲモツ

はあ ありがとう ございます。

とある。「ありがとう」へ「オ」がついている。五島列島の例は、

○オサヨデス カ。

さようですか。

○オサヨナラー。

さようなら。

などである。

「長崎県杵岐郡郷ノ浦町里触」(『全国方言資料』第9巻)には、

fソリャ オエー コッデスタイ マー

それは およろしい ことですね、 まあ。

とある。「オエー」が見える。

佐賀県下では、「オケサ(今朝)は」などとの言いかたを聞く。

大分県国東半島では、「オゴメン。」という他家訪問あいさつを聞いた。謙譲語の「イタダク」へ「オ」を冠する習慣は、九州内で東西に見いだされる。

「オコトイー」(お事多い)、「ゴネンノイリマンテ。」(ご念がいりまして。)などの言いかたは、九州に見いだされ、かつ中国にも見いだされる。

中国、岡山県下の言いかたに、

○オワカイサンニワ ワカランジャロー テー。(老女→私) 大畑 お若い人にはわからないだろうねえ。

がある。(室山敏昭氏「岡山県美作方言の文末詞について——鳥取県因幡方言の文末詞との比較研究——」 研究報告プリント 昭和34年12月)

四国, 伊予南部には,

○ドーブ オミチヨーニ オカエリナサイマセ。

どうぞお道ようにお帰りなさいませ。

というような言いかたがあるという。

井上一男氏の「徳島県祖谷方言語彙」(『方言』第六卷第七号 昭和11年7月)には,

オヨーオイデマシタ 客の帰る時の家人の挨拶

との記事が見える。

近畿, 和歌山県下には, 「ある」ことを言う「オアラ」などがあり, 「ない」ことを言う「オナイ」があり, よいことを言う「オエー」があるという。(『田辺方言』ほかの土地方言文献による。) 村内英一氏も, 『NHK国語講座 方言の旅』に寄せられた「和歌山」の条で,

『キノノパン』は『おとついの晩』のことで, これもよく誤解があるのですが, 会話の中で, 『ある』をていねいにいって『オアラ』といっているのは珍しいです。同じように『ないよ』というのを「オナイヨ」, 返事の『はい』を「オハイヨ」などという言い方も土地によりまだ残されています。

と述べていられる。私もかつて, 紀州南部内の調査で,

○オハイ ヨー。

はい。

というのを教示された。

奈良県下その他に、「オイタダキシテ オキマス。」(いただいております。)というように「オ」のつかいかたがあるか。——九州のに通う。「イタダク」は謙譲であるけれども、それに「オ」をつけているのは、丁寧表現の気もちからであろう。

中部地方の北陸に、あいさつことばの「オ道ヨク。」「オセッカク。」などが見いだされる。(これらは、送辞としてきまったものである。)「オ」がきれいな丁寧表現に役だっている。『富山県方言集成稿(二)』には、

おしずかに 挨拶語  
左様なら

というのが見える。

おゆるっしゅー……お宜しくの意、用事をすませて別れるときの挨拶。  
というもある。同書にまた、

おまちどはんな おまちどうさま  
・挨拶語  
・年寄のことば。

ともあるが、「おまちどうさま」は、ほとんど共通語法になっていよう。

信州の齊藤武雄氏『下高井の言葉(語彙)』(下高井教育会 昭和36年1月)には、

オキタ 北の間で、妻や子供の寝室にあたる部屋  
オテシヨ 小血。オをのかして、テシヨとも言っている。

などというのが見える。後者の「オテシヨ」は、「オテシヨー」とも言われて、広く各地におこなわれていよう。

信州南部の下伊郡で私が経験したことであるが、土地の中年女性は、私の背後にいた妻に、

○オクサンデ オアリテ。

と気づきを述べた。この「オアリテ」の言いかたは、丁寧表現であったかと思

う。おなじ地方で、「くれた」ことを「オクレタ」と言っているが、この言いかたも、もともとは「オ」をつけて丁寧に言ったというものかもしれない。——そういえば、「オくれる」や「オ帰る」などの言いかたにしても、「オ」をつけた最初の気もちは、丁寧表現の気もちであったかもしれない。「オくれる」が「くださる」に似ている点では、もはやこれが、尊敬法動詞相当のものになっているかのようでもあるけれども、起源は、上述のように解しうるものかもしれない。

さて信州には、「オかいこ」などの言いかたもおこなわれている。全国諸方の養蚕どころには、この語がありがちではないか。

山梨県西南部の山地域内で私が聞きとったことばに、「オ南」がある。老女がつぎのように語ってくれた。

昔はことばがよかった。オミナミノ オバーサンなどと 言った。

静岡県小笠郡南部には、辞去のあいさつに、「おさいなー。」があるという。(鷲山恭平氏「挨拶方言(小笠郡南部)」『土のいろ』第十二巻第四号 昭和10年12月)

関東地方に関しては、一つ、『茨城方言集覧』に、

ごっすきとしやしたか

病気全快シタリヤノ意 多賀郡

というのを見ることができる。「すきとする」というのへ「ご」が冠せられているのであろうか。(それにしても、「ごっ」と促音の言いかたができているのは問題である。「ごっ」は別解を要するものでもあるか。)

群馬県関係の作品とされる瓢亭百成氏『山中竅過多』(上毛民俗の会 昭和26年4月)には、

それからおこつちをまじめく<sup>ころで</sup>頃出まして。

まじめく頃=黄昏時

などというのが見える。「お夫<sup>それ</sup>に又」などというのものもある。

東北地方にはいれば、斎藤義七郎氏は、『言語生活』第三十五号（昭和29年8月）の「全国珍語奇語集」の中へ、山形県のものとして、

オショーナ

米沢地方特有の方言。有難うの意の謝辞。「ここに腰かけなさい」「オショーナ」。丁寧にはオショーナツという。

というのを提出していただける。「オショーナ」は、かならずしも山形県下だけ見られるものではなからう。

『仙台の方言』に「オ」の自由なつかいざまが見られて、興味が深い。まず、

「おひとつ、おふたつ、おんみつ、おんよつ、おいつゝ……（お手玉の数取りうた）

というような記事が見られる。名月は、

「おめーげっあん」

と言われている。さらに、

「おせんにはありがともしゃげしてがす」（先日はありがとうございました）

といったような言いかたが本書に見られる。なお、

「まづ〜おいーこた。なんつおいーんだい」（まあ、よい事。なんてよいのでせう）

「おとちかくあらさっても、ばんつあま、ござっから、およがすべ」（続いてお生れになつても祖母様がおいでなさるからよろしいですね）

「およくおんなんしたこた」（ようこそお出でなすつた）

などである。

秋田県下では、『秋田方言』に、

おしんぼち 食事をすゝめること

の語が見える。由利郡のことばであるという。「強い鉢」は、近畿地方内その他にも聞かれることばであろう。ここには、それに「オ」を冠したのが見ら

れる。

「岩手県宮古市高浜」(『全国方言資料』第1巻)には、

mオキギモーセバ            オヨメサンガ   オデルソーデ            ゴゼーンズ  
お聞きしたところでは   お嫁さんが   いらっしゃるそうで   ございます  
ガ   オゲッコーサマデ            ゴゼーンズ  
が   たいへん結構なことで   ございます。

とある。「オゲッコーサマデ」との丁寧な言いかたが見える。県下北部の軽米町のことばとしては、

○キョー<sup>↑</sup>   オフ<sup>↑</sup>リャネバ   ヨー   ゴザンス[ü]   ナッス[ü]。

きょう、雨が、降りませねばようござんすね。

というのをあげることができる。

共通語上に丁寧の「オ」接頭辞がしきりに用いられていることは、すでに周知の事実であろう。「オビール」などは、以前すぐにとりたてられた実例であった。今日、身の幼稚園などについてみるのに、「オ絵かき」「オあるき」などと、「オ」はまったくふんだんに使用されている。近畿地方の近畿共通語での「オイモサン」「オカユサン」などのことは、重ねて言うまでもない。私どもの古くからの生活に根をおろしているものでは、「オ祝い」「オ留守」「オせわ」「オ年寄り」「ゴ苦労」「ゴていねいに」などがある。「オひる」「オから」(豆腐かす)「オしめ」などもなじみぶかいものである。「オ株をうばう」などと、慣用句の中にも、なれた「オ」が見える。動詞に「オ」をつける、何々がオありますか(ね)。での「オあり」なども、広く用いられていよう。形容詞に「オ」をつける「オイそがしい」「オやすい」なども、通用のものになっている。(「オよろしゅうに」というのは、おこなわれかたがすくないか。)副詞「オまけに」は、まったく、これで熟したものになっている。

共通語上での「オ」の使用は、ふえても減ることはないのではないか、とも言うるありさまである。

#### 第四節 表現音声による丁寧表現法

やわらかな声でものを言えば、一般的には、丁寧気分を出すことができる。静かな声でものを言っても、一般的には、丁寧な気分を出すことができる。抑揚頓挫の大きい言いかたではない、おだやかな言いかたをすれば、丁寧な気分を出すことができる。これらのことは、まったく、私どもの常識の中のことであろう。粗雑な声は、おのずから非丁寧の気分につながる。

上のようなことが言えるが、これは、超方言的なことであって、いわば人間言語生活の、その場その場の自然に属することである。文表現音声の、地方的にきまった型などは見いだすことはできない。したがって今、方言上では、諸多の方言についてみても、「表現音声による丁寧表現法」の注目すべきものなどは見いだすことはできないと言える。

文表現末尾の文末声調と言いうるものに関しても、その声調そのものの方言的特色は見いだすことができても、その、丁寧表現法にかかわる特色などは、見いだすことはできない。

要するに、丁寧表現法の条下では、「表現音声に関する方言上の問題」は、とらえることができないありさまである。

## 結 語

上来の丁寧表現法が、広い「ていねい表現法」の中であって、「丁寧」表現専門（専用）の、特定の一分野をなしている。ここにせんに、丁寧表現のための特定の諸品詞・諸方法が発達している。

人は日常、「ていねい意識」を発動させることが多い。人の生活は、元来こうしたものではないか。その「ていねい意識」の発動は、とりあえず、あるいはさしづめ、「その場をていねいに」との表現に向かいがちである。このため、世には、丁寧表現法が多くおこなわれることになっている。

どんなばあいにも、表現上、丁寧表現法は用いられがちであるとも言える。丁寧表現法の必要度は、きわめて高い。

現代は、いわゆる民主化の時代であると言えようか。「敬語の簡素化」は、とかくの問題にされがちである。そのような状況の中にあっても、人々は、丁寧表現法に関しては、これを不可避としてはいないか。（——不可避とする生活にしたがってはいないか。）待遇表現上、人間関係にはこだわらぬのだと言っても、私どもは、表現の現場（その場）には、人間相応に、こだわらざるを得ない。こだわれば、そこに、なんらかの場面表現法、丁寧表現法が生じる。

今日、神は、だれの口頭からも、「デス」や「マス」をとりのぞくことができなのではないか。「デス」や「マス」を抜いた話しかたにつとめている人、放送人としての特定のばあいの人も、その抜いた話しかたに苦勞して、かえって、その人がよく「デス」「マス」を意識していることを露呈していたりする。「デス」「マス」をつかわないことになれている人も、自己の生活場面のすべてがそれ式のものであるとはし得ていないであろう。

「ていねい意識」は、「非ていねい意識」とともに、万人に通有のものにち

がない。「ていねい意識」にもとづく「ていねい表現法」の活動の中で、人間関係には執着しない待遇表現法がよくおこなわれて、そこにしぜんに、丁寧表現法とされるものの沈澱・固成がおこっている。

丁寧表現法とされる特定形式、特定待遇表現法形式の固成は、「ていねい表現法」あるいは全待遇表現法の存立と活動との、しぜんのなりゆきではないか。かんたんに言えば、丁寧表現法の成立と流行とは、敬語法発達のしぜんのなりゆきではないか。——吹きだまりのように、丁寧表現法はできてくるはずのものだと考えられる。中世に敬語法が発達して、そこにしぜんに丁寧表現法ができた。近世に敬語法が発達して、そこにしぜんに丁寧表現法ができた。——一例、「～ヤンス、ヤス」尊敬表現法からも、しぜんにその丁寧表現法ができた。

今日はまさに丁寧表現法のさかんな時代であるが、世はいつの世も、丁寧表現法をよく見せてきたであろう。また、見せていくであろう。

尊敬表現法  
謙讓表現法  
丁寧表現法

総括

方言敬語法と概称する方言待遇表現法の研究は、私にとっては、「ていねい意識」によって立つ「ていねい表現法」の研究であった。卑罵などの表現法にもわたって、広汎に、(たてにもよこにも、はばびろく)、「ていねい表現法」の考えを通すことができる。

旧来の文法学説の中では、一つ、「尊敬」「謙讓」「丁寧」を「仕手尊敬」「受手尊敬」「聞き手尊敬」とする考えかたに、私はとくに注目する。「尊敬」「謙讓」「丁寧」の三者を「尊敬」の概念で見とおすのと、三者を「ていねい意識」「ていねい表現法」で見とおすのとは、ほぼあい似ていよう。

敬語法をささえるものは、尊敬の意識、「ていねい」の意識(「ていねいに」との意識)である。——全待遇表現法をささえるものは、「ていねい」「非ていねい」の意識である。方言上では、たしかにこう言える。方言世界を出ても、たとえば職人語の世界に、茶華道などの物まなびの世界に、広くしつけの世界に、かなり厳格な「ていねい意識」とその表現法とが見られはしないか。「ていねい」「非ていねい」の意識は、たぶん、私どもの広汎な言語社会に潜在しているよう。潜在通念とも言うものがここにあると思う。

「ていねい表現法」の全体系の中で、尊敬表現法がおおはばな地位をしめる。対者尊敬の表現法は、待遇敬意表現法(「ていねい表現法」)の中核部分をなす。

謙讓表現法・丁寧表現法は、前尊敬表現法に対して、第二段的地位にあるものとも見ることができる。——「丁寧」を「謙讓」の一類型と見る考えをとれば(P.176)、「謙讓」「丁寧」の二表現法は、一系のものともされる。

ところで、謙讓表現法が尊敬表現法に直接に対応しているのからすれば、丁寧表現法は、そういうものではないことも明らかである。これはむしろ、尊敬表現法——謙讓表現法をとりまいている。丁寧表現法の位置はこういうものである。謙讓表現法に類しつつも、表現法の性質からして、位置はこういうふうであるところに、丁寧表現法の本色があるとされようか。

尊敬表現法・謙讓表現法のおのおのには、それ外形の、ただ「ていねい」味を出す「ていねい表現法」がある。が、丁寧表現法にはそのようなものがない。ありようもないことである。丁寧表現法は、「ていねい」味を出すことを専門としたものである。丁寧表現法の習慣は、文表現に「ていねい」味を出す（もの言いを「ていねいに」する）習性のうえに、しぜんに成立固定しているものである。

丁寧表現法にせよ、また謙讓表現法ないし尊敬表現法にせよ、各表現法が、述部表現上、本動詞に加えて助辞をしきりに累加発展せしめることは、日本語「文表現」法の本性に即することとはいえ、まことに顕著なものがある。方言助動詞の生成・存立は、方言敬語法中の特徴事実である。それとともに、敬語法動詞の活動が注意される。これらの諸品詞の形態と機能との、地方諸方言上での（——あるいは東西での）変差変異は、方言学上、かくだんに興味ぶかいものとなっている。

謙讓表現法・丁寧表現法に関して本書に記述し得たところもまた、この方面に関する昭和日本語実態の、高次共時論的な把握であるとなしたい。謙讓表現法や丁寧表現法に関しての、昭和日本語方言の動態がここに見られるはずである。

これに依拠して、私どもは、この方面に関する日本語標準語法の科学的な樹立をはたすことができる。本書はすでにその意図を明らかにしている。そこまでの論（——教育論）をもふくめてのものが、私は、方言学の所行であると考えている。

後記 上の7行の叙述の前身は、下の7行である。しるしてご対検を乞う。

日本語の将来あるいは国語生活の将来のためには、しかるべき標準語体系を樹立することが、不可避の課題とされよう。この課題に正確に答えるがためには、なによりもまず、よく日本語を知らなくてはならない。——日本語の現実態を正しく把握しなくてはならない。一方言学徒である私にも、ことの重要性が、終始、痛感されたのであった。ここに私は、いわゆる敬語法の面からではあるけれども、ひとまず日本語の現実態の把握を了して、この方面の標準語法樹立の要請に答えようとしている。その委細に関しては、書中、随所に述べるところがあった。

教育的見地をも包摂した、高次の共時論的記述の成果がここにあるとしたい。

方言敬語法全容の記述説明については、やがて方言「文末詞」(文末助詞)の記述の完成にしたがいたい。このしごと、私にとって、多年の懸案である。

文末詞(文末助詞)とされる、文表現末尾にはたらく特定の訴えことばが、文の述部表現の助辞的展開にも関係の深い、文統一のかなめであることは、多く言うまでもなからう。文の待遇敬卑の表現法ということを考えても、文末詞は、敬語法諸品詞について、早くも注目されるものである。

私の、方言敬語法の研究は、もっともしぜんに、また、ごく当然に、方言「文末詞」の研究に発展していつている。——ここに、私の「昭和日本語方言の総合的研究」の歩みがあるとも言える。



## あとがき

本書のために、定稿の製作にとりかかったのは、昭和49年1月25日であった。今日、ようやくことを成し得て、またしても旧を思う。謙譲法・丁寧法にわたって、全国方言状態を（——と言っても、私のその時までにとらえ得たものを）分析記述することにつとめたのは、やはり昭和20年前後のことであった。今回、本書のための稿をまとめ定めるにあたっては、私は、第一に上記旧稿を土台にした。南島方言に関しては、前稿に言うところが多い。しかし、本書稿を成すにあたっては、むしろそれらをはぶくことにつとめた。あまりにも不詳の問題が多いからである。今日、南島方言の研究はさかんであり、その進運は目を見はらしめるものがある。このうへは、文表現本位の研究もおおいに推進されて、南島方言研究のいよいよ高められることを、念願してやまない。

文表現本位の敬語法研究、待遇表現法研究にしたがってきて、尊敬表現法ならびに謙譲表現法・丁寧表現法の全般を、まとめて記述しおえることができたのは欣幸である。本問題にうち入って、私はおよそ探索しうるかぎりのことを探索した。いまだ地方の歩きたりない所もあるように思われるけれども、おもなねらいの事項および地域に関しては、ほぼ徹底に近いところまでつとめてみたと言えようか。とはいいいながら、私は今も、徹底の二字をおそろしく思う。かつて古文献に、徹底の名の学人を見いだした時の私の感懐は、今も胸にあざやかなものがある。

それにしても、昭和20年前後以来の重い念願を、ここにひとまずはたし得て、私は、「昭和日本語方言の敬語法の、全国にわたっての組織的記述は、以上のようなものでよいのではなからうか。」と思っている。（地域に即する研究作業も、事項ごとの全国的な統一記述の精密さも、まずはこんなところでのよいのか

と思う。)従来、日本語の敬語法の地方状況その他に関して、かならずしも正鵠を得てはいない発表があったりしたのを、本書は、どのようにか補正し得ていよう。文表現本位の記述を通すことにつとめた点にも、お目をとどめていただきたい。

本書の標題をどのようなものにするかについては、早くから考えさせられてきた。『方言敬語法の研究』の続篇とすべきことを思うようになったのは、昭和43年8月のことである。——『続方言敬語法の研究』というのも一案にあった。このころから、研究に新しい調子が出てきたのではあったが、定稿製作の着手までには、なお五年余の歳月をすごさなくてはならなかった。

のろい歩みを、つねに鞭撻しつづけてくださったのは、恩師土井忠生先生である。その温而厳のおことばは、私を奮励させてくださってやまない。柳田国男先生のかつてのご教導のおことばも、この道での、私のひまどる研究に、「慰安と激励」とを与えてくださってやまなかったものである。先生は、“敬語法だけでも大問題だ。これを専門にやってくれるとありがたいなあ。”と言われた。ずっとむかしのことである。そのお話しにあった「敬語法を発生的に考察する」ことの、研究遠大性とも言うべきものについては、当時、理解がおよばなくて、先生のはなはだものたりなく思われたにちがいない愚言を申しのべるのにとどまったのは、今もかえりみて、はずかしいきわみである。しかし、そのことが、なぜか、なつかしくも思いかえされる。ここにまた、私は、恩師東条操先生のご温容におあまえしたい気もちが切である。慈言訓言、つねに私をご教導くださった先生に、方言学実践のひとくぎり・ひとまとめを、今、つつしんでご報告いたしたく思う。

研究の途中、文部省科学研究費その他の恩恵を忝うした。しるして深謝する。

今はただただ、大方各位のご高教ご批判を乞うばかりである。

昭和52年7月15日

## 引用(恩借)文献一覧

本文中に引用させていただいた諸文献を、以下に列記して、深謝の意を表す。種ヶ島克巳氏の『平戸方言語法草案』（稿本）など、かくべつのお導きを忝くしたのもすくなくないことを銘記する。

近来の新発表あるいは新刊方言書で、拝見はしつつも、恩借にはおよばなかったものも、かず多い。記述のはこびの簡約を旨としてのことでもあった。

文献の排列は、「地域別」とする。国の西南方から東北方へと、順次、かかげていく。(各県内のものは、比較的自由的な見地で排列してある。)最後に、「一般」としうるものをおく。

注1 「 」でかこんだものは、論文・報告の類である。

注2 『 』でかこんだのは、著書一般、自作プリントもの、または雑誌である。

注3 おのおののものとページ数は、本文中での、その文献引用の箇所を言うものである。

ページ数のもとに棒線をほどこしてあるものは、「謙讓表現法」記述中のページである。

## 一 南 島

## 〔南島地方〕

- 宮良当壮「南島方言採集行脚（一）」『方言』第一卷第二号（昭6，10月） p. 118  
 不羈庵<宮良当壮>「風雪」（8）『月刊琉球文学』第1卷第8号（昭35，8月） p. 86  
 金城朝永『那覇方言概説』（三省堂 昭19，8月） p. 360  
 仲宗根政善「宮古および沖縄本島方言の敬語法——「いらっしゃる」を中心として——」  
 九学会連合沖縄調査委員会『沖縄—自然・文化・社会—』（弘文堂 昭51，  
 2月） p. 155  
 上村孝二「奄美大島」日本放送協会『方言と文化』（宝文館 昭32，10月） p. 343  
 山下文武「奄美大島方言（二）」『鹿児島民俗 NO 2』（鹿児島民俗学会 昭29，6  
 月） p. 495  
 岩倉市郎『喜界島方言集』（中央公論社 昭16，8月） p. 94, 418, 502

## 二 九 州

## 〔九州地方〕

- 日本放送協会九州支部『放送講演集 九州方言講座』（日本放送協会九州支部 昭6，  
 5月） p. 197  
 吉町義雄「九州方言敬語・希求助動詞活用分布相」九州大学文学部『文学研究』第  
 四十一輯（昭26，3月） p. 91  
 宮地幸一「『～まする』から『～ます』への漸移相——浄瑠璃詞章の考察（二）——」  
 『学芸国語国文学』第七号（昭47，11月） 引用ナン  
 原田芳起「九州方言に現われた弱母音化通則」『音声学会会報』第86号（昭29，12  
 月） p. 188  
 上村孝二「九州地方のことば」『世界文化地理大系 6（日本 V 中国・四国・  
 九州）』（平凡社 昭32，9月） p. 120  
 日本放送協会『全国方言資料』第6巻 九州編（日本放送出版会 昭41，11月） p.  
 11, 19, 22, 31, 71, 94, 130, 139, 150, 157, 164, 178, 189, 196, 200, 207,  
 219, 229, 249, 250, 277, 291, 297, 311, 312, 327, 351, 352, 421, 422,  
 445, 463, 464, 466, 502  
 日本放送協会『全国方言資料』第9巻 へき地・離島編（Ⅲ）九州（昭42，5月）

p. 71, 128, 133, 139, 140, 189, 196, 207, 345, 346, 465, 502

## 鹿児島県

- 春日政治「甌島に遺れるマラスルとメーラスル」『九大国文学』第二号(昭6, 11月) p. 119, 350
- 吉町義雄「吐噶喇諸島方言」『旅と伝説』第十三卷第四号(昭15, 4月) p. 177
- 井上一男「硫黄島方言集」『方言』第四卷第九号(昭9, 9月) p. 350
- 上村孝二「鹿児島県下の表現語法覚書」『鹿児島大学文理学部研究紀要 文科報告』第三号(昭29, 3月) p. 328
- 上村孝二「薩南諸島方言語法資料」『鹿児島大学 文科報告』第7号(昭33, 8月) p. 205
- 北条忠雄「甌島語法の考察」『方言』第八卷第二号(昭13, 5月) p. 350
- 上村孝二「甌島方言概説」荒木博之編『甌島の昔話』(三弥井書店 昭45, 11月) p. 120, 131
- 福里栄三「山川町附近の方言について」『方言』第一卷第三号(昭6, 11月) p. 276
- 山下光秋「鹿児島県鹿児島郡谷山町方言集 下」『方言誌』第八輯(国学院大学方言研究会 昭8, 12月) p. 277
- 野村伝四『大隅肝属郡方言集』(中央公論社 昭17, 4月) p. 118

## 宮崎県

- 小田寛次郎「椎葉紀行」『方言研究』発会記念冊(昭15, 10月) p. 327, 355
- 菊池むねお『米良方言集』(稿本 年月不詳) p. 128
- 小林中学校『日向国小林地方方言雑纂』(自家版 年月不詳) p. 462
- 国立国語研究所『宮崎県都城市方言録音資料』(国立国語研究所 昭42, 3月) p. 499

## 熊本県

- 倉岡幸吉『肥後方言集』(自家版 昭13, 4月) p. 111
- 能田太郎「肥後南関方言類集 用言篇」『方言と土俗』第四卷第八号(昭8, 12月) p. 228
- 原田芳起『熊本方言の研究』(日本談義社 昭28, 1月) p. 206
- 斎藤俊三『熊本県南部方言考』(熊本県南部方言考刊行会 昭33, 2月) p. 355

- 原田芳起「天草島の方言に就て」『方言』第四卷第九号(昭9, 9月) p.199
- 江口達雄「『英文方言訳』20 熊本県天草郡維和村」『土の香』創刊五周年記念(土俗趣味社 昭8, 5月) p.265
- 江上たつゑ「天草島牛深町方言集」『方言』第三卷第八号(昭8, 8月) p.443
- 松本美恵「天草一町田方言における敬語法」熊本女子大『国文研究』第十四号(昭43) p.356
- 『昔話研究』第三号, 第四号(昭10, 7月, 8月) p.30

## 長崎県

- 吉田弘文「長崎県の方言」日本放送協会九州支部『放送講演集 九州方言講座』(日本放送協会九州支部 昭6, 5月) p.125
- 島原第一尋常高等小学校『島原半嶋方言の研究』(島原第一尋常高等小学校 昭7, 5月) p.267, 298, 312, 361, 463
- 山本靖民『島原半島方言集』(湯江中学校 昭28, 5月) p.298, 369
- 結城次郎「肥前国北高来郡昔話集」『方言誌』第二十二輯(昭14, 10月) p.178, 265
- 山本靖民『肥前千々石町方言誌』(自家版 昭4, 7月) p.125, 464
- 田中千禾夫「肥前風土記」『新劇』31 第三卷第十号(昭31, 10月) p.178
- 林田明『五島方言考』(稿本 昭25) p.356
- 久保清・橋浦泰雄『五島民俗図誌』(一誠社 昭9, 11月) p.132, 140
- 種ヶ島克巳『平戸方言語法草案』(稿本 昭和10余年?) p.278, 369, 421, 443, 465
- 山口麻太郎『杵岐島方言集』(刀江書院 昭5, 7月) p.42, 91, 421
- 山口麻太郎『続杵岐島方言集』(春陽堂 昭12, 2月) p.117, 140, 369
- 滝山政太郎『対島南部方言集』(中央公論社 昭19, 9月) p.140
- 『昔話研究』第二卷第十一号(昭12, 9月) p.273

## 佐賀県

- 清水平一郎『佐賀県方言語典一斑』(平井奎文館 明36, 10月) p.178, 230
- 佐賀県教育会『佐賀県方言辞典』(河内汲古堂 明35, 6月) p.309, 466

## 福岡県

- 梅林新市『複製本<sup>福岡</sup>県内方言集』(福岡土俗玩具研究会 昭9, 2月) p.298, 466  
 加来敬一「福岡県方言の語法」『北九州国文』第五号(昭30, 3月) p.45, 64  
 浮羽古文『浮羽方言』(『宇栴波』第三号 昭32, 4月) p.298, 312, 466  
 文化財保存会 野田宇太郎「九州なまり」『言語生活』第六十五号(昭32, 2月) p.266  
 岡野信子「島郷生活語における形容詞——その構成と表現——」若松高等学校郷土  
 研究会『研究紀要』第10集(昭35, 3月) p.46, 312  
 都築頼助「方言の実態と共通語化の問題点」『方言学講座』第四卷(東京堂 昭36,  
 6月) p.438

## 大分県

- 堀江与一・原田兵太郎『大分県方言考』(大分県師範学校国漢学会 昭8, 11月)  
 p.12  
 三ヶ尻浩『大分県方言の研究』(明文堂 昭12, 4月) p.9, 119, 189  
 松田正義『大分県方言の旅』第1卷(NHK大分放送局 年月不詳) p.218  
 松田正義・糸井寛一『大分県方言の旅』第2卷(昭31, 11月) p.152  
 松田正義・糸井寛一『大分県方言の旅』第3卷(昭33, 3月) p.94

## 三 中 国

## 〔中国地方〕

- 生田弥範『山陰方言雑考』(立林書店 昭31, 5月) p.47  
 山田正紀「瀬戸内海島嶼方言資料」『方言』第二卷第六号(昭7, 6月) p.19,  
 22, 51, 63, 65  
 日本放送協会『全国方言資料』第5卷 中国・四国編(昭42, 1月) p.65, 210,  
 218, 219, 231, 302, 342, 357, 372

## 山口県

- 山口県立山口高等女学校国語研究部『山口県方言調査』(山口県立山口高等女学校校  
 友会 昭7, 3月) p.52, 190

- 森田道雄『山口県柳井町方言集』（橘正一発行 昭6，5月） p. 73  
 原安雄『周防大島方言集』（中央公論社 昭18，2月） p. 19, 51, 200, 467

## 広島県

- 三原市役所  
 総務課『三原市大観』（広島県三原市役所 昭26，11月） p. 210

## 島根県

- 加藤義成「中央出雲方言語法考」 『方言』第五卷第四号（昭10，4月） p. 129  
 品川誠『島根県仁多郡布勢村の言語生活の体系的な記述』（稿本 昭27，2月）  
 p. 120  
 島根女子師範学校『隠岐島方言の研究』（島根女子師範学校 昭11，9月） p. 121,  
134  
 横地満治・浅田芳朗『隠岐島の昔話と方言』（郷土文化社 昭11，6月） p. 134  
 神部宏泰「隠岐五箇方言の『ゴザル』について」 『国文学叢』第二十二号（昭34，  
 11月） p. 179  
 神部宏泰「隠岐方言の丁寧表現法」 『国文研究』第十三号（昭42，11月） p. 423

## 鳥取県

- 生田弥範『因伯方言考』（就将尋常小学校 昭12，2月） p. 52  
 石黒武顕『鳥取方言分布の実態』（自家版 昭32，2月） p. 292  
 石黒武顕『鳥取県方言辞典 後編』（鳥取県方言研究会 昭27，12月） p. 280, 447

## 岡山県

- 室山敏昭「岡山県美作方言の文末詞について——鳥取県因幡方言の文末詞との比較研究——」（研究報告プリント 昭34，12月） p. 503

## 四 四 国

### [四国地方]

- 山田正紀「瀬戸内海島嶼方言資料」 『方言』第二巻第六号（昭7，6月） p. 19,

- 日本放送協会『全国方言資料』第5巻 中国・四国編(昭42, 1月) p.252, 471  
 日本放送協会『全国方言資料』第8巻 へき地・離島編(Ⅱ) 中部・近畿(昭42, 4月) p.447  
 中国・四国

## 愛媛県

## 高知県

- 土井八枝『土佐の方言』(春陽堂 昭10, 5月) p.48, 52, 64, 109, 232  
 宮地美彦『土佐方言集』(富山房 昭12, 10月) p.64, 191  
 土居重俊『土佐言葉』(高知県市立市民図書館 昭33, 9月) p.67, 135, 252, 377  
 浜田教義「幡多方言における敬卑表現」『高知県立中村高等学校研究論集』第一号(昭31, 1月) p.65  
 浜田教義『大方町方言集』(高知県立中村高等学校大方分校 昭29, 1月) p.66

## 徳島県

- 井上一男「徳島県方言分布」『方言』第七卷第十号(昭12, 12月) p.48  
 宮城文雄「徳島方言概観」『徳島大学学芸紀要(人文科学)』第V巻(昭30, 9月) p.259  
 金沢治『阿波言葉の辞典』(徳島県教育会 昭35, 3月) p.48, 58, 61, 126, 191, 471  
 金沢治「阿波方言の語法」『方言』第二卷第一号(昭7, 1月) p.377  
 金沢治「阿波方言語法の研究」『徳島教育』(昭11, 6月) p.89  
 金沢治「阿波美馬郡方言語彙」『方言』第四卷第二号(昭9, 2月) p.448, 471  
 金沢治「阿波方言の研究」『徳島教育』第一一四号(昭32, 5月) p.448  
 井上一男「徳島県祖谷方言語彙」『方言』第六卷第七号(昭11, 7月) p.503  
 武田明「三好郡昔話——阿波三縄村字山風呂——」『昔話研究』第二十一号(昭12, 7月) p.32  
 『朝日新聞』(昭41, 4月) p.337

## 香川県

- 脇田順一『讃岐方言之研究』(香川県師範学校附属小学校 昭13, 11月) p.49, 57  
 草薙金四郎『讃岐の方言』(高松ブックセンター 昭37, 11月) p.211

## 五 近 畿

## 〔近畿地方〕

- 国語学会「近畿地方の方言」 『国語学辞典』（東京堂 昭30, 8月） p.242
- 前田勇「関西方言の性格」 『NHK国語講座』（昭32, 3月） p.45
- 泉井久之助「淀川沿岸地方におけるドス・ダスの分布について」 『方言』第二巻第一号（昭7, 1月） p.439
- 泉井久之助「近畿の方言について」 『言語民族学』（秋田屋 昭22, 6月） p.439
- 岸田定雄「ドスの領域」 『方言』第七巻第十号（昭12, 12月） p.440
- 佐藤虎男「近畿・中部接境地方方言状態の調査報告」 『国文学攷』第十七号（昭32, 4月） p.442
- 日本放送協会『全国方言資料』第4巻 近畿編（昭41, 9月） p.95, 141, 142, 164, 168, 192, 211, 220, 242, 252, 253, 335, 438, 472
- 日本放送協会『全国方言資料』第8巻 へき地・離島編（Ⅱ） 中部・近畿 中国・四国（昭42, 4月） p.212, 220

## 兵庫県

- 服部敬之「淡路方言」放送まで』 『兵庫方言』2（昭30, 12月） p.110
- 祢宜田龍昇「淡路方言雑感」 『兵庫方言』4（昭31, 10月） p.49
- 中谷竹蔵『赤穂言葉の研究』（赤穂高等女学校校友会 昭7, 4月） p.61, 381, 450
- 佐伯隆治『播州赤穂方言集』（自家版 昭26, 4月） p.54, 60, 61, 79, 449
- 和田実「高砂」 『兵庫方言』6（昭35, 2月） p.449
- 和田実「兵庫県高砂市伊保町（旧 印南郡伊保村）」 国立国語研究所報告16『日本方言の記述的研究』（明治書院 昭34, 11月） p.212, 380
- 原朗「神戸と比較した播州高砂市方言の語法抄」 『兵庫方言』3（昭31） p.379
- 中島貞一郎『但馬方言』（但馬五郡聯合教育会 昭6, 3月） p.472
- 岡田莊之輔『但馬国温泉町方言記』（自家版 昭31, 11月） p.333

## 大阪府

- 榎垣実『京阪方言比較考』（土俗趣味社 昭23, 5月） p.253

- 前田勇『大阪弁の研究』(朝日新聞社 昭24, 8月) p.126
- 牧村史陽「大阪弁集成」『大阪弁』第一輯(清文堂書店 昭23, 4月) p.253
- 山本俊治「大阪方言における待遇法(2)」『近畿方言』8(昭25, 10月) p.330
- 山本俊治「大阪方言における措定法」『日本方言研究会 第5回研究発表会発表論集』(昭42, 11月) p.450
- 山本俊治「しなさだめ」『兵庫方言』4(昭31, 10月) p.212
- 榎垣実『船場言葉』(近畿方言学会 昭30, 9月) p.472
- 谷崎潤一郎『細雪 上』(中央公論社 昭21, 6月) p.472
- 茂木草介「<横堀川>と大阪の言葉」『放送文化』第22巻第4号(昭47, 4月)  
p.192, 253, 451
- 南要『和泉郷荘村方言』(郷荘民俗会 昭10, 1月) p.80, 259, 452
- 岸和田市  
朝陽国民学校『岸和田市を中心とする方言集抄』(自家版 昭16, 8月) p.473
- 榎垣実「貝塚市の方言」『貝塚市史』第二巻(昭32, 3月) p.452, 473

## 和歌山県

- 杉村楚人冠『和歌山方言集』(刀江書院 昭11, 9月) p.98
- 和歌山県女子師範学校・和歌山県立日方高等女学校『和歌山県方言』(和歌山県女子師範学校  
和歌山県立日方  
郷土研究室 昭8, 3月) p.22, 35, 204, 259, 262, 384, 385,  
386, 425, 474
- 大田栄太郎「串本誌」『和歌山県方言(其二)』(東京広文社印刷 昭5, 12月)  
p.386, 425
- 榎垣実「紀州ことば(4)」『和歌山方言』4(昭30, 1月) p.385, 425
- 村内英一「和歌山」『NHK国語講座 方言の旅』(宝文館 昭31, 9月) p.95,  
331, 503
- 村内英一「語法調査票試案」『和歌山方言』4(昭30, 1月) p.22, 384
- 梅園『田辺方言』(発行者 多屋秀太郎 明20印刷 昭3, 7月再刻) p.336,  
503
- 森彦太郎『南紀土俗資料』(土俗資料刊行会 大13, 3月) p.35, 117, 383, 425,  
474
- 串本町役場『和歌山県西牟婁郡串本町誌』(串本町役場 大13, 8月) p.204, 425
- 楠本実二「奥熊野地方の言語」地方史研究所『熊野』(地方史研究所 昭32, 7月)  
p.260, 262
- 岸田定雄「熊野のことば(上)(下)——瀬峡・北山峡附近を中心として——」『和  
歌山方言』3, 4(昭29, 12月 昭30, 1月) p.262 p.136

## 奈良県

- 新藤正雄『大和方言集』（大和地名研究所 昭26, 10月） p.212, 386  
 辻村佐平『菟田之方言』（自家版 昭14, 10月） p.126, 212  
 都竹通年雄『奈良県北部方言覚書』（近畿方言学会 昭30, 12月） p.331  
 岸田定雄「大和諸藩の武家言葉とその影響」 『近畿方言双書』第一冊（近畿方言学会 昭30, 4月） p.242  
 西宮一民「奈良県磯城郡多武峯村の方言」 『帝塚山学院短期大学研究年報』第3号（昭31, 1月） p.338  
 西宮一民「奈良県磯城郡織田村（新大三輪町）」 国立国語研究所報告16『日本方言の記述的研究』（明治書院 昭34, 11月） p.338  
 宮武正道「奈良市附近の俗信」 『田舎』第四号（昭9, 4月） p.14

## 三重県

- 大田栄太郎『三重県方言』（自家版 昭5, 4月） p.284, 293  
 三重大学方言研究会『三重方言資料』（昭28, 3月） p.33, 320, 336, 387  
 北岡四良『三重県方言資料集 南勢篇 上』（自家版 昭34, 5月） p.19, 39  
 北岡四良『三重県方言資料集 志摩篇』（自家版 昭32, 2月） p.26  
 玉岡松一郎「志摩崎島方言集」 『方言』第五卷第九号（昭10, 9月） p.26  
 北岡四良「鳥羽市鳥羽方言の素描」 『三重県方言』第1号（昭30, 10月） p.136  
 巖佐正三「平古に残る桑名武家ことば——アクセント・語法について——」 『三重県方言』第3号（昭31, 12月） p.387, 425  
 佐藤虎男「近畿・中部接境地方方言状態の調査報告」 『国文学攻』第十七号（昭32, 4月） p.268

## 京都府

- 榎垣実『京阪方言比較考』（土俗趣味社 昭23, 5月） p.253  
 三ヶ尻浩「京都言葉の敬語法」 『国語研究』第三卷第六号（昭10, 6月） p.270, 273  
 榎垣実「京おんなの京ことば」 『放送文化』第25巻第1号（昭45, 1月） p.334, 338  
 井上正一『丹後網野の方言』（近畿方言学会 昭39, 3月） p.49, 54, 212, 333

## 滋賀県

- 大田栄太郎『滋賀県方言集』(刀江書院 昭7, 3月) p.26
- 井之口有一編『<sup>明治31年蒐集</sup>各郡役所謄写本 滋賀県方言取調書』(滋賀県短期大学国語研究室 昭25, 10月) p.180
- 井之口有一『滋賀県言語の調査と対策——方言調査編——』(自家版 昭27, 7月) p.97
- 滋賀県立大津高等女学校『正しい日常語』(滋賀県立大津高等女学校 昭18, 9月) p.440
- 佐藤虎男「近畿・中部接境地方方言状態の調査報告」『国文学攷』第十七号(昭32, 4月) p.335

## 六 中 部

## 〔中部地方〕

- 佐藤虎男「近畿・中部接境地方方言状態の調査報告」『国文学攷』第十七号(昭32, 4月) p.442
- 牛山初男「中部日本における近畿方言の分布(二)——主として語法的な面から——」『信濃』第10巻第12号(昭33, 12月) p.337, 442
- 日本放送協会『全国方言資料』第2巻 関東・甲信越編(昭42, 2月) p.142, 184, 194, 345, 346, 400, 428
- 日本放送協会『全国方言資料』第3巻 東海・北陸編(昭41, 12月) p.16, 20, 39, 194, 213, 214, 218, 233, 234, 255, 294, 395, 396, 427, 477
- 日本放送協会『全国方言資料』第7巻 へき地・離島編(Ⅰ)(昭42, 3月) p.13, 256, 401, 428
- 日本放送協会『全国方言資料』第8巻 へき地・離島編(Ⅱ) <sup>中部・近畿</sup><sub>中国・四国</sub>(昭42, 4月) p.160, 182, 183, 213, 427

## 福井県

- 大田栄太郎『福井県方言』(自家版 昭5, 5月) p.83, 475
- 福井県福井師範学校『福井県方言集』(福井県福井師範学校 昭6, 7月) p.17, 83, 388, 389

- 徳山国三郎『福井の方言』（貴信房書店 昭7, 10月） p.17, 23, 223
- 石橋重吉『若越の方言』（安田書店 昭22, 10月） p.261, 389
- 佐飛翰氏記述『簡約方言手帖』（昭8, 1月） p.181
- 「福井言葉」（方言絵はがき）『方言』第三卷第二号（昭8, 2月） p.454
- 天野俊也「福井県大野郡北谷村谷（タニ）」『福井県大野郡北谷村に於ける敬語』（自家版 昭28, 1月） p.19
- 天野俊也「福井県大野郡北谷村に於ける敬語 附録 北郷村岩屋」（自家版 昭28, 1月） p.122
- 天野俊也「福井県大野郡勝山町猪野（カツヤママチイノ）」『福井県大野郡北谷村に於ける敬語』（自家版 昭28, 1月） p.388
- 天野俊也「福井県勝山町に於ける『行けへん』『行きねへん』等の否定法」『福井県勝山高専学校研究紀要』第1号 年月不詳） p.181, 389
- 佐藤茂「補助動詞について（承前）」『近畿方言双書』第四冊 方言論文集〔1〕（昭31, 2月） p.20
- 佐藤茂「補助動詞について（3）」『近畿方言双書』第六冊 方言論文集〔2〕（昭32, 2月） p.315

## 石川県

- 石川県教育会『石川県方言彙集』（石川県教育会 明34, 12月） p.266
- 木村尚『普通語対照金沢方言集』（宇都宮書店 明42, 9月） p.26
- 尾山篤二郎「金沢地方方言のこと」『方言』第三卷第五号（昭8, 5月） p.10
- 長岡博男「金沢市地方の方言『に』の一考察」『方言』第三卷第一号（昭8, 1月） p.10
- 岩井隆盛「石川方言——その分布と区画——」『国語学』第十一輯（昭28, 1月） p.37
- 岩井隆盛「石川県金沢市彦三一番丁」国立国語研究所報告16『日本方言の記述的研究』（明治書院 昭34, 11月） p.27
- 中道朝子「金沢方言文法の研究」『国語方言』第四号（昭34, 3月） p.10
- 『加賀ことば』（方言絵はがき） p.213
- 岩井隆盛「方言」白峰村史編集委員会『白峰村史』下巻（白峰村役場 昭34, 4月） p.168, 182, 390
- 岩井隆盛「加賀と能登の『挨拶語』」『言語生活』第四十五号（昭30, 6月） p.142
- 著者不詳『能登国鹿島郡方言』（七尾春成印刷 年月不詳） p.122
- 馬場宏「木郎方言考（其の二）」『国語方言』第四号（昭34, 3月） p.390, 393

## 富山県

- 富山県教育会『富山県方言』（山田印刷所 大8, 3月） p. 16, 32, 193, 214, 394, 454, 475
- 富山市教育委員会『富山県方言集成稿（二）』（富山市教育委員会 昭35, 2月） 183, 395, 504
- 佐伯安一『砺波民俗方言集稿（7）』（自家版 昭30, 10月） p. 27
- 佐伯安一『砺波民俗語彙』（高志人社 昭36, 3月） p. 123
- 柴山幸「富山県射水郡櫛田村地方方言」 『方言誌』第十三輯（国学院大学方言研究会 昭10, 1月） p. 214
- 岩井隆盛「北陸道の巻<呉羽山の西と東>」 柴田武編『方言の旅』（筑摩書房 昭35, 9月） p. 15

## 新潟県

- 小林存「越後方言の結語法概観」 『国語研究』第十卷第七号（昭17, 8月） p. 197, 426
- 小林存『越後方言七十五年（完）』（高志社 昭26, 12月） p. 197
- 渡辺慶一『頸城方言集』（高志社 昭13, 11月） p. 142, 263, 476
- 押見虎三二「秋山郷の言語構造について——第一次報告——」 『研究紀要』第二輯（新潟大学教育学部長岡分校 昭31, 2月） p. 37
- 佐渡謙吉「新潟県北蒲郡<sup>西山</sup>長浦村方言」 『方言誌』第十八輯（昭12, 1月） p. 255  
水原
- 渋谷玲子「三光方言の待遇表現」 『国文学会誌』五号（昭36, 3月） p. 476
- 国学院大学民俗文学研究会編集委員『岩船地方昔話集』 『伝承文芸』第三号（昭40, 3月） p. 454, 477
- 丸茂武重「粟島採集録」 『方言誌』第三輯（昭7, 7月） p. 454
- 矢田求『佐渡方言集』（佐渡新聞社出版部 明42, 3月） p. 285
- 天沢坦「佐渡昔話」 『昔話研究』第十七号（昭11, 9月） p. 477

## 岐阜県

- 瀬戸重次郎『岐阜県方言集成』（大衆書房 昭9, 6月） p. 13, 29, 35, 95, 106, 331, 396, 427

- 土田吉左衛門『飛驒のことば』（濃飛民俗の会 昭34, 8月) p.20, 126, 347  
 土田吉左衛門「飛驒白川の方言」『NHK国語講座』（昭31, 11月) p.183  
 佐々木熙『白川北部（やまが）の方言』（大野郡白川村白川小学校椿原分校 昭31,  
 11月) p.9  
 恵那郡教育会『東濃方言集』（明36, 4月) p.270  
 岐阜県立郡上高等学校方言研究会『郡上方言』第一集・語彙編（岐阜県立郡上高等学  
 校方言研究会 昭27, 6月) p.158

## 愛知県

- 鈴木規夫『名古屋方言の語法』（土俗趣味社 昭9, 4月) p.24, 105, 106  
 芥子川律治『なごやことば』（市経済局 昭31, 12月) p.105  
 森田草平『明治大正文学全集』第二十九卷（春陽堂 昭2, 11月) p.106  
 尾崎久弥「方言小説新書目の二三（上）」『方言』第七卷第一号（昭12, 1月)  
 p.397  
 鈴木規夫『南知多方言集』（土俗趣味社 昭8, 9月) p.478  
 谷亮平「豊橋方言の音声と語法」『方言』第二卷第四号（昭7, 4月) p.397  
 高瀬徳雄「豊橋方言の文末助詞についての実情報告」『方言研究年報』第一卷（昭  
 32, 12月) p.396  
 三河渥美町立伊良湖岬中学校「方言表」『中学校において話す力をのばすにはどう  
 すればよいか』（研究物 年月不詳) p.24

## 静岡県

- 静岡県師範学校・女子師範学校『静岡県方言辞典 附 音韻法  
 口語法』（吉見書店 明43,  
 3月) p.203, 234, 260, 303, 314, 401, 479  
 後藤一日『遠州の方言』（美哉堂書店 昭43, 2) p.315, 401  
 坂野徳治『静岡県島田方言誌』（三琳書屋 昭37, 12月) p.260, 303, 315, 479  
 坂本幸次郎「遠州方言に於ける助動詞」『遠江方言の研究』（土のいろ社 昭7,  
 5月) p.315, 400  
 鷺山恭平「挨拶方言（小笠郡南部）」『土のいろ』第十二卷第四号（昭10, 12月)  
 p.505  
 寺田泰政「大井川流域方言の概観」『国語研究』第六号（昭32, 4月) p.498  
 徳田晴彦「岳陽語法—用言之部—」『方言』第五卷第二号（昭10, 2月) p.428

山本靖民「伊豆宇佐美方言」 『方言』第二卷第七号(昭7, 7月) p.215

## 長野県

青木千代吉『信州方言読本 語法篇』(信濃教育会 昭23, 10月) p. 9, 256, 260  
398, 427, 478

青木千代吉『信州方言読本 発音篇』(信濃教育会 昭26, 6月) p.454

福沢武一『信州方言風物誌 第二』(柳沢書店 昭32, 7月) p.20, 82, 398

上田中学校国漢科『信州上田附近方言集』(大正堂書店 昭7, 10月) p.42, 82,  
160, 256, 303, 315, 331, 399, 478

斉藤武雄『下高井の言葉(語彙)』(下高井教育会 昭36, 1月) p.504

佐伯隆治「長野市及び上水内郡方言集」 『方言』第四卷第十一号(昭10, 12月)  
p.27, 82

佐伯隆治「信州北部方言語法(上)」 『国語研究』第十卷第七号(昭17, 8月)  
p.43, 398, 478

佐伯隆治「信州北部方言語法(下)」 『国語研究』第十卷第八号(昭17, 9月)  
p.233

## 山梨県

山田正紀『山梨県方言の諸相——資料篇——』(山梨言語地理学会 昭9, 3月)  
p.286

深沢泉『甲州方言』(地方書院 昭36, 10月) p.106, 112, 315

瀬川敏「『坊』と『ぼこ』(山梨県国中地方)」 『言語生活』第七十号(昭32, 7月)  
p.264

稲垣正幸「富士北麓のことば(山梨)」 『NHK国語講座』(昭32, 5月) p.315

石川緑泥「山梨県河内方言」 『方言と土俗』第四卷第九号(昭9, 1月) p.106,  
267

清水茂夫・渡辺宦弘「西山村方言の語法」 『西山村総合調査報告書』(山梨県教育  
委員会 昭33, 3月) p.215, 428

清水茂夫「奈良田ことばの語法」 『奈良田の方言』(山梨民俗の会 昭32, 8月)  
p.400

深沢正志「奈良田方言語彙」 『奈良田の方言』(山梨民俗の会 昭32, 8月) p.  
479

## 七 関 東

## 〔関東地方〕

大橋勝男『関東地方方言事象分布地図』第二巻〈表現法篇〉（桜楓社 昭51, 2月）  
p. 484

日本放送協会『全国方言資料』第2巻 関東・甲信越編（昭42, 2月） p. 143, 161,  
165, 184, 234, 256, 294, 429, 431, 479, 481, 482, 483, 501

日本放送協会『全国方言資料』第7巻 へき地・離島編（I）（昭42, 3月） p. 90,  
123, 167, 256

## 神奈川県

山本靖民「神奈川県方言資料」『方言』第三巻第四号（昭8, 4月） p. 107, 402

日野資純「神奈川県愛甲郡煤ヶ谷村」 国立国語研究所報告16『日本方言の記述的研究』（明治書院 昭34, 11月） p. 429

日野資純・斎藤義七郎『神奈川県方言辞典』（神奈川県教育委員会 昭40, 3月）  
p. 107

## 東京都

斎藤秀一編『東京方言集』（自家版 昭10, 1月） p. 116, 215, 316, 402, 430,  
479

吉田澄夫「東京方言」『国文学 解釈と鑑賞』第四巻第七号（昭14, 7月） p. 286

大脇繁吉『八丈島仙郷誌』（大脇商店 大13, 1月） p. 167

保科孝一「八丈島方言」『言語学雑誌』第一巻第四号（明33, 5月） p. 143

「口語法取調」『八丈島教育会報』第二号（筆写物によったため年月不詳） p. 114, 167

本山桂川『海島民俗誌』（一誠社 昭9, 2月） p. 114, 328

金田一春彦「伊豆七島」『NHK国語講座』（昭31, 7月） p. 347

金田一春彦「伊豆神津島のことば（東京）」『NHK国語講座』（昭32, 7月）

p. 152

飯豊毅一「八丈島方言の語法」 国立国語研究所論集 1『ことばの研究』（昭34, 2月） p. 143

## 千葉県

本山桂川『千葉県郡別方言集 中篇』（日本民俗研究会 昭7, 7月） p. 430

伊藤晃『東葛方言漫録』（月刊評論社 昭33, 7月） p. 17

斎藤達夫「東総地方方言集」 『方言誌』第三輯（昭7, 7月） p. 17

## 埼玉県

大久保忠国「埼玉方言の語法」 『ニュースクール』7（昭25, 7月） p. 273, 455, 480

大久保忠国「埼玉」 『言語生活』第十二号（昭27, 9月） p. 273

杉山正世『埼玉県川越市近傍言語集稿』（自家版 昭5, 8月） p. 220

池ノ内好次郎『埼玉県入間郡宗岡村言語集』（自家版 昭5, 9月） p. 430

池ノ内好次郎「埼玉県入間郡方言集稿」 『方言』第七卷第二号（昭12, 3月） p. 220

池ノ内好次郎「東武地方の方言」 『言語生活』第九十号（昭34, 3月） p. 480

秩父市教育委員会『秩父の伝説と方言』（秩父市教育委員会 昭37, 5月） p. 116, 126, 137

## 群馬県

中沢政雄「群馬県」 『NHK国語講座』（昭30, 5月） p. 19

都竹通年雄「群馬方言の語法」 『季刊 国語』昭和22年冬季号 3（昭23, 1月） p. 199

上野勇『万場の方言』（自家版 昭27, 6月） p. 403, 431, 481

桐生市乙種学事会『桐生地方に於ける方言訛語調査』（自家版 昭11, 2月） p. 271, 316

中沢政雄「群馬県利根郡片品村言語調査報告」 『季刊 国語』昭和24年度 1 p. 25

瓢亭百成『山中竅過多』（上毛民俗の会 昭26, 4月） p. 505

## 栃木県

- 大田栄太郎『栃木県方言』（自家版 昭5，2月） p.234  
 河内郡私立教育会『河内郡方言集 完』（福田安吉 明36，12月） p.70  
 田代黒龍『高林村郷土誌』（稿本 明44，5月） p.41

## 茨城県

- 茨城教育協会『茨城方言集覧』（茨城教育協会 明37，4月） p.267, 273, 505  
 田口美雄「茨城県方言の考察——主として音韻・語法について——」『研究誌』  
 （昭14，7月） p.274, 431, 482  
 田口美雄「茨城方言語法二三の考察」『方言研究』第十輯（昭19，7月） p.116,  
 143, 199, 482  
 関英男「敬語と普通語」『民間伝承』第二十卷第二号（昭31，2月） p.484  
 長塚節『土』（春陽堂 大15，9月） p.316, 483

## 八 東 北（奥 羽）

## 〔東北地方〕

- 仙台税務監督局『東北方言集』（東北印刷株式会社出版社 大9，8月） p.147,  
 318, 358, 456, 490  
 小林好日『方言語彙学的研究』（岩波書店 昭25，11月） p.410  
 小松代融一「岩手」『方言学講座』第二卷（東京堂 昭36，3月） p.434  
 北条忠雄「秋田」『方言学講座』第二卷 p.488  
 斎藤義七郎「宮城・山形」『方言学講座』第二卷 p.487  
 北条忠雄「みちのくの巻（1）」『方言の旅』（柴田武編 筑摩書房 昭35，9月）  
 p.41, 198, 408  
 北条忠雄「北陸道・出羽・陸奥」『NHK国語講座』（昭33，11月） p.406  
 外村繁「東北」『中央公論』（昭25，5月） p.406  
 本堂寛「地方特有語についての言語地理学的一考察」『文化』第二十一卷第四号  
 （昭32，7月） p.486  
 日本放送協会『全国方言資料』第1巻 東北・北海道編（昭41，10月） p.33, 144,  
 165, 217, 220, 221, 235, 274, 288, 319, 347, 358, 433, 434, 436, 485, 486

491, 507

## 福島県

- 大田栄太郎『福島県方言』（自家版 昭5, 1月） p.404, 486
- 児玉卯一郎『福島県方言辞典』（西沢書店 昭10, 7月） p.17, 35, 147, 201, 221, 271, 458, 486
- 飯豊毅一『福島県史』第二十四卷「民俗 二」所収「第六章 言語生活」（昭24, 3月） p.234, 431
- 飯豊毅一「福島県方言における対者尊敬表現について」 『国語学』59（昭39, 12月） p.200, 484
- 五十嵐正巳『会津若松市方言集稿』（自家版 昭11, 4月） p.137
- 山口弥一郎『会津方言集』（増訂版）（岩磐郷土研究会 昭28, 8月） p.220, 221
- 大沼郡役所『大沼郡誌』（大沼郡役所 大12） p.486
- 菅野宏「檜枝岐の方言」 日本放送協会『方言と文化』（宝文館 昭32, 10月） p.124, 486
- 新妻三郎『相馬方言考音韻語法の部』（自家版 昭5, 10月） p.28, 95, 403, 432
- 新妻三郎「相馬に於ける敬語動詞及び敬語助動詞について」 『国語研究』第二巻第四号（昭9, 4月） p.90, 124, 144
- 武藤要『福島県中村町方言集』（一言社 昭6, 10月） p.432
- 武藤要『福島県棚倉町方言集』（自家版 昭7, 2月） p.220, 271

## 宮城県

- 贅庵『方言達用抄』（文政10年秋8月） p.433
- 土井八枝『仙台の方言』（春陽堂 昭13, 4月） p.96, 116, 129, 133, 145, 147, 165, 225, 318, 346, 404, 405, 433, 487, 501, 506
- 藤原勉「仙台方言」 『仙台市史』6<別篇4>（仙台市役所 昭27, 3月） p.224
- 世古正昭『細倉の言葉』（三菱金属鉱業株式会社細倉鉱業所文化会 昭31, 3月） p.147
- 菊沢季生「宮城県方言文法の一斑」 『国語研究』第二巻第四号（昭9, 4月） p.404

## 山形県

- 斎藤義七郎「宮城・山形」『方言学講座』第二卷(昭36, 3月) p.487
- 山形県師範学校『山形県方言集』(山形県師範学校 昭8, 1月) p.82, 148, 227, 244, 257, 274, 295, 309, 405, 487
- 『山形方言集』(方言絵はがき) p.406
- 内田慶三『米沢言音考』(目黒書店 明35, 10月) p.25, 148, 187
- 『米沢方言手拭』(方言手拭) p.358
- 斎藤義七郎「山形県村山郡方言助動詞考」『方言研究』第四輯(昭16, 10月) p.406
- 板垣スエ「北村山郡昔話一山形県・西郷村名取一」『昔話研究』第十一号(昭12, 9月) p.358
- 著者不詳『高島町ヲ中心トセル方言』(自家版 昭15, 2月) p.144
- 野村純一・敬子『笛吹き聲 最上の昔話』(東出版 昭43, 6月) p.152
- 戸川安章「羽黒の山伏しと言葉」『NHK国語講座』(昭31, 11月) p.149

## 秋田県

- 秋田県学務課『秋田方言』(秋田県学務課 昭4, 11月) p.15, 25, 40, 295, 317, 407, 408, 409, 410, 435, 455, 457, 487, 488, 506
- 大山宏等編『<sup>秋田県</sup>方言音韻及口語法』<『羽城』第三十九号附録>(秋田県立秋田中学校 校友会 明44, 5月) p.146, 184, 488
- 内田武志『鹿角方言集』(刀江書院 昭11, 9月) p.25, 146
- 湯沢幸吉郎「語法上から見た秋田方言」『国語史概観』(八木書店 昭18, 1月) p.456
- 北条忠雄「秋田の会話」日本放送協会『方言と文化』(宝文館 昭32, 10月) p.488
- 芳賀綏「秋田」日本放送協会『NHK国語講座 方言の旅』(宝文館 昭31, 9月) p.456
- 今村義孝『秋田むがしこ』(未来社 昭34, 9月) p.489

## 岩手県

- 小松代融一『岩手方言の語彙』<岩手方言研究第三集>(岩手方言研究会 昭34, 11

- 月) p. 38, 129, 145, 185, 194, 199, 201, 217, 257, 295, 306, 310, 342, 357, 411, 490
- 小松代融『平泉方言の研究』(岩手方言研究会 昭29, 10月) p. 409
- 高橋藤作『西和賀方言之研究』(岩手県和賀郡川尻尋常高等小学校 昭9, 11月)  
p. 40, 490, 491
- 『気仙方言誌』(金野静一「第1部語法論」菊池武人「第2部語彙」 昭39, 11月)  
p. 357
- 八重樫真『岩手県釜石町方言誌』(千葉市川町日本民俗研究会 昭7, 3月) p. 490
- 伊能嘉矩『遠野方言誌』(郷土研究社 大15, 6月) p. 307
- 金田一京助「私自身の方言を顧みて」『方言研究』第三輯(昭16, 6月) p. 198
- 宮良当壮「日本語に於けるクワ(Kwa)行音群に就いて」『言語研究』第十, 十一号(昭17, 11月) p. 295
- 国学院大学民俗文学研究会編集委員『岩手県南昔話集』『伝承芸』第六号(昭43, 4月) p. 28, 457
- 平野直「南部昔話抄(一)」『昔話研究』第三号(昭10, 7月) p. 491
- 平野直「南部昔話抄(三)」『昔話研究』第六号(昭10, 10月) p. 357
- 平野直「南部昔話抄(五)」『昔話研究』第十号(昭11, 2月) p. 357

## 青森県

- 青森県『青森県方言訛語』(青森県庁 明41, 9月) p. 271, 412, 414, 436
- 菅沼貴一『青森県方言集』(青森県師範学校 昭10, 6月) p. 269, 414
- 中市謙三『野辺地方言集』(三元社 昭11, 8月) p. 319, 436
- 能田多代子『五戸の方言』(国学院大学方言研究会 昭13, 3月) p. 150, 195, 235
- 能田多代子『青森県五戸語彙』(自家版 昭38, 2月) p. 9, 31
- 寺井義弘『青森県南部方言考』<昭和37年研究資料1>(八戸市教育委員会 昭37, 10月) p. 199, 235
- 瀧野沢栄一「津軽方言の語法」『方言』第五卷第二号(昭10, 2月) p. 414, 492
- 東条操・此島正年・北条忠雄「方言をめぐる」『言語生活』第五号(昭27, 2月)  
p. 435, 492
- 工藤祐「買物言葉」『民間伝承』第十九卷第九号(昭30, 9月) p. 235, 414
- 『津軽方言絵ハガキ』第一輯(方言絵はがき) p. 442

## 九 北海道

- 石垣福雄「東京語はひろがる」 『言語生活』第四十一号（昭30，2月） p. 41  
 石垣福雄「北海道は方言試練の場 死滅したことばと生き残ることば」 『放送文化』  
 第22巻第2号（昭42，2月） p. 307  
 日本放送協会『全国方言資料』第1巻 東北・北海道編（昭41，10月） p. 28

## 十 一 般

- 東条操『全国方言辞典』（東京堂 昭26，12月） p. 126, 143, 375, 500  
 東条操『全国方言辞典 補遺篇』（東京堂 昭29，12月） p. 9, 41, 104  
 東条操『分類方言辞典』 都竹通年雄「小詞」（東京堂 昭29，12月） p. 27, 183  
 日本放送協会『全国方言資料』  
 （これは地域別に配してある。）  
 静岡県警察部刑事課『全国方言集』（静岡県警察部刑事課 昭2，7月） p. 17,  
 213, 249  
 諸家稿「全国珍語奇語集」 『言語生活』第三十五号（昭29，8月） p. 91, 184,  
 506  
 柴田武『お国ことばのユーモア』（東京堂 昭36，11月） p. 42, 168, 370, 492  
 柳田国男『毎日の言葉』（創元社 昭21，6月） p. 38, 286, 403, 409, 479  
 奥村三雄「方言の区劃」 『国語国文』第二十七巻第三号（昭33，3月） p. 453  
 都竹通年雄「方言文法」 『国文学 解釈と鑑賞』第十九巻第六号（昭29，6月）  
 p. 27, 419  
 永田吉太郎「助動詞の記載について」 『土の香』創刊五周年記念（土俗趣味社 昭  
 8，5月） p. 32, 337, 483  
 今泉忠義「現代の敬語」 国語教育学会『現代語法の諸相』（岩波書店 昭18，6月）  
 p. 403  
 橘正一「デス・ダス・ドス」 『コトバ』第七巻第三号（昭12，3月） p. 223, 227,  
 263  
 小松寿雄「『お～する』の語詞」 『国語研究室』第五号（昭41，12月） p. 154  
 東条操『方言と国語教育』 国語シリーズ 11（文部省 昭28，3月） p. 215, 451  
 山田修「共通語教育のあり方 関東甲信越地方」 日本放送協会『方言と文化』  
 （宝文館 昭32，10月） p. 18  
 藤原与一『方言敬語法の研究』（春陽堂 昭53，1月） p. 88, 89, 90, 326, 337,

338, 340, 343, 361, 364, 458, 475, 492, 495, 496

春日和男『『ます』及びその類語の発生と展開』『国文学』第五卷第二号(昭35, 1月号臨時増刊) p.354

新村出『方言史談』『方言』第四卷第一号(昭9, 1月) p.427

土井忠生訳『ロドリゲス 日本大文典』(三省堂 昭30, 3月) p.121, 327

湯沢幸吉郎『国語史 近世篇』(刀江書院 昭12, 3月) p.459

国語調査委員会『口語法別記』(大日本図書株式会社 大6, 4月) p.295

橋本進吉『新文典 別記』(富山房 昭7, 4月) p.362

木枝増一『高等国文法新講 品詞篇』(東洋図書株式会社合資会社 昭13, 11月) p.354

松村明『日本文法大辞典』(明治書院 昭46, 10月) p.365

日本大辞典刊行会『日本国語大辞典』第四卷 第十四卷(小学館 昭48, 7月 昭50, 3月) p.122, 417

〔補〕

永田吉太郎『『ごぞいます』の variety』『音声学協会会報』第29—30号(昭8, 5月)

追記

諸文献からの引用にあたっては、その原文を忠実に写すことにつとめ、清濁のあやまり、促音表記その他での表記の不整、分がちがきのあやまりなども、すべて原文のままにした。



## 索引

○二種の索引を設定する。

○語句排列は、アイウエオ順によらないところもある。

## I 方言事象索引

## 〔ア〕

アース…………… 483, 485  
 アガル…………… 130  
 アギンス…………… 382  
 「～アゲ」表現法…………… 131  
 アゲモス…………… 146  
 アゲル…………… 69, 130, 133, 345  
 ～アゲル…………… 133  
 アゲル・サンアゲル…………… 130  
 あす…………… 256, 477  
 アス…………… 202, 486, 487, 489, 491  
 アス——ゴアス…………… 474  
 「アス」は、「ヤス」に相当…………… 480  
 あらレ…………… 174  
 アリーセン…………… 393  
 アリセン…………… 268  
 アリマス…………… 204, 339, 340, 341  
 アリマス→ゴザイマス…………… 340  
 「アリマス」が「アンス」…………… 405  
 「あります」のなまり「あんす」…………… 412  
 アリャンス→アリャン…………… 469  
 アル…………… 340  
 「アル」表現法…………… 340  
 あんす…………… 477

アンス…………… 459, 467, 468, 470  
 485, 487, 488, 491  
 ～アンス…………… 481  
 「アンス」ことば…………… 483  
 「アンス(ァンス)」ことば…………… 489

## 〔イ〕

行キナンモーシ…………… 355  
 行キマスナ…………… 367  
 イクス…………… 123  
 出雲地方の「ゴセ」ことば——  
 土佐の「オーセ」ことば…………… 86  
 イタ…………… 97, 98, 102  
 イタ→イダ…………… 99  
 イター…………… 99  
 イターカシ(ヒ)テ…………… 96  
 イターカシ(ヒ)テ→カシ…………… 97  
 イダーコ…………… 100  
 ィダーコ…………… 101  
 イタカシテ…………… 96  
 イタシイタス…………… 114  
 イタシャース…………… 116  
 イタス…………… 5, 112, 113, 114, 167, 494  
 「～イタス」…………… 115  
 「イタス」ことば…………… 167

「イタス」助動詞 ..... 167  
 「イタス」表現法 ..... 112, 115  
 イタダカヒテ ..... 95  
 イタダカシテ ..... 95  
 頂カシテ ..... 96  
 イタダカヒテ ..... 95  
 イタダキ+上げる ..... 94  
 イタダキス ..... 96  
 イタダキマシテソーロ ..... 153  
 イタダク ..... 5, 7, 93, 95  
 イタダク系 ..... 93  
 イタダク類 ..... 93  
 イタダコ ..... 100  
 イタダコー ..... 100  
 「頂こう」表現法 ..... 101  
 「イタ」表現法 ..... 103  
 イテサンジマス ..... 126  
 「いなかく」(いただく) ..... 95  
 イラシミセ ..... 214  
 インヤデス ..... 422, 423

[ウ]

ウカガウ ..... 127  
 ウゲダマル ..... 150  
 ウケタマワル ..... 149  
 受ケル ..... 112

[エ]

エンス ..... 483  
 エンス—ヤンス ..... 476  
 「エンス」は、「ヤンス」 ..... 483

[オ]

オ ..... 77, 83, 502, 503, 505, 506, 507  
 オアンス—ゴアンス ..... 294

オイタダキシマス ..... 94  
 オイデモシエ ..... 357  
 おいとますル ..... 154  
 オーセ ..... 79, 85, 86  
 仰セツケラレ ..... 91  
 仰セツケラレマセ ..... 91  
 オーツケラレ ..... 91  
 隠岐島での「デース」「テス」 ..... 423  
 オ下シなさいマセ ..... 29  
 オクッセー ..... 81  
 オクライ ..... 82  
 オクリー ..... 78  
 オクレ ..... 79  
 オクレ→ウクレ ..... 80  
 オクレ→オクレン ..... 81  
 オクレ→オコレ ..... 77  
     →オゴレ  
     →オッケ  
 オクレ ..... 77, 78, 79, 80, 81  
 「オクレー」表現法 ..... 77  
 オクレル—オクレ ..... 6  
 オクレ類 ..... 76  
 「オクレ」類 ..... 83  
 オクレ類の分布と生態 ..... 77  
 オクレンナレ ..... 81  
 オクンナイ ..... 81  
 オクンナレ ..... 81  
 オクンネー ..... 81  
 オコレ ..... 82  
 オゴレ ..... 82  
 おそれまおす ..... 143  
 オザイマス—ザイマス ..... 209  
 オザリス ..... 407  
 オザリマス ..... 189  
 オザル ..... 345  
 オザンス ..... 287  
 おじやますル ..... 154  
 オジャル ..... 326, 327, 328





クダサリマセ……………31  
 下サル……………44  
 クタサレ……………10  
 クダサレ……………8, 9  
 クダサレほか……………8  
 クダサレイ……………9  
 クダサンシエ……………32  
 クダサン(セ)……………32  
 クダサンス……………416  
 クダサンセ……………32  
 クダサンセほか……………31  
 クダサンセー……………33  
 クダシカレ……………42, 43  
 クダシカレほか……………42  
 クダシャー……………12  
 クダしヤカル……………42  
 クダシャレ……………9  
 クダシャンセ(シエ)……………30  
 クダシヨカリ……………43  
 クダセ(シエ)……………12  
 クダセァ……………13  
 クダセー……………12, 13  
 クダセーンセ……………33  
 クダッシ……………33, 34  
 クダッシ——クダシ……………35  
 クダッシエ……………34  
 クダッシヨ——クダッシヨ……………35  
 クダッセ……………34  
 クダッセほか……………34  
 クダハイ……………16  
 「クダハイ」命令形……………17  
 クダハリ……………9, 14, 15  
 くだハリマッセ……………30  
 クタハレ……………15, 394  
 クタハレ……………15  
 クダハレ……………14, 15  
 「クダハレ」謙讓表現法……………13  
 クダハレほか……………13

クダハンシ……………31  
 クダハンシエ……………31  
 クタハンセ——ツタハンセ……………32  
 クダハンセ……………32  
 クダヘー……………16  
 クダリ……………19  
 クダリヤーセ……………28  
 クダリヤン……………28  
 クダレ……………18, 19, 21  
 クダレ——クラレ……………20  
 クダン……………38, 39  
 クタンシ……………37  
 クダンシ……………35, 36, 37, 38  
 クダンシヨ……………37  
 クタンセ……………36, 37, 38  
 クダンセ……………36, 37, 38, 39, 40, 41  
 クダンセ(シエ)……………35  
 クダンセほか……………35  
 クダンヤイ——クランヤイ……………28  
 クッサイ……………17  
 クッセイ……………17  
 クッタイ……………17, 18  
 クッタイ・クッサイ……………17  
 クッチャイ……………17  
 クッチョ……………17  
 クデー……………23  
 クテンシ……………37  
 グデンセ……………37  
 クトンシ……………37  
 クト<sub>ト</sub>ンシエ……………37  
 クナサリマセ……………31  
 クラ……………22  
 クライ……………25  
 クラサイ……………11  
 クラサイ……………10  
 クラサエ……………13  
 くらされ……………9  
 クラハレ……………14

くられ……………19  
 クンダエ……………25  
 くんだせ……………12  
 クンダセー……………13  
 クンダハレ……………15  
 グワヒ……………248, 249  
 グワン……………249  
 クレマシー……………371  
 クレル……………76, 345

[ケ]・[ゲ]

けーす……………274  
 ゲース……………260, 261, 264  
 ゲス……………272, 273, 274  
 「ゲス」ことば……………275  
 ゲッコースル……………154  
 謙讓の「マス」……………394  
 謙讓の「マス」ことば……………415  
 謙讓の「マセ」……………383  
 謙讓の「マス」用法……………390  
 謙讓の「マセ」——マソ……………379  
 謙讓表現法形式「下さい」……………8  
 謙讓表現法の人代名詞……………161  
 謙讓法動詞「マイラスル」……………176

[コ]・[ゴ]

ゴアイス……………233  
 ゴアイス……………230  
 ゴアイマス……………212  
 ゴアス……………248, 250, 251, 253, 255  
                   256, 257, 258, 269, 295  
 ゴアス——アス……………254  
 ゴアス——ゴアシ……………246  
 ゴアス——ゴアシ——ゴアヒ  
           ——ゴアイ……………247  
 ゴアス——ゴヤス……………252

ゴアス ゴワス……………246  
 ゴアッ……………247  
 ゴアハンス——ゴワハンス……………204  
 ゴアハンス, ゴハンス……………204  
 ゴアヒ……………248  
 ゴアフ……………248  
 ゴアリマス……………190  
 ゴアン……………247, 251  
 ゴアンサ……………291  
 ゴアンス……………222, 265, 276, 290, 291  
                   292, 293, 294, 295, 300  
 「ゴァンス」「グァンス」……………295  
 「ゴア(ワ)ンス」ことば……………291, 296  
 ゴアンス ゴワンスなど……………290  
 ゴアンソ……………291  
 ごいされませ(御免下さいませ) ……383  
 ゴイス……………153, 260, 261, 262, 263  
                   264, 265, 269, 270, 272  
 ゴイ(エ)ス……………272  
 「ゴイス」系のもの……………260  
 ゴイス ゴエス, ゲース……………260  
 「ゴイス」ことば……………264  
 ゴイタ……………85  
 ゴインス……………261  
 コウテッカ……………80  
 コウトッケエ……………80  
 ゴェース……………261  
 ゴエス……………260, 261, 263, 264  
 ゴエンス……………263, 294  
 ゴース……………268, 269  
 ゴザ……………211  
 ～ ゴザ……………154  
 ゴザース……………227, 230, 232, 233  
 ゴザーマス……………209, 210, 212, 214  
 ゴザアル……………177  
 ゴザールマッス……………189  
 ゴザイ……………207, 210  
 ゴザイアス……………220



ゴザリガンショ	181
ゴザリガンス, ゴザリガス	203
ゴザリス	194, 224, 225, 227
ゴザリス ゴザイス	224
ゴザリマス	186, 188, 191, 193, 194, 195
ゴザリマス—ゴアリマンタ	191
ゴハリマンタ	191
ゴザリマス—ゴダリマス—	
ゴラリマス	189
ゴザリマス—ごわりまん	192
ゴザリマス ゴザリモス	186
ゴザリマス(モス)系 総収	322
ゴザリマスル	189
ゴザリマッス	189
ゴザリミス	391
ゴザリミス	193
ゴザリモース	178, 187
ゴザリモース—ゴザリモス	186, 187
ゴザリモス	187
ゴザリヤース	201
ゴザリヤス	199, 200, 201, 202
ゴザリヤス	200, 201
ゴザリヤスほか	199
ゴザリヤンス	197, 198, 199, 202
ゴザリヤンス	197, 199
ゴザリヤンス以下の異形式類	196
「ゴザリヤンス」以下の異形式類	204
ゴザリヤンスほか	196
ござりやんする	197
ゴザリヤンスル	197
ゴザリン	226
ゴザリンス	222, 223
ゴザリンス ゴザインス	222
ゴザル	153, 177, 181, 182
	183, 185, 186, 196
	344
ゴザル—ゴザ	179
「ゴザル」→「ゴザリマス(モ	

ス)」の分生体系	326
「ゴザル」尊敬表現法	177
「ゴザル」尊敬法動詞	344
「ゴザル」丁寧表現法	177
「ゴザル」丁寧法動詞	176, 178, 179
	180, 181, 182, 185, 222
「ゴザル」動詞	177, 196
ゴザルマス	188, 193
ゴザルマッシュ	188
ゴザルマツツ	195
ゴザレ	180
ゴザン	281
ござんさる(御座遊ばさる)	278
ゴザンス	211, 222, 275, 276, 277, 278
	279, 280, 282, 283, 285, 286
	289, 304, 416
ゴザ(ダ)ンス	279
「ゴザンス」系のもの	275
「ゴザンス」ことば	279, 282
	284, 286, 289
「ゴザンス」ことばは	294
「ござんす」「ごだんす」	286
「ゴザンス」丁寧表現法	290
ゴザンスル	275, 278
ゴザ(ダ)ンスル	279, 280
ゴザンソ—ザンソ	277
ゴザンマス	214, 217
ゴザンモス	206
ゴジェス	235
ゴジエヤス	221
ゴジシタ—ゴザシタ	241
ゴシナイ	84, 85
ゴシナハイ	79, 84~85
ゴジミス	214
ゴジャ—ゴザル	185
ゴジャース	235
ゴジャーマス	215
ゴジャエマス	215

ゴジャス	235
ゴジャッ	185
ゴジャマス	215
ゴジャリマス	195
ゴジンス	285
「ゴジンス」の略として、 「じんす」	285
ごす	316
ゴス	85, 269, 270, 271, 272, 273
ゴセ	79, 84
ゴゼァーマス	215
ゴゼァース	233
ゴゼァッス	218
ゴゼィース	234
ゴゼイス	233
ゴゼース	230, 232, 233, 234
ゴゼエマ	221
ゴゼーマス	209, 210, 213, 215, 216
ゴゼェヤス	220
ゴゼーヤス	220
ゴゼェンス	289
ゴゼッス	233
ゴゼマス	213, 215
ごぜやす	220
ゴゼンス	284, 285, 286, 289, 294
ゴゼ(ジェ)ンス	285
ゴダイ	216
ゴダイアッス	219
ゴダイマス	209, 212
ゴダエマス	210
ゴダエヤス	219
ゴダェヤンス	218
ゴダヤス	219
ゴダリマス	190, 191, 192
ゴダンス	279, 280, 284
ゴチエアス	235
ゴッサイ	85
ごつさりまし(ゴメンナサイ)	397

ゴッサンシェ	85
ゴッス	267
ゴッスル	267
ゴッセン	268
ゴハッシャイ	85
ゴハンス	204
ゴヤース	231
ゴヤス	248, 255
ゴヤンス	294, 296
ゴラル	181
御覽	102
ゴレンソー	152
ごわ(ゴワス)	253
ゴワス	246, 248, 250, 253 254, 255, 257, 258
ゴワス(アス)	271
ゴワス——がーす	256
ゴワス——グァース	252
ゴワッス	249
ゴワン	251, 253
ゴワンス	290, 291, 292, 293, 294
ゴンサリマス	203
ゴンス	265, 266, 267, 269, 272
ゴンスル	266, 267

[サ]・[ザ]

ザイアス	221
ゴザイアス	221
ザイヤス	221
ザイマス	207, 214
サウダデン さうです	430
ザェマシタ	213
サシアゲル	133
サマ	500, 501
サマ——サン——サー	499
サン	500
サンジアス	125
さんじます	126

サンジマス…………… 125, 127  
 サンジマス——サニマス…………… 126  
 参ジマス…………… 125  
 サンジル…………… 127  
 参ジル…………… 125, 126

[シ]・[ジ]

シータス…………… 167  
 四国地方の「デス」…………… 424  
 四国地方の「マス」…………… 376  
 四国地方の「ヤンス, ヤス」…………… 471  
 四国内の「ダス」…………… 447  
 システス…………… 433  
 シットルゴザー…………… 154  
 ～シテス…………… 414  
 してつたはれ…………… 16  
 「シ」には, 「ます」を…………… 413  
 ジャー…………… 18  
 ジャーマス——ザーマス…………… 345  
 ジャス…………… 474  
 ～ジャス…………… 465  
 ジャリマス…………… 341  
 ～ジャリヤンス…………… 469  
 ジャンス…………… 470, 482  
 ～ジャンス…………… 469  
 シャンス・サッシャンス…………… 416  
 終止形の「ダッ」「ダ」…………… 450  
 終止形「マフ」…………… 382  
 終止形「モシ」→ン…………… 352  
 シランゴザ…………… 154  
 シンジル…………… 123  
 シンジる…………… 134  
 シンジル…………… 136  
 しんぜる…………… 122  
 シンゼル…………… 135  
 進ゼル…………… 133  
 進ゼル——進デル…………… 134

シンゼ<sup>レ</sup>ル→ヒンゼ<sup>レ</sup>ル…………… 137  
 「シンゼル」ことば…………… 135  
 「進ゼル」ことば…………… 136, 137  
 シンデル…………… 136

[ス]

す…………… 317  
 ス…………… 320, 321, 333, 336, 435  
 す(普通語の「ます」に似てゐる)——ス…………… 408  
 「ス」(です)…………… 429  
 ス——です…………… 430  
 「ス」は, 「デス」相当の…………… 435

[セ]

接辞「オ」…………… 161  
 接辞による丁寧表現法…………… 499  
 接尾辞による丁寧表現法…………… 501  
 為<sup>き</sup>マイ…………… 372  
 センゼマス…………… 134  
 センゼル…………… 134

[ソ]・[ゾ]

候…………… 151, 347  
 ～候へ…………… 168  
 ソナエル…………… 137  
 「ゾ」に対しても「ゾン」…………… 497  
 「ゾ」の訛形の「ド」…………… 497  
 その独自の「ス」…………… 410  
 ソロー…………… 347  
 尊敬語命令形…………… 8  
 尊敬の「マセ」…………… 383, 394  
 尊敬表現法「～ヤンス, ヤス」… 460  
 存ジル…………… 150





ツカージャー……………46  
 ツカーセ……………67  
 ツカアンセ……………65  
 ツカイ……………6, 53, 55, 56, 57, 77, 169  
 ツカイほか……………54  
 ツカエ……………55  
 ツカサー……………46  
 ツカサーセ……………64  
 ツカサイ……………46, 48, 49, 51  
 ツカサイセ……………64  
 ツカサイマセ……………61, 62  
 ツカサイマセほか……………61  
 ツカザッセ(ジェ)……………64  
 ツカサッセほか……………64  
 ツカサッセ……………64  
 ツカサリマセ……………61  
 ツカサレ……………8, 46, 48, 49  
 ツカサレマセ……………62  
 ツカサン……………46, 63  
 ツカサンセ……………63  
 ツカサンセほか……………63  
 ツカッセ……………66  
 ツカハイ……………51, 52  
 ツカハイマセ……………62  
 ツカハイマセほか……………62  
 ツカハリマセ……………63  
 ツカハレ……………50, 51, 53, 54  
 ツカハレ・ツカハイほか……………51  
 ツカハン……………51, 65  
 ツカハンセ……………65  
 ツカハンセほか……………65  
 ツカハンセ……………65  
 ツカハンヘ……………65  
 「ツカ」表現法……………103  
 ツカマツル……………117  
 ツカレ……………52  
 ツカワサイ……………46  
 ツカワサレ→ツカワレ……………50

ツカワンセ……………65  
 ツカン……………55, 56  
 ツカンセ……………66  
 ッセン……………382

[テ]・[デ]

デァーンス→デーンス……………422  
 であす……………476  
 でァス……………465  
 デァス……………444, 486  
 ～デァス……………444  
 テァス・ツァス……………434  
 テアンセ……………490  
 丁寧の「オ」接頭辞……………507  
 丁寧の助動詞「マス」……………176  
 丁寧の「ます」……………363  
 丁寧の「マス」……………382, 383, 387  
 395, 397, 398, 403  
 丁寧の「マス」では、略形の  
 「マ」……………379  
 丁寧の「マス」の活用形……………380  
 丁寧表現法因子「マス」……………415  
 「ていねい表現法」化……………115  
 丁寧表現法助動詞「マス」……………401  
 丁寧表現法の……………459  
 丁寧表現法の「～ヤンス, ヤス」……………460  
 丁寧法助動詞「マス」……………186  
 丁寧法助動詞「ゴザル」……………184  
 ディロ……………419  
 テ……………84  
 デ……………418  
 ～テカ……………83  
 であす……………435  
 デース……………200～201, 420, 432, 434  
 デェス即ち所謂デス言葉……………428  
 デーンズ……………201, 431, 434, 467, 491  
 「デーンズ」「デンス」……………484



東北地方・北海道地方の「マス」… 403  
 東北地方・北海道地方の  
     「ヤンス、ヤス」…………… 484  
 ～ トーカ……………84  
 ～ トーセ……………86  
 ～ トーゼ……………86  
 ドーセ……………86  
 ドーゼ……………86  
 特定謙讓用の「マセ」命令形…………… 366  
 特定の「マス」謙讓法助動詞…………… 380  
 トクレ……………80  
 ドス…………… 334, 437, 438, 439, 441, 442  
 ……ドス エー。…………… 439  
 「ドス」「オス」「ヤス」…………… 441  
 「ドス」ことば…………… 440, 442  
 「ドス」「でオス」…………… 442  
 「ドス」の「ス」…………… 441  
 取ラス……………87  
 取ラセ……………86  
 ～ トンカ……………84

[ナ]

ナーン…………… 497  
 ナイヤゲ…………… 131  
 ナクナル…………… 346  
 ナサイマス…………… 222  
 ナサンス…………… 222, 416  
 ナチャビラン…………… 154  
 ナハンモシタ—ナハンムシタ…………… 355  
 「ナモシ」ことば…………… 497  
 ナンス…………… 222  
 南島の「ます」相当のもの…………… 359

[ニ]

～ ニャリヤンス…………… 469  
 ～ ニヤンス…………… 469

[ノ]

ノベマス…………… 160  
 「ノ(ン)」の用法…………… 429

[ハ]

拝見スル…………… 154  
 ハイヨ…………… 107  
 ハイヨー…………… 107, 108, 109  
 ハイリョ…………… 107, 110  
 ハイリョー…………… 107, 110  
 拝領…………… 107  
 ハス…………… 339  
 ～ ハベリ…………… 155

[ヒ]

ヒンゼル (＝ヘンゼル)…………… 137

[フ]

「普通動詞連用形+マセ(シ)」の  
 尊敬表現法…………… 390

[ヘ]

「ヘス」には、「ます」の…………… 414

[ボ]

ボクンノデス…………… 428

[マ]

マース…………… 369  
 マアスル…………… 121

マースル.....	375	「マシた」の「マイた」.....	384
マーセ.....	378	「マシ」の「マヒ」.....	380
まあせる.....	124	「マシ」「マス」謙讓表現法.....	374
マーセル.....	124	「〜マシ」「〜マセ」尊敬表現法.....	399
マーヘ.....	378	「マシ」命令形.....	371, 401, 402
〜マ(マエ)イ.....	372	〜マショー.....	400
まいしょう.....	120	マシル=まする.....	391
「マイラス」類.....	118, 119, 120, 121, 123	ます.....	166
マイル.....	117, 118, 121, 123	マス.....	150, 166, 186, 196, 202
	167, 168, 173, 343		222, 224, 348, 352, 353
参る.....	173		359, 362, 367, 414, 415
マイル マイラス類.....	117		416, 417, 423, 437, 493
「〜マエ」「〜マイ」→		「〜マス」.....	348
「〜マ(マー)」.....	378	〜マス——〜マ.....	180
マカイデル.....	128	マス モス.....	348
マカイモノ.....	127	「マス」が「ス」.....	404
マカシタ.....	127	「マス」が「マ」.....	383
まかっでもうした(参りました) ..	128	「マス」が「ンス」.....	395
マカハン.....	127	「マス」謙讓の表現法.....	391
まかりあげた.....	132	「マス」ことば.....	348, 367, 374, 377
マカリ出ル.....	128		378, 394, 415, 416
マカル.....	127, 128	「ます」助動詞.....	149
マカル.....	129	「マス」助動詞.....	362, 363, 366, 415
マカル・マカリデル.....	127	「マス」相当の「ンス」.....	393
マカンシタ.....	128, 352	「〜マス」尊敬表現法.....	400
マカンセ.....	352	「〜マス」丁寧表現法.....	459
マカンソ.....	127	「マス」丁寧表現法助動詞.....	348
まかんできす.....	129	「マス+ない<打消助動詞>」.....	413
マガンデギル.....	129	「マス」の自由な転用.....	411
まかんでる.....	129	「マス」の諸活用形.....	371
マガンデル.....	129	「マス」の「ス」.....	398, 409, 412
マサッタ←マセザッタ.....	373	「マス」の「ス」→〜ンス.....	389
〜マサル.....	392	「マス」の「マフ」.....	380
「〜マシ+打消助動詞<ない>」 ..	401	「マス」の「マ」略.....	404
	403, 406	マスの命令形はマシ.....	387
「マジェ」の尊敬表現法.....	374	「マス」表現法の世界.....	365
「マシ」謙讓表現法.....	376	「マス」命令形.....	414
「マシ」尊敬表現法.....	395	「マス」問題.....	416

マスル…………… 370,375  
 「マス」「ワス」「マン」…………… 372  
 マセ…………… 372,394  
 マセ(シ)…………… 367  
 マセ(ヘ)…………… 373  
 マセ——マシ…………… 370  
 マセ→マシ…………… 375  
 「～ませ」…………… 378  
 ～マセ…………… 150  
 ～マセう——マシヨ—…………… 396  
 「マセ(シ)」謙讓表現法…………… 365  
 「マセ」ことば…………… 379  
 「～マセ」尊敬表現法…………… 380,405  
 「マセて」「マセル」…………… 394  
 「マセ」特定尊敬表現用命令形…………… 365  
 「～マセ(マヘ)」の尊敬表現法…………… 377  
 「ませ」は、県下で「マシ」…………… 401  
 「マセ」命令形…………… 151  
 「マセ」用法…………… 377  
 「マセル」「マスル」「マス」…………… 120  
 マセン=ヘン…………… 409  
 「ません」に相当する「いん」…………… 405  
 「マセン」の「ヘン」…………… 414  
 マッ(マ)…………… 382  
 「～マッ カ」…………… 380  
 マッ サ…………… 382  
 マッ シェ…………… 369  
 マッ シェン…………… 237,367  
 マッ シュ…………… 368,369,370  
 マッ ショ—…………… 367～368,368,369,370  
 マッ ショ—…………… 370  
 マッ ス…………… 369,370,388  
 「マッ ス」「マッ ショ—」…………… 375  
 マッ スル…………… 228,369,370  
 「マッ スル」系の言いかた…………… 368  
 マッ セ…………… 382  
 マッ セ(シエ)…………… 368,369,370,401  
 マッ セ(シエ)ン…………… 368,370

マッ テンス——「マイテンス」…………… 385  
 「マッ テンス」「マッ テン」…………… 384  
 ～マハ…………… 381  
 マハン…………… 381  
 「マヒョ—」「マホ」…………… 381  
 マヒョ・マホ・マヨ・マオ…………… 382  
 マフ…………… 377  
 マホ—→モ—…………… 374  
 マラスル…………… 119,124  
 マン ガ(ますよ)…………… 381  
 マン ネン…………… 383

〔ミ〕

見—マイ…………… 372  
 ミシヤゲル…………… 132  
 ミス…………… 214,391  
 ミス=～メス…………… 392  
 ～ミス…………… 392  
 未然形の「ゴザヘ」…………… 242  
 未然形「モハ」…………… 352  
 ミヤース…………… 120  
 「見ヤマセ」「シヤマセ」…………… 384  
 未来形に「モッソー」…………… 351

〔メ〕

メイアゲモス…………… 131  
 命令形←動詞の活用形…………… 8  
 命令形「マシ」…………… 370  
 命令形「マセ(シ)」…………… 363  
 命令形「マセ(マシ)」…………… 362  
 命令形「モシ」が「モイ」…………… 351  
 メース…………… 119  
 メースル…………… 119  
 メーヤスイ…………… 119  
 メーラス—…………… 119  
 メーラスル…………… 119,353



464, 467, 470, 474, 477

「ヤス」に類する「エス」…………… 487

「ヤス」の「ヤフ」…………… 472

ヤスム…………… 345

ヤックイヤン……………71

ヤッス…………… 463

「〜ヤマセ」…………… 384

ヤラカス…………… 160

ヤリナサイ…………… 7, 67, 70

ヤリナサイ類……………67

「ヤリナサイ」類…………… 74, 75

ヤリナサイ類の分布と生態…………… 71, 76

ヤル…………… 69, 72, 75, 76

〜ヤル…………… 493

「ヤル」動詞…………… 68, 74

ヤンサイ……………73

ヤンシャイ (やりンシャイ)……………72

やんす…………… 477

ヤンス…………… 146, 148, 196, 222, 446  
459, 471, 477, 479, 480  
485, 486, 487, 488, 489, 491

ヤンス (アンス)…………… 422

「ヤンス」「アンス」…………… 483

「ヤンス」ことば…………… 459, 468, 470, 493

「〜ヤンス」丁寧表現法…………… 466, 474  
475, 481

「〜ヤンス (ヤンスル)」  
丁寧表現法…………… 466

「ヤンス」の「アンス」…………… 466

「ヤンス」の「ヤン」…………… 468

ヤンナイ……………68, 71, 72, 73, 74

ヤンナサイ……………73

ヤンナッセ……………71

ヤンナッセー (やりナッセ)……………72

ヤンナハイ……………11, 68, 71, 74, 75

ヤンナハリ……………71

ヤンヒョー→ヤンホー→  
ヤンヨー…………… 468

ヤンス, ヤス…………… 175, 186, 202, 416  
445, 458, 459, 470

「ヤンス (アンス)」「ヤス (アス)」…481

ヤンス, ヤス—アンス, アス…………… 202

〜ヤンス, ヤス…………… 459

「ヤンス (アンス)」「ヤース」  
「ヤス (アス)」…………… 482

「ヤンス・ヤス」ことば…………… 467

「ヤンス, ヤス」ことば…………… 460, 474  
492, 493, 494

「ヤンス (アンス)」「ヤス (アス)」  
ことば…………… 492

「〜ヤンス, ヤス」尊敬表現法 …… 458  
460, 493

「〜ヤンス, ヤス」丁寧表現法 …… 458  
459, 462, 467, 468, 472, 475  
476, 478, 480, 484, 492, 493  
494

「〜ヤス」丁寧表現法…………… 486

「〜ヤンス, ヤス」の丁寧表現法…462

「〜ヤンス, ヤス」表現法 …… 492, 493

「ヤンス, ヤス」丁寧表現法助動詞  
174~175

〔ヨ〕

ヨカンス…………… 352

ヨコセ→イクセ……………85

ヨバレル…………… 160

ヨロコバナイデシタ…………… 430

〔ラ〕

ラス—ダス…………… 445

ラス・ダス・ドス…………… 438

	〔レ〕			
れす	.....	427	ワタシノデス	..... 424
「レス」(です)	.....	425	ワタシノドス	..... 440
〜レ(ラレ)マセ	.....	394	ワタシナデス	..... 431
連用形にマイ	.....	377	ワタシノデス	..... 428
連用形「モシ」→シ	.....	352		
連用形「モヒ」→ヒ	.....	352	〔ヲ〕	
			ヲ	..... 355
	〔ワ〕			
ワイノ	.....	162	〔ン〕	
ワシ	.....	161	ンカ	..... 83
ワタシ	.....	161	「んす」が「ます」	..... 407
ワタシナデス	.....	432	「ンス」(ます)	..... 388
ワタシノガンデス	.....	431	ンス・サンス	..... 416
ワタシノデス	.....	426	んだい	..... 23
			ンデ	..... 83

## II 事項索引

### 〔ア〕

あいさつ……………	148, 149, 190, 215 328, 341, 502, 505
あいさつことば……………	113, 126, 141, 142 149, 191, 193, 210, 213, 215, 216 217, 241, 243, 263, 278, 287, 321 340, 382, 384, 436, 465, 504
〔ai〕連母音……………	59
〔ai〕連母音の不同化……………	210
アクセント……………	101, 210
阿波弁……………	448

### 〔イ〕

異形……………	275
「—イ」形……………	21
一國語の自己推進……………	326
出雲弁……………	500

### 〔オ〕

大阪弁……………	83, 84, 330, 424, 425, 448
尾張ことば……………	105
音訛……………	22, 46, 67
音感……………	13, 196, 205, 494
音感情……………	13
音効果……………	402
音声基盤……………	354
音節省略……………	18
音の間こえ……………	258
音変化……………	59, 415

### 〔カ〕

会話生活……………	415
訛形 209, 210, 212, 216, 281, 296, 497, 501	
下降調の文アクセント……………	450
活用……………	415
活用形……………	43, 169, 352, 364, 382
唐津市城内ことば——家中弁……………	370
漢語……………	154
漢語音……………	103
漢語出自の特定動詞……………	102
漢語名詞……………	111
漢字ことば……………	498
関西弁……………	425
上方ことば……………	329
関西方言……………	96
関西流の事象……………	50
関西系の表現法……………	76, 157
関西語法……………	50
関西地方……………	102
関西地域内の諸方言……………	169
感染・伝播……………	290
関東弁……………	425
慣用句……………	159
慣用謙讓表現法……………	55
簡略形……………	320
関連分布……………	99

### 〔キ〕

基質差……………	60
機能的価値……………	364
九州方言……………	10

共通的なもの…………… 169  
 共通語……………10, 30, 45, 111, 112, 115  
     127, 137, 149, 150, 154, 166, 169  
     186, 202, 205, 217, 244, 301, 341  
     367, 437, 481, 497, 501, 507  
 共通語界…………… 322  
 共通語生活…………… 416, 498  
 共通語の生活…………… 156  
 共通語化…………… 501  
 共通語要素…………… 218  
 共通語法……………10, 115, 494, 504  
 共通語的要素…………… 289  
 京都弁…………… 163, 437, 438, 439, 448, 474  
 京都ことば…………… 332  
 京都方言…………… 270  
 近畿弁……………84, 321, 444  
 近畿方言……………96  
 近畿系の方言状態……………54  
 近畿の表現法…………… 382  
 近畿ぶりの表現法…………… 156  
 近畿的な語法……………96  
 近畿系の地域…………… 308  
 近畿共通語…………… 507  
 近畿標準語…………… 337  
 禁止命令形…………… 366

[ク]・[グ]

「偶生」(偶然生起)…………… 273  
 偶生(偶成)…………… 265  
 国の西方系の表現法……………76  
 句法…………… 204

[ケ]・[ゲ]

敬意表現……………70  
 敬意表現法…………… 353, 371  
 敬語法……………3, 4, 36, 170, 510, 511, 513

敬語法動詞…………… 512  
 敬語法発達…………… 510  
 「敬語の簡素化」…………… 509  
 形態…………… 83, 84  
 形容動詞…………… 418  
 言語環境…………… 216  
 言語行動…………… 164  
 言語社会…………… 511  
 言語生態…………… 326  
 言語生態の自律的展開…………… 326  
 言語表現行為…………… 322  
 言語風土…………… 458  
 謙讓…………… 175, 364, 366, 379, 511  
 謙讓の意…………… 151  
 謙讓意識…………… 6, 55, 88  
 謙讓の意識……………55  
 謙讓心意…………… 143, 153, 156  
     159, 161, 165, 169  
 謙讓の心意…………… 5  
 謙遜の心意…………… 176  
 謙遜心……………77  
 謙退心意…………… 382  
 謙退の情…………… 169  
 謙退の情・念……………93  
 謙讓心理……………7, 84, 112, 117, 160  
 謙讓の心理…………… 8  
 謙退の心理…………… 153  
 謙讓の言いかた…………… 3, 173  
 謙讓表現…………… 7, 72, 74  
     160, 169, 363, 364  
 謙讓の表現…………… 7  
 謙讓語…………… 5  
 謙讓法意識…………… 6  
 謙讓法形式……………77, 163  
 謙讓・卑下の表現法…………… 159  
 敬卑層序…………… 3  
 謙讓表現法…………… 3, 4, 5, 8, 10, 43  
     44, 68, 70, 77, 81, 86, 88, 93

	97,102,111,113,130,140
	146,151,152,154,155,156
	158,159,160,161,162,163
	169,170,173,176,365,373
	384,511,512
謙譲の表現法	21
謙退の表現法	79
文末詞による謙譲表現法	162
謙譲表現法要素	19
謙譲表現法動詞	154,364
謙譲法動詞	6,90,93,96,113
	127,131,132,133,138
	139,149,154,169,173,174
謙譲法助動詞	93
謙譲表現法の役わり	55
謙譲表現生活	169
謙譲表現機能	131
謙譲効果	162
謙譲表現法記述	4,5
「謙譲表現法形式」化	8
謙譲法形式の「ていねい表現法」化	163
謙譲法外形の「ていねい表現法」	163
現代共通語	44
現代日本語方言世界	276
〔コ〕・〔ゴ〕	
語	204,364
語感	103,273,296,494
国語史	103
国語史実	87
国語主体	322
国語生活	205
語形式の変移	354
古語法	55
語詞の時代推移	129
古態	148,196,203,262
古態語	146

古態語法	46
古態保存	193
語態	55
語法推移	102

〔ザ〕

在のこぼ	18
残存	196
残存状況	196
残留分布	99

〔シ〕・〔ジ〕

使役態表現法	96
使役態利用の表現法	96
四周伝播	86
自然言語	152
指定断定の助動詞	437
熟合	205
縮約	166
述部表現	512,513
述部表現の助辞的展開	513
主要言語路	86
準体助詞	448
準「標準語法」	275
条件法	149
承接	203
省略	91
省略簡叙の口調	146
昭和日本語実態	512
昭和日本語方言	512
職人語の世界	511
助辞	512
助動詞	89,117,131,140,166
	167,170,314,315,344,348
助動詞(補動詞)	87,115
助動詞運用	115



ていねい意識——非ていねい意識… 509  
 「ていねい」「非ていねい」の  
   意識…………… 511  
 丁寧表現… 186, 363, 459, 498, 499, 509  
 丁寧の表現… 151, 175, 458  
 「非謙讓ていねい」表現… 166  
 「非謙讓ていねい」の表現… 163  
 ていねい表現… 4  
 丁寧の言いかた… 3, 173  
 丁寧表現法… 4, 121, 146, 166, 170  
   171, 173, 174, 175, 176, 178, 179, 180  
   182, 185, 187, 205, 227, 297, 322, 339  
   343, 344, 346, 347, 348, 350, 416, 458  
   467, 492, 493, 494, 496, 497, 498, 508  
   509, 510, 511, 512  
 ていねい表現法… 4, 163  
   173, 175, 509  
   510, 511  
 非謙讓ていねい表現法… 163, 167  
 丁寧表現法形式… 186  
 丁寧法要素… 322  
 丁寧法動詞（またはそれに  
   助動詞のそわったもの）  
   による丁寧表現法… 177  
 丁寧表現法動詞… 177  
 丁寧法動詞… 177, 180, 182, 183  
   185, 186, 205, 311, 322  
   328, 337, 344, 345, 346  
 丁寧法助動詞による丁寧表現法… 348  
 丁寧表現法助動詞… 138, 140, 150, 166  
   167, 175, 361, 362, 495, 496  
 丁寧法助動詞… 352, 353, 443, 458  
 「丁寧の助動詞」（鄭重語・  
   丁寧語）… 367  
 丁寧表現法助動詞化… 174  
 諸他の方法による丁寧表現法… 497  
 語えらびによる丁寧表現法… 498  
 文末詞による丁寧表現法… 497

「非謙讓ていねい表現法」化 163, 165, 167  
   非尊敬 174, 175, 353  
 「非謙讓ていねい表現法化」用法… 139  
 非謙讓ていねい化表現法 140, 166, 167, 173  
 丁寧表現法化… 493  
 転訛… 23, 31, 40, 91, 224, 258  
   294, 296, 300, 301, 321  
 転訛形… 24, 31, 34, 205, 211, 222  
   223, 227, 233, 236, 258, 265, 300, 379  
 転訛形——特定転訛形… 43  
 伝播… 76, 86, 290, 296, 493  
 伝播勢力… 76  
 伝播・流布… 296  
 低卑効果の動詞… 159  
 底脈… 109

〔ト〕・〔ド〕

同化… 59  
 東京語… 425, 429  
 東国的… 320  
 東国風土… 320  
 東国方言風土… 320  
 東北方言… 411  
 動詞… 7, 77, 170, 174, 272, 348, 512  
 動詞命令形… 103  
 動詞構文… 104  
 動詞複合… 158  
 動詞複合の特定のばあい… 158  
 特殊の表現態… 159  
 特定謙讓表現… 60, 72  
 特定謙讓表現法… 5, 7, 17, 44, 52  
   53, 55, 61, 67, 72, 75, 87  
   88, 90, 91, 102, 169, 367  
 特定の謙讓表現法… 6  
 特定謙讓表現法化… 88  
 特定謙讓表現法心理… 60  
 特定謙讓法動詞… 5, 85





用法	415
用法の進展	149
用法の転化	354
よびかけ	393
よびかけことば	379

[リ]

略形	98, 245
流通無碍の表現生活	104

[ル]

累加	512
流布	296

[レ]

「—レ」形	21
連語法	118
連用形	365

藤原与一(ふじわら・よいち)

略歴

明治42年1月 愛媛県に生まれる  
昭和12年3月 広島文理科大学卒業  
昭和47年3月 広島大学文学部教授を退官  
現在 広島方言研究所をいとなむ  
広島大学名誉教授・文学博士

主要著書

- 『方言学』(三省堂・昭和37年)  
『方言研究法』(東京堂出版・昭和39年)  
『方言研究の回顧と展望』(方言研究叢書第1巻)  
(三弥井書店・昭和47年)  
『昭和日本語の方言』第1・2・3巻(同上・昭和48・49・51年)  
『瀬戸内海言語図巻』上巻・下巻・説明書  
(東京大学出版会・昭和49・49・51年)

---

昭和54年5月30日 ©

著者 藤原与一

発行者 和田欣之介

---

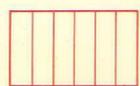
発行所 東京都中央区 株式会社 春陽堂書店  
日本橋3-4-16

---

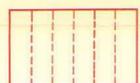
印刷所 三協美術印刷・製本所 丸山製本

第1図 「イタダク」類分布概況図

(本文 P. 93)



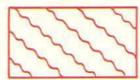
イターカシ(ヒ)テ (ください)  
(「読んで イターカシテ。」など)



イタ  
(「読んで イタ。」など)



ダーコ  
(「上がって ダーコ。」など)



チョー  
(「買って チョー。」など)

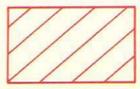


「拝領」との言いかた  
(「読んで ハイヨー。」など)

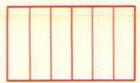


第2図 「ゴザリス」「ゴザス」分布概況図

(本文 P.224 P.236)



ゴザリス

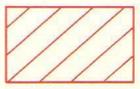


ゴザス

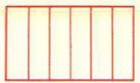


第3図 「ゴイス」「ゴンス」分布概況図

(本文 P.260 P.265)



ゴイス



ゴンス

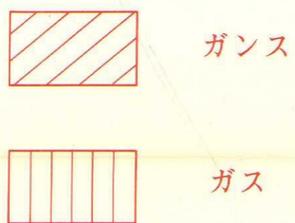
(高知県・徳島県・和歌山県・三重県・栃木県・茨城県の「ゴンス」符号は、県内に「ゴンス」があることを意味するのとどまるものである。)





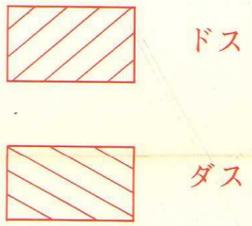
第5図 「ガンス」「ガス」分布概況図

(本文 P.297 P.310)



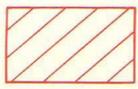
第6図 「ドス」「ダス」分布概況図

(本文 P.437 P.443)

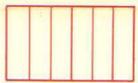


第7図 「～ヤンス,ヤス」丁寧表現法分布概況図

(本文 P.458)



ヤンス(アンス)



ヤス(アス)

